



青立狩 高校一年・二学期

青潟大学附属シリーズ
高校編
第5シーズン 5

舞夜じょんぬ

夕方四時といえはまだ十分陽も高く、周囲からは引き止めもされたけれどもきっちり挨拶して自転車を押した。みんなですすり合う冷やしそうめんも美味しかったし賑やかに語り合うのも決して嫌いではないのだが。

「疲れたね、関崎」

ふたりだけで抜け出してきたようなもの。乙彦の隣で緑のしゃれっけないTシャツとジーンズ姿の女子が両腕を天にうんと伸ばしている。別に抜け駆けするつもりもなければ、下心があるわけでもない。ただお互い、潮時というもののタイミングが一緒というそれだけだ。

「そうだな。知らない奴同士というのは、思ったよりも神経を遣う」

「そう見えなかったけどさ。関崎すっかり馴染んでたよ」

「お前の目が悪い」

本当であれば、同じ外部入学仲間の名倉も一緒に引っ張り出すつもりだったのだが、いかんせんここは奴の庭に近い場所だった。すっかり名倉の崇めるお姫様に寄り添いどたたくつついている。もう、高校で出会った友だちのことなんぞすっかり忘れていたかのようだった。

「名倉、あれは見ものだったよね。今度会ったらネタにして笑ってやろうよ」

「それはまずい。人間として自然な感情だぞ」

乙彦はたしなめた。無論、緑Tシャツ女子の気持ちも同意しないわけではないのだが、これまでたくさん事情を目にし耳にしてきた立場としては、きっぱりと割り切るわけにはいかないところもある。名倉の一途さが、むしろ愛い奴とも思える。

「でも、イメージしたような子じゃなかったね」

「誰が」

「ほら、名倉のマドンナ」

ああ、と頷く。名倉の誕生日に送られてきた友だち分合わせての手作りクッキーと花柄の包み紙から始まり、奴の語りだす小学校から中学校時代の初恋伝説、そしてその彼女は青大附中に進学してなおも華やかな噂を撒き散らし、現在ははるか遠くの全寮制高校で過ごしているとか。今回はその彼女が久々に青潟へ戻ってくるということもあり、親しい友だちだけではなくその友だちをも巻き込んで楽しく過ごそうというパーティーだった。夏ということもあり、今回は自宅庭での流しそうめんを楽しんだというわけだ。

「ほんと、広い庭だったよねえ。二十人くらいはいたよ。青大附中に行ってた子だからそれなりにいいところのお嬢さんだとは思ってたけど」

「お前はどうか。お嬢さんと言っていいのか」

「だから外部三人組なんじゃないの」

茶化し合う。

「気になるんだが、名倉のその、相手にお前はどのようなイメージ持ってたんだ」

「なんというか、ああいうクッキーを送ってくるようなお嬢さまなんだから、もっと華やかな子なんだろうなあとかね。まあ、医者の娘という先入観があったことは認める」

緑Tシャツ女子の手厳しい批評は続く。

「なんというか気さくな子で、お父さんお母さんも明るい人だったな。特にお母さんが眼科のお医者さんなんだろうけど、とにかくうるさいくらいはしゃいでたね。それにしても暑くないのかな、あんな派手なワンピースとか思ったりも、女子としてつい思ったよ」

「俺からするとよく似た親子だと思っただけなんだが」

笑った。まさにそっくりな家族。幸せそうな雰囲気だけは漂ってきていた。ぽっちゃり肉付きがよく笑うと目がなくなってしまうような名倉のマドンナは、確かに性格の穏やかそうな人ではあった。

「名倉は外見に惑わされない奴だということが判明しただけでいいだろう」

「まあ、それは言える。名倉のことはこれで評価アップしたよ」

髪の毛を無造作にひとつまとめした緑Tシャツのしゃれっけない女子に、乙彦は腕時計を覗き込み、目の前の公園を指差した。まだ小学中学年程度の子どもたちがブランコやシーソーで遊んでいる。

「静内、少し座って行こう。俺は心底疲れた」

この日、その眼科医のお嬢さん宅で行われた夏の流しそうめんパーティーに参加するはめになったのは、決して乙彦の意図したところではない。

そのお嬢さんに小学校時代から熱を上げ続けた「外部三人組」の一角を担う名倉からのお誘いである。名倉曰く、

「奈良岡が帰ってきたらみんなで遊ぶ約束をしているからお前らも来い。友だちの友だちを増やせば絶対楽しいとあいつも言っていた」

とのことだが、静内……同じく「外部三人組」の紅一点は、

「友だちの友だちって気を遣うし、必ずしも友だちになれないんだけどなあ」

とぼやいていた。まさにその通りで、乙彦もそれなりに楽しみはしたが相手とこれから長いつきあいになりそうな雰囲気は感じられなかった。ひとり、背の低くてやたらと喧嘩っぱやそうな男子がいて、びしばしと場を仕切り、お嬢さまのご両親に対してもため語で、

「おい、なら先生、これ、手順悪すぎるぞ。先生は所詮病人だから若い衆に任せとけ！」

とか、

「彰子、お前は動くな。全部俺たち男衆がやる。お前はどーんと構えてろ」

とか、

「おい、時也、お前なんでそんなもたもたしてるんだ！ 早く彰子の分の皿用意してもってけ！」

とかなんとか。やたらと威張っている輩がいた。なんとなく避けたほうがよいとの判断で乙彦は近づかないようにしていた。そいつには名倉がやっぱり親しげに張り付いていて、この日は名倉にも話しかける機会が少なかった。

「なんなんだろう。世界が違うよね」

「いや、わからない。名倉が話す限り、あの場で集まっていた奴らはみな友だちの友だちつなが

りと聞いたが。少なくとも青大附属関係の人間ではない」

「私がずっとしゃべってた子もそうだったよ」

静内はグレイプスカッシュを一本、口を切ってゆったり飲んでから、

「あの子どもたちと一緒に友だちに連れてこられて死ぬほど退屈だったみたいよ。青潟西高に行ってるらしいけど」

「何が目的なんだろうな、流しそうめんというのは」

乙彦はスポーツドリンクを一本空けた。

「確かに盛り上がると思うが、別に知らない奴を連れてきて盛り上がるものでもないだろう」

「そのあたりあとで名倉に確認するとして」

とりとめもなくしゃべっているうちに少しずつ陽が赤らんでくる。いわゆる夕暮れの気配がする。まだ夏の太陽は元気だけれども、蝉のけたたましく鳴き続ける声や、時折聞こえる虫の声など、さまざまな音色が聞こえ始める。

「それにしても、あと二日で夏休みも終わっちゃうんだよなあって思うと、思い切りダークな気分」

「お互い様だ」

今年の夏休み、たぶん一番長い時間を共有したのはこの静内であり、また名倉とも言える。とにかく空いている日はすべて自由研究に費やしたと言っても過言ではない。なにせ、足を使うのだ。青潟市内の石碑リストは一応図書館や博物館にも揃っているが、実際見てみないと正確な認識ができない。また実際石碑に触れてみると面白いもので、石の素材や周辺の景色および歴史の関わり合いなどで今まで見えてこなかったものが浮かび上がり、三人三様に議論しあい、まとめていく。それがめっちゃくちゃ面白い。

「宿題はもう片付けたんだろうし」

「片付けたことと頭に残っていることとはまるっきり違うんだ」

「言いたいことはわかる。答えてもそれが正しいかがわからないってことだよな」

「それもそうだが、学校に戻ってからはまたいろいろと考えることが増えそうだな」

朝一のバイトはすっかり身体に馴染み、休みの日すらも早く目が覚めてしまう。もったいないので朝はしっかり走っている。早起きが苦痛というわけではないのだが。

「うちのクラス、九月の合唱コンクールの準備とかでみなてんてこ舞いしているみたい」

「みたいって、他人事だな」

「そう、指揮者が決まってないんだよね。男子、みな音楽わからないからって逃げちゃってるし。音程が取れないとそもそもできないって言い訳して」

「合唱コンクールか」

乙彦なりに過去三年間の記憶をたどってみる。あまり盛り上がりの少ない水鳥中学ではあったが、乙彦なりにクラスの連中を叱り飛ばし最後はなんとか形にしたものだった。もともと歌うことは好きだがひとりで合唱はできない。逃げる連中を捕まえてこんこんと説教したのも今は昔。

「内部の子たちに聞いてみたんだけど、青大附属の場合中学二年の時に一回だけ合唱コンクール

が行われるんだって。信じられる？ しかも指揮者は無条件で男子の評議委員なんだって。これもまた、ありえないよね。相手が音楽嫌いだったらどうするの」

静内の言うこともごもつともだ。

「それなら結果としてどうなるんだ」

「たぶん、この流れで行くと私が指揮者に祭り上げられる可能性大」

「静内がか？ なぜだ？」

外部生なのに、と口走りそうになる。静内はすぐに気づき、さっぱりした顔で答える。

「私は人並みの音感持っているってことになってるし、男子ができないんだったら女子の評議がやるのが普通でしょって答え」

「俺がカラオケに引きずり込んだ甲斐があったということか」

「鍛えられたよそりゃね。関崎のカラオケマニアっぷりにはおみそれしたもんね」

反省している。いくら安いカラオケBOXを親と先生から許可をもらって通っているとはいえ、付き合わされるほうはたまったもんじゃないだろう。外で歌えない以上は第三者の迷惑にならないよう心がける義務があるからこうしているだけなのだが、きっと周囲はそう思わないだろう。

「それで静内は、話が来たら受けるのか」

「うん、受ける」

静内はきっぱり答えた。また喉を潤してから、

「合唱なんかノーサンキューだけど、指揮者って普通経験できないしね。青大附属で珍しい体験させてくれるんだったら今のうちに取り込んどこうかなと思って」

「いい心がけだ」

「関崎は？」

そういえば、一年A組の合唱コンクール準備はどうなのだろう。夏期講習の時に女子評議の古川がちょこまかとクラス女子たちに声をかけて相談し合っている様子は伺えたのだが、男子評議の藤沖がどっしりかまえずぎていて何もしようとしない。それはそれで心配なところもある。

「女子は、うちのクラスの古川が動いているようだが詳しいことは知らん」

「ああ古川さんね、あの、噂の」

口をいきなり閉ざし、静内はふっと乙彦から顔を逸らした。咳込んだ。

「ジュースが気管に入ったのか」

「違う違う。そうなんだ。じゃあうちのクラスだけがとろとろしているってわけじゃないんだ」

少しほっとしたのか、静内は膝に缶を載せたまま乙彦を見上げた。

そろそろ自由研究の製本に入る。乙彦は前の日約束した通り、青潟市立郷土資料館前に向かった。徒歩ですぐだからさほど遠くはない。この夏休みで管理の人々ともすっかり顔なじみになり、最近はいろいろと資料も融通をきかせてくれている。入口でうろうろしているといつもの係員さんから、

「今日もお仲間と一緒にかい」

声をかけられた。

「いつもお世話になってます」

頭を下げる。時折、水鳥中学時代の同級生たちも通りすがり、

「おとひっちゃん、おひさ！」

と声をかけていく奴もいる。もちろん、無言ながらも快く手で合図する。

「関崎、お待たせ。あれ、名倉は？」

今日はデザインが若干女子っぽく入った黄色いTシャツ姿の静内が現れた。この夏休み中静内の格好はまさにシンプル、Tシャツとジーンズ、それしかない。さっぱりしすぎているくらいだ。

「名倉は、そうだな、まだだ」

「昨日の疲れかなあ」

意味ありげにつぶやく静内は、抱えた大きなトートバックを覗き込み、

「予定よりも早く完成しそうだよね」

そのまま乙彦に持つよう差し出した。抱えてみるとずっしり重い。

「これを提出か」

「そう。ひとつ考えているのが、石碑で使った石、あるじゃない。あれも標本みたくして出したらどうかなとか思うんだけど」

「それだとえらい荷物だな」

「うん、悪いけど関崎よろしく」

「荷物運びか、おい」

またさらっと交わし合いつつ、乙彦は名倉の来るであろう方向に目をやった。いつもなら時間通りに来る奴なのに。静内が言う通り確かに遅刻は珍しい。

「なんか、ちらっと同じクラスの子たちから聞いたことなんだけどね」

静内はまたトートバックを取り戻して肩からかけた。

「青大附中で中学の時、同じような自由研究やった人がいたらしいんだって」

「まあよくあるかもな」

「けど、よくよく聞いたらかなり手抜きだったらしいんだよね。全部資料を貼っただけで、説明も本の抜粋ばかり。中学生らしいといえばそれまでだけど、内容が似たようなものだからといって軽く扱われるのはなんかいやだなあ」

「静内があれだけ歩いて集めた資料とは比較にならないんじゃないか」

今回の自由研究「青潟の石碑地図」はひとえに静内の大活躍に尽きる。最大の功労者であり、本来であれば乙彦や名倉は刺身のつま扱いでもいいんじゃないかとすら思う。資料だけではなく、直接すべての石碑の場所へ足を運び、場合によっては関係者に連絡を取ってもらい話を聴かせてもらったり、郷土資料館の職員さんの仲人で市役所の非常に詳しい……仕事以上の情報までもらったが……人に紹介してもらい、マイクロカセットを使い録音させてもらったりもした。全部静内の仕切りについていただけなのだが、乙彦もしまいにはすっかりいっばしの郷土学者気分を味わった。

「そうだよ。これだけやったら、それなりに評価はされるよね」

「他の奴らがどういうことしているかにもよるがな。講習の時にいろいろ聞いたがみな、こだわりはあるみたいだぞ。うちは英語科だから絵本の翻訳をやる集団もいるらしいし、特定の作家や画家についての研究をする奴もいる、その他、芸術関係でよくわからないことを準備しているともちらちらと聞いているが」

「芸術か、なんだか苦手な世界だな」

ぽつと、静内がつぶやく。

「そうなのか。俺も人のことは言えないが」

「美術、演劇、音楽、その他もろもろ、全然私、わかんない。なんか、所詮作り物じゃないって気がするんだ」

からりと言い切る。

「私、昔から現実に根付いたもの以外に興味がなくて、ファンタジーの世界とかそういうのが苦手だったんだ。遊園地とか、美術館とかもそう。非現実よりも、歴史とかこういった明らかに現実、っていうものの方が面白いんだけど」

「女子にしては珍しいな」

「だよ」

そこまで話したところで自転車の急ブレーキの音が響いた。大遅刻。もちろん罰は用意済み。汗だくになったずんぐり野郎の名倉が深く一礼した。

「関崎、静内、悪かった」

「罰ゲームはわかってるよね」

戸惑った顔で救いを求める眼差しの名倉だが、とりあえずは知らんぷりしておいた。

「さあ行くぞ、最後の仕上げだ」

といっても、対して何かというわけではない。実際静内の手により完全に製本は終わっているし、行うとしたら追加資料があるかどうかの確認くらい。顔見知りの職員さんからもらう情報もほぼ吸い上げた状態だった。

「今日でひと段落だし、挨拶だけしとこうか」

静内の指示で三人、職員のみなさまに頭を下げお礼を言った後、そのまま外に出た。まだ昼前、十一時を回ったところだった。

「結局何のためだったんだ、無駄足か」

「いいよ。関崎、今日は目的別のところにあるってさっき言ったじゃないのさ」

「ああ、名倉の吊るし上げ」

名倉が首を押さえてうめき声を上げる。

「何もしてないぞ俺は」

「遅刻は学生にとっての大罪だよね。とりあえず、そこの公園に行こうよ。そこだったら青大附属の関係者もそれほどいないだろうし、名倉も後腐れなく告白できるってことよ」

「静内、お前、やはり女子なんだな」

「女子で悪うござんした」

悪びれることもなう言い放つ静内に、乙彦は苦笑いしつつ続いた。

「あまり責められるようだったら俺も助け舟出す。正直になれば怖いものはない」

「本当だな、誓えよ、関崎」

夏休み何度もたむろったすぐそばの公園に向かい、レジャーシートを敷いて水筒を取り出した。塩だけまぶしたおにぎりを用意してある。母が夏バテ防止に備えて三人分用意してくれたものがあるが、足りなければ家に取りにいけばいい。

「うわあ、サンキュー、やはりこういう塩むすびが一番生き返るよね」

まだ昼も回っていないのに、静内は歓声を上げて手を出した。

「関崎のお母さんよくわかってるよ」

「俺もそう思う」

母を褒められるのはやはりよいものだ。まだ学校に入っていない小さな子どもたちしか遊んでいない公園にて、三人のんびり握り飯に食らいつく。

「あのさ、昨日結局何時までいたの？」

静内がさっそく質問を名倉に投げかける。名倉も口ではいろいろ文句言っていたものの言いたくてならなかったらしく、すぐぺらぺらしゃべり出す。

「夜六時くらいまでだがな。お前ら帰るの早すぎだ」

「せっかく誘ってくれて悪いんだけど、ああいうアッパーな雰囲気、なんか苦手なんだよねえ」

「あれがアッパーというのか」

乙彦が思わず口を出す。高級感はなかったと思う。

「そうか、つまらなかつたらすまん」

「違うって、名倉とこうやってしゃべってるぶんにはいいんだけどね、なんかあれだけたくさん人がいる中で気を遣い合うのって、ちょっと疲れるよ」

「そういうものなのか」

傍で聞いていると静内も遠慮のないことを言っているようだが、実際はこうやってもらったほうが乙彦としてもありがたい。次回は無理に呼んでもらう必要もないわけだから、苦手なものは即、はっきりさせておいたほうがいい。

「俺も、静内と同意見だ。いいやつばかりだったとは思うんだが、全く知らない奴がこのこのこ顔を出すというのは、さすがに気がひける」

「残念だが次回はなしにするか」

こればかりは心底残念そうな顔をする名倉に、すぐフォローする静内。

「でもさ、私としてはむしろ、こうやってるほうがいいよ。私たちは握り飯上等！ こうやってさ、言いたいこと言って、のんびりしているほうが向いてるんだよね。それで、名倉、あの、あんたのお姫さま、本当にあの子なの？」

一瞬にして名倉の表情がぱあっと明るく輝いた。

「そうだ、あれが奈良岡だ」

「あのやたらとしきりたがっていた、背の小さい奴、やたらと自転車が派手だった奴がいたがあいつもお前の友だちか」

気になっていたことを確認すると、名倉は胸を張って即答した。

「そうだ。あいつは夏木といって、奈良岡を守る会親衛隊長だ」

「まさかと思うけど名倉、お前もその親衛隊に入っているのか」

「もちろんだ、第一号だ。ついでに言うと、第二号は今、うちの学校にいる」

——親衛隊はわからなくもないんだが。

乙彦からするとかえって名倉をあのお嬢さまがどっしり守る、といった方が自然に思えた。さすがに静内もそこまでぐさぐさ来ることを言うつもりはなかったらしい。

静内の名倉をからかう様は塩にぎりを平らげまで続いた。当の名倉もたまたま拗ねる素振りを見せる程度であとは惚気ることに徹している。

——それにしてもあいつらずいぶんと。

麦茶をポットから注ぎつつ、乙彦は足をレジャーマットの上に伸ばし横たわった。だいぶ日もやわらいできていて、一時期のフライパンに熱された状態とは違い過ごしやすくなってきている。

「あれれ、関崎寝ちゃったよ。まだ昼間だったのに」

「起きろ。焦げるぞ」

ふたりに無理やり揺さぶられ、仕方なく目を開ける。覗き込む静内と名倉のむすっとした顔が並んでいる。

「お前らそれにしても、ずいぶんと人の噂話に盛り上げられるなあ」

思ったことを素直にまずはつぶやく。静内が戸惑った顔をする。

「関崎だって、名倉の恋路には興味あるって言ってたじゃない」

「実際相手を見た。なるほどと思った。それで十分だろ」

「でもさ、理由聞きたいよ。なぜ惚れたかくらいはね」

「人にはそれぞれ好みがあるだろ。それで十分だ」

あっさり交わす。青大附属の連中は男女ともに顔を合わせるたび、誰に惚れた彼に惚れたと大騒ぎするのが常なのだが、まさかこの「外部三人組」中ふたりも同じとは思わなかった。いや、染まったと考えるべきなのだろうか。

「静内も、最初は人の噂話興味ないと言ってなかったか。それにプライバシーにも触れないとか言ってただろ。それがなんだ、この変わり様は」

「学校の子たちのことは興味ないよ、それは間違いなし、でもこの名倉だよ？ あれだけ彼女自慢してクッキー見せびらかした名倉だよ？ 確認しないでどうするの」

「どちらにしても同じだと思うぞ」

乙彦は起き上がり、あぐらをかいてふたりに語りかけた。説教しているようにも見えそうだ。

「事情は一通り聞いた。いろいろ面倒だったんだろうなとは思う。だがそれだけだろう」

「わかってくれたか」

満足げに名倉は頷いた。はたしてかの彼女の魅力をふたりが理解したと思い込んだのか、それとも静内に質問の嵐にされたことのしんどさを乙彦が共感したのか、さてどちらか。

「それと、彼女の相手があの、南雲だとは思わなかった」

「そうだよ、これはびっくり。でもかなり有名な話だったらしいよ。私は南雲くんって子がどんな奴だかわからないからあまりぴんとこないけど」

「俺のバイト先にいる奴だ。正直、いろいろあるのでノーコメントにしたい」

もちろん乙彦も、名倉の「恋路」について全く興味がないわけではない。ただ、そのお姫様が乙彦のタイプとは正反対だったこともあってそれ以上突っ込む気になれなかったというのがある。

。ただ、その彼女が青潟大学附属中学時代に付き合っていた……しかも、熱愛されていたらしい……という相手があつた、規律委員の南雲だったことの驚きは大きかつた。さらに言うならそのカップルが出来上がった段階でも親衛隊活動は続き、最終的にふたりの間にトラブルが生じた際にはふたり駆けつけて、命懸けで彼女を守ることを宣言したとか……実に、青大附中という世界はワンダーランドである。

「じゃあ、名倉もあまり面白くないよね。だから委員会活動しないんだ」

「しない。そんな暇はない。俺は医者になる」

「またまたあ」

静内が楽しげに笑う。さすがにここを軽く流されると名倉も面白くないらしい。乙彦の知る限り名倉のガリ勉強は相当たるもので、おそらくここでのろけ話をしている以外の時間は塾に通っているとも聞く。

「この学校の軽い雰囲気には飲まれたくない。俺は本気で医者になるためにこの学校に入ったんだ」

「医者になってどうするの」

「もちろん」

答えは簡単だ。あの彼女のご両親が思い浮かぶ。

「眼科を目指すのか」

「わからんが、近いうちに決める」

——わかりやすい奴だ。

一年D組外部生の中でも現在、優秀な成績を納めていることで知られる名倉時也も、目的を裏返せばこんなものだ。

「静内、ここまで名倉をいじめたんだから、当然お前も覚悟はあるんだろうな」

そろそろ次に行く。「プライバシーには立ち入らない」と言い放ったくせにこうやっておしゃべりに興じる静内を吊るさないわけにはいかない。当然、名倉も同意している。

「そうだ。お前はどうかんだ？俺たち以外にもそれなりに友だちと遊んでたんじゃないのか」

「名倉には言われたくないけどね。いわゆる女子たちとの付き合いはしてる」

「付き合い」という言葉に妙な力が入っている。静内も自分の水筒からお茶を飲んでる。

「委員会関係か」

「それもあるけど、まあいろいろと面倒。担任の先生にも呼び出されるし、あのわけのわからない個人面談とかもやるし、ほら、合唱コンクール」

名倉が、

「そうだ、合唱コンクールは関崎、当然歌うんだろ」

当然、という言葉に力を込める。

「関崎はポジション決まってるからいいけどね。私指揮者だよ、たぶん」

「静内が指揮者というのも当然だ」

「なんでよそんなの。私、音楽なんて大嫌いなんだけど担任が私に頼ってくるから仕方ないよ。」

悪いけどこのクラス、人間関係面倒くさすぎ」

「お前がクラスの愚痴をこぼすのは珍しいな」

乙彦がねぎらうと、静内はため息を大きくついて、トートバックを膝に乗せた。

「中学時代の過去が持ち上がってくるのは仕方ないと思うよ。私みたいな外部生が評議になったから過去が精算された気分ですっきりしてるんだらうね。別に私も過去のドラマなんて聞きたくないんだけど、なんでみんないろいろ話にくるんだらう。女子たちの会話ってほとんどそれだよ。もううんざり」

「静内、お前にそれ言う権利ない。五分前の自分の行動を省みてどう思う」

「関崎、本当にあんたもどこが外部の星なんだか」

馬鹿話は果てしなく続き、きりのよいところでカラオケBOXに移動した。今日で自由研究も打ち上げなのでとことん歌いたいと乙彦が提案したからだった。

——それにしてもな、静内もこの夏でがらっと変わった。

名倉とアホ話に興じている静内の長い髪の毛を眺めつつ、乙彦はマイクの準備をした。最終的に自分が一番歌う形になるわけだが、

——出会った時は、「不思議の国のアリス」になったみたいだとか、ずいぶんお嬢さんっぽい雰囲気醸し出していたが気がつけばこんながらっぱち女子に変貌しているよな。古川とついにしてみたいもんだ。

一学期が終わる直前まではこういうふうにあけっぴろげに馬鹿話する女子ではなかったような記憶がある。きっかけがいつだったのかはわからないが、夏休み顔を合わせるようになってから一気にボーイッシュスタイルの格好でうろうろしだし、乙彦や名倉のさまざまな人間模様をさりげなく探ってくる。乙彦は別に隠すことはないし、クラス内の面倒な事情もある程度は説明してあるので気にはならない。ただ、

——そのくせ静内自身のことは一切触れようとしないな。

そのことだけが気にかかっていた。家族構成も、兄弟姉妹がいるかも、そのあたりの事情は一切明かさないうスタイルは今まで通り。

——まあいい、こういう奴のほうが妙に気を遣う必要もないし、それはそれでいい。

「おとひっちゃん、夏休みの宿題なんだけど、手伝ってくれないかなあ。俺、もうギブアップ状態なんだ。助けてよ」

雅弘から泣きつかれ、乙彦は駅前の「佐川書店」二階にて大量のプリント用紙とにらめっこしていた。この時期においてこんなに英文の問題を解かされたり数学の問題を羅列させられたりするのはいよいよ夏休みだからしょうがない。

「なんで少しずつやらなかったんだ？」

「優先順位が違うんだよ。ほら、これ」

雅弘は手元に置いてある、小さな荷車風の木製おもちゃを取り出した。

「一学期に習ったのみやかんなの使い方を実習するのに徹してたらさ、つい」

手にとってみる。小さいといっても五十センチくらいはあるからおもちゃとしてはかなり大きい。少し床を滑らせてみると引き手を馬がひっぱるような格好でリズムカルに走る。手が込んでいることは認める。

「手間がかかったことは想像つくが」

「だろ、おとひっちゃんならわかるよね。俺、今まで本格的な大工道具使ったことなく慣れるのに結構苦労したんだよ。せいぜい技術の授業ではんだごて使ったくらいだしさ。クラスの奴と比較してもめっちゃくちゃ時間かかったんだ」

「わかった、事情が事情だ、俺がやる」

ざっと目を通した限り、どの問題もさほど難しいものではなかった。毎日青大附高の手間かかる問題と格闘している乙彦にとっては楽勝と言ってもよい。特に英語は、こんなので手こずっていたら青大附高英語科在学生の名がすたる。

「やっぱりおとひっちゃんすごいなあ。まだ三十分も経ってないのに、全部終わらせちゃったんだ」

「俺程度はざらだ。同級生では俺以上にできる奴がごろごろいる」

午前中の冴え切った脳みそがフル回転し、普段よりもさらさら問題を解いてしまった。もともと簡単なものばかりといえはそれまでだが、学校では中ぐらいかさらに下の成績の乙彦にとってはさりげなくプライドくすぐられるものもある。

「そりゃ、青大附高の英語科だったらすごい奴がいっぱいいるかもね」

雅弘は納得しつつ、プリントをまとめながら、

「けど、やっぱりおとひっちゃんが一番すごいよ」

自信を持って言い切った。

——こういう褒め言葉に飢えてるんだよな。

タイミングよく雅弘のお母さんがふたりのためにサイダーとアイスクリームを運んできてくれた。大喜びで食らいつく。

「おとひっちゃん、お昼も用意するからゆっくりしてってね」

「ごちそうさまです」

いつものことだけど、やはり夏場に冷たいものというのは嬉しい。特に早朝労働……みつや書店でのバイト……を済ませ、そのあと少し休んだ後雅弘宅だったからなおのこと。

「みつや書店の店長さんも、いい子を紹介してくれて感謝してるっていつも電話でお礼言ってくれるのよ。陰日向なく働いてちゃんとシフト通り来てくれるって」

「普通のことしているだけです」

謙遜でもなんでもない。ただこうやって褒めてもらえるのが貴重で嬉しい。雅弘のお母さんが階段を降りていったのを確認し、乙彦は雅弘に尋ねた。

「お前夏休み何やってた？」

「ええと、高校の友だちと集まって花火行ったり街に繰り出したり、あとゲームかな。最近流行ってるんだよ」

「ゲーム？ オセロとかトランプとかボードゲームとかか」

「おとひっちゃん、それ古いよ、まじでシーラカンスだよ」

雅弘は爆笑して膝を打った。

「俺の学校工業高校だろ？ 青潟の最新技術が結構入ってきてるんだ」

「最新技術か？」

「そう、今俺たちの間で流行ってるのが、マイコンを使ってプログラミングしたりして、いろんなソフトを作ることなんだ。その中に、ゲームも入ってる」

「ゲームを作るのか。いまひとつぴんところないが、よく喫茶店に入っているゲーム機みたいな奴か」

頭をひねる。イメージつかない。もともと乙彦はゲームセンターもあまり好きではない。

「そう、イメージとしてはさ、うちの中にゲームセンターができるような感じなんだ。俺はあまり詳しくないけど、同級生たちで詳しい奴、いっぱいいるからおじゃまして見せてもらったりしてる。下宿生も結構いるし、潜ることも多いね」

「そうなのか」

工業高校の建築科に進学した雅弘は相変わらずマイペースな学校生活を送っているらしい。中学時代のように毎日顔を合わせるわけではないけれど、確かに少しずつ私服がカラフルになってきているとか、髪型に整髪料を付けるようになったとか、多少の違いは感じている。それでもしゃべれば中身は変わらない雅弘のまま。普段着の白いTシャツでごろごろしながらアイスクリームに食いついている姿は、全く中学時代と違和感がない。

「おとひっちゃん、この前も聞いたけど、青大附高の学校祭いつ？」

不意に雅弘が顔を上げて問いかけてきた。

——学校祭か。

実を言うとあまり考えていなかった。

クラス評議の藤沖になんとか聞いたこともあるのだが、

「たぶん何かやるだろうがうちの学校はぎりぎりにならないと何もしない。まあ、古川あたりが考えるだろうから、お前はあまり気にするな」

とあっさり交わされてしまった。乙彦の立場上、規律委員だとあまり学校祭に関わることもなさそうだし、せいぜい「規律」を守るための制服チェックや学外来校者の厳重チェックくらいは参加するかもしれないが。

「何もやらないことはないと思うが、外部の俺には全くわからない」

「へえ、やっぱり外部と内部のめんどくさい関係ってあるんだね」

「だいぶ慣れたがな」

乙彦は指を折りながら二学期以降のイベントを計算した。

「まず、合唱コンクールが九月、学校祭は中間テストが終わってからだから十月、そのあとでたぶん秋のクラス合宿が行われ、最後はクラス委員改選ってとこだ」

「意外と行事が少ないね。うちの学校は合唱コンクールやらないな」

「中学と同じ乗りだったら楽なんだがな」

「おとひっちゃんはカラオケ好きだから、きっと盛り上がるよ」

——いやマイクと生声とは違う。

反論する間もなく雅弘は、工業高校の学校祭について述べた。

「うちの学校はさ、もう準備してるんだ。九月の半ばなんだけど。それぞれのクラスで喫茶店やゲームセンター、お化け屋敷とかいろいろ用意するんだよ。うちのクラスは小さい子たちのためのおもちゃをたくさん作って教室で遊んでもらうキッズルームを作る予定なんだ。俺が作ったものも、そこで使うんだ」

「建築科で、キッズルームか」

意外な取り合わせに、アイスクリームをそのままごっくり飲み込みそうになる。

「地元の親子連れの人たちに楽しんでもらうってのもいいよね、ってうちの担任が提案して、俺もいいかなと思ったんだ。おとひっちゃんも遊びに来いよ」

「いや俺はキッズじゃないからな」

「大丈夫、大人も入ることできるよ」

雅弘は親指を立ててにやりと笑った。再度、

「で、おとひっちゃん、学校祭十月のいつになるか決まったら教えてよ。俺、見てみたいんだ。青大附中には一回行ったことあるけど附高は未知の場所なんだ」

「ああそうだな、一度連れてったよな」

ふと、記憶が遡る。もう二年前になるのか、あの出来事は。

「学校の先輩話してたけど、青大附高の学校祭はいろんな出し物を始めいろんなイベントが用意されていてすごく盛り上がるんだってきいたよ。俺もクラスの友だちと一緒に遊びに行きたいなあ。別に特別チケットとかそういうのはないだろ」

「ない。必要な学校なんてあるのか」

「あるらしいよ、どっかの女子高だったら」

そっちのほうかはるかに未知の空間だった。

「雅弘、お前やっぱりクラスの連中とつるむこと多いのか？」

何気なく聞いてみると、雅弘は少し首をかしげつつ、

「うーんと、そうだね。クラスも多いけど、友だちの先輩が生徒会に入っていることもあって結構顔出すこと多いんだ。なんか、水鳥中学時代と一緒にだよ」

極めてあっさりとした返答。

——雅弘が生徒会に顔出すようになってるとはな。

しかも、誰か友だちに引っ張られてというのが何とも言えない。

「じゃあお前、青湊工業生徒会の居候ってところか」

「そう、その通り。なんでだろうね、俺、生徒会役員になりたいなんて思ったこと一度もないけど、生徒会室の雰囲気はすごく好きなんだ。水鳥中学もさ、たぶん、おとひっちゃんと一緒にだったらかもしれないけどさ」

あっけらかんと雅弘は答えた。両肘をついて、どんぐり眼のまま乙彦に笑いかけてきた。

なぜこの先輩に気に入られてしまったのか、乙彦には最大の謎である。

何とも言えないくすんだ匂いと天井から床に至るまでアイドル写真がびっしりと貼りめぐらされている不思議な部屋の中で、乙彦は今回も冷たいいちご牛乳を飲んでいて。

「ここまで来るのも大変だったようだね、ごくろうさん」

「いえ、運動になります」

「日本少女宮」の抱き枕にまたがったまま、ショートパンツに真っ赤なTシャツ……背中には「みんなまとめて惚れたるで！ 日本少女宮」とプリントされている……をぶかぶかに来た結城先輩が乙彦を見下ろしている。

「とりあえず、一学期は楽しんだかね」

「はい、盛りだくさんの三ヶ月でした」

正直に答える。クーラーがしっかり利いているのがありがたい。まだ汗ばむ季節だけに、乙彦もできれば日陰で寝ころがりたいのが本当のところだった。夏休み終了二日前ともなると本当は二学期の準備とかいろいろあるのだが、さすがに三年の先輩から呼び出された以上は受けざるを得ない。後輩の義務であると同時に、お下がりの制服やら教科書やら参考書やらをダンボールでもらった立場上、礼儀を守らねばならない。

「僕も、後輩たちから君の大車輪の活躍を耳にしていたけれどもね。入学時に感じた僕の勘はやはり馬鹿にできたものじゃないな。前代未聞だよ。外部生のスター誕生というのは」

「もったいないお言葉、かたじけないです」

「かたじけないか、受けるなこりゃ」

ひとりで爆笑したあと、結城先輩は丸っこい顔をにこやかにして、

「僕の知る限り、外部から入ってく諸君は大抵えらい苦勞をして、学校の補習に追われ、場合によってはドロップアウトしてしまう奴らがほとんどだった。もしくは学校についていくことは行けたけれども、無意味に内部生へ敵意をむき出しにしてトラブルを起こしたりと、まあいろいろと面倒な輩が多かった。しかし君はいわゆる『外部生』のステレオタイプとは違う。ここまでファンを増やしてきたのはさすがだよ」

「みんな、いい奴だからだと思います」

「そう謙遜しなくてもいいよ。まあ、こういうところが好感持たれるところなのかもしれないね。ほら、いちごミルクをもっとお飲み」

——あまりおいしいとは思わないんだが。甘ったるいぞ。

甘いのが苦手ではないが限度がある。とは思う。

しばらくBGMに「日本少女宮」のLPをレコードプレーヤーにかけたまま、結城先輩はしみじみと語り続けた。

「僕も評議委員長としていろいろと目配り気配りしてきたつもりだが、最近は生徒の立場ではどうしようもことが日々起こりつつある今日この頃なんだ。学内の問題だけであれば、ちょちょち

よいのちよいと誰かをとっ捕まえて頭を付き合わせて相談するのもありなんだがね。学校そのもの、となるとちよいと僕の手には負えない。悔しいがね」

「そんなことがあるんですか」

全然わからない。ピンと来ないことは説明してほしい。

「まあ、君もこの学校にいる以上はそのうち情報が入ってくるよ。関崎くん、君は規律委員に潜り込んだと聞いたがどうなのかな、盛り上がりは」

「いわゆる普通の規律委員だと思いました」

これも極めて普通の感想である。乙彦からすると毎朝早朝の週番から始まり違反カード切り、及び服装チェックといったありふれたことしかないし、噂に聞いた「青大附高ファッションチェック」という季刊誌も発行される気配がない。

「ああ、そうか、いろいろ噂はあるんだね。たぶんあれは南雲が全部仕切っていたはずだし、彼がこれから役付きになった段階で動くだろうよ。二年生は今ひとつ先生に投げっぱなしのところが多いが、関崎くん、君の世代の動きはなかなか激しいからね」

「南雲ですか」

複雑な思いを込めてつぶやく。あの「学内の美少年アイドル」とも呼ばれる女子たちからの熱い視線ナンバーワンの南雲秋世、乙彦にとっては単なるバイト先のすれ違い野郎に過ぎないのだが、よく考えると同じ委員会なのだ。しかも、中学時代は伝説の規律委員長とも聞いている。今まで全く一緒に動くことはなかった。

「一年一学期は比較的相手の出方を待つ時期だからしょうがない。どの委員会もほとんどそういうものだよ。ただね、僕が思うに関崎くん」

結城先輩は付け合せのマシュマロを口に放り込んだ。

「君はそろそろ次のステップに進んだほうがよさそうだね。僕が勧めた立場上申し訳ないんだが、規律委員は君にとって退屈すぎるようだ」

「あの、どこがでしょうか」

礼儀として尋ねてはみたものの、結城先輩に「退屈じゃないのか」ともし聞かれたら困ってしまうのは確かだった。つまらない、それは言えている。

「一学期は関崎くん、君に準備運動してもらいたかったこともあって、あえてどの委員会でも可とさせていただいたんだ。規律委員会もそのものは奥が深いしこの調子だと南雲ががんばってくれるだろう。期待はしている。ただ君が南雲の下でこき使われているのをどうも僕は想像できないんだ。君は手芸好きか？」

「いえ、あれは女子のすることではないでしょうか」

学校のクラブに「手芸クラブ」というのは確かにあったが男子が入ったのを見たことがない。

「そうでもない。君が変えねばならないのは先入観だよ。規律委員会が中学で花開いたのは、男子も手芸活動を楽しめるといったルートをこしらえたからではないかと僕は睨んでいる。まあそれはどうでもいい。大切なことは、君がこれからファッションやら手芸やら衣装作りやら、そういう活動を楽しみたいと思っているかどうかなんだよ」

「あまり、です」

小学校時代に家庭科で針と糸の使い方は習ったがそれだけだ。繕いものは親に全部任せている。

「そうだろうそうだろう。さらに君と南雲はいろいろと因縁がありそうだ。そうなる君のステップアップはそろそろ十一月までに考えておかねばならないよ」

結城先輩はやわらかい抱き枕を胸まで抱き上げて頬ずりした。思わず乙彦は尻ひとつ分うしろずさりした。

——まだ内密事項だしな。

ステップアップになるのかどうかはわからないが、おそらく後期のクラス委員改選で乙彦は評議委員に指名されることが内定している。理由はひとえに、現評議委員の藤沖がこれから先、新設予定の応援団に向けて活動を強化するためである。すでに藤沖本人を始め、担任の麻生先生からも承諾を得ている。押し出される形にはなるけれども、覚悟はある。

ただ、そのことを結城先輩に話すことはまだできそうにない。

——藤沖も気を変えないとも限らない。それに。

思いかけたところで結城先輩は抱き枕を抱えたまま語りだした。

「二学期以降の流れにもよるが、君が何をしたいかを少し絞った方がよさそうだ。君、芸術科目は何を選んだ？」

「書道です」

「となると、美術と若干重なるか。美化委員も悪くないよ。それに君は、長距離が強いらしいね」

「体育委員も惹かれるのですが、活動が厳しそうです」

「君はそちらのタイプではない。そして英語科。そうだね、となると、どこがいいだろう。おおそうだ、いいことを思いついたぞ」

いきなり結城先輩が膝を打った。

「関崎くん、君に指令を出そうではないか」

「何をですか」

「この二学期、十一月のクラス改選までになにかトップに立つような機会を掴んでくれないか。僕としてはひとつ、勧めたいことがなきにしもあらずなんだが、まだこのままだとなかなか言い出しにくいところもあってね。あまり心配はしていないんだが、なにかがとんとひとつ打ち出せるものがあるといいよ。例えば学年トップを取る、学年英語一番を取る、体育の長距離走で最速タイムを出す、とにかく君にはインパクトだけではなく、人にはっきり提示できる、一番という称号が必要なんだ。それさえあれば、僕も置き土産を準備できるんだがね」

——悪いのですが、結城先輩。

嘘はつきたくないで黙る。関崎乙彦は口が堅いことを誇りにしたいので、嘘を言うのを避け

るためには黙るしかないのだ。

——評議委員を受ける覚悟は、しつこいようではありますが。

夏休み最終日、兄と弟は予想通り宿題に追われていた。工業高校在籍かつ本来雅弘の先輩にあたる兄も、プリントの宿題が終わりそうにないし、弟は弟で遊びほうけていたつけが来てしまい結局昨日から徹夜状態。結局熟睡して爽やかに目覚め、結果両親に引っ張り出されて秋物の買い物に付き合わされたのは乙彦ひとりだった。

「おとひっちゃんが一番頼りになるよねえ」

「本当だ。学費も稼いでくれるわ、手伝いもしてくれるわ、ありがたいこった」

褒め言葉がただただ嬉しい。学校に通っている時よりも、家でごろついている方が褒められるというのも正直どうかと思うが、青大附高に進学して以来自分の頭が錆び付いていることをいろいろと思い知らされてやさぐりたい気持ちも、正直あった。

「母さんこれから何買うんだよ」

「決まってるじゃないの。あんたたちの普段着やら下着やら靴下やら、いろいろあるのよ。それに靴もいいの買わないと。あんたこの半年でまた背が伸びたから、中学時代に来ていた服もうつつんつてんになっちゃってるのよ」

——ああ、そういえば。

気がつけば、腕も足首もまるまる出しっぱなしの時がある。気がつかぬうちに勝手に成長を遂げていたらしい。身体だけは。

水鳥地区は繁華街ということもあって商店街には事欠かない。とはいえ消耗品は数が必要だからできれば安い大型スーパーへ買い出しに行くのが常だった。今日は車で繰り出し、郊外の三階建て大型スーパーの駐車場につけた。ここだと大量に買い物をして車までカートで運ぶことができるので楽なのだ。

「俺たちスーパーマンだな」

父が笑う。

「スーパーで買い物に勤しむ優秀なスーパーマンだ。屋上からひとつ飛びだなあ」

あまり面白くない感慨は聞き流し、母の買い物にまずは付き合うことにする。モデルになる乙彦がいないと服も買えないし特に靴は足に合わせないとまずいとのことのお言葉だった。洋服を選ぶのはかったるいがしかたない。言われる通りにする。

本当は一緒に入っている大型書店に寄って、いろいろ雑誌でも読みたかったのだが母の買い物は思ったより長引き、結局一時間半は引きずり回されるはめになった。三人兄弟の洋服類もまとめて購入した結果、手提げ袋七袋分にもなり、当然乙彦はカートで何度も屋上と二階洋服売り場を往復する羽目になった。

——まさに、スーパーマンだよ。これは。

その間に父は、母に指示された通りメモを片手に五人分の食材を大量に買いだめしている。その場合は地下一階食料品売り場からのカート往復になるので乙彦よりハードである。スーパーマン親子そのものである。

買い物も一段落し、乙彦はようやく自由の身になった。母も今度は自分の洋服やアクセサリをウインドウショッピングしたいらしいし、父は少し一階の広場でたばこでも吸いたらしい。帰りの時間を確認した上でしばらくスーパーの中をうろつくことにした。

三階の大型書店に入り、青潟市内ではあまり見かけない英語のペーパーバックを手にとってみる。新書版で紙質もがさがさ、お世辞にも質がいいとは思えない軽い本なのに一冊千円以上軽く超えることにぶっとんだ。クラスメートの多くは、図書館や古本屋を通じてペーパーバックを購入して自分で読破しているそうだ。適当に手にとってみるが、ちらっと目を通すだけで頭がくらくらする。青大附高英語科にあるまじきこととはわかっていてもなかなかしんどい。すぐラックに戻した。

——どうしても信じられないんだが。

ひとり、思い出す同級生。

——立村は中学時代、自由研究で「グレート・ギャツビー」の全翻訳を提出したという話なんだがどこまで本当なんだろうか？

そもそも乙彦は「グレート・ギャツビー」自体、アメリカの小説ということしか知らない。会社の偉い社長さんの話なんだろうと聞き流してはいる。

やはり乙彦にはスポーツ雑誌やプラモデル、アウトドア雑誌の方が向いている。

結局行きつくところはそこだった。しばらくぺらぺらめくって情報を収集し、スポーツ選手の自伝や伝記が並んでいる書棚で購入を迷い、ふらりと歩き続けていた。

——うちのクラスはやたらと文学少年が多いんだが、やはり俺も最低限の本は読んどくべきなんだろうな。

図書館で一、二冊めくってみたがフィクションはやはり最初の一章で大抵挫折した。

静内がらみで手に取った「不思議の国のアリス」は表紙だけでめくる気になれなくなった。この調子だと卒業するまで世界の文学を一冊も読み切ることなく終わりそうな気がする。

ふと、向こう側のマガジン売り場を見やった。なんとなく聞き覚えのある声が耳をかすったような気がする。空耳だろうか。

——誰だ？

最初は気にしなかった。しかし二度目に同じ声が飛んできた時はさすがに手を止めた。

——もしや、あいつは？

そのまま目線をマガジン売り場のあたりにおいて様子を伺った。二人組の高校生風男子が、周囲にも聞こえる声で何やら熱く語っているのが、かなり離れている乙彦のもとにも届く。真っ赤なランニングと黄色いスカーフ、膝丈のジーンズ。真っ黒に焼けたそいつは銀縁眼鏡を欠けた同じくらいの背丈をした男子とげらげら笑いながらしゃべり続けている。

——やはり、総田だ。

間違いなかった。総田幸信。青潟東高校に進学した、元水鳥中学副会長、奴に相違ない。

乙彦に気づいている素振りもなく、ひたすら隣の友だちらしき男子に、雑誌を開いて指差しながら語っている。声は聞こえるのだが具体的な内容がちんぷんかんぷんだ。

「やっぱり、このプログラムやるにはグラフィックが強いマシンでないと、やばいっし」

「けど、俺も自分のマシン手に入れるにはもう少しバイトしねえとなあ」

「でもすごいっすね。自分の力で全部一式揃えたってすごくないっすか」

——敬語を使っている、ということは先輩なのか？

内容がわからないかわりに相手の様子だけは細かく観察した。盗み聞きしているようで正直後ろめたさもないわけではないのだが、実際他の客たちはふたりの傍若無人な態度に引き気味のところもあるし、気づかないふたりのほうが悪いと割り切ることもできる。

その先輩らしき男子も、眼鏡を軽く指で押し上げながら、

「やっぱりしっかりバイトして自分のマシン買えよ。世界変わるぞ。店員の顔うかがいながら打ち込んでるのはやっぱ気の入り方が違うからからよ」

「まじでそうっすね。俺も先輩みたくプログラムばりばり作りたいの山々なんですけどね、貧乏人であつ親の監視びしばしだとなかなか。先輩はいいっすね。好きなだけマイコンいじれて、さらに夜中まで打ち込んでも怒鳴られねえし」

「だが、やっぱり打ち込むのはしんどいぞ。指一本ってのはなあ」

——マシン、ってなんだ？

なんとなく理系の話であることは感じた。いわゆる「マイコン」と呼ばれるコンピューターのことを言っているのだろうか。雅弘からもちらっとその話を聞いたが乙彦はあまり興味を持たなかったので聞き流していた。だが、総田もやたらとコンピューターの話に花を咲かせているところみると、やはり「マイコン」というものが今の時代に人気を博していることは確かなのかもしれない。

もし乙彦に気がついたようであれば、近づいて挨拶でもしようとは思っていた。もともと乙彦と総田は水鳥中学生徒会の副会長同士、因縁のある仲ではあったが結局は静かなるフェードアウトで穏便に卒業した。卒業式の答辞を譲ってもらったりそれなりに雪解けしかけてきたところはあったけれども、根本的に乙彦と価値観が違い過ぎたこともあって仲良くなるには至らなかった。親しく「よお、元気か」と肩を叩き合う程のつながりはない。

ただ、隠れる気はなかった。

——俺から声かけるか。

思い切って立ち読みの伝記を棚に戻し、一步踏み出そうとした時、ふたり組はさっさと背を向けて書店から出ていった。何も購入しなかった。

——なんだか後味悪いな。

思わず舌打ちしつつ乙彦は、つい先程までふたりが騒いでいたマガジンコーナーに近づいた。男性向けの趣味雑誌が多く並んでいる……ただしお色気はなし……棚をざっと眺めたところそこは予想通りコンピューター関連の雑誌ばかりだった。分厚く重たそうな雑誌が並んでいて、一

部薄っぺらい雑誌も混じっている。手に取ってみると、海外のラジオ局を短波ラジオやAMラジオを使用して受信しレポートを書き、その上でベリカードというものを受け取るような趣味について事細かに綴られていた。

——そういうのがあるのか、知らなかった。短波ラジオだけではなくて、AMラジオでも拾えるのか。金がかからないな。これだと。

乙彦は、総田たちが投げっぱなしにしたままのマイコン雑誌を並べ直し、ラジオに関する雑誌を手に取り、レジに持っていった。英語科なんだから外国の放送に興味を持つことはいいことだと思う。何もペーパーバックばかりが英語の勉強なんかじゃないと訴えたい。

1 自由研究顛末（1）

二学期は極めて静かに始まった。

入学時に感じた喧騒も特になく、久々に再会した友だちという感覚もない。

夏休み中なんだかんだと連絡を取り合ったりしていたし、夏期講習もしっかり行われていたし、少し遊ぶ間隔が広がっただけという程度のこと。

「おい、片岡お前、夏休みどこ行ってた？」

「まるまる休み中実家に帰ってた」

これこそわかりやすい結論の男子もいれば、

「家族で二週間、イギリス行ってたんだあ。お父さんの休みが奇跡的に取れちゃって」

とか、一部の例外もいることはいる。あまり乙彦には関係ない話題ではあった。

自由研究もグループで行った分は代表者が製本して提出することになっていた。乙彦たちの場合は、やはりリーダーがどう考えても静内なので任せることにした。他クラスの生徒とつるんで行くケースがA組の場合比較的多かったせいも、直接麻生先生に提出する人は少なかった。

「結局、関崎はあれか？ 例の『青潟市の石碑地図』か」

藤沖が興味深そうに語りかけてくる。ちなみにこいつの自由研究は日本の政治にまつわるよしなだという。乙彦に説明してくれたが正直全く意味がわからなかった。政治家への野心でもあるのだろうか。

「そうだが」

「あちらこちら歩いたと聞いたが交通費も馬鹿にならなかつただろう」

「石碑自体が散らばっているからな。ただ、こういうことでもなければ足を運べない場所もたくさんあるからそれはそれで面白い」

「当然、帰りにカラオケに繰り出したんだろう」

「昼、カラオケBOXで飯が食える場所を探して時間を節約した。そのくらいのことはしている」

藤沖は吹き出した。

「おまえ相当喉を鍛えたな。そろそろ合唱コンクールなんだが、当然のことながらやる気はあるだろう？」

「クラスのイベントでやる気のない奴は普通いないだろう」

「関崎らしいといえばそれまでだが、そんなに甘くない」

ちらと周囲を見渡し、女子チームではしゃいでいる古川こずえを見やった。男子にちょっかい出してばかりのように見えるが意外と女子の面倒もこまめにしている様子だ。ちなみに古川の自由研究はクラス女子五人と一緒に、子ども向け絵本の翻訳だったと聞く。

「古川が電話をしょっちゅうかけてきて俺に愚痴るんだが、なかなか大変みたいだぞ。関崎の力がどうも必要なようだ」

「そんなにもめているようには見えないが。それ以前に合唱コンクール自体準備が進んでいるの

かもわからないぞ。指揮者と伴奏者も決まっていらないだろう？ 第一、何を歌うかも聞いてない」

「課題曲は、『恋はみずいろ』、自由曲はこれから決める」

藤沖は聞いたことのない曲を上げた。「恋はみずいろ」って、「恋」なんてこんな軽いテーマを、よりによって青大附高の合唱コンクールで取り上げていいんだろうか。

「もう少し、合唱曲らしいものはないのか。少し軟弱な印象だが」

「たとえばどんなのだ。軍歌はパスだ」

「俺の好みをなんだと思ってるんだ」

しばらくくだらぬ掛け合いをしていたが、藤沖はすぐ話を戻して、「俺も正直なぜと思うところもあるんだが、音楽科の先生が決めたことだ。口出しはできぬというわけだ。むしろバランスを取る形で自由曲を絞らないとならない。だがそのへんも、古川がすでに手をまわしてくれているらしいし俺はあまり心配していない」

古川こずえに頼りっきりのような気もするが、藤沖のことだそれなりに考えもあるのだろう。乙彦はそれ以上こだわらずに別の話に切り替えた。

「ところで応援団の調子はどうなんだ」

「嬉しいことを聞いてくるな、まあ聞け」

すぐに身を乗り出してくる。隣で片岡が興味津々といった顔で様子を伺っている。

「夏休み中は待望のスカウト日和だったぞ。授業がある時は昼休み以外に話を持ち出せないところもあるんだが、夏期講習中は中学から高校を股にかけていろいろと声をかけていくことができる。主に生徒会役員の紹介や、その他個人的に良さそうと判断した奴とか、まあ様々だ」

「手応えは？」

「上々だ」

藤沖はあっさり答えた。太い指を折って数えていく。

「中学生はやはりすぐにその気になる。高校がもう少し盛り上がればの話だが、将来的には中高校連動で応援団組織が広まっていくとなおいいだろう」

藤沖の応援団結成に対する情熱は並々ならぬものがある。本人曰く「本来ならば生徒会長よりも応援団長になりたかった」とのことだが、残念ながら中学でそれは果たしえなかった。しかし高校では先手、先手で攻めて行き現在はほぼ来年の結成が確定しているといった状況だ。後期はおそらく応援団の下準備もあるだろうから評議委員を降りることになるであろう藤沖、その後釜として乙彦なりに評議委員の覚悟を持っていた。ということを実は結城先輩の前で言いたいことだった。

しばらく藤沖たちと語らった後乙彦は図書館に向かった。夏休み一番よく通ったのが学内の図書館だ。乙彦を始め静内、名倉の三人で青潟の歴史を紐解き語り合ったものだった。当然今日も、外部三人組で打ち合わせる予定を組んでいた。

すでに静内と名倉が仲良く隣り合って語り合っている。

「お前ら早いな」

「関崎が油売ってるんだろ」

名倉に凶星を刺されて頭をかく。

「いいじゃないか。久々に友だちにあったらそのくらい話すだろう。で、お前らのクラスはどうだった？ 静内、ちゃんと自由研究提出したろうな」

「失礼だね、したに決まってるよ。うちの担任に笑顔満面で受け取ってもらっちゃったよ」

静内はクールに答える。

「女子で標本まで用意して提出したのって私くらいだったから目立ったよ。うちの担任でっさりああいう男っぽいのだめかと思っていたけど全然。意外にああいうの好きだったんだなってちょっとびっくり」

「担任って、女の先生だろう」

クラスの授業を持ってもらっていないので馴染みはないが、静内の担任は野々村先生という二十代半ばの女性教師だった。地味な顔立ちで長い髪の毛を結わえて後ろに流している姿は静内にはぱっと見似ているようにも見える。静内同様、ぱっと見、大人しそうに見える。

「そう。この三ヶ月話してるけど、いかにもお嬢さまって感じの先生だなって思う」

「お嬢さまか」

「あんたのお嬢さまとは意味が違うんだからね」

静内は名倉を軽く叩いた。

「いかにも箱入りって感じ。絶対お見合い結婚するようなタイプ」

「それは褒め言葉だろう」

「とは言えないかも。まあ悪い人ではないけど、おもしろくないよね」

意外とシビアな静内の担任評価だった。

「でも、品行方正そのもので、ちゃんと門限にはおうちに帰り家事手伝いしておとなしくお休みってタイプかな。少しずれている女子のことすっごく嫌ってる」

「そんなこと言うのか」

何か言葉ににごりがある。静内は続けた。

「いろいろあるみたいよ。私は幸い、関崎や名倉に見せるような格好をあの先生の前でしたことはないからいい子に思われているけど、結構犠牲者は多いね」

「犠牲者、と来るのか」

乙彦が畳み掛けると静内はちらっと周囲を見渡した。ついでに図書館カウンターにも目を向けた。安心したのか胸をなでおろすような仕草をし、

「裏を返せば、普通の高校生でいれば嫌われないで済むってこと。羽目外して男女交際華々しくやらかしたり、男子選り取りみどりで遊んだり、そういうふしだらな女子は虫唾が走るらしいんだって」

「静内ちょっと待て、異論がある」

突然、名倉が反対意見を述べた。

「お前は夏休み中、カラオケBOXでやたらと絶叫したがる歌を歌っていたじゃないか。パンクだとかロックだとかいろいろと。関崎と俺はふたりで凍りついていたぞ」

「名倉、その通り。静内のあの凄まじい絶叫ロックは一度見たら夢に見るぞ」

乙彦があまり知らない過激なロック……という表現しかできないが……をエキサイティングにシャウトしていた静内の姿を見れば、おそらく野々村先生も「大人しそうな優等生」である静内菜種を即、ブラックリストに載せることは確実だと思う。

「ひどいなあ。あんたたちに何奢れば口止め料になる？ ジュース、コーヒー、紙コップでだったらご馳走するよ」

慌てた振りをしながら静内は、白いブラウスをすっきり着こなした極めて地味な、決して目立たない女子の顔をしてにやりと笑った。

1 自由研究顛末（2）

それにしても頼むから「外部三人組」というセンスのない呼び方をやめてほしい、という静内の叫びと、共感する野郎ふたりの顔つきでその日はお開きとなった。

——もっともだ。聞いているだけだとどこかの国の政治組織を思わせるだけだ。少しずつでも同意者がほしいもんだ。

青大附高に入学して半年目に突入だが、陰口でいろいろと「あの外部三人組が」と囁かれるのにもだいぶ慣れてきた。一緒につるむことが多いからだろうし、静内が評議、乙彦が規律と比較的花形の委員を勤めていること、および残りの名倉も外部生の中では優秀な成績をおさめていて来年の特待生候補に挙がっているというのもあるかもしれない。ああいう茫洋とした風情だが、働くところは働くのだ。

——単純に三人で行動しているだけだったらまだいろいろいるんじゃないか？

数えてみるが、よく考えるとそれなりに三人組の場合グループ名が与えられているようだ。噂で聞く限りだと、一年C組の「元評議三羽烏」などもいるらしいが乙彦にとってはあまり親しい付き合いになりそうにないので聞き流しておく。むしろ全く名前のつかない、立村、羽飛、清坂の三人組はどうなのだろう。あの三人も一緒に自由研究に勤しむくらいだから相当の仲だし、特に立村と清坂との一筋縄ではいかない関係は、乙彦の理解の範疇を超える。少なくともかつての恋人を笑顔で新しい相手と娶せようとする発想は乙彦の中には全くない。

——あの三人こそが、実は青大附属最大の謎かもしれない。

次の日、乙彦は立村と理科の実験で同じ班だったこともあって、フラスコを洗ったりアルコールランプを運んだりする間に少し話をした。同じクラスなのでそれなりにしゃべる機会もないわけではないのだが、気がつくやうに教室から姿を消している。立村に用がある時は突撃するしかないというのが現在の結論だった。

「立村、おりいって頼みがある」

「何？」

紫の水を丁寧に排水口に流しながら立村は答えた。顔を上げず手は動かさず。半袖のシャツから出る腕は相変わらず真っ白で細い。

「いい加減俺および外部のふたりを、『外部三人組』と呼ぶのをやめさせることはできないか」

「いきなり何言い出すかと思ったらそんなことか」

機嫌よく立村は答えた。丁寧にからぶきんでフラスコの水滴を拭き取りながら、

「単純な事実関係を表しているだけだしな。でもなんでいきなりそう思う？」

「いや、俺もさすがにいろいろな場所からそう言われるのは鬱陶しい」

「だったら三人組解散すればいいのに」

さりげなくきつい言葉を立村はつぶやく。

「いや、そんなつもりはない。お前だって俺に羽飛と清坂と一緒に三人組とか呼ばれたら面白くないんじゃないか。友だちやめる気はなかったとしてもだ」

「そうだな、確かに」

立村は手を止め、少し考えるようにうつむいた。

「何よりも、この呼び名、センスがなさすぎじゃないか」

静内の言葉をそのまま無断引用する。

「俺たちはたまたま外部入学してきたが、少なくとも三十人は同じ立場の生徒がいる。むしろ外部三十人衆と呼ばれても不思議ではない。それがなぜ、俺たち三人だけがそう、どこかの政治結社のような名前と呼ばれないとまらないんだと、いつも不思議なんだ」

「関崎も細かいこと気にするんだな」

立村は布巾を洗剤で洗い、絞って棚にかけた。食器用洗剤の匂いが花の香りだった。

「無理にとは言わない。だが俺を含む三人の希望があることは、お前にわかってほしかったんだが、なにかいい手段ないだろうか」

「そうだね、別の名前だったらいいのかな」

「例えばなんだ」

「単純に、外部トリオとか、外部三人衆とか、三羽鳥とか」

「どちらにしてもセンスがない」

「もっともだ」

結局よい案は見つからなかったが、立村と久々に軽口を叩いて二学期早々肩の荷が降りたような気がした。思えば青大附高に入学してから立村とはいろいろな柵もあってなかなかかつての親しさを感じる事が難しかった。それでも少しずつ乙彦なりに接点を増やしていき、友だちとしてのつながりを強めていったおかげで現在は多少の話ができるようになってきた。三年間あることだし、距離を縮める時間はまだあるだろう。

家に帰り夕食、風呂、宿題、いつものフルコースをこなしたあと、乙彦は一足先に布団へ潜り込んだ。隣りでは兄と弟がそれぞれ漫画を読んだりラジオを聴いたりして自分の世界にこもっている。もちろん乙彦も例外ではない。朝が早いので夜ふかしはできない。遅くとも十一時には床につくようにしている。大抵はそのまま眠りの国へ超特急なのだが今夜は少しだけ目をこすることにした。まだ十時半、あと三十分だけ。

イヤホンと辞書程度の大きさのFMAMラジオをつなぎ、枕元にセットする。アンテナをできるだけ窓辺に近いところに伸ばす。その状態でゆっくりとチューニングダイヤルを回していく。夜になると電波が混線してくると、あの日購入したラジオ雑誌の初心者向けBCL入門の記事に載っていた。

——BCL

初めて聞いた言葉だが、「Broadcasting Listening」の略でいわゆる、短波放送を中心に海外の放送を受信して楽しむことだという。雑誌を読んでも専門用語だらけで把握できないことも多いのだが、とりあえず乙彦のスタンスとしては手持ちのAMFMラジオでチューニングしつつ海外の放送電波を取り込み、未知の言葉を楽しむことで十分な気がする。さらにマニアックになると「ベ

リカード」なる受信確認証をコレクションするために直接海外へレポートを送る人もいるのだそう。なかなかすごい世界だった。

偶然手にとって興味を持っただけなのだが、実際夜八時過ぎから記事通りにラジオを無作為に受信を試してみると、ロシア語、中国語、韓国語、その他聞きなれぬ日本語の方言などなどさまざまなラジオ局の電波が飛び込んでくる。中には海外放送局でありながら日本語放送を行っているケースもあった。つい聴き入っていると、日本語文法のきっちり整ったアナウンサー……恐らく海外の職員か……がわかりやすくその国独特の流行歌や話題を流してくれる。お国事情もあるのだろうしすべての日本語放送が面白いわけではなかったが、それでも全く知らない世界の空気だけは味わえた。

——立村だったらこういうのすらすら聞き取るんだらうなあ。

時折電波が日本の放送番組に切り替わってしまい、また必死にチャンネルを合わせる。天気にも左右されるらしく、時々激しい雑音で声が途切れてしまうこともある。そうこうしているうちに日本語放送自体の時間が終了してしまっ、いきなり現地語に切り替わってしまったりもする。

ラジオ雑誌をばらばらめくる。AMラジオでもそれなりに拾えることは拾えるが、やはり幅広い海外の放送局を聞きたいのならば、やはり短波ラジオがおすすぬめなのだそう。そちらだとヨーロッパやアメリカ、その他の国の放送も結構取り込めるのだとか。乙彦がこの二日間で上手く選局できたのがアジア各国の、それも近場の放送ばかりだったので学校の勉強に役立てるとい言い訳ができそうにない。

——短波ラジオか。どのくらいするんだらうな。

頭を布団に埋めた。これ以上はまると、あすの早朝古本屋バイトに影響が及ぶ。健康第一、身体が一番。今度立村とゆっくり話す機会があったら、BCLという趣味を知っているかを聞いてみることにしよう。何も「外部三人組」の改名相談なんていう不毛な話題だけであいつとの語り合いを消費するのはもったいない。

1 自由研究顛末（3）

規律委員会も始まり、毎朝の週番や服装チェックなどもこまめに行うなどそれなりの日々が続いていた。一年生は一部の生徒……たとえば南雲……を除いてはいわゆるルーティン業務をこなすだけだったし、たまに一年B組の清坂美里から、

「関崎くん、相変わらずがんばってるね。自由研究すごいって噂だよ！」

と笑顔で声をかけられたりと、取り立ててなにが起こったというわけではない。

——一学期の終業式のことは忘れてているんだろう。

立村宅経由で行われたひまわりの告白は、夏休み中にすべて漂白されてしまったのかもしれない。まあ乙彦は即座に返事をごめんの一言で終わらせたわけだし、その後美里がしつこく迫ってきて受け流すつもりでいた。気持ちは全く変わらない。

ただ、こうやって普通に話す分にはさっぱりした女子で、取り立てて何か言い立てることもない。普通に、あくまでもその他大勢の一人とであれば。

——いや、むしろ。

乙彦なりの清坂美里の存在意義を忘れていた。

——現在、地下に潜っている立村を支える貴重な友人として、だ。

純粋にこれだけはがんばってほしい。そのためであれば乙彦は協力を惜しまない。

合唱コンクールのその後どのような展開を迎えたかも、たまに藤沖や古川こずえに聞いてみるものの、芳しい返事が返って来ない。

「まあ心配してくれるのはありがたいけどさ。たぶん、なんとかなるよ。私もさ、夏休み中それなりに活動してたしね」

放課後、ふと思立って古川に尋ねてみたところ、口はぼったい言い方でごまかされた。

「とにかく急いではいるんだわよ。ただね、人それぞれ事情があるし、こればかりはねえ、集団じゃないんだよ、一体一の熱いサービスが必要」

「なんだそれは、サービスというと何か飯をおごったりするのか」

「それもありね。でも、あんたが想像しているようなもんじゃないかもね」

曖昧な言い方でもって古川は手を振り教室を出て行った。とにかく、古川こずえが死ぬほど忙しい状態だということだけは理解した。

——藤沖も応援団のことでいろいろ忙しいんだろうが、もう少し古川を手伝ってやっていいんじゃないか。

新学期が始まりちょうど五日ほど経った放課後、乙彦はいつものように図書館で「外部三人組」……新グループ名未定……との集会を行っていた。三人とも部活に加入していない、委員会がない日もあり、となると大抵打ち合わせて待ち合わせる。クラスの連中とだらだら話をしていることもあるので三人顔を合わせない日もあるのだが、二学期に入ってからはこのところない。皆勤賞だ。

「合唱コンクール、なっちゃったよ、とうとう」

周囲の目を伺いながら、それでもあっけらかんと静内が報告した。

「指揮者か」

「そういうこと。今日帰りに合唱コンクールの指揮者と自由曲を決めることにしたんだよね」

「ロングホームルームでなくて帰りのホームルームでか」

静内は握りこぶし作って頷いた。

「そういうことよ。ロングホームルームで一時間みっちり相談するより、評議のほうでさっさと決めて提案して終わりにしようってことになったわけ。担任も同意」

「それ、思い切り民主主義に反しているぞ」

乙彦が突っ込むと静内はつんと済まして言い返す。

「一学期で私も担任も懲りたのよね。議論好きな女子が約一名いて話が長引いてえらい目に遭ったからってことで。まあちょっとはもめたよ。それこそ関崎のいう『民主主義』ってところでね。多数決求められたけどそれは私の読み通り。みな面倒なこと好きじゃないし、彼女の考え方に女子だけじゃなくて男子も半端してたしってことであっさり、『翼をください』に決定！」

さすがに「翼をください」は知っている。いい曲だ。中学時代遠足バスの中で歌った。

「あれはいい曲だな」

「ありふれてるったらそれまでだけど、気持ちよくてわかりやすいのが一番だと思ったんだ。伴奏もしやすそうだしね。私も伴奏担当の人に早い段階で候補曲教えてたから、すぐに練習に取り掛かれると思う」

静内、さすがだ。外部生でありながら評議に選ばれた……しかもあの清坂美里を差し置いて……というのが頷ける。

「静内、合唱コンクールの話はそんな進んでるのか」

名倉が相変わらず朴訥につぶやく。

「うちのクラスは実力テストのことで頭がいっぱいだが」

「D組はそうかもね。頭いい人多そうだもん」

乙彦も名倉に同意した。

「俺のクラスも同様だ。古川がひとりで走り回っているが、全く情報が流れてこない。自由曲が決まったという情報すらないんだが」

「それは遅すぎると思うよ。私も音楽好きじゃないし人のこと言えた義理じゃないけど、クラスまとめからしたらある程度時間が必要だと思うんだよな」

「お前、前から音楽や芸術苦手だとか言ってたがなんで指揮者引き受けた？」

素朴な疑問を投げかけてみた。静内は指を立ててにやりと笑った。

「経験値を高めたいのよ。クラスをまとめたり、指示したり、そういう統帥力を身につけたいなあと思って。社会に出たらリーダーシップ必要なところに回されるかもしれないし、そのために実体験を増やしておきたいってそれだけ」

——静内お前結構。

飲み込んだ言葉を、あっさりと口に出したのは名倉だった。

「野心ありすぎだろう」

「まあね」

けろりとした表情で笑う静内に、鬼のようなリーダーシップは感じられなかった。

しばらく互いの宿題を見せ合いつつ、わからないところは教え合い、間違っているところはネタとしてつつこみ合い時間を潰していた。時折同級生たちがすれ違って声をかけるが愛想よく返事すればそれでよし。それ以上割り込んでくる奴はいない。

ふと、図書館入口で何か気配を感じた。向かいあった乙彦がたまたま扉に視線をやっていただけだったが、

「ちっくしょーなんなのあれ。納得行かねえ！」

怒鳴りまくって入ってきた、顔見知りの男子を見つけてしまったからだった。眼鏡をかけた男子と小柄で中学入学したてとしても違和感なしの奴、もうひとりががっちりしてはいるがとぼけた雰囲気男子。合計三人。見事にトリオ。

「なんで俺のがあんな最低扱いされちまって、あいつらのが評価されちまうんだよ！ 説明しろって！」

「まあまあホームズ、落ち着いて。人の価値感は分かれてるんだからさ。たまたま俺たちの『シャーロック・ホームズ研究』は趣味がわかる先生がいなかったってだけだよ」

一生懸命に中学生風男子が「ホームズ」と呼ばれる男子を宥めている。

「そうそう、怒るなよ。難波、やっぱしこれはだなあ、シャーロキアン協会みたいなところに提出しろってことだろ」

「天羽、俺が頭に来てるのはそんなことじゃねえ！」

図書館内で全注目を浴びていることに気づいていないことは明白だった。難波はずっとおちゃらけ雰囲気男子相手にずっと愚痴を撒き散らしているのだから。

「なんで俺たちの『シャーロック・ホームズ研究』が人真似扱いされちまうんだ！ 俺たちの夏休み、何してたかわかるだろ！ ずっと図書館こもって資料集めて読み合わせしてただろ、それをだぞ、『同じような自由研究は山のようにありオリジナリティーが感じられない。評価としてはC』とか言われねばならねえ理由ってなんなんだ！」

「いや、まあシャーロック・ホームズ自体が世界の宝だし、純粋なオリジナリティーってのは難しいんじゃないかなあ。俺たち、十分価値あることやったと思うよ」

またにっこり笑顔を作って中学生男子が語りかける。全く焼け石に水。

「俺たちのオリジナリティーがねえというのなら、じゃあなんでだ。なんであの『外部三人組』の奴が高いオリジナリティー認められるんだ？ 俺たちからしたらあんなの中学時代誰かが余裕で提出してたぞ。誰でもやろうと思ったらできるだろ？ けど、全然高い評価受けてねえのにな。絶対学校側、ひいきしまくってるだろ！」

完全に空気が凍りついた。

奥のテーブルに「外部三人組」が鎮座ましていることを、天羽・更科・難波の「元評議三羽烏

」は気づいていなかったと見える。

「なんなのあいつら」

静内が背中を向けたまま乙彦に問いかけた。

「なんか、私たち悪いことしたみたいだけどなんで個人特定して文句言うわけ？」

「最もだ。先生たち経由で抗議しとこう」

名倉が小声で囁くのを、乙彦は押しとどめた。

「いや、今直接聞いてくる。ここで待ってろ」

立ち上がった。同時に目の前の三人組が立ちすくんでいるのを確認した。難波がなぜ「外部三人組」の自由研究についてそれだけ激高しているのか、それを確認する必要がある。まずはそこからだ。

1 自由研究顛末（4）

すわ一大事、とばかりに図書館内が固唾を飲んで見守っている。

——いや、喧嘩売るつもりはないんだが。

さすがに身に覚えのない因縁をつけられるのはやめてもらいたい。乙彦の考えとして学内での暴力は基本的に反対だし図書館で難波をストレートパンチで沈める気もない。単純に理由と誤解を解きたいだけだ。

——そういえば静内も、気にしていたことだしここで誤解を解くのが一番だな。

「青潟の石碑地図」というものは中学時代に誰かが提出していたテーマらしいということを静内も気にしていた。今の話の流れからすると事実なのだろう。先輩なのかそれとも同輩なのか詳しいことはわからないにしても、一度誰かが手をつけたテーマを再度やり直すということは御法度だった可能性がある。

——だがそういう自由研究の履歴などあるのか？ しかも中学でだぞ。

それこそ「外部三人組」の乙彦・静内・名倉の三人にそのことを様子見しろと言われても無理難題だ。静内が単純に史跡マニアだったことや、それに乙彦たちも便乗しただけのこと。学校図書館よりも青潟市立郷土資料館や青潟市立図書館、その他青潟市役所にお世話になったんじゃないかと思う。過去の自由研究を参考にするという発想そのものがなかった。

口をぽかんと空けたままの難波を更科が肩叩きして落ち着かせている。一步前に出たのはやはり天羽だった。宿泊研修以来二度目の対決だった。

「お前らいたのか、悪かったな。悪気はなかったんだ」

すぐに謝る天羽。笑顔を貼り付けたまま頭を下げる。

「悪意はないのはわかる。だが、事実を知りたい」

ここであっさり引く気はない。乙彦はちらと難波の苦虫噛み潰した顔を見やり、改めて天羽に問うた。

「今の話を確認する限り、俺たちの自由研究がいわゆる真似事扱いされているということか」

「ちゃうちゃう。その反対。更科、悪いが俺が片付けるから、お前ら先に帰ってろ」

手で素早く追い払う振りをした天羽と、物言わず強引に難波を引きずり出す更科。見事なチームワークだ。本当は難波からも詳しい事情聴取をしたかったのだが危険性を感じたのだろう。それもまた、ひとつの判断である。

「まああれだ。ここだと人目があるしだ。俺も関崎と差しで説明させてもらいたいんで、こっちへどうぞぞぞ」

軽口叩きながら、書棚の「歴史」棚に連れて行かれた。あまり人気はない場所ではあるが、乙彦にとっては馴染みある棚でもある。

天羽の判断が幸いして図書館にはまた普通のざわめきが戻った。耳を澄ませて確認したところで天羽は、ポケットに手を入れた。

「まだ確定ではないんで、お仲間にも内緒にしてもらいたいたんだが」

「わかった」

「実はさっき、俺たちは自由研究の件で三人呼び出されたんだわ。さっきの話をしっかり聞いてたろうから詳しいことは省くが、要するに自由研究の評価ってとこだな」

「早いな」

乙彦はまだそんな話を聞いていない。麻生先生は読んでくれたのかわからない。

「よそさんのクラスはわからんが、うちのクラスはとりあえず自由研究を一通り目通しして評価をくれる。しかもA B C Dとまあ、少々エッチなやり方でな」

「どこが、なんだ？」

こういう時古川こずえがいなくてよかったと思う。天羽は続けた。

「俺たちのテーマは『シャーロック・ホームズ研究』という極めてベタな奴だったんだが、これはあいつ、すなわち難波のマニアぶりに敬意を評してってことだわ。あいつのガキン頃からのシャーロキアンぶりは誰もが知らないものなし、当然取り上げて当然のテーマではあった」

「悪くないテーマだとは思うが」

適当に言葉を挟んでいく。どこが悪いのか正直乙彦にはわからない。

「それなりに努力はしたし、恥ずかしい出来ではないとほくそ笑んでいたんだが諸君、蓋を開けてみたら三人雁首並べて説教を食らった。評価Cという屈辱セットでな」

天羽は肩をすくめて笑った。

「シャーロキアンの真似事をしたところでオリジナリティーが全然ない。お前らのしたことは本の抜き書きに過ぎないとか、まとめるとそんなとこだ。そりゃそうだな。シャーロック・ホームズは十八世紀から十九世紀にかけて発表された作品だし、全世界に翻訳されてるんだ。難波程度のファンはうじゃうじゃしているだろう」

「それはそうだ。俺でもホームズは知っている。『まだらのひも』とか」

天羽は無視した。

「俺と更科はそれなりに納得していたんだが、ぶちぎれたのは難波だ。なにせ長年のホームズ愛を露骨に否定されたばかりかパクリとまで言われちゃったからなあ。理由を説明しろとしつこく迫っちゃったというわけだ」

なるほどと頷く。これは難波の気持ちもわからなくはない。

「実際、今までそのような自由研究はあったのか」

「さあな。俺の知る限り、同学年および前後の学年でシャーロック・ホームズに関してあれだけ熱い人間はいない。たぶんうちの担任が考えたことは、本を書き写すのではなく自分の頭で考えたことを綴れつつのってとこに落とし込みたかったんだらう。人様の小説をあだここのねくりまわすのではなくて、もっと地に足の着いたテーマを扱えとな。そうなる最初からシャーロック・ホームズという架空の人間をテーマにした俺たちは即C落ちになったというわけだ」

そこでだ、と天羽は続けた。

「その時、これはうちの担任がアホだったとしか思えないんだが、良い例として挙げたのがお前から外部三人組提供の『青瀉の石碑地図』というわけだ。ここまで着地点OK？」

「ああ」

答えるしかなかった。

「うちの担任曰く、お前らの作品はまず自分たちのできる範疇にテーマを絞り、足を使って直接石碑を調べ、さらにはその歴史背景を調べるためにたくさんの人たちと接して情報を集めている。さらにその内容を深めるべく議論を繰り返して後年に残るレベルのものを作成している。そこが評価されているらしいんだ」

「まあ、事実だが、あれは俺より静内の力だ」

「そんなこと聞いとりゃせん。要は俺たちがホームズ研究しようにも、イギリス行くわけいかねえだろ？ ベーカー街221Bに通いつめるわけいかんだろ？ ハドソン婦人の格好して記念写真とるわけいかねえだろ」

「それやったら変態だろう」

一瞬、難波が女装しているところを不覚にも想像してしまった。

「俺はお前らの自由研究を實際目の当たりにしてねえからなあ。實際評価のしようがないんだ。だが、うちの学校の教師が高く評価するものが、空想ではなくてリアルに近いものだったことだけはよく理解した。つまり、架空の人間やら見知らぬ人やらそういうもんじゃなくて、直接足を運べて、かつたくさんの人々と接する機会があって、いかにもコミュニケーション能力が高そうなところをアピールできるものが一番、というわけだ」

「俺の功績とは言い難いんだが、褒められたのはありがたい」

「だがだ。難波が納得してねえのはな」

天羽はさらにゆっくり、噛み締めるように説明した。

「青大附中ではこの程度の自由研究、ざらだったんじゃねえかと、まあそういうわけだ」

やはりそこだったのか。

だが乙彦にとっては反論したいところでもある。

「天羽、別ルートからもその話を耳にしているんだが、俺たちの『青瀬の石碑地図』というのは前に同じテーマで提出した奴がいたということか」

「そういうことなんだわな。難波は特にその張本人を知っているらしくてそいつのためにだけ怒っているところがあるんだ。よくわからんがな。で、さらに付け加えるとそいつの評価もたいしたことなかった。なのになんで？ と疑問が拭えないんだな」

「実際それを見せてもらわないと俺も判断に悩むが」

「残ってねえよそんなもん。難波がひとりできいきい言っているだけだ。私怨とも言うな。要は自分の汗水流して作成した自由研究をコケにされた難波が荒れているだけであって、お前さんたちにもなんら恨みがあるわけじゃねえということだ。実際なんらかの形でお前さんたちの自由研究が公表されればきっとあいつも納得するだろう。それこそあいつは名探偵ホームズだから、証拠を見れば余計なこととは言わん」

天羽はひょうひょうとした口調で言い切った。

「どちらにしても八つ当たりした難波の件については、俺が代表として謝っとく。悪い、申し訳ない。それと、武士の情けでお仲間ふたりには今の話、何卒内密に頼みます」

深々と頭を下げられ、乙彦は言葉をなくしたまま頷いた。それしか返しようがなかった。

2 伴奏者決定（1）

晴天の霹靂だった。早朝バイトを終わらせた後悠々と週番のため生徒玄関をくぐった乙彦に、同じクラスの男子がふたり、肩を並べて駆け寄ってきた。

「関崎、お前知ってる？」

朝の挨拶もなし、靴をすのこで脱ぎかけた乙彦を取り囲む。

「いきなりなんだ？」

「だから、昨日お前聞いたのかってこと」

「だから何をだよ」

ふたりとも興奮気味で会話が成り立たない。吹奏楽の朝練が終わったところらしく、どうやら一年A組の人間を捕まえたくてならなかったらしい。

「合唱コンクールだよ、合唱」

「まだ伴奏決まってねかっただろが！」

「それは知ってるが俺は全然聞いてないぞ。第一自由曲が何になったのかすら知らん」

乙彦が答えると、ふたりはまた泡を食ったまま語り続ける。

「それは『モルダウの流れ』で堅く決まったけどな、それじゃねえんだよ、話は！」

「だから、結論から言えよ」

少し話を整理したい。乙彦はまず上靴に履き替えるとふたりと一緒に一年A組の教室へと向かった。靴だけおいて、それから週番担当の待つ職員玄関に向かう。遅刻者は生徒玄関から入ることができず、職員玄関に回らざるを得ない。その上で規律委員が違反チケットを切ることになる。

。

「これから週番なんだ、早く説明してくれ」

「伴奏だよ、伴奏」

「誰が弾くと思う？」

またかきまわすようにふたりが矢継ぎ早にしゃべる。

「誰だ？」

「驚くなよ」

「立村だってさ」

——立村？

さすがに乙彦も歩くのを止めた。

——立村がなんでだ？

吹奏楽二人組がエキサイトするのも無理はない。男子が伴奏というパターンは今まで一度も聞いたことがないが、まったくないというわけではないだろう。しかし、立村にピアノを演奏するだけの素養がそもそもあるのかがわからない。尋ねた。

「俺は合唱コンクールの詳しい事情を全く知らないんだが、そもそも立村はピアノ弾けるのか？」

「弾けるわけねえだろ！」

「知ってたら中学の合唱コンクールでばれてただろ！」

荒々しく言い切るふたり。そういえばふたりとも内部進学者だった。

「うちの学校、中学の場合合唱コンクールが二年の時しかねえんだよ。どいつがどれだけピアノ弾けるかなんてほとんどわからねえけど、それでも選ばれることは選ばれるんだ。うちのクラスの宇津木野さまと疋田ちゃん、このふたりはまじプロ。てっきりあのふたりで決まると思っていたんだ」

——宇津木野と疋田、か。

顔は覚えているのだが、あまり喋ったことがない。そもそも乙彦は女子に騒がれても一体一でしゃべることはほとんどないと言ってよい。数少ない相手が静内と古川くらいのもの。ピアノの名手とは聞いたことがなかった。なぜ宇津木野に対してのみ「さま」を付けるのかが謎ではある。理由を頼みもしないのに語ってくれた。」

「宇津木野さまはピアノの女神様だし、疋田ちゃんも音大目指しているし、ふたりで課題曲と自由曲分けあって弾くもんだと思ってたんだよ。ふつうそう思うだろ？」

「俺は知らなかったが、それだけ弾けるんだったらそうだろうな」

「関崎もそう思うよな？　なのにだぞ、なぜいきなり立村が顔出すんだ？」

「待ってくれ、一番大事なところを聞きたいんだ」

乙彦は止めどもなく語り続ける二人を押しとどめた。そろそろ週番朝礼に出席しなくてはならない。

「立村はピアノ弾けるのか？　中学時代の合唱コンクールでたまたま弾かなかただけであって、全く弾けないってわけじゃないのか」

ふたりは顔を見合わせた。

「あいつは中学の時評議だったから、指揮者に回ってたよな」

「そうだそうだ。中学の合唱コンクールでは暗黙の了解で、自動的に男子評議は指揮者に回るしきたりなんだ」

——学級委員が指揮者になるのと同じ感覚か。

違和感はない。乙彦は改めて問うた。

「ということは、まだ立村がピアノを弾けないという断定は、できないというわけだな」

「まあ、そうだな、そういうこと」

しぼんだふたりに、「貴重な情報感謝だ」とだけ伝え、乙彦は机の上に鞆をおいて、週番様の緑の腕章を片手に廊下へ飛び出した。

——あいつがピアノ、弾けるのか？

今まで立村とはそれなりに話をしてきたけれど、楽器の演奏について盛り上がったことはほとんどない。語学に堪能なので海外の音楽情報とかラジオのエアチェックに関する話は若干出てきた記憶もあるが、あまり熱心に話した記憶はない。無理に話題にすることもない話ではある。

——しかし突拍子もない話であることは確かだな。

吹奏楽部の二人があれだけ興奮し続けるにはそれなりに訳があるのだろう。水鳥中学の合唱コンクールを思い出してみても、伴奏する生徒は大抵ピアノの上手な女子で、課題曲と自由曲をそれぞれ分担して演奏していた。暗黙の了解で決まっているとはまさにその通り。改めて誰が弾くかを立候補させることはなく、知らないうちに音楽の先生が指定していた。気がつけば、決まっていたといった感じだ。

乙彦は職員玄関のすのこの上で、しばらく腕章を肩に安全ピンで止めた。半袖だとその点面倒くさい。まだ誰も規律委員が来ていない。今日の当番は誰だったろうと頭を巡らせる。一年規律の担当は確か……。

「関崎くんおはよう！」

——そうかこの人か。

少し気分が重たくなる。清坂美里が二つ分けの髪型で笑顔を振りまきながら駆けつけてくる。赤いリボンを形よく襟に結び、軽く振りながら、

「早いね、バイトからまっすぐ来たの？」

「ああ、そうなんだ」

あまり余計な会話を交わさないように気を付ける。できれば清坂と一緒に当番は避けたかったのだが決めるのが三年の先輩たちなのだから文句も言えない。他の二、三年の先輩たちもちょろちょろ集まってきたのでしっかり礼をし、清坂から離れることには成功した。

嫌いなわけではないが面倒ではあるのだ。

朝八時十五分。週番朝礼を職員玄関前で行う。三年の先輩が服装チェック時の注意事項などいわゆるいつものパターンの言葉を並べていく。お題目そのものなので聞き流す。ふと気がつくと、南雲もすでに乙彦の後ろにつっ立っている。こいつも今日当番だったのかと思い出す。挨拶を忘れていたと気づく。

「それでは、チェックに入ります。みなさん全員、配備についてください」

正しい言葉なのかそれは、とつっこみたくなるがとりあえずは一年三人並んで職員玄関前に整列した。まだ二分程生徒玄関が閉まるまで時間がある。

「あのさ清坂さん、つかぬこと伺いますが」

いつもながら狐っぼい髪型の南雲が、軽い調子で清坂に話しかけている。

「なあに南雲くん」

「りっちゃんがさ、伴奏するって噂、聞ってる？」

いきなり隣の二人が顔を見合わせて核心を突く話題を始めている。清坂は少し戸惑った顔をしていたが、ちらっと乙彦を見やり、

「ええっと、それ誰から聞いたの？」

小声で尋ね返している。乙彦を明らかに気にしている。知らんぷりすべきか迷う場面ではある。

「うちのクラスの女子のみなさま」

「そんなに情報早いんだ。こずえ連絡してるのかな」

「どうも本当っぼいな」

しかし不思議なのはなぜ南雲も、「別れた彼女」である清坂に対して「前の彼氏」である立村の諸事情を聞こうとするのだろう。乙彦も本当であれば口を挟みたい気持ちがあるのだが、気がつけばもう生徒玄関のドアが施錠されてしまっている。はじかれた生徒たちが雪崩を打って職員玄関に駆け込んでくる。来る順番で生徒手帳を没収し、違反カードを切る作業に没頭した。

2 伴奏者決定（2）

名倉から借りた本……「世界の名医」なる未知の世界……を週番終了後急いで返しに行き、一年D組を出た時待ち受けていた女子が約一名いた。

「関崎、おっはよ！」

「ああ、おはよう」

生腕を引っ張られつんのめりそうになる。急いで教室に戻らないとそろそろ麻生先生が来る。規律委員と評議委員が遅刻するというのはみっともない。

「急いでるんだが」

「こっちも急いで話すよ」

古川こずえは足早に一年A組の教室へと乙彦を引っ張りながらまくし立てた。

「これからさ、ちょっと朝の一発で大抜きしちゃうからあんた、しっかりしこりなよ」

「意味が全くわからないぞ」

いつもの爽やかな朝の挨拶だとは理解しているのだが、何も待ち構えていなくてもいいだろうに。乙彦は古川に負けないよう急いで歩いた。

「遅刻したらしゃれにならない」

「大丈夫だよ、麻生先生さっきまで私たちと話してたから」

「私たちって誰だそれ」

「私と立村」

古川はあっさり答えた。一年A組の教室廊下前で立ち止まり、また倍速でしゃべり続けた。「種明かしするとね、これから合唱コンクールに関して重大発表があるの。まず自由曲はみんな知ってる『モルダウの流れ』、それと、もめにもめてた伴奏者だけど」

「もめにもめてた？」

「理由はあとで話すから。立村にほぼ内定」

「やはりか」

「あれ、あんたなんで知ってるの？ 超機密情報だったのにい」

ふざけつつも少しほっとした顔をしている古川に、乙彦も急いで説明した。

「朝、うちのクラスの奴に俺の方が聞かれたんだ」

「女子には話、しといたんだけどね、男子にばれたってことは内通している子がいるのね、あとでつつこんじゃおうっと。まあいいけどとにかく、この事実はほぼ決定事項だから、今日いきなり私が公表しても、ひかないでよ」

「引いたりする気はないんだが、ひとつ確認させてくれ」

さっきの吹奏楽二人組にも尋ねたことを、もう一度確認した。

「立村はそもそも、ピアノ弾けるのか」

古川も一瞬びくりとしたように身体をこわばらせた。迷う素振りを見せたがすぐに答えた。

「弾けるよ。私がおととい耳と目で確認したからね」

「どうやって？」

「私のうちに来てもらって、うちのピアノ弾かせたの。行けるってのは私の判断。とりあえずさっさと教室入ろうか」

A組の教室に乙彦は押しやられた。すでに教室内は立村を囲むように数人男子たちが固まっている。朝乙彦に食らいついてきた吹奏楽二人組プラスもうひとりも混じっている。藤沖と片岡が遠目から眺めている。女子たちも噂話に余念がない。

「立村、おはよう」

乙彦はすぐに立村に走り寄った。これは本人の口から聞かねばならない。第三者経由の情報よりも、やはり本人が一番正しい。

「それとだ、今、古川から聞いた。本当に、受けるのか」

「何を」

冷静に立村は受けた。驚いてはいない様子だった。

「だから、クラスの伴奏だ。合唱コンクールだ」

立村はやはり穏やかに答えた。乙彦の後ろに立っているらしい古川にちらと視線を送り、すぐに乙彦へと戻した。

「古川さんの言う通りだけど、まだわからないよ。確かに、麻生先生には誰も伴奏者がいなかったら俺が受けるとは伝えておいた。古川さんはじめ、他の友だちにも協力してもらって練習が出来るよう準備しようと思ってる」

いったん切って、口調をひそめるようにして付け加えた。

「でも、俺がそうなれば、の話だけど」

——そうか、本気か！

乙彦の中で湧き上がるものが確かにある。思わず拳を握り締めた。怒りではない、純然たる感動だった。立村の机を思い切り叩いた。

「そうか、とうとうお前もその気になったか！ 合唱コンクールといえば燃えないわけないだろうとは思っていたんだが、やはりお前は本気だったんだな。やはりお前は心底、青大附中の評議委員長の誇りを持っているんだな」

溢れ出る言葉で何度もたたえたかった。この不器用な男子が、中学時代は評議委員長として信頼を得ていて、一部の奴らに誤解されつつも懸命に自分の役目を果たそうとしていることは知っていた。一学期にちらと知った藤沖がらみの事件においても、その他伝説と化したさまざまな出来事においても。立村は誤解されやすくおっちょこちょいのところはあるけれど、いざとなったら覚悟を決めて勝負することのできる、男気のある奴だ。なよなよした外見に騙されてはならない。

「いや、そんなわけじゃないよ。どうせ落ちたし」

乙彦の褒め言葉に照れたのか立村はため息をついている。素直に受け取ればいいのだ。どういう事情かはあとで折々わかるだろう。いつのまにか立村の隣りに回り込んできた古川に叱咤激励されている。

「女子たちにはもう、昨日の夜、電話で話しといたから余計なこと考えるんじゃないよ。悩みす

ぎたらはげるよ。はげはセクシーだけど、今はまだはやいよ」

麻生先生が扉を開けて現れた。ひとまずは立村を称える会終了だ。

古川を相手に麻生先生は軽く掛け合った後、青大附高の合唱コンクールシステムについて説明を始めた。外部生の乙彦にとっては実にありがたいことである。

「青大附高の合唱コンクールは一年から三年まで全クラスが出場するんだ。去年までは全校生徒が自クラス以外に投票する形式をとっていたのだが、今年からは音楽専門の肥後先生が中心に審議をして最優秀賞を一クラス、その他学年内の優秀賞を各学年一クラス。極めてシンプルな形式なんだ。特別賞は今まであったんだが、今回からはなくなった」

——生徒たちが決めるんじゃないのか。

水鳥中学の合唱コンクールの場合は、学年全員で投票する形式だったはずだが。教師主導というのがどことなくひっかかる。麻生先生の説明はさらにヒートアップする。

「ご褒美は見た目には賞状だけに見えるだろうが俺も担任として何にもしないわけにはいかない。それなりの結果を出したからには特別な褒美を取らせる準備はあるぞ」

——それはなんと！

思わず身を乗り出す。宿泊研修時のトイレ掃除付きとはいえ中華料理の豪華なランチを思い出す。あの時初めて静内菜種と隣り合いしようもない話で盛り上がったのだ。となると、かなり期待していいご褒美だろう。今度は学内掃除がセットになるかもしれないがそれは考えないことにする。

「先生、ひとつ聞いていいですか。合唱コンクールには指揮者賞、伴奏者賞があると聞いていたんですが、なくなっちゃったんですか？」

女子が手を上げて質問を発した。

「よく知っているなあ。詳しい事情ははしよるが、去年から指揮者と伴奏者の個別賞は廃止することにしたんだ。合唱だろ？ 合唱とは指揮者と伴奏者と合唱の三拍子が揃わないとむなしいだろ？ 総合芸術として評価すべきだという意見が多くなったんだよ」

「へえ、それ知らなかった！ けどそれだと伴奏する人張り合いがないねえ」

古川がさりげなく立村を見やりつつ茶々を入れる。立村も少し居心地悪そうだ。

「伴奏者の場合は賞狙いでどうしても負担が大きくなるケースが多いのと、特定の生徒しか弾いてはいけないといったような雰囲気もあまりよろしくない、そういうこともあるんだよ」

——伴奏者賞、指揮者賞ってどうやって決めるんだ？

音楽イコール最近ではカラオケにしか繋がらない乙彦にとっては、率直な疑問である。

古川こずえの爆弾発言を待ち構えていたのだが、結局持ち出したのは麻生先生だった。

「たとえば、今のうちに話しておこうか、今回の伴奏者なんだが」

少し声をひそめるようにして、ゆっくりと、

「三時間目の音楽の授業で最終決定する予定となっている。エントリーは立村だけなんだが、誰

もないのか、本当に？」

クラス全員に問いかけた。同時にざわめく教室内。女子もそうだが男子たちはすでに情報を把握終わったのか立村をねぎらうようになにかかしら声をかけている。古川も頷きながら立村を励ますように小声で何か言っている。藤沖、片岡だけはどうも面白くなさそうだがこればかりは仕方あるまい。乙彦は立村と目があつた時にゆっくりと応援の頷きを返した。麻生先生の再度の呼びかけが響く。

「もし、参加したいんだったらぎりぎりでもいいから手をあげるんだぞ。いいな」

2 伴奏者決定（3）

乙彦の芸術選択科目は書道だった。青大附高の場合芸術科目は音楽・美術・書道の三科目から選ぶことができ、入学の段階で希望を提出することになっている。お世辞にも音楽の素養などなく、かといって美術に至っては雅弘から、

「おとひっちゃんは何のすごく現代芸術的な絵を描くね」

と、えらく気を使った発言をされてしまったこともあり却下、結果小学校以来ご無沙汰の書道キットを磨き直して持ち込むはめとなった次第だ。

もっとも、書道と言ってもほとんど最初は彫刻の授業に近い。「篆刻」と呼ばれるオリジナルの印を彫る作業だが、これは結構面白い。書道選択して大正解だ。

とはいえ、この学校に入学してからカラオケの奥深い魅力にはまり家族団欒のひと時をカラオケBOXで過ごすようになっていたり、友だちから歌声を褒められたりということも多いので、もしかしたら音楽の授業を取るべきだったのではと迷うこともある。

どちらにせよ、三時間目に行われたという音楽の授業で立村がどのようなピアノの腕前を披露したのか確認することはできなかった。男子で四人の音楽選択者。男子十一人いる中では結構な割合なのだが噂でしか入ってこない。

古川こずえが音楽選択だったので、捕まえて聞いてみることにする。

「伴奏の件は、結局立村で決まったのか」

昼休みに呼び止めて確認してみると、待ってましたとばかりに古川は、

「決定。文句なし。まあ、ピアノの腕がどうのこうのってことになるけど好みだからね。あいつも『エリーゼのために』をさらっと弾いたけど」

「『エリーゼのために』だと難しいんだろうな」

「まあね。立村の場合、自宅にピアノがないし稽古を継続的に行ってるわけじゃないからね。どうしてもうちのクラスの宇津木野さんや疋田さんと比べるとかわいそうなおとあるよ。でも、まあいいじゃん！ 弾けないことはなさそうだし、肥後先生も納得してたし」

かなりあぶなっかしい言い方が気になる。乙彦が口ごもるのを見てとって、

「関崎も立村がいきなりかくし芸的にピアノの話持ち出したからびびってるんじゃないの。同じ附属上がりの私たちも正直最初聞いたときは驚いたよ。けど、立村の性格上わからなくもないんだよね。中学時代は結構女子もピアノ上手な子がクラスにいたし、立村もわしがわしがと売り込むタイプじゃない。黙っていれば気づかれなかったよ。ただ今回は少し特殊な事情が絡んでいるからね」

「それ、ずっと気になっていたんだが、うちのクラスの場合宇津木野がピアノの女神で疋田が音大を目指しているということまで聞いている」

「随分情報通じゃん。そこまでわかれば上等よ。つまり、そこまで弾けちゃうふたりがどうしても今回、担当できない深入った理由があるってことなのよ」

時間も差し迫っていたのでそれ以上のことは聞けなかった。どちらにせよ放課後にいったん仕

切り直しで合唱コンクールのまとめをするという。それまで待つことにした。

約束通り古川は帰りのホームルームが終わるやいなや、すぐに教室内の全員へ呼びかけた。藤沖が抜け出そうとするのを目ざとく見つけ、

「藤沖もさすがに今日はいなさいよ。それと関崎、あんた、合唱コンクール経験あるでしょが」

すぐに釘を差した。顔をしかめつつも藤沖は素直に従った。乙彦も同様に、

「もちろんだ」

当然のごとく返答した。

「問答無用まあいっか。さてと。今日はさ、合唱コンクールの大まかな練習予定を発表したいんだけど、みんなよい？ 三時間目に音楽出た人なら分かってると思うけど、とりあえずうちのクラスの伴奏は立村ってことで話が決まってるんだけど、それでいい？」

ほぼ全員が揃っている教室内で古川は見渡しながらかつ続けた。

「夏休み中、私と直接話をした人たちなら分かってると思うけど、宇津木野さんと疋田さんが今回は十月の学内ピアノ演奏会に集中してもらわないとまずいってことで残念ながら伴奏辞退になっちゃったわけ。うわーん、もったいなーいとか言いたいけどしょうがないよ。十月はみんなで応援に行くからね」

かなり重たい話のはずなのだが、古川の台詞からなるものは実にあっさりしている。要するに宇津木野と疋田の両名は、十月に行われる予定の学内ピアノ演奏会への出演が決まっていたその練習を優先するため、合唱コンクールの伴奏を辞退したということらしい。この辺は全くわからないのだが、学校祭のイベント一環として行われるもののようだ。

古川の言葉を受けて、当の本人ふたりが立ち上がった。まずは背高ノッポでかつロングヘアーの眩しい宇津木野、ピアノの女神さまから直々のお詫びである。

「ごめんなさい」

おずおずと、引け目を感じている様子で言葉に詰まっている。すぐにもうひとり、疋田が古川とクラス全員に向かって、

「今回は、私たちのわがままでみんなに迷惑かけちゃって、ごめんなさい。いつかこの分、ちゃんとお返しするからね。古川さんも、ごめん。あ、それと」

疋田は固まっている宇津木野の背中を叩くようにして促し、静かに腰掛けているもうひとりの主演、立村に向き直った。頭を下げた。

「立村くん、ものすごい負担かけてしまっでごめんなさい。本当に、助かりました。ありがとう」

慌てて立村も立ち上がる。まさかそんなことしなくてもといった様子だ。もっとも乙彦からすると、女子ふたりから深々と頭を下げられてもいいことを確かにしているとは思う。

「いや、こういう時しか手伝えないから、あの、俺もほら、弾いた感じがあの程度だから、かえって申し訳ないんだけど」

しどろもどろになる立村に、今度は宇津木野が目を伏せて頭を下げた。

「ごめんなさい」

いろいろと面倒な事情というのはこのあたりなのだろう。古川が調整に走り回るのも当然のことではあるが、それにしてもまさか立村で決まるということは誰の目にも予想外であつたらしい。女子たちを中心に戸惑いが感じられる。具体的な内容は別としてもささやきあっているようすがいかにも、という感じだ。

「それでなんだけど、問題は合唱よね。ご存知の通りうちのクラスは人数が少ないじゃん？ パートを分けるだけでも結構大仕事よね。まあそのあたりは、吹奏楽のみなさまにお手伝いいただきたいんだけどどう？」

「コンクールの合間になるけどそれでいいなら了解」

吹奏楽部員は全員声を揃えて受けた。英語科A組内の吹奏楽部員は男女含めて結構な割合だ。「さっすが頼れる！ 私も音痴じゃあないと思うんだけどこのあたりはやっぱプロに任せたいねえ」

調子よく持ち上げた後、古川はどんどん話を進めていった。

「それと、肝心要の指揮者。今までのパターンで行くとなると男子評議委員の指定席ってとこなんだけど、藤沖、あんた文句ある？ あんたがいないとバスパートがきつくなるってのはあるんだけどさ、受けてくれるよね」

「俺がか」

「そうだよ、大抵他のクラスもそうじゃん！」

これも予定通りなのだろう。今朝、吹奏楽二人組が息を切らせて話していた内容で、立村が中学の合唱コンクールにおいて指揮を担当したという驚きのニュースが混じっていた。立村がピアノを担当する以上に衝撃的な話だと乙彦は思う。もっとも立村は諸事情で説明していないだけでピアノをたしなんでいたわけだし、音感がないわけではない。問題なくこなしたのだろう。それなら伴奏よりも指揮者に回したほうがいいのにと思わなくもないのだが事情が事情だ仕方がない。

藤沖はどっしりと腰掛けたまま腕を組んでいた。やがて重々しく口を開いた。

「古川、異議ありだ。俺は指揮者向きではない」

——え、なぜだ？

思わず乙彦も反射的に問いかけていた。評議の藤沖にしてはありえない。

「どうしたんだ、お前らしくない」

乙彦だけではない、他の女子たちも一瞬凍りついたように静まった後、矢継ぎ早に

「えー、ちょっとちょっと、話が違うよ。藤沖くんがやってくれるんだつたらまあいっかって感じで女子たちも納得してたんだけど」

「そうそう、中二の時やった合唱コンクールも大抵評議がやったじゃん」

質問を浴びせかけてきた。当然だろう。ちなみに藤沖も芸術科目は書道だがそれが関係しているなんてことあるだろうか。

藤沖はしばらく自分に対する鋭い訴えに耳を傾けていた。即、言い返すことは控えていた。や

がておもむろに口を切った。

「男女関係なく聞いてくれないか。俺の合唱コンクールにおける考え方を、今ここで伝えたいんだ。いいか、古川」

「わかったわかった、じゃあ、あんたが大将ってことで藤沖、合唱コンクールについて語りなさいよ。その代わり納得いく理由がなければあんたが指揮者辞退なんていう非常識なこと受け入れないからね」

古川の了解も得て藤沖は立ち上がり額の汗を拭った。クラス全員の前に立ち、指揮者を断る理由を滔々と語り出した。

「合唱コンクールとは、クラスの団結を確固たるものにするために行われる学内イベントだということくらいは、ここにいる全員理解しているだろう。俺も最初は楽しみにしていた。お世辞にも美声を持つわけではないがな、ひとつのことに集中して素晴らしいハーモニーを奏でる感動はぜひ味わいたかった。だがうちの学校は意外と合唱に対するこだわりを持っていない。学祭が控えているせいといえばそれまでだが、よりによって伴奏者に負担をかけるようなピアノ演奏会を十月に行うなどといったスケジュールからしても明白だ。また、諸先輩方からも聞いたことなんだが、音楽担当の肥後先生が合唱コンクールというものに対して批判的だというのがひとつの理由とも聞いているんだ」

——合唱コンクールに批判的な先生がいる？ 音楽担当の教師がか。

てっきり学校カリキュラムの一環として選択の余地なく組み込まれていると思っていたのだが青大附属では取り捨て選択が可能なのだろうか。そちらの方が乙彦には驚きだ。

「理由は今のところ不明だが、そのこともあり来年以降は合唱コンクール自体がなくなる可能性もゼロではない。いや、かなりの可能性でそうなるだろう。となると青大附高最後の合唱コンクールである以上、俺たちはこの貴重なチャンスを生かすため全力を尽くさなくてはならないことになる。失敗する要因を出来るだけ減らしていきたい。だがたぶん大丈夫だろうとたかをくくっていた。なにせ過去の伴奏者がふたりもいるクラスだからな。しかも半端な腕前ではないという話を、噂で聞いた」

「藤沖、やめなよ」

古川が止めようとするが藤沖は一切聞いておらず、いきなり乙彦を見つめた。何事かと思わず身構える。同時に藤沖がつかつか近づいてきて乙彦の腕を取った。

「おい、いきなりなんだ、おい」

「いいから来い」

小声で周囲には聞こえないよう囁くと、藤沖は自分の隣に乙彦を立たせた。一緒に見渡すクラスメートたちの表情はみな驚きしかない。もちろん立村も怪訝な顔をしているのが見て取れる。

「合唱にとって伴奏は非常に重要だ。要といってもいい。それが今回は、やむをえない事情とはいえほとんどピアノに触れたことのない立村に任せられたということになる。はっきり言おう、それは緊急事態だ」

言い切った後に立村をじっと見つめた。明らかに誰への牽制かがわかるようにだった。藤沖は

そのまま立村に語りかけている。

「お前が自分から手を挙げたというのは俺も驚いたが事情が事情だ。頼るしかない。だが、最初で最後になるであろう合唱コンクールで全力を尽くさねばならない中、音楽の耳を持たない俺が指揮者として仕切るべきではない。これは評議だから指揮者、といった短絡的な発想ではない。音楽の流れとハーモニーをつかめる誰かでなくてはならない、そしてここにいるこいつが」

次に今度は乙彦の背中を前にどんと押し出した。

「音楽的感性、およびクラスの要としてまとめる最強の指揮者になる。俺が保障する」

誰にも文句を言わせたくない、藤沖の迫力にクラス全員が飲まれていた。何かを言い返すべきだとは乙彦も思うのだが即時に言葉が出てこない。情けない。

2 伴奏者決定（4）

指揮者、これは絶対にありえない。

「藤沖、お前いったい何考えてる？ 俺は芸術科目書道だってことわかってるだろが！」

「いや、関崎ならできる。俺が断言する」

「何馬鹿なこと言ってるんだ！」

しばしの放心状態から立ち直り乙彦が、ほくそ笑んでいる藤沖の胸ぐらもといネクタイをひつつかみ抗議している間に、もうひとりの主役が教室を抜け出そうとしている。

後ろの扉からC組の難波が顔を出し、立村を確認してから潜り込んできて腕をひつつかむ。藤沖とやり取りしている乙彦をちらとみやって、

「悪いがこいつ借りてくからな。一応肥後先生に呼び出し食らってるんだ。理由はだいたいわかるだろ」

嫌味ったらしく言い放ちやがった。立村も少し驚いている様子だったが、難波に逆らおうとはしない。引きずられるというよりも素直に立ち上がり扉に歩き始めた。ちらりと乙彦と古川、その他の生徒たちに小さく礼をする。申し訳ないというところはなんとなく伝わってくる。古川はすぐに気づいたのか、難波にわざとらしく肩をすくめてみせ、

「ああ、ホームズ様どうもどうも。悪いわねえ、隣のライバルだっけのに出来の悪い弟を面倒見てくれるなんてありがたいことじゃないの、ほら立村、あんたはさっさと行きな！」

つつかつか立村に近づき、思い切り背中を押しやり追い出した。

その間にも藤沖の乙彦絶賛演説は再開されている。もう教室の中はカオス状態と言ってよい。乙彦の逃げも打てそうにない。

「お前らはまだ知らないだろう。関崎、こいつの密かなる才能を」

両手をぼんぼん打って、藤沖はクラス全員を黙らせようとした。はっきり言って無駄だ。いったん火のついた連中を静かになんてできるわけがない。

「俺も、実はまだ噂でしか聞いていないのが残念なんだが、こいつの美声は知る人ぞ知る見事なものなのだそう。とある情報筋から聞き及んだわけだが」

「それは違う、俺は単純にカラオケが好きなのだ」

かえって油に火を注いでしまった。そういえばこのクラスで乙彦のカラオケ好きは意外と知る人が少ないはずだった。夏休みしょっちゅう連れ込んでいた静内、名倉ならともかくも。あとは古川と立村くらいだろう。立村がぺらぺらしゃべるとは思えないので、藤沖が乙彦のカラオケマニアっぷりを知ったとすれば古川経由としか考えられない。

「関崎、あんたさ、自分を音痴だと感違いして十五年か十六年経ってると思うけどさ、あんたにマイク握らせたら最後だよ。もう誰も後で歌えなくなるんだよ。私も気になってさ、この前評議の静内さんに聞いたけど」

「あいつになんで聞いた？」

思わず気色ばむ。また余計なちょっかいだそうとしたのか。古川はにやつきながら首を振った

。「評議委員会とっくに始まっているから顔合わせる機会あるんだからあせりなさんな。静内さんもあまり詳しいことは言わなかったけれども、少なくともあんたを下手とは思っていないみたいだよ。うーんとね、どっちか言うと、クラシック系が向いてるんじゃないかと」

「クラシックってどういうことだ」

あの静内も、評議というだけでしつこく聞かれていらついでに適当に答えただけなんじゃないだろうか。あいつもロックをがなっていたのだから。

「ああなるほどねって思ったよ。静内さんよく聞いている。あんた、いわゆるアニメソングとか歌謡曲歌う玉じゃないんだよ。どっちかいうとくそまじめな文部省唱歌的乗りがぴったりなの。となるとさ、やっぱ、合唱曲の折り目正しさがぴったりくるじゃん」

「古川、お前が褒めてくれるのはありがたいが、そうすると本来俺のいる場所は合唱だろう。なぜ、指揮者になる必要があるんだ？」

いつのまにか教室のおしゃべりが静まってきている。古川が口を挟むとなぜかみな、聴き入るのはなんでだろう。興味津々といったふうに食らいついてくる。その間をついて、今度は藤沖が演説を再開した。

「もちろん本来であれば関崎はバスパートで見事な響きを披露してもらいたい。俺も最初はそう思っていた。だがしかしだ。合唱はひとりで歌うものではない。たとえひとりが見事な歌声を響かせたとしても、残りの奴らが音程狂っていたら最悪な展開となる。しかも、繰り返すが伴奏があのだ」

「立村だよ、もう決まったよ。だからそのことは置いときな」

古川の制止も無視して藤沖は陶醉状態で語り続ける。

「期待ができないレベルの演奏ともなれば、ここでどうやって俺たちは優勝を狙うべきか。コンサートである以上、俺たち一年A組はトップを狙ってしかるべし。しかし俺のような、こういってはなんだが聞くに耐えない音痴でかつそのために美術を選択している我が身としては、自信をもって指揮者を背負う自信がない。いや、伴奏に引きずられてしまいせっかくのハーモニーを台無しにしてしまうであろう。断言はできる」

小声で誰かの声が聞こえた。女子だった。

「確かに藤沖くんはね」

怒ると思いきや、藤沖は大きく頷いた。

「その通り。だからだ。今だからこそ、俺は関崎にクラスの命運を託したい」

「そんな大げさだろう」

「いや、大げさではない。思えばまだA組で、俺はクラス一体となった感覚をまだ味わっていない。男子連中だけならともかくも、残念ながら女子とは遠いままだ。普通に話をするだけで、まだ同じクラスで三年間を共にするであろう盟友という感覚がつかめてない。もちろん一部の男子はそれぞれいろいろあるだろうが」

——よくわからないがそういうのがあるんだろう。

乙彦が心の中でつぶやくのを藤沖は全く気づかずに、

「そういうこともあって俺としては、この合唱コンクールを男女しっかり結びつための大きなきっかけにしたいと常々考えていた。同時に単なる仲間内のお遊びではなく、確固たる友情を形作るためのものとしてだ。指揮者とは、そのシンボルとなるべき人間だ」

「シンボル？」

乙彦が問い返す前に、予想通り古川がまぜっかえした。

「シンボル？ 男のシンボルの大ききなんか比べるのはやめなよ」

「古川黙れ。とにかくだ、俺は今、このクラスの象徴と言える奴をなんとしても、A組の指揮者として立たせたい。それが関崎、お前だ！」

藤沖を黙らせるよい方法はないだろうか。

いやなによりも、この流れだとどうしても乙彦が指揮者を引き受けねばならないような雰囲気漂い始めている。特に藤沖演説の後半「このクラスの象徴」といったところでなぜ男女数人が頷いてしまうのだろう。全くもって、謎過ぎる。しかも、乙彦のどこがシンボルになるのかが全くわからない。ただ単に、英語科の外部入学者で、妙に先生たちに気に入られ、クラスでも風変わりな奴としておもしろがられているだけに過ぎないのだ。

「藤沖、なるほどね。合唱コンクールをそういう目で見てるってことか。なんとなく理解できたよ」

理解する必要のないのに、いつのまにか古川が共感してしまった。もう逃げ出せそうにない。

「あんた今回の合唱コンクールについては全く興味ないんじゃないのとか思ってたけど、あんたなりにクラスをまとめるきっかけにしたいと考えてはいたんだね。そういう視点からすると藤沖よりも、関崎が指揮の上手下手にかかわらず代表になるのは悪くないかもしれない。でもそうすると関崎どうする？ これ、責任重大だよ」

藤沖と古川が話している間、乙彦はすでに覚悟を決めていた。

自分が「一年A組のシンボル」かどうかは別として目立っていることは認めざるを得ない。だが、この位置はもしかしたらとてつもなく、乙彦の目指す方向に近いかもしれない。

——指揮者が藤沖で伴奏が立村、これだと多分曲の打ち合わせなどもそれほどうまくいくとも思えない。

夏休み前の面倒な一件が今だ影を落としている以上、対等に語り合うことは難しいだろう。できればこの三年間でふたりの間の余計な溝も埋めてもらいたいのだが、今すぐにとというのが早急すぎるというくらい乙彦もわかる。何よりも優先順位としては、乙彦が立村をクラスにしっかりなじませて、その上で少しずつクラスを整えていくことが必要だろう。まだ評議委員に任命される……たぶん……には間があるにせよ、だ。

——俺が指揮者になれば、立村と打ち合わせが増える。俺がうまくあいつをクラスに引きずり込んでいけば、少しは奴の居場所も広がるはずだ。それに立村の性格上伴奏を手抜きする奴とは思えない。互いに上手ではないかもしれないが、努力すれば報われる価値感をあいつも共有すると思う。それを考えればやはり。

乙彦は改めて藤沖に向き直った。右手を出した。

「藤沖、お前の気持ち受け取った。しっかりと、結果を出す。やってみる」

「関崎、そうか、引き受けてくれるか！」

両手で激しく握手する藤沖と、クラス内のなんとなくの拍手で、とりあえず最低限の合唱コンクール準備は整った。さてこれから練習だ。

3 指揮者練習（1）

指揮者選出されてからはどんどん物事が先に進んでいった。乙彦がぼんやりしている間に、古川がさっさと音楽の先生に特訓の話をつけてくれていたし、同じく指揮者をあてがわれる羽目となった静内からも、

「まあ、普通の音感があれば大丈夫じゃない、そんなにぴりぴりしなくても」

と励まされた。ひとつ気にかかるのは、C組の指揮者が先日面倒な出来事を巻き起こした難波というところだが、そのあたりもあえて気にしないようにしている。藤沖も、

「難波にはこれ以上余計なことを言わないよう、俺からちゃんと話をつけとくから安心しろ」

と何度目かの口利きを申し出られている。いや、乙彦も自分でなんとかできるとは思っているのだが、青大附属固有の面倒なつながりもあるのだろう。あえて任せておくことにした。乙彦も一学期を通じて、それなりに成長したというわけだ。

「一応ね、考えてるんだけど」

やっぱり一番物事を考えているのが古川こずえであることに変わりはない。

ちょこちょこことこまめに今後の予定を報告しにきてくれる。ありがたい。

「他のクラスは朝練とか組んでいるところもあるようだけど、あんたはそれ絶対無理だよねえ」

よく理解してくれている。そうなのだ。「みつわ書店」のバイトを休むということは月謝を捻出できないということにもつながる。

「そうだよ、わかってるよ。あ、あんたは引け目感じなくてもいいからね。他にも吹奏楽やら運動部やらで朝練ある部下はたくさんあるから。うちのクラスそういえばさ、結構活動的部活動やってる奴が多いんだなあって、今回の調査で実感してるよな」

てっきり自分の身の回りが帰宅部……立村しかり藤沖しかり片岡しかり……だったこともあって気づかなかったのだが、そう言われてみると頷ける。

「それに、帰宅部だって遊んでるわけじゃないんだよ。宇津木野さんや疋田さんはピアノに命かけてるし、他にもフルートやらギターやらいろいろ習ってる子もいるし」

「塾はいないのか」

「なぜかうちのクラス、いないねえ。これってすごく意外なんだけど。片岡が英語塾行ってるくらいなんだよねえ。隠してるのかもしれないけど」

古川は首をひねった後、すぐに話を戻した。

「とにかく、朝練はなしとなると次どうするかよねえ。放課後練習ももちろん考えているんだけどさ、よくよく考えるとこれも無理あるんだよ。それこそ部活やってる子たちにとって秋の新人戦とかコンクールとかあるじゃん。ほんとはそっちの追い込みでも大変そうなんだよね」

元陸上部員としては納得だ。クラスと部活を両立させるのはなかなか骨だ。生徒会も本当は両立させたかった中学時代の過去を思い出す。さすがに今はそれプラスバイトも加わっているから乙彦の強靱な体力があっても無理なような気がする。

「そうよね、あんたもわかってるよ。それとさ、もうひとつ現実的な問題があるんだけど」

こずえは指をばらばら動かす仕草をした。言いたいことはわかる。

「つまり、そこなのよ。立村にうちの弟が昔使ってたおんぼろキーボードを貸してやって練習させてるけど、ものになるにはもう少し時間かかりそうよねえ」

「あいつも言ってたが、そもそもピアノがないんだろう？」

立村が親の手ほどきでそれなりに弾けるということは、音楽の授業で証明されたと聞いている。だが、それなりに練習しないとまずいことも承知している。

「まあね、でも、練習する場所はそれなりに押さえているみたい。肥後先生も立村のやる気とピアノ事情は把握してるから、放課後音楽室のピアノ使っていていいって話になってるようだし、時々レッスンもしてやってるみたい。あいつがそんなこと言ってた」

「音楽の先生がか」

「そうね。吹奏楽の顧問だしそんな暇あるのかとつっこみたいけど、今の時期は合唱コンクールが中心みたいだから。それだけじゃなくて立村も親のコネでピアノの先生紹介してもらって一ヶ月だけ集中特訓するとか言ってた。本人のやる気だけはあるのよ」

「意外な話だな。古川、立村は中学時代一切ピアノについて話をしていなかったと聞いているが」

前から不思議に思ってきたことを尋ねた。こずえも頷いた。

「そうなんだよ。私もね、この前電話した時初めて聞いたよ。羽飛も美里も知らなかったってくらいなもの、ありゃ隠してたよね。びっくりしてさ、前のクラスの子たちも含めてピアノオーディションティータイムをうちでやったら、立村圧勝しちゃったからこれはいけると思ったんだよね。けど」

ここでまた、古川は言葉を継いだ。

「弾けることは弾けるけど、合唱に合わせられるかどうか、ということになると別問題だと思うんだ。ソロでは行ける。両手では二曲とも弾けるようになってる。うちのピアノ貸して練習させてるけど、それなりにはね。けどそれで歌えるかというところ微妙なところが正直あるんだよ。そこでねえ」

あらためて古川は乙彦の顔を見据えた。

「立村のピアノがある程度人前に出せるようにするまでにだいぶ時間がかかるわけよ。だからできるだけ細かいパート練習を中心にやってくつもりでのよね。バス、テノール、ソプラノ、アルト、それぞれ歌の練習に徹してもらって、関崎はそれを聞きながらリズムを取る訓練してもらって流れでどう？」

「悪くはないんだが、立村そんなに仕上がりに時間がかかりそうなのか」

古川の言葉は、立村に期待していいのか悪いのかが判断付き兼ねるところがある。

「間に合うとは思うよ。だからさ、弾けてるの。弾けてるんだけど人前に出せるレベルじゃないの。うーん難しいところなんだけどね。ここだけの話、うちのクラスの子たちの大半は、宇津木野さんと疋田さんのピアノ演奏を聴いちゃったのよ」

「どういうことだ」

意味が分からず問い返すと、古川は小声で、

「音楽の授業で立村が『エリーゼのために』弾いたって言ったでしょ」

「確かに」

「その時、肥後先生の考えで宇津木野さんと疋田さんも一緒に演奏させちゃったのよ。しかも、初見演奏だよ？ どういうことかわかる？ 楽譜を初めて見た状態ですらすらと演奏しちゃったんだよ。それってすごくない？」

ピアノの優れた技を持つものならば珍しくないことなんだろうが乙彦にはできそうにない。

「つまり、本当だったらこのレベルで演奏してもらえるはずだったのに、立村レベルの弾き方がまんしなくちゃあいけないんだという現実があるわけ。理由は理解しているし納得している、つまり、なんだけどやっぱり気持ちは違うよ」

女子はやっぱりわからないものだ。

「このままびこびこ弾きの状態で立村を練習に出すと、やはりあまり、うまくないんじゃないのって思うんだ。あいつの性格もちょっとしたことでいじけてしまうってのは私もわかってるし、ある程度自信ついてからにしてもらいたいんだよ。これ以上トラブル起こしたくないもんねえ」

——しかし、古川そこまで考えているのか。

感服するしかない。乙彦は言い返さずにそのまま流れを古川に任せることに決めた。

3 指揮者練習（2）

合唱コンクールにかこつけて忘れていたわけではないのだが、夏休みの宿題を中心とした実力テストの準備もしなくてはならない。指揮者の生徒を集めた講習会はそのあと行われる予定だと聞いている。とりあえずはしばらく勉強に専念する。もちろんバイトはそのまま続ける。

「今度こそ！」

静内が図書館で拳を振り上げる。もちろん他の生徒に見られないように。砕けた喋り方をするのは「外部三人組」……今だ名前そのままだが……の時のみだ。

「なんとしても、少しはましな点数取らなくちゃ！」

「静内、俺が聞いている限りでは入学時、かなりの高得点で入学したはずだが」

「最初だけ！ こんなふざけたテスト問題を日常から出す学校だなんて思っていないもんね」

名倉もこくこく頷いた。

「確かにそうだ。普段のほうがややこしい」

「なによ名倉なんてなんなの、もうD組ではトップクラスだって噂聞いたんだけど」

「実力だ」

当然のように言い放つ名倉を、乙彦はため息とともにたしなめた。

「冗談言いたいのもわからなくはないが、今の静内に言うのは危険だ、やめとけ」

「それはわかってる」

「なんなのもう、あんたち私を猛獣扱いしてるくせに！」

「そうふざけている暇あったら勉強だ。俺もそろそろ本気でやらないとまずい」

いつもの図書館最奥の机を分捕り勉強するのが常だった。

ある意味たまり場とも言う。

青大附高の図書館は大まかに分けて二部屋に分かれており、一部屋がカウンターすぐ傍の幅広テーブルが川の字になり並んでいる。本しかない学食カフェテリアのような雰囲気だ。さらに奥に進むと自習室も設置されていて、そこは先着順のみ。通常一年がその部屋を使うことはない。

テーブル部屋についてはおしゃべりしても咎められることがなく、先日の「元評議三羽鳥」たちの放言騒動もしかたなく受け入れられるもの。あまりお金を使いたくない外部三人組としては図書館がベストの環境である。

「ところで合唱コンクールだけどう？ 関崎が指揮者だと、これからの練習も一緒になるかもね」

「なるな。実力テストが終わってからは指揮者特訓だろう」

「それで気になるんだけど」

小声で静内が囁いた。

「C組の指揮者が」

「ああ、知ってる。難波のことだろう。気にするな」

えっと息を呑む静内。どっしりと構えている名倉。

「うちのクラスの誰かが、俺たちにはちょっかい出さないように言い含めてくれると聞いている」

「そういうんじゃないって。ちらっと聞いた話なんだけどね」

さらに静内は辺りの反応を伺いながら続けた。

「アニメ主題歌かエンディングか忘れたけど、それを自由曲にするんだって！」

「そうなのか。知らなかった。ちなみに名倉、お前のクラスは」

「『いざ立て戦人よ』だ」

これぞ合唱、と言わんばかりの選択肢だが、アニメ主題歌というのは頭になかった。

「もう私もびっくりしたよ。東堂くんがC組の友だちらしい人と話していたのたまたま聞いてもう、なんなのって」

「俺はあまりアニメに詳しくないが、それでも普通は考えない発想だとは思う」

少なくとも中学の合唱コンクールで選択するということはまずないだろう。やはりそこが青大附属だからなのか、そう言い切ってしまうといいのか、正直わからない。たださすが「元評議三羽鳥」の揃ったクラスではあると思う。

「俺が知る限り、C組には中学時代に委員会活動を中心に活躍した生徒が集中してると聞いている。そのあたりも影響あるんじゃないのか」

「そうだね。毎日、練習できない代わりに指揮者の男子が発声練習を休み時間に義務付けているって話をちらっと聞いてね。なんなのこの情熱って仰天したのよ」

「静内、お前のクラスはどうなんだ？」

気になるB組についても尋ねる。静内はノートの上に両手をばたんと載せた。

「やることはやってる。まあ発声練習まではしてないけどね。男子と女子のパートをそれなりに分けて、パート別練習してほしいんだけど、実力テストが終わらないとなかなかね。あまりやる気のない人とか、結構いるから面倒くさい」

「うちは古川がとにかく細かく割り振りしていて全部片付けているぞ。たぶんこの調子だとテスト後にすぐ練習だろう。ただ、伴奏の練習が追いついていないみたいだが」

「伴奏かあ」

静内がふっと空を見つめるようにして尋ねてきた。

「伴奏って、確か男子が担当するんだよね」

「そうだ。立村知ってるか？ 青大附中では元評議委員長だったというからかなり有名人だが」

名倉は首を振る。結構驚きだ。立村を知らないとは。

「知らない。名前もあまり聞いたことがない」

静内は少し考えて、

「この前、視聴覚教室で出入りしていた人でしょ。関崎言ってたじゃない。前期評議委員長だったけどいろいろ問題があって引きずり下ろされたって人という噂だけは聞いたことあるよ。英語だけは学年トップで、この前初めて落ちたとかそういうことも」

——いやあれは、いわゆる欠席による不戦負なんだが。

立村に対する情報の偏りが哀れすぎる。少し矯正しておく必要がある。友だちとしてこれは義務だろう。乙彦は合唱コンクールに絡めて立村の弁護に努めた。

「俺は水鳥中学で生徒会副会長をやっていてそのつながりでしょっちゅう青大附属に顔を出していた、ってことはかなり前に話したよな」

「知ってる」

相変わらず静内は短く答える。

「その時一番連絡を取り合っていたのが立村で、それからの付き合いだからかなり長い。人柄もなんとなくわかるが、結構いい奴だ。そんなこんなでA組でも顔を合わせているんだが、今回の合唱コンクールにおいていろいろ面倒な事情があってまともにピアノの弾ける奴が誰ひとり伴奏できないという事態に陥った」

「関崎全然その話、してないよ。続けて」

てっきりふたりにはぺらぺらしゃべったつもりだったのだが抜けていたのが意外だ。

「そこで手を挙げたのが立村だ。俺も知らなかったがあいつはピアノが弾けたらしい。ただ先生について習っているというよりも親の手ほどき程度なので今まで黙っていたようだが。普通だったら知らんぷりで通すところを、逆風の中引き受けるという覚悟を俺は買いたい。少なくとも俺が同じ立場だったら全力で逃げる。たとえリコーダーでも」

「ピアノ弾ける人なんだ。でも伴奏者の人見つかってよかったよ。指揮者ならまだ替えが効くけどピアノはね」

そのあと、いきなり静内は何かを思い出したかのようにじっと乙彦を見た。また小声で周囲を見渡しながら、

「女子たちから聞いた噂だから聞き流していたんだけど、確か彼は、うちのクラスの」

言い終わる前に静内が確認したがっている内容は理解した。もう周知の事実だし立村も隠していない。事実だけ伝えておいてもいいだろう。

「清坂と付き合いしていたことは事実だが今は別れた、と本人から聞いている。立村本人だが」

呆然としたまま静内はつぶやき、首を振った。

「信じられない。うちのクラスでもよくあのふたり話してるとこ見かけるけど、あの態度って別れた彼氏彼女のするものじゃないよ」

「静内、それでは通常どういう態度を取るべきなんだ？」

名倉の棒読みな問いに、静内は答えず両腕で自分の身体をかきいだき、ぶるると震える真似をした。

3 指揮者練習（3）

指揮者決定後の夜、立村本人から電話で連絡をもらった。クラス内で乙彦がいきなり引きずりだされた段階で立村の意見も本当は聞きたかったのだが、難波に引きずり出されてしまいそれっきりで気にはなっていたのだった。

まず乙彦に指揮者経験があるかどうかを確認した後、

——中学二年の時に合唱コンクールやったけど、あの時は俺でも出来たから多分大丈夫だよ。うちの学校、中学二年しか合唱コンクールに参加できない決まりになっていたんだ。だから俺たちも一回しか経験してない。ただ高校については今のところ全学年が参加する形式で、順位は先生たちとの協議で決まると聞いている」

青大附属特有のルールを初めとし、英語科ゆえのデメリット「ひとクラス二十一名」という点にも触れ、

——ただうちのクラスはもともとクラス人数が少ないからさ。一人欠けるだけでもかなりのデメリットにはなるような気がするよ。関崎も本当は歌いたかったと思うけど」

立村は自分も中学二年の時に指揮者を担当したことにも触れた。各クラスの評議委員は強制的にあてがわれた役割らしい。たいしたことないとは言っていた。

「そうか、俺でもなんとかなるか。

——なるなる、関崎なら大丈夫だよ」

「ありがとう、立村はやはり頼りになるな」

しばらく電話で立村から伴奏担当となるまでの大まかな展開および古川こずえ宅での練習に関して話をした。乙彦が知らなかっただけで前々から打ち合わせは行われていたようだ。ある程度反応が悪いことも覚悟していたのだろう。立村は乙彦を気遣うように、

——ただ、指揮者の関崎の負担になりそそれが申し訳ない。とにかく急いでメロディだけでも弾けるようにして、少しでも合わせられるようにするからさ。

それはお互い様だ。乙彦もこれから真剣に打ち込まねばならない。

「俺もなんとかして指揮者としての責任を果たすべくベストを尽くす。立村、よろしく頼む。ああ、そうだそれとだ言っておかねばならないことがある。

——何？

怪訝そうに受話器の向こうの立村が問う。機会がある事に伝えねばならないことだった。

「お前とこうやって協力しあえるようになるのが、俺は本当にうれしい。ありがとう。

——いや、そんなたいしたことしてないけど。

くぐもった声で立村ははにかむように答えた。

実力テストを間にはさみ、なんとか乙彦も夏休みに片付けた宿題を頭に叩き込んでなんとか乗り越えた。幸い試験内容は今までの中間・期末試験と異なり比較的楽にこなせるものだった。いわゆる「暗記物」でまかなえるもので、宿題通りの問題がばしばし出題されていた。普通に勉強していればそれなりの点数は取ることができるはずだった。なんとかここでクラス平均点以上の

、できれば学年で三分の一グループに食い込めればまだ安心できるのだが。

「どうだ、片岡、英語はどうだった？」

英語の試験で今回は締めとなる。答案回収後乙彦は、クラスで英語順位二番の片岡に問いかけてみた。

「うん、できた」

あまりにもわかりやすい返事だった。満面の笑みだ。

「どのくらいできたんだ」

「あっという間に終わった」

驚く。やはり片岡は英語順位二番だけあって、今回の試験内容だと特に苦しむこともなかったのだろう。ヒアリング含めて問題なかったということなのだろう。ちなみに乙彦は制限時間まるまるかけて長文の英作文と戦った。

「今度一番だったら今度は鍋パーティーやろうってことになってるんだ。関崎もまた来てくれるよね」

にこやかに片岡が話しかけてくる。相当夏休み直前の焼肉パーティーが楽しかったのだろう。

「そうだな。けど一番でなくてもやっちゃまずいのか」

つい突っ込んでしまう。どうも乙彦としては、片岡がやたらと英語順位一番にこだわるのに違和感を感じてしまう。あまりがつがつした気持ちがなさそうなおぼっちゃま顔しているくせに、英語順位だけは妙に神経質なところがある。どうせこだわるのなら学年順位を基準に考えろと思うのだが、片岡の場合は違うらしい。

「英語が一番だから価値あるんだよ！ この前だって一番になれたからあれだけおいしい焼肉食べられたし」

「片岡、お前、食べ物で価値を判断しすぎてないか」

何か片岡の発想は間違えているような気がする。もし今回の実力テストで立村に首位奪還されたらどうするつもりなんだろう。前回片岡が一番になったというのも、元をただせば立村が試験当日欠席したからであってある意味棚ぼただ。

——総合順位、トップ以外を狙う羽目になるとはなあ。

最近はこの現実にも慣れつつある。

試験が終わり、すぐに古川こずえが乙彦を呼び止めた。きた、こう来ると思っていた。

「関崎、これからどうするの」

「試験が終わったから、そろそろ指揮者練習が始まるだろう」

「あっそか。そうだよな」

すっかり忘れえちたという顔で古川は膝を打った。

「じゃあこれから音楽室行くんだ」

「そうだ。立村があれだけ本気を出しているのであれば、俺もそれなりの対応が必要だ」

「対応、ときたかあ。やる気のあるのはいいことよ。行ってらっしゃあい」

大げさに手を振り見送る。乙彦も片手で答えた。あのあと古川は時間のありそうな女子を集め

てかんたんなパート練習をピンポイントで行う予定なのだそうだ。

「関崎、おまたせ！」

いつもの図書館指定席で待ち合わせ、乙彦は静内とふたりで音楽室へと向かった。実力テスト後にすぐ、指揮者同士で肥後先生に挨拶する予定でいた。指揮者担当者でありながら乙彦も静内も芸術科目が書道と美術ときた。ほぼ初対面に近い。

「試験はどうだった」

「今回は、なんとかかなりそう」

「いわゆる『試験』だからな」

「あのパターンが基本になってくれれば私だってこんなに落ちこぼれないですんだのに！」

両手を上げて静内は頭を抱えた。

「普通の問題、普通の答え。普通の学校ってそれじゃない？」

「そうだな。今までののはあれなんだったんだ」

「意味なく長文の作文書かせたり評論させたり、あんなことして何わかるわけ？」

それでも出来は上々だったようで静内のしゃべり方は軽やかだった。

「青大附属からそのまま持ち上がりで推薦入学するのならともかく、他の大学受験するんだったら絶対に通用しないよ。この学校の勉強だと」

言われてみて気づいた。確かに、一般的な試験形式ではない。静内は小声で、

「実はね、この前の日曜、模擬試験受けに行ってみたんだよね。予備校主催のやつ」

「そんなのあるのか」

「あるある。そしたらもうすごく簡単で、冗談で書いた志望校が全部A判定だったもん。ただし」

「なんだその意味ありがちな笑いは」

「青潟大学を第五希望で登録したらなんって出たと思う？」

含み笑いしつつ、静内は囁いた。

「なんと『判定不可能』」

「なんでだ？ それマークシート式か？ 記述式か？」

「マークシートってところがみそね。つまり、青潟大学は推薦か、すべて長文絡みの記述式ばかりなんだって。だから、通常の模擬試験では判定ができないってわけ」

「なるほどなあ」

謎だ。謎過ぎる。乙彦はひとしきり手を打って笑いながら音楽室の前に立った。

かすかに片一方だけの「モルダウの流れ」らしきピアノの旋律が聞こえてきた。たどたどしく、同じ部分だけを何度もさらっているかのようなようだった。

3 指揮者練習（4）

乙彦の知る限り、「モルダウの流れ」という合唱曲は中学時代の教科書にも掲載されているくらいメジャーなものだったはずだ。他のクラスで選んだ可能性もある。だがしかし、まさか、いや可能性としては。

「誰だろうね」

乙彦が止める間もなく、静内が音楽室の扉に手をかけた。細く開いた。全く音を立てない。覗き込み、乙彦を招いて様子を伺わせた後、すぐに閉めた。

「今日は、やめたほうよさそうかもね」

「もっともだ」

互い、久々に短い言葉でのやり取りで結論を出した。音楽室奥のアップライトピアノの前には丸い体つきの肥後先生と、ピアノに向かい合う男子生徒のふたりが練習を続けている。肥後先生は弾いている生徒の隣りに腰掛けて、特に何も言わずに見守っているようだった。

「誰だか、わかったよね」

「ああ」

静内が促す通り、乙彦が最初に予想していた男子であることは確かだった。やはり練習に来ていたのかと思わず二度頷いた。

「やはりがんばってるんだな」

「何が」

「立村がだ」

しみじみつぶやく。どことなくほっとするところもある。

「この前言っただろ。あいつの家にはピアノがない。だからこうするしかないというわけだ」

「そうなんだ、それはきついね」

階段を降りた。一階の踊り場で静内は、

「それじゃ、これからどこか別のところで指揮者練習しようか」

切り出した。さっぱりした表情でひとつにまとめた髪を押さえた。

「本当は肥後先生に見てもらいたかったけど、たぶんあの調子だといつ終わるかわからないし」

「言いたいことはわかるが、あの状態だとしょうがないだろうな」

「うん、とりあえず外に行こうよ。どこか公園とかで」

「例の公園にでも行くか」

「例の公園」とは、乙彦の家から徒歩三分、静内の家からも十分程度で到着するという青潟市立郷土資料館前の公園を意味する。塩にぎりを食ったりレジャーシートを敷いてごろごろしたりとか、夏はほとんどあの公園で過ごしたものだ。

「残念ながら名倉がいないな」

「しょうがないよ。あいつも指揮者になればいいのに」

軽口叩きながら自転車でそのまま公園へと向かった。小学生の子どもたちが元気よく走り回っ

ているものの、さほどのさくもない。自転車を中に入れて乙彦はベンチに腰掛けた。知り合いは混じっていないようだった。

「それにしても、A組、あのままだと大変だね」

「何がだ？」

鞆を乙彦との間に差すように置き、静内は笑いかけた。無理しているようにも見える、ひきつり気味の笑いだった。

「失礼かもしれないんだけど、あのピアノ弾いていた人、かなり苦労しそうだよ」

「立村のことを言っているのか？」

まあ確かに、とは思う。自由曲が決まったのが間もないことを考えるとそれは仕方ないといえれば仕方ないことだ。片手練習から始まるのも当然だろう。たどたどしい音色と、肥後先生の静かな佇まいだけで判断してしまうのは危険だとも思うのだが。

「だが、立村は最終判断をするための音楽授業で、『エリーゼのために』を弾いたらしいが。それなりに弾くことができるとは聞いているんだ」

「仕上げた曲がそれなりに、ってことだよな」

さらりとつぶやくものの、静内は首を振った。

「どのくらい時間をかけて仕上げたのか、その曲だけなのか、考えないとまずくない？」

「考えたんだろうがとりあえずは決まってしまったというわけなんだが」

「どういう考えなんだろうね」

膝の上で何度か静内はげんこつをつくり叩いた。

「私だったらそんな賭けみたいなことはしないよ。関崎言ってたよね。確かピアノ弾ける生徒がふたりいて、何かの事情で担当できなくなったって。それで」

「いや、立村もやる気があって立候補したとも聞いている」

「それがまずいってことよ。私、思うんだけど、そのふたりのもともと弾ける人から納得行く理由を聞いているの」

「一応は聞いた。十月の学校祭と同じ時期に、学内演奏会があるらしいんだが、そちらを優先せざるを得ないという理由らしいんだ」

「学内演奏会かあ。なるほどね。でも妙だね。うちのクラスの伴奏担当さんもその演奏会に出るけどちゃんと担当してくれたよ」

「わからん。細かいことは全部古川が担当しているようなんだ」

ずっと立村のやる気回復が嬉しいあまり、詳しい事情については全く関心を持たずにいた。立村が本気で練習しているというのが伝わるだけで乙彦としては満足なのだが、どうも静内の見方は異なるらしい。いつまでたっても指揮者練習が始まらない。

「古川さんがすべて？」

「ああそうだ。一応、藤沖もそれなりに関わっているようだがあいつも応援団の設立準備でいろいろと忙しい。そうなる身軽な古川が全部仕切る形となる。立村の話も、もともと古川と中学時代から気心知れていたこともあってそんなこんなで決まったんだろう」

「いいのかなあ、そんな安易で」

「静内はよくないと思うのか」

自分のクラスのことをあまりよく思われてないのは面白くない反面、同じ外部生意識を比べてみたい気もする。静内とだとそのバランスとれた意見を聞き出せて面白い。ちょいちょいと促した。

「思うよ」

きっぱり答えた静内。唇をきゅっと引き締めた後、

「関崎からA組の話をしている限り、ほとんど古川さんひとりに仕切られているような感じがするよね。これ、私も評議だから感じてたんだけど、A組の場合古川さんの発言がものすごく大きくて下手したら一年の総意になっちゃいそうなことがたまにあるのよ。まあご存知のC組が反発すること多くって、結局はまるく収まるんだけど」

「C組は羽飛と轟か」

「そう。古川さんは羽飛くんと仲いいけど轟さんとはにらみ合っているみたいよ」

——いや古川は羽飛と。

外部生ゆえにそのあたりの事情は知らないのかもしれない。

「なんというかね、A組って英語科だし特殊なところがあるのかもしれないけれど、どうも古川さんのやりたい放題にされてしまっているような印象がね。私の思い過ごしかもしれないけど。それでさっきの伴奏の話にもどるけど」

静内はピアノをぱらぱら弾くように空で指を動かした。

「もし私がA組の評議だったとしたら、何はともあれあのレベルの弾き手で満足はしないと思うんだ。ちょこっと弾いたところを聞いただけで判断するのは失礼だと重々承知しているけど、当日まで間に合うかなってかなり心配なレベルだと思うんだ」

「まだ日も経ってないんだから仕方ないんじゃないのか」

「そういうレベルじゃないって。私ならもう少し、他のふたりを説得する。なぜ辞退せざるを得ないのか、その演奏会がそんなに重要なものなのか。合唱コンクールの伴奏がそんなに負担なのか。いろいろ教えてもらい、その上でクラスみんなに議論してもらおう。別の方法がないかどうか」

「その結果だろう、立村を選択したのは」

古川も自宅に立村を招いて判断したと話していた。

「でも、裏で決まったことよね？ 結果から言っちゃおうと」

「まあそうだが、最終的には音楽の授業で」

「だからその音楽の授業だけど、選択した人たちだけだよな？」

——確かに。

書道選択の乙彦は聞いていない。

「まとめると、どう考えてもクラス全員的意思として選んだ伴奏者でない彼を、古川さんの一方的な判断でそのまま推し進めていいの、って私は思う。もう決まったことだし、関崎も応援しているようだしひとさまのクラスに口出ししたくはないけど、少なくとも納得できないまま進むのはどうかと思うよ」

「要するに、立村が下手過ぎて伴奏者として耐えられないということだろ」

静内のまとめを乙彦はさらに端的に要約し、

「合唱の質を高めるためにはそこまでのこだわりも必要だろうが、俺はひとりの沈んでいた奴が本気で立ち上がろうとしてくれたことを、認めたいんだ。たぶん古川もそのつもりなんじゃないか？」

不毛な議論を終わりにした。

4 実力試験結果（1）

外部生のための試験問題と言える、まさに下克上。

夏休みの課題をメインとした実力試験の結果発表は試験終了の翌日に行われた。もっとも学年トータル順位は公表されないため詳細は噂話どまり、むしろ科目別優秀者発表の張り出しの方がやたらと盛り上がる。

「関崎、お前とうとう学年二十位に食い込んだと聞いたが」

藤沖に問われる。嘘はつきたくないなのでそのとおりと答える。

「今回に限っては山が気持ちいいくらい当たった。藤沖、お前はどうかだった」

「最悪だ。全くもって惨敗だ」

詳しい順位についてはあえて聞かないことにする。さて、うつむいて入ってくる片岡を秋の爽やかな空気漂う教室で迎え入れる。さぞ落ち込んでいるだろうということは、英語の科目別順位を確認した段階で理解している。

「どうした、元気ないな」

鈍感なのかわざとなのかわからないが、藤沖がどんと片岡の肩に手をかける。

「なんでもない」

「わかりやすい奴だ。理由正直に話してみろ」

「話したくない」

ここは乙彦が割って入ったほうがいだろう。身体を片岡に向ける格好で椅子をずらした。まだクラスの連中は揃っていない。

「片岡、二番だっただろ。すごいぞ」

「すごくないんだ」

またすねた口調で片岡は自分の席に座り英和辞書を取り出した。

「なんであんなとこ、間違っちゃったのかわかんないよ」

自分を責めているようにも聞こえる。今回の試験は夏休みの宿題が八割を占めていて、真面目にやっておけば八十点は堅い。乙彦もその辺りは計算済みだ。ただ残りの二割が青大附属お得意の英作文で、長文をだらだら書かされるといったものだった。さすがに乙彦も冷や汗かいたものの自分にしては久々の八十五点をキープできたのでまあいいとしよう。

「平均点高いよなあ」

藤沖は他人事のようにつぶやく。

「俺は見事に赤点すれすれだったが」

そろそろ朝のホームルームが始まる時間だ。教室に戻ってくる連中が足音をばたつかせている。ふと見やると立村がいつのまにか自席についている。いるかいらないかわからないくらいひっそりと座っている。

——英語科の王者首位奪還。

ふとそんな言葉が思い浮かんだ。全く表情も変えず静々と教科書を並べている様子には毎度お馴染みの指定席・英語学年トップでかつ満点といった成績を誇る奴に見えやしない。

——一体あいつはどういう頭でもって英語をトップで通せたんだろうな。俺にはわからん。

「今度こそ、絶対がんばるんだ」

片岡が小声で決意を口にしている。下手したら立村にも聞こえそうだ。

「絶対に、英語科トップ、もっかい取るんだ、それからまた焼肉パーティーやるんだ」

こいつは相当焼肉パーティーにこだわりがあるらしい。そういう問題じゃないような気がするが。

時間が進むにつれて今度は他クラスを含む順位情報も流れてくる。

「今回も学年トップは轟さんなんだって？」

「すごいよね。すいくんがいなくなってからあの子の天下じゃん！」

轟琴音、C組の女子評議委員が不動の首席なのはともかくとして、

「D組の名倉って人、知ってる？ 外部生らしいんだけど」

「関崎くんと一緒にいる人だよ。今回確か五番だったんじゃない？」

めでたくも名倉が「外部三人組」の筆頭として頭角を現していたり、

「B組の静内さんもすごいよ。理数系すべて成績優秀者に載ってる！」

あれだけ英語で悲鳴をあげていた静内すら主なる理数系科目ではそれなりの成績を収めている。乙彦も結局は学年二十位に食い込んだのだから、今回は外部生の大活躍と認めてもらってもいいんじゃないかと思う。

どちらにせよ、当の本人たちから自分たちの順位を報告受けるのではなく、噂で流れてくるといことはそれなりに注目されているということとイコールなのだろう。その他の生徒たちで乙彦がよく知る連中の情報は全く流れてきやしない。藤沖もかなり悲惨な成績だとかやけっぱちで叫んでいたが、本当のところはどうなのだろう。古川もいろいろ嗅ぎつけたがるところはあるけれども自分の成績についてはシークレットで通しているのはなぜなんだろう。

なんだかんだで授業も片付き、乙彦は帰りの週番のため職員室前へ集合した。

日にも寄るのだが週番は朝と帰りの二回行われる。朝は遅刻の違反カード切りといった明確な目的があるのだが、夕方のものについては存在価値が理解しがたいところがある。上級生たちは帰りの週番で型にはまった本日の反省を行った後、学年ごと自然とグループに分かれて学食や空き教室に集まっているいろいろ語り合っている様子だった。もっとも一年は今ひとつ団結力に欠けるようでさっさと解散してしまっている。

「まだ誰も来ていないのか」

規律委員の二年先輩男子に軽く目礼をし、もうひとりの当番である南雲を待っていた。一年C組ではとっくの昔に授業が終わっていたはずなのに、まだ来やしない。

「関崎、C組まだ終わってないのか」

「いえ、終わってます」

「じゃあなんであいつこんなに遅いんだ？ 重役出勤か？ 同伴出勤か？」

答えようがないので乙彦も一緒に首をひねる。他の女子たちがひそひそと、

「南雲くん遅すぎるよねえ」

とたいして責めるでもない口調でささやきあっている。どことなく甘い。

「しょうがない、じゃあさっさと始めるか。俺のクラスもこれから合唱コンクールの練習があるんだよ。時は金なり、さあいくぞ！」

しびれを切らした三年の先輩が週番ノートを開いてさっそく今日の反省を羅列しようとした時だった。

「あ、先輩、すまないっす、お待たせしました！」

職員室の入口から顔を出した爽やかな笑顔に、女子グループは微笑み男子先輩たちはぼかんとした顔でもって奴を迎えた。髪をかきあげつつ南雲は週番用の腕章を留めたまま、

「ちょっと今回の実力試験のことでお説教頂戴してまして、すみません」

「あのなあ、南雲お前今度は何やらかした」

笑いを浮かべつつも目は鋭く規律の先輩が問い詰める。

「実はですね、とうとうトータルで百番切っちゃったんできついお灸を据えられてしまったしいです、はい」

「百番って、おい、お前の学年百二十人いるかどうかってとこだろ。かなりまずくないか？」

先輩の鋭い質問もごもつともだ。乙彦からしたら今回の試験はめちゃくちゃ平均点が高いはずだ。

「まずいんですけどねえ。思い切り舐めてました」

「ったく、あのな、南雲、俺はお前の先輩として言っとくが頼むから中学時代のように成績がどっかの元評議委員長とどんぐりの背比べってのはやめてくれよな。あれは恥ずかしいぞ」

「先輩、悪かったっすね。中学時代はあまり先輩の葵の御紋にはならなかったようで」

へらへら、たいして機嫌を悪くするでもなく南雲は答えた。

4 実力試験結果（2）

帰りの週番が終わったところで乙彦も図書館に向かうつもりでいた。静内と待ち合わせて再度音楽室へ足を運びたかったのだが、

「関崎、いいところにいたぞ。悪いがちょっと残ってくれないか」

麻生先生にとっ捕まってしまった。二学期が始まってからまだ麻生先生とはしっかり話をしていない。別に担任の先生と熱く語り合いたいとも思わないのだが、実際話をしてみるとおもしろいのも確かなので素直に残ることにする。

「何か手伝うんですか」

「いや、今回は早いうちに伝えておかねばならないことがあったんでな。ちょっと来い来い」

手招きして麻生先生は乙彦を自分の席脇に呼んだ。空いている席を引っ張り出して座らせた。「あまり他の生徒の前だとな、おおっぴらに褒められないもんでここで改めてだ。関崎、本当によくやったな。夏休み本気でがんばったかいがあったってもんだ、えらいぞ、えらい！」

「あ、ありがとうございます。あの、それは実力試験のことですか」

念のために確認してみると、麻生先生は頷いて次に横に首を振った。

「それもあるが、何よりもなあ、自由研究、あれがすごい」

——やはりそっちな。

静内大先生大活躍の「青潟の石碑地図」。一部ではやっかみも受けている代物だがベストを尽くしたことには違いない。ありがたく感謝する。

「嬉しいです。ありがとうございます」

「きわめてシンプルなテーマを、関崎をはじめとするお仲間たちが一生懸命歩いて確認し、裏付けをとって熱心に仕上げた甲斐があったというものだぞ。どの先生からも大絶賛されているんだ。ただ資料を集めただけの寄せ集めではない。素晴らしく評価されてるぞ」

——静内が聞いたら舞い踊るな。

「うちの学校は頭が先走っている奴が多いから、やたらと背伸びしたテーマを選ぶ傾向がある。まあそれはそれで若さの特権と言えなくもないんだが、やっぱりつま先でひょこひょこ歩くのは危なっかしくも思えるわけなんだ。できたら良質で手の届くところからしっかり足固めする方がいいんでないかなあと、じいさんとしては思う」

——別に慎重にしているわけではないんだがな。

麻生先生は吹き出す汗を拭き取りながら続けた。

「その点、お前たちは一見、よくあるテーマを扱っているように見える。実際以前も同じような内容を選んだ生徒もいないことはないんだ。だが、実際足を運ぶだけではなくその場所の空気と、今まで気づけなかった部分を拾い上げて細かく確認していく作業はまだ誰も行っていなかったようなんだよ。紙媒体だけ集めてうんちく語るなら誰でもできる。お前たちはそれぞれ、直接様々な人たちと会って話をし、その上で懸命に考え構成した。その差は口で言うとおっさりしているが、天と地の差なんだ」

「あの、僕はそれなりにやりましたが、実際はB組の静内さんとD組の名倉くんが」

この調子だと乙彦ひとりで仕上げたものだと思われそうなので、後々のことも考えて説明だけしてくことにした。麻生先生もにやにやしながら乙彦の肩を叩き、

「わかってるぞ。お前ら三人がそれぞれ力を合わせて作り上げたということはよくわかる。特に静内、彼女は史跡に関心があるのかなあ」

「実際は静内さんがすべて仕切ったようなものです」

「そうか、とすると歴史に興味があるのかなあ。なかなか面白い奴だなあ」

——そのくせ社会の成績はあまりよくないみたいだが。

しばらく自由研究の裏話を求められいくつか語っていて一段落した時に、

「そうだ、大切なことを忘れていたんだが」

麻生先生が膝を叩いた。

「関崎、指揮者になる準備は進んでいるか」

「まだこれからです。これから音楽室に行って肥後先生に教えてもらうつもりです」

「さっそく特訓しに行くというわけか。お前がそうしないわけねえとは思っていたんだがな。クラスの連中はどうだ、盛り上がってるか？ 俺が見た限りだといまひとつ乗りがよくないようなんだが、どう思う？」

そんな悲観するような盛り上がりでもないと思うのだが、

「古川さんが一生懸命クラスをまとめています。まだ気合が入っていないだけで、時間が経てばもっとその気になるのではないのでしょうか」

「そう思いたいんだがなあ。まあ今回は関崎が指揮者に選ばれたおかげで俺も正直ほっとしているんだ。全く古川も思わぬ爆弾を仕込むからなあ、あのお嬢は」

——爆弾？ 立村のことか？

もともと麻生先生は立村に厳しく当たりつつも温かい眼差しを投げていたはずだ。立村本人がそれを受け止めているかは別として。

「立村の伴奏ののことであれば、俺は心配してません」

「お前はあいつをかばうなあ」

本当のことを言っておいたほうがいだろう。続けた。

「立村は本気でピアノの練習に取り掛かっていますし、肥後先生のところへも通って練習しているようです。現場、見ました」

「現場ときたか」

「まだたどたどしい弾き方ですが、立村の性格として中途半端な出来で終わらせるとは思えません」

先日の静内発言が正直気にならないわけではない。第三者からしたら聴くに耐えられないレベルなのだろう。実際どこまで立村が上達するかはわからない。だが、周囲から不安視されたままでいれば、またあいつはからの中に潜り込んでしまうような気がする。

「それに、伴奏に立候補すると決めたのは立村本人だと聞いてます。まさかあいつが自分からクラスのための活動に参加する気になるなんて、正直想像外でした。もちろん俺も少しずつ立村を

引きずり込むように心がけるつもりでしたがまさか本人から」

「だろう？ 俺も同じだ。なに考えてあいつ伴奏なんか立候補したのかが、今だにすっと落ちてこないんだ。そうだよなあ。クラスの連中もおんなじはずだ」

「だからこそ、このチャンスを逃してはならないんだと思います」

乙彦は力強く繰り返した。

「俺、いや僕はここまで立村が本気を出した以上それを受けて立つ覚悟でいます。これから先、立村がもし伴奏を完璧にやり遂げたとしたら、それだけでも十分な成功体験になると思いますし、周りの立村を見る視線も少しは落ち着きそうな気がします」

「そうだな。関崎がそこまで覚悟をしているんだったら俺は言うことない。とことんひっぱれ。担任としても男としてもここは腹据えて応援しねばな。ただ」

麻生先生はふっと言葉を留めた、続けた。

「だが、立村にまたわけわからないことを言われたりされたりして振り回されたら、関崎、お前はそこまで付き合う必要ない。ある程度面倒になったら見切れ。友だちを捨てるというわけじゃない。他の奴なりもしくは俺なんかの力を借りろ。正直俺も立村が何を考えているのかつかみかねているところもあるんだ。頭寄せ合って文殊の知恵を出し合うために担任なりクラスメートってもんはいるんだからな。ひとりであいつを支えようなんて思わないことだ」

「でもそれだと」

言い返そうとする乙彦に、麻生先生は念押しした。

「宿泊研修でもあいつに言っておいたが、俺は三年間かけて立村と話をする覚悟なんだ。長期戦だぞ。まずはあせるな、関崎」

——三年間。

もう半年消化しているというのに。そんなのんびりしてられない。

4 実力試験結果（3）

中学時代であれば、試験の後はたいてい家族で学年トップ祝いとしてとんかつをご馳走してもらったものだった。三兄弟で成績に関しては乙彦に叶わなかった兄弟も、

「あれだけうめえとんかつ食えるのなら、おとひっちゃんにがんばってもらったほうがいい」という食い意地の張った結論に達し、今では素直に応援してくれている。

高校に入ってから残念ながら悲惨な結果が続いているためせつかくのとんかつもご無沙汰していたのだが、そろそろ要求してもよい順番なのではないだろうか。

——まだ無理だ。

乙彦は頭を振ってその考えを振り払った。

——やはりトップ取らないとな。

次の日乙彦が朝のバイトを済ませて学校に向かうと、後ろから、

「関崎、おはよ」

声をかけられた。朝、静内および名倉に呼び止められるのは珍しい。一緒に帰ることは多いのだが。風のぬるくなった中のんびりと歩く。遅刻の心配なしの時間だ。

「おはよう、お前らふたりで来てるのか？」

「そういうわけじゃないけどたまたまね」

静内はいつもの黒ゴムひとまとめ髪スタイルのまま、白いブラウスに束をたらしした。

「ちょっと早めに情報収集しとかないとまずいってことがあるのよね。めんどくさい」

「なんだそれは」

「関崎がいるんだ、ちょうどいい。話せ、静内」

名倉も事情をすでに把握していたらしい。ふたりとも口には出さないが実はしょっちゅうコンビで行動していたんじゃないだろうか。少しちりちりとしたものを感じる。

「そうだね。どうせばれることだし」

腕時計を覗き込むと八時五分前だ。まだ余裕もって話ができそうだ。

「あまり他の人に聞かれないことなんだよね」

「それならあそこ行くか」

生徒玄関脇の人気少ない場所に向かった。この前古川こずえと語らった場所でもある。

「実はね、うちの担任のことで少しトラブルがあったみたいなんだ」

離れた場所で合唱の朝練習をしている生徒たちが固まっている。聞かれる心配はなさそうだ。

「B組の担任？ 野々村先生か」

「そう。私も昨日の夜に同じクラスの子から電話もらって話聞いただけなんだけど。正直私、信じられない内容なんだよね」

クラス担任でもなく、学科ももってもらっていない野々村先生に関しては全く見当がつかない。話を促した。

「具体的には何なんだ」

「それが、関崎の友だちとうちの担任が、なんか妙なことであったらいいんだって」

「俺の友だち、誰だそれ」

頭にいろいろ浮かべてみる。青大附高の奴らであることは確かだろう。

「妙なことは、具体的に」

「いちゃついていたらしいんだって。私だってもうちょっと具体的な事情確認したいんだけど、どうもその子もまた聞きしたようなので関崎のいう『具体的』はわからないみたいだよ」

「俺の知っている奴というと、そいつの名前はわかるだろう」

「大丈夫。ほら、今回の試験で英語トップをとってた人」

「立村か？」

反射的に問い返すと、名倉が大きく頷いた。

「あの英語の問題で満点獲るといのはすごい奴だ」

そういう問題ではないとは思うのだが。まずは乙彦の「友だち」が確定した。

だがしかし。野々村先生と立村が「いちゃついていた」とはどういうことなのか。そもそも「いちゃつく」とはどういう場面で使う言葉なのか。

乙彦なりに舞台を把握する必要がある。静内にさらなる「具体性」を求めることにした。

「静内、俺もなんでそういう話になっているのかがまったく見当つかないんだ。立村は確かに俺にとっていい友だちだが、人前でその、非常識なことをする奴ではない」

断言しきれないところが難しいが、少なくとも「いちゃつき」はないだろう。

「だが静内も、何か事情を把握しているんじゃないかとは思うのだが」

「また聞きのまた聞きでよければ説明するよ」

静内は小声でふたりを自分の傍に集めた。すっとぼけた顔で名倉も近づく。事情知らないのは乙彦だけというのが少々面白くない。

「昨日の放課後、一年C組の人たちが音楽室で合唱コンクールの練習してたんだって。そしたらいきなりうちの担任と関崎の友だちとが現れてピアノの練習をし始めたらしいんだよね。伴奏の練習」

「前にも話したが立村の家にはピアノがないんだ。音楽室でピアノ練習することに違和感あるか？」

静内も立村のさみだれな音色を聴いているはずだ。あの、あぶなっかしい練習光景を考えれば、立村が一刻も早く稽古に励みたい気持ちはわからなくもない。

「でもなんでうちの担任？ 謎はそこよ」

「お前のところの先生は、ピアノ弾けるのか」

名倉が乙彦の知りたいことを確認してくれた。

「どうなんだろう。聞いたことないけど。話を聞いた限りではかなり熱心に関崎の友だちに教えていたみたいだしそれなりには弾けるのかもね」

「それならあいつも必死だから教えてもらおうとしていたんじゃないのか。それほど変だとも思

わないが。立村は根っからの真面目人間だから、誰からでも上手になる方法を教えてもらいたいんじゃないのか」

「私が聞いているのはあくまでも伝聞。事実じゃないから。とにかく一生懸命練習を見てやってたらしいんだけど、突然これから自分で稽古をつけたいとか言い出したらしいの」

「稽古って、まさか立村に、ピアノをか」

「そう」

「野々村先生とは、俺の知る限り国語の先生だったと思ったが」

「その通り」

名倉が図太い声でまとめた。

「つまり、先生は何らかの目的があって関崎の同級生に密着しようとしているということだ」

「何らかの目的ってなんだ？ 名倉、俺にはあまりにも高度な発想すぎてついていけない」

「単純明快じゃない。関崎、要するにね、うちの担任は関崎の友だちに入れあげているってこと。十歳も年下の男子にそんなこと思うなんて想像できないけど、第三者からみたらそう見えちゃったようよ。それで、私のところに事件勃発の電話がクラスメートから殺到と、そういうわけ」

静内は鞆を持ったまま大きく振った。

——立村が、B組の担任と一緒に「いちゃついていた」？

いや、絶対にありえない。いろいろな方向から可能性を掘り下げてみたけれどもやはり結論は同じだ。たまたま音楽室でピアノの弾き方をレクチャーしてもらっただけであって、それ以上の何があるのだろう。静内の話は尾ひれ瀬ひれがついた状態で届いているものだから、本人もどこからどこまでが本当のことだかわかっていないだろう。余計な動詞「いちゃつく」はさっさと外して考えるべきである。

「静内、俺には何度考えても噂の拡大解釈にしか思えない。だがなんでだ？ 今日お前がその噂をもとに早く学校に来ることになったのは、その理由を知りたい」

「そう来ると思った」

待ってましたとばかりに名倉も手を打った。静内は満足げに頬を緩め、

「一応私は一年B組の評議ってことになっているし、その情報が妙な形で広まった場合クラスメートたちの動揺を沈める義務があるわけなの。私は知ったことじゃないけど、この学校ではそうしなくちゃいけないらしいのよ。めんどくさい」

一瞬、古川こずえの横顔がよぎった。ちょこまか走り回っている姿は、まさに青大附高の女子評議委員の鏡なのかもしれない。

「さらにうちの担任は悪い人じゃないんだけど世間知らずのお嬢様っぽいところがあるのよ。好き嫌いがはっきりしすぎているというか、妙に潔癖なところとか。たぶん私が睨むに、えこひいきの現場を押しえられただけだと思うのよ」

「えこひいきの現場か」

乙彦より前に名倉がつぶやく。

「よくあることよ。なんとなく気に入った生徒をえこひいきしちゃうだけ。詳しい事情はこれ

から集めるけど、そんな色恋沙汰なんかじゃなくてただの『えこひいき』。それ言うなら私もされたくないけどされちゃってる。他にも犠牲者結構いると思うんだ」

「なるほどな。いちゃついているのではなくて、生徒として単純にひいきしたかっただけなのに、妙な色眼鏡で見られてしまったということだな」

静内の観点は鋭い。自由研究の時だけに用いられる視点ではない。こいつの性格を夏休みじっくり読み取った乙彦としてはまさに納得だ。

「まあ、女子はひいきって嫌がるけど男子はそれほどでもないしね。関崎に話しておけばそのお友だちの立場が不安定になってもきっとなんかうまくしてくれるかなと思って、実はあとで相談しようって決めてたんだよね。名倉？」

無言で腕を組み名倉は頷いた。

「関崎もクラスメートのごたごたはノーサンキューだろうし。それに、いろいろ、その人とはあるみたいだし。クラスの評議委員が揉め事を片付けなくちゃいけないんだったら関崎にも相談するのも仕事のうちだし」

「いい判断だ」

時計を覗き込む。そろそろ八時十五分を回ろうとしている。玄関に入ろう。乙彦はちらと鞆の中の週番用腕章をひらひらさせた。規律委員の義務だ。

「話してもらえて助かった。俺もA組でそれなりの準備ができる」

「役立ったってこと？」

「そういうことだ。あいつはもともと誤解されやすいところがあるから、それを早い段階で食い止めるためにまずは事実関係を確認したいんだ」

静内と名倉が顔を見合わせてにやっと笑っている姿を眺めつつ、乙彦は上履きに履き替えた。

やはりこういう場合は本人に確認するに限る。しかしそれにしても、

——あいつら、ふたりで何を話していたんだ？ 相談するのも一緒か？

外部三人組のくせに、外されているなんてたまったもんじゃない。

4 実力試験結果（4）

一年A組の教室はさぞや噂話で持ちきりだろうと覚悟していたのだが、入ってみると意外にもみな静かだった。むしろ乙彦が外部三人組とうろろうしていたことの方を男子連中にからかわれたくらいだし、それは毎日のことでもあるのであっさり流せる内容のものだった。当の本人立村も、機嫌よく英語の宿題の模範回答を一部男子……乙彦は含まれていない……に手写しさせていたりなんなりと、いたって普通に過ごしている。

どこが「B組の女性担任教師といちゃついている」奴なんだろうか。

やはりあれは、静内に口伝えしたB組女子たちの大げさな物言いに違いない。

——たいしたことなさそうだ。

静内にはそう伝えておいた方がよさそうだ。そう判断した。

合唱コンクールの練習予定が朝のホームルームで、古川こずえによって発表された。

例によって藤沖の出番はない。麻生先生が苦笑いする中で、

「とりあえず、本格的に練習するのは九月から！ このところは譲れないんでみんな八月あとちょびっとしかないけどやらなくちゃいけないことがあったら片付けておいてね。それとピアノ伴奏については、立村くんにもうちょっと頑張ってもらう必要があるんでちょっと合わせるのには時間がかかりそうです。先走り汁出さないようにってとこ。それと」

「古川、朝からまあ」

呆れたようにつぶやく麻生先生も、あえて古川を止めることはしない。

「それと指揮練習も、関崎くんがご存知の通りのバイタリティでしっかりやり遂げてくれるでしょう！ てなことに関崎あんたもちゃんと自己発電とかしっかりやっついてちょうだいよ。勝負は九月、絶対九月、何がなんでも九月！」

「古川、もう少しなあ、女の子らしくしてほしいんだがまあいいか。とにかく一年A組は九月以降に練習を本格化させるってことでまとまったってことでいいな」

誰も何も言わない。反対の声が上がらないのは賛成ということだ。

——指揮者練習も来月からでいいのか？ 本当に。

静内がやたらとやる気出しているのを知るだけに、A組側ののんびりモードが気にならなくもないのだが。

「もうひとつ。一応他のクラスの情報も入ってきていると思うんだけど、中にはもう音楽室を占拠してハーモニーだかをがなっている奴らがいるとも聞いてます。みなやる気に満ち溢れているクラスも、どことは言わないけどC組とか。そういうクラスもあることはありますが、いやあねえ、そればかりはねえ、うちもそれなりのリズムってものがあるしね。あまり気にしないで先に行きましょ。今のうちにしておくことはパートわけと、できれば休み時間にちょこちょこっと練習っぽく歌うとかその程度。放課後の練習はなかなか大変だと思うので、そのやり方については私も肥後先生に相談して考えます。けど、せっかくの機会だししっかり盛り上がっちゃおう！」

」

心地よい拍手が鳴り響いた。男女問わず、古川のまともは裏表なくしみとおる。

「こんなんで大丈夫か？ まあ伴奏を間に合わせるのが先決だしな。とりあえずは古川女史に任せるとするか。それと関崎、お前の麗しき歌声を指揮者就任によって聞くことができないのは残念だが、なんらかの形でコンサートでもやるか」

わかる連中……古川と藤沖……が笑いこけている。今ひとつぴんとこない奴らがげげんな顔して見上げている。片岡が不思議そうな顔をして、

「今度、カラオケの機械、用意したほういい？」

問いかけてきた。何に用意したいんだろうかわからない。

とりあえずはっきりしたのは、まだ指揮者練習を行うにしても間があるということと、放課後練習がさほどない以上普通に過ごせるという点だった。静内の話だとこれからは合唱コンクールのスパルタ特訓が始まりそうな気配があるし、当然指揮者にも負担がくるようなので乙彦も正直面倒だと思わなくもなかったのだが。

何事もなく一日が過ぎ行く中でひとり古川だけがこまこまと走り回っているのが目立つ。

「藤沖、しつこいようだが合唱コンクールについては古川に任せっきりで本当にいいのか」

「あいつはひとりで動いている方が好きなんだそうだ。かえって俺が手出しする方が面倒になる。特に女子の細かい事情については下手に男子が怒鳴るより効率的だ」

単純に手抜きのような気がしなくもない。かといって乙彦が藤沖にかわって評議の真似事をする気もない。藤沖は両腕を組んだまま乙彦に、

「関崎、お前これから先のことだが」

おもむろに水を向けた。他の奴はいない。古川が数人女子を引き連れて廊下へ向かうのを見送ったのみ。教室には乙彦と藤崎のみだった。

「片岡の家で食った時にも話したが、後期のクラス委員改選に向けてお前に頼んだこと覚えているか」

——評議委員か。

藤沖の後釜となって一年A組評議を引き受ける件については、すでに了解済みだ。余計なことを言わずに頷くと、

「今でも俺はお前が評議を任せるに足る人物だと信じているし、だからこそいきなり指揮者を押し付けてしまったわけなんだが」

「口はぼったい言い方するな。はっきり言えよ」

「実は、現在、状況が流動化している」

藤沖は周囲を再度見渡した。しつこいようだが誰もいない放課後だ。窓だけが細く開いている。夏風がすり抜けるちょうど良い空気が漂っている。

「夏休み前の段階ではどちらにせよ俺が応援団に力を注ぎ、その上で空いたポストをお前に明け渡しといった形で進めるつもりだったし、麻生先生からも許可をもらっている」

「あの時の焼肉はうまかった」

「同感だ」

片岡に英語科トップを獲ってもらってもう一度食べたい気持ちはある。

「だが、他クラスの状況を鑑みるとどうもお前に向かう風が怪しい。少し気になる噂を耳にしたので俺なりに調査をかけてみたんだが」

なんだか嫌な予感がする。「関崎の教育係」を自認する藤沖らしいやり口でもある。

「まさかとは思うが、自由研究の話か」

「お前も気づいていたとはな」

「昨日、やたらと麻生先生に絶賛された。だが俺の手柄とは言えない。静内の趣味が暴走した結果に乗っかっただけだ」

素直に思ったことを告げる。藤沖は机を揺らして笑いこけた。

「さすが外部三人組の紅一点、只者じゃないな。評議委員会ではさほど目立つこともしないが」

「史跡関係に異常なほど詳しいんだ。せっかくそういう素養を持つ相手がいるのなら、学ぶのも悪くはないしなかなか面白かった」

「お前ら三人組が楽しんでいるところに水を差すようで悪いんだが、学校側がお前らを大絶賛すればするほど、一部にひずみが出てきているのも確かだ。そのことは、気づいているだろうな」

乙彦は頷いた。たぶん、あいつらのことだろう。

「天羽や難波のことか。それなら思い当たる節がある」

「やはりそうか」

納得したのか藤沖は続けた。

「図書館で難波が自分らの自由研究をくさされたとのことで八つ当たりし、その際にお前ら外部三人組の作品を槍玉に上げて喚き散らしたという話を耳にしたんだ。俺も、三人組の中核がお前だということを知らないわけがないから、直接あいつに談判しにいった」

「藤沖の男気はありがたいが、俺も天羽から詳細を聞いて納得したので後腐れはない」

「いや、そのことだけではない。俺と難波とは中学時代同じクラスだったこともあって、それなりに話も通じる。もちろんいろいろな面子の問題もあるだろうしあいつからお前に詫びが入るとは考えにくいが、関崎にこれ以上ちょっかいを出さないようにしてほしいと釘を刺しておいた」

——余計なことをしやがって、とは言えないか。

とりあえずこちらでは礼を言う必要があるだろう。

「気遣わせたようで悪かった」

「礼を言うには及ばない。だが、俺なりに調査をかけてみて気づいたんだが、関崎は想像以上に内部の叩き上げ連中を脅かしている。一学期のうちはそれでもお客さん扱いされていてせいぜいがガキの悪口程度で収まっていたが、今回の自由研究結果や実力試験の順位なども踏まえて考えると、ここから先、関崎の歩む道はいばらなんではないかと思えなくもない」

大げさな言い方だ。乙彦からしたらいばらの道は園芸バサミとのこぎり持参で切り開くものだ。一時期より収まったとは言え、藤沖の過保護対策は相変わらずのようだった。

「合唱コンクールでなぜ音痴の難波が指揮者に納まったのかが謎でならなかったのだが、そちらはもともと音楽委員だったということで納得した。しかし、噂に聞く通りC組の合唱コンクールに向かう姿勢は普通のものではないらしい。評議の羽飛や轟から聞く限りだと自分の全エネルギー

一を賭けて勝負に出ているといった感じらしい。かつての同級生である俺には信じがたいことなんだが。どちらにしてもこれから先、関崎に対しての態度が過激になることは否めない」

「藤沖安心してくれ、俺はそのくらいのことは十分経験している。無駄な戦いをする気もない」

「いや、それはわかっている。関崎なら余裕でC組連中をひとまとめで片付けられるだろう。だが、ひとつ気になるのは、仮にこのまま評議にお前が入った場合、クラスをまとめることは問題ないにしてもまた余計な茶々を入れてくる連中の対応に振り回されるだけなんじゃないか」

「どうなるか俺には想像つかないが、とりあえずはなんとかなるような気がする」

「それならいいんだが、関崎」

藤沖はほとんど乙彦の言うことを聞き流したような顔で、拳を机の上に静かにおいた。

「場合によっては、ひとつ飛び越えて勝負することも念頭においてもらえないか」

「なんだそれは」

問い返すと藤沖は、もうひとつの拳も机においた。両拳で軽く机を叩いた。

「生徒会出馬も、候補のひとつとして考えてもらえないか」

4 実力試験結果（5）

——生徒会出馬？

予想外の提案だった。口元を緩めて藤沖が話を進める。

「そう驚くな。俺も二年以降は生徒会役員もお前に合っていると思っていた。だがさすがに下準備が必要だろうしいきなりはどうだともな」

「生徒会役員と言われても、青大附高でそもそも生徒会の存在感はあまりないようだが」

せいぜい在校生との顔合わせイベントやさまざまな行事の節目には立ち会っているらしいがそれ以上の接点がない。

「いや、表立ってということはないが、生徒会の場合は主に渉外としての活動を行っていると聞いている。俺も元青大附中の生徒会長をやっていた身分だけにある程度のことは聞いている」

確かに、藤沖はこれでも元生徒会長だったのだ。忘れがちだがそうだった。

「附中が生徒会役員よりも委員会優先主義だったところもあるが、附高は全く別の組織として委員会と切り離すことによって独自性を出しているようだ。委員会は学内のイベントを中心に切り盛りし、そこで得たものを生徒会が外部に持ち出すといった形をだ。ある意味新しい形での生き残りを図っているに見える」

よくわからないが学校内に視線を向けていないことだけは確かのようなのだ。

「俺はそれが正しいかどうかはわからん。だがどちらにしても、附中のような先生がたの御用機関でもないしかとって委員会と不要なバトルを繰り返す場所でもなさそうだ。外へ、外へと向かう姿勢はまた面白いんじゃないかと思う」

「ならお前、なんで生徒会に出ようとしない？」

乙彦も尋ねてみたが、すぐに愚問だと気づいた。当たり前のことだ。

「理由は関崎も十分理解しているはずだろうし繰り返さないぞ」

「悪かった」

「俺がなぜ、いきなり方向転換したのかその理由を聞きたいんだろう」

藤沖はどっかりと座り直した。乙彦を手で招いた。

「あまりでかい声で話せる内容ではない」

「現在、一年の派閥らしきものはC組に集結している。一番勢力を保っているのが元評議三羽鳥と呼ばれる天羽・難波・更科の三人だ。曰くつきのあいつらだな」

乙彦は頷いた。なんとなくそれは感じていた。

「青大附中の評議といえば権力の象徴みたいなものだった。まあひとり例外もいるがそれはあとで説明する。どちらにせよあの三人を分割せずC組に押し込んだ学校側の対処が実はまずってるんじゃないかねえか、というのが俺の憶測だ」

「かえって団結してしまったということか」

「そういうことになる。学校側が恐れたのは評議三人がばらばらのクラスに振り分けられること

により自動的に評議委員に押し上げられてしまうことだろう。だが、よりによってあのC組だ。中には影のリーダーたる南雲や羽飛もいる。ついでに女子では轟もいる。なぜあそこまでめぼしいやつらをC組にまとめてしまったのか。まずはそんなところになる」

「結構露骨なやり方だとは思う」

藤沖の観察力は鋭い。だが少し思い込みが激しすぎるような気もする。

「あの三人がなぜか、外部の生徒、厳密にいうと関崎に対してあれだけ敵愾心を持っているのか。お前を見ていればそれはよくわかる。余裕で内部生追い抜かれる恐怖があるんだろう。成績もそりゃあ最初はついていけないところもあったかもしれないがあっという間に今は追いついている。さらに一学期におけるさまざまな活躍ぶり、今回はさらに合唱コンクールでの指揮者ときた。これだけ目立ちかつ、クラスでも不要なジェラシーを背負っていない奴、そうそういない」

「褒められるのはありがたいのだが」

乙彦の言葉をすぐに遮る藤沖。

「もっとも、タイマン勝負をかけるとか姑息ないじめをすることかそういう奴らではない。俺も内部生の一員として言うておくが、人間として腐ってはいないと思う。だが、関崎が今後同じ土俵に上がってきたりしたら、またいろいろと面倒なことになるのは否めない」

「今のところ、規律委員ではさほど面倒なことはない」

「お前がそう思っているだけで、裏ではいろいろとあるぞ。たとえば南雲とか清坂とか」

またふふと、笑う。

「規律委員の状況も俺なりに様子うかがいしているが、これから先は南雲が本気でやりたいことを迫ってくるだろう。なにせあいつも附中時代は伝説をこさえてきた奴だ。また『青大附高ファッションブック』やら『裏の手芸部』とか『演劇部直轄衣装係』とかいろいろと仕事を請け負ってくるに違いない」

「そんなことできるのか？」

今のところ乙彦が規律委員としてしていることは週番と違反カード切りくらいだが。

「一年のうちはまだお客さんだ。これからが勝負時だろう。それも、後期の委員入れ替えがだ。十一月だな。そうなると南雲も黙っちゃいないだろう。俺なりに見越して、その上で関崎を評議委員に押し込むつもりだったのだが」

もう一度首をひねる。

「そうすると別の問題が発生する。お前はこの前、片岡家で焼肉食いながら規律の後釜に立村を置きたいと話していただろう？」

「ああそうだ」

「俺も、あいつとはいろいろあったとはいえ、腐っても評議委員長を勤めた男を評価していないわけではない」

意外にも藤沖は立村を評価するような言葉を発した。

「立場上あいつを褒めるのは悔しいが、第三者的に見た場合立村の持つ妙なカリスマ性は馬鹿にできたもんじゃない。男子限定で言えば面倒見はよいし手ごわい後輩を結構手懐けるのが上手

いし、なにせな」

言葉を切った。乙彦も通じた。狐顔のあいつが浮かんだ。

「言いたいことはなんとなく理解できる」

「女子連中は立村を昼行灯扱いしているが、よくよく観察するとピンポイントでもてるなあいつ」

——そうなのか？

そちら系統では評価していなかったのが意外な気持ちもあるが頷いておく。

「まあいい。立村がもし規律委員に潜り込んだ場合、恐らくだが青大附高の権力図は変わるだろう。しかもクラス替えのない英語科だ。学校側はクラス替えでいろいろと流動化を迫ってくるだろうが英語科だけは治外法権。いつのまにか立村の方に力が集まってきてしまいおのちのち関崎が苦勞する羽目になるのではというのが、ある」

「俺と立村とは比較的よい関係を保っていると思うし、今後もそのままでありたいが」

喧嘩したいとは思わない。むしろ立村を復活させてやりたいと切に願っている。いや、できればよい友人として永い付き合いをしていきたい。いい奴だし。

「お前らが個人的にそう思うのなら俺は何も口を出さない。ただ俺が言いたいことというのは、立村に付随する他の連中がいろいろと関崎に面倒をふっかけてくるのではという危険性だ」

——そういうことか。

ようやく藤沖の言いたいことが読めた。

「つまり、立村と元評議三人烏とかいう連中とのからみか」

「それもあるし立村はもともと南雲とも仲がいい。羽飛もあいつの味方だしなおのこと、現在C組でぶいぶい言わせている奴らがバックについてくる。南雲も立村が規律に入ってくればやりたいこともやりやすくなるだろう。つまりだ」

藤沖は乙彦を指差した。

「立村の思惑とは関係なく、A組の評議委員たる関崎にC組中心の敵勢力が押しかけてくる形となる。これはやりづらいだろう」

——なるほど。

腑に落ちた。立村の思惑とは違うところ、まさにそこだろう。

「つまり、こういうことか」

乙彦はゆっくりと頭の中でまとめたことを藤沖に伝えた。

「不必要に立村のバックに立つ勢力と戦う愚を犯すよりは、全く切り離された生徒会のほうでやりたいようにやったほうが良いということか」

「さすが関崎だ」

ふと風が冷たく感じられた。まだ明るい日差しがぬるんでいる。

「もっとも生徒会に入るには役員選挙をくぐり抜ける必要がある。そのためにはお前にもう少し箔を付けてもらう必要があるかもな。その意味であえて俺は指揮者を押し付けたということになる」

あっけにとられた乙彦を前に、藤沖は高らかに笑った。

「まあ、まだ先のことだ」

5 初秋の雨（1）

本格的な練習は九月から、とはなっていたもののそれぞれのパートで集まったりはしていたようだった。乙彦も週が開けてから二日ほどは指揮者生徒を集めた特訓をそれなりに受けた。静内や難波も一緒だ。ただし肥後先生ではなく吹奏楽部に所属する三年生が指導する形を取るのさほど厳しくはない。なによりも全クラスの指揮者が集まるわけだからひとりひとりに目が届くわけでもない。

「あとは自分らでやれってことよね」

静内と帰り道、のんびりと語り合った。

「基本は二日間で覚えてあとは自分なりにアレンジしろってことかな。ずいぶん投げっぱなしよね」

「しょうがないだろう。俺もよくわからないが手の振り方だけは覚えた」

「関崎、あんた大丈夫なの」

「多分大丈夫だろう。保証はできないが」

久々の雨もようで、傘をさしてバスロータリーへと向かう。自転車で通えない日がたまにあり今日はそこにちょうど当たったというわけだ。静内も乙彦の家からはさほど遠くないので自然と一緒に帰ることになる。

「B組はもう練習本格的に始めているんだろう。俺のところはまだまだだ」

「急いでやらなくちゃいけないのにほんとのんびりね」

呆れたように静内はつぶやく。それはそうだろう。B組もかなりやる気に満ち溢れているらしく、朝、昼と時間を用意して練習を続けているとのこと。すでに先週から始まっている。

「仕切りはうちの担任に任せられているからやりたいようにやろうかと思うんだけど。面倒な人がいるのもあってね」

「誰だそれは」

「言わない。関崎顔に出るから、私が誰のことを言ったから一発ではれる」

——人の悪口を言わないのはよいことだ。

「あすからやるわよ。とことん練習予定。私の指揮者練習が一段落したらあとはクラスでまとまってやりたいの。音楽室取れるかな」

「やはりそのくらいやらないとまずいということか」

ひとりごちた。静内はそれ以上つまななかった。バス待合場に入って傘を閉じ、ちょうど空いていたベンチに腰掛けた。大学生以外乗る奴がないのが意外だった。

——それにしても、生徒会か。

先週、藤沖に伝えられた言葉がまだこびりついている。

——後期は評議をすつとばして、生徒会に行くとか。

乙彦の選択肢に全く含まれていないものだった。夏休み、片岡宅の焼肉パーティーにて藤沖が乙彦を評議の後釜に置きたいということを訴えたけれどもすでに二転三転してしまっている現実

があるらしい。

——だが青大附高の生徒会は俺の知っている世界とは全然違うんだろ。

水鳥中学の生徒会は性格が恐ろしく合わない奴らの巣窟で乙彦は四苦八苦しながらもなんとか乗り切った。やんちゃでカリスマありの総田副会長、時代劇マニアの一学年下内川会長、やる気なさげのアンニュイ川上会計、そしてシーラカンスな関崎副会長。よくやっていけたものだ。ここまでひどい組み合わせというのもそうそうないとは思いますが第三者からしたら歴代に残る名生徒会と呼ばれている。

「静内、後期、評議そのまま続ける気、あるか」

問うてみた。静内は傘をたたみながらさらりと微笑み頷いた。

「ある。せっかくここまでやらせてもらったんだったらね。最後までやり遂げたいよ。クラス替えになったらもうこういうチャンスないし。そこんところが英語科と違うよね」

「もっともだ」

「関崎はどうなの。このまま規律委員続けるつもりなの。また朝一番で週番の違反カード切ったりズボンの丈測ったりするの」

「わからん」

まだシークレットだろう。外部三人組にもまだ、後期以降の評議委員就任予定については語っていない。もちろん生徒会を勧められたことなどもってのほかだ。

「青大附中の委員会至上主義を外野から見てきたから規律委員会にも期待をしていたんだが、正直あまり面白みはないな」

「だよ。持ち上がりの人たちも同じこと言ってる。相当つまらないんだろ。そう考えると私、評議でよかったのかも。先生に強く出ても怒られないし多少厳しく話してもみな頷いてくれるし」

清坂美里もかなり面白くなさそうな顔をして週番の仕事をしている様子だった。元評議委員としてはいろいろ思うところがあるのだろう。

「関崎、あんたも評議になっちゃえば」

軽く、静内が声をかけてきた。つるりとしたつややかな髪の毛が湿っているのか白く光っている。

「地味に違反カード切っているより堂々と立って指示しているほうが向いているんじゃないの」

「俺ひとりの判断で決められることではないからな」

「立候補すればいいじゃない」

「今の評議の立場はどうするんだ。藤沖だぞ」

「でも、こういったらなんだけど藤沖くん全然仕事しているようには見えないよ」

初めて静内は藤沖の評議委員としての言動について触れた。

「あいつは俺の友だちだが、かなり真面目だぞ」

「わかってる。元生徒会長でしょう。真面目なのはわかるんだけどね。ただもう少しきちんとやるべきことはこなしてほしい。関崎に言えばばれるのわかっているから言うけど、委員会やっている最中にいきなり教室を抜け出して中学の校舎へ走っていったりすっぽかしたりというのはよ

くないよ」

「あいつそんなことしているのか」

初耳だ。藤沖は決してそういう手抜きをする奴ではない。相棒の古川にクラスの仕切りを丸投げしているようなところもあるが曲がったことが許せない男気の持ち主だ。

「俺には信じがたいんだが」

「私も、今まではいろいろ事情があるって聞いていたから黙っていたけど、最近は何だかんだで嫌いなことばかりが多々あるのよ。古川さんがひとりで切り回しているというのも頷けるね。彼女が動かないと誰も回らないもの」

誰もいないこともあり気持ちが緩んだのだろう。静内の口調は止まらない。

「中学に事情持ちの彼女がいて、その子が精神的に不安定だから支えなくてはならないというのがあるんだってのは誰かから聞いたんだ。また後期からは応援団を設立するからそのスカウトとかで忙しいってことも。でも、それは義務を果たしてからだよ。今は評議委員としての最低限の仕事をこなすことが最優先だよ」

「確かに。お前の言い分は正しい」

「関崎に指揮者を押し付けたって話を聞いて空いた口がふさがらなかったけど、本当言うとそれは驚かなかったよ。そのくらいのことしそうだなんて思ったし」

——困ったな。

すでに藤沖から、なぜいきなり指揮者の座を譲ったのかその理由を説明されている我が身としては反応に困る。近い将来乙彦が生徒会役員に立候補するための箔を付けるため、と言うのが一番近い。藤沖なりの親心だ。しかし今の段階ではそれを伝えることができないのも事実。おそらく藤沖はこのように第三者へ誤解の種を撒き散らしているのだろう。

——事情持ちの彼女の件は片付いたのか？ 藤沖？

あれからあえて尋ねてはいないが、静内の言い分だとたぶん続いているのだろう。

応援団の件は麻生先生にも伝えてあるので藤沖としてはおおっぴらに動いて構わないと思っているのかもしれない。だが、まだ評議に収まっている以上もう少しきっちりと働く必要があるという静内の意見も一理ある。

「わかった。俺も藤沖が行事絡みのことをすべて古川に振りすぎているとは思っていたんだ。友人として忠告すべき内容だろうなこれは」

「なんだか悪口でごめん」

「だが、あいつは本当にいい奴なんだ。クラスではみ出しにかけている男子を仲間に入れてやったり、右も左もわからないまま入学してきた俺に対していろいろとおせっかい焼いたり結構思いやりはあるし、リーダー性もある。静内もいろいろと噂は聞いていると思うがあいつの交際相手である女子は」

「知ってる。修学旅行で」

言いかけて口ごもった。やはり女子には伝えづらい内容だろう。

「あいつの欠点かもしれないが、あいつは自分を慕ってくる相手に対してはとことん守ろうと

する。また応援団の件についても藤沖は中学一年の頃から計画を立てていてやっと高校でその夢が叶いそうになり舞い上がっているんだろう。だが、それと今の仕事を投げ出すこととは別だ」

静内はしばらく乙彦を見つめた。鞆の留め金を指先で撫でながら、

「関崎の友だちはみんな、いい奴なんだね。私からしたら恋愛にうつつ抜かしているようにしか見えないけれども、男子の眼でないと見えないよさもあるんだな」

付け加えた。

「この前、音楽室の入口でA組の伴奏者さんの話聞いた時も、同じく思ったよ」

5 初秋の雨（2）

——藤沖も悪気はないんだろうな。

バスに乗り込み、最奥の席で静内と二人揺られながら乙彦は指を折って数えた。

「何計算してるのよ」

「ああ、もう半年経ったんだな」

「そうか、そうだね。あと二年半しか残っていない高校生活かあ」

「まだ半年と言うのが普通じゃないのか」

それほど空いているわけでもなかったが、顔見知りの奴はひとりもいない。気楽に静内へ語りかけることができる。いつもならもうひとり名倉が混じっているわけだが、奴はやはりクラスの合唱コンクール練習に巻き込まれている。

「静内」

「何？」

思い切って呼びかけた。やはり、一度は言っておいたほうがいい。

「B組の揉め事は、清坂がきっかけか」

「だったら？」

間をおいて静内も返した。ひっかかりがあるということだけはわかった。

「俺も詳しいことはわからないが、もし意味もなくつかかされるとか外部生だから文句を言われるとかそういうことが続くようだったら、俺からも話をしてもいい」

「何言ってるの。関崎が彼女と話してなんになるのよ」

静内は笑い飛ばした。当然のことながら乙彦は静内に、清坂美里からひまわりの花満開イメージの告白をされたことなど話していない。嘘は言いたくないので事実だけ拾い上げて答える。

「俺は別に詳しい事情を知っているわけじゃないんだが、それなりにつながりもある」

「それとどう関係あるのよ。関崎、余計なこと考えなくていいって」

首を振って笑いかけた。乙彦の言葉にいやな気持ちはしなかったようだ。

「なんだかね、面倒な人だなという気はする。それはある。一学期はほんっと今日の雨見たく鬱陶しかった」

「だいたい気持ちはわからなくもないが」

「でも、夏休み中いろいろ考えて決めたんだ」

鞆を縦にかかえ、静内は肩を一回怒らせて、すぐに戻した。

「あんまりちょっかい出してくるようだったら、こちらもそれなりに覚悟して勝負するしかないかなってね。まあ、表立って喧嘩してるわけじゃないよ。向こうも親切なふりしていろいろと力関係ひっくり返そうとしているのがまるわかりなだけ。根っこは悪い人じゃないんだってこともわかるし」

「それもわかる」

一度は立村の恋人だった相手だ。

「だから面倒なのよね。向こうさんは私のためにお手伝いをもって余計なこと言い出すけれども、

それって迷惑以外の何者でもないの。それにもっといって、そう考えているのが私だけではないってことが、この夏休み中通じてよくわかったってこともあったし」

「B組で相当嫌われているのか」

しょっちゅうA組の古川と一緒に行動している姿を目にしている。清坂にとってB組は居心地がよくないのだろう。

「彼女が悪いわけじゃないのよ。単純にうちの担任とクラスメートたちの価値観が私と一緒にただけ。いろいろ情報集めてみた限り附属上がり文化ってその中に入っている人たちにとっても苦痛だったのかもね」

よくわからない。静内の話を聞く限りだとA組ののんびりとしたムードは奇跡なのかもしれない。

「彼女がひとりで暴れているように見えて、それがうっとおしくてうんざりしていて、中には迷惑被る人もいて、という流れなのかな。ただ彼女には他クラスの味方が多い。ひとりだけ集中していじめるといふ形にはなっていない。そこが救いね」

「いじめになったらまたこれは別の問題だろう」

「それはいや。絶対避けたい」

静内が清坂美里に対してここまでうんざり気分を表現するのは初めて見たような気がする。夏休み中はそもそも話題に上がらなかったが学校が始まればやはり目に入ってしまういらいらも増大するのだろう。乙彦もあのひまわりパワーには圧倒されそうになるものの、傍において受け止めたい存在とは到底思えない。それにしても立村はなぜあそこまで性格の違い過ぎる清坂と付き合いおおうと思ったのだろう。恋愛沙汰にはあまり触れたくないのだが、下世話な興味はなくもない。

「だから、今回の合唱コンクールでしっかり白黒勝負をつけたいの」

「勝負と来るか」

「そう。ねちねち嫌味の言い合いになるのは避けたいのよ。私が相手さんに求めているのは、余計なことに口出ししないで自分の仕事だけきっちりしてかかわらないでってことだけ。合唱コンクールであれば一生懸命歌って、練習にはきちんと参加してもらおう。それだけでいいのよ」

「それだけで、そんなにもめるのか」

静内が要求していることはあまりにもささやかだ。それすら受け入れようとしめないのか、あの清坂美里は。そうなるとうちもどう考えても嫌がらせだろう。理由があるならまだしもだ。

「そう。先週の土曜も先約があるからってことで練習さぼられちゃったし。とりあえず土曜はすでに来週も予定があるんだって」

他クラスのやる気がありすぎるのかA組がのんびりしすぎているのか、さてどちらだろう。

「今の話で少し気になったんだが」

清坂美里の件でひとつひっかかったことを伝えてみた。

「確認したわけではないんだが、清坂は二週連続で土曜を休むと話していたんだな」

「そうみたい。まあ私が金曜にいきなり練習予定を組んだのも悪かったけど」

確か古川が話していなかったろうか。何かつながるものがある。

「もしかしたらだが、立村の練習に付き合っているのかもしれない」

「あの、伴奏の人に？」

そこまで口にして、あっと声を挙げた。

「けど、まさか」

「立村の家にはピアノがない。練習は学校の音楽室と、あと古川の家で行うと聞いている。確か土曜の放課後、古川の家におじゃまして弾かせてもらう予定だと聞いた記憶があるんだ」

「でもそれ、古川さんでしょう？」

「古川と清坂は仲がいい。立村とも付き合いが長い。となると、三人か四人か、附属上がりの仲間内で一緒に行く可能性もあるんじゃないか。俺の推測だが。直接立村に聞いてもいい。古川に聞いても教えてくれるだろう」

「関崎あのさ、聞いてどうするのよ」

「理由があればお前だって納得するだろう」

静内がいらいらしているのは、明確な理由がない状態で清坂に好き勝手されることではないかと乙彦は勘ぐっている。二週連続となると、おそらく立村のピアノ練習を手伝うか何かしたいのではないだろうか。なにせ家にまで遊びに来るくらいの仲よしだったのだから、そのくらいのことはするだろう。

「関崎、もしかして私と彼女と人間関係うまくいかせたいとか思っておせっかいしてるでしょう？ もしそれだったら心配ご無用。私、あそこまで感覚がずれていると合わせるとかそういう気になれなくなってしまうから」

「感覚、か？」

問い返す乙彦に静内は言い切った。

「伴奏者さんとあの人、もう別れているんだよね」

「詳しいことはわからないが、たぶんそうだろう」

「だったらなお変だよ。あの人、とにかく手当たり次第いろんな男子と遊んだりしているの見かけるもの。その中のひとりがあの伴奏の人だけど、一度きちんと別れたのにまだ、ああやってべたべたしている。人の価値感だから何とも言えないけど、あまり清潔な感じはしないな」

「あのな、静内」

あえて苦言を呈する。

「ならお前はなんなんだ？ 俺や名倉と一緒につるんで自由研究やっていた一ヶ月はどう言い訳するんだ。こういったらなんだが、似たようなことしていると糾弾されたらどうするんだ」

さらっと静内は言い返した。

「私、関崎と名倉以外の男子とは遊んだこと一切ないけどね」

5 初秋の雨（3）

静内と家近くで分かれてから、乙彦はそのまま部屋に潜り込んだ。

青大附高の宿題が山のようであたふたしていると言えば、うるさい母もそれ以上はせつついて来ない。兄も弟も外に出払っている。部屋はひとりで使い放題だ。

——やはり立村とも、折を見て話し合ったほうがいいのか。

あまり女子同士のトラブルには口出しをしたくない。ましてや静内は外部三人組の仲間だし、清坂も中学時代の縁がそれなりにある。できれば仲良くとはいかなくともクラス替えまで無事に過ごしていただきたい。

だが、

——静内があそこまで文句を言うくらいだから相当、なんだろう。

一学期観察してきた限り、静内は女子たちと適度な距離をおいて付き合い、特定の仲良しを作って張り付くということがない。いや、外部三人組で行動しすぎるというのも確かにあるのだが、妙な派閥を作りたがるとかそういったことはないのではないのか。現に乙彦は静内と親しい女子の名前をひとりも知らない。静内の口から出るのは「B組のクラスメート」というひとかたまりを表すものだけであり、特定の人物名はめったに出てこない。

その中で唯一個人名が把握できるのが、清坂美里だ。

それもあまり心地よくない響きとともに。

もしどちらの肩を持つかと言われれば、乙彦は一瞬のためらいもなく静内の味方をするだろう。気心知れているというのもあるが、今までの経緯を把握した限りどう考えても清坂が余計なことをし過ぎている。

静内が求めていることは、

・やるべきことをやっていただきたい。

これだけだ。極めてシンプルな内容だ。

また、

・評議に余計なアドバイスをしないでほしい。

これも道理だ。過去の経験を生かしたいからという清坂の善意は、静内にとってかえって負担だろう。学校側の対応も、内部持ち上がりの生徒たちのやり方をいったん白紙に戻す形で通そうとしている以上、評議委員となった静内のやり方にぴたりと合わせていくほうが順当なんではとも思う。静内がろくにやる気なしであれば清坂のアドバイスも有効だろうが。

さらに意外なことはB組の男子たちからも清坂を見限る意見が多数出てきているという情報だった。これは乙彦も正直わからなくはない。あのまばゆい光はまぶしすぎるのではなくいらだたしい。距離の近すぎる接し方はできれば改めてもらいたい。元気印の女子が必ずしももてるわけではないということを、清坂は学ぶ時期に来ているのではないだろうか。あまり関わりたくないが、いざとなったら何らかの形で言う必要があるだろう。

ふと、机の上に手紙が一通置いてあったのに気づいた。

茶色の封筒で少し分厚い。ひっくり返してみると中学時代同じクラスだった男子の名前が書いてあった。封を切ってみると、十枚ほど写真が同封されていた。手紙はない。

夏休み半ばに行われた、中学クラス会のスナップ写真だった。それにしても多い。

乙彦の場合、生徒会副会長だったこともあってクラス幹事の担当にはならなかった。卒業時の学級委員が担当することになっていて、本式のクラス会はまだまだ後になるのだが、乙彦としてはどうしても卒業してから三ヶ月後の同級生たちがどう変わったかを確認してみたかった。勝手ながら乙彦は同級生数人をせっついて夏休み中の教室を借り熱く思い出話に花を咲かせたのだ。

もっとも集まったのは見事に野郎がほとんど。女子も数人顔を出すだけ出したがさっさと逃げ出してしまった。それはそれで気楽でよい。中学時代の乙彦は女子と語り合うなんてことほとんどなかったのだから。また、現在の乙彦が青大附高でどれだけ勘違いされているかについてもあえて口にはしなかった。水鳥中学では「融通の利かないシーラカンス」でよい。現に送られてきた写真に映る乙彦はTシャツにジーンズといったきわめて質素なスタイルを通してている。思い切り目立たないままだった。

——クラス会だと雅弘呼べないもんな。次回は仲間内でサッカーでもやるか。

雅弘宅には夏休み中しょっちゅう出かけていたので久しぶりも何もないのだが、やはり中学の敷地で会うのとは違うような気がする。

写真を封筒にしまい、あとで送ってくれた友だちに電話をしておくことに決めた。

教科書を開き勉強に励もうとして本棚上のラジオを手にとった。

——まだ、明るい電波がつかめないか。

夏休み末からはまったBCL、夜に入ってからラジオのチューニングをしながら海外電波を取り込むといった趣味。何度か昼間も試してみたのだがなぜか普通のAMラジオ局しか拾えない。海外の電波が混線してくるのはやはり夜八時以降からになる。外は雨だし、どうだろう、今夜もそれなりに聴き取れるだろうか。

ノートにメモした電波受信時刻と放送局……主にアジア諸国の日本語放送が中心だが……に眼を通す。さまざまな国の言葉も夜がふけるに従ってざらざらした雑音と一緒に紛れ込んでくるが、いかんせん聞き取れない。

——とりあえず今度、受信報告書を書いて見ることにするか。エアメールの書き方を調べておかないとな。いや、日本支局のある放送局もあるからそちらに送ればいいのか。

誰か同じ趣味の奴はいないだろうか。

——英語なら立村に頼んで訳してもらおうという手もあるが。

つと、立村につながった。改めてノートを指でなぞってみた。

——あいつは洋楽が好きだと聞いたことがあるが、海外放送局など聴いたりしないのか。

そういえば、立村とは青大附高に入学してから軽い趣味にまつわる話をあまりしたことがない

。いろいろ面倒な問題が関わっていたり、立村が藤沖と不仲だったり、清坂が乙彦にからんできたりと歓迎できない話が多かったのは確かだ。今はさほどでもないが、立村も青大附高に入学後乙彦と距離を置きたがっていた時期もあった。乙彦としては不本意だった。ただそれゆえに、立村を客観的に観察する機会は増えたと思う。

元青大附中の評議委員長というステータスを持ちながら、成績は中の中から下だとか、文系では学年五位以内にいつも入っているが理系がお話にならないくらいの体たらくのため、結局総合順位が低くなるのだとも。立村から直接聞いたわけではないが、他の男子たちや古川こずえから教えてもらった限りではそうらしい。

また、元評議委員長だからといって他の生徒から尊敬されていたかということそうでもなかったようだった。藤沖の問題はともかくとしても、女子たちの冷ややかな目線が哀れすぎる。伴奏を担当すると決まった時の女子たちが見せたあからさまな失望の態度もそうだ。幸い立村は男子生徒たちからは比較的受け入れられているようなので救われているとおろがあるのかもしれない。もちろん乙彦も立村を高く評価している人間のひとりである。

——俺はありがたいことに、水鳥中学のシーラカンス時代から進化することができたが、このままだと立村がだんだん化石になりそうだ。

できればせつかく指揮者と伴奏者というなかなかの位置取りを得たわけだから、ここいらで少し立村とじっくり話をしてみたい。その流れでいけばもしかしたら、静内と清坂をめぐる面倒そうな問題の解決糸口が見つかるかもしれない。ついでに藤沖との関係にも雪解けが訪れるかもしれない。とりあえずは、今度学校で顔を合わせた時にでも、

「立村、お前、BCLって知ってるか。海外の放送局をラジオで受信する趣味なんだが」

と声をかけてみようかと思う。うまくしたら、日本語放送だけではなく英語圏の放送局にもメールアドレス使って受信報告書を送りつけ、珍しいベリカードを入手できるかもしれない。まだ一度もベリカードなんてもらったこともない乙彦だが、立村との接触予定を組み立てているだけで心が湧いた。

6 独唱（1）

水曜日の朝一番にとうとう正式発表された。

麻生先生の出席簿が教壇からどでかく見える。クラス全員を見渡しつつ、まずは実力テスト取り組みの感想をさらっと述べた後、

「とはいえだ。夏休みのいわゆる自由研究がなかなかみないもの作っていて、担任として俺は非常にうれしいんだ。いや、読物としてみなよく出来てるぞ。お前らの悲惨な答案にマルつけるよりはな。それでだ」

かなり無理やりに自由研究の話題へとつなげていった。

「今日は、報告がある」

ちらと乙彦に視線を走らせた後、麻生先生はにんまり笑いながら続けた。

「その自由研究を先生方全員で読みまくった結果、関崎のまとめた『青潟の石碑地図』が高い評価を得て学校図書館に製本して保存されることになった」

ふわりとざわめき。男子も女子もみな顔を見合わせている。

「関崎くんが？」

「すごいよそれ」

「関崎すげえ」

「やっぱお前か最後はあ」

最初何を言われたのかがつかめず様子を伺っていたつもりだったが、ふと気づくと脇から古川こずえが手をひらひらさせている。ついさっきまで古川とは合唱コンクールに関しての意見交換を行っていた。真面目な話をしていたつもりだったのに、やることはやはり相変わらずだ。

「おーい、どーしたー！ 目、覚ませ！」

手を目の前でひらつかせている。悪いが目はギョロ目になるほどでっかく開いている。さらに後ろからも藤沖ががちり肩に手をおいてくる。やはりきた。

「すごいぞ、関崎、さすが外部生のスターだ」

そのあとしつこく叩きまくるのは勘弁してほしい。夏服のシャツに藤沖の本気張り手はかなり響くのだ。さらに片岡が乙彦の顔を覗き込むようにして、

「すごいな、やっぱりすごいな。今度、見せてくれるかな」

まさに無垢としか言い様のない笑顔で語りかけてくる。

「いや、俺ひとりで作ったわけじゃないんだ」

言い訳も麻生先生の声にかき消される。少しざわめきがやんだ。

「本当ならば何作か素晴らしい自由研究を選んでその上でコンクールを行おうという予定だったんだ。だが先生たちと協議を重ねた結果、今回のトップが関崎をはじめとする有志による作品であることが動かない以上、もっと他の奴のものについては別の次元で考えるべき内容なのではという結論に達した。ある意味、お手本なんだ」

これはお礼を言うべき場面だろう。乙彦は立ち上がった。

「どうもありがとございます！」

麻生先生に一礼してみた。なんだか別の奴らにも頭を下げねばならないような気がした。さらに反対側に、東西南北全部頭を下げた。

「おいおい何やってるんだ関崎、全方向に礼してどうするんだ」

「僕の力だけではないんですが、高い評価をありがとうございます。みんなのおかげです」

「いや違うだろ。お前の実力だろ」

からかうように麻生先生がつっこむ。いや違うと言い切りたい。

「いえ、この学校に来なかったら、石碑なんてものに興味持つわけなかったですし、このクラスにいなかったら自由研究を真面目にやるなんてことを考えることもなかったと思います。やっぱり、このクラスのおかげだと思うので頭下げました」

噴き出すささやきと同時にどこからともなく拍手が始まった。麻生先生も満足げに乙彦をみやりながら、

「いやあ、お前本当に教師殺し野郎だまったく。自覚してないだろ？ まあいい。とにかくこれから詳しい話はあとでいろいろすることにしようか。とりあえずはこれから始まる合唱コンクールに向けて、少し気合入れるぞ。藤沖、どうなんだ調子は」

藤沖が答える前に古川が「はい」と挙手して立ち上がった。

「さあこれからですよこれから！ 藤沖や関崎に手伝ってもらっているいろいろやってますから先生、心配ご無用」

「古川、お前相当、ご褒美に飢えてるだろ」

「先生もちゃーんと用意しといてくださいね」

いつもの掛け合いにまた沸く教室。ふと乙彦が気づくと、立村が静かに振り返りこちらを見つめていた。

この報告は乙彦だけではない、お隣B組、さらに遥かなるD組にも伝わったはずだ。昼休みを待ちかね乙彦は教室から飛び出した。給食後の教室では古川率いる有志たちが楽譜にかじりついてたがこちらには優先順位があるというものだ。図書館に向かうことにする。かならずあいつらいるはずだ。

「関崎」

声を掛けてきたのははるかなるD組の名倉だった。まだ学年五番の祝いをしていない。肩にいきなり手をかけてきた。言いたいことはなんとなくわかる。

「めでたいな」

「ああお互いに」

思わず笑い出したくなる。名倉もあまり口には出さないが、それなりに嬉しいのだろう。誘っていつもの図書館テーブルを占拠する。もうひとりの紅一点はまだのようだ。

「静内はまだだな」

「あいつはそれどころではない」

さっそく事情を聞くことにする。クラス男子と今だ馴染んだ様子のない名倉は英語科の乙彦と違い、静内とつるむ機会が比較的多い。

「何があったんだ」

「例の合唱コンクールだ」

名倉は額を手で拭った。

「俺の知る限りかなりのスパルタ特訓をしていると聞いたが」

「そうだ。本気出してるぞ。ただ何人か離反している奴がいるらしい」

「男子か女子か」

「静内が言うには女子とのことだ」

たぶん清坂のことだろう。名倉にも同じことを愚痴っているらしい。

「実際は多数対その女子という組み合わせでもめているようだが」

「俺もそれは聞いたな」

乙彦がつつぶやくと名倉は首を振り続けた。

「ひとり、やたらと人間関係にだらしない女子がいて、担任からも注意されているらしい。静内もいろいろと注意するらしいが無視するとのことだ」

「だいたい誰かは見当がつくんだが、そんなにだらしない印象はないが」

清坂が、ではなく付き合ってきた立村の名誉のためにも伝えておいた。

「俺もその女子は知らないが、奈良岡の友だちなので悪口は言いたくない」

結局そこか。名倉のピンポイントチェックはいとしのお姫様につきる。夏休み中のそうめんパーティーでも奈良岡彰子と直接話をしたが、確かに清坂美里や古川こずえとは親しい友人だとは聞いていた。

「だがなんであんなに静内と相性が悪いんだろう」

「あいつは不潔な人間が嫌いだ」

投げるように名倉が説明した。やはり乙彦にはわからないことを互いに語り合っているらしい

。

「人間関係においてだらしなかつたり、いい加減な生き方をしている奴は生理的に受け付けないと言っていた。ちなみに担任も同じ趣味らしいのでえらく静内は気に入られているらしい。あいつ自身は迷惑がっているようだが担任にひいきされているとのもっぱらの噂だ」

「じゃあなんで俺たちとカラオケ行ったりするんだ？」

乙彦は名倉に問いかけた。最大の謎だ。

「だらしない人間は嫌いでも、変人は好きだということだろう」

身も蓋もない答えだった。

6 独唱（2）

昼休みのわずかな間に名倉と話したことは他に、
「自由研究がやたらと褒められているんだが」
これに尽きた。名倉曰く、
「青大附属に入学してから初めて、教壇に立たされて褒められた」
のだそうだ。
「俺もだ。朝の会に発表があったんだ」
「静内はどうだろう」
「そりゃ褒められるだろう」
本当はその辺りも確認したかったのだがそろそろ時間だ。乙彦と名倉は一足先に図書館を出た。
昼休み終了一分前には席についていたい。
「ひとつ気になることがあるんだ」
「なんだ」
階段を降りながら名倉がつぶやいた。
「どうも十月頃に表彰式だかなにかがあるらしい」
「それは聞いてないぞ」
「俺もよくわからないが、とにかく何かにでなければならぬことは確からしい。えらい人の集まりかなにか、と聞いている」
「初耳だ。あとでうちのクラス担任に聞いてみる。しかしそうすると静内も詳しいことを知っているということなんだろうなあ」
「たぶんそうだ。あいつに聞いてみればいい」
「放課後、B組にふたりで迎えに行ってみるか」
「そうだな」
まだ乙彦は自由研究の件でお褒めの言葉しか預かっていないがこれからは妬みや嫉妬など面倒なことも降りかかってくる可能性がある。乙彦からしたら相手にためらうことなく話し合いをしに立ち向かえばいいが、静内は女子だしそう簡単には片付かないだろう。そう考えると早めに静内を含めて打ち合わせ、今後の対策を練っておくことが必至だ。

放課後になると藤沖がいつものように教室を飛び出していく。
「藤沖、お前どこに行くんだ」
無駄だとは思いますが呼び止めてみる。
「悪い」
言い捨てて鞆を抱えていく藤沖を見送りつつ、改めていつのまにか傍にいた古川に声をかけてみた。
「俺が言えた義理ではないが、藤沖、大丈夫なのか」
「さあね。私も何も言えないよ。ただ、しょうがないってことよ」

——古川にすべて投げている状態か。

静内の言葉を思い出す。古川は苦勞してそうな表情を微塵たりとも見せないけれども、どこか無理したように感じられるのかもしれない。このまま倒れないことを祈る。女子たちの群れに混じり、楽しげに合唱パートをまとめていく姿をなんともなしに眺めていた。

自分の机に持たれていると立村がいつのまにか隣りに立っていた。ちらと顔を見た。ちょうどいい、藤沖も他の男子もいない。しゃべりやすいだろう。話しかけた。

「古川はさすがだ。ああやってさりげなくクラスの要となるわけだ」

立村は困ったように口元だけで笑い、小声で答えた。

「あの人はいつもそうだけどさ」

「五分程度きっちり歌って、適当に褒めて、解放する。しかも褒める」

「古川さんは男子の褒め方をたまに勘違いしている時あるけどさ」

「まったくだ」

ご存知下ネタ女王のお言葉だ。思わず頷いた。両手を組んで膝の上の鞆に載せている立村に、ピアノのことを振ってみた。

「ところであれだ。お前、練習しているんだろう？」

立村は軽やかに答えた。組んでいた手を解きひらひらと指を動かした。

「それなりにやってるよ。たぶん、来週中にはテープ用意できるくらいには弾けるようになると思う」

「テープとはなんだ」

「クラスの練習用の伴奏なんだけど。今週中に一通り弾けるようになったら、何本かテープに吹き込んで、あんな風に時間のある時に曲を合わせて歌ってもらうようにしようって計画しているらしいんだ」

「歌を合わせるとはどういうことだ？」

古川が立村のピアノ進捗状況をかなり悲観的に語っていたけれども、それなりに準備は進んでいるようだ。たぶん静内と一緒に耳にしたさみだれの音色は、たまたまだったのだろう。かなり冷静に答えている。

「今はまだ、アカペラで合わせているけれどやはりピアノの伴奏があるなしとではだいぶ違うだろ。まだ俺も指揮者のお前に合わせられるだけ弾けないからもう少し待ってもらいたいところなんだけどさ、でも、歌のほうは出来る限り早く合わせられるようにしたほうがいいよな。今、C組なんて毎日朝と放課後、音楽室を押さえてクラス全員で練習しているし、それにはさすがに負けたくないんだと思う」

「そうか、そこまでみな本気なのか」

立村は軽く首を振りやさしく笑った。

「いや、でもうちのクラスはそういうのが向かないと古川さんわかってるんじゃないかな。あまり早すぎると中だるみしてしまうから、二週間だけ集中してもらう方向で考えているんだと思うよ。それの方が緊張感あるし、俺も関崎もそれなりに準備ができているだろうから安心感もあるしさ」

「そういうことか。確かにそうか」

乙彦も前もって古川から聞いていたからそれほど驚きはない。ただ、やはり早めに立村と練習をしたほうが良いような気もする。指揮者練習がまだ二回程度しか行われていない現状だと、人の心配より自分のことを何とかしなくてはならないんじゃないかとも思う。

それに、藤沖が完全にクラスのことより自分の関係でばたばたしている状態の中だと、男子でもそろそろ誰かが動かないとまずい。男子十一人中、ここで動くのはだれかと考えると自分しか適者がいないというのが問題だが。

——やはりここは、実力で互いに見せるしかないか。

古川があれだけががんばっているのだから、せっかくの男子指揮者&伴奏コンビ、しっかりパートナーシップを保たねば。

思い切って乙彦は立村の手の甲を強めに叩いた。

握手の代わりだ。

「どうした？ かなり本気で叩いただろ？」

「悪い。俺も今、突然思いついたんだが俺とお前もできるだけ早く、指揮者なり伴奏になれたほうが良いということがよくわかった。すなわち」

「何？」

げんそう顔をしたまま手の甲をさすっている立村に、乙彦は思いついたことを大急ぎで伝えた。

「立村、できるだけこれから、ふたりでピアノに合わせる練習をしよう。時間は規律委員会とバイトの隙間を縫う形になるが、できるだけ都合はつける。クラス全員がそれぞれの形で準備をしているのなら、俺たちも早めに息を合わせたい。どうにかして一緒に練習したいんだが、どうだろうか」

立村は少し驚いた様子で目を見開いたが、穏やかな表情のまま首を振った。

「ありがとう、たださ、今日、これから補習があるんだ」

忘れていた。理数成績が壊滅している立村のさだめ、これから週一時間の補習を受けねばならないという現実を。詳しいことはあえて聞いていないが青湊大学の学生たちがボランティアで生徒たちに教えるやり方だという。一学期は外部生も毎週二回強制参加させられていて夏休みの補習も特別に行われていたのだが、二学期以降はまだ開かれていない。

「ああそうか、毎週水曜はそうなんだな」

「数学と理科のプリントを解き続けなくてはならないんだ。結構ハードで、それが終わってから音楽室に行こうと思ってる」

やはりピアノを弾きたいのだろう。本当はそれまで残っていてもいいのだが。

「ピアノの練習か」

「そう、たぶん少し遅くなったら人も少しは減っていると思うから、ピアノも空いているんじゃないかなと思うんだ」

ピアノの練習だと邪魔するのはやはりまずいだろう。乙彦は提案を飲み込んだ。その代わり、

近いうちになんとしても稽古をすべく、言を取ることにした。

「そうか、俺も一応、肥後先生から呼び出されて指揮棒の振り方を習っているんだがなかなか大変だな。意味があるんだと言うことに初めて気づいた。どちらにせよ、立村とは一度きっちり練習をする必要があると俺は思うんだ」

「そうだね」

短く立村は答えた後、

「そろそろ教室移動しとかないとまずいから、またあとで」

女子たちの歌い声が一部教室内で響き出したのを合図に、かばんをぶら下げ教室を出て行った。

——とりあえず約束はしたということだな。時間を調整しよう。今日がだめでもまた明日にすればいいことだしな。

思い出した。すっからかんに忘れていた。

——まずい、名倉と約束してたのは俺の方だ！

一年B組に乗り込んで静内と自由研究事情の打ち合わせをするはずだった。B組はたぶん合唱コンクールの練習に行ってしまうだろう。その前に捕まえたかったのだが、しまった、しくじった。外部三人組よりもつい立村を優先してしまった。

6 独唱（3）

名倉ひとりがA組前廊下につっ立っているのを見て、自分の憶測は正しかったことを確認した。これはまずかった。平謝りに謝った。

「悪い、俺がすっかり忘れてたんだ」

「いい。静内と連絡は取った」

ぶっきらぼうに名倉が答える。

「あいつも忙しそうだったがどちらにせよ相談したいことはあるみたいだ。合唱コンクールの練習を音楽室で一時間くらいやるから、その後で打ち合わせようとのことだ」

「そうか、ちょうどいいな」

どちらにせよ名倉と時間を潰すのも悪くない。規律委員会の夕方当番も今日は外れていることだし、そのまま図書館へ向かうことにした。

いつもの「外部三人組」用指定席に向かい、名倉より静内との話を詳しく聞くことにする。ノートとカンペンケースを取り出し、乙彦は促した。

「B組の様子はどうだった」

「相変わらずらしい。これからB組の有志で合唱コンクールの練習を行うらしいのだが、問題の女子が理由つけて参加しようとしなないんだそうだ」

「清坂だな」

「静内もいきなり今日の帰りロングホームルームでの提案だからしかたないとは思っているらしい。だが担任も少しきついことを言ったとかでまた雰囲気が悪化していると言っていた」

「担任っていうと、あの女の先生か」

野々村先生、大学を卒業して間もないようなまだ若き女教師だった。授業を持ってもらっていないので乙彦もどういう印象かははっきり答えられないのだが、名倉は把握しているようだった。たしか古典と現代文両方の担当だと聞いている。

「どうなんだ、授業はおもしろい先生なのか」

「可も不可もない。ふつうだ。ただ、面白みはない。静内も同意見だ」

結構乙彦のいないところで意見交換しているのだろう。名倉は様子を伺いながら続けた。

「自由研究のことも話した。やはり静内も俺たちと同様壇上で褒められたらしいんだがどうも担任がそれと比較する形で、問題の女子が関わっている自由研究テーマを批判したらしいんだ。なんでも『地に足がつかないテーマを選んで背伸びしようとしている』とか言いつつ、その女子をじとっと見つめたらしい。明らかにお前だぞ的な視線だとか言っていた」

となると、清坂と一緒に組んでいる立村、羽飛の責任にもなるということか。哀れだ。立村が提出した自由研究のテーマについては、夏休み中少しだけ聞いた。青潟から諸事象で海外に飛び出し一生戻らず生涯を終えたひとりの画家についてだそうだ。乙彦はそれこそよく言って「現代美術」的な絵しか描けないのでなんとも言えないが、普通考えないテーマだと思ったことは確かにある。

「地に足がついていないかどうかはわからないが、立村から聞いた限りはかなり真面目に取り組んでいたようすが」

「わからん。静内も実際は見えていないからわからないらしい。ただその時の例の女子がかなりダメージを受けていたらしいのでクラスの連中はざまみろ祭りだったらしい」

「それは女子だけか」

「男子も一緒だ」

これは重症だ。いくら清坂が「男にだらしない」と誤解されるくらい仲良し男子が多かったとしてもクラスで馬鹿にされているのであればこれはしんどいだろう。乙彦も清坂と接して非常に疲れる女子であることは認めるが、一步間違ふといじめにつながるのだけは避けたいとも思う。他クラスのことだし口出しはできないが。

「いつも言っていることだが俺は静内の相手の女子も顔見知りだからあまり悪口は言いたくない。静内が正しいとは思わんがな」

「俺も同意だ、奈良岡の友だちだ」

同じスタンスにほっとする。

「ただ静内はクラス内で妙な僻みを受けていないようで安心だ。またどこかから盗作とか焼き直しとかいろいろ言われる可能性もあるが、クラスではそんなことなさそうなんだな」

「たぶん」

一番の懸案事項が回避されたようで乙彦としてはほっとした。

ふと、振り返ると反対側のテーブルに噂の主プラスひとり男子が仲良く席についているのを見つけた。タイミングが良すぎる。名倉も乙彦の視線を確認し小声で、

「あの女子か」

かがみ込むようにささやいた。乙彦も頷いた。

「そうだ、清坂だ、あと羽飛もいるな」

「C組の評議か」

乙彦は頷いた。ちらと様子を伺ってみると、ふたりは楽しげに語りながら大きな紙袋を取り出しテーブルに広げている。工作道具らしきセットも用意しつつ、身振り手振り大きく何かを伝え合っている。ふたりの席には数人附属上がりの友だちらしき連中が声をかけているが、乙彦の見る限りB組の連中は見当たらない。

——噂をすればなんとやらだな。

本当はあまり清坂に関わりたくない。きちんと一学期終業式の昼下がりに言うべきことは伝えたとし遺恨はないはずだ。清坂もあれからは特に乙彦へまとわりついてくることもなくなった。笑顔で挨拶したり規律委員としてのやり取りのみだ。ただ、

「私は関崎くんのこと好きでいるから」

の言葉だけがどこか小骨としてひっかかっているのも確かだった。うっかり飲み込んでえらい目に遭うのだけは避けたかった。

「少し気になることあるんだ。すぐ戻る」

乙彦は立ち上がり、まっすぐ清坂たちのたむろうテーブルに向かった。相手もすぐ気がついたらしく微笑みを浮かべて手を振ってくれた。嫌われてはいない。

「関崎くん、いつもあのテーブルで集まってるよね」

開口一番、清坂が名倉のいるテーブルを指差して尋ねてきた。

「ああ、指定席になっている」

「お前さんも、あのなんだ、立村を面倒見てくれて助かるよ」

羽飛も特に刺なく機嫌よさげに挨拶をしてくれた。

「あいつ、またいろいろといじけてるんじゃないかねえかってな。さっき美里から聞いたけどなあ自由研究のことで」

「貴史やめなよ。立村くん聞いたら怒るよ」

——やはりここか。

ふたりのやり取りで気づくのは、下の名前呼び合っているところ。乙彦の知る限り男子と女子との間でそのやりとりは相当親しくないとしなければずだ。苗字ならまだしも。このふたりが物心着く前からの幼馴染で双子の兄妹のような関係であることを鑑みても、この親しさは第三者のバリアとなる。その中に潜り込んでいる立村との関係がよくわからないが。

乙彦の思惑を知ってか知らずか、清坂はハサミと分厚いボール紙を並べたまま、

「そうだ。自由研究最優秀だったんだね、聞いたよ。おめでとう！」

たっぴりとひまわりのエネルギーでもって笑顔を向けた。邪気はなさそうだ。

「ありがとう」

「俺のクラスでも持ちきりだったぞ。製本するんだろ？ 見せろよ。楽しみだ」

「ああ、悪い」

名倉から聞いたような寒々した感想ではない。少なくとも清坂に嫉妬の影はない。

いい雰囲気なので、乙彦なりに気分を壊さないように尋ねてみた。

「ひとつ確認したいんだがいいか」

「どうぞ」

「もしかして、立村のピアノ練習に付き合ってるってことないか」

「誰が？ 私？」

一種ぽかんとした顔をした清坂だが、すぐに羽飛と顔を合わせて大きく頷いた。

「こずえから聞いた？ そうよ、そうそう。先週は貴史来なかったけど、先週今週とこずえの家でピアノの練習つきあったよ」

やはりそうだった。乙彦の読み通りだ。そのままぺらぺらふたりが状況を語りだす。

「立村くんのうちピアノないでしょ。だからこずえのうちに練習しているんだけど、男子と女子一対一だと誤解されるからってことで私も一緒。最初は貴史も一緒だったんだけどね」

「うちのクラスはご存知の通り、指揮者が燃えまくってるんだわな」

にやりと羽飛が笑う。

「難波がすごいだろ。あいつ音痴なんだがいったん火がついたらすごいぞ」

「噂は聞いている。俺も指揮者だからな」

想像がつきすぎる。

「貴史はそれでC組の練習最優先なんだけど私はやはりついてかないとまずいかなと思って。関崎くん大丈夫。たぶんA組の人たち立村くんがピアノ弾けるかどうか心配してるかもしれないけど、今猛特訓してるの私、見てるから。だんだん上手になってるのわかってるから。安心してって言っというて」

両手を握り締め、清坂が乙彦に訴える表情に嘘は全くなかった。羽飛も援護した。

「そうそう、俺も先週は行けねかったけど、あいつピアノの先生にもついてるし音楽室で練習も毎日してるし、まじ本気だぞ。まあ英語科天才ピアニストを踏み越えてとんでもねえことしだしているかもしれねえけど、あいつの気持ちだけはほんとだから、うまく汲み取ってやってもらえると助かるよなあ」

「わかった。伝えておく」

「よかった、ありがとう関崎くん！」

清坂たちに見送られ、乙彦は改めて名倉のいる席に戻った。

「何を確認してきたんだ」

「なんで静内のライバルが練習をさぼるかその理由だ」

簡潔に伝えた。

「うちのクラスの伴奏者練習に付き合っただけのようだ。A組指揮者である俺としてはありがたいんだが」

「だが静内としては」

「難しいな」

互い、顔を見合わせてため息を吐いた。

6 独唱（4）

外部生の星、成績優秀な名倉にいろいろ勉強のコツなどを聞いたり、最近ハマっているBCLについての説明をしているうちに余裕で一時間過ぎた。

「そろそろ行こうか」

「そうだな、音楽室に行くか」

B組の一部生徒が集まって練習しているだけなので、それほど時間も取らないだろうと話していたもののあの静内のこと、どれだけヒートアップしているかわからない。いつのまにか清坂も羽飛と一緒に図書館を出て行ってしまったし、気がかりもない。

「だが、例の女子は今日、明らかにさぼってなかったか」

名倉はしつこく問う。確かに羽飛といろいろ相談事項があったようだが、ハサミを持ち出して工作したりイラスト書いたり、明らかに遊びに近いことをしていた。立村の伴奏練習につきあうというのであればまだ言い訳もできるが今日はどうだろう。

「いろいろあるんだろう。B組のことにはかかわらないほうがよさそう。静内も言ってただろう。プライベートには踏み込まないとか」

乙彦がつぶやくと、名倉は首を振った。

「とっくの昔にあいつは俺たちのプライベートに踏み込んでるだろう。ずかずかと」

——確かに。

音楽室に向かう階段を昇り、そっと中を伺う。思った通り合唱練習らしき歌声が響いてくる。あまり防音の効果がなさそうだ。

「やってるな」

「ああ、真剣だな」

短く区切って何度も繰り返させている。途中静内が何度も、

「もう少し声を張り上げて。でないと響かないから」

「ここはゆっくりと。あせらないで」

結構細かいところを指摘している。

「あいつ芸術科目はなんだった？」

「音楽だったな」

それなりに音楽に対するこだわりはあるのかもしれない。あまり芸術絡みの話は好きではないと言うけれども、それなりの素養はありそうだ。

「関崎、指揮者はそこまで音にこだわらないとまずいものか」

「本来はそうなんだろうが、俺はそこまで指示できそうにない。たぶんパートリーダーに任せるだろう。あとは古川か」

自分で歌う分にはなんとでもなるけれども、さすがにハーモニー管理までは手が回りそうにない。せいぜい立村と合わせることに徹するのが関の山か。

「前から静内に聞こうと思ってたんだが」

思い切って乙彦は切り出してみた。

「何かあいつ、楽器か何か習っていたんだろうか。そんな気がするんだ」

「わからん。あいつに聞いても教えてくれない。いつもの、プライバシーに踏み込むな、発言で終わりだ」

「なんであれだけ嫌がるんだ？ カラオケであれだけ絶叫している奴が」

「それ言うなら関崎、お前もなんであれだけ歌えるのに楽譜が読めないんだ」

「俺は音楽の授業で習ったこと以外覚えていない。それに楽譜は読める。音符と休符、フェルマータくらいはわかる」

ふたり、時間つぶしの会話に専念した。どうもこの調子だとまだまだ終わりそうにないらしい。もし遅くなるようならこれから学食に場所を変えて自由研究の今後について相談したほうがいい。とりあえず、待つしかないということだ。

突然、呼びかける声を聞いた。

「関崎、待ったか？」

別に待ってはいないがその声に聞き覚えはある。乙彦が声の方向に振り向くと、そこには満面の笑顔でもって階段を駆け上がってくる男子がひとりいた。

——立村？

びっくりはするがあれだけ嬉しそうな顔を見せられるとなるとこちらもそうしたくなる。片手を挙げて合図すると、立村はすぐ乙彦の前に立ちはだかり、

「ごめん、これから一緒に指揮と伴奏を合わせようか」

「あ？」

名倉が怪訝そうに乙彦と立村、そしてその後ろからゆっくり登ってくる女性の先生の顔を見やっした。すぐに気づいた。B組の担任、野々村先生だった。髪の毛をひとつにまとめたいかにも物静かそうな雰囲気を保っていた。

立村は乙彦が返事をしようとするのを遮るようにして続けた。

「補習終わるの待っててくれて助かったよ」

隣りで名倉が乙彦に囁きかける。

「お前、先約あったのか」

「ない」

短く答えたが立村には聞こえないようだった。さらに続けてくる。

「すぐに入ろう。ちゃんと楽譜持ってきたからさ」

いつもの、A組で見せる控えめな態度とは百八十度異なったフレンドリーさに思わずたじろぐ。今度は腕を掴んできた。何があったんだろう。

「どうした立村、俺を待ってたのか？」

少なくとも、乙彦が誘った時に立村は補習を理由に断ったはずだ。それともそれは乙彦の勘違いだったのだろうか。まさか立村は待ってくれていると思って感銘受けたりしたのだろうか。わからない。。

「さっき話してただろ。やはり俺も、指揮と伴奏をあわせる練習だけはきっちりしなくちゃいけないと思ってたんだ。なんとか通しで二曲とも弾けるようになったから」

——そういうことか。

それにしても随分説明的な喋り方をしている。乙彦は立村の側に寄り添っている野々村先生にも頭を下げた。この先生と立村との間にいろいろ面倒な噂があるらしいと聞いたが、誤解されてもしかたないような行動をしているようにも見える。

立村は音楽室の扉に目をやり、また尋ねた。

「誰か音楽室にいるのかな」

ちょうどピアノ伴奏が始まっている。再度初めから合唱の開始だった。「翼をください」が再度流れている。まだ終わりそうにない。もう一度乙彦も扉の奥に目をやり答えた。

「ああ、今、B組がいる。全員ではないんだが、グランドピアノを占拠しているようなんだ。俺もB組の女子に用があるのでこうやって待っているんだ」

野々村先生もその答えを待たずに音楽室の扉の前に立ち、じっと見据えている。この先生はB組の担任だし、義務として様子をうかがいたいのだろう。開けるんじゃないかと思ったがあえて手はかけなかった。立村に向かい、改めて、

「そういうことだったの。ごめんなさいね。クラスの練習ということであれば邪魔しないほうがいいわね。でも、立村くんだけはできるだけ何らかの形で練習できるようにしたほうがいいので、その点は麻生先生や肥後先生にも伝えておきますから。練習がんばってくださいね」

そこまで一気に立村のみに語りかけ、また頭を下げた乙彦と名倉には目もくれず一目散に階段を駆け下りていった。

——なんだあの先生？

一応はクラス担任なのだから様子を伺うと思っていたのだがあてがはずれた。もし麻生先生だったらためらうことなくひょいと顔を出していただろう。思わず、

「B組の先生なのに、自分のクラスの様子を見に行かないのか」

つぶやいてしまった。隣りで名倉も頷いた。立村はふたりに向かってかばうように、

「生徒の自主性を優先しているんだよ。いろいろ事情があるようだし」

説明し、改めて戸を細く開きのぞき見た。

「ピアノ空いてるし、入って練習させてもらっていいかな」

振り返り、輝く瞳で乙彦に問いかけた。今までの立村に見かけたことのない明るい表情が浮かんでいた。こいつと友だち付き合いしてから、たぶん初めてだ。

「お前、そんなに本気なのか」

古川から立村が伴奏者に立候補した時には、クラスの危機を救うためになんとかしたいと普通に思っただけなのではと思っていた。自分でやりたくてならなかったわけではなく、しかたなくといった部分が大きかったのではとも感じていた。

藤沖をはじめとするクラスメートたちも、事情が事情だけにしかたないと理解こそするものの

、あくまでも臨時の扱いであって立村のピアノ演奏技術についての期待はさほど内容に思えた。乙彦も、正直なところ演奏者としてよりも「元評議委員長」としてのプライドのほうが強かったのではと考えていたところもある。

しかし、

——立村、本当は、心底ピアノを弾きたかったんじゃないのか？

まず、考えられなかった結論。

——ずっと親の手ほどきだけで練習してきたけど、本当は人前で思い切り演奏して喝采されたいとか、そんな気持ちが隠れていたんじゃないのか？

——どんなに下手と言われても、ピアノ鍵盤に触れたくてならなかったんじゃないのか？

理由はわからないが、乙彦の中で熱くほわほわと湧き上がるものがあつた。そのままに言葉を連ねた。両手を握り締め、そっと立村に近づいた。

「立村、わかった。全力で協力する。お前が本気でやるんだったら、俺も指揮者として義務をきっちり果たす。練習しよう。古川とも相談して、できるだけ早くクラス全員での練習に持ち込めるようやってみる。俺も正直自信がなかったんだが、せっかくお前がこんなにやる気になっているんだったら、それに付き合わないわけがない」

名倉ひとりおっぼいてしまうようで悪いが、こればかりはA組の指揮者としての義務をどうしても果たしたい。そこまで本気を出している立村を支えたい。今日はそれが終わってから三人で学食に行くことに決めた。少し小遣いが寂しいがコロッケ二枚くらいは食べられる財布の余裕もある。名倉に話しかけた。

「そういうわけで名倉、せっかくだから音楽室で待ってようか。俺は今からこいつと合唱の指揮と伴奏の練習をする。その後静内と一緒に学食あたりで自由研究のことについてもう一度話し合おう。それでどうだ？」

話している間に立村はそそくさと音楽室に潜り込んでいった。名倉が首をひねりつつ、

「学食に行くのは構わない。だがあの先生、なんだ？」

「野々村先生か」

「なんで音楽室の前で回れ右したんだ」

「俺に聞かれてもわからん」

要するに、名倉も乙彦と同じ疑問を持ったということらしい。当然だ。できればあとで立村に詳しい事情を聞いてみたい。ふたりは後に続いた。

6 独唱（5）

名倉が暇を持て余した格好で開いている席についてぼんやりしている間に乙彦は、立村と一緒に教室最奥のアップライトピアノへと向かった。比較的つややかではあるが、音楽室前方で合唱練習を繰り返しているB組集団の使用しているグランドピアノとは質感が違う。慣れた手付きで立村が蓋を開け、鍵盤にかかっているフェルトをたたんでいるのを眺めていた。気づいた静内が片手を挙げたので頷いておいた。

立村が「恋はみずいろ」のメロディを奏で始めた。B組の生徒が弾いている曲と混じり合いそうだがあまり気にしない。数回同じ小節を練習した後、今度は和音を押し直していた。それなりに曲にはなっている。

「立村、これ、自分ひとりで練習して弾けるようになったのか」

ピアノに向かったまま立村が頷いた。

「厳密に言うとそうじゃないけど、まあ、ある程度は」

「だったら、本番まではなんとかかなりそうなのか」

「弾くだけならたぶんね。ただ、これから合唱と合わせなくてはならないからさ」

もっともだ。さっそく合わせよう。乙彦はすぐ答えた。

「一応指揮の方法は先生から習ったんだが俺には全く何がなんだかわからん。本当なら歌うだけに専念したかったのだが、藤沖があそこまで言うのなら仕方ない。なんとかしなくてはならない」

立村が首をかしげ、ちらと乙彦を見やった。思い出すかのように、

「俺の記憶だと伴奏の時誰も指揮者のほうなんて見てなかったような気がするな」

「それはないだろう？」

「いや、そうだったと思う。みんな好き勝手に合わせて歌っていたし俺がやってたのは歌うタイミングを計ることと、とりあえず盛り上げる時は手を大きく広げるとか、最後とめるところを間違えないようにすることくらい」

「本当にそれでいいのか。俺たちも合唱コンクールは経験したがかなり熱心にやったぞ。とりあえず合わせてみるか」

「そうだね」

立村はさっそく指を鍵盤に載せ、「恋はみずいろ」の演奏を始めた。ちゃんと両手で弾いている。あぶなっかしさはあるがとりあえずつかえてはいない。譜面台に載せた楽譜を見据えつつ、ゆっくり弾いている。

「だいたいこんなところだけど、ちょっと弾き間違えた。ごめん」

最後まで弾き終えた後、立村は照れくさそうに下を向き、改めて微笑んだ。

「俺もよくわからないんだが、指揮者のほうを本来は伴奏が見てやるんだろう」

「そう。本番ではそうしないと」

「とにかく俺がやらねばならないのは、曲を完璧に覚えて、どのくらいのスピードで持っていくかを決めないとまずいということだな」

「そうだね。テンポは関崎が決めてくれないとまずいよ。俺もそれに合わせられるかという問題もあるんだけど。中学の合唱コンクールではとにかく、スピードだけは歌いやすいようにするよう練習したよ」

「テンポか」

指揮者練習の時に指導生徒から口酸っぱく言われたのが、「テンポを乱さない」ということだった。立村も指揮者の顔など見ないとか言っているが本来すべきことは把握しているのだろう。乙彦は指先を動かしながら何度かピアノの前を往復した。自分なりにテンポを把握してみた。立村の弾いているペースだと心なしかゆったりしすぎているような気がする。実際これで合わせるとなると、歌い手はかなり呼吸に気を遣わねばならなさそうだ。

——実際歌わないと、テンポも何も無いんでないか。

早めに古川と相談して、クラス連中と合唱練習をしないとまずいような気がする。だが立村もまだたどたどしい弾きっぷりであることは確かだし、ひっぱられてかえってしくじってしまうかもしれない。それであれば、ひとつ、いいことを思いついた。

——俺が歌えばどうだ？

「ひとつ思ったんだがやはりここは歌がないとつかめないだろ」

「確かに、合唱とあわせたらまた変わってくるだろうしさ」

立村も承知しているようだ。さっそく提案だ。乙彦は切り出した。

「だったらこれから俺が歌って見る。立村、それに合わせてやってみてもらえないか？」

立村は怪訝な顔をして乙彦を見た。そんなに露骨に驚かなくてもいいだろうに。

「そんなに変か？ いや俺としては、実際歌のテンポがどのくらいかを確認するなら生歌でやるほうがずっといいと思うんだ。俺も正直、歌がうまいとは思わないが、それなりに記憶はある。ああそうだ、『モルダウの流れ』ならフルでいける」

「関崎、あのさ、それ、ここでか？ それに他のクラスの人もあるしさ。ピアノ練習している人もいるし」

ちらとB組連中の様子を伺った。それぞれ懸命に「翼をください」を合唱し続けているし静内もヒートアップして「ほら、もう一度！」とか叫んでいるのが聞こえる。たぶんこちらでふたりひっそり練習していたとしても邪魔になんてならないような気がする。乙彦は首を振った。

「いやみんな歌っているか弾いているかだろ。それぞれ別々だ。

それでも立村が不審げな顔をしたままなので、

「気になるなら断ってくる」

静内の元に向かった。ちょうどタイミングよく練習が一段落したところらしい。乙彦が近づくと一緒に名倉もよってきた。やはりひとり寂しいのだろう。

「何、あんたたちも練習？」

「そうなんだ。指揮と伴奏を急遽合わせることになったんだ。終わったら学食だ」

「了解。うちのクラスもそろそろ終わるけど、もう一回くらい自由曲と課題曲流したいのよね」

見ると男子も女子も少し疲れた顔をしている。静内にしごかれたんだらう。同じ規律委員の東

堂もいる。

「悪いんだが、これから伴奏の練習用に俺が歌うことになるんだが、お前らの練習の邪魔にならないかだけ確認したかったんだ」

「歌う？」

静内と一緒に名倉も尋ねた。そんな露骨に驚かなくてもいいだろうに。

「まさか、関崎、あんたが？」

「そうだ。まだ伴奏が合わせられる状態じゃないんだが、できるだけ歌でなれておいたほうがいいと俺は思うんだ。それで合唱ならぬ独唱でどうだろうということなんだ」

「別にいいよ。わざわざ断らなくたって。でも、面白いその発想。ね、名倉」

「関崎はすべての場所をカラオケボックスにしたいかのようだ」

無表情でつぶやく名倉の頭を軽く叩いた後、乙彦は側で様子を伺っているグランドピアノの女子生徒に頭を下げた。

「悪い、うちのクラスのピアノ弾きはまだなれてないんで、一曲だけ練習するからその間、ピアノを休んでもらえると助かるんだが」

こっくりB組担当の伴奏者も無表情で頷いた。静内にも目線を向けて了解の合図を送っていた。

「じゃあ、またあとで」

B組連中の興味津々たる眼差しを無視し、名倉も放置したまま乙彦はアップライトピアノのもとに向かった。様子を伺っている立村に親指立てて合図を送る。

「みな、少し待っててくれるそうだ。すぐやろう。『モルダウ』は弾けるか」

「たぶん」

答えた立村が、少しひきつったように乙彦の背後を見つめている。乙彦も振り返ると、いつのまにかB組の合唱練習メンバープラス伴奏者プラス名倉、そして率いる静内が近づいてくる。どうやら様子を伺いに来たらしい。男子の中から東堂がにやつきながら立村にに向かい手を振っている。そういえば東堂は中学時代立村と同じクラスだったと聞いている。

——これは本番っぽい雰囲気やれるな。面白い。

どうせ合唱コンクールは人前でやるものだ。できるだけ本番と似たような状態でやれるのが一番いい。立村がまた不安そうに尋ねる。

「関崎いったい何言ったんだ」

「せっかくだったら本番と近い雰囲気の方がいいから、聴いてもらえないかと頼んだんだ」

「ちょっと待てよ、それまだ早いだろ？」

「大丈夫だ。どうせ練習だ。失敗は早いほうがいい」

「そういう問題じゃないって！」

すっかり慌てている立村を見てB組の男子連中もからかうような視線を向け、

「立村、お前まじピアノ弾けたのかよ。笑えるよなあ。しかも今回は独唱のお付き合いか。すげえなあ、出世したよな」

「へえ、立村ピアノ初公開じゃん。見ものだぞこりゃ」

女子たちの立村に対する冷ややかな眼差しが少し気になる。静内も乙彦に近づき、
「関崎も歌うの好きだよね」

肩を軽く叩いた。立村など視界にないといった雰囲気だ。

「あくまでも練習だ。しくじってもばかにするなよ」

——俺ではなく、立村を、だ。

立村は観念したようにため息を吐いて、その後ゆっくりとピアノの鍵盤を奏で始めた。「モルダウの流れ」のゆっくりした演奏は、まだ先の伸びしろがあるということによしにしよう。とりあえずは、乙彦もカラオケとして歌うことができる。それで十分だ。

マイクを通さずに歌うのは久々だったが、音響がよいのだろう、風呂場で歌う以上に気持ちよく響き渡った。声がなめらかに流れ出る。

——やっぱりいいなこれ、生演奏をバックというのはカラオケとのりが違う。

立村のあぶなっかしい演奏すらも、自分でどんどんリズムを作って歌えばいいので遠慮なく進んでいける。途中立村がやたらと早く弾いたところがあって息継ぎに難儀したくらいで、あっさり終わった。

一瞬の間。

その後誰ともなく拍手が響き渡った。最初は女子から、そして男子たち、さらに気づかなかったがグランドピアノの近くでたむろっていた上級生らしい女子たちがみな、盛んに手を打っている。そんな派手なことしただろうか。立村と顔を見合わせていると、

「やるなあ、関崎、指揮者なんてもったいない、なんで合唱にまわらなかったの。私だったら絶対そっちに回したのに」

静内がまた乙彦の肩を叩きながら意味ありげに微笑んできた。

「うちのクラスにはよんどころない事情がある。しかたないんだ」

何度となく説明した理由を口にすると、今度は名倉がが手を叩きながら近づいて握手を求めてくる。いつもカラオケボックスで遊んでいる時はそんなことしないというのに、いったい何の風の吹き回しかと突っ込みたくなる。

「いったいどうしたんだお前ら」

「お前歌謡曲よりこういう曲の方が向いてる」

「名倉そうだね、私も同感」

三人顔を見合わせてわけもなく称え合う。要はカラオケボックスで歌う歌謡曲よりも、こういったきちんとした楽曲のほうが評価高いということなのだろう。

一方立村の方を見ると、東堂が何かいろいろと声をかけている様子だった。しょげこんでいる様子の立村に、

「うちのクラスみたいにやる気ありすぎな方が珍しいんだって。他のクラスも似たようなもんだからそんななあ、めげなくたってなあ」

励ましているんだか落ち込ませているんだかわからないことを語りかけている。他の男子連中も同様で、乙彦にはあえて話しかけようとならない。

「東堂、ひとつ聞きたいんだけどさ」

「はいはい」

「もしかして、うちのクラスになら勝てる、と確信したんじゃないのかよ。伴奏もこの程度だし、歌がうまい奴は指揮者だしってことで」

「そんなひがむなよなあ。ま、ある意味事実ではあるけどねえ」

附属上がり同士の気兼ねない会話を聞き流していると、静内が乙彦と名倉にしか聞こえないようにぼつりつつぶやいた。

「関崎、これからだよ。同じ土俵に立てるようにするの、めちゃくちゃ大変だよあんた」

6 独唱（6）

一曲腹から声を出して歌うのは実のところかなりのエネルギーを消耗する。その後は軽く指揮のタイミングなどを練習した後、

「関崎ありがとう、あとは俺ももう少し自分でさらっていくから、先に帰っていいよ」

立村のありがたいお言葉に促され、外部三人組と一緒に音楽室を出た。B組の連中が帰るタイミングを逃したようにうろうろしていたのもあって、静内はしばらくクラス練習を続けていた。手持ち無沙汰なのは名倉のみだった。

「名倉、悪かったな」

「いや、なかなか面白かった」

感慨深げに名倉がつぶやく。聞きつけて静内が問いかけた。

「何が？ 関崎の独り舞台？」

「それもあるが、お前のスパルタぶりも見ものだった」

言われてみるとその通りで、乙彦も同感した。静内の本気っぷりたるやまさに鬼のようで、恐らくC組の難波と対を張れるくらいなんではないかと思う。乙彦は実際難波の様子を見たことがほとんどないのだが、たぶん並び立ちそうな気がする。

「スパルタなんてあんなもんじゃないわよ。今日参加してくれた人たちがクラスの合唱を引っ張っていくわけだからこのところは本気にならなくちゃなんないわけ。今日参加しなかった人たちにはあそこまでしないわよ。無理やりやらせても無駄だし」

「じゃあどうするつもりなんだ、欠席者には」

思わず尋ねると、

「本気な人たちのパワーで教室を覆うの。そうすれば余裕よ。しかたなく従ってくれる」

「しかたなく、か」

「そう、最近悟ったの」

両手を組み、夢見る乙女のように静内は真上を見上げた。こうやってみると普通のお嬢さん女子高生に見える。

「話、わかる人にだけ頼んで、あとは見捨てていいんだってこと。もう全員の面倒見切れないってこと」

ずいぶん過激なことを言っているものだ。乙彦と名倉は顔を見合わせて頷いた。

——静内、疲れてるな。

学食では一番安いコロッケを二枚だけ買った。名倉も真似して同様に、静内は水のみ。

「節約よ、外部生のたしなみ」

「俺も節約したいんだが、さすがに腹が減った」

「同意」

「あれだけめいっぱい歌ったんだもんねえ」

からかい調子で静内が指先をくるくる回す。揚げたてのコロッケをつまみつつ乙彦は、

「ところで、本題だが自由研究のこと、名倉から聞いたか？」

一番大事な話である。静内も名倉と目で確認しながら、

「もうとっくに聞いてるでしょ。まあね。褒められたんだけどまあいろいろとってとこ」

「B組は面倒だな」

「今に始まった話でないし、私も適当に流しているからどうでもいいんだけど。でもやっぱり手抜きせずに作ったものを褒められるってのはいい気分よね」

「もっともだ。静内ひとりの趣味という気もするが」

つつこんでやると静内は満足げに水を飲んだ。

「そうね。私のやりたいことをやったって感じ。あんたたちには感謝よ。小遣い入ったらコロッケー一枚くらいおごろうか」

「しけたご褒美だな」

名倉の台詞に三人、わけもなく笑った。

——どうなんだろう言ったほういいのか。

相当静内と清坂とのにらみ合いが厳しいものだとは予想していたが、あそこまで言わせてしまうくらいだ、そう簡単に解決などしないだろう。今のところは野々村先生の援護もあって静内が清坂を圧倒しているが、B組以外には清坂を好ましく見る連中だってそりゃいるだろう。C組の評議三羽鳥だって立村つながりで静内を睨みつけることだって考えられる。現に難波は自由研究のことで外部三人組をまとめて一方的に恨み真髓ときている。

しかし、自分たちは別に何も悪いことなどしていない。ただ真面目に勉強しただけだ。

気をなぜ遣わねばならないのか、納得いかない。

「関崎ももう知ってるよね。結局あの担任が露骨な言い方したからまた余計な火種まいちゃってことだけ」

乙彦の考えを読んでいるのか読んでいないのかわからないが、ひたすら静内はしゃべり続ける。

「無視しとけばいいのよああいう手合いは。私はあの人の自由研究になんて興味さらさらしないし人それぞれ好みがあるのだからどうでもいい。現実に足がついていない作文を提出したところで関係ない。でも、どうしてもあの担任は言いたくてならなかったみたい」

「たぶん立村たちと一緒にやった内容だろう。今年 of 自由研究テーマは地道な作業が評価されやすかったみたいだな」

乙彦なりに意見を挟んでみるが、静内は首を振った。

「うちの担任の話だと、単純にこつこつやったこと以上に、しっかりと考えているかどうかが大切だったみたい。私たちそれはしっかりやったと思う。ちゃんと裏付け調査もいろいろしたしね。関崎なんてもうおじさんたちに大ウケだったじゃないの」

「本当に関崎とのやり取りは面白かった」

名倉も同意するのは何か間違っていると思う。

「うちの担任が言うには、妄想をふくらませて架空の世界を綴っているよりももっと現実を見な

さいってこと。言いたいことはわかるのよ。私もファンタジー大嫌いだから。でも、それを選んだ人たちをこれ見よがしに吊るし上げるのはどうかなと思う。おかしいものを正しいと思っている人たちが、その一言で考え変えるわけないし。むしろ、開き直って相手を恨むだけ」

「ファンタジー云々とは別なんだが、俺がひとつ疑問なのは」

ふと思いついたことを乙彦は伝えた。音楽室に入る前の静内が言う「あの担任」についてだ。「俺たちが静内を音楽室前で待っていた時、うちのクラスの伴奏担当が例の先生と一緒に来たんだが、見る限りあいつとはうまくやっているようだ。静内の言う妙な噂が立つのもしかたないかもしれないと思うが、自由研究について文句を言われたわけではなさそうだ。吊るし上げにあった相手と同じテーマを扱っていたはずだから当然あいつにもその旨話しているはずなんだが、なんでだろうな」

「あの伴奏の人ね」

意味ありげに静内はつぶやき唇を歪めた。

「なんとかクラスをなだめることができてよかったわよ。あの担任意外とうちのクラスの女子には受けがいいのよ。だからあんな趣味ではないと思ったかったみたい。それに、彼女の昔の彼氏ってことでただでさえ軽蔑されているから絶対ありえないという意見みたいよ。関崎には悪いけど私はあの伴奏の人、詳しく知らないから伝聞でしか判断できない」

「立村の女子受けは悲惨だな。本当はいい奴なんだが」

ため息をつき残りのコロッケを噛み締める。だいぶ冷めてしまった。

「ただ、噂によると彼はかなり感傷的な小説を提出したらしいと聞いているんだけど」

「小説？」

驚いて問い返すと、静内は無表情に答えた。水をまた一口含んだ後、

「芸術肌の人だとちらちら噂は聞いている。うちの担任は腐っても国語教師だから、小説創作という目で見ると興味をそそられたのかもしれないなって思った。最初っから妄想膨らませるのだったら、創作小説としてさっさと書いてしまえばいいのに。友だちのふんどしを借りてちまちまやるよりもね。私、それをクラスの子たちに説明して納得させたのよ」

「納得、したのか？」

乙彦がしたいと思っていた質問を名倉がした。

「なぜかしちゃった。関崎の友だちには申し訳ないことしたかもね。あの彼とうちの担任との関係については、単純に創作小説の書き方を勉強しているだけであってちっともロマンチックな匂いなんてない。そう説明して納得させちゃった」

「静内、お前」

こんな強引な決着の付け方で許されるのだろうか。乙彦の目の前にいる女子は、とてつもなく策略家のような気がしてきた。敵に回したら怖い相手だ。もう敵判定されてしまった清坂には同情するしかない。早めに白旗挙げたほうがいと立村通して伝えておいたほうがいだろうか。迷っている。

7 録音作業（1）

家に帰ると机の上に封筒が一通置いてあった。乙彦が帰る前に雅弘が母に預けていったものだそうだ。開いてみると「青潟市立工業高校 礎祭」なるチラシが一枚挟まっていた。さらに中には、チケットも数枚含まれている。よく見るとクラスの出店で提供するドーナツセットとセットのコーラが購入できるものが一枚、もう一枚が吹奏楽発表会のチケット。チケット代は記載されていない。

学祭は九月第四週の土日。合唱コンクール後なのありがたい。中旬ではなかったらしい。雅弘もあの子供向けのミニリヤカーのようなものをこしらえるためにのこぎりやかんなと格闘しているのだろうか。

——絶対行くぞ！

乙彦は財布にチケットをしまい、雅弘の家に電話をかけたが残念ながら奴はいなかった。まあいい、あとでもう一度連絡しよう。

次の日、朝一番で教室に向かうと待ってましたとばかりに静内と名倉が待ち構えていた。わざわざロビーにいるというのがいかにもだ。

「おはよ、関崎」

「お前らまたどうした。またなんかあったのか」

「起こしたのはあんたじゃないの」

静内はブレザーをしっかりと着込んでいた。まだ九月のうちは夏服でも構わないが一応うす手のブレザーは購入を勧められていた。もちろん乙彦が購入するわけもなく、先輩たちから譲り受けた制服を着るだけだが。どちだにせよ風はもう夏のものではなくなっている。

「大騒ぎなんだけどどうする？」

「何がだ」

「さっきA組の女子連中がお前の噂をして去ってった」

名倉が腕組みをして言う。

「噂だと」

「そうだ。なんでもお前の歌が絶品だったという話を別のクラスの女子から聞いたんだそうだ」

「いったいどういうネットワークなんだ」

話が早すぎる。乙彦はたまたま立村と一緒に練習をただけであって、たまたま歌っただけのこと。あの中にはB組のかなり絞られた人数しかいなかった。それを静内に伝えると、

「内部生のネットワークってすごいね。私も知らないうちにあつという間に全校生徒に広まっちゃったみたい。さっきもね」

小声でささやく。

「三年の評議委員長の先輩いるでしょう」

「結城先輩か」

「私、さっき呼び止められて聞かれたわよ」

静内は評議委員だから結城先輩と顔見知りでも不思議はない。

「関崎がまた何かしでかしたのかってことをね」

「お前なんて言った？」

念を押しておく。別に悪いことはしていないつもりだが。

「そのまま普通に話したわよ。A組の指揮者と伴奏者の練習で、流れで歌うことになっただけって」

「結城先輩はそのあと何か言っていたか」

「別に何も、ねえ」

名倉も一緒だったらしく顔を見合わせたが、

「ただ、気になることと言えば、あの伴奏の人には気を付けたほうがいいってね」

「また立村のことか」

ずいぶんと立村叩きがあちらこちらから見え隠れする。結城先輩も中学時代からの因縁がいろいろあるのかもしれないが、外部生の乙彦からするとちょっと立村がかわいそうだ。

「言いたいことはなんとなくわかったからはいとだけ答えておいたよ」

「俺も言いたいことはあるがとりあえずいい」

どちらにせよ、乙彦がまたA組で騒ぎの火種を巻いてしまったことは確かのようにだった。

朝の外部三人組集会を終えて、A組に向かう。

予想通り、すでに教室には藤沖、古川、片岡、そして離れたところに立村が揃っていた。他の女子たちも明るく「おはよう関崎くん！」と声をかけてくる。ついでに

「関崎くん、昨日歌ったんだって？」

探りを入れてくる。別に隠すことではない。頷くと、

「B組の子たちが絶賛してたよ！　すごく上手だったって」

「今度音楽の時間に歌うべきだよ」

口々に目を輝かせて語りかけてくる。本当は一緒にピアノ伴奏した立村の努力をたたえたほうがいいのではと思うのだが面白いくらい無視している。とりあえず答える。

「いや、やはり指揮をするには自分でも音が取れないといけないからな」

「関崎くんがカラオケキングだという噂は聞いてたけど、みんなオペラ歌手みたいだったって興奮してたんだから！　なんでうちのクラスにはそれ隠しちゃうの」

「隠してはいるがたまたまなんだ」

褒められるのはありがたいが、なんでそんなにみな食いついてくるのだろう。いつの間にか藤沖が近づいてきてくれて、交通整理をしてくれた。女子たちもそれぞれの席でひそひそ話に切り替えている様子。ほっとした。

「さすがだな、またお前の伝説が響き渡ってるぞ、朗々とな」

藤沖は乙彦に話しかけ、また満足げに目を閉じた。

「何がだ。俺はまじめに合唱コンクールのために」

「わかっている十分にだ。それはそうとこのクラスでは公開しないのか？ 俺たちはみな待ち構えているんだが」

からかうのではなくかなり真面目な口調で尋ねられた。次いで、

「そうだ、提案なんだがそろそろうちのクラスでも合唱の練習を本格化させないか？ B組もそうだがC組の猛りっぷりたるやすさまじいものだぞ。朝・昼・夕ととにかく時間があれば歌い続けている」

噂のC組状況についてもレポートしてくる。相当難波が燃えているとみた。とてもだが戦う気がそがれる。

「来週からと古川からは説明を受けている。俺もそれでいいと思う」

少しなだめる意味で口を挟んだが熱く燃え滾った藤沖には通じない。

「いや、遅いだろう！ いいか、とにかく早めに俺たちは前に進まないとならないだろう。俺がお前を見込んであえて推したことが間違っていないという証明はできた。さてさて、これからだぞ、目指すは優勝だ！」

「本気でお前それ言ってるのか？」

思わずつぶやいた。静内の指摘がひっかかっているところもあり、いつかは話を持っていかねばとは思っていたのだが、こうやって一体一で話している限り十分やる気に満ち溢れているような気がする。相棒の古川も坊主頭の藤沖を撫で回しつつ、

「まあまあ、藤沖もそう燃えなさんな。あのねえ、私だって本当は早く練習始めたいよ。わかるよそのくらい。でもさ、みんないろいろと面倒な事情がてんこ盛りなのよ。世の中には短期集中型が向いているグループもあるのよ」

なだめるように話しかけ、ぐるりと教室内を見渡した。こくっと頷き、

「たぶん私が見る限りうちのクラスはそちらのタイプよねえ」

しみじみとつぶやいた。さらに、

「それにさ、私思うんだけどね、さっさと早いうちにデモテープを作っておけば練習しやすいんじゃないの。そのデモテープを作るためにまずは立村の伴奏を完成させる必要があるんだよね。それまであともうちょっと必要ってどこ？」

立村を見やる。ここまで話題の九十九パーセントは乙彦に向かっていたのだが、ようやく他の連中も立村に視線を向ける。困った顔でもって立村も答えた。

「今週いっぱい、時間もらえれば、たぶんある程度は形になると思うからそれまでもう少し待ってもらえるかな」

藤沖が「お前どうする？」的な視線を投げる。あまり希望を持っていない様子だ。乙彦も正直、時間がどうかと思わなくもないのだが立村の努力だけは買ってやりたいと思う。

「俺も立村の意見に賛成だ。昨日合わせてみたができればもう少しうまくなってからのほうが歌いやすいんじゃないかという気がした。俺ひとりの判断だが」

露骨に不満そうな顔をする藤沖。やはり面倒な関係は継続中だ。

「だが、伴奏が完璧になるのを待っていたらいつまでたっても始まらないだろう」

「ならどうすればいいだろう」

不意に藤沖が立ち上がった。

「俺に提案がある。すまないが宇津木野、疋田の我がクラスの誇るソリストおふたりに相談がある」

きょとんとして宇津木野、疋田のコンビが顔を向ける。疋田さんが人懐っこく、

「どうしたの？」

問いかける。藤沖は腰を低く、深い声で、

「今日の放課後なんだが、悪いが一瞬だけ助けてもらえないか」

頼み始めた。ピアニストふたりは顔を見合わせたが、すぐに疋田さんが返事をした。

「ピアノのことなの？」

「無理にはと言わないが、この関崎の独唱に伴奏をつけてもらえないか。それと、昼休みのうちに俺もテープを買っておくから、古川、肥後先生からラジカセを借りてきてもらえないか」

古川の

「なんなのいきなりあんた、何スイッチ入ってるんだか。いわゆるさかりがついたって奴？」

茶化しも無視して藤沖が語り始めた。お得意の演説が始まりそうで乙彦はひそかに注意のランプを頭に点灯させた。

「昨日、関崎があのごつい顔にしては想像できないような美声をB組の連中の前のみで披露したと聞いて、どうしてもそれを確認したい気持ちがある。だがまだ中途半端なピアノ伴奏で奴の歌を観賞するのはどうも好かん。そこで、ふたりならば関崎を包み込むにふさわしい伴奏をしてもらえと思う。もちろん合唱コンクールの諸事情については古川からもよく聞いているし無理はしない。だが、せめてA組の中だけでも本物の伴奏というものを頭に焼きつかせたいんだが、どうだろう。忙しいところ申し訳ないが協力してもらえないか」

——おい、これ立村をこけにしすぎてるんじゃないのか。

乙彦が嘴を挟む前に古川がフォローに回った。無謀な提案としか思えない。止めるのかと思いきや、

「ごめんね、いきなりでびっくりしたかもしれないけど、ただまあここだけの話だけど、私も関崎がひとりでカラオケでのマイク離さずにいる姿は拝見してるんだよね」

裏切った。いつのまにか藤沖と古川、共同戦線を張っている。乙彦が気づかぬうちにだ。褒められることこの上なし。こちらではどう言い返せばいいのかわからない。

「まじ、ほんと、うまいんだから。たぶんB組の子たちが驚いたのもそこにあると思うんだよ。私、音楽のことよくわかんないけどね、ただ、ピアノを本気で弾いているふたりに伴奏してもらえたら、関崎もうれしいんじゃないかな」

肘でつつく。ここで、何か調子のいいこと言えというのか。お門違いだ。こちらはただ黙って凍りつくしかないというのに。乙彦の顔をまじまじと見つめたソリストふたりは顔を見合わせて何かを思ったかのように頷き、

「私も、そんなに関崎くんが上手なら、ぜひ伴奏してみたいな」

宇津木野が小声で囁いた。背の高いわりに引っ込み思案の通称「ピアノの女神さま」宇津木野の発言に思わずみなどよめいた。同時に疋田も両手をぎゅっと握り締め何度も頷いた。小柄だが行動力はあるように見える。すぐに立村に声をかけた。

「宇津木野さんがそういうんだったら私も付き合う。立村くん、楽譜ある？」

立村も思わぬ展開に凍りついていたようだが、すでに強力解凍剤の古川こずえがフォローに回った。

「大丈夫、こいつさっきから机の中に楽譜突っ込んでて、朝学習終わったらひたすらじっくり見入ってたよ」

「でも練習とかしないとまずいんじゃない？」

立村の細い声をすぐに打ち消す疋田の言葉に、乙彦は立村への哀れみをひしひしと感じた。これは男として、寂しいだろう。

「私たち、初見であの程度の曲、いつも弾いてるから放課後見せてもらえれば十分間に合うと思うよ」

——立村はこのふたりがあつという間に弾ける曲を、さみだれのように必死にたどるしかないんだよな。これは、男として、辛いだろ。誰かカバーしろよな。

哀れな立村を慰める奴はひとりもない。藤沖が勝ち誇ったかのように言い放つ。

「よし！ なら今日はみな、無理にとは言わん。クラスで時間が少しでもある奴集まって、関崎の独唱と我がクラスのピアニストを愛でる会を行おう！ 古川の言う通り合唱は短期集中型だが、本物を耳にするしないとでは全く違うぞ。それとだ、この独唱会は特別に俺がカセットテープを一本私費で負担する。録音するぞ。そのテープを聴きながら最初はとことん練習だ」

「ちょっと待て、俺はまだ歌うもなにも」

「クラスの合唱コンクールに協力できて、お前もカラオケボックスに行かなくても好きな歌を思う存分歌える、しかも生演奏だぞ！ いいか、俺はやるぞ、やるからな！」

乙彦の意思を無視して、とうとう「関崎乙彦独唱コンサート」の企画が立ち上がってしまった。藤沖のやる気なしという評価を否定できたのはよかったが、完全に蚊帳の外におかれた立村のいたたまれなさ、また見世物みたいに歌わねばならない我が身の立場に乙彦も頭を抱えたい気持ちで正直だった。そりゃ、歌いたいし楽しそうだと思う、しかし。

そっと立村に近づき、藤沖たちに聞こえないように囁いた。

「決してお前を下手だとは言ったつもりないんだが、完全にこのままだと誤解される。俺としては一週間かそこらであそこまで弾けるようになった立村も相当だと思うが」

「いやいいよ。事実なんだから。それに俺も、あのふたりのピアノでの伴奏は録音したいしな。昼休み、自分用にテープ持ってくるから、関崎悪いけど各二回、歌ってもらえると助かるよ」

——こう見えて立村、お前も十分やる気なのか！

おそるべし。英語科一年A組、十分過ぎるくらい気合の入ったクラスだった。乙彦は今改めて思い知った。

7 録音作業（2）

話はとんとん拍子で進み、古川がまずは音楽教師の肥後先生に音楽室を放課後一番で使わせてもらう許可をもらい、麻生先生には藤沖が二時間目の休み時間に報告しにいった。その後も各授業の休み時間の合間合間に話を進めている。教室ではピアニストコンビが熱心に頭を付き合わせている。結局昼休み後決定したのが、

「放課後一番にA組全員ダッシュで音楽室に向かい、カセットテープを準備した上で独唱を披露する。終了後は他クラスの練習を邪魔しないように早々に立ち去ること」

この予定ということだ。

——こんないきなりでいいのかほんとに。

乙彦の独白も誰ひとり聞いちゃいない。あっという間に帰りのロングホームルームと相成り、麻生先生も楽しみに、

「藤沖の発想にもたまげたが、関崎が喜んで乗ってくるのもびっくりだ。できれば俺もお前らのミニコンサートを楽しみたいところなんだが残念ながら会議がある。録音してくれるというのならぜひ、後で聴かせてもらえるもんだと信じたんだけど、期待していいのか」

完全にのりのりだ。思わず口ごもるが古川がすぐに切り返す。

「先生、それ無理よ。音楽は生ものだから、足を運ばなくちゃ」

「それがたやすくできるようなら俺も教師なんかやってないぞ。とにかくだ、我がクラスのピアニストふたりの名演奏もぜひぜひなんらかの形でお目にかけてくれることを楽しみにしているぞ。どうせ合唱コンクールでは」

ここで何かを言いかけたが飲み込むようにして、

「まあ早く練習するに越したことはないがな」

言葉を濁した。号令が終わるとそそくさと教室を出て行った。

立村が楽譜を取り出したのを見つけてすぐ古川が預かり、

「それと関崎、ちょっと来な」

近づき乙彦を呼んだ。

「どうした、これから音楽室に行かないとまずいだろう」

「その前に楽譜、楽譜。あんたもおいで。あ、立村はここで待ってな。一緒に行くからさね」

側でぼかんとしている立村を尻目に、古川はすぐその楽譜を宇津木野と疋田に手渡した。「ねえねえ、これ立村からぶんどってきたんだけど、この楽譜、今のうちに目通ししておきたいかなと思って」

手早い。すぐにふたりは目を輝かせて受け取った。疋田がまたこくこく頷きながら、

「ありがとう、古川さん助かる」

開きつつ宇津木野に話しかけている。

「ほら、曲、どうする？ 今度は私が『恋はみずいろ』弾くから、『モルダウ』にする？」

されるがままの宇津木野は素直にその選択に従った。吹奏楽連中から「ピアノの女神さま」と

称えられるだけの才能を持っているとは聞いているが、その生演奏で歌えるとはかなり小っ恥ずかしい。とんでもないところで音を外さないようにしなくてはならない。少し咳払いして喉の調子確かめてみる。異常なさそうだ。

「まあ立村でもなんとか弾けるようになったってことだからそれほど難しくないよね」

「うん、そうだね。早く見せてもらえたから大丈夫。それと関崎くん、歌のタイミング、私もできるだけ合わせるつもりだけどスピードが合わなかったらあとで言ってね。何度でも弾き直すから」

疋田は乙彦に熱心な口調で頼み込んだ。続いて宇津木野も、

「私も」

はにかみながら続いた。心底ピアノ演奏を愛している様子が伺いしれた。このふたりの技量はともかくとして、中途半端な歌い方はできない。こちらも気合を入れるしかない。

「ありがとう。俺としてもカラオケ以外で歌うのはそうそうないことなんだ。生演奏というのは贅沢だが、昨日立村と組んだ時も気持ちよかった」

「生が好きなのねえ、生、が」

また余計な茶々を入れる古川も、すぐに真顔に戻り、

「立村のレベルじゃないからねえこの二人。ま、ふたりとも大変な時なのにわざわざ手伝ってくれて本当に感謝！ ふたりが弾いたところは録音して、あのへっぽこ伴奏者に耳たこになるくらい聞かせてしごくから安心してよ」

——へっぽこ、とは穏やかじゃないな。

乙彦は振り返った。立村が居場所なさげに小さくなり、またちらと乙彦たちのほうを様子見していた。視線ががち合い、立村のほうからすぐにそらした。

そのまま藤沖たちと一緒に教室を出た。宇津木野、疋田の兩名も楽譜を抱きしめたまま仲良く階段を昇っていく。乙彦も続こうとしたが、

「関崎、ちょっと待て。ちょっと付き合え」

無理やり回れ右させられた。古川も一緒に、

「そうだよ、寄り道しないとね」

ふたり背中を押し、最奥の職員室へと押し出していった。

「何か荷物でも持っていくのか」

「荷物、まあ確かにそうだ」

古川と意味ありげに笑みを浮かべる。職員室に入りつつ、

「今日は職員会議だそうだが、約一名、未練ありありの御仁がいるからな」

「麻生先生に用事か」

よくわからない。わかっているのはどうやら我がA組評議コンビのみのようだ。まだ会議は始まっていないらしく先生たちもそれぞれ席でお茶を飲んだりしている。麻生先生も同様に何やらノートを開いてメモを取ったりしている。

「先生、失礼します」

「よお、お前らこれからコンサートだろ」

「先生もよろしければいかがですか？ 他の先生も誘って」

にやっと古川がささやく。いや、ささやくというよりもかなりどでかい声で、

「やっば、生の演奏と歌ってのは録音では楽しめないものですよ、ねえ」

わざとらしく語りかける。藤沖もまた同様に、

「先生どうですか、せっかく関崎ががんばってくれるんです。それにこういったらなんですが、本番は関崎指揮者です。しかも演奏が」

「わかってるわかってる。お前らの言いたいことはよくわかっているんだ」

不機嫌そうな顔をこしらえているように見える麻生先生。どこか芝居がかった口調で、

「だが大人にはなあ、会議ってもんがあるんだ。あと十五分くらいしてからだがな」

「先生、今日は誰か停学になったとかそういう話はないですか」

「ないな別に」

三人で職員室中に聞こえるよう会話を交わしていると、そりゃ他の先生たちも視線を向ける。しかも斜め前からは静内が野々村先生と何か打ち合わせをしている。たぶん聞こえているだろう。ちろちろ見ている。野々村先生が麻生先生に話しかけた。

「合唱コンクールの練習なのですか、麻生先生」

「そうなんですよ聞いてくれますか野々村先生」

渡りに船、とばかりにしゃべりまくる麻生先生。

「うちのクラスの生徒で合唱コンクールの伴奏から外れた生徒ふたりが、噂では美声を持つと言われるこの関崎のために生演奏でミニコンサートを行う予定なんですわ。他クラスでもその話題で持ち切りで、俺も今日は三年のクラスの連中からもそのことについていろいろ聞かれたわけなんですよ。これからすぐ二曲歌って解散になるんですが、会議がねえ」

——なんだそのわざとらしい口ぶりは。

鈍感乙彦もさすがに麻生先生の思惑を感じ取らざるを得ない。

野々村先生に静内が、極めて上品な優等生面でもって話しかける。

「関崎くんは本当に歌が上手なんです。私も昨日偶然耳にしました。合唱コンクールのお手本になりそうな歌声でした」

——嘘つけ。カラオケボックスでいやというほど聴かされたからだろ。

つつこみたいのを我慢する。とりあえずここでは静内も乙彦も外部の優等生だ。

野々村先生があら、といったふうに乙彦を見やると他の席にいた先生およびたまたまうろついていた教頭先生も興味を示したらしく、

「麻生先生、生徒たちのミニコンサートですか。二曲で済むのであれば会議開始を少し遅らせてもいいですよ」

援護射撃をしてくれ、さらには、

「僕もぜひそれは聴きたいですねえ。敵前視察という意味も込めて」

三年の担任教師数名がにやつきながら近づいてくる。

「麻生先生、では十五分だけ特別授業に行ってもらっちゃい。報告もよろしく」

生活指導担当の先生にも快く送り出され、とうとう麻生先生は申し訳なさそうな顔を作り、「いや、クラスの私事で申し訳ございません。こいつらのへっぽこ演奏を確認したらすぐ戻りますのでよろしくお願いいたします」

勢いよく立ち上がった。乙彦がぼかんとしている間にも向かいにいる野々村先生と静内も意見が一致したらしく、

「それでは私たち女子軍もお供いたします」

涼やかに微笑んだ。後ろでちらと乙彦にやんちゃな目つきで合図を送るのがやはりいつもの静内だった。

見送る先生、ついてくる先生、それぞれになぜか肩を叩かれ激励されつつ、よくわからないなりに乙彦は職員室を出た。麻生先生が古川と藤沖に意味ありげに手を差し出していたのを見ると、やはり何らかの企みごとがあったとしか思えない。まあ、これは無視することにしよう。今は歌うことに集中せねば。

7 録音作業（3）

音楽室に足を踏み入れた瞬間、何が起こったのかがよくわからなかった。

——なんなんだ、この人数。

一年A組が全員揃っているのはまだわかる。ライバル心あふれるC組評議三羽鳥をはじめとするみなみなさまが揃っているのもまだ理解できる。いや一年全員がいるのもかなり無理して理解ができる。

しかし、なぜここに、二年、三年の生徒たちまで集まってきているのだろう。しかも後ろで楽しげに手を振っているのはかの「日本少女宮」マニアの結城先輩ではないか。

——なんで先輩たちまで集まってきてるんだこれは。

もちろんその他規律委員の先輩たちも混じっている。はっきりしているのは音楽室の席が足りないのでみな立ったまま聴くことになるであろう、それだけだ。

今だ状況が把握しきれない乙彦の隣りで、麻生先生の挨拶が始まる。一年A組担任としての義務であろう。なにせ職員会議を延期してきたのだから。

「それではただいま会議を一時休止して、一年英語科が送るハプニングミニコンサートと行くわけだが、まずは紹介だな。まず、我がクラスの誇るピアニスト二名、そして今回特別にソロデビューを果たす関崎。これだけお客さんに集まってもらったら燃えるだろう、な、関崎？」

「もちろんです」

反射的に答えたのみ。そう答えるしかない。古川がいつもの調子で合いの手を入れる。

「公開本番だもんねえ、そりゃ燃えるよねえ」

「こら、古川お前も女の子なんだから」

いつのまにか疋田、宇津木野の両名が乙彦の隣りに並び丁寧な礼をする。いつのまにか準備はちゃくちゃくと進んでいるようで、肥後先生がラジカセとカセットテープをセッティングし、マイクをなぜかピアノの上に載せた。

「迫力があるほういいからね。では、初めてくれるかな」

「はい」

まな板の上の鯉とはこんな気持ちのことを言うのだろうか。奏でられた「恋はみずいろ」の前奏リズムをつま先で取りながら、乙彦は疋田に合図を送り歌い始めた。たぶん、間違えないですんだと思う。生の演奏はカラオケの音とは違う深みがある。

みな、静まり返っている。自分の発する声だけが朗々と響く。

拍手喝采沸き起こる中すべきことは。

乙彦はすぐに疋田に向かい礼をした。

「ありがとう。ピアノの音がこんなに歌いやすいとは思わなかった」

「関崎くん、やはり本物だったね。私も楽しかった」

笑顔を浮かべる疋田がすぐに立ち上がり、脇でスタンバイしている宇津木野と、

「じゃあ、あとはよろしく」

「うん」

短く言葉を交わして聴衆の中に混じっていった。

「あの次も、よろしく」

宇津木野は長い髪の毛で頬を隠すようにして、

「私の方こそ」

小声ではにかみながら答えた。次は「モルダウの流れ」。

——なんだ、なんか違うぞこの音は。

最初の一音が響き渡った瞬間、足田が弾いた時とは違うざわめき起きた。

決して邪魔するようなものではなく、なんとなく空気が揺れただけのことだが。

すぐにみな静まり返り宇津木野の演奏に聴き入り、誰ひとり言葉を発しない。

立村のたどたどしく弾く音色と比較してはいけないとわかってはいても、やはり歌うタイミングを逃しそうになる。そう、曲の醸し出す大河の流れに乙彦の声自体が押し流されそうな感覚がある。まずい。飲まれてはならない。宇津木野のちらと乙彦に向ける頷きの合図でかろうじてタイミングを逃さずにすんだ。このリズム、やはり慣れないとまずい。

——なんだか身体の奥底を叩きつけるような感じがするんだかなんでだ。

理由などわからない。こちらはひたすら声を張り上げるしかない。幸い誰も笑わないからいいようなものの、下手したら宇津木野のピアノに食われてしまいそうで焦りも出てくる。波、ひたすら波。溢れ出るような高まり。これってなんなのだろう？

今まで感じたことのないリズムの変化に戸惑いつつも、なんとか無事歌い終えた。間違えなかっただけでいいだろう。しかし足田もそうだが宇津木野の弾いた渾身のメロディーを使いしばらくは合唱練習が繰り返されると考えると、すぐ側で小さくなっている立村の立場が痛々しい。あとで乙彦なりのメッセージを伝えておかねば。

「さすがだ、関崎くん、お見事だ！」

拍手が再び沸き起こりなかなか止まない。結城先輩のブラボーも拍手である程度ごまかされている。カラオケボックスでもこんなにアンコールされそうなのりの反応あったらだろうか。とりあえず宇津木野に近づき礼をし、思わず目を潤ませている様子に対応を迷っているうち、後ろで乙彦の肩を抱く奴に引き戻された。ひとりしかいない。

「とうとう、一般公開しちゃったな」

「いや、そんなつもりではないんだが。だが生演奏はやはり最高だ」

まだ歌った後の全力疾走感が抜けない乙彦としては少し息を整えたかった。隣りには片岡も笑顔いっぱい乙彦を見上げている。みると女子たちは足田宇津木野両コンビを囲み、すごい、すごいと繰り返している。脂ぎった額をハンカチでぬぐいつつ、今度は麻生先生も乙彦を囲む輪に加わった。

「ああ、なんだろなあ、うちのクラスにはこういう隠れた才能がばりばりあるってのになあ。これこそ合唱コンクールで出すべきだよなあ。藤沖どう思う？」

「俺も賛成です。関崎、これからはお前が我がクラスのマイスタージンガーだぞ」

「藤沖、マイスタージンガーってなんだ？」

「直訳すれば、私のスターの歌手だろ」

「お前ら、少し教養つつうの勉強しろ！ いいか、マイスタージンガーとはだな、ワーグナーの有名なオペラの題名だ。図書館に行って調べてみる」

他クラスの男子たちも近づいてきて感想を口々に語りかけてくる。今まで一度もしゃべったことのない奴も混じっている。別クラスの担任教師も近づいてくるがさすがに野々村先生と一緒に静内はまだよってこなかった。それにしても名倉がないのが残念だ。

ふと、目の前で立村がラジカセをいじっている。カセットテープを入れ替えるようなことをしている。そうだった、忘れていた。本当はもう一度歌わなくてはならないのだ。

「おい、忘れてた、立村」

立村はすぐ振り返った。少し申し訳なさそうな顔をしている。

「何か」

「お前に頼まれてたこと忘れてた、悪い。これからもう一度歌わないとまずいだろう」

乙彦の顔を見てまた立村は困ったようにうつむいた。側からいつのまにか近くに来ていた静内が問いかける。

「なんでそれやんなきゃいけないの」

「ああ、さっき、立村に自分の練習用にもう一本テープを録音してほしいと頼まれていたんだ。それで一本目は保存して、二本目は入れ替えてと、そういうつもりだったんだ。立村もさっきテープ入れ替えてただろ？」

静内が胡散臭げに立村を見やる。このふたりどうも相性があまり良くないようだ。まだ言葉も交わしていないだろうに、先入観で決め付けるのはよくないと思う。押されたのか立村も慌てたように首を振り、

「いや、いいよ。あとで古川さんにテープダビングさせてもらうし。それに関崎も疲れているだろうしさ」

ねぎらった。それごらんとばかりに静内も続ける。

「こういったらなんだけど、関崎、あんた調子にのって喉壊したらどうするの。少し養生しなよ。無理することないじゃないの」

「だが約束したからな」

「約束なんて、あんな」

またちらっと立村を見やる。なぜか立村には女子を近づけない防虫剤のようなものが降りかかっているようだ。いろいろな諸事情が絡まっているとはいえ、立村がかなり哀れに思える。静内はさらに、A組の女子たちにさりげなく、

「自分を大切にしながらことよ。ね、そう思うよね」

つぶやいた。効果てきめん。女子たちが改めて疋田宇津木野コンビを囲み、

「そうだよねえ、結局立村くんのためだけって冗談じゃないよねえ。ふたりとも一生懸命この時

のために全力投球したんだから義理、ないわよねえ」

あっという間に静内の言い分を受け入れている。やはりこれだと清坂に勝目はなさそうだ。折を見て立村に助言しようと密かに決めた。

様子を伺っていた麻生先生も、

「まああれだ、今日はこのあと別のクラスが稽古控えているんだし、今日はさっさと引き上げないか。練習するなら教室でやればいだろう。テープについてもまああれだ。こういっちゃなんだが立村にここまでの技量は誰も求めてないだろう。お前は自分のできるところまでやればいい」

立村に近づき、穏やかに語りかける。普段立村に向けるきつい口調とは全く別だ。乙彦にも同様に仲介する。

「それは関崎も同様で、新たなチャレンジの指揮者準備に時間を費やしたほうがいいんじゃないかな」

「ですが、やはり約束は」

「いいじゃないか。また続きは教室でやろうじゃないか」

どうやら麻生先生は一刻も早く職員室に戻らねばならないらしい。ピアニストたちもあまり気乗りしないようでただつつ立っているだけ。これは無理強いできそうにないかもしれない。しかし立村のテープのことを考えるとどうだろう。乙彦が改めてたのみこもうと決意した時だった。

「伴奏が大変なら私が代わりに弾いてもいい？」

突然、聴衆の中から声が上がった。同時にすると乙彦の前に小柄な女子が現れた。顔は知らない。真剣な眼差しに圧されてしまう。

「え、あ、あの？」

その女子はくいと唇を引き締め、きつとした口調でひとつの提案をしてきた。

「私もちょっとなら初見演奏できるし、楽譜見ればある程度のところまではいけるから」

C組男子たちがざわめきだした。誰がとはわからないが、少なくとも天羽が、

「瀬尾ちゃん、どうした、ピアノの練習で勝負かよ。まだまだ勝負の時は早いぞ」

口を挟んできたことだけは気づいた。瀬尾という名の小柄な女子はあっという間に疋田・宇津木野から楽譜をひったくり、改めて乙彦の前に立ちはだかった。

「ピアノを一曲弾くとなると体力を消耗するのは私もわかる。だったら代わりに私が弾いてもいいよね。目的は録音するだけなんでしょう。同じ曲ならそれでいい？」

ぜひに、と言おうとしたところで野々村先生が割り込んだ。

「瀬尾さん、あの、先週はごめんなさい」

「先生には関係ありません」

あっさりいなして瀬尾はすっとグランドピアノの前に座った。C組男子女子みな、期待半分不安半分といった顔で様子を伺っている。戸惑っている聴衆は誰も帰ろうとしない。

瀬尾は改めて乙彦に指示した。

「マイクの準備をお願いします」

「なら俺も歌って、いいのか」

確認すると、瀬尾はにっこり微笑んだ。

「もちろん！」

疲れなんかどこか行った。のど飴なんかなくてもいい。ここまでやる気に満ちあふれた伴奏者が立候補してくれるクラスに勝つなんてことは並大抵のことじゃないだろう。流れだした「恋はみずいろ」も、次に続いた「モルダウの流れ」も、さっきの宇津木野の演奏ほどではないけれども立村よりは遥かに歌いやすく心地よかった。レコード、カラオケ、リズムの整った伴奏でなめらかに歌うのは、確かに身体が安らぐ。

——C組、この伴奏で勝負するのか。立村、がんばれよ。

「さっすが瀬尾ちゃん、お見事！」

今まで遠慮がちだったC組男子連中が全力拍手を送り、一方でA組連中や静内が乙彦を改めて囲み上気した表情で感動を示す中、立村ひとりが静かにカセットテープを回収していた。あいつもこれから録音したテープを何度も聞いて練習するのだろう。

——俺の歌が役立つか邪魔かは立村の感覚次第だが。

改めて瀬尾に頭を下げ、感動を分かち合ったのち乙彦は立村に語りかける言葉をまとめた。

——あれだけ立派なお手本が手に入ったんだ。立村だってあいつなりに精一杯の演奏をしてくれるはずだ。俺も次は指揮者としてベストを尽くす！

8 季節外れの薫風（1）

土曜日の授業が一段落したあと、乙彦はこのまま家に帰るつもりだった。昼ごはんを食べてからは久々に少しゆっくりしたい。外部三人組同士の集まりも今日は遠慮することにした。身体も頭もこのところみしみしする。

——なんでこんなに俺を見るんだ？

あのミニコンサートが終わってからというもの、青大附高で乙彦に向けられる眼差しには明らかに違いが出てきたような気がする。クラスで不本意にも目立ってしまっているのはもう仕方ない、覚悟もしているがなぜ、三年の女子先輩たちからも興味津々の体でいろいろと噂をされなくてはならないのだろう。おもしろげに笑っている。

——あの場に結城先輩やその他の先輩たちは確かにいたが、だからといって全校生徒に知れ渡ることをやらかした気はないんだが。

気づいたが今回はあえて知らんぷりを通した。藤沖にばれてみる。また意味もなく兄貴風吹かせられるはめとなる。

せっかく宇津木野と疋田が渾身込めて弾いてくれたテープを活用しない手はないと、古川は毎日休み時間と朝夕のホームルームを使って毎日流している。麻生先生も苦笑しつつも、

「音楽はビタミンだと思えばな」

などとわけのわからないことを口走る。乙彦からすれば自分のどら声を毎回聞かされるわけだからあまり楽しいものでもない。気持ちよく歌っているうちはいいのだがテープに録音した声はどことなく違う。他人が気取っているようであまり好かない。

今日の放課後練習はなし、ということで乙彦が安心して教室を出ようとしたところ、立村が静かに荷物を整理しているのが見えた。

「立村、これからどこに行くんだ？」

藤沖も古川もいない教室、立村は穏やかに答えた。

「古川さんの家でピアノ弾かせてもらうつもりなんだ

「そうか、練習しているのか」

「当たり前だよ。あんなすごい聴かされたら、俺もプレッシャーだし」

はにかむように言う立村の言葉に、乙彦も思わず頷いた。そうだった、あれから二日経ったけれども立村にはなかなかこの件で話しかけづらい状況が続いていた。乙彦の高評価とは裏腹に立村に向けられる視線は、怒りこそないけれども哀れみに近いものがあった。あえて誰も何も言わないで、ひたすらに宇津木野・疋田コンビの名演奏に聞き惚れるのみ。立場がないったらない。

「いや、俺もこの点はお前に誤解させてしまったようで申し訳ない。俺としてはただ、立村の参考になればと考えていただけだったんだが、かえって縛り付けるようなことになってしまった。読み違いだった」

まず謝った。

「関崎は悪くないから気にするなよ。俺が練習すればいいだけの話なんだからさ」

いやそういうわけにはいかない。なにせ自分は、
「自分が指揮者として練習する以上、お前にとことん合わせる。一緒にがんばろうな」
——指揮者。歌うのが自分の仕事じゃない、そこなんだ。

一緒に教室を出た。C組連中の調子はずれの声がA組前の廊下まで響き渡る一方、隣のB組は実に静かだった。誰もいない。もちろん帰ったとは思っていない。静内、エキサイトしすぎるなど心の中で釘をさしておく。外に出て青い空のもと、のんびりと肩を並べて歩いた。立村と緊張感なくしゃべりながら歩くのは久々のような気がする。

「明日もピアノの先生に習いに行ってくるから、月曜からは普通に伴奏できるレベルにたどり着ければな」

しみじみと立村が語る。楽しげに見えた。

「家ではどうやって練習しているんだ？ 古川から借りたキーボードか」

「それだけじゃない、この前のテープあるだろ。あれを毎日聴いてる。ひたすら聴き込んで、少しずつ耳慣らしているんだ」

「耳慣らしとはいったいなんだ？」

「ピアノの練習方法。毎日のようにひたすらテープで音を何度も聴きとって、それをまねて、なんとなくこんな感じかなって練習していくとなんとかなるんだ。関崎の歌にひっぱられそうになるけれども本番は全員の合唱だからその点覚悟もできるしさ」

——確か立村、英語の勉強も似たようなやり方でやってるとか言ってたな。

やはり近いうちにBCLについて話をしてみよう。乙彦は促した。

「そうなのか。だが俺が思うに立村、お前は別にあのふたりと同じレベルを求める必要はないんじゃないかと思う。俺もピアノの世界はちんぷんかんぷんだが、たぶん音大かどこか行くつもりなんだろう。そういう奴は毎日五時間くらいピアノを練習して、スパルタ音楽教師にしごかれて毎日苦勞していると聞いている。それも小学校入る前から厳しい特訓ともな」

立村の秀でた語学能力を持つのであれば、もちろんその努力も実るだろう。しかし、こう言うのもなんだがピアノ技術についてはそこまでの高いものを求められない現実もあるのではと思う。なんだか立村はあのコンサートをきっかけに自分を追い込み過ぎて心壊れそうになるのではないかと、ふと心配になる。

「ずいぶん詳しいな」

「いや、学校にひとりかふたりはそういう奴がいるだろう。俺からすると耐えられたもんじゃないが、そういう音楽漬けの生活を送っている人と、こういったらなんだが自己流で練習している立村を比較するのはやってはいけないことだというのもよくわかっている。俺は、お前が自分から伴奏をやりたいと言い出したことそのものに価値があると思っている。たとえどんなにテンポを崩そうが間違えようが俺はお前を責める気などない。とことん俺がフォローする」

「ありがとう。恩に着る」

自分の得意分野とはどう考えても思えない「ピアノ伴奏」にあえて取り組もうとするその心意気を、乙彦としては支えてやりたい、そう思った。密かなる燃え盛るものがきっと隠れているの

だろう。立村は乙彦をじっと見上げ控えめに笑顔を見せた。

古川こずえの家で清坂美里も交えて熱心に練習する立村の姿を想像しつつ、
——だが、あの間、当然浴びせかけられているんだろうな。

さりげなく同情したくなる。立村の性格上露骨な下ネタを楽しげに受け答えするようには見えず、それどころか冷ややかに言い返す姿も目にする。まあ古川との長い付き合いというものもあるのだろうが、はたして古川は立村に天下絶品の下ネタをどのくらいの分量用意しているのだろうか。

自転車置き場で立村と別れ、ゆっくり家に向かい漕ぎ出した。青大附高の校門を出て右に曲がり少し進んだところで、あまりこの近辺では見かけない女子のセーラー襟が目に入った。青大附属は中高ともにブレザーだし大学生は私服なので、それ以外の制服はまず目立つ。お下げ編みの女子がすすすと歩いているところを車道に沿って追い越そうとした時、ハンドルを握る手が一瞬止まった。

すぐ歩道にぴたりと寄った。

相手はまだ、気づかない。冬服の制服なのか、はっきりと濃い紺に白いスカーフが揺れている。きっちりと束ねた乱れのないお下げ髪。乙彦は自転車から降りた。歩道に乗り上げた。喉に巨大な野球ボールが押し込められたようで、声を出したくとも出てこない。かすれた妙ちくりんな声で、一言だけ発した。

「水野さん」

夏休み一日目に見かけたあの時と同じ柔らかな微笑みが返ってきた。

8 季節外れの薫風（2）

家が近くだったこともあって水野五月さんとは何度かすれ違うこともあった。

一番最近なのが夏休み前日だろうか。あの時はこちらから声をかけただけであって直接会話したわけではない。ただ夏服姿のお下げ編みが全く中学時代と変わっていなかったことだけ確認した。真っ白いかすみ草のような雰囲気、秋を迎えてもそのままであることに乙彦はまず、驚いた。

「関崎くん？」

「あ、あの、お久しぶりです」

思わずもってしまう。声をかけたのは自分の方なのになぜあせってしまうのかわからない。それでも無視してすり抜けるという選択肢は最初からなかった。しばらく立ち止まった。

「こっちに用事が？」

「ええ、友だちと一緒にさっきまで歩いていてちょうど今帰るところ」

タイミングよかった。うっかり友だちがいたらこんな気軽に声などかけられるわけがない。まるでナンパじゃないか。こんなみっともないところ同級生たちに見られたらどんな噂をされるか溜まったものではない。乙彦は自転車を水野さんの歩く速度に合わせた。

「元気、だったか、聞いていいか」

「ええ、大丈夫」

最初水野さんも少し戸惑ったようだが、すぐに馴染んで話についてきてくれた。冬服仕様のセーラー服は今の天気だと少し暑いのではと思ったりもする。

「あの、うちの学校は今合唱コンクールの真っ最中なんだが、そっちの学校は」

——俺何話してるんだ。いったい。

「合唱コンクール？」

水野さんが首をかしげた。少し考える風な粗びりで立ち止まり、

「合唱祭というものはあるの。市民会館借りて行うのだけど」

「市民会館？ 本気なんだ」

驚く。青大附高の、気合に似つかわしくないシンプルなやり方……一切外部に公開しない……と比べてこの差はなんなのだろう。女子高だからだろうか。歌うのが好きな生徒が多いからだろうか。

「でもまだ先。十一月を予定しているの」

「そうか。うちの学校は今月の第四金曜なんだが、人に見せないにもかかわらずみな真面目に練習しているんだ。俺も指揮者やることになったし」

「関崎くんが指揮者？ いいと思うわ」

少し首を傾げて考えた後、水野さんは頷いた。そうあ、いいか。

「そっちは？」

「やりたいという人もいるけれど、あまり興味ないという人も多いわ」

言葉控えめに水野さんは答えた。

「もともと、学校に来る人と来ない人がはっきり分かれているから、クラスで何かをするといった雰囲気がないの」

「水野、さんは学校に行く人なんだ」

「そう。だって」

言葉を抑えるようにして、水野さんはつぶやいた。

「あんなに高い入学金と月謝、その他いっぱい払ってもらっているのに、いい加減な生活なんてできない」

——そうだ、そうなんだ。私学はそうなんだ。

恵まれ過ぎて忘れかけていた感覚が蘇った。

——俺は、贅沢出来る身分じゃないんだ。

水野さんが公立高校受験に失敗し、いわゆる滑り止めの私学・可南女子高校に進学せざるを得ないと覚悟を決めた時、乙彦はその場にいた。同じ私学へ進学するにしても、青大附高の学力レベルとは全く異なる可南女子高への進学。決して明るい材料ではなかったはずだ。その後可南女子高校に関しての噂をちらほら耳にするが、信じがたい授業態度や出席率の低さ、あの霧島も言っていたのではないか、「青渦の女子刑務所」と。

——ろくでもない環境なんだろう。その中で、それでも水野さんは。

染まっていない。制服も乱れなく着こなし……可南女子高校の校則はよくわからないが乙彦が見る限りはスカーフが極端に短かったり髪にパーマがかかっていたりとかそういうことはないので憶測だが……中学時代の生活委員時代と変わらぬ真面目さを保っている。

「あ、そうだ。俺今、規律委員なんだ」

——いったい何言ってるんだ俺。

思ったことが口から飛び出してしまう。脈略なさすぎる。また心臓がばこばこ言い出す。

「規律委員？」

「いわゆる水鳥中学でいう、生活委員なんだ、水野さんがやってたのと一緒だ」

かなり意味不明なことを口走った自覚はある。女子と話すことについては中学時代よりもかなり鍛えられたと思うし、実際抵抗は少しずつだがなくなっている。しかし、静内や古川をを相手にするようならっぱちのことも言えるわけがないし、清坂を相手にするときのようにさっさと話を済ませて追い払いたくなるような違和感もない。とりあえず一緒に歩くことは問題ない。できればこのまま歩いていきたい。だが、会話そのものが選べない。かつて水鳥中学の生徒会副会長と真面目な生活委員というつながりであればそれなりに共有するものもあるのだが、今はあまりにも遠い。

「遅刻する奴に違反カード切ったりとか、制服の乱れをチェックするとかやってるが、近いうちに手芸関係の行事も参加するらしいんだ」

「手芸？ 生活委員が？」

ぽかんとした顔で水野さんは固まった。それは乙彦も最初聞いた時そうだったから驚かない。

「俺もよくわからないんだが、ファッション関係に詳しい生徒がよく担当する委員会らしいんだ」

。俺もこのまま後期、規律委員でいいのか迷ってるんだよな」

「私も、たぶん困ると思うわ」

——そうだろうそうだろう、水野さんだってそう思うに決まってる。

乙彦なりに懸命に絞り出した話題で、幸い水野さんは素直に頷いてくれている。露骨につまらなさそうなことも言わないし、いきなり肩をばしっと叩いたりとかもしない。ごく自然な女子の話し方をしている。

——水野さんはどこへ行っても変わらないんだな。

汗をかきながらいろいろなネタを引っ張り出し、帰るとか言われなにかはらはらしつつしゃべっているけれども水野さんはそのまま家の近くまで歩いてくれている。あともう少し歩けば分かれ道だ。もう、話す機会などないのだから言いたいことすべて言ってしまうてもいいような気がするし、言いたいことがなんなのかすら、自分でもわからない。

また思わず飛び出してしまった言葉。

「あの、知ってるか、水野さん」

「何を？」

「あの、雅弘の学校祭、今月末だって」

——俺は本当に何から何まで何やってるんだ！

一瞬にして後悔した。水野さんと雅弘は、中学卒業とともに交際を終わらせているはずなのだ。そんなことわかっていて、なぜ、どうして、こんなことを口走ってしまったのか。せっかくここまでゆっつりのんびり歩いてこれたのに、なぜそんな非常識極まる言葉を。

水野さんは穏やかに受け応えてくれた。

「そうなのね。工業の学校祭が今年なのね」

「ああ、子ども向けの何か、やるらしい」

「佐川くんはどうしてるのかしら」

「かんなと金槌とのこぎりで苦労しているらしい」

表情も変えず、楽しそうに微笑んでくれた。乙彦の全身後悔の汗だく状態を気づかない振りしてくれたと信じたい。

「関崎くん、青大附高の学校祭はいつ？」

話の方向を変えてくれて助かった。乙彦は力強く答えた。

「十月下旬か十一月あたりなんだ。よかったら、友だち連れてきてくれれば。俺もよくわからないんだが、大学や中学も含めて盛り上がるし、ピアノの学内発表会もあるらしいんだ。たぶん、水野さんなら楽しめると思うんだ」

別れ際、水野さんは微笑んだ。はつかねずみのような表情はかつてとまったく変わらぬままだった。

「ありがとう。できれば、友だちと行きたいわ」

クラスの行事がどうなるのかわからないが、もし飲食関係のイベントだったらためらうことなく乙彦は接客に参加することになるだろう。あとでこっそり藤沖にでも学校祭の詳細について聞いておこうと決めた。合唱コンクールが終わるまでは何もできないかもしれないが、準備するにこしたことはない。他の高校でうちの学校の学校祭に来たがっている女子がいると話せば、それなりに教えてくれるだろう。あとで水野さんにチケットかチラシか何か送ることに決めた。向こうが希望しているのだから、当然だ。

9 伴奏合わせ（1）

乙彦とA組ピアニストふたりの作り上げた録音テープはフル回転で活用されている。みな、素直に朝昼夕の稽古を続けているし、最初のうちは放課後練習もままならないはずだったのだが、それなりに協力もしてもらえそうな状況になりつつある。

古川ひとりで走り回っている状況はあまり変わらないのだが、さすがに乙彦も指揮者という立場上リズムや時折歌い方について一部の男子にアドバイスすることもある。みな、知りたいのは合唱コンクールのためというよりも、今後來るべきカラオケでの技量アップではないかと思わなくはないのだが。

「やっぱなあ、関崎お前すげえわ。こういう声だったらカラオケキングの名前ほしいままじゃん。今度みんなで歌いに行こうぜ」

結論はそういうことになる。結構A組の男子は学校行事に協力的な奴が多い。

合唱コンクールまであと二週間を切り、そろそろ立村との伴奏合わせも頃合かと古川から話が出てきた。朝一番、立村と話をしていた古川が少し離れた場所に待機していた乙彦たちの席に近づいてきて、

「あのさ、今日の練習なんだけど、できれば音楽室でやりたいんだけどピアノ押しえられないかなあ」

持ち出してきた。立村がじっとこちらを見ている。

「ピアノをか」

「やっぱさ、そろそろ立村のピアノと合わせて練習したいんだよね。テープでもいいけどさ、なにせ超一流の伴奏じゃん。それで慣れちゃったらやっぱ本番まずいよ」

——遅すぎる気もするがまあいいか。

隣りで藤沖が頷く。

「言いたいことはわかる」

実際なぜ、一度も立村の伴奏で練習ができなかったかというと仕上がりが遅かったからでは決していない。すでに立村もなんとか伴奏出来るところまで実力をつけてきているとは聞いている。ただ、肝心のピアノを借りることができないだけなのだ。立村ひとりであれば放課後かなり遅い時間まで待って練習もできるのだが、クラスメートにそれを要求することはできない。予想以上にテープでの練習が長引いてしまった嫌いは確かにある。

「だが、一昨日、昨日と音楽室を覗いたがアウトだっただろう」

「みんなあんまり遅く教室に残れないからね。でもさ、一回くらいは生演奏で歌いたいよ。どう思うあんたら」

藤沖と顔を見合わせる。そろそろしないとまずいのはわかっていることだ。ただこれからどうするということもある。立村がまだ様子を伺っている。

「俺は賛成だ。古川の言う通り伴奏に慣れておかないといろいろまずい」

「もっともだ。ならどうする」

一緒に混じって立村も意見を言えばいいのにとと思うが、やはりずっと静かなままなのは何か考えでもあるのだろうか。藤沖がひとつ提案した。

「それなら、帰りの会が終わった段階で全力疾走してもらうしかないだろ。元陸上部よ、一気に階段駆け上がって音楽室を押さえろよ」

反射的に乙彦は答えた。

「いや、俺は規律委員だ。廊下を走ってはいけない」

「堅物だねえ。硬いのはあそこだけで十分なのにねえ。じゃあ、悪いけど廊下を走らないで全力徒歩で音楽室のピアノを占拠、よろしく。あんたならなんとかするでしょうよ」

——全力徒歩、か。競歩の気分か。

「全力は尽くす」

違反カードの対象にならない急ぎ方ならもちろん全力です。その意思はある。

最後まで立村は様子見しているだけだった。気になるので一声かけようと立ち上がろうとすると、前扉から女子の声が響いた。

「立村くん、いる？」

だいたいわかる。清坂がするりと潜り込んできた。乙彦には幸い目もくれず、すぐに立村に話しかけ外に引っ張り出そうとしている。。すぐ古川が近づき茶々を入れている。

「あんたたちどうしたの、何かまた秘密の相談かしてるの、エッチだねえ」

「そんな、変なこと言わないでよ！ あとでこずえにも話すから！ 立村くん早く、ほら、こっち」

いやそんな顔もせず立村は清坂に引きずられ教室を出て行った。見送りつつ古川が男子連中に告げた。

「あいついないから言っとくけど、まじで立村がんばって弾いてるよ。たぶん、ある程度はいけるよ。けど、テープとは違うってことはわかってやってよね。それと関崎、あんたもあいつのレベル見当ついていると思うから、あんたがうまくひっばってよ」

「わかった。それは承知している」

「だが古川、それだと関崎にだけ負担がかかりすぎやしないか」

藤沖が口を出すも、古川は首を振った。

「お互い様じゃないの。ほら、それよか藤沖もそろそろクラスの方中心で動いてもらわないと困る時期なんだからね。わかった？」

約束通り六時間目の授業終了後、乙彦は一目散に……もちろん走らず……教室を飛び出した。今朝は週番だったこともあって規律委員としての義務もある。ただ歩き方がかなりおもしろかったようですれ違う女子数人が笑っているのが聞こえた。

——しかたねえだろ、これが義務なんだ。

階段二段飛ばして昇るのはたぶん、校則違反には含まれないだろう。乙彦が三階の階段を登り終えて音楽室に入ると、ちょうど肥後先生がピアノの蓋を閉じて丁寧に拭いているのが見受けられた。

「あの、失礼します、一年A組の関崎です」

「関崎くん、先日は楽しませてもらったよ」

書道選択の乙彦とはあまり接点のない先生ではある。横に膨らんだ頬を穏やかにほころばせて

「何の用かな」

おもしろそうに尋ねてきた。

「あの、一年A組でこれから合唱の練習をする予定なんですけど、まだ伴奏者とピアノを合わせたことが一度もないんで、今、すぐに全員きますのでピアノ先に使わせてもらっていいですか。もちろん、終わったらすぐに次のクラスに譲ります」

「一Aだと伴奏は、そうか、立村くんか」

すぐに合点がいったらしく、肥後先生はピンクのシャツの襟を立てて尋ねた。

「まだ、伴奏と歌を合わせていないということかな」

「はい。今まではあのテープで」

「そうか。そろそろ立村くんにとってもいいタイミングだね。わかったよ。グランドピアノは残念ながら他の組が昨日から予約をとっているのを譲れないが、アップライトならまだ空いている。できるだけ、急いでくれよ」

「はい、ありがとうございます！」

「ああそれと、関崎くん」

また競歩スタイルで音楽室を出ていこうとする乙彦に、肥後先生が引き止めた。

「君は、歌うことが好きなのかな」

「最近は好きになりました。ただ中学時代まで音楽の点数は学科以外全部二でした」

「そうか。君がなんで音楽を選択しなかったのかが少し疑問だったんだが。中学の音楽の先生と喧嘩でもしたかな」

「いえ、いい関係でした。それでは」

こんな無駄話している暇なんてない。乙彦はダッシュで駆け下りた。三段跳びして階段を飛び下りた。もちろん、走らない。

息せき切ってA組教室に戻ると、タイミングよく帰りのホームルームの途中だった。麻生先生が顔をしかめて問いかける。

「関崎どうした。便所でも言ったのか」

早く終わらせてもらわないとアップライトピアノも他クラスにわたってしまう。急いで伝えねば。

「いえ、実は音楽室に行ってきたすぐ戻りました。六時間目の授業が終わってから音楽室に行って肥後先生に頼んできたところです。今日はどうしても立村のピアノ伴奏で音合わせをしたいのでピアノを優先で貸してもらおうようお願いしました。先生申し訳ございませんが、帰りの会を早めに切り上げさせていただきませんか」

麻生先生が吹き出しそうになるのを必死にこらえつつ、

「よくわかった。それでお前、なんで戻ってきた？」

「帰りのホームルームに参加するのは生徒としての義務です」

即答した。麻生先生もすぐ納得してくれたようで、

「義務か、関崎だなやはり。ということならわかった。今日はとりあえず連絡事項はほとんどないし、さっさと喉からしてこい！ 藤沖、号令」

あっさりと終わらせてくれた。合唱コンクールはやはり、教師たちにとっても最重要事項なのかもしれない。

9 伴奏合わせ（2）

全員揃うのは早かった。乙彦が再度音楽室に向かうと予想通りB組の連中がグランドピアノ周りでたむろっている。慌ててA組の女子数人がアップライトピアノのもとに駆け寄っていきなでている。他クラスには譲らないという強い意思を感じる。乙彦も前から気になっていたことをいくつか、男子数名に伝えて協力を依頼したり、相変わらず燃えている静内に近寄ってふたことみこと会話を交わしたりしているうちに藤沖の、

「時間がないからすぐ始めよう。部活の練習を抜けてきた奴もいるからな」

一声に皆、アップライト前に固まった。いつのまにか立村も指定席のピアノ前に腰掛けて楽譜を取り出している。ぺらぺらした楽譜を並べているので時々譜面台から滑り落ちそうになる。古川もすぐに全員を扇形に並ぶよう指示し、

「みんなもう出来上がってるも一緒だし気楽に行こうよ」

明るい声で呼びかけた。相棒の藤沖が少しきつとした声で注意する。

「調子に乗りすぎるなよ、気が緩んだらどうする」

「なーに言ってるの。うちのクラスに努力と根性なんていらないの。みんな楽しくわいわいやつてれば結果がついてくるもんだって」

古川はなだめるように言い聞かせると次に、

「さ、立村も準備はいい？ あんたが上手に弾けるなんてだーれも思っちゃいないんだから安心してやりな」

さりげなくひどいことを声かけし、乙彦には、

「関崎も、タクトの準備は？」

あっさり一言。別に指揮者練習の時、棒なんて使わなかった。

「俺は手でいいと思っているが、やはり指揮棒がないとまずいか」

誰も聞いちゃいない。乙彦はすぐに立村へと呼びかけた。

「それならすばすば行くからな、立村、いいか」

「了解」

右手を掲げ、下ろしたと同時に「恋はみずいろ」がゆっくりめに流れ始めた。最近聞いた音色よりもはるかになめらかだった。録音されたピアニストたちの演奏さえ聞いていなければ、きっとこれで満足してもらえただろうに。少し同情したくなる部分もある。適当ながらも手を振るうちに無事終わったが、厳しい古川のダメ出しが入った。

「あのねえ、全然テンポあってないよ。伴奏と指揮者。立村もそうだけど関崎、あんた自分でも少し早すぎるとか思わなかった？」

「このくらいでよくないか？」

正直自分では、それほど間が合っていないとは思えなかった。立村は言い返さず頷くだけ。納得していないわけではなければいいのだが。

「いいわけないじゃん。歌ってて息継ぎかなりしんどかったようちら。もう少しゆったりさ、歌聴かせようよ。それとさあ、立村もあんた自分ひとりでもいい気持ちになってるんじゃないよ。ひ

とりでフィニッシュするのは夜だけにしてよね」

——なんだそれ。

いきなりみな笑い出す男子たちと女子がひそひそ話をする姿。なんだか妙だった。

むしろ問題は次の発言だ。古川はさらに合唱メンバーに、

「けどみんな歌はいいよね。ね？ 男子もよくここまでみんな腹から声出してくれるよねえ。男前だねえ。それと女子のみんなも、ずっとパート練習一生懸命してくれたかいあったよ。宇津木野さんも正田さんも、練習用のピアノ弾いてくれてほんと助かったよ感謝感謝」

思う存分褒め称えている。乙彦の感覚と古川の視点とは大幅にずれているような気がする。ずっと指揮をしてきたがお世辞にも今の歌い方は合格点をつけられるものではない。どこが「歌はいい」なのか。もちろん指揮者も伴奏者もいまひとつであることは認めるが、歌だってどっこいどっこいじゃないか。まだ歌詞覚えてない奴がいたような気がするがあれは気のせいかな。

——なんで俺たちばかりああこけ下ろされなければならないんだ。

乙彦の表情がもしかしたら露骨に出ていたのかもしれない。

「関崎、怒るな、あれが古川さんのやり方なんだ」

立村がピアノの側に乙彦を招き寄せ小声でささやいた。

「何がだ。俺はそれほどスピード違反したつもりはないが」

立村だってそうだ。そんなにつっぱってしまうことはなかった。言いかけたのを立村は制した。

「違う、合唱の人たちに言いたいことを俺たちに伝えて意識させようとしているだけだよ。俺たちよりも他の人たちのテンポがばらばらだからそれが気になったんだろうな。俺も悪かったけど、関崎はそれほど問題があるとは思わない」

「そうなのか」

言われてみると確かに、みな歌うテンポがばらばらだった。特に男子連中は自分たちの歌いやすいリズムに合わせてがなっているだけだ。ここらへんを揃えたほうがいいのではとも思うのだが。古川はやんわりオブラートにくるんだ言葉で褒め続けながら、

「さあさ次、問題の『モルダウ』よね。立村、あんたいい加減音飛ばしたり和音ごちゃごちゃにするのなんとかしなさいよ」

また立村をさりげなくつついた。諦めているのか立村も素直に応じた。

「なんとかする。始めていいかな」

乙彦にも容赦ない。

「関崎も、この曲はおおらかな響きの曲だってこと、あんたくらい歌える奴なら理解してるでしょ。あんたが歌えない代わりにみんなにきもちよーく歌ってもらえるようにしてもらわないと困るわけ。あんたも独りフィニッシュタイプだからさあ」

「古川、褒めてくれるのはありがたいが、独りフィニッシュというのはなんなんだ」。

「じゃあさっさと行ってちょうだいな、さあさ行った行った！」

なんだかごまかされたような気がするが、時間がない。さあ行こう。「モルダウの流れ」をと

ことん泳ぎきろう。乙彦は手を挙げた。

鬼の下ネタ女王評議・古川の見方はやっぱり厳しかった。

「まあねえ、立村のピアノの腕をもう少し磨けて結論よねえ。てか、ねえ、もうこいつがこれ以上上手になるという見込みってあまりないと思うんだわ。だからさ、私思うんだけどもっともっと歌でカバーしないとさ、まずいと思うわけ。この歌だとねえ、もっと後半のあたりの盛り上がりさを、ピアノの限界を超えてぐぐぐっと持ち上げる必要あるのよねえ」

——これは言い過ぎじゃないのか？

いくら古川と立村が気兼ねない付き合いだったとしてもこれはひどすぎる。何が「ピアノの限界」だ。乙彦も大して音楽の耳がよいとは思っていない。しかし、「これ以上上手になるという見込みってあまりない」というのは、せっかく本気出して練習を重ねている立村に対する冒涇ではないのか。もちろん古川も立村を支えようとして自宅のピアノを貸出したりしているのだろうしそれはそれでわからなくもない。しかし。

一歩前にしようとしたところで、立村に腕を引っ張られた。顔を見ると首を小さく振る。

「だから、思うんだけど、男子パートをもうちょっと、ほんっとに悪いんだけどもうちょこっと腹から声出してもらえると、立村のあらもごまかせると思うんだよねえ」

——そうだ、その通りだ。

乙彦が共感するも、即、藤沖から反論される。

「古川、つまり俺たちの声が小さいと言いたいのか」

すぐ古川は肩をすくめて首を振った。

「なーにあせってるのよ藤沖、あんた、ちょこっと考えなよ。こんな新米ピアニストをこんなすっごい『モルダウ』みたいな大曲弾かせるわけよ。無理じゃん普通じゃあ。けどやっばうちのクラスだって優勝狙いたいじゃん？ 麻生先生だってなんかご褒美出してくれそうじゃん？」

「中華料理付きトイレ掃除だったらノーサンキューだがな」

「そこんところはうちら評議の交渉にかかってくるんであんたも手伝ってよ。とにかく、ここは本気で一発優勝したいじゃん？ となると、マイナス部分をうちの持つてるプラス部分で隠す必要があるわけ」

「プラスとはなんだ、つまりは」

「合唱部分に決まってるじゃん！うちで勝てる所ったら、ハーモニーのそこぐらいじゃん！指揮者も伴奏者も新米となったらあとはそこで勝負するしかないよ。それに、いっちゃんんだけどまじで上手いと思うんだよねえ、合唱だけは！ だからさ、ここんところを特に男子のみなみなさまにお願いしたいってとこよ。あんたたちならできるって！ ね、お願い」

男女ともに大爆笑巻き起こった。古川のいかにもわざとらしいぶりっこポーズ……どう考えてもギャグにしかならない……に、男子代表として反論したかったらしい藤沖も苦笑いするしかない。

「要するに何を古川は言いたいんだ？」

そんなアホっぽいポーズをして笑いを取ってまで、いったい何をしたいのかが乙彦にはわから

ない。すぐに立村が助け舟を出してくれた。

「男子の声が小さすぎるからもっと恥ずかしがらずに腹から出せと。結論から言えばそれだけ」

「じゃあなんでそんな褒め殺しするんだ」

「露骨にそんなこと言われて気持ちよく受け入れる気になれるか？」

さらっと立村は答えた。即在に古川の、

「じゃあもっかい、『恋はみずいろ』行くよ！」

に黙ってピアノに向かい直していた。各二回、全員で歌い直した。藤沖のように文句を言う奴もとりあえずいなかった。

古川の、

「よーし！ 今日はいかーん！」

終了宣言でみなだり力を抜いている。なんだか疲れたといった顔だが、たかが三回歌っただけなのに随分体力なさすぎると乙彦は思う。さらに謎の発言が続く古川は、

「すっごく実のある練習できたしね。それに来週いっぱいもっとやんなくちゃいけないしさ、気分がいいとこで今日はおひらきだよ」

——まだ問題てんこ盛りのようだが本当にこれでいいのか。

みなをのんびりと解放してやっている。グランドピアノ側ではB組の静内が、

「もっと力強く！」

「もっとここは余裕を持って。伴奏さんもここはたっぷり思い入れ込めて。少し足りなさすぎる」

などと叫んでいるのにこの差はなんだろう。藤沖も今日はやる気まんまんらしく、

「古川、まだ時間があるが大丈夫なのか」

さらに練習したような声を出しているが、古川は動じない。

「ほらほら、あんたは暇かもしれないけど他の人たちはそうでもないんだからさ。急いでるならもう行ってもいいからね。またあす、やろうよ。それと藤沖あんたも本当は今日、このままでいいわけ？」

「そんなにいうなら、あすだな。あすこそもっとみっちりやるぞ、いいな」

言っておきながらさっさと音楽室から退散するのがなんだか矛盾ありすぎる。やはりこれは静内の話が正しいのだろうか。このあたりは古川からも話を聴かせてもらったほうがよさそう。ちらっと乙彦を誘ったような目つきだったが、指揮者がそそくさと帰るわけにはいかない。当然最後まで残るつもりだ。

しばらくA組の部活事情を抱えた連中が挨拶とともに抜け出した以外は、まだかなりの数のA組メンバーが残っていた。古川も絞り込まれた女子たち数人を集めて、

「あのさ、せっかくだしさ、ここでパート練習やろっかね」

などと声かけしている。やはり本心としてはまずいという意識があるのだろう。

立村がさらにささやきかけてきた。まだピアノの前に張り付いたままだ。

「女子のまとめ役は古川さんに任せておけば間違いないよ」

「どうしてそう思うんだ？」

「あれを見ていればわかるだろ」

ソプラノパートの整ったハーモニーが流れる。ピアノ伴奏なくてもアカペラで十分いけそうなのりだ。立村は続けた。

「さっきの歌の練習でもわかるだろ、古川さんはとにかくクラス誰もが気持ちよく過ごせるようにいろんな言い方で持ち上げて、それでまとめようとしてるんだ。中学の頃からああだったしそれでほとんどうまくいったよ」

さすが三年間同じクラスただただある。しかしそれならばなぜ、

「だが古川は、中学時代一度も評議は」

何度も感じた疑問をぶつけた。確か図書局だと聞いたのだが、これだけできぱきできるようなあればとっくの昔に評議やっていても不思議ではない。

「やってない。ずっと図書局一筋だった人だから」

「それでいてあんなに手際がいいのか。もったいないな」

「だから今、水を得た魚のようにあんなにいるだろ？ 関崎が無理に女子たちの機嫌を取る必要はないよ。むしろ男子たち中心で動いていたほうがお互い楽だと思う。たぶん古川さんの口ぶりからすると、まだ今日の稽古では満足できてないっぽい感じがするんだけどな」

古川には聞こえないようにかなり用心した声で立村は囁いた。後ろではB組連中のかなり気合入った歌いっぷりが響き渡る。ちらと見たが今日は清坂美里もいるらしい。

「そうなのか？ ちょっと待て。ならなんであんなに褒めまくる？ もう少し注意してもよいんじゃないか？」

どう考えてもこれはおかしい。立村がいくら古川と仲がいいとはいえ、過剰な罵倒にはもう少し毅然とした態度を取るべきだ。立村は首を振った。

「さっきも言った通りストレートにそれを伝えても反発するだけで誰も聞く耳もたないよ。古川さんはそのあたりをちゃんと把握しているから、できるだけみんなをいい気分にさせて、その上で少しずつ改善しようとしているんだ。だから、関崎も気になるかもしれないけど、一切口出さないほうがいいと思う」

「立村が俺の立場だったらどうするんだ」

「もちろん、古川さんのおっしゃるとおりですと答えるさ」

——いつもじゃないか。

吹き出しそうになるのをうつむいてこらえた。

「その光景が目には浮かぶな」

「そうだよな」

立村はまた滑りそうになった楽譜を譜面台の上で整えた。こいつも練習で手を抜き気はさらさらなさそうだ。

9 伴奏合わせ（3）

まだB組連中が元気に合唱し続けているのを聴きつつ、乙彦は立村のべらべらした楽譜を眺めた。赤いペンで細かな書き込みがなされている。立村の文字ではない。教えてくれている誰かが書いてくれたのだろうか。

「全部のっかるのか。譜面めくりとかしなくてもいいのか」

「いいよ、どうせ暗譜するから」

立村はいったん歌い終わったらしいB組連中の様子を伺うようにしてつぶやいた。

「B組もやる気あるんだな」

「ある。あのクラスも男女団結力あるからな」

「静内も本当はああいう音楽などの華やいだイベントが好きではないんだが、やはり選ばれた以上は責任を持ってトップを目指したいと考えているようだ」

「華やいでるかな、合唱コンクールってば」

不思議そうに首を傾げて指先を見つめる立村。乙彦からしたら、そもそも合唱コンクールというイベントひとつでここまで盛り上がるということ自体が信じがたい。中学時代は合唱コンクールなんて流すための行事、どれだけ気合を入れることに苦心したかを思い出す。反面、この学校ののりときたらまさに学校祭そのもの。恐ろしいことにこの学校は学校祭をはじめとするたくさんの行事が並びすぎていて、メリハリがなさすぎるということもある。

「お前たち内部生にとってはさほど違和感がないかもしれないが、俺たち外部からきた人間にとっては正直戸惑いがあるのも確かだ」

少し誤解を説いておきたかった。乙彦は続けた。

「静内はひとりでこつこつ石碑を見て歩いたり、歴史を研究したりとか、そういうことが好きな性格だから、全身に視線を集めるようなイベントはおそらく苦手だろう」

「でも、受けざるを得なかったということか」

無表情に立村は受けた。

「周りの、主に女子たちの強い支持を得たらしい。本人の希望では少なくともない」

立村は答えず、黙ってB組の女子たちが静内に叱られている姿を眺めていた。その中には清坂美里もいる。あえて何も言わずにおいた。

「翼をください」の合唱が始まった。

静内がぴりぴり叫んでいるだけあって、音のテンポも歌のハーモニーもみなぴたりと合っていた。いっちゃんなんだが、A組の歌声と比較してはならないと思う。聴き終わった立村が乙彦に問いかけた。

「関崎、今の曲だけど、どう思う？」

正直な感想を述べた。

「ぴしっと整っているな」

「歌いたくなるか？」

「もちろんだ」

「古川さんと正逆のやり方だからな」

——古川とか。

古川たちも自分たちの練習の手を止めて、ちろちろB組の様子を伺っている。露骨に見つめるのではなくなんとなくといった雰囲気を保たせ、でも実は興味津々というのが溢れ出るような態度で。古川のことだから自分らのレベルの差ははっきり理解したのではないだろうか。乙彦は立村に問いかけた。

「本当はああいう風に細かく悪いところを指摘すべきかと俺は思うが、違うだろうか」

「静内さんのようにか」

切り返した立村の口調はきつくなかった。

静内もまた、「翼をください」の見事な歌い上げにまだ不満足だったようで、

「そうね、ここをもう少し高い声で歌ったほうがいいの。なにか悲鳴に聞こえてしまうから。もっと声を伸ばしてちょうだい」

などと偉そうに説教している。誰も文句を言わないということは納得しているのだろう。

「そうだ。確かに古川のように相手を持ち上げる形での指導は悪くない。だが、それ以上に必要なのは、改善だ。どこが悪くてどこがいいのか、それを明確に指摘しないと俺たちも何をしていたのかわからないんだ。少なくとも俺たちに対して古川はそれをしていたはずだ」

「まあ、確かにな」

「立村の言い分も理解はできる。実際中学の時はそれでうまくいったというのならそれはそれでいい。だが、俺としては褒めるだけが必ずしもプラスになるとは思えない。悪いことははっきりノーと言うべきだ。今の静内のやり方は何が悪くてどうすればいいかを的確にする方法で、あれなら多少不愉快であっても納得するだろう。男女関係なく、だ」

せっかく勝負する場を得られたのなら、ベストを尽くすべきだ。指揮者も伴奏者も急ごしらえというハンディは確かにある。それでも、これだけ本気を出してまっすぐ突き進んでいるクラスがあるのなら、A組も多少厳しいことを言いつつ努力する必要があるのではないかとも思う

。

立村は何かを言いたそうにしたが、それ以上何も言わなかった。

「こんな調子だと、恥ずかしくて外で発表なんてできないから。もう少ししないと」

かなり手厳しい叱咤の後B組の練習が終わった。タイミングよくA組の女子たちもB組の友達らしき相手に声をかけて一緒に帰る提案をしたりなどしていた。附属上がりの連中ばかりだしクラスの違いなどさほど影響しないのだろう。乙彦も静内に近づいて声をかけた。幸い、誰も静内に寄り付いてくる奴はいなかった。

「よく聞こえていたぞ。スパルタだな」

「しょうがないじゃない。そのくらいしなくちゃ」

静内は乙彦に照れくさそうな笑いを浮かべた。合唱練習をしている間にはこりともせず厳しく指導していた静内も、さすがに疲れたのだろう。

「だが俺からしたら、B組は音程も揃っていたが」

「甘いわよ。まだまだ。音程が合うなんてこんなもんじゃないの。もっと練習が必要なの。本当だったら夏休みからもっとびしびしやるべきだったと反省してるよ」

「おい、じゃあ俺たちの自由研究が無駄だったってのか」

「そんなことないない。そうだ、自由研究と言えばさ」

静内は声を潜めて乙彦に囁いた。

「今度、私と関崎と名倉の三人をうちの学校の放送局が取材するって話、聞いた？」

「いや、聞いてないが」

初耳だ。そもそもなぜよりによって「外部三人組」の取材を放送局がしようと企んだのかそれ自体が信じがたい。静内は首を振りため息をついた。

「私も、この前結城先輩から話を聞いてびっくりしたわよ。なんでも今回は、テーマが自由研究に関わる生徒たちのいろいろな話らしくって、何をしたいんだかよくわからないなって疑問だったわけ。とりあえず私たち三人の時間がある時になってことで予約入れられちゃった」

「結城先輩がか」

「評議委員長がなぜ放送局のアポ取りするのか私にはほとんど謎だけど、関崎と名倉にも伝えておくってことで話、ついてるから。あとで相談しようか」

「了解」

思いがけない話だが、まだ静内経由の口約束に過ぎない。正式な話が来てからでいいだろう。乙彦はちらとアップライトピアノの方を眺めやった。立村がまだピアノの前に腰掛けているのだが、いつのまにか清坂がその脇にある席に腰掛けて楽譜をいじっているのが見えた。古川もにやにやしながら覗き込んでいる。立村が鞆から取り出した大きめマガジンタイプのファイルらしきものを取り出すと清坂は、

「ほら、貸して。これから練習するんだったら、見やすいほうがいいに決まってるじゃない。楽譜もちょうだい。綺麗に貼ってあげるから、待っててね」

のりとハサミを器用に操って、楽譜を一枚一枚ファイルに貼り付けていく。立村が遠慮がちに

、

「清坂氏、いいよ、あとで俺がやるから」

断りを入れても全く聞く耳持たないようだ。

「今朝言ったでしょ。立村くんのぶきっちょぶりはね、三年間同じクラスだった私が一番よく知ってるの！今のうちにやっつけば、次に練習する時楽でしょ？ほら、黙って見ててよ」

「ごめん」

それにしてもよく聞こえる声だ。音楽室の視線を集めていることに清坂は気づいているのかいないのか。申し訳なさそうに小さくなってる立村と対照的なこの態度、火に油を注ぐがごとく今度は古川も近づいてきた。

「あんたたちまた、なにいきなり図工の時間やってるのよ。あれ、この巨大なノートってもしかして美里が立村に？」

「ちょっと、ぴったり貼りたいから邪魔しないで」

清坂の肩を揺らしている。うるさそうに文句を言う清坂をこれ以上邪魔せず古川は、

「ははん、これ、楽譜を貼り付けて立てるようになってことかあ」

紙で作った巨大なノート……ファイルではなかった。いわゆるスクラップブックのようだった。遠目ではよくわからないが、英字新聞のようなものを器用に組み合わせたデザインのものに見えた。

「まだのりが乾いてないから触るときは注意してよ！」

清坂は口でこそきつく答えるものの、あっさり認めた。

「そうだよこずえ。今日は立村くんの誕生日だし、貴史と一緒にプレゼント作って渡したの。それがどこか変？」

——そうか、あいつ今日誕生日か！ 九月十四日か。

初めて知った。立村は昨日までまだ十五歳だったということで今日から乙彦と同年ということだ。なんだ、昨日まで年下だったのか。

妙なところで感慨深い乙彦とは違い、隣りで冷ややかな視線を投げかけている静内の様子をびんびんと感じた。

——清潔じゃない、ように見えるんだろうな静内には。

静内の視線などお構いなく清坂と古川はきゃいきゃいと盛り上がっている。側でされるがまま伏せ目の立村に関しても、眼中にない。

「変じゃないけどねえ。羽飛と作ったってわけ？」

「そうだよ。こずえには言わなかったけど、立村くんの誕生日が今日なのと、貴史もとにかく何か作りたくてならないってうずうずしてたから、この表紙を貴史にデザインしてもらって渡したの。立村くんも伴奏するなら、できるだけ見やすい楽譜で弾けたほういいしね」

「誕生日ねえ。あんた、今日が誕生日なわけ？」

ちらっと様子を見やる古川に、立村も仕方なさげに答える。

「そのとおり」

「ふうん、となると、あんたがとうとう私らと同じ歳になるってわけかあ」

「おっしゃるとおりでございます」

「弟じゃあないわけね。寂しいねえお姉さんも。とりあえずたいした隠し事じゃなかったってことよね。まあいいわ、じゃあ美里、私の誕生日もぜひ羽飛とプラスで何か芸術作品お願い。あ、パンツにオリジナルのイラストってのはさすがにパスね」

「なによこずえ、そんなことするわけないじゃない！ もうエッチ過ぎる！」

A組ふたりとB組ひとりの楽しげな語り合いを微笑ましく見ていない一人のB組女子。

そろそろまずいとは思っていた。

——静内、どうするんだ。

静内はやはり勝負に出た。脳天気にはしゃいでいる三人組に、その場から動くことなく呼びか

けた。音楽室にいる連中全員に聞こえるほどの声だった。

「清坂さん、悪いんだけどこれから女子だけ残ってもう少し練習したいんだけど時間大丈夫？今日は大丈夫よね。女子だけどうしても音が合わないの。特にソプラノパートが気になるんだけど、清坂さん忙しいみたいだしできれば時間の取れるときにまとめてやりたいんだけど、時間、あるよね」

——まずい、静内、完全に頭に血が昇ってるぞ。

清坂からしたら友だちの誕生日プレゼント贈呈に過ぎない。気心の知れた仲良しとの自然なおしゃべりに過ぎないだろう。しかし、清坂が立村のために手作りのスクラップブックをこしらえている間にも静内は完璧な音色を求めて必死に練習していたわけだ。これはもう、切れないわけがない。これは清坂に折れるよう、立村あたりから口寄せしてもらったほうがいい。立村に近づく前に清坂が感情のない声で答えた。

「いいけどどこでやるの」

「グラウンドの隅っこでやりましょう」

シビアな返事。清坂は口答えしなかった。立村と古川のふたりに、

「じゃあね、また土曜にこずえのそこ行くから、そのときまたね」

言い残し、鞆に工作道具をひとまとめにしてしまい、そのまま教室から出て行った。静内も、その他のB組生徒たちも従った。本当はもう帰ってよかったんだろうがさすがに静内のあの発言に逆らう度胸を持つ奴なんていないだろう。

「清坂氏、ありがとう」

立村の穏やかな微笑みだけが救いだった。やれやれといった感じの古川も乙彦に何かもの言いたそうにしている様子だった。すぐに立村が乙彦に提案を持ちかけてきたのはちょうどタイミングよかった。あんな雰囲気そのまま帰る気にはなれないだろう、とてもだが。

「関崎、せっかくだからお前の指揮を見る訓練したいんだ。一緒に手伝ってもらえるかな」

古川にも、文句が出る前に先手を打ったのか、

「とりあえずさ、俺と関崎には気に入らないところどンドンダメだししてもらっていいから、黙って聞いててもらえると助かるんだけどな」

あっさりとお許しを得て、その後また有志のみで練習を続けた。古川のやり方は変わることなく、

——ダメだしされるのは指揮者と伴奏者のみ、合唱者は甘い褒め言葉。

のみだった。これがA組と割り切るしかなさそうだった。

「すいません、合唱コンクールの練習で忙しい時に」

静内からもらった情報通り、土曜の午後二時過ぎ、外部三人組一同は生徒指導室に呼び出された。乙彦にとっては新入生オリエンテーション以来の場所でもある。

「大丈夫です。今日はあまり長いこと練習できないので」

「俺も同じく」

「うちは全然練習しないし」

三人それぞれ声を揃えて答えた。乙彦も次の日に麻生先生経由で放送局からのインタビュー取材について協力するようにとのお言葉をいただいた。校内放送で流すわけではなく市内の高校放送局が集い研究する合宿があるとかで、そこで発表する内容らしい。

放送局部長らしき三年生がひとつひとつ説明をしてくれた。

「今年僕たちがテーマとしているのは、『内部進学者と外部入学者』の間にある壁を乗り越えるための手段です。今に始まったことではないんですがそれなりに内部と外部の違和感みたいなものがずっとあって、それでも気がつけば普通の友だちとしてつながり合っていたこともあれば、卒業するまで距離を持ったままだったとかさまざまなケースがあると聞いていました。これって同じ足並み揃えて入学できる学校では感じられない、むしろ青大附高だからこそ追求できるテーマなんではないかと考え、それです」

まだ放送局の顧問が一緒にいるので丁寧語が消えない。窮屈そうにしゃべっている。

「一年の自由研究の中で、今年初めて外部生のみチームがこしらえた作品が高い評価を得たという話を先生たちから聞いた時、局員たちからぜひ一度詳しいことを聴かせてほしいという声が上がりました。それで、合唱コンクールでめちゃくちゃ忙しいことを承知の上でお願いしたわけです」

「でもそんなすごいことしたわけじゃないですけど」

戸惑うように静内が答える。今回の自由研究リーダーは静内なのでこの序列を崩さないように乙彦も黙っている。同様に名倉もだった。傍目から見ると「姫を守る騎士二人」なんだろう。実はお笑いだが。

「実際私たちが研究したことって、青瀨の石碑といういわば空気のような存在のものに、ひとつひとつ物語が隠れているってことの証明みたいなものですから。いろいろな人にも言われましたけど、私たちと似たようなことをやった人もたくさんいるみたいですよ」

——静内、実はかなり根に持ってるな。

元評議三羽鳥の激しい恨みつらみを知っている乙彦はあえて言葉を飲み込む。

放送局長はゆったりと静内の言葉を受け止めて、しっとりした声で相槌を打つ。いかにもドキュメンタリー番組のナレーターといった雰囲気です。耳に心地よく残る。

「そういう声もありますか」

「はい。実際そう言われたこともあります」

静内はきっぱり言い切った。その上で、

「でも、私たちは三人、たまたま気の合う仲間だったということでやりたいことをやろうと決めていただけなんです。たまたま私が青潟の歴史に子どもの頃から興味を持っていて、でもそれまでは友だちでそういうことに興味のある人がいなくて、青大附高で初めてこのふたりと出会って意気投合したというそれだけなんです」

「外部生同士、ですか？」

いつの間にか放送局長の話にもっていかれている。静内が気づいているかどうかはわからない。そのままぺらぺらしゃべり続けている。

「はい。でもたまたま気の合う友だちが外部生ただただであって、取り立てて内部の生徒を無視したつもりはありません。それなりに内部の友だちもたくさんいます」

「関崎くんは、どうですか？」

黙っているとさらにしゃべり続けそうな静内を制したいのか、放送局長は乙彦に話を振った。話すべきことは決めている。

「僕も最初は外部と内部の違いにかなり驚いたほうです。たまたま中学時代生徒会の関係で青大附中には顔を出してましたし仲良くなった奴もいたし。でもやはり、最初は委員会の扱いとか、授業進度の速さとか、試験の内容とか、ありとあらゆることにカルチャーショックを受けていたことは確かです」

「そうか、青大附中には結構顔を出していたと」

興味深そうに放送局長が促す。せっかくだ。言っておこう。

「当時僕は水鳥中学生徒会の副会長をやっていて、青大附中の評議委員会からぜひ交流をしようという話がきたわけです。最初は打ち合わせでしょっちゅう足を運んで、そのうち気の合う友だちもできたりして、全く初めてという感じではなかったです」

「関崎くんは英語科でしたね。しかも今年の外部生で英語科はひとりのみ」

「なぜかわかりませんがそうになりました」

「外部生がおおよそ三十人いる計算になりますがその中でひとりのみ。これは相当すごいことですが。特に英語を勉強したかったとかそういうわけではないのですか」

「たまたま英語の成績がよかっただけです。なんでかわかりませんがとりあえず受かってよかったです」

周りで吹き出す奴が数人ほど。その中には同志たる静内と名倉もいる。

「ですが英語科はそれなりに個性的な奴が多いですし、結構刺激を受けます。俺はたまたま外部生としてクラスに入りましたが、変人扱いされているときもなくはないですが概ね居心地はいいです。外部と内部での軋轢はクラスでは、あまり感じません。ただ」

つい「ただ」とつぶやいてしまった。失言だ。放送局長は見逃さなかった。

「そのただとは」

「はい、ただ俺たちのことを誤解している内部生がいるのではという気はしています」

「誤解？」

「俺たちはそんなに意識しているわけじゃないんですが、厳しい目を向けてくる生徒がいるのは確かです。自由研究に関しても静内さんが言った通り俺たちは面白そうなことを自分なりに考え

て調べてみただけですが、過去に似たようなことをしたということでなんというか、ぱくりをやらかしたように思った人もいるようです。全然そんなんじゃないんですが」

「なるほどね」

放送局長はふむふむ頷いた。

「いい意味で前例を知らずに自分たちの思いつくまま突き進んでいったことが、今回の高い評価につながったということですね。しかしそれを面白いと思わない輩も多いと」

まずい、なんだか露骨に外部生VS内部生のバトルに収縮されてしまいそうだ。乙彦としては急いで修正したい。

「いや、たぶん誤解されているだけです。絶対。俺たちはそう思っている人たちときっちりひざ詰めして話をしたことが一度もありません。単純に、話し合いがすんでないだけであって、それさえ終わればすっきり丸く収まるんじゃないかとも思います」

「そんな簡単にすみますか」

「はい、大丈夫です。今まで俺もいろいろと人に誤解されたり反対に誤解したりしてきましたが、結局は腹を割った話し合いをする場を持たなかったことがこじれた原因だと、今わかりました」

隣りで静内と名倉がそれぞれうさんくさそうな顔をしている。

妙に放送局長の質問が乙彦に集中してきているのを自分でも感じる。

せっかくのいい機会だ。もっと語ってやりたい。乙彦が深呼吸をしたところでいきなり静内が割り込んだ。

「すみません、外部と内部のことであれば私も、一言あります」

礼儀正しく放送局長がマイクを静内に向けた。ちなみにこのインタビュー、音声のみらしくビデオ撮影は今回行わないとのことだった。

「私が感じていたことなんですが、外部生の人たちはおおらかで楽しそうな学園生活を過ごしているように見えて羨ましい反面、もっと先のことを考えてもいいんじゃないかと思うときがあるんです」

名倉が乙彦をつついた。首を振っている。なんとか止めろと言いたげだ。

——どうやって止めろっていうんだ。

ビデオカメラが入ってなくてよかったと安心するよりもなによりも、

——そもそもそんなことを明らかに内部生である放送局長の前で言い切っているのか、静内。

心密かに焦りつつも、乙彦はあえて口を挟まずインタビューの行方を見守った。

「他の人たちも興味を持っていると思うので、伺ってよろしいですか」

「ぜひ」

もう静内のスイッチは入り、どんなことでも問われれば即しゃべりだしそうな状態だ。放送局長もその感覚を掴んでいるのかじっくりと攻め入ろうとしている。

「その前にせっかくでするのでどうしてこの青大附高に入ろうとしたのか、その理由を教えてください。面接の時に答えた模範解答ではなく本音でお願いします」

「本音しか私、話す気ありませんし」

さらりと切り返す。静内も口調は決してきつすぎるものではない。むしろ女子の中では丁寧でありちくちくした言い方をするタイプではない。だが内容がかなり厳しいものなのも事実だった。本性をさらけ出すのはできればクラス外のほうがいいのではとも思っている。隣りで苦笑している放送局顧問の先生ふたり。

「中学時代は自分なりにテスト点数を稼いでいたので自然と先生たちから勧められたというのが表向きの答えなんですが、本当は青大附属の図書館を使い倒したいというのが目的でした」

みな笑った。先生たちも一緒だった。乙彦も初耳だった。名倉も同様かはわからない、にこりともしない。

「図書館、まあ確かにうちの学校の図書館は本が揃ってますよ」

「学校祭に行くよう先生たちに勧められ、それでなんとなく来てみたら図書館が中学のと比較して十倍くらいの広さでした。さらに私、歴史ものを読むのが好きだったんですが一生かけても読みきれないくらいの本がずらっと並んでいるのを見たときにもうノックアウトされてしまったというか」

「本が目的ですか。でも、それだけじゃないでしょう？」

「まあもちろん。でも悪いんですけど学校祭でそれ以外の記憶ってのが全然ないんです。たぶん展示とかいろいろ見て歩いたとは思うのですけれどもあまり印象に残らず、結局図書館の蔵書の量だけに圧倒されてしまったんでしょね」

「それで、実際入学してみていかがでしたか。そこまで図書館の虫になるのだったら、図書館に入るとか、考えましたか？」

変化球を投げてきている。初めて聞いた静内の青大附高受験動機。どこまで本当なのかは眉唾ものだが、実際静内が読書の鬼ということは認めている。しかも文学の棚には一切近寄らず本人の申告通り歴史棚しか手を出そうとしない。ここまで極めると清々しいものがある。

「最初それも考えましたが、何度か図書館に通ううちにやめました」

「それはなぜ」

「そこが外部生なんですよ」

無理やり静内は話を戻してきた。

「図書館員は本を無制限に借りることができるというというメリットに惹かれたものの、雰囲気になんとかおしゃべり倶楽部のように感じられたんです」

「おしゃべり、倶楽部？」

——静内、大丈夫か本当に、そもそもこのインタビュー、放送されたらまずくないか？

正直者の静内は決して嫌な奴じゃない。だが、このままだと不必要に内部生を攻撃しているだけに受け取られてしまう。思わず隣りの名倉と顔を見合わせる。やはり危険性を感じているようだ。なんとかせねば。

「三年間しかこの学校にいられないわけですからとことん好きなことを勉強したいし興味のあることをもっと突き詰めたい、そう思っていました。私は特に青潟という街特有の歴史をもっと知りたかったし、そのことに関心のある友だちと出会いたかったんです。でも、図書館のことに限らず私の求めているものと一致する価値感の人たちとはなかなか出会えませんでした。こいつらふたりを除いては」

ちろ、と静内は乙彦と名倉を見ていたずらっぽく微笑んだ。

「場合によってはここ、オフレコにしてもいいんですが」

「いえいいですよ、私、隠すつもりありませんから」

遠慮がちに申し出た放送局長の言葉もひらりと交わし静内は続けた。

「私は決して内部生の人たちを嫌っているわけではないです。いい人もたくさんいます。ただ、どうしてももったいないとってしまいます。たった三年しかないのに、自分の興味ある勉強や部活動に打ち込まず、なんとなく友だちと遊んだり喫茶店でお茶飲んで時間つぶしをしたり、自分を安売りしてとっかえひっかえ男子と付き合ったり、時間を無駄にしている人が多すぎるように思えてならないんです」

「静内、もうやめとけ」

さすがにこれはまずい。乙彦は割って入った。オフレコにしてくれればいいが。

「いいの、先生たちもいるところで言っておきたいんだからさ」

「無駄に敵作ってどうするんだ」

「いい、そのつもりだから。先生すいません。言わせてもらいますがいいですか」

もう諦めているのは先生ふたり。にこにこ頷いている。

「別に優等生ぶりたいわけじゃないです。私も口ではこんなガリ勉じみたこと言ってますが成績なんてがたがたですし、それに勉強よりも好きなことの本ばかり読んでいますからかえってど鬱感ですよ。たまたま自由研究の件で箔がつかいましたが、私はただやりたいことをやってるだけなんです。なんでやってるかっていうと、自由に勉強してられる期間がたった三年しかないからなんです。私には全然時間がないんです」

「確かに。ですが僕が思うに、高校時代だからこそできることは勉強や研究以外にもいろいろあるんじゃないでしょうか」

さりげなく反論する放送局長。

「僕も正直、クラスの女子たちがファッションやアイドルの話で盛り上がったり、結論の出ない話で時間つぶししているのを見ると静内さんと同じことを考えることはあります。くだらねえなあ、みたいな感じですね。ですが、そういう第三者からしたらなんの価値もないことにうつつ

を抜かせる時期というのは、非常に大切なんじゃないかなと最近思ったりもしています。まあ、本音を言えばひとりくらい可愛い彼女がいるといいなくらいですが」

少し笑いを誘おうとしたらしいが、顧問教師ひとりの、

「可愛い彼女は諦めろ。あとで嫁の尻に敷かれるのが関の山だぞ」

シビアな発言で一掃された。

「失礼しました。静内さんは限りある高校三年間を有意義なものにしたいという意思が非常に強いということですね」

「かなり悲愴な決意です」

笑いながら静内も答えた。

「外部生と内部生の違いと軋轢をもし考えるとするならば、内部の人たちにとって今はまだ折り返し地点に過ぎないのに対し、私たち外部生にとっては助走期間がないまま本番を迎えてしまっていることに対するあせりがあるのかもしれませんが。ある意味私がひがみっぽいだけなんでしょうけど、なんか嫌なんですよ。時間を無駄にしている人たちを見るのが。局長さんの言う通り今だからできることもまだあるかもしれませんが、私には時間が本当にないんです。だから余計なこと考える暇なく突っ走るしかないし、気のあう連中とだけしか付き合う暇がないんです」

ここまで静内は楽しげに語った。

放送局長は静内に礼を言うと、今度はなぜか乙彦を飛ばし、

「では、名倉くんこれからインタビューをさせていただきますがよろしいですか」

切り替えた。その気持ちはわかるような気がする。静内のいないところで局長には、静内の発言をできればカットしてもらおうよう頼んだほうがいだろうか。おとなしくしている乙彦としては、これから先どういう反応をすればよいのかが非常に悩める問題だった。なにせ、

——自分の興味ある勉強や部活動に打ち込まず、なんとなく友だちと遊んだり喫茶店でお茶飲んで時間つぶしをしたり、自分を安売りしてとっかえひっかえ男子と付き合ったり、時間を無駄にしている人。

おそらくだが、特定のひとりしか静内の頭には思い描かれていないような気がする。

名倉は最初なかなか口を開かなかった。無視したわけではないのだろうが、放送局長の切り出し方と名倉の返事とが噛み合わずしばらく沈黙が続いた。

「名倉、もう少しなんか話せよ」

見かねた乙彦が声をかけるも、どう答えていいのかわからないらしい。

「そうだよ名倉、あんた私たちとしゃべる時は普通なのに」

「すいません」

小声で謝るところを見ると、それなりに申しわけなくは思っているのだろう。困りきった放送局長に乙彦はひとつ提案を試みた。

「俺が名倉に聞きましょうか」

「一緒にですか」

「はい、そのほうがたぶん、話しやすいんじゃないかと思ったんですが」

乙彦もあまり名倉のD組での学校生活を確認したことがない。ただクラスで浮いていることと、名倉側もあまり馴染もうと思っていないことだけは知っている。そのくせ乙彦や静内相手だと好き勝手にしゃべるのだから、極端に内気というわけではないのだろう。しかも、恋する姫君の前では不器用ながらも騎士を演じているあの姿を見たら誰も名倉を引っ込み思案だと思う奴はいなくなると思う。

「お前もそれだったら、協力できるんじゃないか」

静内とも話し合い、乙彦は話を進めた。名倉は不機嫌そうに黙っている。

「放送局の人たちが求めているのは外部生と内部生との対立をこれからどうやってよい形に持っていけばいいのかといった見方なんだ。俺も、この半年でいろいろ考えてることがある。静内も同じだ。お前だってそれなりにあるだろう。それを話していけばいいんじゃないか」

「そのくらいわかっている」

わかりきっていることのように、苛立ちつつ名倉は答えた。

「だったらそれをしゃべればいいだろ」

「いや、違う」

名倉は指を組んだまま、首を振った。はっきりした意思をもって、

「俺は最初からそんなのに興味ないです」

さすがに気を遣ったのか丁寧語で答え、乙彦と静内には、

「対立したってしなくたって、やるべきことをやってればいいだけだろう」

そう答えた。全く埒が明かない。どうもこの調子だと名倉は一切付け入る隙がなさそうなので、乙彦は改めて放送局長に切り出した。

「だったら俺のほうがしゃべりますか。俺なりに言いたいことはあります」

「ぜひに」

ほっとした表情で放送局長が身を乗り出した。顧問の先生たちが何か名倉の方に視線をやり、不安げな顔をしていたのだけが気になるがそんなのは無視していく。

「関崎くんがこの学校に入るきっかけというのは」

「実は中学受験で失敗していたんでそのリベンジです」

「そうだったんですか。意外ですね。それで高校では英語科にですか。さっき伺いました生徒会絡みの付き合いがあってということで」

話がするする進む。乙彦は安心して続けた。

「詳しく言うと、当時評議委員長だった立村くんがいろいろ俺に青大附属での勉強方法とか、特に英語での点数の取り方とか、いろいろアドバイスしてくれたってことが大きいです。彼は、今だに英語が学年でトップですから、彼に手伝ってもらえたのが実は英語科に進むきっかけだったのかもしれない」

周りからは立村とのつながりを隠すよう言われていたこともあるがもう無視だ。事実を隠すのは嫌いだ。

「評議委員長の、ああ、本条の下の代の、ああ彼ですね」

すぐ気がついたのか放送局長は頷いた。

「また学校入学前のオリエンテーションでも、わざわざクラスのひとりを勉強手伝い役につけてくれて助けてくれました。あの、当時生徒会長やってたという藤沖くんです」

「はいはい、藤沖くんわかります」

「結構入学時に学校側からフォローしてもらえていたという印象が俺自身はあります。だから尚更スムーズに馴染めたのかもしれない」

「うちの学校はそういう面では過保護に近いくらい面倒見いいですよ、先生」

放送局長は顧問に話を振った。男性の顧問が引き取った。

「そうだな、確かにうちの学校はひとりひとりの顔と名前を覚えて全力でフォローするのが努めという校風だからなあ。だがこれは、結構過労の原因なんだぞ。お前たちも少し教師をいたわれ」

「とりあえず却下ということで。インタビューを続けます」

なんだか放送局ののどかな雰囲気は漂ってくるようなやり取りだった。

「ただそれは英語科に入学する外部生がひとりだけだったからできたことだと思います。静内さんや名倉くんのように複数生徒がいる状態だとなかなか厳しいんじゃないでしょうか。やはり英語科は特殊です」

「静内さんはどうですか？」

冷静に首を振った。

「私も一応、最初はお手伝い係の生徒さんを用意されそうになりましたが、すぐ断りました。いくらなんでも、幼稚園から小学校に入るとかなら別ですけども。それでよかったと思いますし、今のところ普通に付き合いはできてますから」

「クールですね静内さん。名倉くんは？」

「そんなのありませんし、俺もたぶん断ると思います」

となると、あれだけ手厚い出迎えをしてくれたのは英語科A組だけだったということか。女性

の放送局顧問が口を挟んできた。

「補足しておくとな、外部生のみなさんを迎える時の対応はそれぞれのクラス担任に任されているの。関崎くんの担任は麻生先生でしょ？ 麻生先生は昔からひとりひとりに対して細やかな対応をすることで有名な先生よ。あの顔ではそう見えないかもしれないけど」

大爆笑だった。確かに。

「でも、それがいいか悪いかはケースバイケース。関崎くんにとっては外部と内部の枠がなく馴染んで現在の生活に至っているかもしれないけれども、人によってそれは苦痛でしかない可能性もあるというわけよ。静内さんはそれを言いたかったんじゃない？」

「その通りです。もし関崎くんのようにお付きの元評議委員さんとか用意されてたらもうたまったもんじゃないです！退学してたかもしれません」

「俺も同意です」

こういうところだけ名倉が賛成するのはどういったものか。どちらにせよ、放送局長がこれまで外部生を担当がどうやって迎えているのかその詳細を知らなかったということが判明し、新しい切り口を見つけられた様子が伺えた。

「手厚く迎えて成功するケースもあれば、嫌がられることもある。難しいですね。となると今までいろいろと内部と外部の人たちをなじませていくためのイベントなども、ある意味邪魔なものかもということですね」

「百パーセントそうとは思いますが、無理強いしなくてもいいような気がします」

静内が言い切った。

「何度も言いますが、外部生にとっては馴染む時間がもったいないんです。だからこそあまり気の合わない内部生の人たちと無理に仲良くなるよりは、やりたいことのために気の合う連中と集ってあれこれやるほうが効率的なんです」

「ですがそれだと視野がせまくなりませんか」

「なりますけど、自由研究の過去データなどを確認したり反論してきた人たちとどちらが正しいか議論する暇あるならもっとレベルの高い研究をすることに私としては専念したいんです。私、今回のインタビューに参加した一番の目的は、限られた時間を有益に使うために無駄なエネルギーを使いたくない、だから内部生の人たちには邪魔しないでって言いたい、それだけです」

——静内、なんでそんなに「時間が足りない」って連呼するんだ？

インタビューはなんとも盛り上がりせずに終わった。結局ろくに口を利かなかった名倉としゃべるだけしゃべった静内と、ありふれた言葉に終わった乙彦と。この三つ巴の話題をどうやって放送局の人たちは活用しようとするのだろう。全く想像がつかない。乙彦の得た収穫といえば、自分が英語科A組でかつ麻生先生に受け持たれたことは最大の僥倖だったこと、静内は時間に追われるアリスだったこと、名倉にインタビューは避けたほうがいいこと、これらを知ることができた点だった。そして、頭の痛い現実もひとつ。

——心底静内は、清坂を嫌っているんだな。

1 1 合唱コンクール開始前（1）

——きわめて一年A組は平和だった。

あのインタビューから気がつけばもう一週間。乙彦たちの練習もそれなりに行われてはいたし伴奏もそれなりにだんだん合うようになってきていたしで、あっという間に合唱コンクール当日を迎えた。朝七時四十五分だ。今日は早めにバイトを上げらせてもらった。

「静内、お前なんて顔してる」

朝から完全に顔を角ばらせている静内と顔を合わせた。

「関崎、朝練やらなかったの」

「やってない。それこそ他の部活絡みもあるからな。それにやるべきことは一通り手を尽くした」

まだ八時前。それでも週番の仕事は一応あるので早めに向かったところ、教室から出てきた静内と顔を合わせたというわけだった。

「音楽室が空いてないからしかたなく、一部の人と六時から練習してたんだけど」

「よく教室空いてたな」

「うちの担任に手をまわしておいたのよ」

——静内も結構やることやるな。

乙彦は辺りを見渡した。さすがに合唱コンクールともなればどの学年もみな張り切りだしているようで、なかなか音楽室での練習が難しかったのは事実だ。だが立村のあまりのど下手ぶりを理解したのか肥後先生が優先的にA組のために時間を取ってくれた。立村も練習に余念がなく、今週はなんと電子ピアノを親から融通してもらったと話していた。いらなくなったものを手に入れただけとは言っていたが、それでも自宅で弾けるかどうかとなるとやはり違うだろう。立村の表情は明るかった。

「うちの最重要難題と言われていた伴奏も十分合格点レベルに達したと思うしな。それに歌も俺が聞いている限りでは揃ってきた。もちろん俺の感覚だが。静内の聴覚には多分負ける」

「どのレベルで満足するかよね」

静内はひとつにまとめた髪の毛を後ろに流した。こうやってみると品のある優等生でありそれ以上の何者でもない。乙彦や名倉の前でぶちかますがらっぱちお嬢ではない。しかし聞こえぬように言いたいことはやはり言う。

「たかが合唱コンクールだから多少聞き苦しくてもいいって意見もあるけどね。そういう手抜きが私は許せないってわけ。努力しなくてもいいの、綺麗に歌えればいいって」

「努力しないと歌えないような気がするんだが」

「そうね、でもやる気がなくてもいい声出る人は出るのよ。関崎だってあんた、あれだけ歌うために毎日声楽の発声練習やってる？」

「いや」

「でしょう？ 私が言いたいのは、がんばらなくていいから結果出してってことなんだけどね、

なかなか上手くいかない。そんなに私求めていること、過激？」

答えに迷う。真実突っ込むべきか。決断した。

「過激だ」

「えー？ どうしてよ」

「努力したほうが努力しないよりはずっといい音楽になるような気がする。合唱コンクール終わったら久々に三人でカラオケ行って発声練習するというのはどうだ。少なくとも来年のための努力は重ねられるだろう。ただしこれからは俺は歌謡曲よりもクラシックや唱歌などの堅いもので練習しようと思っているんだ」

静内は膝を抱えてその場にしゃがみこんだ。

「貧血か。今から、お前、大丈夫か」

「大丈夫じゃあないよ。関崎、あんたさあ」

覗き込んで気づいた。こいつ、笑いこけてやがる。

大真面目に答えたのに笑いのめした静内を放置して、乙彦は週番のため職員玄関前に立った。まだ七時五十分になったばかり。まだ誰も来ていないのは明白なのだが、あちらこちらで歌声が響く。廊下でも、奥の家庭科室でも、二階からも三階からも。いやきわめつけば職員玄関前から。

「いやあー、賑やかっすね、おっはよっす」

脳天気な声で挨拶を交わすのはやはり南雲だった。乙彦も「ああ、おはよう」と短く返事する。同じバイト先という面倒なつながりはあるものの、半年経った今ではそれなりにやりとりもするようになった。別に嫌っているわけではないので多少の情報交換もするようにはなった。

「今朝もまた、新しい本入荷してきてるっけ」

「してる。昨日大量に入ってきていた。なんでも明治時代の日本文学を集めていた人が亡くなったとかでトラック一台くらいあるそうだ」

「まじかよそんなの、うちの本屋で誰買うの」

「わからんが、ちゃんとより分けまではしておいた。場所が厳しいので今のところ混じっていた雑誌類だけ出しておいた。たぶん明日以降、店長からなんらかの指示が出ると思う」

「どうもどうも。まああれだよな、そろそろ大学の卒論スパート時期だから誰か買いに来るかもしれないし。参考文献として結構まとめ買いする人もいるって奥さん言ってたよ」

——よくわからないな。

適当に合わせておいた。なんとなくどういう本が売れてどういう本が嫌われるのかはより分けの段階で見当がつくようになってきた。だが話によると、店頭で売れない本も実は陰で好事家がいるとかで、店長の人脈を使って融通することもあるという。まだまだ学ぶことが多すぎる。

「関崎は、あまりうちの店で買ったりしないのかな」

「たまには買うが、最近はまだな」

本当はBCLに関する特集雑誌などあれば是非ほしいところなのだが、無駄遣いはまだまだ許されない我が身ゆえに我慢している。ため息をつく。

「おはよう！ 関崎くん早いね、あれ南雲くんもめずらしく早い！」

途中で入ってきたのが清坂美里だった。さっき静内と話をしていたから当然のことながら朝六時から合唱の練習に取り組んでいただろう。尋ねてみた。

「今日は、朝練習してたのか」

びっくりした様子を隠さない清坂。

「うん、してた。A組、やってなかったよね。なんで知ってるの」

乙彦が返事をする前に南雲が割り込んだ。

「うちのクラスもやってるけどなあ。今も練習中だよ。俺、週番だから抜けてきたけど」

「あっそっか。そうだよな。うわあ、C組って合唱コンクール優勝最有力候補じゃない！ 難波くんすごいよね。学校に来た時すれ違ったけど挨拶しても全然気づかないの。ずーっと一生懸命片手でタクト振ってる真似してるの！ ホームズの真似もぜんぜんよ」

「難波はなあ、もう、命賭けてますから」

——肝心のB組はどうなんだ？

乙彦が様子を伺っていると、頼みもしないのに清坂はぺらぺらしゃべりだした。相変わらずのソプラノトーンで耳に痛い。

「うちは一応練習はしたよ。一生懸命やってるよ。でも今の今になってダメだししても無駄じゃない？ やることはやった。あとは全力尽くしてがんばろうよ！の一言じゃどうしてだめなんだろう？ そう思わない？ 関崎くん」

これは難しい問題だった。一応A組の練習は古川とも相談して、昨日の段階で打ち上げとなった。とりあえずは聞くに耐える合唱として揃ったし、反発したりわがまま言い出す生徒もクラスにはいなかったし、なんだかんだ部活のある生徒も時間を見つけて一緒に練習を楽しんでいたようだし、合唱コンクール自体に向かう姿勢は完璧なものだった。ただし、静内に話した通り乙彦の聞いた限りのレベルで丸がついているだけであって、本当のレベルがどんなものかかは判断に迷う。

「俺としては、高いレベルを目指すことは決して間違いではないと思う」

乙彦は重々しく答えた。明らかに不満げな清坂が言い返してきた。

「けど、努力はしてるのよ。求められてるレベルには程遠いかもしれないけど。そのくらい認めてもいいじゃない？」

「きっとそれ以上のレベルに達することができる、と判断しているからみなもっと高みを求めるんじゃないか。中途半端に終わらせることを俺はあまりいいとは思わない」

「けど、それって限度があるよね？」

「自分で自分の限界を決めてはならないと思う。立村がそうだっただろう」

清坂が言葉に詰まるのをしっかりと見据えた。すぐに南雲が納得したように「あーあ」と叫んだ。

「だよなだよなそうさそうさ。りっちゃんがんばってたよなあ。この前聞いたけど、めっちゃくちゃ美人のお母さんにしごかれてピアノの練習してたっけ。確かに関崎言う通り、りっちゃんは自分の限界越えようとしてがんばってたよなあ」

「立村くんはそうだけど、でも！」

美里がまた食らいつこうとするのを遮ったのは、規律委員会顧問の先生の一言だった。

「おい、お前たち合唱コンクールにそんなに燃えているんだったら早く教室にもどりなさい。もう二年も三年も昨日の段階で週番今日に限りなしってことで話、つけにきてるぞ」

三人、顔を見合わせた。そんなの聞いていないが確認する。

「先生、ということは教室で練習しててもいいってことですか」

「そうそう、ほらほら解散解散」

ありがたい。週番がないならやることは一つ、最後の最後のレベルアップ、気持ちよくできればそれでいい。乙彦はふたりに手を挙げた後大急ぎでA組教室へと向かった。まだ八時少し前。余裕で練習できそうだ。

1 1 合唱コンクール開始前（2）

青立狩 高校一年・二学期編 1 1 合唱コンクール開始前（2）

朝練は必要なしと判断した、一年A組評議ふたりが立ったまま顔をほころばせている。

「おはよう、関崎」

「あんたも早いね」

古川が鞆を自分の机にひょこんと座って足をぶらつかせた。

「今日は週番が免除されたんだ」

「あ、そうなんだ。じゃあ美里ももう教室にいるのかな」

「たぶん」

すぐにB組に向かうのかと思ったが古川は首を振った。

「今はだめだめ。ライバルだもんねえ。終わるまではこのまま敵同士ってとこよ。とりあえずはあんたも、B組でいちゃつきたい気持ちもわかるけど我慢しなよ」

「誰のことを言っているんだ」

乙彦も自分の席についた。今日は一応鞆を持ってきたけれども、教科書もない。財布と筆記用具だけ。軽いのが心地いい。

「それにしても関崎も今日は気合入っているって顔してるよねえ」

「もう少しで本番だ。気合が入るのも当たり前だろう」

乙彦が答えると、古川はそっと扉の向こうを覗き込み、

「他のクラスはぎりぎりまで必死に練習してるみたいだね。さっきも音楽室で誰か歌ってたよ」

「B組は今日も六時から朝練だったと聞いているが」

「あらあら誰からよ」

突っ込まれて気づく。しくじった。古川と一緒に藤沖も意味ありげに笑う。

「関崎はそういうところが意外と抜けているな」

「別に悪いことをしたわけではない」

静内と会ったのは事実だがたまたまロビーで顔を合わせただけのことだ。古川の妄想たくましくふざけたこと言われてはたまらない。

「まあまあいいって。でもうちのクラスは腹八分が一番。ぎりぎりまでつっぱしったってこれ以上上手くなるってこともないし」

「古川に前から聞いたかったんだが」

乙彦は軽く机をたたいて尋ねた。

「ベストを尽くしたいとは伝えてないのか。俺が見るからに古川は全力でクラスまとめに走り回っているんだが、肝心要の歌についてはこだわってないようだが」

「鋭いこといっちゃうねえ、そうだよ、その通り」

藤沖がまゆをしかめた。

「藤沖、あんただって言ってたでしょが。うちのクラスはまっとうなやり方で太刀打ち出来るよ

うなタマじゃないの。伴奏だってそうだし歌う人数自体が圧倒的に少ないじゃないの。他のクラスみたいに毎日きりきりやってもかなわないところはかなわないの」

「最初から決め付けるのはよくないと思うが」

「違うって。ベストは尽くすよもちろん。でもね、出来ることと出来ないことってのはちゃんと分けて考えなくちゃ。私がみた限り、昨日が今のところベスト。みんなちゃーんと頑張っって大きな声で歌ってくれたじゃないの。男子が全員あれだけでっかい声だしてのどの奥みせて歌うなんてすごいじゃない。それで十分。美しいハーモニーをどっかのクラスの人たちは追求し続けているけど、それよりみんながんばったって気持ちのほうを大切にしたいって、あんたそう思わない？」

藤沖に問いかけた。即、否定。

「いや、本来ならベストを尽くすために朝練習もやるべきだとは思いますがしかし」

「しかしなによ」

「朝は、眠いだろう」

古川の笑い声が高らかに響いた。つまり藤沖も実はあまり、朝練に乗り気でないということだ

。

前扉が開いた。立村が教室に入ってきた。三人の顔を見て息を飲んだようだがすぐに、

「あ、おはよう」

さらりと挨拶をして自分の席に鞆をおいた。

「おっはよ一、あんたもずいぶん眠そうねえ。夜、まさか一発抜いてなんかないよねえ。あんた知ってるよね、気合入れる日まで一週間は抜いちゃだめだってこと」

「古川さん朝から鬱陶しいこと言うなよ」

さらりと交わす。古川をあしらいつつ鞆から楽譜ファイル……先日清坂が立村のために一生懸命貼り付けてやったという大判のノートだった……を抱えて教室を出ていこうとした。

「あんたどこに行くのさ」

「音楽室。ピアノに触ってくる」

こずえが感心したように頷いた。思わず乙彦も藤沖と顔を見合わせた。朝練なしとは伝えてあったけれども立村のためには無理にでも行ったほうがよかったのかもしれない。見送りつつ古川がつぶやくのが聞こえた。

「あいつもねえ、ほんとよくがんばったと思う。一ヶ月前には想像できなかったよ。立村があんなに、本気になってピアノに打ち込んでるなんてさ。ほんと好きなんだね」

「どこかの先生について練習していると聞いたが」

乙彦が尋ねると、古川は頷いた。

「そうだよ。一ヶ月だけお願いしたって。けどそのためにピアノも買ってもらったとか、いろいろしてるね。うちでも練習してたけど、まああいつがこの一ヶ月で行き着けるだけのところにはたどり着いたんじゃないかなって思うんだ。よその誰かがあんなピアノで歌えるなんて信じられないとか言ってるみたいだけどね」

——静内のことを聞いているのか。

嫌な予感がする。乙彦はあえて知らない振りをした。

「藤沖、あんたが立村に面白くないって思ってるのは知ってる。けどさこれだけは認めてやりなよ」

付け加えるように古川は、藤沖の顔を正面から見て言い放った。

「今回に限っては立村、本気でうちのクラスのために伴奏引き受けたんだからね」

タイミングよく他の連中もなだれ込んできたのと、女子たちが肩を寄せ合いながら現れたのもあって藤沖の返事は曖昧なまま消えた。古川もすぐ女子たちのグループに混じり合いきゃあきゃあ盛り上がっている。見ると、ピアニストふたりもやはり仲良く現れ、互いに何か語らっている。

「おはよう関崎、あのさ、実は今度」

後扉から飛び込んできたのは片岡だった。相変わらずの丸っこい眼差しがくるくる動いている。

「合唱コンクールで賞獲ったら桂さんがまた焼肉パーティーしようって言ってるんだけど、来てくれるかなあ」

「はあ？」

乙彦より先に藤沖が反応した。

「またやるのかおい。お前、英語でトップ獲るまではずっとおあずけってきいてたが」

「いや、だからそれだといつになるかわからないからって」

口を尖らす。

「だから、上位に食い込んだらってことでOKもらったよ」

「片岡あのな」

乙彦はため息を吐きつつ片岡に言い聞かせた。

「全学年で三位に入ることができるのかどうかってことは、今の段階では奇跡に近いぞ。お前、正直B組やC組に勝つことができると思ってるのか？ あいつら今日も朝から練習してたぞ。あの気合と比較してみる」

しょんぼりうなだれた片岡を藤沖に預け、乙彦はゆっくり片手を振って見た。何度も身体に染み込ませた腕の動き。だんだんなめらかになってきたような気がする。本当は思いっきり合唱に入りたいところだが、今回はとことん指揮者で全力投球しよう。

立村がもどってきた。やはりここはしっかり伝えなばなるまい。乙彦は近づいた。立村も少し安堵したかのように微笑んだ。

「今日は全力尽くすぞ。お前の責任は重いが、俺は信頼している」

やはり困ったようにうつむくものの、すぐに穏やかな表情で頷いた。

「お互い様だよ。足を引っ張らないようにするから。そのくらいはできるし」

「頼む。俺もお前が頼りだ」

見ると古川もいつの間にか立村の側に寄り、

「ほんとよくあんたも弾けるようになったよねえ。お姉さんは嬉しくて涙もんよ。さあ、あとは腹から思いっきり歌うのみだよね。思いっきり行きましょエクスタシー」

下ネタ女王としては当然の励ましをしてやっている。

「古川さん、それは違うと思う」

かわし方もさすが三年間で年季が入っている。これが内部生におけるアドバンテージというものだろうか。先日の放送局インタビューを思い起こしつつも、

——俺は半年で十分立村と同じくらい古川のネタ攻撃を交わせるようになったしな。

内部生と外部生は半年あれば十分近づけるし、追いつくことができる、そう確信した。

青潟大学附属高校の合唱コンクールは校外に一切公開されていない。他の高校だと市民会館を借りて大掛かりに行うところもあるようだがこの方針は今だに変わっていないと聞く。乙彦の母も興味津々らしく、なんとかして息子の晴れ姿を見たいとぐちぐち文句をたれていたがしょうがない。これが決まりなんだからしょうがない。

椅子を持って廊下に並び、そのまま一年の最前列にそれぞれ置く。さっさと座って全員が揃うのを待つ。基本的に背の順番だが乙彦は後ろから二番目、最後尾が立村だ。指揮者と伴奏者は出入りの関係もあってはじめてからその順番と定められている。隣りには藤沖がいる。しゃべるには事欠かなかった。

——あっという間に俺たちの順番が来るといわけか。

一年A組が先頭バッターを勤めることになるのは当然といえば当然だ。あれだけ一ヶ月騒いでいたくせに、気がつけば一瞬のうちに終わってしまう。あっけないけれども充実した日々だったのだからそれはそれでいいような気もする。

男子の最後尾で立村がじっと楽譜を見つめている。伴奏者はちゃんと楽譜を見て弾くことを許されている。一心不乱と言ってよい。その一方で他の生徒たちはのんびんたらしとおしゃべりに勤しんでいる。

「まああれだよなあ、これ終わったら中間テストだろ。中間終わったら今度は学祭だろ」

「学祭って一年なんもやらんのかよ。学祭実行委員募集あるんかいなとか思ってたが全然やらねえなあ」

「お前知らんのか。学校祭ってのは部活か委員会に人員全部取られちゃうから、結局クラスで何か出来る状態じゃあねえんだよ。俺たちだってそうだろ。吹奏楽部の悲しさよ」

——確かに、学校祭の準備はもう少し早くてもいいような気がするが。

乙彦もその点は気になっていた。本来なら合唱コンクールよりも学校祭の準備を早めにやるべきではとも思うのだが、規律委員の先輩たちから聞いたところによるとまともに参加できるのは二年生になってからだという。一年クラスはほとんどが学校内で行う食堂の手伝いとか荷物運びとかそういうことのみだという。自主性なし。もちろんフォークダンスのイベントなんて提案できるわけもない。座談会はどうなんだろう。誰か企画する奴いるんだろうか。

「関崎、何考えてる」

「いや、そろそろ学校祭のことを考えないとならない時期じゃないかと思っただけだ」

「学祭な、そうだ。俺もそのことばかり今考えてるぞ」

三年生が最前列に並んでいくのをながめながら藤沖も頷いた。腕を組んでいる。

「人数が揃えば一度くらい応援団らしい見せ場を作りたいんだが、いかんせんなかなか団員が集まらない。なかなか厳しい」

「お前、スカウトを続けているのか」

乙彦が思わず声をあげると、

「そうだ。興味を持つ奴がないわけではない。ただ、続かない。何がいけないんだ」

「いけないことはないと思うんだが」

藤沖のふらふら疑惑理由説明。もうこいつの頭には青大附高応援団の大旗を降りかざす未来しか存在しない。古川には後期再選が行われるまでこの状況を耐えてもらうしかなさそうだ。

全校生徒が揃ったところで校長先生、生徒指導担当の先生、さらに審査委員長である肥後先生のお言葉が順ぐりで始まった。前もって聞いていた通り立村が肥後先生のお話が始まる前に立ち上がり、舞台袖に向かい、それについて各生徒たちも続いた。

袖幕に入ると気ぜわしく音楽委員の三年女子生徒が乙彦に向かって説明してきた。

「お話が終わるまでは静かにしててください。外に聞こえます。また始まりましたら伴奏の人はマイクのスイッチを入れておいてください。伴奏の音を出せるだけ外にも響かせたいので。入れたら絶対に触らないでください。弾き終えたらすぐに切ってください」

細かな指示に立村も頷いている。静かに楽譜を広げ、じっと見据えている。落ち着いているようにも見えるが緊張を隠しているような感じもする。右手を思い切り動かして準備運動らしきものをつつ、乙彦は立村に近づいた。

「随分お前落ち着いてるな」

はにかむように立村も答えた。ちらと他のクラスメートたちを眺めてから、

「もうどうしようもないしさ」

つぶやきつつ、古川たちの様子を観察していた。古川はというと、他の女子たちに小さな声で

「みんながんばってきたから大丈夫！」

元気づけるように笑顔を振りまき、男子連中にも、

「あんたらも、麻生先生からのなんかわからないけれど貢物もらっちゃうために、溜まったものここで思いっきり出しなさいよ！まさかと思うけど昨日自家発電しちゃった奴なんていないよねえ」

相変わらずのネタで和ませている。男子たちももう古川の下ネタ女王ぶりに驚く奴はほとんどいない。立村は完全に楽譜の世界に没頭しているし、片岡ひとりが妙に顔を赤らめているくらいのもの。藤沖に至っては乙彦にだけ聞こえるように、

「古川に言われるまでもなく、本来は俺がお前らに指示するべきことなんだろうな」

しみじみとつぶやく。いや、それは評議のする仕事には入らないと思う。乙彦はそう思う。

それほど騒いでいたとも思えないがいきなり、三年女子の音楽委員がきつとした顔で注意してきた。古川がぺこっと頭を下げた。

「静かにしてください。まだ先生たちのお話が終わっていません」

すぐに黙る。もともとそれほど喋っていたわけでもないのであつという間に静まる。ふと気がつく立村が立ち上がり乙彦に近づいてささやいた。

「ピアノの前からだ少し手が見づらいから、思い切り高く振り下ろして合図してもらえると助かる」

「こんな感じか」

乙彦は腕を振って見た。立村もよく練習したと思うが乙彦も実は家で毎日それなりにやったのだ。家族からは新種の体操の一種かと大笑いされるはめになったが、立村にも何やっているかわかるような振り方ではあると思う。互いに努力は認めてほしいものだ。

ぐぐ、と誰かが笑いをこらえるように口を押さえている。ひとり、ふたり、さんにん。露骨に顔を緩めているのは片岡と藤沖だった。後は怖い音楽委員女子の視線に射すくめられて必死に耐えている。そんなに面白いことをしたつもりは、ないのだが。

「肥後先生のお話が終わったら音楽委員が合図しますので、後ろから一列で壇上に上がってください。列はきちんと、この前のリハーサル通りをお願いします。それと指揮者の方は全員が定位置についた段階でやはり音楽委員が手をあげて合図しますので、それに従って一礼し、そのあとで指揮台に上がってください。それと伴奏者の方はピアノがほとんどカーテンで隠れてますので、挨拶はしなくていいです。その間に弾く準備を整え、譜面は早めに立てておいてください。譜面めくり担当は誰かいますか」

まくし立てる三年音楽委員女子の言葉を右から左に流しつつ、乙彦はいったん舞台に昇る階段の脇に立ち、古川に声をかけた。

「古川の努力が報われると俺は信じてるからな」

「このこの、女殺し、だあれに習ったのさ」

軽口を叩きつつも古川はぐいと親指を立て、

「それじゃあお先に待ってるよ」

そのまま舞台へ向かった。男子も女子も他クラスと比べ人数が少ないからあっという間にみな整う。三年女子音楽委員がさっと手を上げたので乙彦もそのまま歩を進めた。ささやき声やざわめきが微かに館内を満たす中乙彦は舞台正面に立った。

——この光景だ。

自分の身体が震えるのを感じる。

——水鳥中学でいつも観ていた光景。

生徒会副会長の立場上いつも、乙彦は総田たち生徒会役員一同で舞台に上がり、全校生徒にマイクを使って呼びかけていた。内容はほとんどが生活指導やら学校祭やらその他もろもろ。忘れもしない、学校祭座談会。やる気のない連中を目の前にして乙彦が呼びかけた場所も、この舞台に似ている。あの時と違うのはみな、真面目な顔をしてしっかと舞台を見上げていること。乙彦が今までこうであってほしい、こういう眼差しで見上げてほしい、そう願っていた光景だった。

乙彦は自分の知る限り思い切り深く礼をした。最敬礼を目指した。指揮台に足をかけ、あらためて一年A組の面々を見つめた。同じく、今いる十九名の眼差しには濁ったものが何一つ見当たらなかった。

乙彦は思い切り高く手を振り上げ、ピアノの方向に向かって一気に手を振り下ろした。

ピアノの旋律が流れ出す中みな声を合わせて「恋はみずいろ」の歌詞を追う。

——今日一番、出来がいいんじゃないか。

習った通りに手を両手に広げ、高く掲げたりするがほとんどは感覚だった。たぶんみな、乙彦の指揮する手を見ていない。ただひたすら乙彦の顔ばかり見ている。にやっとしている奴も見つけた。真面目に歌えと言いたい。

藤沖も、片岡も、古川も、その他の連中もみな、真剣な顔して口をぱくぱくさせている。流れる声が整っているとわかる。もしこれが中学時代だったらどうだろう。みなやる気なさげに手を後ろに組んであさっての方向眺めつつ歌っていたに違いない。

——こういうことにちゃんと真面目に取り組む奴、やはりいるんだな。

中学時代は想像ができなかった。たったひとり、制服も髪型もきっちり整え、ひとり乙彦を優しく見つめていたあの女子に重なる誰かの影がそっとよぎったような気がした。

——ああ、俺も歌いたい、ほんとに。指揮者も一緒に歌ったら颯か。

歌声に没頭していたせいか、立村が全身全霊……見てないがたぶん……込めて弾いていたらしい伴奏にはあまり気を留めなかった。本当はリズムを取らねばならない、ぴたりと合わせていかねばならないと始まる前までは思っていたのだ。しかし実際指揮台の上を経て背中に全校生徒の視線を浴びせられたとたんすっこんと頭から抜けてしまった。気がつけば終わっていた。一年A組の「恋はみずいろ」はあっさり青い空と白い雲が結婚してくれて万々歳。めでたい。

乙彦はちらと古川に目線を送った。きゅっと口を一本に結んでいる。笑いを必死にこらえていたのはこいつだと一目で気がついた。なんて奴だ。ついでに藤沖たちも見た。無表情を装っている。まだもう一曲あるから仕方ない。いったん区切りをつけて、「モルダウの流れ」を激流化しよう。指揮台から降りて、乙彦は一礼した。少しざわめき起きたが、すぐに温もりのある気持ちよい拍手に包まれた。

——よし、終わった。次も気を抜かずに行くぞ。

改めて指揮台に昇り、ひと呼吸おく。みな、じっと乙彦の「顔」を見つめてくる。誰も右手も左手も見ようとしない。指揮者の立場としてそれでいいのかとつつこみたくなるがあえて飲み込み、乙彦は両手を掲げた。伴奏者のピアノへ目線を向けると立村が小さくうなづいているのに気がついた。準備は整っている。

左手だけ勢い付けて下ろした。

——モルダウの流れ。

立村がこの曲を弾く時に見せる極めて厳しい表情が印象に残っている。相当苦手意識持っているのだろう。しかし聞こえて来る前奏の音色は「恋はみずいろ」と比較してずっと深いものだった。乗り越えた、何かがある。乙彦は口を閉じた全員の顔を見据え歌いだしのタイミングで手を下ろすつもりでいた。そんなに長い前奏ではない。ほんの一瞬だったはずだった。

——どうした？

後ろの列でさりげなく目立っている女子ひとり。

乙彦と目が合った時、突如目を見開いた。普通の表情ではない。よくテレビのサスペンスドラマで見かけるような被害者のように見えた。ドラマならともかく舞台の上でそんな顔をするなんて普通ない。乙彦が迷っているその刹那、その女子は口を大きく開いて何か呻くようなそぶりを見せ、そのままぱたりと前方に揺らいた。

乙彦の目線にいち早く気づいたのか古川が振り返り、それと同時に他の生徒も同じく振り向いた。同時に、その女子が口を押さえるようにしていったんけぞるようにし、そのまままっすぐ前方に倒れていくのを見た。前にいる生徒が思わず避けた。

——まずい、頭打つぞ！

考えるより足が先に出た。それほど広くない舞台、乙彦は指揮台から飛び降り、そのまままっすぐその女子の元に駆け寄っていた。悲鳴とざわめきと慌ただしく蠢き出す先生たちの気配、クラスメートたちの近づくにも近づけない様子。その中でひとりためらうことなく乙彦の隣りにしやがみこんだのは古川だった。

「宇津木野さん、大丈夫？　じゃないか」

「気分が悪いんだな」

宇津木野だということに、ようやく乙彦は気がついた。顔だけは決して忘れない乙彦の記憶力なのに、なぜかこの瞬間だけは名前を忘れてしまっていた。とにかく寝せたままではまずい。脇で麻生先生が立村を名指しでなにやら怒鳴っている。麻生先生も駆け寄りちらと宇津木野の様子をちらとみやった。音楽委員の女子が袖で不安そうに様子を伺っている中、礼はしなかった。

「申し訳ありませんが、生徒の急病につき一年A組はこれで終了させていただきます。申し訳ございませんでした」

同時に、

「お前らも早く降りろ、席に付け、いや、とりあえず教室戻れ」

指示も混沌としている。動揺しているということだけは伝わってきている。乙彦が宇津木野を抱きかかえるようにして頭を上にあげている間に古川が麻生先生に、

「先生、宇津木野さんを保健室に運んでいいですか」

「担架を出そうか」

そんな暇ない。今完全に宇津木野は気を失っているように見える。一刻も早く保健室に運ぶべきだ。乙彦は首を振り言い放った。

「俺が背負って行きます。走れます」

「関崎、いやそこまでは」

「俺は男ですからひとりくらい余裕で背負えます」

「いやそういう問題じゃなくって！」

制する古川の言葉も無視した。乙彦は宇津木野を抱き上げるようにして古川と麻生先生に、

「悪い、俺に上手く背負わせてもらえないか」

頼んだ。しゅしゅ古川も宇津木野に囁きながら本人の手を乙彦の肩に載せ、足を上手く抱えられるようにさばいてくれた。

「関崎、落とすんじゃないよ！」

「まかせろ」

「関崎、とにかくお前少し落ち着け」

「落ち着いてられません！」

——人がひとり、気を失った状態だったのに放っておけるか！

聴衆たちが見守る中乙彦は宇津木野を背負った。幕のない舞台に残された四人の行動は丸見え。声も丸聞こえ。こっぴどかしくないといえば嘘になる。だが目の前で顔を引きつらせて倒れた宇津木野の表情を間近で見た乙彦がそれを無視できたとすれば、相当の冷血漢だろう。乙彦はそのまま舞台から一歩ずつゆっくりと進み、そのまま一気に体育館の入口まで駆け抜けた。このくらいしなくては、絶対に嘘だ。拍手している様子だが根本的にそれは間違っている。今はただ。

——宇津木野の回復をひたすら祈るべきじゃないのか。人間として。

後ろから別の足音が小走りに聞こえる。古川が追いかけてきているのだとすぐに気づいた。

12 指揮台にて（3）

保健室について宇津木野をベッドに寝かせるまでの作業は保健室の先生と古川が請け負った。後から追いついた麻生先生とふたり、入口で立ちすくむのみ。

「関崎、お前は偉いぞ」

肩を叩く麻生先生を無視したまま乙彦はベッドに一枚かかったカーテンを見据えていた。女子のことだけに女子が面倒みるのは自然なのかもしれないことだが、自分が何か他に出来ることはないのだろうか、考える。

「あの時関崎が指揮台で気づいたから、すぐに対応ができたんだ。合唱コンクールとしては辛いことかもしれないが、お前の機転はさすがだぞ」

「麻生先生、よろしいですか」

保健の先生が麻生先生を呼ぶ。入れ違いに古川が乙彦の側に入る。

「大丈夫か」

無言で古川は首を振る。言葉を出さないまま様子を伺うと、

「これから救急車を呼んだほうがよさそうですね」

と聞こえて来る。想像以上に深刻らしい。

「いえ、生命に危険がというわけではありませんがやはり親御さんには安心していただいたほうがいいので電話をかけますね。私も付き添いますが」

それほど焦った様子もなく保健室の先生は受話器を取った。黒い電話のダイヤル音がじりじりと響く。

「お前たち、ご苦労だった。A組の生徒だけ全員教室に戻しているから、お前たちもそこで待ってなさい」

救急車が到着したようだ。三人ほど救急隊員が一礼して保健室に入ってきた。担架を用意し、カーテンの陰で手早く宇津木野を運んでいく。乙彦と古川が一言も会話を交わさぬ間だから、数分程度しか経っていないだろう。

「先生、でも私」

古川が真面目な顔でもって麻生先生に訴えた。

「私、宇津木野さんに付き添いで行ってはだめですか」

「これは大人がすることだぞ。お前たちはいい」

「いえ、できれば僕もそうさせてください」

初めて自分のすべきことがわかったような気がする。乙彦も続いた。

「麻生先生はこれからすぐに救急車に乗り込むんですか」

「いや、クラスにいったん戻ってからすぐ行くが」

「それなら私たちがついていけば先生、安心でしょが」

古川はさらに食らいつく。

「どうせ保健の先生もいるし、現場にいたの私だし、関崎はその状況を一番間近で観ていたわけ

だし、お医者さんに聞かれて説明できるのって私たちが一番適任だと思うんですよ。先生、いいでしょう、ついていきます、絶対に」

押し問答の末、保健の先生の一言、

「麻生先生はクラスのこともありますから後でお願いします。確かにふたりの言う通りその時の状況を確認する必要があると思われますので、連れて行きましょう」

で、麻生先生は渋々了解した。

「だが、余計なことを言うなよ」

急いで靴を履き替えて救急車を探したが見当たらない。振り返ると事務職員の人が自家用車らしい車を用意してくれたようで、

「とりあえず乗りなさい」

急いで駐車場に向かい乗り込んだ。緑の車で、仕事中に自家用車使っているのかと心配になったが、

「君たちの気持ちはわかる。黙って、とりあえず病院で麻生先生と合流すればいい」

言葉少なに指示された。二十代半ばの男性職員だった。あまり顔を見かけたことがなかった。

救急車の真後ろに付ける形で連なっていく。

事務の男性は一切話をしない。自然と乙彦は古川と語る格好となる。

「古川、宇津木野の様子はどうだった」

「見ての通り。意識はあると思うけど朦朧としているかも」

背中に背負った時、息ひとつしていなかったのに正直恐怖を感じた。このままだと最悪の事態を迎えるのではと考えざるを得なかった。

「関崎、あん時は担架を待つべきだったと思うよ。結果論だけどさ。動かしたら返って悪化するかもしれないんだからさ」

「今更言うな」

あの時は頭に血が昇りすぎていて自分でも非常識なことをやらかしたと気づかなかったのだ。保健室の様子で初めて理解した自分の勇み足。万が一、宇津木野の容態が変化することにでもなったら、自分でもどう詫びればいいのか。

「とりあえず病院で待機だよ。もう合唱コンクールどころの騒ぎじゃないうちのクラスも誰も歌いたいなんて思ってる奴いないに決まってる。しっかり宇津木野さんの様子を確認して、ご両親にちゃんと事情説明して、あんたは運んだことを場合によってはお詫びする。この流れだよ」

「だが」

——なぜ。

宇津木野が舞台上で卒倒するほどに体調を崩していたのか。無理して学校に来ていたのか。詳しいことは全くわからない。だが、あれだけ顔を引きつらせていた様子からすると相当我慢していたのだろう。

「私も詳しいことはわかんないけどさ。学校に帰ったら帰ったでまた一仕事だよ」

「何をだ」

「燃え尽きてるうちのクラスの連中をしゃきっとさせる必要あるじゃん」

「そういうこと言われる状況か。第一今、宇津木野は」

「関崎、あんた今回の合唱コンクールについてどのくらい事情知ってるかわかんないけど、宇津木野さん、きっと追い詰められてたんだよ。伴奏のこととか、自分のピアノのこととか、いろいろとね」

「詳しいことはお前さんから聞いただけだが」

古川はしばらく黙っていた。事務員の人は何も口を挟んでこない。信号前で止まった。前の救急車はそのまま直進していった。

「宇津木野さん、実はね」

ちろちろ横を見ながら、古川は伏せ目がちに小声で囁いた。

「合唱コンクールの伴奏、立村に頼んで譲ってもらおうとしてたんだよ」

——まじか？

言われた意味を把握しかね、乙彦はもう一度尋ねた。

「待て、伴奏をしたくないからということでお鉢が立村に回ってきたはずだが」

「そうだよ。でも、月曜の朝にね」

古川は前の事務員さんに聞こえないよう、乙彦の耳元に口を寄せた。

「美里が見てたんだ。立村を前に疋田さんとふたりで、頭下げてたって」

「頭を下げる？ 伴奏を引き受けてくれた感謝の気持ちじゃないのか」

「違う。頼むから、ふたりに伴奏させてほしいってね。今からでもちゃんとふたりならきちんと弾けるから、立村には無理しないでいって、そんなことを言ってたって」

「でもあいつはちゃんとピアノ弾いてたぞ」

首をぶるぶる振り、古川は答えた。

「立村、断ったから。ここまでやってきた以上きちんとやる。来年はもう伴奏やらない、ふたりでやればいいけど、この一ヶ月全力尽くしてきたから、最後までやらせてほしいって」

車はようやく青潟市立病院前で止まった。

病院受付で事務的手続きを取っている保健の先生を待ちつつ乙彦は古川とふたり、薬臭い待合室で突っ立っていた。ベンチもすいてはいるのだが座る気になれない。

「今更なんだが」

「なによ」

「古川はなんで付き添いに立候補したのかそれを知りたい」

乙彦もあの場所ではまず思いつかなかった発想だった。一クラスメートである自分が、いくらなんでも付き添いを申し出るなんてことは考えられない。そこまで踏みこんでいいのか迷うところもある。しかし古川はためらうことなくそれをした。

古川はひょいと真上を見上げた。すぐに乙彦へ向かい、

「まあね。もし自分が宇津木野さんのお母さんだったら、自分の娘がなぜ倒れてしまったのか、それを詳しく聞きたいと思うんだ。けど、先生たちはそんな側にいたわけじゃあないし、わからないよね。私が一緒にいたら、少しは安心できること言えるんじゃないかって思っただけなんだけど。別に何か出来るとか思ったわけじゃないけどね」

それに、と付け加えた。

「もう、うちのクラスでの合唱コンクールも幕になっちゃったから、それなら今一番心配な人のところに一緒にいたいと思ったのもあるよ」

「そんなに心配だったのか、何かあったのか」

口ぶりにこもったものを感じる。きっと女子たちの諸事情を古川はひとりで把握し、それなりに面倒を見ていたのだろう。宇津木野に対してもそれはきっとあるに違いない。

「まあ、いろいろあるよ。宇津木野さんもね。きっとこの一ヶ月間悩んだんじゃないかって思う」

「悩むようなことあるのか、合唱で」

「伴奏、ってのがああるよやはり」

さっき、車の中で話していた内容が少し気にかかる。目の前で事務手続きを取っている先生は随分と時間がかかっているようすでまだ乙彦たちのもとに戻って来ない。

「立村とのことか」

「そう。でも、しょうがないよ。みな一生懸命だったんだから。あいつも自分が一番いいと思ったことを選んだだけだし、宇津木野さんもそれをわかっていたと思いたいし」

ようやく準備が整ったのか、先生が乙彦と古川に声をかけた。

「さあ行きましょうか。宇津木野さんはこれから処置を受けることになるから少し待っていきましょうか。それとあなたたちは向こうのベンチに座ってて。麻生先生と宇津木野さんのお母様がいらっしゃったらあそこの受付の人に声をかけて指示を仰いでください」

「先生は？」

古川が問いかけると、

「詳しい話を聞いてきます。それとあなたたちにはこれから大切な仕事を願うすることになり

ますから、それまで待機しててくださいね」

きりりと言い切り、足早に保健の先生は看護師の女性に連れられて奥の廊下を曲がっていった。

「大切な仕事なんてあるのか」

「あるよ。関崎と一緒にいて助かった。ちゃんと義務を果たせるからさ」

「悪い。俺はあまり回りくどい言い方が苦手だ」

「わかった。要するにね」

膝を思い切り広げてスカートをいったんぱふりと持ち上げ、古川は姿勢を正した。

「宇津木野さんの家族に、あの子が悪くないんだってこと、伝えなくちゃいけない」

それからゆっくりと語り始めた。息苦しい匂いの中、乙彦も前かがみのままじっと古川の方に耳を傾けた。

「あんたにもどっちにせよ頼まないとまずいとは思ってたんだ」

切り出した。

「順を追って説明するとさ。夏休み前の段階で私も麻生先生から合唱コンクールに向けてクラスをまとめていこうぜ、みたいなこと言われてたんだ。ご存知の通り藤沖は生気なかったし、まあ私ひとりでできるところまでお膳立てしとくつもりでね。で、合唱といえば伴奏、伴奏といえばピアノでしょう。最初は軽く見てたんだ。宇津木野さんと疋田さんはふたりとも中学二年の合唱コンクールで上手にピアノ弾いてたし、課題曲と自由曲を割り振ればいいよね、って感じでさ」

「それがうまくいかなかったというのは、お前から聞いた」

「そうそう。それで最初ふたりに伴奏を頼んだんだけど断られたんだ。詳しいことわかんないけど、それぞれ習っている先生同士が妙にライバル意識燃やしてて、互いの弟子を駒にして戦いたがってるってさ。面倒だよねえ。たまたまふたりとも小さい頃からコンクールでしょっちゅう顔合わせていてそれなりに意識もしてた。友達じゃなくて顔見知り」

芸術の世界は面倒なんだろうと思いを馳せる。

「たまたま同じクラスになっちゃったわけで、ふつうのクラスメートとして付き合ってきたけど、やっぱりピアノの話が絡むと面倒なことも多いよね。うちの学校の合唱コンクールは幸いか不幸か外部公開しないから大丈夫だって言い聞かせたけどふたりの意志は変わらず。そうとう二年の合唱コンクールでの伴奏、比較対象されちゃって懲りたんだろうね。そりゃ外部にはもらさないにしても、噂は流れるよ。さらに今年は学内演奏会が十月にあるし、ふたりとも参加するしさ。もう神経ぼろぼろって感じなんだろうなあ。凡才たる私には全然わかんないけど、才能ある人は大変なんだね」

「もっともだ」

「しょうがないからピアノを弾ける子探したけどあまりいないというか、こちらと比較対象になりたくないってことで逃げられちゃった。そうよねえ。あのふたりがいるのに弾きたいなんて度胸普通ないよ。そのくらいあのふたりの才能は抜きん出てたの。しかたないんで今度は男子に目を向けたら、あららってこと」

「灯台下暗しか」

古川は声を落とした。

「まあね、立村があれだけ弾けるとは思わなかったしさ。『エリーゼのために』をあれだけ弾けるんだったらたぶんなんとかなりそうな気はしたよ。それにあいつがあれだけやる気見せるってこと、三年間見てきてほとんどなかったよ。発作的に馬鹿やることはあったけど。高校でしょぼく来ててこいつこんなに人生捨ててどうするんだろとか思ったたこともあったんで、あえて私はやらせたわけ」

「それは正解だ。俺も古川の立場ならそうしていたに違いない」

「実際あいつは必死に練習してたしレベル的にはすごく上達したと鼻屑目ではなくそう思うよ。もともと立村洋楽とかイージーミュージックっぽい好きだからね。音楽の勘どころは押さえてる。けど現実はきついよ。あのふたりと比較されたらそりゃしんどいだろうしねえ」

「だが、頼んだのは宇津木野たちだろう。立村がどうであれ、ある意味責任を押し付けたようなものだろう」

「理屈ではそうなるよ。けどね」

首を振りながら入口を見やる古川。まだ麻生先生は見えない。

「気持ちが追いつかないんだよ。立村が頑張っているのはみなわかってる。けどね、私たちは『本物』を知っちゃってるの。完璧さを知っちゃってるの。ほら、あんたのミニコンサート、あれを目の当たりにしてからみな、ハードルが高くなっちゃったってこと」

「俺がハードル上げたのか」

「それもあるけど、やはり宇津木野さんのピアノは私みたいなど素人からしても絶品だよ。あれを聞いたらもう、立村がいくらがんばっても気持ちがね、受け付けないよ。それともっと大切なことはねえ」

古川は言葉を選びつつ続けた。

「宇津木野さんが一部で『ピアノの女神さま』って言われるじゃん？ ピアノが弾ける子たちの中でも格上なんだよ。疋田さんも瀬尾さんも上手だけど、宇津木野さんは天才って言うていいくらいなんだよ。耳がいい人にはそれがすごく伝わってくるんだよねきっと。そして宇津木野さんはその人たち以上にもっと音楽にこだわりがあるんだよ」

「こだわりとはなんだ」

「つまり、立村レベルの音楽が聴くに耐えないものだって感覚の持ち主だってこと」

どう言いくるんでも柔らかく伝えることのできない心境を、古川は代弁した。

——音楽のこだわりか。

古川はなおも語り続ける。

「立村の演奏を足田さんと宇津木野さんは毎回耳にしてて、これだとちょっとなって顔していたのは私も気づいてたよ。関崎とのミニコンサートはほんと生き生きしてたし、あのふたりはピアノを弾きたくないから伴奏を辞退したわけじゃないもの。本当は思い切りピアノ弾きたかったんだよ。めちゃくちゃ好きなように演奏したかったんだよ」

「だが立村は本気で練習している」と

「そうなんだよ。立村が下手は下手なりにさじを投げてくれれば本当はよかったんだよ。ふたりともそれを期待してて、たぶん諦めるだろうと思ってたみたいなんだ」

「古川、それは宇津木野たちから聞いたのか」

乙彦は確認したかった。今の話が本当ならば伴奏という行為の陰に潜むどろどろが醜すぎる。古川は肯定するように頷いてすぐ首を振った。

「相談はされた。けどね、ふたりが一番悩んでいたのは立村があれだけ真剣にやっているのに自分たちの身勝手な価値観を押し付けていいのかってことなんだ」

「普通は怒るな。俺も怒る」

「普通は、ね」

古川はいったん言葉を切り、

「あんたさ、今日の課題曲歌った時、伴奏がおかしいとか変とか思った？」

いきなり話をそらしてきた。すぐ乙彦も思い出す。別にない。

「特に何も感じなかったが。立村もとちらなかったぞ」

「だよ。私は普通の音楽感性しか持ってないからそれですむんだ。けど、宇津木野さんにとってはいろいろと演奏の粗が気になってしまう。それはあるみたいだよ」

「それも宇津木野から聞いたのか」

またこっくり頷いた。

「まあ、一応ね。けど、宇津木野さんは辛そうだったよ。そう感じる自分がおかしいんだって何度も言ってた。みんなに合わせるようにしたいけど自分は音楽に対してだけどうしても変なところでこだわってしまう癖があるって。だからこそあれだけすごい演奏ができるんだろうけど」

「古川が宇津木野をかばう理由はわからなくもないが、合唱コンクールは学級の団結を高めるための行事であってピアノの旋律にこだわるためのイベントではないはずだ。そっちにこだわりたいのならそれこそ、十月に行われる学内演奏会でやればいいことだろう」

「理屈ではそうだね、そうだよね」

古川は乙彦の言い分をそのまま認めた。

どうも古川の話には頷けない。

あくまでも伝聞だからまるごと信じることもできないけれども、宇津木野たちが立村の演奏拙

さに耐え兼ねて自分から伴奏を申し出るといった展開は、乙彦からしたら調子が良すぎるような気がする。しかしその話をなぜ、宇津木野の処置が行われる寸前に古川が話さなくてはならないのか、そこが謎だった。

「だが、結局伴奏の件と宇津木野が倒れたことと何か関連性があるのか」

直球で問いかけた。

「あるといえばあるし、ないと言えないね」

「俺に話しておかねばならないことだとすると、あると解釈していいのか」

「いいよ。だらだら喋っちゃったけど要するに、宇津木野さんはいっぱいいっぱいになっていて壊れる寸前だったってこと。逃げ場がないってこと。倒れたことイコール背負ってきた何かと関連してるとは言い切れないけど、このままだと彼女にまたひとつどでかい罪悪感っていうお荷物ひとつ乗っかるわけよ」

「なんだその、お荷物とは」

「せっかくの合唱コンクールをめちゃくちゃにしちゃったっていう、罪ね」

「それは不可抗力だろう。本人が意図的にわざとしたわけではない」

「そうだけど、宇津木野さんはきっとそう思ってないよ」

そこまで話した時、ようやく麻生先生が現れた。乙彦たちをすぐに見つけ駆け寄ってきた。きよろきよろして誰かを探すような素振りを見せて、

「お前ら、どうしてここにいる？」

「先ほど、麻生先生が到着するまで待機するように言われました」

乙彦の言葉をひきとって古川も続けた。

「すぐに受付の方に声をかけてくださいって言われてます」

「わかった。それで宇津木野のご両親はまだか」

「来ているかもしれませんが、たぶん私たちでは顔がわからないと思います」

もしかしたらすでに受付に確認して、自分の娘のいる病室へ向かったのかもしれない。ずっと話に没頭していて気づかなかったことに反省するしかない。麻生先生は乙彦の肩を叩きすぐに受付の担当者と話をつけ、

「古川鋭いな。すでにご両親はいらっしゃっている。とりあえず三階に上がろう。なにはともあれそこからだ」

ふたりを伴いエレベーターの前に向かった。

車椅子に乗っている人や杖をついている人、点滴を腕に繋いで引きずりながら歩いている人、往来する中なかなかエレベーターには乗り込めなかった。それでもなんとか辿りつき、麻生先生の指示に従い検査室前のベンチに座り直した。

「俺は今からご両親に挨拶してくる。お前らもう少し待ってろ」

看護師の女性に導かれて先生が別室に通された後、ふたたびふたりきりとなる。

「俺たちのすべきことはなんなんだろうな」

「ご両親への状況説明。たぶん私たちができることはそれだけ」

「その間うちのクラスの連中はどうしてるんだろう」

乙彦が保健室に突っ走った後、クラスの状況を全く知らぬまま来てしまった。麻生先生と話せる間に確認しておけばと思うも後の祭り。

「合唱コンクールはいったん二年まで歌って、給食食べて、それからまた三年生って流れだよ。うちのクラスはもう終わっちゃったから、あとは聴くだけでしょ。優勝候補探してるかもよみんな」

「そんなのきななことしてられる状況か」

思わず言葉を荒げたくなるが、古川は動じなかった。

「私たちだって宇津木野さんが今どういう状況なのか全くわからないじゃないの。どっちにせよ私たちがこれからすべきことは、宇津木野さんの病状とできればなんでもないよって報告、あと、そうだ、ここからが大事」

古川は改めて周囲を見渡した。頭に白い網をかぶっている人や、包帯をまいている人が点在している中、

「罪悪感ばりばりの宇津木野さんを、これから帰ってきた時にあったかくフォローするための方法を考えないとね。私がさっき話したこと、今の段階では誰にも言わないでほしいんだ」

「話す気はないが」

「私なりに考えはあるんだ。ただね、余計なこと言い出す奴とか、直接話をした例えば立村とか、状況観ていた美里とか、いろいろな立場の人がいるわけよ。これから学校に戻ったらかなりもめると思うけど関崎には、男子をしっかりとめる役割をしてほしいんだよね」

「俺が何をやるんだ。むしろそれは藤沖が」

言いかけた乙彦を遮り古川は続けた。

「悪いけどさ。この件だけはあんたでないと頼めないの。理由は言えないけど。それと今から宇津木野さんのご両親と話す時、私がとっぴょうしもないこと言うかもしれないけどとりあえずは黙っててちょうだい。考えがちゃんとあるんだから」

言っている意味が全くわからないが、まずははいと答えるしかなかった。

13 葉のかおり（3）

時間が知らず知らずのうちに流れていく。気がつけばもう十一時半を過ぎている。

先生たちも出てこないし、宇津木野の両親らしき人も見当たらない。

「どうするんだろうね」

「俺たち本当にここにいていいのか」

「いるしかないじゃん。ほんとは帰りたいけど」

古川も腕時計を何度も覗き込みつつ、看護師たちの動き回る様を観察していた。

「世の中の人にはああやってがんばって働いているナースのみなさまで妄想するらしいよねえ。あんたそっちの趣味ある？ コスプレとか」

「コスプレとはなんだ？」

初めて聞いた言葉に問い返す。「妄想」とか出てくるときっとその類の系列だとは思っているのだが。

「コスチュームプレイの略語。まあいいよあんた知らなくて。それにしても私たち結局どうすればいいんだろうね」

——結論なんか出るのか？

乙彦が言い返そうとした時、目の前の扉が開いた。麻生先生、保健室の先生、そしてきっちりしたスーツ姿の男性と女性ふたりが何度も礼をしながら現れた。すぐ古川が立ち上がり駆け寄った。乙彦も続いた。

「先生、大丈夫だったんですか」

麻生先生より前に保健室の先生が笑顔を浮かべて、

「宇津木野さんは大丈夫だから安心していいわよ。それと」

古川をねぎらいつつ保健室の先生は麻生先生にも、

「奥に休憩兼食堂室がありますのでそちらでお話しされてはいかがでしょうか」

促した。ふたりの男女も少し微笑みながら、

「ぜひよろしく願いいたします」

一礼した。

青潟市立病院の廊下突き当たりに案内されて、古川とふたりでついていく。一応その場で宇津木野の両親であることは説明されたしきちんと挨拶もした。ただ状況が全く説明されていない以上どう反応していいかわからない。古川に問いかけるのもためられる。

お昼が近いということもありテーブル席はほとんど埋まっている。入院患者と見舞い者が一緒に食事をとることも出来るらしいが五人座るのは難しそうだ。

「先生、ここでなくてもさ、そのへんのソファじゃだめ？」

「だめに決まってるだろう」

古川と麻生先生が場所について相談し合っているのを見かねてか、宇津木野の母が、

「それでは私、あつ子のところについてますからあとはどうぞよろしく」

乙彦たちにも優しい表情で頷いてその場を去った。四人席だとなんとか押さえられそうなテーブルが空いていたからだろう。なんとか席に着くことができた。

麻生先生の前に乙彦が、宇津木野の父親の向かいに古川が座る形となる。

すでに麻生先生が詳しい事情を説明してくれていたらしく、改めて礼を言われる。

「関崎くんと、古川さんですね。先生と娘から事情は伺っています。本当に君たちのおかげであつ子は救われました。親として心より礼を言わせていただきます。ありがとう」

「あの、それで宇津木野さんは大丈夫」

乙彦が口走りそうになるのを古川に膝をぱっちり叩かれて正された。また微笑みを浮かべつつ宇津木野父は説明してくれた。

「容態は落ち着いています。少し様子を見るようにとお医者様には伺いましたが生死に関わるものではありません。その点はどうか安心してください」

「よかったよ、お前たちが一番責任感じてるだろうから、まずは一番最初に伝えないと」

——十分遅すぎると思うが。

とはいえ麻生先生や宇津木野の両親が話す限りは、最悪の事態をまぬがれたことだけは確かのようなのだ。肩がこわばっていたのに気づかなかった。すっと力が抜けた。古川もはっきり聞こえる吐息をついて、

「よかったあー！ もうさっきまで生きた心地しなかったし。でもよかった。宇津木野さん、元気になって早くうちのクラスに戻ってきてもらえるようにしますから、気がついたらそう伝えてもらえますか？」

「そうですね、そうできるといいですねえ」

——本当に大丈夫なのか？

微笑みは消えないが、どうも途中の言葉がどこか引っかかる。麻生先生が宇津木野父にとくとくと説明する。

「先ほどもお話しさせていただきましたが、合唱コンクールでこの関崎、彼が指揮者でしてあつ子さんの体調変化にすぐ気づいたようです。即座に指揮台から飛び降りて助けおこし、その後はまあ結果としてはよかったことになりましたが背負って保健室に運んだというわけです。大人でもすぐそう判断出来る奴はいませんよ。その点、彼はよくやってくれました」

古川も調子に乗って口を挟む。黙っていればいいのにと乙彦の方から膝を叩き返してやりたくなるが一応はこいつも女子だ。誤解を招くことは避けたい。

「そうなんですよ！ 私もあの時何が起こったかわからなくて、一瞬ぼっかんとしてしまったんですけど関崎くんが動いてくれたおかげで宇津木野さんを助け起こすことができたんです」

「そうだ、古川も大活躍だったな。えらいぞえらいぞ」

「古川さんも本当にいつも、あつ子のことを気遣ってくれて、いや今回のことに限らず頭の下がる思いです」

「へへえ」

わざとなのか、笑いを取るような口調で話している。古川も宇津木野を親にも気づかれるくらい面倒見てきたということなのだろう。だいが気心も知れている様子だ。乙彦は黙って頭を下

げた。

「ですが、今回の合唱コンクールにはクラスのみなさんもさぞ力を入れて練習していただろうに
と思うと、親の立場はともかくとして申し訳ない」

宇津木野父がまた頭を下げる。ここは乙彦が否定する番だ。

「いえ、僕は宇津木野さんが元気になることが一番、クラスみんなにとって嬉しいことだと信
じています。合唱コンクールで歌うのはせいぜい十分もかかりませんが、学校で過ごすのは三年
間です」

「君は面白い発想をするね」

からから笑い出した宇津木野父。古川も肘でつついてにやりと笑う。麻生先生がつなげた。

「今、あえてこのふたりを連れてまいりましたのはまず、あつ子さんが倒れた時一番側で観てい
たというのがひとつ、そしてもうひとつの理由はできましたらお父様より、あつ子さんの今まで
置かれてきた立場をご説明いただければというお願いです」

「確かに」

大人ふたりの会話を読み取れないまま、耳を澄ます。だんだん食事の匂いが漂ってきた。野菜
炒めだろうか。思わず腹が鳴るのを聞かれてしまった。宇津木野父は乙彦を見てまた楽しげに見
つめた。

「今日はこれから、学校で給食ですか。もし急ぎでなければここで少しお話をさせていただき
たいのですが、先生、お時間いただくことは可能でしょうか？」

——先生そりゃ無理だろ。

てっきり麻生先生が断るもんだと思っていた。そろそろ給食の時間も近いし宇津木野の状態も
大したことがなければ、さっさと教室に戻ってそのことを伝えたい。他の連中だって心配してい
るに決まっている。幸か不幸か一年A組の連中は絶対に優勝したいと頭から火を吹いている奴は
そうそういない。たぶん、宇津木野の体調が安定したことを伝えれば多少の未練はあるにしても
喜んでくれるに違いない。

「わかりました。学校に連絡を入れておきます。すでにこの子たちの合唱コンクールは終了して
いますから。これから先のことを、ぜひお願いします」

古川はそれが当然といった顔で、

「私も、あつ子さんのことでお父様にお伝えしたいこと、いっぱいあるのでぜひお願いします」
きわめてよそいきの言葉で返事をしていた。」

宇津木野の父が話し出したことは、古川がついさっき乙彦に語ってくれた事情とかぶっていた。宇津木野あつ子が音楽の才に長けていて著名な指導者たちからも注目の的となっていることや、その分鋭すぎる感性を持て余してひとり苦しんでいることとかも。

——親父さんもその点は把握してたんだな。

あくまでも乙彦は黙って聴くだけだし、それ以前に宇津木野との接点がほとんどないので一エピソードとして受け止めるだけにとどまる。それでもやはり、ひとつのことに打ち込む姿には男女関係なしの尊敬の念が浮かび上がる。

「青大附属のお友達のみなさんには、中学の頃から良くしてもらい、あの子の、こういったらなんですけど家族でもたまに持て余すことのある感性を受け止めてもらい、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。また今回の、合唱コンクールですか。その、本当であれば伴奏を引き受けてみなさんのお役に立たせていただくべきところを、娘のわがままですわね」

「そんなことはないですよ、おじさん」

話言葉にも気品のある、乙彦の知る「お父さん」像とは異なる宇津木野父の佇まい。それを一瞬のうちに打ちのめす「おじさん」という古川の発言、いいのかこれで。

「私もあつ子さんから直接話を聞いて、そりゃわかるなあって思いました。音楽の世界っておっかないんだなあっていうのもありますけれど、せっかく仲良しになった友だちと不必要に仲違いしたくないのはありますよ。女子としてそれ当然です」

苦笑いして見守っている麻生先生に従い乙彦も口を挟まなかった。宇津木野父は穏やかに古川を見守っている。

「疋田さんとも仲良くなったのにまた面倒なことに巻き込まれたくないのも当然ですよ。もちろん私もあつさんが中学時代からピアノの名手だってこといろいろなところから聞いてましたしすごいなあって思ってたけど」

「たかがピアノ、されどピアノ、ですね」

宇津木野父は静かに笑い、少しずつランチを進めた。Aランチとかでボリュームが少なめで味付けがやたらと薄い中華丼だった。正直言ってあまり、美味しくない。

「もともとあつ子はひとつのことに集中しすぎる傾向があります。十月の学内演奏会ももちろんですがその後にちょっとしたコンクールも予定があり、あの子としてはおそらく、伴奏まで手が回らないと判断したのかもしれませんが。それに加えて、疋田凌子さんの存在もきっとあったのでしょうね」

——やはりそこか。

古川が一年A組ピアニストふたりの諸事情を耳にしつついろいろと考えていたのはその辺りにも理由があったのだろう。それにしても、父親にしては随分娘のことを観察してるものだ。子どもの立場からすると少し重たそうだ。

「小学校の頃から疋田さんとはしょっちゅう同じコンクールで顔を合わせていましたし、意識もそれなりにあったのでしょう。周りが煽り立てていたのも確かにあります。もし疋田さんとあつ

子が同じクラスにならなければまた不要なライバル心を燃やすだけだったでしょう。もちろん音楽という道ではとことん切磋琢磨しなくてはなりません。それは理解しているつもりです。でも、やはり、あつ子にとっては同じ道を目指す友だちに出会えてきっと嬉しかったんでしょうね」「うん、絶対嬉しかったと思います！」

古川が両手にスプーンと割り箸を握りしめてうんうん頷いた。

「私もクラスで観察してましたけど、疋田さんと音楽の話をしている時のあつ子さんの顔はめちゃくちゃ輝いてましたもん」

やはり古川はよくクラス女子たちのことを面倒見ている。藤沖にはやはり反省させるべきではないだろうか。

あまり美味しくない病院食堂ランチを平らげた後古川はすぐに口を紙でぬぐい、

「それでなんですけどおじさん」

また失礼な呼びかけを宇津木野父にした。

「今の段階ではまだ、会えないんですか？」

肝心要のことを忘れていた。本当であれば「付き添い」なのだから、当の本人である宇津木野を見舞うべきなのだが麻生先生も宇津木野父も切り出そうとしない。実は相当まずいことがあるのではと乙彦も気にはなっていたのだが。

麻生先生は古川をなだめるよう手を振りつつ答えた。

「まあまあ、古川、お前が心配しているのはわかるんだがやはりな。今は無理だよ」

「今は少し薬で休んでますから、また落ち着いた頃に見舞ってやってください」

口を揃える大人たちの様子に古川も何かを感じたのかすぐ話を別の方向に持っていった。

「わかりました。じゃあまだ時間があるみたいなんで、これ、伝えてもらえますか？」

いきなり古川は両手を組んでテーブルの上においた。じっと大人ふたりを見据えた。

「私たちは決して宇津木野さんを責めませんから、元気になったら学校に来てくださいって」

「それはもちろん」

宇津木野父が穏やかにかわそうとするのを、古川は首を振り真剣な眼差しで訴えた。

「私、知ってます。さっきおじさん話してたこともそうですし、心配してることもわかってます。彼女は音楽の才能ばりばりだし、それに比べて今日演奏した伴奏野郎のへたっぴさもよくわかってます。その子も一生懸命がんばっているけれどそれでも越えられないものってあります。宇津木野さんがその子の代わりに伴奏をやるって話を持ちかけたのは、気持ちとしてわかるんです。だってお話にならないくらいの差がありますから」

「おい、古川」

思わず乙彦も制そうとするが無視された。

「で、もっと言うとそのことをあつ子さんはすごく気にやんでたと思うんです。私も彼女と直接話をしていて、すごく悩んでたんだなってことわかりますし。今日具合悪くなったのは決してそれが原因だとは思ってませんし単に気分が悪くなっただけだと思うんですけど、きっと彼女自身は罪悪感でいっぱいだと思うんです。いろいろなことが重なってるから」

「いや、大丈夫だろう、大丈夫だよ」

麻生先生も口を挟むがやはりカットされる。ひとり、宇津木野父だけが熱心に耳を傾けていた。

「私、一応クラスの評議ですからクラスの雰囲気わかってるつもりなんですけど、合唱コンクールで最後まで歌えなかったことを悲しんでいる奴ってクラスにそれほどいないと思います。むしろあつ子さんが倒れたことをみな心配している人ばかり。だから安心して戻ってきて欲しいんです。知ってます？　うちのクラスでこの前、プチ・コンサートやったんですけどここにいる関崎が歌って、あつ子さんがピアノ弾いたんです。すごかったですよ、反響。これぞ本物だってみんな感動してましたよ。ある意味あそこでうちのクラスの合唱コンクールは終わってたんじゃないかなってくらい」

「あつ子が話してましたよ。久しぶりに楽しく合わせられたとね」

乙彦の方を宇津木野父は微笑みながら見つめた。こんなところで暴露しなくてもいいのになと思いつつ乙彦は頭を下げた。

「だからそれはそれでいいんです。私、どうしてもあつ子さんに伝えたいのは、人と感じ方が違ってたっていいんだってことなんです。きっと彼女が辛いのは、自分が音楽について繊細すぎるから人を傷つけてしまったことなんじゃないかなって。伴奏も本当だったらきっと思いきり弾きたかっただろうし、自分の求めているハーモニーを繰り出したかっただんじゃないかなって。表向きは伴奏やった子がどうしても弾きたいと言い張って断った経緯があるんですけど、きっと彼女、相手を傷つけてしまって、自分の音楽感性が悪いんだって思い込んでるんじゃないかなって」

じっと黙りこくるお父上。

「私、中学時代に似たような友だちたくさん見てきました。普通じゃないとかこんなの違うとか言われてきて、問題いっぱいかかえていた人を。最初はみんなどう受け止めていいかわからなくて悩んだり、それこそばっこばこに打ち抜いたりもしたんですけどね。けど、みな最後はわかりたいんです。音楽の才能なんてないけど、あつ子さんが苦しんできていることとか、分かち合いたいんです。うちのクラスならそれきっとできます。誰とは言いませんけど同じような思いをしてきた子が男子女子それぞれいます。だから、あつ子さんが目を覚ましたら、うちのクラスの子たちはみな待ってるよってそれだけ伝えてください。もし誰か勘違いした奴がいたら私がそいつの持ち物責任もってちょんぎります。だから安心してって、お願いします」

古川はゆっくりと頭を下げた。ここでさりげなく「何をちょんぎるのか」とつつこむ奴もいなかった。食事の匂いと一緒にどことなく漢方薬っぽい香りが漂ってきたのに乙彦は気がついた。ここは病院だった。

何度か乙彦は、早めに切り上げるよう麻生先生に提案したつもりだった。

「先生、早く学校に戻ったほうがいいのではないかと思います」

「そう急くな」

古川も少し迷っていた様子だったが特に言い返すこともしなかった。途中、宇津木野の兄に当たる男性や、入れ替わりで母親も現れて和やかに会話が弾む。なかなか切り上げ時が難しい。さすがに大人の言い分をぶちぎるわけにもいかないし、宇津木野の父も乙彦に興味があるらしくいろいろと質問を投げかけてくる。

——俺がこういう無駄話しているところクラスの連中に聞かれたらどうするんだ。

古川にも質問したいところだが、そちらはそちらで宇津木野の母と熱心に学校の様子など含めて話し込んでいる。つまり、古川の仕事が終わるまではこうやっていなくてはならないとうことか。

だが、院内食堂らしきところで中華丼までご馳走になってしまい、気がつけばもう一時十五分前。そろそろ給食および休み時間も終わる頃だろう。三年の合唱も始まるだろう。

——これをいわゆる「油を売る」ってことじゃないのか。全くあとで藤沖や立村にどう言い訳すればいいんだ。古川、あとは任せた。

なによりも不思議なのは、宇津木野の容態についてあえて曖昧にみなぼかすところだった。本来ならそれを聞き出しクラスメートに伝えることが義務なのだから教えてくれてもいいはずなのに、「今は休んでいるけれども大丈夫」の一言のみだ。部屋の前に貼ってある札などから外科病棟なのではと予想はつくのだが、それ以上の判断材料がない。

「さて、それでは私たちも学校に戻らねば。宇津木野さん、お嬢さんのことはきちんと子どもたちに伝えますのでご安心ください。また夕方にでもご連絡します。まずはこのふたりを学校に届けてきますので」

やっと麻生先生が腰を上げた。途中麻生先生だけ何度か席を外したりもしていたが、結局一時間半近く延々と語っていた。宇津木野家族の見送りを受けて病院の玄関に戻り関係者がいなくなったところで古川が問いかけた。

「先生、結局私らおじゃま虫だったんじゃないですか」

「そんなことはないぞ。宇津木野のご両親もお兄さんもお前らの顔見てほっとしていたの、わかったら」

「確かにそうですが」

乙彦もこの機会、しっかり自分の意見を表明しておきたい。

「宇津木野さんの病状がわからないままずっと意味のない話をし続けているのは間違いだという気がします」

「意味はあるぞ。実はな、以前から宇津木野のご家族は学校の様子などぜひ生の声を聞かせてほしいというご希望があったようなんだ」

「そういう問題じゃないと思います」

麻生先生は乙彦の意見を聞き流し片手を挙げ、タクシー乗り場に向かった。別に呼ばなくてもちゃんとタクシーが待ってくれている。

「さあ、乗った乗った。お前らこれからだぞ、これからだ」

助手席に麻生先生が、後部座席に乙彦と古川が並んで座った。

「青大附高職員玄関までお願いします」

青潟市立病院は青潟大学から少し離れた高台に位置している。青潟大学からは少し遠い。少なくとも徒歩で行ける距離ではない。他にももっと近い病院があったはずなのに、なぜ場所が離れた病院に宇津木野を運んだのか、その辺りが謎だった。少し道が混み合っているようで、平日なのに渋滞しかけている。

「今日、すぐ側の大型スーパーが開店しましてねえ、行列しているようなんですよ」

「へえ、平日なのになんで？」

「やはり、車つけられるスーパーってそうないですからねえ」

古川がすぐタクシーの運転手さんと馴染んでおしゃべりを仕掛けている。なかなか進まない道にしぶれを切らしたのかもしれない。いくら遠いとはいえ、行きに事務員さんに連れてきてもらった時は十五分か二十分くらいで到着したはずなのに、もう三十分近くこの状態だ。

「でもちょっと遅すぎやしませんか」

麻生先生がいらただしげにタクシー運転手さんに問いかけた。しばらく無線でやり取りをしていた運転手さんは窓を開け、

「ああ、どうも、前の方で誰かがしぶれ切らして車から降りて、事故ったみたいですねえ」

他人事のようにつぶやいた。

「事故？」

乙彦も身を乗り出した。

「それだと、まだこのまま動かないということですか」

「そうですねえ。まあこの道さえ出せば青潟大学までは五分もかかりませんよ。少しの辛抱よろしくお願いします」

——なんてことだ。

乙彦の気持ちを代弁したのはやはり古川だった。

「先生、それじゃさあ、下手したら私たちが学校着くまでに合唱コンクール終わっちゃうよ。学校に電話してきたら？」

「お前さんが心配する前に、俺も担任だちゃんと連絡はしたぞ。理由も伝えてあるからお前らのはらはらする必要はないぞ」

「いえ、先生、俺も古川さんの意見に同感です」

乙彦も加勢した。タクシーの運転手さんは適当に聞き流し時折無線に返事をしている。

「本当であれば、宇津木野さんの事情を聞いた段階で中華丼を食べずに教室もどって給食を食べるべきだったのではないのでしょうか」

「まあ、確かに味はな」

勘違いしたつぶやきを返す麻生先生。やはり乙彦と味は同じ感想のようだ。

「まあ過ぎたことだしこれから急いで帰って説明すればいいですよ。それより先生」

古川は乙彦を押さえるようにして割り込み話し出した。

「これからのことなんですけど、やっぱり宇津木野さんしばらく学校、休みになりそうですか」

「おい、さっきは別に、異常なしとか言ってただろ」

「違うんだってば」

手で膝をぎゅっつつねられた。痛い。頼むからそのまま乙彦の膝に手を置いたままにするのはやめろと言いたい。

「きっと、あの調子だと宇津木野さん、来れませんよね」

わけわからないことを古川は先生に投げかける。答えが返ってこない。一方的な古川の問いかけをじっと受け止めるのみ。

「だから私たちが何かしなくちゃいけないってことですよね。それを先生、私に伝えたかったんじゃないのかなあ。先生、私との仲じゃん、返事してよ」

「古川、年頃の女子なんだからもう少し言い方考えろ」

たしなめた後、車が動くまで麻生先生はうつむいていた。運転手さんは気づかないように窓辺から顔を出して様子見していた。やがて動き出すと同時に、

「とりあえずだ。今日の話はあとで古川とも学校で相談することにして、クラスの連中にはまだ宇津木野の体調そのものは問題ないということと、しばらくそっとすることだけ伝えておくことにしようか。関崎も、今聞いたことは時期が来るまで他の連中には内密にしてもらえるか」

「もちろんです。そのつもりです」

当たり前すぎることを問われていきりたちそうになる。古川が宇津木野父に熱く語っていた言葉のほとばしりが、自分の中で化学反応を起こしているようだった。少なくとも古川は宇津木野の事情を乙彦以上に把握し、さらにこれからのことを見据えた上で行動している。その場でただ宇津木野を背負って走り出して見切り発車している自分とは違う。

「いやあよかったですねえ、前の車が動き出しましたよ」

のほほんと運転手さんが三人に呼びかけた。

「この調子だと、すぐ到着ですなあ。おつかれさんでした！」

タクシーの運転手さんはのんきなことを言っていたけれども結局また途中で止まったりなんなりでそこからさらに三十分近くかかった。早い段階で学校に連絡を入れていた麻生先生だったが、

「すみません、ちょっと電話かけてきますんで」

乙彦と古川にせつつかれもう一度公衆電話に駆け込んでいった。

「もうそろそろ三年の部終わるかなあ」

「そういう時間だな確かに」

もう二時十分前だ。たぶんクラスメートも下手したら帰っているんじゃないかと思う。

本当は古川にも質問したいことがあった。

——なぜ、宇津木野が学校にもう来ないと言い切ってしまうのか。

車の中で何度も言い募った理由はどこにあるのか。

ひとりだけ関係のない人が混じっている以上、口には出せなかった。

ようやく学校に到着したのは二時一分前だった。車のメーターをちらちら見続けていたのでその点は確実だ。

「どうもどうも、時間がかかってすみませんでした」

「いやこちらこそどうもどうも」

和やかに運転手さんと挨拶をし車から下りた。まだ誰も生徒が外にうろついていないということは、合唱コンクールもまだ終わっていないのだろう。間に合うかもしれない。

「先生、合唱コンクール終わってたらどうするんですか」

古川が問いかけると、麻生先生は職員玄関に向かいながら、

「まずは宇津木野の病状だがさっき車の中で話した通り、オブラートにくるめよ」

念を押してきた。あの後も何度か同じ話をしたので乙彦も頭にしっかり叩き込んでいる。あくまでも生命の危険はないがしばらくはそっとしとこう、それでいく。

「じゃあ、私たちもさっさとA組で待機してまじょうか」

「そうだな、もうクラスの連中も戻っているかもしれないしなあ」

麻生先生はのんびりした口調で答え、職員玄関へと向かった。一方乙彦と古川は生徒玄関から入らねばならない。少し歩かざるを得ない。古川とやっとふたりで話せる。

思い切って切り出した。

「さっきの話なんだが」

「宇津木野さんのこと？」

「お前さん、宇津木野が学校に来ないかもとか言ってたな」

「やっぱし気になるんだねえ」

わかりきっていたかのように古川は答え、両手をぐるんと振った。

「まあこれもあとで話すけど、今日私たちをなぜあんなに長く引き止めてたかわかる？」

「わからないが」

「私たちからなんとかして、学校側の事情を詳しく聞き出したかったんだろなあ」

「なんでだ」

「宇津木野さんのお父さんきっと、学校の雰囲気とか私たちから聞き出して、学校休ませてもいいという証拠みたいなのをつかみ取ったんだと思うんだ。宇津木野さんを守るためにね」

全くわけのわからない発想である。乙彦には理解不能だ。

「なにそのぼっかん顔。あのねえ、別に宇津木野さんのお父さんは学校を敵だと思ってるわけじゃないの。単に過保護なの。学校で嫌なことがあったら休んでもいいし、辛いことがあれば家にこもらせたい、そういう考えだけなの。だから学校で宇津木野さんが叩かれそうだという情報があれば、そうしやすいじゃないの」

「意味が全くわからないが」

「わからないならわからないでいいの。だいたい宇津木野さんと話をしている、家族のみなさんがそういうタイプなんだなってわかったから私としてはねえ」

もったいぶって古川は続けた。生徒玄関の前で立ち止まり説明した。

「うちのクラスが思いやりのあるすっごくいい人ばかりなんだってこと強調しときたかったんだよね。前にも似たようなことあったらしいって、中学時代誰かから聞いたことがあってさ。私の頭の中になんとか残ってたんだよね」

「前にとはどういうことだ」

「うん、中学時代に学校に一時来なくなっちゃって、結構みんな苦労して呼び戻したって経緯があるらしいんだ。理由は学校側の問題じゃなくてピアノのことだったらしいけど」

ずいぶんと情報通だ。もうひとつ疑問をぶつけた。

「古川はずいぶんと女子たちの家庭事情に詳しいようなんだがどうしてそこまで知っているんだ」

「男子とは違って女子はねえ、おしゃべりで大抵の事情がわかっちゃうもんなの。それプラス直接おうちでお茶会とかすれば一発。結局は足で情報稼がなくちゃ。気分は刑事よ」

「それ、クラスのためにしているのか」

深い意味はなかったが古川はぴくりと肩をいからせた。

「なによ、個人的好奇心を満たすためとか思ってる？」

「そうは思わないが、普通の評議委員が踏み込んでいい範疇を超えているように思う時もあるが、青大附高だとそうしないとまずいのか」

古川はしばらくだまり、足元の土をけた。乙彦から目をそらした後改めて顔を見つめた。

「うちの学校の先生たち見てて、どう思う、関崎は」

「どうと言われても困るが」

いきなり話をそらされて戸惑う。古川は鼻でふふっと笑った。

「前さ、立村と話した時にああそうだなって思ったことあってさ。うちの学校の先生たちって、仕事とプライベートの区分けがされてない人多すぎるって」

「なんだそれは」

「青大附属全般に言えることだけどね、面倒見良すぎるんだようちの学校って。立村も冗談めかしていったけど、家庭壊すよねあれじゃあ。なんでもさ、夏休み最終日に立村がお父さんと一緒にデートしてたら中学時代の担任にナンパされちゃって、いろいろと説教されたらしいのよね」

ナンパ、デート。古川の言葉は謎が多すぎる。

「それでお父さんが先生に、もっと家庭を大切にしなさい、休みの日くらい仕事のことを忘れなさいって逆説教したらしいのよ。が一んと来みたい」

「だが、二十四時間仕事に全力投球するのも悪くないだろう」

「いやだからさ、それだと身体壊すって。やりすぎよね。話逸れたけど私も実は中学時代の担任の方針に賛成派。確かにリラックスできないよなあって思うけど、評議という立場に立った以上はみんなが満足するように動きたいじゃん？ そのためにはいろいろと知っとかなくちゃいけないじゃん？」

確かにそれは言えている。靴箱前のすのこに乗りながら古川はふんぞりかえって続けた。

「なんだかんだ言ってうちの学校私立だからそういうところが自由なのかもね。いろんなこと言う人いるけどこれが私のやり方だから。ちゃんと踏み込むところまで踏み込めば、わかりあえて私は信じてるからさ」

ここまで古川が語った時だった。

「古川、それと関崎！」

いきなりロビーに怒鳴り声が響いた。

「そこで油売ってるんじゃない。すぐに上靴に履き替えろ！」

麻生先生が頭に湯気たてそうな勢いで叫んでいる。あわてて乙彦も靴を下ろした。

「すみません、すぐ行きます」

「どうしたのさ先生、何、フィニッシュしてるのさ」

古川の軽口にも動ぜず、麻生先生は足踏みばたばたしながらふたりに呼びかけた。

「これから一A連中全員で、最後の合唱をさせてもらうことになっている。お前らも急げ！」

言うやいなや、麻生先生はふたりの肩をどんと押し体育館まで追い立てた。額にはまさに脂汗らしきものがたっぷり広がっていた。廊下を全力で走り出した時扉の向こうから、滑らかな「モルダウの流れ」の旋律とそこに重なる歌声を確かに聴いた。

14 指揮台上の背中（1）

「静かに開けるんだぞ」

乙彦と古川が揃ったところで麻生先生は小声でささやき扉を細く開いた。

「もしかして今歌ってるのって、うちのクラス？」

「そうだ、もう少し早く気づいてればな」

照明がほんの少し落とされている館内、乙彦はそっと中を覗き込んだ。古川もしゃがみこむようにして顔を突っ込んだ。

いっばいに響き渡っているメロディは疑いもなく「モルダウの流れ」だった。何度も乙彦たちが練習し指揮棒を振った。今日も出だしだけちゃんと立村と打ち合わせて前奏までは進んだ曲だ。

「ちょっとちょっと」

古川が足元から乙彦を見上げ、体育館の奥を指差した。

「指揮者やってるのまさか」

「おい、まさか」

乙彦も伸び上がった。覗くだけではだめだ。思わず足を踏み入れた。古川がよろけて両手を付き、ゆっくりと立ち上がった。

乙彦が立っていたあの、指揮台の上。

後ろ姿はほっそりしたブレザー制服に整った髪。

——あいつが、か。

「そうだよ、関崎」

今、自分が口にしようとした言葉を古川はきっちり肯定した。

「立村が、指揮してる。なんなのあいつ、乗りに乗りまくってるじゃん！」

麻生先生も含めて三人とも扉を背にして舞台を眺めやる。まだ乙彦たちが入ってきたことに誰も気がついていない様子だった。何も持たず両手でゆったりとリズムを刻み、ずっと手の中に歌声を集めては広げ、広げては飛ばしを繰り返すようなかなりオーバーな動作。微かに笑い声も聞こえる。指揮者の背中は見ているだけで結構面白いものだと改めて気がつく。

「立村が、なんでだ？」

麻生先生がつぶやいた。古川も隣りで囁く。

「あいつが指揮者ってことは伴奏誰だろ」

「まさか」

言いかけて乙彦も息を飲んだ。間奏の部分勢いの溢れ方に聞き覚えがある。

「疋田が弾いているのか」

「あっ！」

古川も初めて気がついたのか、口を両手で押さえる。

「だからか」

「あとで立村とっ捕まえて聞き出さなくちゃ」

それ以上何も言えなかった。三人、一度顔を見合わせた後ただじっと指揮台で手を動かす立村の背中を見つめるだけだった。

最後の溜め、その後ゆっくりと立村が両手を広げるように合図を送る。

「モールダーウーウ……」

しっかりと高音も響いていたし低音もぶれがなかった。ピアノの伴奏が続いている間ずっと声を伸ばし続け、ぴたりと最後の音で止まった。立村の手が握り締められたのを観た。きっちりと収まった。

一瞬静まった後、拍手がじわじわと広がっていく。照明が明るくなった。乙彦たちの目もだいぶ慣れていた。

立村が両腕を下ろし指揮台から下り、舞台の前で一礼しようとするのと同時だった。

いきなり誰かが舞台から駆け下りる足音が響いた。

——おい、今度はなんだよ。

考える間もなかった。その足音の主はすぐに乙彦たちの前まで馳せ参じ、そこにいる人々全員が呆然と見守る中満面の笑顔で語りかけてきた。

「関崎、よくぞ、戻ってきた！」

藤沖だった。だいぶ毛が生えてきたとはいえまだ坊主としか言えない頭を何度も振りながら、

「お前なら絶対に戻ってくると信じていたぞ！ よくぎりぎり間に合ったな」

「いや、悪い、間に合ったとは言えないが、一体何があったんだ」

「あとで話す。とにかく、これでA組は全員揃ったというわけだ」

「それは違うだろう」

ふたりでやりあっている中に古川が割り込んだ。同時に周囲の視線が釘付けになっているのも確認した。ついでに舞台上から立村とその背後の連中が見下ろしているのにも気づいた。興奮気味にまくし立てる藤沖を落ち着かせるのはやはり古川しかいなさそうだった。

「なーにあんたいっちゃってるの。あのさ、宇津木野さんがとりあえず大丈夫だってことだけでも伝えなくちゃってダッシュでもどってきたんだよ。ねえ関崎」

「いや、それは」

口を開きかけた。それは違う。少し時間を無駄遣いしすぎた。あやまりたかった。もちろん古川は言わせなかった。

「とにかく、今言いたいことってのはあんたたち最高、かっこいい！ きゃーってキスしてあげたいくらい。藤沖ほっぺた見せな」

無言で藤沖は古川を軽く手で払い除けた。乙彦にさらに語りかけた。

「事情はあとで説明する。とにかく棚ぼたで歌わせてもらえた。俺としては言いたいこともいろいろあるがとりあえず歌い納められた」

「ああ、聞かせてくれ、いったい何があったんだ」

ちらと舞台を見やると、立村が音楽委員の生徒からマイクを受け取っているのが見えた。挨拶

したいのも当然だと思うが、周囲はどよめいた。立村はマイクをすぐに口に寄せ、

「今日、この場で僕たち一年A組に歌いきれなかった自由曲を思い切り合唱するお許しをいただきありがとうございました。今この場にいる全校生徒のみなさん、そして先生方に僕たちはクラス全員、心から感謝しております。そして」

いきなり言葉を切って乙彦たちに身体を向けた。ほんの少し斜に向けたただけだが、体育館の聴衆たちはみな乙彦たちに気がついたらしくひそひそ話を始めている。なんだかむずかゆい。早く終わらせてほしい。

「今そこにいる二人は、合唱中体調を崩した人に付き添ったためにこの場で歌うことができませんでした。全員舞台上上がるまで少しだめ待ってもらえますか」

——あいつ、いったい、何したいんだ？

拍手が再び沸き起こった。壁に張り付く格好で椅子に座っていた先生たちがひとり、ひとりと立ち上がり乙彦たちに向かいはっきりと拍手を繰り返した。

「お前たち、呼ばれてるぞ。早く行け」

いつのまにか陰に潜んでいた麻生先生が乙彦に囁いた。藤沖も笑顔で頷いた。古川はひとつため息を吐いたのち、

「まったくあいつも何、ヒーローインタビューの真似事したいんだか。さ、関崎行くよ。あんたがいない間に仕事してくれた立村の顔に泥塗るわけいかないじゃん？ ほらほら、さっさと歩いた歩いた！」

肩をいからせすつと舞台へと向かっていった。なぜ、いきなり拍手喝采で迎えられなくてはならないのか。何よりも今日は最後の合唱に参加できなかった。本当はもう少し早く靴を履き替えていれば間に合ったのかもしれないのに。

——立村、お前何を考えて俺たちを。

「お前いったい、どうしたんだ」

舞台上上がった。人前など気にしてられない。乙彦は立村をじっと睨んだ。しかしひるむ気配なし。立村はすぐに乙彦の居場所を差し、

「関崎、そこでいい。立っててもらえないか。それと古川さんは真正面で」

すばやく立ち位置を指示した。

「立村あんたさあ」

文句を言いつつも古川はすぐ舞台のど真ん中に立った。目で確認した後、立村は舞台から見えるピアノ席に片手をあえて、またさっと手を閃かせた。マイクで一声、

「ありがとうございました」

はっきり、しっかり、聴き取れる声で言い切った。即座に和音が三回響き、それに合わせて立村が頭を下げた。これはもしかして、礼をしろという意味か。乙彦も慌ててそれに習った。立村は最後の和音ですっくと頭をあげ、そのまま袖に向かっていった。乙彦も古川もそれに習い、そこからすぐに女子たちも男子たちも続いた。整然とした振る舞いに何かを感じたのか、また拍手が暖かく湧いていた。

先に下りた立村は、他の生徒たちがピアノを弾いていた疋田……やはり読み通りだった……を労ったりしている間に体育館から出ていこうとしていた。これはまずい。乙彦はすぐに取り押さえた。肩にしっかり手をおいた。

「立村、聴いてたんだ」

ぴくりと身体が震えている。絶対に逃さない。乙彦はさらにささやきかけた。

「ちょうど歌が始まる直前に体育館に入ったんだ。まさか最後に歌わせてもらえるとは思わなかったが、お前がしっかり指揮している姿を見た時、とうとう来た、そう確信したんだ」

何も言わず、立村が振り向き乙彦をじっと真正面から見つめてくる。

戸惑ったような、舞台の上とは全く違う表情だった。

この気弱そうな奴がなぜそうしたのか、どうしても知りたい。

なぜ、指揮台に立つ決意をしたのかも知りたい。

ぐるりと男子連中が九人全員乙彦と立村を取り囲んでいる。

「立村、お前復活したな」

乙彦は片手を差し出した。今することは、何はともあれ握手しかなかった。ためらうように立村は乙彦の手を握り、軽く振るようにした。

14 指揮台上の背中（2）

みな和気あいあいと教室にもどり、麻生先生のお言葉、
「普通だったら俺もお前らの、涙が止まらない程の見事な締めには何かしてやりたい気持ちは多いにあるんだよ。だがな、宇津木野の詳しい病状を今の段階でお前らに話すことは難しいんだが、かなりしんどい状態ではあるんだよ」

乙彦と古川からするとすでに予定通りの展開を聴いた。

「生死に関わるというわけではないのでその点だけは安心してもらいたいんだが、俺としては手放しで盛り上がることができそうにない。本当にこればかりは担任としてのわがままなんだがな。お前らの努力の結晶を無にするような言い草で申し訳ないんだが、今回の打ち上げだけは、来年以降に延期ということはどうだろう」

要するに、合唱コンクール万々歳の打ち上げは行わないのお達しだ。

——そりゃそうだ。あんなことがあったんだからな。

全員揃ったわけではない。宇津木野の病状も正直乙彦たちすらよく把握できていない。そんな曖昧な空気の中でわあわあ盛り上がることはやはり気が退ける。

静まり返ったクラスメートの中で、藤沖が言葉を発した。

「僕は賛成です」

「藤沖、わかってくれるか」

「ここで座っているクラスの人間はみな同じ考えだと思います」

代弁してくれた。もし誰も発言しないのならば乙彦もそう言うつもりでいた。感謝した。少しほっとした表情を浮かべ麻生先生は全員に再確認をした。

「お前ら、本当にいいか？ せっかくクラス一丸になれたってのに、申し訳ない」

頭を下げたところに疋田が、これまた当然の質問を投げかけた。

「先生、いいんです。それより、宇津木野さんのお見舞いにはいつごろ行けますか？」

麻生先生は一瞬凍りついたが、その後重々しく、

「残念だが、十月の学内演奏会には参加できそうにないだろうな」

あまり明るい見通しではないことをさりげなく言い添えた。

乙彦としてはなんとしても立村を捕まえて、いったいなぜこういう展開になったのかを確認したかった。藤沖に尋ねたが奴にしては珍しく言葉を左右にごまかすし、他の連中は歌い終えた達成感に浸りきっていてまともに話せる状態ではなかった。肝心要の立村に至っては逃げ出そうとしたくらいだから相当なもの。いつもなら古川があちらこちらで情報を集めてくれているのだがいかんせん本日は乙彦との運命共同体ゆえに期待できない状況だった。

男子連中はみな立村をねぎらい、

「いやー、立村お前まじMVPだぜこりゃ」

「よくぞ決断したな！ さっすが評議委員長！」

「本条先輩まじ感動して泣いてるぞ、よかったな」

乙彦の後からみな手を取りがしがしと肩を叩いていた。少し困ったように肩をすくめていた様子だが、露骨に拒絶はしなかった。立村なりに思うところもあったのかもしれない。女子たちも普段は立村を昼行灯扱いしているけれども、さすがに今回ばかりは見直したらしく優しい言葉をかけている人もいた。これは進歩だ。

——立村、あれ、どこ行った？

帰りのホームルームが終わり乙彦が立村を目で探そうとした時、不意に誰かが腕をひっぱってきた。隣りを観る。片岡がにっこり微笑んで立っていた。

「関崎、お疲れさま。すごかったよ」

だいぶタイムラグがあるが、ねぎらいには感謝したい。

「いや、俺は何もしていない」

「違うよ。関崎のように全力で人を助けようってたぶん僕できないよ。すごい。すごいよ」

まん丸の瞳を輝かせて片岡が語りかけてくる。いつのまにか片岡の後ろには藤沖が立っていて乙彦に物言いたそうな顔をしているのだが、本人は気づいていない。

「けど関崎は今日、全然合唱聞いてないんだよね」

「ああ、物理的に無理だった」

間の抜けた答えを返すと片岡は少し首をひねり、いいこと思いついた風に両手を打った。

「そうだ、これから時間あるかなあ」

「まあ、一応は」

あすだちょっとまずい。一応雅弘の学校祭がある。最優先で行くつもりでいる。

「そっか。じゃあ関崎、これからうちに遊びに来てくれると嬉しいな」

「あ？」

言われた意味がつかめない。片岡の素直そうな瞳をじっと見る。今日は別に英語のテスト順位発表なんてないはずだし、片岡が立村を押さえてトップを取ったなんて情報もない。

「だって、関崎一生懸命走り回ってたし、きっとお腹も空いてるかなって思ったんだ」

「いや一応食べた」

あまりにもまずい中華丼だが。片岡はろくすっぽ聞いていない。

「よかったらうちで何か食べようよ。これから桂さんが迎えに来てくれるから、どこかラーメンとか食べてもいいし、あ、そうだ、桂さんがよく注文するマヨネーズとバターを混ぜ合わせたラーメン作ってもらってもいいし。何か店屋物とってもいいよ」

「そういう問題じゃないだろう。まあ、お前のうちに遊びに行く分には喜んで行くが」

乙彦がそこまで話した時、片岡の後ろでじっと様子を伺っていた藤沖が両手をがっちり肩においた。片岡の表情が露骨にこわばった。

「関崎、せっかくの機会だ。一緒に片岡のうちに語ろうじゃないか」

「藤沖？」

明らかに片岡の顔を見れば、藤沖が「招かねざる客」だということはわかりきっているはずなのだが、全く気づいていない。いや、気づこうとしていないだけなのかもしれないが。藤沖はそ

のまま何度も片岡の肩をドラムのようにたたいた。だんだん力が強くなっていくのが分かり、片岡はぐらぐら揺れている。

「それに片岡ともしばらくじっくり話をしてなかったしな。好都合だ。じゃあ片岡、お前の家に関崎を引っ張っていくってことでいいか？」

「いいけど」

完全に予定外、と言いたげな片岡の困りきった顔を見無視し、藤沖は改めて乙彦の肩に腕を回した。

「お前も、今回の件については少し細かい話を知りたいだろう」

「もちろんそうだが」

「事実関係を話したいところだが、人気のあるところではなかなか難しい。じゃあ行くか！」

片岡が深いため息を吐いたのを、乙彦はあえて見ていない振りをした。決して仲が悪いわけではないのだろうが、きっと乙彦とだけいろいろしゃべりたいことがあったのだろう。

——機会作って、俺の家に呼んで見るか。藤沖には内緒で。

教室を出て三人で廊下を闊歩していると、一年C組の教室から猛獣のごとき叫び声が響き渡った。まだ扉は閉まっている。まだ帰りのホームルームは終わっていないようだった。

「一体何だあいつら」

「ああ、さすがに優勝ともなると盛り上がるんだろう」

あっさり藤沖は返事した。

「前代未聞、アニメの曲を合唱の自由曲に選出したのが成功した理由だろう。難波の奴、目を潤ませて狂喜乱舞していたぞ。あいつのどこがホームズだ」

——そういえば言ってたな。結局一年C組が最優秀賞か。でも、B組は？

結果を乙彦はまだちらとしか確認していなかった。静内は、結局どうだったんだろう？

14 指揮台上の背中（3）

ひとりはしゃいでいるように見える藤沖と、その側で言葉選びに悩む片岡。その間に入る格好となる乙彦。どことなく微妙な雰囲気の流れている。

——いったい何考えてるんだらうか。

藤沖も決して無神経な奴ではないはずだ。乙彦に関わるよしなごとに関しては、こちらでも頼んでいないのにどんどん先に手回ししてくれる。陰口を叩かれていてもいつのまにか叩きのめしてくれている。すでに藤沖とは対等な関係だと思いたいところなのだが、やはりこういう時に重たい「兄貴分」気分が漂ってくる。

乙彦は片岡に尋ねてみた。

「何を食べようか」

「うん、桂さんに聞いて決めようよ。ほら、もう車来てるし」

青大附中裏の雑木林砂利道に真っ黒い車が停まっていた。片岡が駆け寄って後ろ扉を開き、

「早く乗れよ」

熱心に勧める。まずは運転席に回った。

「こんにちは、桂さん」

「よおよお、お久しぶり。そっか、今日は合唱コンクールだもんな。これからうちで遊ぶんだろ、さあさあ乗れ乗れ」

先回りされてしまうのはここでも同じだ。乙彦よりも前に藤沖が坊主頭を丁寧に下げ、

「ではおじゃまします」

さっさと後部座席に乗り込んでしまった。仕方なく乙彦も続く。片岡は助手席だ。乗ってみて気づいたが、無線機器らしきものが運転席に埋め込まれている。電話の受話器みたいなものもある。なによりも、中が広い。

桂さんは眼鏡を持ち上げざんばら頭で振り返った。

「司から噂は聞いているよ。ええと、関崎くん、今回は指揮者担当だったんだよなあ。大変だったろ」

いつのまにか片岡は桂さんに逐一報告しているらしい。事実なのでイエスと答える。桂さんはすぐに車を発進させながら片岡に、「なあ司」と問いかけた。

「んでだ、結局どうだったんだ合唱コンクールは。お前の狙い通り一位だったのか」

「ううん、ならなかった」

「はあ？ どべか」

「わかんないよ。うちの学校最優秀賞と優秀賞しかないし。どちらにもならなかった」

「ほんじゃあ、ちょっとめげたってどこか」

「うん、けどさ、けどね」

片岡が言葉を留めた。何かを言いたそうにしているがうまい表現が見つからない様子だ。助手席から乙彦たちに振り返り、

「どう言えばいい？」

直接問いかけてきた。要は乙彦か藤沖かどちらかが説明すべき話ということか。残念ながら乙彦はこの件に置いて適任ではない。自然と藤沖に任せざるを得ない。藤沖も待ってましたとばかりに説明役を買って出てくれたのでここは黙って聞くことにする。

「実は、うちのクラス、棄権したんです」

「棄権？　なんかあったのか？　そりゃピアノがつまづいたりとか誰かがぶったおれたりしたらそうなるかもしれねえが」

「その、誰かがぶったおれたんです」

釣られてすごい言い方をする藤沖。誰も突っ込まない。

「課題曲は問題がなくこの調子だと上手くいくとっていたのですが、自由曲の最中に女子がひとり体調を崩して倒れてそれでおしまいです」

「あちゃあ、それは悔しいなあ」

「それで実はここからが本題なんです」

もったいぶった口調で藤沖は乙彦を横目で見つつ続けた。

「指揮者が関崎だというのはその通りなんです、その女生徒が倒れたのをいち早く見つけて保健室に運んだのもこいつです。実際は関崎が指揮者の仕事を放棄したことになりますが、人の命を最優先で選んだこいつを俺はめちゃくちゃ誇りに思います」

「おいやめろ」

さすがにそれは言い過ぎだろう。なりゆきだと言いつつ返したい。それに下手したら乙彦の行動により宇津木野が体調を悪化させる可能性もあったのだ。肯定はできない。

「いいだろう事実なんだ。片岡も見てただろ」

「うん」

素直に片岡は頷いた。一緒に桂さんも「ふうむ」とつぶやいた。

「まじで王子だなあ。んでその子は大丈夫なのか。貧血でふらふらとかそういう話じゃないのか」

言葉に困る。藤沖も片岡も、麻生先生の話した「あまり楽観できない」とはいえ生命に異常はなしという言葉のみ。乙彦もなんとなく危なっかしいところを感じているがどう伝えていけばいいのか分からない。

「とりあえず大丈夫そうです」

藤沖はあっさり流した。あまり宇津木野の病状には関心が薄いと見える。続いて片岡が割り込んで語りだした。

「でもさ、そのあと。関崎が病院に付き添っていった後、クラスでもう一度最後に歌うチャンスをもらえたんだ」

「トリかよ」

「そう、賞の対象にはならないけど自由曲だけ最後に歌わせてもらおうよってことになって、それで『モルダウの流れ』歌ったんだ」

「そりゃすごい。ナイス采配」

「そうなんだ。俺たち正直もう歌えなくてもいいやとか思ってたんだけど、他の先生がぜひやろうって呼びかけてくれて」

「ですが、関崎たちが参加できなかったのが残念です」

——まさか古川と無駄話していたなんて言えないな。

いつかは白状しなくてはならないが古川の立場もある。乙彦は黙っていた。構わずに藤沖は続けて説明した。

「その倒れた女子に付き添いで関崎ともうひとりの女子がくっついて行きました。病人を含めてクラスメートはふたり欠けている状態です。そんな中でいくら歌おうと勧められても何か間違っているんじゃないかと正直思っていました。合唱コンクールは本来クラス一丸となるためのイベントだからだれかひとり欠けても意味がありません」

「まあそうだなあ」

「俺としては関崎が帰って来てから全員の総意で歌うかどうかを判断すべきだと思っていました。ただ、クラスの連中は俺と違う考えだったようで結局、関崎たちが到着するのを待つことなくラストで歌うはめになってしまいました」

「そうか、歌いたくなかったのかなあ」

とぼけたように桂さんが尋ねる。藤沖はもう一度乙彦を見てから、

「歌いたいとは思いますが。しかし全員揃ってない状態だと意味はありません。来年に持ち越すべきでした」

——ちょっと待てよ。藤沖はラストの「モルダウ」合唱反対したのか。

「藤沖、聞きたいんだがいいか」

乙彦は確認の意味で割り込んだ。口を尖らせる藤沖に畳み掛けた。

「俺が体育館に到着した時の合唱は、あれクラスの総意じゃなかったというわけか」

「最終的には結果オーライだ」

藤沖も不機嫌そうに返した。

「指揮者がいない中でどうやって歌うかという話になりいったんは流れかけた。クラスの奴らも無理して歌いたいとは思ってなかったからな。だが、ひとりどうしても合唱をさせたいという奴がいた。それがあいつだ」

「……立村か」

ぴく、と片岡が肩をこわばらせている。藤沖は苦しそうに続けた。

「そうだ。お前は気づいてなかったかもしれないが立村は宇津木野が倒れた時も延々と伴奏のピアノを弾き続けていた。普通だったら倒れた仲間を気遣って弾くのをやめるだろう。しかしあいつは自分がどうしても弾きたいというただそれだけでピアノにかじりついていた。麻生先生も激昂していた」

——そういえば怒鳴っていたな。

微かな記憶がよぎる。

「それだけ弾くのが好きならそれはそれでいい。だが普通は人の命を最優先にすべき場面だ。俺

は関崎が宇津木野のために指揮棒を捨てたのは正しい行為だと思う。そして指揮者の行動に合唱も、もちろん伴奏も従うべきだ。しかしあいつはそれをしなかった。さらに言うなら」
言葉が震えていた。

「立村はいきなりクラスの連中を丸め込むようなことを言い出した。つまり宇津木野の立場が苦しくならないように合唱をトリでやらせてもらうべきでありお前たちを待たなくてもやるべきだとか言い出した。あの場に俺が入れば絶対に止めさせた。だが俺が気がついた時は全員がもう立村に洗脳された状態で」

「藤沖、それ違うよ」

片岡が口をはさんだ。

「どう違うんだ、司」

「だって、藤沖は最後には賛成してたよ」

乙彦と藤沖を交互に見比べながら片岡は説明した。

「立村が提案した時に藤沖、今回は無理そうだって言いながら教室に駆け込んできただろ」

「あれは、関崎たちがまだ戻ってこないと職員室で聞いたからしかたなくだが」

「あの後、藤沖を含めて合唱をするかしないか、決を取っただろ」

畳み掛ける片岡にたじたじとなる藤沖。自分の膝をやたらと揉む。

「あの時反対するかなと思ってたけど、藤沖賛成したよ。だから歌ったんじゃないのかな」

「いや、あれは」

しどろもどろになる藤沖に乙彦は、肩に手をやり声をかけた。

「とりあえず、なんか食ってから詳しく聞かせてくれ。どちらにせよ俺はお前を責めたりしないからな。片岡も、たのむ」

14 指揮台上の背中（4）

マンション最上階の部屋にて桂さんお手製の醤油と葱および牛乳入りという通常の味覚ではあまり発想できないラーメンを食した。味はまあ、悪くない。

「どうだ、麺から作ったんだぞ。な、司？」

三人男子を前に誇らしげな表情で桂さんは語る。

「俺がよく行くラーメン屋が駅前にあるんだがな。あそこではいろいろトッピングができるんだ。まあなあ、たれは親父さん秘伝なんで教えてもらうわけにはいかねえが、俺の黄金の舌で分析した結果、かなり近いレベルまで達したんじゃないかと思うんだ」

——牛乳を無理に入れなくてもそのままでも十分行けると思うが。

乙彦たちの本心を気づいてないようで、桂さんは熱弁を振るう。

「だが、今日はまだ仕込みがまだ足りない。ということでこれからも味の追求をしていかないと
なるまいってとこなんだ。んでだ、司」

「なんだよ」

とりあえず味には満足している様子の片岡に桂さんは語りかけた。

「頼むから、麻生先生とは仲良くしてくれよ。下手に反抗なんかすんなよ」

「なんで」

スープまですっからかんになるまで飲み干し、桂さんは説明した。

「あの先生はなあ、俺と同じ趣味の持ち主でいわゆるB級グルメにうるさいんだ。この前焼肉この部屋で焼いただろ。あの時も肉から始まり安い定食屋とかもちろんラーメンとかもつ料理とか屋台とか、その辺りの情報をたんまり頂いたんだ」

「確かにそんな話、していたような」

藤沖も納得しているようだった。ただし、スープはあまり飲んでいない。当たり前だ。喉が渴くし塩分の摂り過ぎは身体によくない。

「なにせ学校の先生で担任となったら、ある程度気を遣わねばならないところもあるんだが、司との関係が良好ならまあ多少の脱線も許されるだろ」

——公私混同？

「お互い、この夏休みはいい店を開拓しようぜということで約束してたんだ。そうするとどうなる。貴重なうまい店情報が入手できて俺様の舌でその味を再現できて、こうやってお前らにうまいラーメンを食わせられる。ラーメンだけじゃない。関崎くんは焼き鳥、好きかな」

「はいもちろんです」

即答すると満足したように桂さんは膝を叩いた。

「実はな、この前麻生先生から連絡があっただな。極上のタレを使った焼き鳥屋台を発見したとの情報もらったんだ。今んところはガキンチョ連れて行けるような場所でないから近いうちに俺が足を運んでみる。そこでOKなら、楽しみにしてる。あ、それと司、お前が手っ取り早く英語でトップ取れればすぐに連れてってやるぞ」

「そんなあ」

困りきった顔で片岡がラーメン丼を見つめる。果て無き夢である。

ラーメンどんぶりを三人で洗った後、健康にいいらしいラズベリーのジュースをそれぞれ口にした。確かにおいしい。

「目にいいらしいぞ。お前らそれなりにやらしい本闇で読んでるだろうからそこんともちゃんとケアしろよ」

よくわからないことを伝えた後、

「そいじゃあちょいと俺は用事があるんで隣の部屋に移動する。三人とも仲良くなんか食いながら話してろ」

「わかった」

邪魔者退散、といったところか。桂さんは確かに気さくだし年齢的にもそれほど離れていないし一緒にいてもかまわないのだが、改めて考えるとまずいことも確かにある。桂さんがいなくなり三人だけになったところで、乙彦は片岡に尋ねた。さっきの話の続きである。

「さっき片岡、合唱コンクールの時に全員一致でトリの合唱をすることになったってことなんだが、それまでかなりもめたのか」

「うーん、どうでもよかった」

気抜けする返事が返ってきた。すぐに割り込んで来るのが藤沖だった。

「俺に説明させてくれ。さっき話しただろ。俺は条件付きで賛成派だった。他にもそういう奴がいたはずだ」

「だが、それがなんで」

「立村がいきなり話をひっくり返してそっちに持っていった。いきなりなんと言ったと思う？ 評議の責任だからすぐに決を取れとかいいやがった」

「決を取る？ 話し合いなしでか」

立村にしては珍しい焦り方だ。気になるところではある。藤沖も頷いた。

「話し合いをせずいきなり採決といわれても、その場の雰囲気流される可能性もある」

「じゃ、藤沖が賛成したのは、それか」

乙彦も畳み掛けた。たぶんそれだ。間の悪そうな顔で藤沖もため息をつく。

「やはり、舐めるべきじゃなかったということだ。立村は腐っても元評議委員長だったということだ。会議の荒らし方とまとめ方をよく熟知している」

褒めているのかけなししているのかわからないが、乙彦にしてみればそれなりの「褒め言葉」と認識していいのではないかと判断した。

「けど、歌ってよかったよ」

少し沈黙が続いたが、あどけない口調で片岡が話を切り出した。

「片岡は賛成だったんだな」

「本当はあいつの言い分を受け入れるなんて、なんかやだったけど」

そうだった。片岡はもともと立村のことをあまり好きではないはずだ。英語科トップのライバ

ルというだけではなくさらに面倒くさそうな原因がありそうだが。

「でも、それはそれこれはこれだよ。伴奏は疋田さんが弾いたから、ほら、関崎が歌った時のようなゴージャスな雰囲気になったし」

「確かに疋田のピアノは見事だった」

藤沖も認めた。

「それに、すごく歌ってて気持ちよかったんだ。いろいろあったけど、このままだと宇津木野さんが自分のせいだと思い込んで落ち込んじゃうからってことでなら、大丈夫平気だったよ早く戻っておいでって言えるし。そうだろ、関崎？」

「そうだな」

片岡も意外とまともなことを考えているものだ。少し驚く。

「だから、歌ってよかったってこと」

「それでか」

藤沖がいまいましそうにつぶやいた。

「片岡、お前があれだけ嫌っていた立村に握手求めたのはそういうことか」

乙彦は気づいていなかったがそういうことがあったようだ。改めて問い返した。

「そうなのか。俺もなんで片岡があれだけ立村を嫌うのか謎だったんだが」

「いいことした相手にはそれなりに拍手するのが義務だから」

ぽかんと口を開けそうになる。片岡はためらいなく言い切った。

「立村がああ場でさっさと決を取らなかったらいつまでたってもどうするか結論でなかったと思うし、そうしたら歌うことにもしなっていたとしても準備が間に合わなかったよ。あの場合だけで言えば、藤沖が戻ってくる前に立村がさっさと決めてくれたのは正しかったと思うんだ。他のことは別だけど」

思わず乙彦は片岡の肩を思い切り叩いた。痛がる気配はなかった。

「片岡、お前ほんとに、いい奴だな」

14 指揮台上の背中（5）

どうやら片岡と藤沖の会話をまとめてみるとこういうことになるらしい。

——乙彦たちが教室を去った後、歌いきれなかった「モルダウの流れ」を合唱コンクールファイナーレとして出すよう先生方に提案された。

——しかし、クラスメート三人が不在の中で歌うことに藤沖は反対だった。

——それを立村が何を考えたか全力でクラスの間を説得し、藤沖を一方向的に踏みにじって多数決で出場を選択した。

——指揮者不在で代役は、中学二年時に経験のある立村が立候補し、伴奏を疋田にまかせ一時間ほど猛特訓をしたらしい。

その後の展開はご存知のとおり。

状況が判明してくるにつれて立村の見事な采配ぶりが伝わってくる。

藤沖はそれでも認めたくないようだったが、片岡はそれなりに立村のことを見直しているようにも見える。舞台裏の握手を求めてきたというのもあの単純明快な片岡なら裏も何も無い。純粹に感動したのだろう。

乙彦も片岡が一方向的に立村を敵外視して無視決め込んでいるのは気になっていたし、その点の心配がなくなっただけでもよかったと思う。

片岡の家を出たのは五時半過ぎだった。

せっかくだから泊まっていけと誘われ、藤沖もずいぶんその気になっていたようだがさすがに甘えすぎだろう。帰ったらそれなりにやらねばならないこともある。

——立村に直接話を聞こう。

片岡からお土産に持たされたメロンを夕食後家族で切り分け奪い合った後、乙彦は受話器を取った。

——はい、立村です。

「立村か、俺だ」

自分でも声が上ずるのがわかる。電話の向こうにいる立村は少し笑っているようだった。すぐに礼を言ってくれた。

——関崎、今日は本当に助かった。ありがとう。

「礼を言うのは俺の方だ。学校では慌ただしくて本当の意味での礼が言えなかった。悪かった」

——いや十分だよ。

立村は声をひそめるようにして切り出した。

——それより関崎に聞きたいんだけど。

「宇津木野のことか」

乙彦も声を潜めた。あまり家族には聞かれない話題でもある。台所では父のために残したひと切れのメロンを何とかして奪おうとする兄と弟の声が聞こえる。

——そう。病院でかなり病状が重いと聞いたんだけどさ。

麻生先生も曖昧な言い方でごまかしている。本当は乙彦もそのことを知りたい気持ちでいっぱいなのだが残念ながら立村に提供出来る話題はない。嘘を言っているわけではない。「俺も具体的な病状は聞いていない。すまない」

そう言うしかなかった。だがどう考えてもこれはごまかしていると思われそうなのである程度は伝えた。

「ただ、彼女の両親にあたる人から説明は受けた。精神的なものらしいとは聞いたので、手術を必要とするような病気ではないということだ。

——そうか、手術ではないんだな。

少し安心したような声が聞こえた。やはり心配していたのだろう。そういう奴だ。

「とにかく、えらく頭を下げられてこちらも恐縮しっぱなしだった。とにかく昼飯だけでもということで無理やりご馳走されて、せっかく給食出ているのにいいんだろうかと思ったんだがとにかく食った」

あのまずい中華丼を思い出す。味の記憶は片岡宅の謎ラーメンを食わされても上塗りされないものなのだ。立村が怪訝そうに問いかける。

——あれ、渋滞して遅くなったんじゃないのか？

きた。これはやはり謝らないといけない場面だ。言い訳するのは男らしくないけれども事実は伝えないとまずい。

「俺も、宇津木野の体調がよくなった段階で学校に戻るべきだと主張したんだが、麻生先生および宇津木野のご両親にぜひにと引き止められてしまい、結局は担任の判断に頼らざるを得なかった。すまん」

なんだかやっぱり麻生先生のせいにしてしまっているような気がする。罪悪感がある。立村も不機嫌そうな口調で、

「これはお前に謝ってもらっていい内容だな。とりあえず学食で何かおごれよな」

たかってきやがった。しょうがない。学食何かまともな定食でも選んで食わせよう。取り急ぎ今は金がないので、

「バイト代入るまで待っていてくれ」

まずは手を合わせた。電話の向こうでは笑いがこらえきれないようだった。なんだ、冗談だったようだ。

——冗談だって。気にしてないからさ。

気持ちが少し楽になる。思い切って話すことにした。

「俺もそのあと一時頃に、麻生先生から合唱参加の話を聞かされて大急ぎでタクシーに乗ったんだが、その時は本当に渋滞にぶつかったんだ。なんでも、前の車が玉突き事故を起こしたらしくて身動きできなかったんだ。途中で降りて学校までバスで行くことも考えたんだが、結局はタクシーの方が早いという麻生先生の意見でそのままで行った。結局、間に合わなかったのが俺としては、死ぬほど悔しい」

「あと五分でも早かったら、とは思うよ」

なんだか自分でも言い訳がましくなっている。嘘を言っているつもりはないのだが微妙に話を

ふくらませてしまっている。

「ちょうど体育館の中に入った時、お前が指揮台で両手を上げているのを見た時、正直俺は何が起こったのか把握できなかったんだ。麻生先生からは指揮者なしで行われる可能性もあると聞いていたが、まさかお前が、立村とは、想像してなかった。古川も同意見だった。伴奏どうなったんだと思ったが、疋田が担当することになったんだな」

——そう。一時間くらいかけて疋田さんと音楽室でとことん音合わせしたし。疋田さんの注文はほんと多かったからめちゃくちゃ大変だったよ。

相当苦労したのだろう。立村の口調は落ち着いている。しかし陰では乙彦の知らぬところで面倒なバトルが繰り広げられたのだろう。どちらにせよあと五分、乙彦が古川とくだらないことをしゃべっていないでさっさと体育館に向かえばちゃんと自分の仕事も終わらせられたはずなのだ。そう考えるとやはり悔しい。何度も謝った。

「悪かった。いくら謝っても許されることではないと思うが、本当に申し訳ない」

——だからそんな謝らなくてもいいんだってさ。

「とにかく、クラスの奴らから事情は全部聞いた。立村、お前はすごい。心底尊敬する。今までお前を馬鹿にしていた奴も、すっかり見直したと聞いている」

片岡の態度が変わったことも伝えるべきか迷うが今のところは控えておく。

——そんなことないよ。当然のことをしただけだって。元・評議の遺産みたいなものだって。

立村はそれでも気を良くしたのか、軽やかに答えた。そうだ、こいつは青大附中の評議委員長だった。いろいろあって位を落としたけれども中身は全く変わっていない。周囲の評価がた落ちだったとしても、乙彦はずっと立村に火が点くのを待っていた。

「元・評議か。そうだな。お前は評議委員長だった。そのくらいお茶の子さいさいだな」

思い出させてやりたかった。電話の向こうで立村は一言、

「そんなことないよ」

静かに答えた。

乙彦が受話器をおいた後、テーブルでは母が一口ずつ片岡がくれたメロンを味わっていた。兄と弟の激しい「ちょうだい」攻撃から守り切ったらしい。父の分については確認していない。

「おとひっちゃん、こんないいメロンお土産にくれる友だちがいるんだねえ。今度何かお礼に持っていないかねえ。ほら、中こんなにオレンジ色でしょ。このメロン普通に勝ったら目玉が飛び出るくらいの値段なんだよ。ほら、電話でお礼言うからそのお友だちの電話、教えなさい」

——そんな高いメロンなのか？

桂さんが「ちょうどよかった、メロンジュースにするつもりでまとめ買いしといたもんがあったから、お前らエネルギー充電するためにしっかり食べ、もってけよ」と笑顔でくれたものだから何も考えずお礼言ってもってきたのだが、盲点だった。片岡の家は、忘れがちだがそういう家だったのだった。

次の日は合唱コンクール後の後片付けや麻生先生の思い出話、宇津木野の容態、その他もろもろと慌ただしかった。それなりに授業もあるにはあるのだが、先生たちもドラマチックな展開甚だしい一年A組英語科の連中にはそれなりに敬意を払ってくれているらしい。なんだか四時間目終了の鐘が鳴る頃には、

——なんだか俺はすごいクラスにいたのかもしれない。

意味なく誇りを持ってしまっている自分に気づいた。

話をしたことの無い上級生にいきなり呼び止められて、

「君、すごいよ。よくやった」

と褒められたり、よく知っている結城先輩には、

「さすがだねえ。僕のお見立て通り、ちゃんと勲章を手に入れてくれたねえ」

とわけのわからないことをつぶやかれたりもする。

外から見ている限りだと、全学年で最優秀賞を勝ち取った一年C組の連中は我が世の春とばかりに舞い上がっているように見える。よくわからないが前代未聞の出来事だったとも聞く。通常一年がいきなり二、三年を追い越して最優秀賞を獲るなんてことは普通ないのだそうだ。さぞ元評議三羽鳥も舞い上がっていることだろう。さっきも教室を出て行く前に天羽が立村を引きずり出していったのを見た。先輩たちと集まって何かするらしい。

——立村も、これで少しでも評価されればいいんだが。

一段落したところで、乙彦は図書館へと向かった。向こうの三羽鳥には用がないがこちらの「三人組」には誘いの連絡をしたい。すでにいつものテーブル席を陣取っていたのは名倉だった。

「関崎、昨日はすごかったな」

やはりこいつからもお褒めのことばを頂戴する。

「かたじけない。ところで名倉、突然だが今日これから暇か」

同じことを褒められるよりも話を全く別に持って行きたかった。

「暇、といえば暇だ。今日は夕方から塾だ」

「それなら、昼間なら大丈夫ということだな」

乙彦は切り出した。名倉の都合を考えると早めに話を進めたほうがいい。

「実はこれから、青工の学校祭に行こうと思っているんだがよかったらお前も来ないか」

「青工？」

青潟市立工業高校。略して青工。

「中学時代の友だちが青工の建築に行っているんだが、そいつからチケットをもらったんだ。今回はちょっとした子ども向けのおもちゃや遊び場をクラスで開くらしくて俺にも来いと誘いがあったんだ」

「俺はあまり行ったことがないが」

「俺もない。兄貴も同じ青工なんで顔合わせするかもしれないが、人畜無害だ。よかったらこれ

から高校の学校祭がどんなもんだかを偵察に行こう」

「そうか。関崎が言うなら面白そうだな。もちろん静内も連れていくんだろ？」

にこりともせず、言葉だけは前向きに名倉が言う。ぶっきらぼうなのはいつものことだ。気にしない。

「そういう静内は遅いな」

乙彦が腰を浮かせ図書館の入口を眺めやる。まだ気配なし。だいぶ席も埋まってきているというのに。珍しい。いつもなら一番で座っているくせにだ。

「あいつは昨日相当悔しい思いしてただろうな」

「どうしたんだ」

一年B組の合唱コンクール結果、意気込みが空回りした扱いをされていると聞いている。乙彦はそもそもその歌を聞いていないのでわからないしクラスの連中に聞くのも気が退ける。

「間違っははいない。しくじっははいない」

とつとつと名倉が腕組みしてつぶやいた。

「単純に、先生方に評価されなかつただけのことだ」

「あいつの燃え方は相当なものだったがな」

きっと上手なクラスはいくらでもあったのだろう。そう考えるしかない。二年、三年だって下克上をそうそうされるのは嫌だと思う。

「詳しいことは聞いていないが、直前で相当誰かともめたらしい」

「清坂か」

すぐに口から出てしまう。一番怪しい結論。名倉は首を振った。

「誰かはわからん。だが、あまりいい乗りで歌えたわけではなさそうだ」

「お前のクラスはどうなんだ」

聞き忘れていた。一年D組はどうなんだ。名倉はあまり興味なさげにつぶやくのみ。

「間違えなかつたからたぶんよかつたんだろう。俺にはわからん」

一番平和に終わったクラスなのだろう。それはまたそれでよし。

「ごめん、待たせたね」

しばらく名倉と青大附高の学校祭について話をしていると静内が小走りにテーブルへ駆け寄ってきた。息を切らせている。

「お前遅いな」

「まあね。聞いてもらいたいことどっさりあるんだけど、とりあえずなんか食べようよ」

「食うのはいいが、関崎、ほら」

いきなり乙彦に名倉が振った。すぐにお誘いせよとのお達しだろう。

「そうだな。静内、今名倉にも話したんだがこれから青工の学校祭行かないか。この三人で」

「え？」

静内が凍りついたように固まった。口が開いたままだ。かなり間抜けだ。笑いたくなる。

「お前も青工と言われてぴんとこないということか。青瀉工業だ」

「知ってるよそのくらい。けどなんで」

乙彦は再度、雅弘繋がりの案内を説明した。

「そうなんだ。関崎の親友が青工なんだね。そっかそっか、いいよ。私も行く！ ってことは学食じゃなくてそのまままっすぐ、青工の出店とかそういうところで食べればいいってことだよな」

「そういうことだ。行こう行こう」

入ってきた時は随分目もつり上がっていた静内だが、乙彦の誘いですぐに機嫌を直したようだ。今だにいろいろと尾を引いている合唱コンクールだが下手な愚痴を聞かされる位なら他の学校の新鮮な空気を吸ってリフレッシュする方がいい。少なくとも、

——あの学校に、静内のむかつくライバルはいないと見た。

「じゃあ行こう！ 自転車ならすぐだよな」

声も浮き立ちすっかりいつものさらりとした笑顔に戻った静内が隣りにいる。階段を降りて生徒玄関に向かおうとした時、清坂美里と羽飛貴史のふたりとすれ違った。

「関崎くん」

まずいタイミングだ。静内が名倉としゃべっているのを幸いに頭を軽く下げて挨拶だけした。

「おつかれ」

隣りの静内には目もくれず、清坂はそのまま羽飛と一緒に階段を昇っていった。やはり静内は気づかないままだった。

青潟市立工業高校は街のど真ん中に位置していた。兄の関係で学校祭の話聞かせてもらったことはあるのだが、それほど面白そうな印象はなかった。あまり兄はでしゃばるほうではないからだろう。しかし今回は雅弘があれだけ力説しているのだ。期待せずにはいられない。

校門の前にはティッシュでこしらえた花が色とりどりに貼り付けられている。いかにも学校祭といった感じではある。中学のものとそう変わらない印象だった。

「中に入ろうか」

「その前に自転車どこにつける」

「あ、あそこにお客様用自転車置き場とかあるよ」

静内の指差す方向へ移動し、自転車をまずおいた。だいが客入りがよさそうで、乙彦たちが押し込んだ段階で満車のようなのだ。

「土曜日なのにずいぶん人がいるな」

「そりゃそうだよ、青工の学校祭ったらやっぱり興味しんしんでしょよ」

「そういうものか」

三人三様に思ったことを口走りつつ中に入り、受付担当者に雅弘からもらったチケット一覧を見せてみる。すぐに一年建築科クラスが担当しているという「キッズルーム」と、ドーナツセットがもらえる店を教えてもらった。一パック三個ずつ入っているという。さらに吹奏楽コンサートを聴いてくれた後に食堂に行くと半券一枚でお茶もサービスしてもらえるという。同行者全員という話だった。

中に入って見ると模擬店もだいが賑わっている様子だ。もらった白黒パンフレットを片手に中をうろついてみる。学内は普段靴を履き替えねばならないらしいが学祭中はそのまま上がって問題ないとのこと。気楽に進む。

「なんか食いたいな」

名倉がぼそりと言う。腹の虫も鳴いている。

「ドーナツだけだとちょっと寂しいよね。関崎、食堂に寄ってみようか」

地図を見ながら学生食堂に向かう。静内の言うのももっともなのだがいかんせん、席が埋まっていて乙彦たちの座るスペースがない。学生は少なめなのだがそれこども連れが圧倒的に多く、ひとりの席をふたりぶんぶんどってラーメンやらカレーライスやら食べまくっている。ウェーター、ウェイトレス担当の生徒たちも食券を受け取っては運びの繰り返しでかなり混乱している様子だ。

「まさかドーナツだけということはないだろう。夜店のチョコバナナとかたこ焼きくらいは並んでいそうな気がするぞ」

乙彦が慰めつつ、体育館に足を向けた。キッズルームはどうも体育館の一角に設置されているようで、中に入るとそれぞれパーテーションで区切られていて、子どもを遊ばせている間に親たちも一服できるような休憩場もある。椅子と机がぽつんぽつんと並んでいる。かなり集まってはいるけれども乙彦たちの席は確保できそうだ。

「ここは穴場だね」

「ドーナツを先にもらってきてここで食うのはどうだ」

静内、名倉も満足したらしい。ふたりを席につかせて、乙彦は最初に雅弘を探すことにした。子どもたちだけがはしゃいで、手押し車や木製がら、その他積み木に戯れている。様子をつつぴりぴりした表情の男子生徒を捕まえ、

「すみません、佐川くんいますか」

声をかけてみた。

「佐川は今、出かけてますがそろそろ戻ってきます。そこの休憩室で待っててください」

ぶっきらぼうな返事だった。様子を伺う限り子どもたち当番の生徒が五名ほどいて、ローテーションを組んでいるらしい。運悪く雅弘の休憩時間に重なってしまったようだ。

「わかりました。それで、休憩室でなんか食べていいですか」

念のために聞いておく。あっさり返事がきた。

「構いませんが煙草はやめてください。それとアルコールも」

——やるわけねえだろうが！

待っているふたりを腹空かせたままにするのも申し訳ない。相談して静内と名倉のふたりでドーナツを引換えてくることにした。幸い静内は必要なところをすぐ発見出来る女子なので乙彦がいなくても問題なく目的地にたどり着けるだろう。

「関崎の友だちが帰ってきた時に関崎本人がいないと大変だしね」

静内も納得顔でチケットを握り締めた。名倉も食べ物にありつくためならと足が浮立っているのがよくわかる。まあ男子はそういうもの、自分でも意識ありだ。

「じゃあ、待っててよ。あとなんか美味しそうなものがあったら買ってくるかもよ」

「頼んだ」

見送りつつ、乙彦は改めて椅子に座り直した。

——青大附高の学校祭は本当にどうなるんだろうな。

ちらちら話には聞くのだが、クラスイベントを行うとかお化け屋敷や模擬店やるとかそういう情報は一切ない。委員会絡みで何か参加させられるのかもしれないがどうなのだろう。立村にもちらっと聞いたことがあるが、中学とは別組織で行うらしいので高校の事情は全然わからないとのこと。ただ、ピアノを中心とした学内演奏会が行われるのと、吹奏楽もそれなりにコンサートを開くらしいということは耳にしている。

——さっき見た感じだと、雅弘のこしらえていた引き車をはじめ、丁寧に角を落とした積み木とか、穴に紐通して遊ぶおもちゃとか、あれは夏休み中に準備しないと間に合わないものだろう？

ああいうものだともう少し準備が必要だと思うんだが、うちの学校は少しのんびりしすぎているんじゃないのか。

来週学校に行ったらそのあたりも聞いてみようと思う。もし規律委員会が学校祭でそれなりの役割を担わされるとなるとどういふものになるんだろうか。先輩たちがそのへんは詳しく教えて

くれるんじゃないかと期待はしておく。

「あれ、おとひっちゃん！」

明るい声が響いた。一緒に休憩場でたむろっていた人々も同時にその声のほうを見た。

「雅弘、来たぞ」

「ほんとに来てくれたんだ！ よくここわかったよね」

雅弘が駆け寄るようにして乙彦の隣りにひつついた。すぐ隣の席に座った。

「みなここ探せなくて教室ずーっと探してて、やっと来るってパターンだったから」

「地図を見れば誰でもわかるだろ」

なぜ迷うのか、その方が正直不思議だ。雅弘はいつものどنگり眼をきらきらさせて、

「さすがおとひっちゃん！ 今日は学校終わってから来たの？ ひとりで？」

きょろきょろあたりを見渡した。

「違う、友だちふたり連れてきたんだが、お前が送ってくれたドーナツを引換えに行ってもらってるんだ。ここで食ってもいいということなので、ゆっくり食べようと思う」

「そうか、そうなんだ」

少し戸惑った風に雅弘はうつむいた。すぐに顔を挙げ、

「ちょっと待ってて、会わせたい人来てるんだ」

小走りに体育館入口へ戻っていった。後ろから、

「佐川、早く戻ってこい！」

さりげなく怒号も聞こえる。どうやら休み時間オーバーしているらしい。あとで乙彦も一緒に謝ってやったほうがいいかもしれない。誰か同じ中学の出身者でも来ているのだろうか。まさか総田なんてことはないだろう。さすがに雅弘だってばかではない。同級生だろうか。

雅弘が伴って現れたのは、確かに水鳥中学時代一緒だった生徒だった。

——水野さん！

思わず立ち上がっていた。雅弘の後ろにそっと隠れるようにして、しっかり編みこまれたお下げ髪のやさしい微笑みがすぐ側にあった。さらにその奥にもうひとり、水野さんと同じ制服を来た女子生徒がちらちらしていたが、どんな顔かはわからなかった。

「さっきたん、おとひっちゃんに会うの、久しぶりだろ？」

水野さんは雅弘にやさしい目線を投げ、改めて乙彦に頭を下げた。

15 礎祭（3）

雅弘は乙彦と水野さんを交互に見比べた後、付き添っていたもうひとりの女子も手招きした。

「よかったら一緒にどうぞ」

その顔を見て乙彦の記憶がぴんと張った。もしやこの、ふんわりした髪の毛を高くポニーテールに結っているその女子は、たしかどこかで会ったことがあるはずだった。会釈して、まずは乙彦の方から挨拶した。

「あの、初めまして」

じっとその顔を見つめながら、水野さんと同じ制服姿の女子が誰だったかを探る。大抵の場合乙彦は一度みた顔は絶対に忘れない。ただ名前とひもづいていない可能性もある。どこで会っただろうか。

「一緒に座りましょう」

水野さんはそのふんわりした華やかな雰囲気の子を隣りに置き、

「私の友だちの、霧島さん」

微笑みつつ紹介してくれた。そのあとですぐに雅弘も、

「こいつ、俺たちの中学時代の友だちなんだけど関崎。あ、いつも俺、おとひっちゃんって呼んでるんだ」

フォローに入ってくれた。なんだかめちゃくちゃな順番だが改めて自己紹介する。

「関崎といいます。水野さんとは水鳥中学で一緒に」

「私のこと、覚えてない？」

ふんわり少女は首を傾げて少しだけ厳し目に乙彦を睨んだがすぐに品よくもとに戻し、

「霧島です。私、関崎くんとは去年、青大附中でお会いしているのだけど」

「青大附中？」

思い出せない。どこかで顔を合わせたことだけは確かだと思うのだが。

「すまん、確かに会ったことはあると思うんだが」

これだけ目立つ雰囲気の子なのになぜだろうか。記憶に浮かばない。

霧島と名乗ったその女子は、

「座っていい？」

静かに席につき、乙彦たちが一緒に腰掛けるのを待った。雅弘が交代のため再度呼び出しくだったのを見送ったあとで、

「私、中学時代青大附中にいたのよ。立村くんとか、天羽くんとか、難波くんとか、更科くんとか、美里とか、琴音とか。それと」

口ごもり、首をいったんきつく振った。

「水鳥中学との交流会にも来てたでしょ。私それ、参加していたから。生徒会副会長を忘れるわけないわ」

隣りで水野さんがその口調に驚いている。雅弘相手にはずいぶんお嬢様っぽい話し方をしていたようなのだが、乙彦の顔を見たときたんかなりきっぱりしゃべるようになったのは何か思うところ

るでもあるのだろうか。いや何よりも、きっかけだけははっきりした。青大附中で合同のイベントには参加したしその際に評議連中とはそれなりに挨拶もしたはずだ。ただ、目の前にいる彼女だけは今ひとつ記憶に残っていない。

「申し訳ない。そうか。あの場所にいたのか」

「お茶も出したんだけど」

「霧島さん？」

おそるおそるといった風に水野さんが霧島さんの顔を覗き込んだ。

「青大附中のこと、話していいの？」

「いいわ。隠す気ないし」

きっぱり答え、ふわふわ少女霧島さんはようやく雰囲気合った口調に戻した。

「私、評議のひとりだったのよ。信じられないでしょうけど」

隣りでずっと心配そうに水野さんが見守っていた。

——覚えてなかった俺も悪かったが随分言い方がきつい女子だな。

二言三言話ただけで、即逃げ出したくなるタイプではある。

——水野さんもなぜこういう女子と仲良くしているんだろうか。

素朴な疑問が沸くがもちろんそれは先入観だ。外見だけでいえば見た感じが今にも光でとろけそうな天使風にも見える。しかしそれは語るまでの間。なんだろうかこの投げやりな態度は。そもそもなぜ、青大附中にいたにもかかわらず今着ている制服は可南女子高校のものなのだろう。水野さんと接点があったとすると恐らくそこなのだろうが。

——学校差別をするつもりはないが、なぜ。

一番謎なのはなぜ霧島さんが、青大附中から附高にエレベーター進学しなかったのだろうかということだが、さすがにいきなり尋ねるわけにはいかない。他の高校進学するにしても別の選択肢がなかったとは思えない。仮にも青大附中は青潟の優秀な生徒が集まる「はず」の学校なのだから。

——いや、待てよ。

乙彦は霧島さんに尋ねた。

「俺の勘違いだったら謝るが、青大附中二年にいる霧島は、弟さんか。生徒会の副会長をしていると聞くが。俺も何度か話をしたことがある。優秀な奴だなと思った」

霧島さんの表情が露骨に曇ったのがわかる。うつむいた。たぶんそのとおりだろう。もうひとつ尋ねてみた。

「それと、俺の同級生、あ、俺英語科なんだが、藤沖知ってるか」

「私の同期で生徒会長していた人でしょ。それが？」

全く興味なさげに交わされた。やはり、あいつが話していた女子のことだ。

——藤沖がかつて想っていたという、あの女子だ。

夏休み前に起きた中学女子たちを巡るいざこざに振り回された時、藤沖が乙彦とふたりきりの時にぼろりとかぼした言葉を覚えていた。

——何かの間違いで入学してきてしまい、苦労していた。

——誰よりも努力をしていたが、報われなかった。

——学校側の判断で格下にもほどがあるとされるくらい底辺高の可南女子高へ推薦で進学させられた。事実上の退学。

助けられなかった自分を責めていたゆえに、藤沖は同じ轍を踏まぬがゆえに渋谷名美子を全力でかばう決意をした。第三者からしたら顰蹙物の行動かもしれないがその思いを強くするきっかけとなったのが、今日の前で厳しい表情をしうつむいている女子なのか。

「ごめんね水野さん、私、今日用事思い出しちゃった。先に帰るね」

「え、霧島さん」

「いいの。また学校でおしゃべりしましょう」

女子に対しては優しい口調でいかにもお嬢様風に振る舞い、乙彦にも改めて丁寧に礼をした。「変なこと話してごめんなさい。青大附属の人たちには私のこと、あまり言わないでね。みな私のこと、苦手だと思ってた人がほとんどだから」

止めようとする水野さんを振り切るようにして霧島さんは背を向けた。乙彦が挨拶する間もなかった。

水野さんはしばらく立ったままでいた。そのあとゆっくりと腰掛けた。乙彦も続いた。

「ごめんなさい」

「いや、水野さんは謝ることなにもない」

「校門くぐった時に、霧島さんが男子に声かけられて」

言い訳するように水野さんは続けた。

「あれだけ可愛い人だからみんなの目を惹くのは当然だけど、その誘いの言葉が、その」
言葉を言いよどんだ。

「言いづらいなら聞かなくてもいいが」

「いいえ、関崎くんなら、わかってくれると思うわ」

水野さんは小さなため息をひとつつき、涙が少し混じった声でつぶやいた。

「霧島さんは真面目な人。何事にも一生懸命で、でも不器用だから報われることが少なくて。制服も全然着崩してないわ。でも、周囲の人は彼女を、遊び人扱いするの。今日もそう思われることが多くて、ここに辿りつく前に霧島さん、きっと傷ついていたんだと思うの。関崎くんなら、わかってくれると思うから」

本当は雅弘の手が空くまで水野さんと高校の状況について話をしたかったが、タイミング悪く静内と名倉のふたりが両手にわざわざお好み焼きとドーナツを持って帰ってきた。いったいどのくらいほっつき歩いていたんだろうとつっこみたいがどうせならもう少し散歩しててもよかったんじゃないかと思う。

「私、行かなくちゃ」

「水野さん」

「関崎くんありがとう。お先に。またね」

品よく頭を下げ小走りに水野さんが出て行ったのち、空きスペースを埋めるがごとく外部三人組がコンプリートされた。静内がお好み焼きを一パック乙彦に、

「ほら、お腹すいたでしょ」

テーブルにおいた。割り箸もセットだ。

「お前はどうした」

「お腹すいちゃったからその場で立ち食いしてた」

それと、とドーナツの箱もテーブルに並べた。

「これは俺たちが駄賃としていただく」

乙彦の許可も得ずにふたり箱に手を突っ込む。

「そうだね、そのくらいはご褒美もらっちゃってもいいか」

澄ました顔して静内もかぶりつく。本当にこいつらお好み焼きで腹満たしてきたんだろうかと疑いたくなるくらいがつがつ食っている。

「おとひっちゃん、あれ、さっきたんは？」

しばらく乙彦たちがいつもの外部三人組パターンで学祭の感想についてしゃべりまくっていた時、雅弘がひょいと顔を出した。

「お前当番だったんだろう」

子どもだちも結構積み木や引き車で遊んでいるようだったし、目を離すのはまずいだろう。乙彦も立ち上がり、

「悪い、お前らここで待っててもらえるか。友だちと話があるんだ」

パーティーション奥の遊び場スペースに進んだ。みな楽しげに子どもらしく遊んでいる。中にはお母さんらしき人に抱かされている子もいる。賑やかではある。雅弘の他に三人ほど当番がいて、時々遊び道具について説明をしている。ただちらと聞いた限りだと、

「あのな、雅弘、ひとついいか」

「どうしたのおとひっちゃん」

「子どもの親に使っている木材の種類を説いても無駄だっと思うが」

「ああ、そうだね。でもいいんだ」

相手の親子がかなりびくついているにもかかわらず、木々の木目についてのこだわりを語る男

子生徒をさらりと見て雅弘は、

「みな、ああやって怪我とかしないように見張ってるんだ。俺は遊んだだけだけどね」

「それが正しい」

「さっき俺が積み木の手伝いしたから今度は休んでいってことで」

雅弘は見た目ガキっぽく見えるが実は結構後輩になつかれるし子どもとも仲がいい。家の手伝いで書店のレジ打ちしている時もよく子どもたちに話しかけている姿を見かける。集まってきた幼児たちを集めて積み木を組んだりするのはちっとも珍しいことではない。

「なら少し話せるか」

「うん、そのつもりだけど、あそこにいるのはおとひっちゃんの友だち？」

そっとパーティションの透き間から覗き込み雅弘は尋ねた。

「ああ、学校ではいつもあのふたりとつるんでいる。外部入学生なんだ」

「へえそうなんだ。外部だと普通科？」

「そうだ。男子の方は名倉といってああぼーっとしているように見えて実は外部生の中で一番賢い。それと女子の方は」

雅弘が興味津々と言った風に身を乗り出してくるのがわかる。

「静内といって、あいつも大人しそうに見えるが実は郷土史マニアなんだ。今年の夏一緒に自由研究で『青潟の石碑地図』を作ったと言っただろう。静内の趣味だ」

「すごいなあ。おとひっちゃん」

感心したように雅弘は頷いた。同時に声を潜め、

「さっきたんと話、した？」

ここは控えめに尋ねた。

「ああ。今日学校祭だということを知っていたのか」

「うん、俺も学校祭のチケットさっきたんに送ったんだ。友だちと来たいって話してたから。けどまさかあの人だとは思わなかったな。向こうもびっくりしてたけど知らない振りしてたよ」

「やはりか」

雅弘を連れて青大附中に行ったことがあったし、やはり霧島さんとは直接面識があったのだろう。しかしどういう会話を交わしたのだろう。聞いてみると、

「相変わらずおっかない人だなんて印象だなあ。俺、あの時おとひっちゃんの刺身のつまとして参加したから直接話したわけじゃあないけど、でもなんとなく男子に対して手厳しいとかきんきんしてるというか、そんな感じしたよ」

「そうか」

はっきり言って苦手な女子であることは確かだった。雅弘もそのあたり趣味は一緒と見える。

「けど、俺もびっくりしたんだけどさ」

雅弘はまた外をちらっと見ながら続けた。

「なんであの人、青大附中から可南女子に行くことになったんだろうなあ」

「人にはいろいろ事情があるんだ。あまり突っ込むな」

事情はだいたい理解しているからこそ、部外者には秘める必要がある。それが片恋を抱えてい

た藤沖への礼儀でもある。

「それに、さっきたんああいう女子と友だちになるようなタイプじゃないのになあ。話してみて全然変わってなかったけどやっぱり友だちは違うんだろなあって思ったよ」

——水野さんは変わってないんだ。

乙彦も雅弘に習って積み木を使って手のこんだお城をこしらえてみたところ、周囲の子どもたちから拍手喝采を浴びた。その騒ぎに興味そそられたのかわからないが静内と名倉も覗き込み、大笑いされたのはおまけである。雅弘にふたりを簡単に紹介した後また今度家に遊びに行く約束をして帰ることにした。

「関崎、もう、思い切り子どもに戻ってたよね」

本当は吹奏楽コンサートにも向かうつもりだったが気がつけば開始時刻とつくの昔に過ぎていた。出店も展示もほとんど見るができなかったが雅弘と久々に語らうことができたからまあそれはよしとしよう。

静内と名倉が改めて積み木に燃えていた乙彦を呆れたようにみやった。

「私たちが覗きに行った時全然気づいてなかったよねえ」

「本当だ。だがあの時でよかっただろうな」

名倉が意味ありげにつぶやいた。

「俺たちが側にいたら集中力が途切れるとか言って激怒してただろうしな」

「うるさい、お前らもせっかくだったらもっと童心に帰ったらどうだ」

「もう私たち汚れた大人ですから」

「俺も同意」

なんだかもう、つっこむのもばかばかしい。つい乙彦がいない間ふたりがどんなおしゃべりに興じていたのとか、なんでドーナツ引換えに行くだけなのにあんなに時間がかかったのかとか聞きたいことはあったけれど、つい流しきってしまった。

合唱コンクールも一段落したところで、

「さあ次は学校祭だな」

月曜の朝、いつものように藤沖と話をしていて。片岡の家でも多少は話題となったのだが実際曖昧な情報しか飛び交っていない。三人とも高校の学校祭がどういう形で行われるのか自体がわからないというのもある。一応元青大附中学生徒会長だった藤沖としては多少なりとも交流があったようなのだが、

「今までは全く別ものとして行われていたはずなんだが、今年からだいぶ方向が変わるらしいとは聞いている。今までならば夏休み前から学校祭実行委員会を公募で集めてその連中が細かな割り振りをするはずなんだが」

「全くそういう情報なかったぞ」

乙彦の疑問に藤沖も首をひねった。

「そうなんだ。俺も不思議だったので結城先輩に聞いてみたところ特に学校祭実行委員を公募する予定はなく、もともと存在している委員会と部活動を活用する形で運営するんだそうだ。実際締めるのは生徒会で、若干足りない分を二年、三年から集めるということだ」

「それは間違っているような気がするな」

元水鳥中学生徒会副会長としてもそう思う。高校時代は留年でもしなければ三年間のみ。あまりにも短い。その間に経験を急いで積みねばならないというのに貴重な一年生の時期を無駄にするのはもったいなさすぎる。

乙彦の考えを訴えるも藤沖は首を振った。

「俺も関崎の意見には賛成なんだが、いかんせん現実には甘くないんだ。特にこの一年くらいは学校の方針が大幅に変わってきている印象もあるし、今までのびのび生徒の自主性を重んじるやり方から教師率いるやり方に切り替わっているようだしな」

「それを、許しているのか？」

乙彦が食い下がると、

「今までが特殊過ぎたんだ。そうとしか考えられない」

きわめて曖昧、玉虫色な答えしか帰ってこなかった。

宇津木野の病状は「安定した」以上の情報が一切入ってこなかった。

不安がる女子たち、特にピアニストコンビの疋田は毎日のように連絡を入れているらしいが、古川にあえて控えるようやんわり止められていると聞く。

昼休みに少しだけ古川から話を聞いた。

「いやね、あんたも知っての通り」

声をひそめる。病院でまずい中華丼を食った仲ではある。

「しばらく宇津木野さんのご家族意向もあって学校休ませようってことになったみたいなんだ。たぶんこのままだと休学かもね」

「古川もそれを心配していたな」

食堂で熱心に訴えていたのを思い出す。最も至極といった顔で頷く古川。

「たぶんそうなるんじゃないかってのはあったから水際で止めたかったというのはあったけどね。やはり親の価値観をそう簡単には変えられないよ。あとは、私らがいつか宇津木野さんが戻ってきた時にできるだけ自然に迎え入れられるようにしとかないとね」

「どうやってだ」

「まあ任せておきなさいよ」

自信ありげに古川は笑った。あくがなかった。

「私もそれなりに経験積んでるからね」

普通の授業が開始され、通常通りの学校生活が再開された。合唱コンクールに関わった一ヶ月というのは乙彦が想像していた以上に内容が濃く、自分にとってもクラスをまとめたという実感を抱けた時間でもあった。なによりも周囲の目が変わった。今までは単なる外部生に過ぎなかったのが、

「歌がやたらとうまい外部生」

に置き換わっていることが何よりもの違いかもしれない。書道の授業でも、

「関崎、悪いな、筆はマイクにならないんでな」

と全く笑えないギャグを先生から飛ばされる。さすがにそれはない。

まあ近いうちに麻生先生から許可をもらってカラオケで打ち上げを行う機会があれば嬉しいことは嬉しいが。

放課後に突入した。規律委員の乙彦としてはやはり行かねばならない夕方の週番。

——あと二ヶ月で週番も終わりか。

重要な役目なのはわかっているつもりなのだが、青大附高ならではの個性的展開が全く存在しなかった。立村から前もっていろいろ噂を聞いていたから入学前想像をたくましくし過ぎたきらいは確かにあるだろう。隠れ手芸部だとか、ファッションブック作りとか。

——違反カードを切るのは面倒だが仕事だしそれはいい。だがこちらにもあまりにも仕事なさすぎじゃないか。

職員玄関前に集合した。当番制なので全員ではない。一年は三名で南雲、清坂、そして乙彦のみ。二年、三年の先輩たちも各三名。合計九名。いつものように三年の先輩が週番ノートを開いて、

「本日は遅刻者が十名と非常に多いため規律委員会では合唱コンクール後の気の緩みを注意して行かねばなりません。明日朝のホームルームにて全員に周知をお願いします」

などと読み上げた。決まりきった文言のみで正直意味がなさすぎる。実際乙彦もこのような周知が出た時はすぐに伝えるようにはしているが、全くと言っていいほど手応えがない。遅刻防止のための取り組みにはもっと別のものが必要ではないかとすら思う。

「それとこれから一年三人には残ってもらいます。緊急に連絡したいことがあります」

「先輩、どんくらいかかります？」

南雲が笑顔満面で尋ねた。女子の先輩だったこともあるのだろう。とげなく答えた。

「大丈夫よ、十分で終わるから」

「俺これからバイトなんすよねえ。生活費かかってるんで」

「わかってる。じゃこれからすぐ説明するね。美里ちゃんも？」

名前で呼ぶところからして清坂は女子の先輩たちから意外と受けがよいらしい。こちらも笑顔で答えた。

「もちろんです。よろしくお願いします」

「美里ちゃんがいると頼りになるなあ。関崎くんは」

「俺も大丈夫です」

先輩の言うことは絶対だ。三人入れれば別に締められることもないだろう。まあバイトが詰まっている南雲には災難だがそのくらい我慢してほしい。乙彦が朝一番で汗だくになりダンボールの荷をほどいてきたのだ。しっかり売って貢献しろと言いたい。いつも店の奥さんとお茶飲んでだべっているだけが仕事ではないのだ。

「なんすかねえ」

「学校祭のことよ、きっと」

「すげえかったるいんですがどう思います清坂さん。今からファッションショー準備したら徹夜覚悟じゃんとか思いませんか？」

「南雲くんとしてはやりたかったかもしれないけど、時間がないのはきついよね」

元同級生同士の気兼ねないおしゃべりが聞こえる。乙彦はそのふたりについて歩いていた。集まるよう指示されたのは図書館だった。たぶん外部三人組のうちふたりはスタンバイしているだろう。静内があまり機嫌悪くしないといいのだが。なにせ清坂とかなりドンパチしたらしいとの噂が流れている。先日の青工学校祭でもさすがに愚痴れなかったようなので詳しいことは聞いていない。だが、

——委員会なんだ、しょうがない。

この一言で片付きそうな気もする。

「関崎くん、聞ってる？」

清坂が振り返り乙彦に問いかけた。ついでに南雲も横目でみやった。

「そもそも規律委員会でファッションショーを行うことが可能なのかと考えていたんだが」

「可能ですよん。みんなたとえば民族衣装を作ったりしてみんなで着たりして試してもらったりするのはありでしょうよ。それからそうだなあ、縫い物得意な奴結構規律委員の中にはたくさんいるから、そいつらのコレクションショーにするというのもありますが」

さらさら述べ立てる。清坂が口を添える。

「これ、中学の時南雲くんが学校祭で企画したことだもんね。規律委員会で」

——本当かよ。

得意げな南雲の表情からして、嘘ではないらしかった。

いつもなら座らない真ん中テーブルに陣取り、三人の一年規律委員は黙って先輩ふたりの話を待っていた。ちらっと見たところやはり外部仲間がふたりこちらを見ている。すぐ終わればいいのだが。

「別に隠すことじゃないからここで話すね」

最初に女子の先輩から切り出した。

「今年の学校祭のことだけど、噂でいろいろ聞いてるよね」

「はい」

すぐ答えたのは清坂だった。南雲は小さく頷くのみ。乙彦はとりあえず身動きせずにいる。

「学校の方針がいろいろ変わったみたいで、学校祭実行委員会が発足しないまま準備が始まっている今日この頃なんだけど、委員会に携わる人間にとってはそれなりに忙しくもあるのよね。そこで規律委員会なんだけど」

——やはり何か関わるのか。

そうならそれなりに言ってくれればいい。ファッションショーはともかくとしてもモデルには選ばれないだろうから裏方を喜んでやらせてもらう。そう乙彦が発言する前に女子の先輩が続けて説明してくれた。

「実は、学内の警備担当を規律委員会でやることに決定したの」

「ええ？ 警備っすか」

かなりうんざりした声で南雲がつぶやき伸びをした。

「南雲そう露骨につまんなそうな顔しなさんな。まあそうね。あんたは中学時代のように華々しい青滷ファッションコレクションでもやってモデルさん集めしたかったんだろうけどそうは問屋が下ろさないという現実もわかるよね」

「よりによって用心棒とききましたか」

「そう、その言葉いい！」

先輩たち……男女コンビだが……顔を見合わせて握りこぶしを作る。受けているようではある。

「用心棒。そうなのよ、用心棒なんだけどさすがにうちの学校で素浪人の格好してうろつくわけいけないじゃない。そこで相談なんだけど」

先輩のひとりが少し間を持たせるようにして囁いた。

「今来てもらった三人に、規律委員のアイドルユニットとして期間限定で活動してもらいたいよ。南雲、それなら満足でしょ」

「それは違うと思うんだけどなあ」

とぼけつつも南雲の口調には「やってられねえぜ」的要素が含まれていたことを乙彦は聴き逃さなかった。いったいなぜそんな意味不明な発想が出来るのか。規律委員会は比較的することもなく真面目一本やりのつまらない場所にしか思えなかったのだが。いきなり過ぎてついていけない。同じことは隣りの清坂も思っていたようで、目を丸くしたまま質問攻めにしている。

「ちょっと！ それ、何ですか！ 警備ならわかるけど先輩、なんで私と、南雲くんと、その関崎くんがアイドルユニットって！ いやです！ もうそんな恥ずかしいこと嫌です！」

「美里ちゃんそうすねないで。びっくりするのは当然だと思うし私もアイドルユニットって言い方が悪かったかもね」

笑いながらあっさり前言撤回したかと思いきや、

「言い換えると、規律委員会の存在を知らしめるシンボルとしての活動をしていただきたいんだ。これだとわかるかな」

男子委員の台詞にさらに頭の中が大混乱してきた。かろうじて問いかける。

「すみません。俺は青大附高の規律委員会でそういった柔らかい発想が存在していること自体初めて知りました。もう少し具体的な内容を教えてください」

「関崎くん、そうかそっか。君は外部生だもんね。じゃあ改めて関崎くんのために噛み砕いて説明するね」

——噛み砕きようがない内容だと思うんだが。

最初は絶対に断るつもりだった。

男子先輩の話から始まった。

「学校祭が生徒会主催の全委員会運営形式となるわけなんだが規律委員会にとってはある意味売り出し時だよな。ただいかんせん二年三年はクラスの展示や行事に参加しなくてはならない生徒が多いしさらに部活動最優先にせざるを得ない。吹奏楽や運動部全般はそうだろうね」

——お互い様だろう。それこそ交代制にすればいいだけの話だ。

「俺も中学時代は規律委員のはっちゃけた空気に馴染んでいたからなおのこと高校規律の実に地味なことに驚いたよ。でもそれは仕方ないんだ。クラス替えもあるからなかなか面子が落ち着かないし長期的な準備もできない。諦めてはいたんだ。ところがさ。はいバトンタッチ」

わざとらしく隣の女子先輩をタッチする真似をした。触らない。女子委員の先輩はすぐ受けた。

「バトンもらいました。で、続きね。面倒なところははしよるけど今回規律委員会でできれば警備を担当して、学祭の間三人くらいで組んで誰かあぶないことしてないかとか、いろいろ目配り気配りしてほしいんだけどはっきり言ってそれだけじゃあつまんないよね。そこで私たちも学校側と話をして、ひとつ提案したってこと」

「それがアイドルユニットですか。人選ミスじゃありませんか」

また南雲がうんざりしたような顔を見せる。

「別に振り付けしながら踊ってほしいとかそういう無謀な事は言わないから安心してよ南雲。あ、関崎くんは歌うんだったらやりたそうな顔してるね。残念だけどそっちの方はパスよ。ただこのメンバーを選んだ一番の決め手はね、これ。ほら」

女子先輩が鞆から分厚いアルバムを取り出した。

「これ、知らないでしょ。うちの学校の幻の制服」

全員で覗き見た。息飲みすぎてむせかけた。

「おいおい関崎どうした、そんなショック受けないでも」

「なんですか、この色。本当にこの色にしようとしていたんですか！」

南雲だけが落ち着いて眺めている。清坂も唇に指を当てつつ、

「すごい、この色、絶対目立ちますよね。女子ならこれでも可愛いと思えるけど、男子まで。それも学ランなんで本当にこんなパステルカラー使うつもりだったんですか」

「誰もが同じことを考えて結局、流れた。現在幻の制服は三着しか残っていない」

重々しく男子先輩が哀れな制服のその後を語った。

「けどまあ、これはこれでよいでしょう。ね、先輩。俺は好きですけどこの黄緑学ラン、悪いことはできませんがなかなかモテモテになりそうでいいじゃないですか」

南雲だけが満足してもしようがないだろうと思う。黄緑といっても抹茶のような淡い色合いならまだしも、蛍光色の緑ときたらこれはさすがに目立つ。どういう経緯でこの制服が選択肢に入ったのかむしろそちらの方が興味深い。

「この制服の情報は私も中学の頃から聞いていていつか確認したかったのよ。それで規律委員会としてただ警備するだけじゃなくて、これだけ目立つ制服がうちの学校のものならば着ることできそうな奴に着てもらおうかなと思ったわけ。私もこの前デザイナーだった方のお宅でいろいろ見せてもらったんだけど、だいたい南雲が着るのにちょうど良かったのと、関崎くんにもぜひ外部生代表としてこの謎めいた制服を纏うことに意味があるかなって思ったんだ。それと、ええと美里ちゃん、やっぱり美里ちゃんはこういう可愛い服、好きだよな？」

さっきまで戸惑った顔で首を振っていた清坂だが、何度か写真を眺めるうちに心替わりしたようである。しばらく考えたあと、こっくり頷いて、

「わかりました。すごい色だなって思うけどこういう機会ないですもんね。けどそれとアイドルユニットとどう関係あるんですか？」

もっともな疑問を投げかけた。乙彦も知りたいし、おそらく南雲もそこは確認したいところだろう。

「南雲も知りたいだろうけど、まあ学校の方針変更が一番のきっかけかな、だよな」

南雲のことを呼び捨てにするところが親しげだ。女子の先輩が説明に入った。

「君たちの世代が入学する前の青大附高は比較のおとなしい雰囲気だったのよ。中学とこうも違うのかってくらいの差があったのよ」

「それはなんで」

「まあなんというか、中学と違って毎年クラス替えがあるしそれに伴い委員会もメンバーがなかなか固定化しないしで面倒だったのは認める。でも一番の理由はやはり、現在二年の中に核となるリーダーがいなくてことなのよ」

「いないですかねえ。ああそっか」

思いついたように南雲が膝を打つ。

「あのお方にかなう奴はそうそういませんねえ。全くだ」

——誰だそれは。

問いたいのが隣の清坂もぴんと来ているような顔をしているのであえて飲み込む。男子先輩があとを引き継ぐ。

「そうなんだ。本条が結局青大附高に入学しなかったのが一番痛かった。実際中学時代は生徒会イコール傀儡組織で実質生徒の力を誇示できたのは評議委員会、その上で専門委員会が上手く裏で活動する地盤ができていた。俺も万年規律委員だったからそのあたりはわきまえているつもりだけどね」

「先輩さすがです」

元規律委員長だった南雲が気軽に話しかけるのも無理はない。長年の先輩で関係も良好と見た。

「俺たちの代では一応、結城が現評議委員長としてそれなりに影響力を持っているけれどもあまりあいつも目立ったことをするタイプではない。結果、真ん中あたりの二年連中がなあなあな行動をとり続けて結局のところ、教師たちに頭を押さえられるという繰り返しだった。規律委員会もそんな感じだったよな」

今語りかけてくれるふたりの先輩はどちらも委員長ではない。三年でありながら平扱いといっても差し支えない。それでもずいぶんと自分の携わる委員会の未来を考えて行動している様子が伝わってくる。

「そうそう。ところが突然風向きが変わって新しい方向に進み始めたわけだし、それならこれから何かやりましょうかというのが自然な成り行きよ」

「どこが自然なんでしょうか？」

清坂が不思議そうに尋ねた。

「私、中学時代はずっと評議でしたから規律委員会がどういう仕事しているのかだいたいわかっているつもりです。けど、高校に入ったらずっと週番とか違反カード切りとか、あまり学校の行事に積極的に関わろうとしないのが意外だなんて思ってたんです。でも、今の先輩たちのお話

だとそれって違うって思ってたってことですよ」

「その通り、美里ちゃん。そうなのよ」

女子先輩は清坂に笑いかけ、ついでに乙彦にも、

「今の話何がなんだか正直わからないでしょ、関崎くん」

「そのとおりです」

「正直すぎるね。でもそれならもっと細かく話すよ。今のところ規律委員会はたまに出てくる校則変更希望の検証とかそれに伴う先生方との和やかなバトルとかそういった程度の仕事しかしていないように思われてるわよね。けど、実は違う。もっといろんなことができる委員会なんだってことを外部にもっとアピールしたいと思っていたの。そうしたら新入生のみなさんがなんとまあ、輝かしき経歴をお持ちで」

「俺はともかく、あとはどんな」

南雲が乙彦にちらと目をやりおもしろげに聞き返した。

「いろいろ噂があったのよ。今の一年は面白い奴が多いからきっと学校内の停滞したムードも変わるのではないかって、かなり期待されてたの。実際それって本当でしょ？ この半年、目立ったことやらかすのは大抵一年ばかり。なんてったって合唱コンクールの最優秀賞を一年が獲るなんて今まで決して考えられなかったことなのよ」

「俺のことを褒めてもらえてるんだったら光栄っすね」

忘れていた。これでも南雲は一年C組だった。

「そこで考えたのが、今一番輝いている一年生に一働きしてもらって、規律委員会がやっていることをもっとアピールしてほしいのよ。単なる違反カード切りで嫌われるものではなくて、南雲、あんたのようにファッションにこだわるだけこだわってやろうと思ったらグラビア写真集も発行できてしまう。生徒のやりたいことをやれる雰囲気がある場所だということアピールしてほしいの。そしてできれば、次の世代にも伝えてほしいとそういうわけ」

——アピールする必要、あるのか。そんなに。

乙彦が首をひねっている間に南雲は元規律委員長の本領発揮でもって、先輩たちに交渉を開始し始めた。清坂も様子を伺っている。首のつつこみ場所を狙っているような目つきだ。

「中学と高校の委員会が別ものだってことは意外と後輩たちには伝わってないですからね。そんなもんっすよ。俺も最初当然のごとく規律に参加してみてもあまりのしらけっぷりに啞然としましたからねえ。俺の青春間違えたかとまじで頭抱えましたし」

「南雲の青春は別のところにあるからね」

きっぱり切り捨てる女子先輩。平伏しながらも南雲は続けて矢を放つ。

「このままだと俺たちがこれから入ってくるであろう後輩ちゃんたちに『悪いことは言わないから委員会よか部活で青春しろよ』なんて囁かれてしまうかもってこと、恐れたんじゃあないでしょうねえ」

「恐れたが悪いか」

無然として男子先輩も答える。しかし口元は笑っている。

「そんなことする気はないっすよ俺。ただ、確かにこのままだと俺はさっさと別の道を歩んだほうがいいのかなどは思ったりしました。自分の感性に正直なんで、俺も」

——俺に対する牽制か。

あまりいい気はしない。あとで何か言い返さねば。

「そこへいきなりアイドルユニットとか持ち出してどうするんだと思ったりもしましたが、要はあれでしょ、俺たちに幻の制服を着せておいて規律委員会とはこういうことやってるんだ、あんなこともこんなこともできますよと種まきしたいとか。俺はさすがにリーゼント決めてマイク握りしめてかっこつけて歌うのはパスしますが、それでもなんか新しいことを試せるんだっただけひ足を踏み入れたい気はします」

——こいつやる気なんだ。

本気で規律委員会のシンボルになるつもりなんだろうか。公平な目で見ればそれも正しいとは言えるが、乙彦としてはできれば避けたい。乙彦の思惑を無視して話はどんどん進んでいった。

「ただ、ひとつ条件がありますが、どうなんでしょ」

「条件？ 面白いこと言うわね南雲、言ってみなさい。物によっては叶えてあげる」

「いっすねえ。それなら単刀直入に申し上げます」

膝に両手を置き、背筋を伸ばし、にっこりして南雲は要求を伝えた。

「俺、後期の規律委員長狙ってるんですけど、そういうの、ありますか？」

南雲の発言に乙彦は思わずむせた。隣りで清坂も、

「いきなりどうしたの」

ぽっかんとした顔で南雲、および先輩ふたりを交互に眺めている。

「ちょっとちょっとなによいきなり言い出すのよ、南雲、先走るねえ」

軽やかにあしらおうとするのが見え見えの女子先輩と、

「今誰も二年いないからこうやって馬鹿言えるが場所わきましろよ」

さすがにたしなめる男子先輩。南雲も悪びれることなく、

「いや、俺も夏休み前からちょこっと考えてたんですよね。これでも俺は青大附中生粋の規律委員でしたから。やっぱ、高校に入ったらあれやろうこれやろうできなかったこともやっちゃおうとか夢を持っていたわけですよ。それがただ違反カード切ってるだけだとはっきり言ってだるい。そんなところがあったんです」

「顔に書いてたもんね、わかるわかる」

「それでいろいろと何しよっかなあとか、B組の東堂あたりと頭付き合わせて相談していたんですよ。あいつもまた生粋の保健委員だったのを無理やり規律に引きずり込んだのが俺なもんで。清坂さんにはご迷惑かけてます」

「いいわよ、私」

不穏なB組の男女規律委員、雰囲気はやはり感じ取っているらしい。南雲は続けた。

「そしたらですね、面白いことを小耳に挟みました。なんでもとある中学の生徒会においては本来立つべき生徒会長が立たなかったと。そこで何を考えたか次の世代では一年生が下克上しちまったと。最初はわーとなったものの結果としては先輩たちも可愛い生徒会長を面倒みるし、生徒会長はごろにゃんして無事任務を果たし、結局校史に残る素晴らしきかな生徒会と謳われたと。これつい最近の話ですが」

「南雲、ちょっと待て」

さすがにこれは乙彦の出番だろう。先輩を差し置いて失礼かもしれないがいくしかない。

「その話、どこから仕入れたんだ」

「え、そりゃ、まあいろいろと」

「立村あたりか？」

こいつと立村は親しい。出処としてはそこしか考えられない。追求した。

「その話は最近だと聞いたが、まさか半年前の話とは言わないだろうな」

「え、あらら、なんで知ってる？」

結構焦っているのが見え見えの南雲、乙彦を避けるように両手でバリアを張っている。まさか、「校史に残る素晴らしきかな生徒会」の関係者が隣りに座っているなんて思いもよらなかったというわけか。一応、一年前の水鳥中学交流会には乙彦も参加したので元規律委員長たる南雲が知らないわけがまずはないのではないかと思う。

清坂が救いの舟を出してくれた。

「あのね、南雲くん。それ私が話したことでしょ。この前規律の一年で集まって話をした時にちょこちょこっと話したことだけど、それがきっかけだったの？ ちょっとびっくりしちゃった」
——清坂がか？

乙彦と目が合い、気まずそうに清坂は口を尖らせたが、
「けど、悪口言ったわけじゃないからね。関崎くんのこと聞いてて当然でしょ。私も評議委員だったんだから、交流会出てたしね。水鳥中学の事情は知ってたよ」

「ああ、嘘じゃないことは認めるが」

いきなり一年前の水鳥中学生徒会の薄汚い部屋が脳裏に蘇る。生徒会室では南京錠を開けて全員集まり、乙彦の言い分に総田副会長がせせら笑い、会計の川上に鼻であしらわれ、見かねた内川生徒会長が一生懸命間を取り持つために時代劇の殺陣を真似てしらせせるといったなんともいえない環境ではあった。とにかく和やかな雰囲気でもまとまったことなど一度もない。断言してよい。とはいえ、無駄なエネルギーを使わず当時の水鳥中学教師たちと話を通し、とりあえずゆるい天然パーマは大目にみようと、柔らかい内容の文庫本も漫画でなければ持ち込み可にしようとかいろいろ校則を変えたりもした。誰が偉いのかとなると、残念ながら乙彦も自身もって俺だと言い切れないのが辛いところではある。

三年先輩ふたりは一年たちのわたわたりを見てにこやかに微笑んでいる。二年差は実に大河の流れで遮られている。

「南雲に聞きたいんだが、なぜうちの学校の生徒会が歴代に残る名生徒会なんだ？ 俺もその中にいたがとてだ内部はひどいもんだった。お世辞にも褒められはしない」

「ああ、それさ、聞いた聞いた。確か関崎の話が出てきた時だったよね、清坂さん」

呆れたい思いで清坂を見やると、申し訳なさそうに縮こまっている様子だった。

「たまたまよ、それたまたま！ けど、生徒会の話題が出てきたのがきっかけで、そういえば関崎くん交流会で来てくれたよねって話になって、あ、そういえばって」

「俺さあ、あの時喪中だったんで交流会出てなかったんだよね。残念なことに。だからその交流会の話はりっちゃんからいろいろ聞いてたけど実際詳しいことは清坂さんから初めて教えてもらったってこと。ほーすげえなあ、やるじゃんとは思ったよ。悪いけど今まで俺の関崎に対する印象は、バイト先で無遅刻無欠勤でしっかり朝の仕事片付けてくれてる、不真面目な俺にとっては比較対象としてしんどい相手でしかなくってさ」

笑いこけるのはやめてほしい。南雲をはじめ、先輩がた、ついでに清坂も笑っている。いつもの外部三人組席から鋭い視線が飛んでいるのを乙彦も気づいていないわけではないのだ。あとでどう言い訳すればいいんだか。

「んで、話戻します。その伝説たる生徒会の話聞いてから俺なりに考えたのは、別に一年が委員長やったっていいんでないかってことなんです。一学年下だと、まあこれ男女差別って言われそうですけども女子が生徒会長になっててみんなどっひゃあとびっくりがえりましたよ。もっとも彼女もなかなかのやり手なのでたぶん青大附中の伝説生徒会長になる可能性は大ですけどね。とにかく俺としては、常識を多少ひっくり返して伝説化されるのもありなんじゃないかなと、そ

う思ったわけなんです」

「伝説の規律委員長を狙うというわけか。いい度胸だな」

皮肉混じりに三年男子先輩が言う。言いたくもなる。乙彦は同情した。

「ただまあ、非常識だってことは承知してますので今のうちに仁義を切ったというわけですが、俺も単純に威張りたいから言い出したわけじゃないっすよ。せっかくこういう面白い機会頂いたんでここは久々に張り切りたいところです。その上でもしよければ俺に任せてもらえると嬉しいなあと思った次第です」

「どう、この自信家っぷり。なんなのねえ、南雲」

そう言いながらも結構うれしそうなのが女子先輩だった。女子は概ね南雲に対して甘いのが通例ではあるが、辛い味付け扱いの乙彦としてはあまり面白いものではない。反発したい気持ちもあるのだが、いかんせんここでどう受け止めればいいのかかわからない。清坂が南雲に問いかけた。

「それ、仕切るのは任せるけど私、歌ったり踊ったりするのは絶対いやよ。関崎くんだって嫌でしょ」

「俺もこの三人でデリンジャラスなユニット組むのはどうかと思ってるけどね」

非常に失礼な言葉を交わしたのち南雲は、

「やっぱ、俺たち規律委員ですから。規律委員らしいアピールを考えますよ。せっかくこんなパステルカラーの黄緑制服衣装着せてもらえるんですから外の警備やらいろいろと目立つところで動きますよ。で、最終的には気持ちよく学校祭を楽しんでもらえるようにサービスもたんといたしましょってとこでどうでしょうか」

先輩たちを唸らせつつも南雲ひとはへらへらと機嫌よく笑っていた。

——南雲、いったい何する気なんだ？

「わかりました。私も協力します」

観念したように清坂も頭を下げた。

「私も南雲くんの気合に負けました。踊ったり歌ったりするんでなければがんばって働きます。そうですよね、規律委員会がつまらないって本人が思っちゃったらおしまいですよ。あと一ヶ月で任期も終わっちゃいますし、私も全力尽くします」

「みっさとちゃん！ ありがとう！ やはりこういう馬鹿の側でうまく支えるのは美里ちゃんみたいなパワフル女子よね」

無理やり清坂の手を握り締め三年女子先輩は何度も振った。

取り残された感のある乙彦には三年男子先輩が穏やかに語りかけてきた。

「関崎くん、君が頼りだ。伝説を再度、作ってくれよな。俺も南雲の性格を知らないわけじゃないが、とてもでないが押さえられそうにないんでな」

「俺が何をすればいいんですか」

戸惑うが、とりあえず答えることにした。

「とりあえず、歌えと言われればそれなりに歌います」

——水鳥中学生徒会が伝説になっていたのか！ 内川に電話して教えてやるとするか。あいつも来年受験だよな。そろそろ改選も近いしな。

内川が生徒会で振り回されつつも頑張った姿を、他校のちゃらちゃら野郎が噂に聞いてやる気出したという話は、十分誇りに思っている。景気づけにコロツケご馳走しながら語ってやりたかった。

南雲のやる気半端なし、で特に乙彦も手伝うことはないとのこと。

「とりあえず俺が全部準備しとくんで、また次の委員会時にでもよろしく！」

それだけで終わってしまった。清坂もさすがに話にけりがついた段階ですぐに、

「じゃあ私も用事あるし、お先に！」

さっさと帰ってしまった。仲間ふたりも残念ながらしびれ切らしたのかいつのまにか姿を消している。ひとまず乙彦がすべきことは、

——伝説の生徒会長。

と銘打たれた内川に電話して、褒め称えてやることくらいだった。

家についてからすぐに内川宅へ電話をかけた。水鳥中学三年、最後の学祭、きっと燃えているはずだ。忙しいんじゃないかと思いきや、

「関崎先輩、うわあ超うれしいです！ 今度先輩うちに遊びに行っていていいですか！」

ありきたりながらも嬉しいことを言うてる。

「どうしたんだ。学祭死ぬほど忙しいだろう」

「そうでもないんですが関崎先輩しかできない相談があるんで」

奴にしては珍しい。もともと内川は頼りなさそうに見えるがすべきことはしっかりするし意外と芯も強い。乙彦が内川を知るきっかけとなったのは、小学校時代もっとも足が遅いくせに一番熱心に練習をしている姿を見かけたことだった。当時から長距離ランナーとしてそれなりに評価の高かった乙彦がおせっかいながらアドバイスをしてから妙に懐かれてしまい現在に至るというわけだ。

「俺で役立つのならなんでも聞くがいつがいい」

「来週の土曜日、どうですか」

本当に学祭大丈夫なんだろうか。去年の今頃は乙彦も受験勉強一直線だったもののそれなりに最後の学祭へ全力投球していたはずだ。急ぎの事情であることは確かなのだろう。

「わかった、それなら来週うちに来い！」

その間にも規律委員会内で学祭警備に関する話し合いは南雲ひとりで進められていた。東堂も事情を知っているようだがなんとなく乙彦に割り込ませたくない雰囲気がありありと感じられたためあえてノーコメントを通して。乙彦以外にも清坂をはじめ他女子たちにも詳しい話はしないように口止めされてしまったのには驚いたが、東堂曰く、

「なぐつちに任せとけば悪いことにはならないんじゃないじゃねえ？」

なんとなくみなそういう雰囲気らしい。面倒なことではある。

——まあいいか。規律委員会も今回でたぶん最後だろう。

藤沖に言われた通り、恐らく乙彦が規律委員に関わるのは学校祭が終わるまでだろう。それまではアイドルユニットだか宣伝チームだかわからないがとりあえずすべきことはする。だが南雲の言動などを観察している限り、

——もうこれから先、こいつが委員長やっているグループで関わりあうのはごめん被りたい。そう結論が出ている。願わくば無事に藤沖が応援団をまとめあげ順調に評議委員推薦されることを願うのみだ。評議になれば今度は静内もいるし相棒役はよっぽどのことがない限り古川だろう。なんとかかなりそうな気はする。

待ちに待った土曜日、乙彦は外部ふたりに事情説明の上急いで家に戻った。

可愛い後輩のためだ。母にもその旨伝え、今日は兄貴も弟も遊びに出て行っていることを確認の上自分の部屋へあげることにした。内川から前もって連絡があり、昼飯を食べてからくるとの連絡があったそうだ。

「内川くんもえらくなつたわねえ。生徒会長でがんばってるってねえ。おとひっちゃんのこと大好きだったわよねえ」

「昔からだ。じゃあ母さん、食うものうちになればコロケまとめて買って来る」

「あるわよ失礼だねえ。そこまでうちも貧乏じゃないんだからね」

乙彦のどけちぶりを知っている母は、冷凍食品の肉まんを四つほど蒸し器に入れて火をつけた。

「しっかり食べてもらわなくちゃ困りますよ、中学生男子はねえ」

しばらく乙彦も部屋を片付けたりなんなりしていたところへ、ようやく内川が現れた。乙彦が階段から下りるまでもなく、すぐに母の案内で部屋にやってきた。

「関崎先輩！ お久しぶりです。あの、この前電話ありがとうございました！」

やはり後輩。きっちり正座して両手をついて一礼。時代劇魂染み付いている所作である。

「まあ礼儀正しいわねえいつも。内川くん、これから肉まん用意するから待っててね」

「あ、嬉しいです！」

目を露骨に輝かせる。ひよろひよろしたその姿、ろくに飯食べてないんじゃないかと心配になりそうだ。肉まんを持った皿と温かい麦茶が運ばれてくるのを待ち、乙彦は問いかけを始めることにした。

「学校祭なんだが、どうなんだ。来週だったよな」

「はい！ 準備万端です！ うちの生徒会はみな自分でどんどん進めてくれてるんで俺がいなくてもすっごくうまくいってるんです」

——なんだちっとも不満なんてなさそうじゃないか。

乙彦たちの代が去ったあと、内川が名実ともにトップとなりその上でやりやすくなったところもきっとあるのだろう。先輩の立場からしたらまだ危なっかしいところもあって口出ししたくもなるのだが、総田に力づくで止められていた。

「やることとしてはフォークダンス三年連続でやりますし、あと座談会、あれも最近先生たちが盛り上がってて校則みたいな堅苦しい内容じゃなくて、新しいイベント作りの参考にするためのワークショップみたいなのをやろうかって盛り上がってるんです！」

「なんだそのワークショップというのは」

初めて聞く。詳しく教えてほしい。内川が続けた。

「うちの中学あまりイベントらしきものが少なくて盛り上がり欠けてるので、どうせだったらみんなが盛り上がることもやりたいとか、そういう話になってて。演劇発表だとクラスだけで面白くないんで、よく役者さんがやってるような即興劇みたいなのを体育館使ってわーっとやったら面白いんじゃないかなあって」

全くよくわからない。一通りの流れで理解したのは内川が時代劇に限らず演劇に対してかなり興味津々ということくらいだった。水鳥中学には演劇部がない。こういう奴こそ本来であれば青大附中の評議委員会に入ってビデオ演劇に情熱燃やすべきだったんじゃないかと乙彦は思う。

まあどちらにせよ、内川ががんばっていることだけは伝わってきた。南雲の語る「伝説の生徒会長」というのもまんざら外れていないわけではない。

「この前電話でも話したけどな」

乙彦は話を少しだけ戻した。

「うちの学校で、最近水鳥中学生会の話題がいい意味で出てくるようになったんだ」

「それ、まじでびっくりしました！ 関崎先輩、俺今でも信じられません！」

興奮気味に、それでも正座を崩さず内川は両手を震わせる。

「だって、青大附高ですよ？ あの、超エリート集団の、あの青大附高ですよ？ 俺も先輩たちに連れてってもらって交流会参加しましたが、あの人たちなんかみんなすごくないですか？ 半分以上俺、あの人たちが同い年かひとつかふたつ上ってことが信じられなかったし、いや一年下の人だってもう、すごすぎてついてけませんでした」

ショックが大きいのはお互い様だ。

「あの学校は独特の文化があるからな。動揺するのも無理はない。だが実際接してみるとみんないい奴だ。親の職業や生まれ育ちなんぞ関係ないということがよくわかる」

「そうですか、俺、あんなすごい人たちの前で先輩みたいに普通に友だちできるの信じられないです」

内川の場合はそれほど青大附属の連中と接したことがあるわけではない。仕方のないところもある。乙彦も立村とやり取りするまで青大附属に合格した奴らは別の世界の人間だと思っていたところもある。いつかそんなことないと証明するために、誰か友だちを紹介して一緒に学食で食うのもいいかもしれない。とりあえず藤沖よりも片岡の方が話、合いそうな気がなんとなくする。

「で、結局のところお前の相談ってなんなんだ？」

ふかふかの肉まんをお互いに平らげた後、乙彦は問いかけた。

「あの、先輩。青大附高目指すって今からでも間に合いますか？」

思い切り熱い麦茶を吹きそうになった。

——内川、何考えてるんだ？ もう中学三年十月だぞ？ とっくに志望校決めておかないと無理な時期だろうが！

内川の成績はそういう方ではない。二年前乙彦が内川を生徒会長に担ぎ出した時、周囲がまゆを潜めたのもそのあたりに原因がある。詳しい順位は聞いたことがないが、国語と社会の歴史だけやたらと勉強する代わり他の授業はほとんど寝ているかぼーっとしているかのどちらか。歴史といっても興味は日本史のしかも毎年テレビの時代劇で放映されている時代のみと偏りすぎている。人それぞれだし成績の良し悪しが人間性を作るなんてふざけたこと思ったこともない。時代劇大好き生徒会長、それでもいいじゃないかと思う。

だがしかし。それが受験と関わってくると全く話は変わってくる。

なぜそんな血迷ったことを思いついたのか、尋問しなくてはならない内容だ。

「内川、今俺が聞き間違えたのであれば訂正してほしいんだが」

前置きして確認した。真正面に正座してじっと内川の顔を観察した。

「お前、青大附高受けるとか言わなかったよな？」

「言いました」

「まじか」

またこっくり、真正面から頷く内川だがさすがに自分の口走った内容が受け入れられるとは思っていないようだ。ばつの悪そうな顔をしている。

「そう言われると思ってました」

「承知しているなら理由を聞こう」

まずよっぽどのことがない限りこいつが自分の成績を棚に上げて青大附高を受験しようという発想自体思い浮かばないはずだ。この数年ほど水鳥中学で青大附高を受験した生徒はあまりいないし過去三年間ではひとりも合格していないはずだ。水鳥出身の先輩が青大附高にいない現実がすべてを物語っている。

「俺も、そんな受かるなんておこがましいこと考えてないんですが、それでも」

「早く理由を言えよ」

促すと覚悟を決めたように両手を膝に置き握り締めた。気合を入れているのだろう。

「学校の先生たちや周りの大人たちが、とにかく、受けるだけでも受けてくれって」

「なんだそれは」

言っている意味がわからない。腕を組んで首をひねってみる。

「受けるって受検料がかかる。ただではない」

「それは気にするなと言われました」

「先生方にか」

受験料払うのは親だし乙彦が受けた時だって五千円くらいかかったはずだ。馬鹿にはならない。

「それより、水鳥中学の生徒会長が青大附高を受験するという行為が大切なんだってことを言われちゃいました」

「なんだそれ」

別に生徒会長になったからといって無理に青大附高を受ける意味なんてない。乙彦が受験したのも中学受験でしくじったことへのリベンジといったところが大きい。また、自分で言うのもなんだが小学校の頃から勉強はそれなりにできた。その下地があって中学で学年トップを保ってきたわけだからいきなり思い立って受験しようと思ったわけでもない。

内川は困ったように頭を掻きながら、

「俺も、とってもじゃないけど受かるわけないって最初は言いました。けど、いろいろな人から、関崎先輩が受かったんだからお前にもあの学校合っているはずだとか言われてしまって。あ、それもそうかなと思って」

「俺が受かったからなんでお前向きの学校だと思うんだ？」

だんだん内川の周りには連中の発想について行けなくなりつつある。なぜ乙彦が進学したから内川に向いているという言い方をする必要あるのだろう。確かに乙彦は昔から内川を本当の意味で弟分として可愛がった。雅弘と違うのは実際年齢が離れているといった点だが。雅弘と比べるとあまりにもお人好しですぐ騙されるんじゃないかとも思っていたが実際生徒会長やらせると結構人を動かすのがうまい。頭が切れるとかそういう意味ではなく単に、頼り無さ過ぎて誰かがなんとかしないといけないと動き出し、丸く収まるというタイプだ。

今回の受験話にしても、内川自身が発想したわけではなさそうだ。南雲曰く「伝説の生徒会長」と謳われるようになった内川にやる気を出させるために「どうだ、青大附高受けてみないか？」

お前を可愛がっていた関崎もあの学校通って青春謳歌してるぞ。きっとお前の性格にも合った学校だと思うぞ」くらいそそのかしたのかもしれない。

——いや、間違っははいない。内川が青大附高の校風に合いそうなのはよくわかっている。

一年前青大附中で行われた交流会において、評議委員会のイベント「ビデオ演劇」とかいう謎のドラマ作りについて最も食いついていたのは内川だった。あいつの頭の中ではいつかクラス対抗時代劇大会を企画したくてならないんじゃないかとは思っていたのだが。水鳥中学では絶対無理だろうし、もし青大附中にこいつが進学していたらきっとやりたい放題のことをやらかしていたんじゃないかと恐ろしくなる。

「率直に言う。内川、お前は考え直したほうが絶対にいい」

本人のためを思えばこそ、言わねばなるまい。乙彦は続けた。

「確かに青大附高はお前と相性が良さそうな気はする。学校全体がいろいろな行事に情熱的だし、クラスの人間もまあ一癖あるが結構いい奴ばかりだ。最近も合唱コンクールでいろいろあったが最後は感動した。水鳥中学のようなしらけた気分になることはほとんどない。まあ、多少金がかかりすぎるところもなくはないが俺の場合制服や体育着などは先輩たちから全部融通してもらっている。参考書とかもそうだ。中古でも中身は一緒だし不便はない」

「すごい、先輩」

何を感動した顔しているんだろう。本当は乙彦が止めねばならないことなのだ。続けねばならない。

「いい学校だし俺も今のところ満足している。お前が後輩に来てくれるんだったらそれは本当に嬉しい。だがよく考えてみろ。俺が青大附高合格に向けて勉強しだしたのは中学入る前からだ。」

厳密にいうと中学受験で不合格になったその次の瞬間からだ」

「はあ」

わかっていなさそうな顔で内川が答える。乙彦も力を込めて次につなげる。

「お前も知っての通り俺は水鳥中学生徒会のシーラカンスとして鬻ぎ買って来た。総田とは罵倒の繰り返しだしお前が入前の生徒会はまさに修羅場だったんだ。その中にあえて飛び込んで来てくれた内川、お前には俺も心から感謝しているしできれば夢を叶えてやりたいと思っているんだ。だが現実問題として、成績、今年の中間テストはどうだったんだ？」

「真ん中より下です」

さらりと答える。つまり、前と大差ないということか。

「青大附高は今年外部生を三十人取った。受験倍率は五倍だった」つまり百五十人受けにきたというわけだ」

「すごい倍率です。公立ってせいぜい一・五倍とかそんな感じだったような気がします」

「俺と自由研究やってた奴がふたりとも公立上がりだがやっぱりそれなりに成績は良かった。さらに言うなら俺は水鳥で成績がそれなりにいい方だったが今は英語科で半分より少し上くらいの順位を保っている。こういっちゃなんだがプライドはペしゃんこだ」

「関崎先輩、三年間成績一位でしたよね」

「そうだ。それでも学校に入ってみたらこの通りのざまだ。それでも青大附高は面白い奴が多いし視野が果てしなく広がるしなかなか面白い学校だ。後悔はしていないが、やはり勉強は大変だぞ。宿題の量が半端ではない。外部生は補習だってある。お前、そんな環境耐えられるか？ まあもっとも、お前の趣味に没頭はできるだろうな。図書館にはお前の好きそうな歴史小説がどっさり並んでいる。資料も大学経由で入手できる。すでに大学の教授から直接勉強を教えてもらっている奴もいる。ほら、お前も知ってるだろ、青大附中時代評議委員長だったあの立村だ」

諦めさせるために語っていたつもりだった。

「関崎先輩、そうなんですか。そういうところなんですか」

まさかとは思っていたが、

「迷ってたんですけど、やっぱり俺、受けてみます！」

いったいどこが奴の琴線に触れたのかわからないが、目を輝かせて、

「俺、成績よくないし今まで全然受けること考えてなかったんですけど、関崎先輩のお話聞いて、なんかむしょうに行きたくなっちゃったんです！ 先輩、ぜひアドバイスお願いします！」

まさに土下座して頭を下げられてしまったからにはどう返事をすればいいかわからない。

「やめろ内川、面を上げろ！ お前、正気か！」

——間に合うわけないだろ！ もうあと四ヶ月あるかないかだっただけなのに！

とにかく、無謀過ぎるということだけはわかった。

「よし、お前のやる気だけは買った。俺も出来るだけ協力する」

乙彦の思惑を越えて気合の入りすぎた内川を見送りつつ、さてどうするかと思案した。

——やる気だけで受験乗り切れるようじゃ俺もここまで苦労しじゃない。

水鳥中学の教師陣が一体何を血迷って内川を青大附高受験を駆り立てたのかが何度考えても不思議でならない。素直に考えれば生徒会長として活躍した内川の華麗なる花道として提案しただけなのかもしれないし、目標を高く掲げれば眠れる獅子たる内川……とは思えないが……も目覚めて本気出すかもしれないと発破かけたただけなのかもしれない。

いや、しかし、やはり謎だ。

確かに眠れる獅子は目覚めたかもしれない。乙彦が青大附高の現状を説明すればするほど舞い上がるあいつの表情が今も目に浮かぶ。本当は熱冷ましの意味でそうしたつもりだったのだが逆効果というのなんとも言えない。もうここで無理して諦めるよう説得するのは時間の浪費というものだ。突っ走るのを見守るしかない。

いやしかし、見守るだけではどうしようもない。

——青潟の高校受験ったら公立一校に私立一校だろ。どうするんだ滑り止め。

青大附高以外の私立は感覚として「滑り止め」という認識がある。乙彦の知る限りよっぽどの例外を除いては公立高校を第一志望にして私立は黙っていても合格するであろう学校を選ぶはずだ。ある意味初めての受験校で感覚を掴み本番に挑むといった雰囲気でもある。しかしこの調子でいくと内川はとっはじめから第一志望を受けることになる。まず合格するとは思えないしそうなると落ち込みを引きずりつつ公立受験に挑むことになる。これは厳しい。根性だけはもしかしたら持っているかもしれないがそれでもきつい。

——それにあいつ受験勉強そもそも始めているかが怪しいぞ。

水鳥中学学校祭が終わり生徒会改選がすすめば少しは余裕も出来るだろう。だが空いている時間をそのまま勉強に投入するだろうかと考えると疑問も残る。そこまで内川、勉強が好きとは思えない。乙彦の場合青大附高受験に備え立村には実に世話になった。頼みもしないのにわざわざ過去問題集やら学校で配られているという英語ヒアリングテープ……決して後暗いものではないと立村はしつこいくらい念を押していた……や、その他テスト問題なども含めて熱心に資料を送ってくれた。おかげで乙彦のモチベーションも上がったしどのくらいのレベルが入学までに必要かも把握できた。手を抜こうとも思わなかった。

内川には何もない。さて、さて、どうするか。

夕食後、乙彦はラジオで海外放送局の日本語放送を聞き流しつつクラス名簿を開いた。

クラス全員の住所と両親の名前および職業まで書いてある。ちなみに乙彦の場合は会社員のひ

とことのみ。わかりやすい。

——とりあえず俺のすることは、内川に現実を見つめさせることなんだがな。

もう受験を諦めさせようとは思わない。腹も決まった。

あそこまで本気ならばしかたない。手伝おう。

しかし何が出来るだろう？ 今のところ乙彦も全力で家庭教師してやりたいくらいなのだが実際は難しいだろう。学校祭も規律委員会絡みでいろいろありそうだし、終わったら終わったでたぶん評議委員に選ばれるだろう。そうするとさらに大車輪で働かなくてはならなさそうだし、本当の意味での労働たるみつや書店でのバイトも続く。とにかく忙しい。

男子名一番最後の名前を指先でつついてみる。

——本当は立村の力を借りたいところなんだが。

自分が受験した時にはあれだけ支えてくれた立村のことだ。乙彦が事情を話せばきっと協力してくれるだろう。自分が目立つことに対しては嫌がる性格だが陰で支えるような役割であればきっと手伝ってくれるだろう。本当は電話かけるつもりだった。

——いや、しかしなあ。立村のことを内川も一応は知ってるしな。やりずらいだろう。

華麗なる評議委員長時代を知る内川が立村の落ちぶれた……とは思わないが傍目にはそう見えてもしかたがない……姿を目にしていろいろ思うところがあるかもしれない。立村もさすがに惨めな思いしそうな気もする。

一行、上に進んで指先で押してみる。

——藤沖か、あいつはあいつで大喜びで乗ってきそうな気もするが。

乙彦の兄貴分という立場のあいつも、相談すれば頼まなくとも手を出してきそうだ。

それこそ勉強方法から受験に対する心構えからさらには人生に対する気合とか、延々と語り続ける姿が目には浮かんでくる。それはそれで友情の麗しき現れと思わなくはない。しかし受験する内川としてはどうだろう。萎縮してしまいかえって実力発揮できなくなってしまいたいような気もする。藤沖には悪いが奴は教師向きではないと思う。

教科書やノートの並んでいる棚を軽くたたいてみる。

——一番いいのは外部生に頼むことなんだろうがな。

外部三人組の力を借りるとするのが一番いいような気もした。実際それで進めてみようかとも思った。同じ外部の連中ならばどういう勉強をすればいかもコツが飲み込んでいるだろうし、受験日までのモチベーションの保ち方とかもアドバイスしてくれそうな気がする。しかしここにも落とし穴がある。成績からすると圧倒的に名倉だろうがあの朴訥な口調で説明されても脳天気な内川の頭には入りそうにない。静内はそもそも女子という段階で却下だ。男女差別ではない、単純に内川が怯えるのが目に見える。あいつがどれだけ川上寿々に震え上がっていたか思い出すだけでも哀れだ。

——帯に短し襷に長し。

みな、いい奴ばかりなのだ。よくわかる。乙彦が後輩のためにと頭を下げればきっと協力してくれるだろう。下心などなく内川のために力を尽くしてくれるだろう。しかし肝心の内川があまりにもアホすぎるとなると頼むのも気が退ける。自分の後輩だし、やはり乙彦が面倒みるしかないとも思うのだが、見てやれない時期に内川がどれだけぼおとした状態で過ごすか予想がつくだけになんとかして誰か助けがほしい。どうするか。

ふと、クラス名簿の上あたりに指が触れていた。まじまじと見た。

——片岡？

小学校時代女子たちの間で流行っていたこっくりさんとキューピットさまのように指が勝手に動いたらしい。片岡司の名前のところで指が止まっていた。

——片岡か。確かに。

どんぐり眼のあどけなさや乙彦にひっついて楽しそうに笑う表情。

のほほんとしたまま何も考えずに乙彦を見上げている内川と。

——似てるかもな、あいつら。

乙彦が見た限り、片岡は女子たちからの評価が救いようのないほど低いことを除きそれなりに成績もよく外見もまずくないように思える。顔立ちも面倒な事情さえなければきっと女子受けするであろう洋風的美男俳優を思わせるところがある。それでいてまだ子ども子どもしているのがアンバランスではあるけれども。外見だけではない、立村について英語順位のみ学年二番というのはかなり優秀なんじゃないだろうか。英語だけではなく他の授業もそれなりに点数を稼いでいる。認めたくないが乙彦より順位は上だ。

——片岡なら藤沖や名倉と違って、内川をびびらせないような気はするな。

藤沖のように説教かますこともないだろうし、立村のように過去の繋がりで遠慮しなくてはならなくなったりすることもないだろう。さらに言うなら、片岡があまり他の生徒たちとも強い繋がりがなくとも内川にとっては気楽かもしれない。何よりもあのふたりを並べてみて、どちらが先輩か見分けることの出来る奴はそういないだろう。

——結論、明日片岡と交渉だ。

肝心要の片岡の了承をもらわないと話が進まない。とりあえず結論が出たところで乙彦は頭を切り替えた。ラジオのダイヤルを回しはっきり聞こえつつある東欧の放送局を拾うことに専念した。

片岡を捕まえたのは放課後だった。藤沖や立村がいる中で話を切り出すのはやはり難しいことだし、余計な口出しをされたくはない。片岡も不快感を露骨に顔には出すけれどもはっきり拒否することは苦手なようだ。

「関崎、どうしたの」

帰りの廊下で捕まえて予定を聞いた。また車でのお迎えが待っているようであれば別の日を考
えねばならない。

「少しお前に相談したいことがあるんだ。できれば藤沖たち抜きで」

「俺に出来ることなのかな」

目を輝かせる。先日のラーメンパーティーでは片岡自身とゆっくり話ができなかった。厳密に
言うと藤沖に乗っ取られたようなものだった。できればふたりっきりで事情を説明したいとこ
ろだ。

「そうなんだ。片岡にしか頼めない内容なんだ。別に金を貸してくれとかそういう非合法なこと
ではない。その点は安心してくれ」

「それなら今日うちにまっすぐ来る？ 今日桂さんが迎えに来てるからうちで何か食べようよ
」

喜んでいるのがわかる。だがやはり桂さんが来ているとなると遠慮も出てくる。片岡の兄貴分
にあたる桂さんは面白い人だが、やはり大人である以上気も遣う。

「どこかハンバーガー屋でもいいんだが。それほど時間食わないんだ」

「だめなんだよ。うち、一回は家に戻らないといけないんだ。それから桂さんに許可もらって外
に行く分にはいいんだけどね」

「なんて面倒なんだおまえんところ」

「しょうがないんだよ。けどよかったらうちにおいでよ。昨日うちからお菓子の箱がいっぱい届
いたんだ。一緒に食べようよ。桂さんと食べても余るくらいだよ」

——片岡、やっぱり普通の家の奴じゃないんだな。

仕方がない。腹をくくって片岡のマンションへ向かうことにした。別に聞かれてまずいことを
しているわけではないのだから。乙彦の後輩を勉強面でなんとか助けてやってほしいという頼み
ごと程度、追っ払われるとは思えない。

「先日はメロンありがとうございました！ 家族で美味しくいただきました！」

片岡を迎えに来た車が学校裏雑木林前の砂利道にて待ち構えていた。いつぞやと一緒に。桂さ
んも運転席から降りて乙彦を認めると、朗らかに手を振った。

「関崎くんかあ、いやああのメロンうまかったら？ 俺もあの夕張メロンの出来はよかったよ
なあと思っていたんだが、いや、大満足か。俺も満足だ。これから一緒に遊ぶんだろ？ さあ乗
れ乗れ」

乙彦が説明するまでもなく桂さんはすぐ乙彦を後部座席に押し込んだ。もちろん片岡は助手

席だ。シートベルトを締めてすぐに乙彦の方に振り返った。

「けど何の相談なんだろ」

「あとで話す」

桂さんに聞かれてもまずいことではないのだが、やはり今すぐにはしゃべりたくない。乙彦の思いとは裏腹に桂さんも促す。

「どうした、うちの司に何か相談ごとでもあるのかなあ」

「いや、大したことじゃないです。悪いことでもないんですが、ええと」

素早く判断をくださねばなるまい。こうやってみると片岡の家はいろいろと面倒な事情があるようだ。放課後大抵の生徒なら遊んで歩きたいだろうし学食で油も売りたいところだろう。それも許されないで車で送り迎え、なかなかこれは厳しい家ではないだろうか。さらに片岡のあっけらかんとした性格からすると、隠し事はきっと難しいだろう。桂さんもすぐに探りに来ているときた。観念するしかない。

「実は、俺の後輩のことでたのみたいことがあるんだ」

「ほう、こいつでも頼りになりそうなのか？」

茶化す桂さんにすぐ答えた。片岡本人よりも桂さん側を納得させておいたほうがよさそうだ。

「はい、実は俺の後輩、あの、中学の生徒会で一緒だった奴なんです」

「生徒会？」

「はい、ええと俺、中学時代生徒会副会長やってました。それで今後輩が生徒会長やってて、そいつが実は青大附高受けることになってまして」

「優秀だねえ、それで」

「いや、優秀じゃないんで、それで片岡くんにとのみたいことってのはそれです」

桂さんの合いの手にしどろもろどになりつつも乙彦は説明を続けた。車はなだらかに進む。

「そいつは性格悪い奴じゃないんですが、どう考えても青大附高に合格出来る成績の持ち主じゃないんです。でも合格したいって気持ちはわかるし俺もできれば同じ中学の後輩がいてくれると嬉しいから、手助けしたいんです。けど」

「わかるなあ。関崎くんとしちややっぱり仲間欲しいよな」

しみじみ頷く桂さんの感慨は放置しておいた。片岡の反応は今のところ薄い。

「俺もできれば家庭教師替わりになりたいんですけど、お世辞にも成績がいいとは言えないし、あまり人に教えるの上手くないって自覚はあるんで、誰かに手伝ってもらえたらと思ってたところ、片岡くんだったら最適かなと」

「司があ？」

信じられないといったオーバーアクションで桂さんはハンドルを一瞬離しすぐ握り直した。冷や汗ものだ。

「おい司、お前人に教えるの得意か」

「やったことない」

ぶっきらぼうに片岡が答える。真正面を向いているので表情は何えない。

「そうか。だがなぜに関崎くんは司にその、なんだ、大切な後輩くんの教師役が適任だと思った

んだらう。それが俺には興味津々なんだ」

「はい。まず片岡くんは俺よりも遥かに成績がいいです。特に英語は学年二番です。俺には到底信じられないことです」

「英語は確かにがんばってるな。おい、聞ってるのか司？」

「聞ってるって」

やはり不機嫌そうな片岡をあやしつつ、桂さんがさらに乙彦へ質問する。

「何人か候補も考えたんですが、みな頭いいしいい奴ばかりなんですけど、後輩の性格を考えるとかえってびびってしまって落ち込みそうな気がしました」

「なるほど」

「俺も後輩のことよく知ってますけど、お世辞にも頭切れてバリバリというタイプじゃないです。一応、生徒会長としては実績を上げたとされてて学校からの受けもすごくいいです。けど、がりがり勉強するタイプじゃないし時間あったらきっとテレビの時代劇にかじりついているのが想像つくんで」

「時代劇マニアかい、そりゃあ楽しい」

腹から大笑いしている桂さん。手元のハンドルを離さないでくれているだけで安心した。

「そういうちょっと変わった奴なんで、きっと片岡くんとだったらほっとして受験勉強してくれるんじゃないかって気がしたんです」

「なるほどなるほど、よし、司、どうする。今関崎くんが話してくれたことをまとめるとだ」

別にまとめてもらわなくてもいいのだが片岡に桂さんは語りかけた。

「お前のほほんとした性格がどうも関崎の後輩くんとは相性が合いそうという話で、青大附高の受験勉強を手伝ってやってほしいとのお願いなんだが、どうだ、受けてみるか」

「わかんないよそんなの」

少し投げやりな言い方に、なんだかひっかかるものを感じる。

「まあまあ、少し聞いてやれよ。ほらもう着いた。まずはゆっくりふたりに話せ。まずはそれからだな」

桂さんが車を留め先に運転席から降りたあと、片岡はシートベルトを外しながら乙彦に囁いた。

「今の話、本当は俺、そうしたいんだ。けど」

「何かまずいのか？」

片岡は表情を曇らせた。

「きっと一度、桂さんがその関崎の後輩と顔を合わせないと許可が出ないような気がするんだ。あとで説明するよ」

——要するにちょっと面倒な手続きがいるということか。

片岡の過保護な兄貴分からすると、友だち関係も面接して許可がでてからということになるのだから。幸い乙彦は桂さんの友だち面接に合格したからこうやっていると、内川が通るかどうかとなると微妙なところだ。やはりふたりに話すべきだった。後悔しても実はもう遅いと

いう現実を、乙彦は認めたくなかった。

片岡の家で用意された豪華なケーキをかつ喰らいつつ乙彦は桂さんが席を外してくれるのを今か今かと待っていた。迎えの車の中である程度は説明したけれども、詳しい事情はできれば片岡本人にだけ説明したい。内川の名誉のこともある。

「さてとだ、関崎くんの提案についてだがどう思う、司」

「だから、桂さんは口を挟まなくたっていいって！」

不機嫌そうな顔で片岡も桂さんを追っ払おうとする。その気持ちはよくわかる。ふだんなら桂さんもそれなりに気を遣ってふたりきりにしてくれるはずなのだが今日は珍しく張り付いている。しかたない。乙彦も桂さんに尋ねることにした。

「俺のたのみたいことってのはさっき車で話した通りなんですけど何か説明不足のところありますか」

「いやない。分かりやすい説明に納得だ。だがなあ、こればかりは即答が難しいんだよ」

桂さんは頭を掻きつつ答えた。

「もちろん関崎くんの後輩くんともなればきっと性格としても折り紙つきだろうし信頼出来ると思いたいんだよ。だがなあ、司とはまだ顔を合わせたことないんだろ？」

「当たり前です」

そんなエスパーみたいなことを連想させないでほしい。

「じゃあ相性が合うかどうかだな。いや、決して野暮なこと言うわけじゃねえんだよ。ただ司の場合ガキだから友だちをまじで選ぶ性格なんですさ」

「そうなんですか」

改めて片岡の顔をのぞき込む。ほっぺたにクリームをえくぼくつけてかじりついている片岡は確かにガキっぽい。見かねて乙彦はポケットティッシュを一枚手渡した。

「お前、顔にクリームついてるぞ。ほらここ」

「え、どこ」

気づいてなかったようで顔を何度もティッシュでごしごしこする。桂さんが笑う。

「なんだこりゃ、お前こういうところでは思い切り気を抜いてるよなあ。ここにもしお嬢がいたらどうなってる？ もう顔タオルでごしごしやられてるぞ。小春ちゃんもいなくてよかったなあ」

「桂さん黙ってろよ！」

頬を真っ赤にして怒り出す片岡を今度は乙彦がなだめる羽目となる。

「そんな腹立てるな。俺はそんなことでもめたくて来たんじゃないんだ」

「あ、ごめん。けど」

片岡にはいろいろと女子の影がちらついていると藤沖から聞いたことがある。何度考えても乙彦には信じがたいのだがその話によるとすでに婚約者がいるのだという。その女子はかつて青大附中にいた生徒でいろいろあり学校を飛び出し現在は片岡の実家に居候している。将来は恐らく片岡の嫁になるであろうことは確定しているらしいとも。もっとも片岡自身はそのことについて一切触れようとはしない。乙彦もさすがに聞くべきではないと思っている。本人から話すまでは

待つべきだ。

「桂さん、失礼なこと聞くようで申し訳ないんですが」

思い切って乙彦は切り出した。いつまでたっても埒があきそうにないのと、以前からの疑問を一括で片付けたくなった。全部食うものは食った。コーヒーもうまい。てなわけで。

「どうして桂さんは、片岡のことをこうやって守ろうとするんですか。正直なところ俺の友だちでここまで細かいことチェックされる奴いなかったんで、驚いてます」

「そうか、やはりなあ」

たいして驚いた風でもなく、桂さんはあぐらを書き直し天井を見上げた。自分の分のケーキに改めてかぶりついた。もぐもぐ言いながら、

「まあなあ、俺もお前らふたりと同じ頃は友だち選んだりとか守られたりとかはねえもんなあ。関崎くんの言うのもごもつともだ。俺はこう見えても若い頃はぶいぶい言わせてたもんなんだぜ。ほら司、なに向こう見てる。ああそっか。俺はまだ若いからそこんとこ訂正ってとこなんだなあ」

「若いなんてこれっぽっちも思ってないから安心して」

結構鋭い切り返しをする片岡。思わず吹き出しそうになる。

「どっかの偉い先生になった奴も入れば、只今ムシヨ暮らしという奴もいる。まあ人生さまざまだよな。いろんな奴と出会えるからこそ青春もおもしろい。俺も思うよ。本心ではな」

「じゃあなんでいつも俺のことずっと張り付いてなくちゃいけないんだよ！」

フォークをぱしりとテーブルに置いて片岡がふくれっ面で言う。怒鳴りはしない。ただ不満が溜まっていたのだろうということだけは伝わってくる。

「今日だってそうだよ。関崎とほんとだったらもう少し詳しい話、外でしたかったよ。たとえばファーストフードとか、それから喫茶店とか。俺、ひとりでそういうところ行くことなんて全然ないんだよ。放課後いつも桂さんに連れられて一度はうちに戻って、それから許可もらって外へ、なんてなんだよ。これって籠の鳥って言うんだよな！」

「おいおい反抗期かよ。司、俺とB級グルメツアーするのそんなに嫌か」

「それとこれとは別だよ！ 今日関崎から詳しい事情聞いて、それから俺ひとりでどうするかを考えようって、そう思ってたのになんで桂さんが全部片付けようとするんだよ！」

——片岡、正しい。お前言いたいことはみな当たってるぞ。

きつと言い返す片岡にエールを心の中で送ってやる。まさに片岡の言い分はその通りで、学外はともかく生協の学生食堂で駄弁ることすら許されていないらしい。それでも今までは素直に言うこと聞いて帰っていたようだし、そちらのほうが乙彦にとっては不思議だ。藤沖経由で聞いた限り片岡は良いところのおぼっちゃまらしいのでそれなりの理由があるのだろうとは思っていたが、高校生男子としてあまりにも過保護過ぎではないかと思う。もっと反抗しても罰は当たらないはずだ。

「桂さん、俺も第三者的立場から見てそう思います。こういっただけなんです片岡はクラスのちょっとした集まりなども含めて、いつも参加できないことが多いんです。もちろん学校の外での買い食いが禁止だというのは俺も理解できますが学食もだめだというのは厳しすぎます。

それに、さっき言った俺の後輩のことも、本当であれば片岡自身に全部説明して、その上で桂さんに話すというのが通常じゃないかと思うんですが。俺は片岡の性格や後輩の気質なんかも考えて絶対上手くいくと思って、それで提案したんです」

「わかってる、関崎くん、そうなんだ。俺もわかってるから聞いてくれねえかな」

乙彦の訴えを桂さんはケーキをかみかみしながら聞きつつ、両手でまあまあと空気を押さえる真似をした。隣りで片岡が一瞬だけにやりと笑った。

「司をなんで俺がここまで過保護にしちまうかというのだ」

真面目な顔で膝を叩きつつ桂さんは語った。

「関崎くんの言う通り本当だったら好き勝手に気の合う者同士で盛り上がるのが一番だしそれは俺もよくわかる。それができないのには理由があって、今の司にはうっかりへまなことをやらかしたら最後、たくさんの人たちを路頭に迷わせる可能性があるってこった。司、それは前々から言ってるだろ。わかるよな」

片岡がしゅんとうなだれた。よくわからないが、片岡にはわかっているということなのだろう。乙彦は聞くしかない。

「そんな責任があるんですか」

「そうなんだ。実はあるんだよ」

桂さんは片岡の肩と頭をがしがし撫でた。振り払われている。

「もちろん俺も司を信頼してないわけじゃあねえ。だが、やっぱしまだまだ人生発展途上のお前らには見えねえものも多いんだ。友だちを選ぶのになんで俺がべったりくっついてるかそりゃ不思議だろうが、世の中にはお前自身じゃなくてお前の持っているものを狙っている奴もたくさんいるんだよ。信じられねえかもしれないけどな」

それにだ、と桂さんは続けた。

「司がもし、とんだ事件に巻き込まれたりした場合影響は本人だけじゃない、家族や友だち、それだけじゃない。司が全く知らない世界の人々にも被害を及ぼす可能性があるんだ。関崎くんもこれは自分のこととして認識してくれよ。やらかしたことによって責任を取るの自分とそれから親だけだと思っているかもしれない。だが世の中はそんな甘くない。全く関係してなかった親戚筋や、司の場合だと店で頑張ってるお兄さんお姉さんたちやその服を買ってくれたお客様たち、会社で電卓ばちばちやってる社員のみなさん、そのお子さんたち、とにかくどっさりこといるんだ。これもわかるよな、司」

片岡が目をごすった。

「自己責任と言えればそれまでだが、まだまだお前さんたちには荷が重たいよ。んでさっきの話に戻るんだがな。俺として一番ベストな方法は、その後輩くんをうちに呼んでとりあえずお見合いするってのはどうだろう。その上で場合によってはその後輩くんのうちに司を派遣するなりここに連れ込むなり、いろいろ選択肢もできる。まずは会ってから、それからにしようや。俺もその後輩くんから確認したいこともあるしなあ」

「何をですか」

まさか家系がどうだとか言い出さないだろうか。ひやりとした。あいつの家もいわゆるサラリーマン家庭でさしいって何かということはない。

桂さんは当然といった顔で答えた。

「ラーメンはとんこつかしょうゆか塩か、それともマニアックな味か。まずはそこを確認しとかねえとこれからお迎えするのにまずいだろ？」

桂さんの説明に頷けるところもあるのだが、やはり乙彦としては納得行かない。

おいしいケーキを食わせてもらい恐縮なのだが、なんとかして普通の雰囲気であったん片岡と内川を顔合わせしたいところだった。取り急ぎ桂さんの

「まあ関崎くんの言う通り受験も切羽詰まってるしなあ。じゃあどうだ、その子とりあえずうちに呼んだらどうだ？ 電話で呼べば迎えに行くぞ」

「いや、今週は絶対無理です。うちの中学なんですけど今週は学校祭なんです。あいつ一応生徒会長やってるし、死ぬほど忙しいはずですよ」

「そうかあ、確かに。いつだそれ」

桂さんにどんどん予定を組み込まれていくような気がする。

「木曜、金曜、土曜。この三日間で日曜は休みですよ」

「そうかあ。んで、日曜は休みなのか」

「撒収があるので多分、出ですよ」

乙彦の学祭記憶を思い出しつつ語る。生徒会は学校祭前後とにかく馬車馬のようにこき使われるわけだから、内川がその例外なわけがない。

「打ち上げとかはやらないのかよ」

「中学生は禁止ですよ」

「堅いなあ」

突然、片岡が「そうだ！」と両手を叩いた。

「どうした司」

「あのさ、俺が関崎のうちに遊びに行けばいいんだよね」

「ああ？」

いきなり何を言い出すかと思った。乙彦もまじまじと片岡の顔を覗き込んだ。いかにも最高の発想を思いついたと言わんばかりの鼻高々な表情。呆れてしまう。

「うちに遊びにくるのは歓迎するが」

桂さんが許すかがどうか問題だ。じっと桂さんの様子を伺う。

「その子、関崎と同じ中学だったんだよね。ってことは同じ学区だからうち、近くだよね。うち近くってことはすぐ遊びに来れるよね」

「まあ、確かに」

内川の家は乙彦宅とほど近い距離にある。

「生徒会長やってるんだったらしばらくは忙しいだろうし、俺が関崎の家に遊びに行ってそこで会ったら一番いいんじゃないのかな。それと、桂さん」

ひょいと桂さんに向き直り、

「学校から車で迎えにきてもらってそこから関崎と一緒に行ってもいいし、直接関崎のうちに連れてってもらってもいいし、場合によってはその子を連れてうちに来てもらってもいいし。どっ

ちでもいいんじゃないかなあ」

「そうか、司、そう来たか」

腕組みして考え込む桂さんを、片岡はじっと見据えた。絶対に譲りたくなさそうな目つきをしている。ここで援助射撃しないとまずいだろう。乙彦も続いた。

「片岡、ありがとう。あの、俺のうちはいつも母がいますし兄や弟と同じ部屋ですし、煙草すったり酒飲んだりシンナーやったりとかそういうことは一切しません。安心して下さい。一応うちの兄は青工の建築行っててたまにベンジンとか持ってきますがそれは授業で使用するものなので吸ったりしません」

念を押しておいたほうがいいかもしれないと思った。雅弘から聞いたのだが建築科の授業はノミやかんな、ベンジンなどいろいろな危険物が多いのだとか。だからこそみな使用する時はめっちゃくちゃ気を遣うのだという。兄もたぶんその辺りは理解しているだろう。

「マジな顔して何言い出すかと思ったらお前たちなあ」

途中で桂さんが爆笑し出したがそのわけが乙彦には全くわからなかった。とりあえずは話が通りそうで一安心だ。片岡と顔を見合わせてこっそりグータッチしておいた。

家に帰り内川宅へ電話をかけた。

「学祭準備中突然なんだが、俺の友だちでお前の受験勉強を手伝ってくれそうな奴を紹介したいんだ。学祭後お前時間あるか？」

いきなりの提案に内川も面食らったようだが、事情を大まかに説明した段階ですぐに納得してくれた。声を弾ませて、

——関崎先輩！　なんか、すごいですそれ！　先輩、すごくいい友だちがいるんですね。俺、想像つかないです。やっぱ、それが青大附高なんですか？

「いやそういうわけじゃないが」

口ごもる。青大附高の生徒だから親切というわけでもないと思う。いい奴はどここの学校にもいるはずだ。水鳥中学にもいるはずだ。

——けどその人どんな人なんですか。見知らぬ俺にそこまで親切にしてくれるなんて。

「まあ会ってみればわかる」

たぶん片岡と相性は合いそうな気がする。というよりも片岡以外の奴には内川の面倒を頼むわけにはいかない。改めて実感した。たぶん桂さんも内川を一目見ればおぼっちゃまに危害を及ぼす悪党とは思わないだろう。

少し間が空くが学祭後の日曜に改めて乙彦宅でお見合いさせることに決めて電話を切った。まずはひとまずそれからだ。

夕食の席で、今後の予定を家族へ早めに伝えておいた。片岡については「あのおいしい夕張メロンを一玉土産にくれた家の子」という認識しかなかった家族だが、少し詳しく家庭事情も説明したとたん父の顔が少し重たくなった。

「どうした父さん」

「おとひっちゃんはまだ子どもだったからなあ。知らないとしても当然か」

ひとりごちた後、父は片岡家の事情をかいつまんで説明してくれた。兄・弟も興味津々で耳を傾けていた。

——今から十五年ほど昔のこと、とある有名婦人服メーカーの創業者で当時は会長職に退いていた老夫婦が誘拐され、意識不明の状態で一週間後に発見された。犯人は今だに捕まっていないとのことですので既に時効も成立している。おそらくそのお宅のご息が過剰なほどに守られているのは再び同じ轍を踏むまいとする両親の意向なのではないか。

「まじ？ 誘拐？」

「すげえ、おとひっちゃんの友だちそんな金持ちなんか！」

「たぶん、あのメロンの大きさからしてそうだと思う」

控えめに乙彦は答えた。

「けど、本人にあのメロン以上の高級感を感じたことは一度もない」

兄と弟含めて三人で盛り上がる中、母がしみじみとつぶやいた。

「そのお坊ちゃんも窮屈な生活してるのだろうし親御さんも心配なのは当然だろうけど、せめてうちに来てくれる時はのびのびしてもらいましょう。ねえおとひっちゃん、うちは安全だってことをちゃんと伝えておいてちょうだいよ。誘拐犯なんてす通りしますよこんな貧乏なお宅なんてねえ」

笑い転げる家族団らんのひと時。今頃は桂さんとふたり顔を付き合わせてラーメンか焼肉かとかかくB級料理を食べているであろう片岡のことを思った。

約束した通り月曜の放課後、乙彦はあらゆる誘いを振り切って片岡と一緒に桂さん運転する黒い車に乗り込んだ。本当は規律委員会の「アイドルユニット」衣装が届いたので合わせたりしなくてはならなかったが、男の友情が最優先ということで周囲を納得させた。南雲も清坂も、事情を説明したところすぐに納得してくれた。

「そうかあ、後輩が受験なんだあ」

「そりゃー肌脱がねばならないよなあ」

「私たちが先輩にそう伝えとくから、今日はすぐに行ったほういいよ。けどなんで？」

清坂が不思議そうな顔をして尋ねたが答える必要なしと割り切ってすぐ教室を飛び出した。

「なんで、片岡くんに手伝ってもらおうとするのかなあ」

その片岡は桂さんにヘアブラシを渡されて仕方なく髪をとかしていた。

「なあ司、初対面が大事なんだぞ。男女問わずそれはそうだ」

「そんな大げさなことじゃないと思うけどなあ」

とぼけた口調で言い返しつつも、素直に言われたまま身繕いをする片岡を見ていると、

——夕張メロン以上の高級感があるか、だよな。

自分の家族の前とはいえ結構失礼なことを口走ったことを反省してしまう。今日は桂さんも片岡の身支度には目を光らせたらしく、ハンカチティッシュから新しい靴から何から全て傷ひとつない格好に整えてくれている。

——そんなにめかしこむとこじゃあねえだろ俺のうちは。

母にも兄弟にも、内川と片岡との初対面儀式であることは伝えてあるし、全員邪魔をしないという約束はしてもらっている。桂さんにはさすがに遠慮してもらおうということで承諾は得ている。部屋もそれなりにこの土日で片付けた。

「あの、そんな堅苦しいことやるわけじゃないんですが」

「いやいや、やっぱな、司にはこのくらい言っとかないとな」

「桂さん！」

「いいじゃねえか。まあ関崎くんの弟分ならきつとあったかい奴だ。いい友達こさえてこい」

あっという間に我が家の玄関前に到着した。

「それじゃ、きりのいいとこで俺も電話かけるからゆっくり遊んでろ」

「わかった」

「ありがとうございます」

乙彦が頭を下げると桂さんはにやつきつつ、

「こういう機会なかなかねえからな。じゃあよろしく」

——だからそんなに気合い入れる必要あるのか。

友だちを紹介するだけなのに桂さんといい片岡といい、一体なんなのだ。

しょっちゅう乙彦のいない間に部屋に上がり込んで待っている雅弘みたいな奴だっているというのに。車が走り去った後、乙彦は片岡の肩をたたいて促した。

「桂さんいつもああなのか」

「うん」

短く片岡も答え、前髪を軽く指でかき回した。

「友だち自分で選べないのか」

「そうでもない。けど一応桂さんが全部チェックする形になるんだ」

「それは寂しくないかよ」

「慣れてるから」

片岡がやたらと乙彦に懐いてくる理由がどこか透けて見える。どう考えても十六歳男子の日常とはかけ離れている。寄り道もできないどころか友だちまで管理されている。いわゆる「ご学友」のひとりとして選ばれた乙彦としては迷うことしきりだ。

何はともあれ家に招き入れた。きょろきょろ見回しながら、

「関崎、どこで寝てるの」

無邪気に聞いてきた。

「二階だ。兄貴と弟と三人で部屋分割してるんだ。今はカーテンで区切ってるからちゃんとプライバシーは守られている」

「テレビはどうしてるの」

「居間にしかねえよそんなの」

「観たい番組あったらどうする？ チャンネル争いとかしないのかなあ」

「する。が最近俺は脱落した」

BCLに目覚めてからはテレビよりもラジオのチューニングおよび受信報告書書きに没頭していると、まだクラスの奴に話したことはなかった。隠すつもりもない。いい機会だ、片岡にも教えてやろう。先週、東欧の放送局からベリーカードもらえたので見せびらかしてもいい。

「ただいま、友だち連れてきた」

玄関で靴を脱ぎながら家の奥に呼びかけた。

「おかえりおとひっちゃん、内川くん来てるわよ」

母の声が響く。すぐに現れ、まじまじと片岡を観察している。もちろん笑顔で迎え入れてはいるのだが、やはり片岡の佇まいに思い切り仰天しているのが伺える。

「ほら、この前話した片岡。同級生」

「ああら、おとひっちゃん、この前メロンをいただいたお宅の方でしょ。その節はありがとうね」

片岡が笑顔を浮かべた。社交辞令のありがとうくらい言うだろうと思っていたが甘かった。

「あのメロン美味しかったですか」

——開口一番これかよ！

乙彦も目の前の母も絶句している中、片岡は安心したように次の言葉を発した。

「メロンはもうないんですけど、今度おいしい栗がたくさん届くと思うので持ってきます。あ

の僕、関崎くんのこと大好きなのでよろしくお願いします」

——片岡、それはありがたいんだが、うちの母さんの前で言うことじゃないだろ！

「まあおとひっちゃん、よかったわね。ええと、片岡くんだったかしら、さあ、さあ上がって。内川くんもいい子だから仲良くしてね。さあさあ」

完全に母の言葉は大混乱している。少なくとも乙彦の友だちでこういう雰囲気の奴はいなかった。夏休み立村を家に連れてきた時もここまで戸惑ってはいなかった。立村の場合は社交辞令に長けているし片岡のように突拍子なことを口走ったりはしない。まかり間違っても「俺は関崎くんのこと大好きで」なんてことを口が裂けてもいうわけがない。

「ほら、片岡、靴脱げ」

「ありがとう」

きちんと靴を揃え脇に置く。後ろで母が、

「礼儀正しいわねえ。青大附属のお友だちはみな靴を揃えるのねえ」

と感心しているのだが乙彦からしたら水鳥中学の奴もそれはできると言いたい。階段を昇りながら片岡が質問してきた。

「関崎、友だち結構遊びにくるのか」

「そりゃあ来る。天気悪い日とかならしょっちゅうだ。遊ぶところないだろ」

「ふうん。じゃあ青大附属の奴も来るの？」

いたってさらりと片岡は問いかけてきた。

「来たことあるぞ、俺が学校でぶったおれて寝込んだ時に藤沖や古川たちが来たし、あと夏休みに立村も来たし」

「あいつも？」

片岡がきょとんとした顔でつぶやいた。そのあとすぐに、

「じゃあ、俺でもしかして、青大附属の奴って四人目？」

続けた。思わず「ああそうだぞ」と答えそうになったが飲み込んだ。言い直した。

「いや、五人目だ。お前の知らない奴がひとりいる」

「そうなんだ」

とりたてて追求はされなかった。

——清坂も、そういえば来たことがあったな。

特に無理して訂正する必要はないが嘘は言いたくない。

兄も弟もない部屋で乙彦はカーテンを開け放した。どうせあいつらが上がってきたらその時しきりを作ればいい。ちんまりとみたらし団子にかじりついていた内川がいきなりぴっと背を伸ばして立ち上がった。礼儀はわきまええいる。さすが自分の後輩だ。

「内川待ったか」

「いえ、あの、ごちそうさまです」

こいつも相応焦っているらしく舌が回ってない。あわてているのか最初に乙彦へぺこりとし、次に片岡と顔を合わせて、

「あ、は、初めまして」

すっかりどもってしまっている。隣りで片岡はきょとんとした顔をしていたが、改めて、
「関崎の後輩くん、ですか。初めまして。片岡といいます」

極めてしっかりと一礼をした。落ち着いている。桂さんに髪の毛を溶かすようどやされていた時の頼り無さなんぞどこかに捨ててしまったようだ。母にしても内川にしても、乙彦には見えない高貴なベールが片岡にはかかっているようだった。余計な幻などさておいて、乙彦は片岡に大きめのみたらし団子を指差した。内川一人分用意したようだが、まだ結構串が残っている。

「ほら、まず食え」

「ありがとう」

爽やかに微笑んで片岡は奥の席にまっすぐ進んで座った。ちゃんと正座している。

「いただきます」

乙彦も皿を覗き込む。内川もしょっちゅう乙彦の家に居座って遊んでいることが多いし、おやつの中には母手製の団子やケーキ、クッキーなどが用意されている。今日も早めに到着した内川のためにコインチョコ大の大きめな団子を作ってやったのだろう。片岡はためらうことなく手を伸ばしかじりつく……のだがやはり上品に見えるのは気のせいかな。しばし乙彦も鞆を机に置きブレザーとネクタイを外してあぐらをかき様子を伺った。内川がすっかり固まっているのが妙に笑える。

「何緊張してるんだ」

「あの、はいどうも」

「どうもじゃないだろ。ところで内川、学校祭はどうだった」

少し気楽にしてやりたい。伝説の水鳥中学生徒会長内川に尋ねる。

「はい、すごいですすごいです盛り上がりました！」

「すごいは一度でいいんだがそれほどこか。で、何が一番盛り上がったんだ？」

「やはり演劇ワークショップです！」

片岡が団子にかぶりつきながらこちらを見ているが無視した。まずは内川優先だ。

「たまたま青渦で演劇やっている人が父母の中において、ぜひ手伝いたいって言ってくれたんですよ。それでとんとん拍子に進んで最後はその場で即興劇やろうかってことになってやりました」

「何やったんだ」

「松の廊下です！」

目の前の片岡が思い切り吹き出している。当然だろう。笑ってよし。乙彦は遠慮なく爆笑させていただいた。それを褒め言葉と勘違いしたのか内川は語る語る。

「俺の頭の中には、青大附中の人たちが作ったビデオ演劇のテープがイメージとしてあったんです。青大附中はかなり時間と衣装代かけていろいろ作っているようなんですけども、今回はそこまでできないってことなんで即興で身振り手振りだけでやりました。忠臣蔵の松の廊下のくだりは全部暗記してますんで俺がやりたい放題やらせていただきました」

「内川、とことん生徒会長権限乱用しているな」

「そのくらい、役得としてもらってもいいかなあとと思ったんです。先輩まずかったですか」

——まずいと思うが、しかし。

乙彦はため息と一緒に答えた。

「俺がいたら絶対止めたと思うがもうやっちゃったんだからしょうがない」

これぞ、伝説の生徒会長だ。もう何も言うまい。最後に立村にも伝えておこう。あいつこそ青大附中評議委員会ビデオ演劇で浅野内匠頭と化し絶叫していた張本人だからだ。

飲み物も母から調達し、コーラを三人でわけあって飲みながら少しずう話をしていった。片岡の今までにない気品あるオーラにすっかり当てられていた内川だが、それなりに気を遣って話しかけてくる片岡に少しずつ心開いているようだった。

——しかし、よくぞ化けるな片岡。

クラスで見る片岡はお世辞にも気品ある王子なんて雰囲気などない。顔立ちが突然整形したかのように変貌したわけではないのだが、乙彦の家に足を踏み入れたとたんどことなく上品なおぼっちゃまのイメージを漂わせ始めている。とりたてて何か妙に気取っているわけではないし喋り方もそんなに変わったとは思えない。ただなんとなく、仕草が清潔なのだ。だらしないところがなぜか感じられない。学校で何かあると乙彦にあどけなく語りかけてくるがきっぱり仕草など桂さんの車内に置きっぱなしにしてきたに違いない。

「時代劇、好きなの？」

「はい、夕方四時から夜十時までの時代劇タイムはできるだけテレビの前にはいるようにしています。生徒会やっているのになかなかその時間帯までには戻れないんですが。早くビデオ買いたいです」

「もしよかったら、俺のうちに観る？」

追加されたみたらし団子を満足そうにかぶりつきながら……それでもやはり仕草は丁寧だ……片岡は内川に提案している。一応ここまでの流れとしてふたりの自己紹介と内川の受験勉強という目的までは確認し合っている。片岡も乙彦の見立て通り内川のことを気に入ったようでいろいろと相手にしゃべらせようとしている。

「え？ でも、それは」

思い切りびっくりする内川に、片岡はまた遮りつつ説明する。

「これから受験日まで一緒に勉強するとなると、きっとテレビ観るの大変だと思うんだ。俺のうち、ビデオ三台あるからそのうち一台セットして、終わったら観て、それからってやったほうがいいかもしれないよ」

「あ、ああ、それは、あのビデオ三台？」

「ラジカセの間違いじゃないだろうな」

乙彦も念を押した。

「違うよ。俺、英語の塾行ってる間野球の試合見られないからいつもビデオに予約録画しておくんだ。裏番組もあるからそれも保存しておくとなるとやっぱり二台は最低必要だよ」

信じがたいが、片岡に悪意や自慢の匂いはひとつもない。たぶん、そうなのだろう。恐らく残りの一台は桂さんがぶんどっているのだろう。しかしビデオデッキなんて乙彦の家にはない。大抵の家にはそんな何十万もする家電があるとは思えない。それも複数台、信じがたい。乙彦の思惑を知ってか知らずか、片岡はさらに提案を続ける。

「俺、思うんだけど、これから青大附高を受けるとなるとものすごく勉強しなくちゃいけないよ。俺そんなに成績良くなかったけどたまたま受かったよ。でも高校から入ってくる人は本当に頭いいんだ。関崎もすごいんだよ」

「もっとも俺は中学受験落ちたがな」

「そんなのどうでもいいよ。内川くんがもし真剣に青大附高受けたいんだったら、俺英語とかそのあたりならちょこっとは教えられると思うんだ。足りないところは関崎に手伝ってもらおうけど。でも、うちでやるとなるとやっぱりテレビとか観たくなるのわかるよ。だったらうちで録画して、勉強終わったら一緒に観ようよ。帰り遅くなっても大丈夫、送るから」

わくわく気分が溢れんばかりの片岡と、なにか崇拜するような眼差しの内川を見比べながら乙彦は、自分の判断がもしかしたら間違えていたのかもしれないと不安を感じた。相性が良すぎる。どうしたんだろう片岡は。このままだと内川は片岡を完璧なる青大附高の王子様として崇め奉りそうだ。現在英語科A組において女子たちからは白い目で見られている重たすぎる過去をもつ男子とは誰も思わない。ほりの深い顔立ちも、小柄だけでも敏捷な動きも、本来であれば十分女子たちを魅了して不思議のないものだった。

——まじかよ。こいつら、本気で兄弟分の杯、交わすかもしれないぞ。

意気投合したところで約三十分後に桂さんから電話がかかってきた。出たのは母ですぐ呼びに来た。また片岡の幻オーラを見てはなんともいえないため息をつき、乙彦には、

「今、お電話いただいたのだけどおとひっちゃん」

言い方からしてもう余所行き化している。片岡もみたらし団子を無事平らげ内川と楽しそうに兄弟の杯を交わしている。

「誰から」

「あの、お友だちのお兄さまかしら」

——桂さんだろ。

「みんなをお招きしたいとお申し出なのよ。あの片岡くん？」

声が上ずっている。何があったんだろう。片岡はまだ無駄な気品を垂れ流しつつ、

「兄が迎えに参りましたか」

絶対普段は使わないであろう言葉を発した。もし乙彦が学校にいれば即頭をがっしり押さえ込んでやりたいところなのだが、完全に空気を支配している片岡に何も言えはしない。

「あら、お兄様？」

「はい。兄同然なんです」

これまたあいまいな表現をする。母の頭は大混乱しているようだがかまっちゃいられない。乙彦は義兄弟と化したふたりに呼びかけた。

「これから片岡、お前のうちに行くのか」

「もちろんだよ！」

朗らかな笑顔で片岡は答え、内川にも当然のごとく、

「来てくれるよね」

語りかけた。完全に骨抜きとなった内川が逆らえるわけもなく、

「あの片岡先輩、俺、本当に行っていていいんですか」

「そのつもりで今日来たよ」

——嘘こけ！ お前一言もそんなこと言わなかつただろ！

桂さんがすべてを段取りつけてくれたとしか思えない。さてこれからが内川の正念場だ。じっくり桂さんは内川の内から外から観察するに違いない。

黒い車が玄関前で待っている。片岡はちらと後ろを一瞥した後、

「おいしいみたらし団子をご馳走さまでした！ また遊びに来てもいいですか？」

またもお坊ちゃま風を吹かせつつ笑顔を振りまいた。

「ええ、ぜひ。でもお口汚しでなかったかしら」

「いいえ、ものすごくおいしくいただきました」

嘘ではない。ぺろっと三本くらい食っていた。指で数えていると車から降りてきたきちんとしたスーツの男性……桂さんと気づかず……が愛想よく母に一礼した。すでに電話で話は終わって

いるらしく、乙彦へ母はささやいた。

「あんた、失礼ないようにしなさいよ」

「当たり前だろ」

「それと内川くんのお宅にも電話したほういいのかしらね」

「別にそれはいいんじゃないか」

いくらなんでもそりゃ過保護だ。やたらとお迎え派手かもしれないが、どうせ片岡の家についたらまたラーメンでも啜りながらぐだぐだ過ごすのが落ちだ。それもまた楽しいのだが関崎家に残した片岡の印象があまりにも違いすぎるのが気になる。たぶん止めたところで母は内川の母に電話をかけて片岡情報を流すだろう。内川の母さんも乙彦の両親と経済感覚が一緒だからきっと驚くだろう。自分の息子が「生徒会長」であることは知っていても青大附高にまで名前がとどろいてしまっている「伝説の生徒会長」であることには気づいていないだろう。

「じゃあ、行って来る」

「お夕飯いるかどうかだけ連絡してちょうだい」

——そこまで俺もずうずうしくないつもりだが。

車に乗り込み、片岡と内川がさっさと後ろ座席を陣どった。無理に入れば乙彦も入れないわけではなかったがなんとなく助手席に座る羽目となった。一通り内川もそつなく挨拶を交わし、緊張した面持ちのままちんまり座っているのがミラー越しによくわかる。

「関崎くんのお見立て通りだなあ」

しばらく楽しげにふたりのしゃべりあう様子に聞き入りながら桂さんは乙彦に語りかけた。タイミングよく信号待ちとなる。

「うちの司を気に入ってくれたようだなによりだよ、なあ内川くん」

「あ、はい！」

またこちこちに固まりつつも内川の語る話題は例によって時代劇ネタである。乙彦にはついていくのが骨だ。勧善懲悪タイプのものかそれとも裏世界を描いたシニカルなドラマがいいのか。熱く語り過ぎて片岡も退いているんじゃないかと心配になるがそうでもないらしい。にこにこ頷いている。学校ではまず観られない落ち着いた兄貴っぷりだ。

「時代劇だと衣装とかにもこだわりあるの」

「もちろんです！ 最近の民放テレビ時代劇は衣装に金をかけなさすぎます！ しかも時代考証めちゃくちゃですし俺はこの現実がとても悲しいです」

——時代考証考えられるほどお前歴史勉強してるのか？

突っ込みたいが隣りで笑いをこらえている桂さんに申し訳ないのでがまんしていた。片岡も車の中ですぐ猫かぶりをやめるんでないかと思っていたがさにあらず、相変わらずのお兄さん風情を漂わせている。このまま青大附高に連れて行ったらさぞ藤沖も立村も卒倒するに違いない。

「そっか、そこまで衣装にこだわりがあるとなあ。よっし、今度図書館ツアーでもやるか。内川くんにつき添ってだ、その衣装に関しての資料集めでもしてみるか」

「いいねそれ」

桂さんに甘ったれた言い方する片岡ではなかった。しっかり大人の対応している。いったいどうしたんだ片岡。乙彦の思惑に気づくことなく内川はすっかり片岡に心酔しきっているようだ。誤解を解いてやるべきかそれとも受験が終わり白黒はっきりつくまでこのまま夢見させてやるべきか。いや、どうせ一緒に勉強すればメッキもはがれることだろう。たいして心配することないか。

マンションについてからも内川の仰天ぶりは人目を引いた。

「すげえ高い！ 上から飛び降りたら大変ですよ」

「大丈夫だよ。飛び降りたり落としたりすることないし」

部屋の中に入ると今度は乙彦が驚いた。きれいに部屋が掃除されていて男くさい匂いなど一切しない。玄関になげっぱなしだった靴は全部整えられ数自体が三足程に減っている。それだけではない。台所の生ごみもなければ洗濯物の山も消えている。

「お前、いったいどれだけ掃除したんだ」

「当たり前だよ。せっかく来てくれるんだから」

「じゃあ俺や藤沖はなんなんだ」

「あ、ええとその」

口ごもる片岡の後頭部を思い切りはたいてやった。もちろん内川の夢を壊さぬように目立たぬところとするくらいの思いやりはあるつもりだ。桂さんが三人に向かいそれぞれ肩を叩きながらにっと笑った。

「さっき関崎くんのおっかさんには夕食ご馳走すると約束しておいたから安心して今日はうちで食ってけ。それと内川くんのおっかさんにも連絡してくれるという話だったから君ものんびりしてらっしゃい。まだ腹は」

「さっき関崎の家でおいしいみたらし団子いただいたから、もう少し経ってからでいいよ」

ぼかんとしている内川の前で、片岡は気品の香りを相変わらず漂わせつつ桂さんと遣り合っている。乙彦の観た限り内川のために演技しているとしか思えないのだが。つまり、

——どうしても内川の前ではお兄さんっぽく観られたいってわけか。

思えば片岡はクラスの典型的なみそっかす扱いされてきていた。乙彦も藤沖も、その他男子たちは片岡をどこか手間のかかる弟のように接してきたところがある。実際そうなのだからしょうがないのだが、片岡本人は複雑な気持ちを抱えていたのかもしれない。部活や委員会活動するわけでもないから「片岡先輩」と呼ばれることもほとんど経験ないだろう。男子のステータスは概ね女子受けで計られるものだがその辺りも片岡は最低値に近い。そんな中であつという間に片岡を兄貴分として慕い懐いてしまった内川が心変わりするのだけは避けたいに違いない。

肝心の勉強はどうなるのか気がかりだったので最初乙彦も一緒に内川の面倒を見ていた。中学英語の教科書と宿題を広げて、

「俺やっぱり無謀なのかなあ」

と、誰もが頷く言葉をつぶやいた内川に、

「だからまず教科書暗記しろ。まずはそこからだ！」

乙彦なりに激励したつもりだった。

「そうですよねえ。俺こんなレベルだったらついてけるわけじゃないですよ」

「だったら時間ないってことはわかってるだろう。今から何も考えずやるしかないだろ！ 気合だぞ乗り切るならそれしかないぞ！」

実際、誰もがそう思うしかない成績なのだからしょうがない。しばらく片岡も乙彦と内川のやり取りを黙って聞いていたがいきなり、

「関崎、今は少し黙っててくれないか」

きわめて冷静に言い放った。言われたことよりも、その声音に驚いた。

「いや、やはり受験となればまずいだろ」

「違う、このままだと内川くん萎縮してしまうよ」

片岡の部屋に連れて行かれ、野球選手のサイン色紙やポスターがちんまり飾られた壁に囲まれ、内川が集中力を失っているのはなんとなく分かる。片岡のやる気はわかるのだがやはりここは兄貴分であり公立中学における授業の現実を知る乙彦が助けを出すべきだと思うのだ。少し気合が足りないような気もする。望みが高すぎるからなおのこと。

それなりに説明したのだが片岡は持論を譲らない。

「俺、思うんだけど関崎は最初からやり方がわかっていたから突っ走れたんだよ。けど内川くんはそのやり方だと苦しいだけだと思う」

「それ以外方法あるのか」

「わかんないけど、あるよきっと。ね」

いきなり同意を求められ戸惑っている様子の内川だが、すっかり兄弟分の杯を交わした気分のままだ、否定するわけがない。こっくり頷いた。

「だから、申し訳ないんだけど関崎、これから三十分ふたりだけにしてほしいんだ」

「え？」

片岡の口調はいまだにおぼっちゃまのきりりとした言い方そのもの。

「勉強に集中したほうがいいと思うんだ。内川くん、そうだよね」

完全に骨抜きの内川は、乙彦に向かい申し訳なさそうにうな垂れている。こいつを誰が「伝説の生徒会長」と呼ぶというのだろう。今まで散々目をかけてやったというのにいきなり寝返りやがってばかやろうの一言くらいぶつけてやりたいがしかたない。「弟」には弱いのが昔から乙彦の性分だ。

「ああわかったよ。俺が帰ればいいんだろ、まったく、お邪魔虫で悪かったな」

「いや帰ったらだめだよ。勉強一段落したら一緒にラーメン食べようよ」

内川が「え、ラーメンですか？」と妙なところで反応する。今度は片岡もきっぱりと、「だめだよ、勉強最優先だから。一時間集中しよう」

たしなめるように内川を自分の勉強机に追いやった。追い出された乙彦の背に片岡の呼びかけが届く。

「野球のビデオとか雑誌あるから、よかったら好きなの読んでていいよ。観てもいいし」

どうやら桂さんも片岡とのやり取りをすべて盗み聞きしていたらしい。片岡の部屋から出てきたところで大げさなポーズで万歳ポーズを取って待ち構えていた。

「関崎くんよ、災難だったなあ」

「一時間、待っているとと言われてしまいました」

「じゃあ待ってるとするか。どうせラーメンだ。すぐに来る。さっきちらっと聞いたけど内川くんの好みはとんこつらしいね。にんにくたっぷり入っているのが好みらしい」

——あいついつの間にかそんなこと話してたのかよ！

内川も乙彦が想像した以上になじみが早いらしい。とりあえず桂さんも内川に関するそれなりの調査は終わっているようでたぶん「ご学友」としての合格点は出してもらえたのではと思う。

「あの、内川のことですけど」

念を押しておくことにした。裏切りやがったとはいえ可愛い後輩であることには変わらない。

「どうした」

「あいつは俺の後輩で時代劇マニアとかいう変わった奴ですけど、腹の中には何にもないいい男です。片岡くんとはきっといい友だちになれると信じてます」

「オーケーオーケー、そちらは大丈夫」

まあ座れ、とばかりに桂さんは乙彦をソファに座らせた。しっかり掃除されているので空気が気持ちいい。テレビのスイッチを入れてチャンネルを回し、再放送のテレビドラマをつけたままにした。あまり興味ないのだがせっかくなので観るふりをしようとする、

「関崎くん、じゃあせっかくだし俺とすこしホスト気分味わいますか」

全くイメージのわからない台詞で誘ってきた。

「まずは一杯、乾杯といきますか」

りんごジュースでシャンパン気分を味わった。

「ここだけの話なんだがな、クラスで司、どうなんだろうな、関崎くんや藤沖くんみたいな友だちもいるようで兄貴としてはほっとしてるんだがな、なかなか別の奴が来ないのはどうだろうと少し心配なわけなんだよ」

「片岡くん、友だちは俺たちだけですか」

意外だ。片岡は青大附中に三年間在学していたはずだ。

「いや、どうなんだろうなあ。うちに連れてくる奴はそういないぞ。俺ももっと連れ込め連れ込めって発破かけてるんだがな。それでもまあ、司の見る目は信頼できると思うぞ。関崎くん

はそうとう、片岡に気に入られたらしいからなあ。麻生先生からも太鼓判捺されているし、いい友だちでよかったよ」

やたらと褒められて照れくさいが、お礼を言う。

「ありがとうございます。今日、うちの母も片岡くんの態度が大人だと驚いてました」

「そっか。あいつもがんばったってことだな。あいつなりにいい先輩になろうと背伸びしまくってるところなんで、そこんところはどうか大目に見てくれると助かるよ」

——やはり桂さんが考えていたんだ。

乙彦はりんごジュースに口をつけた。するりとゼリーのように流れ込む。スーパーで買うジュースとは違うさっぱり感がある。

「俺もなあ、今回関崎くんの提案聞いて、これは司にとってのベルエポックだなこりゃとか思ったっつうわけだ。司はほら、なんつうか」

「弟扱いされやすい」

思ったことをそのまま言うと桂さんは握手を求めてきて、選挙活動中の代議士ばりに熱く握った。

「そうなんだよ。司はもともとあのまんまのガキなもんだから、ずっと坊や扱いされてきたんだよ。俺の知ってる限りかばわれる立場にいつも立たされて面白くなかったんだろなあ。それが今回、一種の家庭教師だよな。誰かを導くっつうかっこいい立場」

「いや、後輩はお世辞にも成績よくないです」

一応、真実は伝えておいたほうがいいような気がする。

「俺も思ったんだけどな。あいつ一人っ子なんだよ。兄弟いないんだよ。んで俺みたいなのに二十四時間監視されて両親から離れて育っているところがあるから、まあ普通じゃねえ。俺もそれなりに司のことかちゃまわしているつもりだけどジェネレーションギャップというのはなかなか埋められねえ。そうなるとうちの友だちってのが非常に大切になってくる。そろそろ司も甘ったれている時期から脱皮する必要に迫られてるんだろなあ。関崎くん、君んどこ兄弟何人？」

「三人です。真ん中です」

「そうか、やっぱり兄弟いるとこないだと違うもんだな」

しみじみと乙彦を眺めやりつつ桂さんは改めてつぶやいた。

「内川くんの受験が終わる頃の司は、まさに見ものだな。楽しみだよ。ありがとう、関崎くん」

桂さんとさしで話すのは楽しかった。片岡曰く「売れない漫画家がみかん箱ひっくり返して描いている姿」のイメージではあるがかなり頭の切れる人のような気がした。もし内川がとんでもない不良だったとしたらいったい桂さんはどう排除したのだろうかとか想像してみるが、なんとなく、

——あっさりラーメン作るの手伝わせて友だちに引き込んでるんじゃないか。

とすら思える。こういう人こそ学校の先生向きじゃないだろうか。

「ところでな、関崎くん」

桂さんは乙彦にラーメンのゆでるタイミングを指示しながら語りかけた。

「A組で英語が一番出来る子がいると聞いたんだがな。どんな奴だろうな」

「立村のことですか」

不意に立村の話題を持ち出され、ラーメンどんぶりを用意する手が震えた。立村に関して問われる時は決してポジティブな内容ではない。桂さんはなにげなく続けた。

「ああ、たぶんその子なんだが、司がやたらと意識しやがってな。どうしてもトップが獲れないっていつも悔しがってるんだ。どんな勉強してるのかねえと思ってな」

「あいつは天才です」

一言で言い切った。そうとしか説明しようがないし、もしこの場に立村本人がいても言葉に詰まるだけだろう。

「天才？ そうきたか。ほれ、そろそろ火を止めるか」

「あ、はい」

ほどよく湯だったところでコンロの火を止め、網で麺を掬い取る。

「立村はトータルの順位こそあまりよくないようですが英語だけはピカイチです。前本人から聞いたことがあります、英語以外の言語も一週間辞書と文法書とテープがあればなんとか使えるようになる」と聞いたことがあります」

「まじかいそれは」

「はい、俺もその現場見ました」

事実ではある。大学の授業で無理やりイタリア語の文法書とテープを渡されて一通り使えるようにするといった拷問なみのカリキュラムがあったようだが、立村は冷静にそれをこなしていた。イタリアオペラの歌詞を渡されて訳をその場で行うような内容と聞いたが、立村はすぐに「椿姫」の一説をすらすらと読み上げていたという。乙彦には全くよく理解できないが、そういう頭の回路を持っていることは事実だろう。

あつあつのラーメンにとんこつのだれをかけて、チャーシューも載せる。葱もたっぷり、にんにくも丸ごとたっぷり積んでいる。スタミナだけはつきそうだ。

「さあてと、運んでくか」

三十分後と言いながら結局一時間たっぷり部屋に籠っていたふたりは、山盛りラーメンに目を

輝かせ、両手を合わせていただきますした後すぐに飛びついた。

「お前ら本気でやってたんだな」

「当たり前だよ」

やはりいつもと違う上品さで片岡は答える。珍しいことに汁を飛ばさずに食べている。一方内川も最初は恐る恐る箸を取っていたが、一口食べたとたん呆然とし、

「こんなおいしいラーメン、俺、生まれて初めて食いました！」

興奮気味につぶやいた。満足する桂さんの表情が見ものだった。

「俺のオリジナルレシピが気に入ってくれたようでなによりだ。毎日いろいろ食い歩いている俺の舌を信用しろよ」

ぽかんとしている内川に片岡がこれまた上品に注釈を加える。

「桂さんはね、ラーメンや焼肉とか、そういう料理に一言ある人なんだ。味に疑いはないよ」

「すごいです、すごいです！」

まさに別世界を視界からも味覚からも感じ取ったのか、完全に内川はノックアウトされている。

「さ、内川くん、ラーメン伸びる前に食べちゃおうよ。それからさっきの続きやるよ」

——片岡、お前まだ勉強続けるのか！

絶句する乙彦を尻目に、内川も笑顔でこっくり頷いた。

「はい、片岡先輩ついていきます！」

「大丈夫だよ、受験間に合うから。俺も全力で応援するからね」

「片岡先輩！」

桂さんと顔を見合わせた乙彦の微妙な表情などこのふたりには関係ないようだった。いったいどういう魔法を使って内川のやる気を引き出したのか、乙彦が知りたいのはむしろそちらの方面である。

即、片岡の部屋に飛び込んでいった内川がどういう顔をして勉強していたのか想像する方が難しい。

「さてと、さっきの続きなんだがいいかなあ」

「はい。クラスのことですか」

あと一時間みっちり勉強している間、ふたたび桂さんとの「ホスト」トークが再開された。乙彦も望むところだった。この機会にできれば片岡に関する未知の部分解消したいところもある。

「俺な、一方的な司の言い分しかわからねえってところがあるんだ。だからこうやって関崎くんみたいな冷静な第三者的意見もちょくちょく聞きたいんだよ」

「告げ口はする気ないんですが、個人的意見ならいくらでも言います」

「助かるよ。んで、クラスで一番英語が出来る子の話なんだけどな」

ずいぶんと桂さんは立村の話に食いついてくる。

「そんなに片岡、話してるんですか」

声を潜める。

「まあな。別に司も自分でそれなりに勉強してるんだから人のことなんぞ気にするんじゃないねえって思うんだがな。トータルの成績では勝ってるんだったらそんな意識、しねえでもな」

桂さんはため息を吐いた。また片岡の部屋扉を見つめた。

「でも、この前の合唱コンクールでは片岡も言ってましたけどずいぶん立村のこと見直したようなこと言ってましたよ」

簡単に乙彦は合唱コンクールの経緯を説明した。すでに桂さんも把握しているようですんなり納得していた。

「人は相性いろいろあるから別に放っておいていいと俺は思います」

「うん、まあそうだな。んで、その立村って子は別に司のことをいじめたり無視したりしてるわけじゃねえんだろ？」

「当たり前です。立村は俺の友だちですが心底いい奴です。合唱コンクールの件でも分かるとおりに立村は弱い奴に対しては目一杯守ろうとしますし、その他いろいろな場面であいつのこと見ますがとにかくひたむきな奴なんです」

弁護しておいた。いったい片岡の奴、立村についてどんな悪口言っているんだか想像するだけでも恐ろしい。あとで釘刺しておいたほういいだろうか。これ以上誤解招く発言したら内川に本性ばらすとでも言ってやるか。

「じゃあなんでもあも負けん気出すんだかな司も。品山に住んでるとか言ってたな」

「はい。少し遠いですけど自転車で通っているそうです。俺も遊びに行ったことがあります」

「品山、か。んで、雑誌の記者さんとこの息子さんとかも言ってたな」

「お父さんが『週刊アントワネット』の記者だと聞いたことがあります」

本人からというよりも、噂だが。

桂さんの目つきが鋭く光ったような気がした。ほんの一瞬だが。

「そっか、なるほどなあ」

それ以上桂さんは立村について突っ込まず、テレビのお笑い番組にチャンネルを合わせた。

結局、片岡邸を出たのは夜の九時過ぎだった。家に改めて電話を入れ、十円玉を置き、桂さんの車で送ってもらった。勉強という苦行を乗り越えたとは思えないふたりの楽しげな笑顔に包まれ、乙彦もとりあえずは言いたいことを飲み込んだ。土産にスーパーのビニール袋いっぱいのお菓子をそれぞれもらい乙彦は先に車から降りた。

「じゃあまた、明日！」

最後まで王子雰囲気を保ったまま、片岡が輝く笑顔を向けた。手を振り玄関に入ると母が電話にしがみついて熱くおしゃべりをしているのが聞こえた。耳を傾けるとどうやら、内川の母相手のようだった。

「え、今いらっしやいました？　じゃあうちの息子も帰ってきたからまたよろしく」

慌てて電話を切り、母は興奮気味に乙彦を迎えた。

「おとひっちゃん、今内川くんのお家、すごい騒ぎになっているって話よ」

「え、なんで」

「『迷路道』の御曹司が息子さんの家庭教師になってくれるなんて思ってもみななかったって！」

——片岡、あいつ一応「御曹司」なのか。

明日学校で、王子仮面をはずした片岡をじっくり観察してみようと決めた。

次の日、いつもの甘ったれ片岡に朝一番声をかけられた。

「関崎おはよう！」

「昨日はいろいろすまなかった、ありがとう」

心持ちほっとして声をかけると片岡は声を弾ませて、

「あの後内川くんのうちに行って桂さんと一緒に挨拶してきたんだ。持ってった栗、すっごく喜んでくれたんだよ」

「ああ、うちの親からもくれぐれもよろしくと申し付かってきた」

もちろん母からあとで直々にお礼の電話を入れたのだが、乙彦からもきちんと伝えておく必要がある。

「おいしいよ。今度栗ご飯にして食べてもいいしね」

伝えるところのポイントが間違っているように思えるが、片岡の言いたいままにさせておいた。もう子犬そのものだ。しっぽぱたぱた、まさにこれぞ普段の片岡だ。

「これから毎週二回くらいうちに来てもらって勉強することにしようって決めたんだ。俺の塾ある時は難しいけど、それ以外なら大丈夫だし。合間に時代劇もビデオ録画しておくから安心して見られるし」

「お前野球好きだろ、それ、いいのか」

「しばらくは封印するつもりだよ」

あっさり片岡は答えた。

「だって、内川くんがあんなにやる気あるんだったら俺だって全力投球しなくちゃいけないし。関崎が俺のこと信頼して頼んでくれたんだから、ちゃんと結果出すようにがんばるよ。桂さんもOKしてくれたし。じゃ、また詳しいこと決まったら話すね」

とりあえず、内川家での挨拶は無事終了しふたりの友情を積み重ねる準備は進んだようだった。なんだか乙彦は蚊帳の外のような気もするがふたりとも元気になったのならばそれでいい。見守ることに専念しよう。

学校祭についてはいまだ全くクラスでのイベントなどなく、それぞれの委員会で準備を進めるのみとご沙汰が出た。ただし英語科の生徒で希望者がいるようであれば英語版プログラムの作成や立て看板の準備などの手伝いはさせてもらえるようだ。本当は乙彦もそちらに参加させてもらいたい気持ちがあるのだが麻生先生にはじかれた。曰く、

「あのなあ関崎、お前のやる気が溢れているのはよくわかる。だがな、人間からだとはひとつしかない。しかも朝の古本屋バイトも続けているんだらう？ そうなるとあれだ。お前たちの健康を保つためにもイベントはひとつに絞れ。つまりお前の場合は規律委員会活動だろ。そちらで十分目立てるぞ。制服もそうだ、あれ、幻の制服着る予定なんだらう？」

当然といえば当然なのだが、すでに麻生先生も「幻の制服」に関する情報を仕入れているらしい。

「はい、かなり派手な制服でした」

「だろうだろう？ B組の清坂にC組の南雲というのもすごい組み合わせだが、これは話題になるぞ。そっちで燃えて、あとはやることないかわいそうな同級生に譲ってやれ」

——そんなかわいそうな奴いるか？

すぐに気がついた。そうだ、あいつがいる。手持ち無沙汰なあいつがいる。

立村がすぐに立候補して参加することになったのは自然な流れだった。麻生先生の呼びかけにためらうことなく手を挙げ、

「ぜひ参加させていただきたいのですがよろしいですか」

発言した時に誰も反対する奴がいなかった。なにせ学年で英語限定トップの成績を納めている奴なのだ。当然だろう。

「立村、ずいぶん最近積極的だな、何か思惑でもあるのか」

「とくにありません。興味があるだけです」

きわめて慇懃無礼に立村は答えた。

「合唱コンクールといい今回といい、よいことではあるがあまり調子に乗るなよ」

「承知してます」

——ちょっとくらい調子に乗ってもいいと思うんだがな。

あの合唱コンクールが終わってから立村を見る目が変わった連中が多いとは思っていたが、よくよく見ると立村の行動もずいぶん前向きになっている。最近では疋田とも古川を交えてピアノに関する話をよくしている様子だし、音楽がらみで男子の吹奏楽部トリオとも盛り上がっていることもある。音楽室には放課後よく出かけていて肥後先生ともコミュニケーションを積極的に取っている。少し気になるのはB組の担任である野々村先生とふたりきりで語らっているところをよく見かける。別の噂が立っているのだが立村はあまり気にしていない様子ではある。

——まあいい、あいつももう少し評価されていい奴だしな。

放課後、規律委員会に向かう前に乙彦は立村を呼び止めた。

「学校祭の件だがよく立候補したな。うれしいぞ」

「別に、なんとなくだけどさ。委員会やってないから時間もあるし」

静かに立村は微笑みつつ答えた。

「全く何も参加しないで過ごすのがなんとなくもったいないような気がしたんだ。それだけだよ」

「お前くらい英語が出来ればひっぱりだこだらう」

桂さんに「こいつは天才」と言い切った乙彦の本音でもある。

「わからないけど役に立てればいいなってところかな。そうだ、関崎」

立村はふと思い出したように問いかけた。

「学校祭の中日にあるだろ、学内演奏会、あれ行く？」

「もちろん行くぞ。規律委員の仕事が関係してくるがわからないが、せっかく疋田が出演する

んだ。クラスで応援しないでどうするんだ」

「そうだよな。やはりみんなで行くよな」

少しだけ声を落とし、かすかに俯いた。

「お前も行くだろ？」

「行くよ。行くけどさ」

迷ったように首を振り、

「クラスで行くんじゃなくて別行動してもいいよな」

問いかけた。それはかまわないのではと思う。なんとなく仲間内で疋田の弾く「トルコ行進曲」を聴こうというツアーが組まれているが参加は強制ではない。乙彦も規律委員のアイドルユニット活動がどうなるかによって変わるものの、ほぼ参加のつもりでいる。

「誰か他の学校から来るのか、友だちでも」

「そういうわけじゃないけど、まあそれに近い」

言葉を濁した後立村は言い訳するように、

「俺、最近ピアノ習い始めたさ。だから最初から最後まで全部聴きたいんだ。俺のついでに先生は発表会とかしないから、なかなか他の人たちが弾くのを聴く機会ないから、ひとりでじっくり耳澄ませたいというのもあるんだ」

「そうか、わかるぞそれは」

たぶんクラスの仲間で行くことになれば、疋田の番ぎりぎりに会場入りし、終わったら即解散になるだろう。もしくはその足で学食に行くかもしれないが最初から最後まで耳を傾ける根性はない。自分で歌うなら別だが聴くのはまだ苦行の未熟者である。

「だから、別で行くけどその時はよろしく」

立村は話を変えた。

「ところで南雲たちから聞いたんだけど、『幻の制服』を着て学校祭の警備をするんだって？清坂氏も楽しみにしてたようだからさ」

——とっくに噂となっていたのかよ。

想像以上に情報漏れしているようだが隠すことではない。

「そうだ。俺がちらっと写真で見た限りではかなり派手な制服だった。あの格好で学内をうろつくのはかなり勇気いるな」

「楽しみだな」

生徒玄関で別れた。これからどこへ行くのか尋ねたら、

「中学の後輩と会うんだ」

「学食か」

「いや、外に出るんだ」

それだけ答えると立村はすぐに背を向けた。

——霧島あたりか、それとも。

乙彦は考えるのをやめた。まずは蛍光色黄緑のど派手制服とのご対面だ。

規律委員会では最初に学校祭の予定組みと三日間のローテーションが発表された。すでに三年生たちが勝手に組み込んでいて下級生の希望を取り入れる余地はないはずだった。しかし誰も文句を言わないのは上級生が横暴なわけではなく、もっと早い段階で個人的に予定を確認していただけたことらしい。

「先輩、せめて俺たちにもそのこと伝えてくださいよお」

甘えた口調で南雲が口答えする。

「俺だって、ちゃんとそれなりに予定はあるんですからね」

「わかってるわよ、南雲の予定は別ルートからちゃーんと確認済」

「あららん」

わかる人にしかわからず乙彦には全く見当のつかない会話を先輩後輩同士で交わした後、三年生たちの意思により一方的に決められた、規律委員会特別プロジェクトの発表がなされる。すでに噂は流れていたのが驚きもさほどない様子だった。

「それでは、今回規律委員会の特別プロジェクト象徴キャラクターとして、一年の中からこの三人に立ち上がってもらうことにしました。さあどうぞ！」

南雲が「はい」と元気よく前に出た。次に清坂が周囲の席の女子たちに頭を下げつつ教壇前へ、最後に乙彦もつられるように進んでいった。

「ではでは、今回この三人に青大附高で取り入れられるかもしれない幻の制服を着てもらうことにします。選ばれなかったとかいっていじけたらだめですよ。てなわけで、まず前で合わせてみてちょうだいな。

クリーニング屋から運ばれてきたばかりとしか思えないビニール包みの制服を女子先輩が取り出しそれぞれに手渡した。薄青いビニールがかかっているのははっきりとした色は見分けられないがなんとなく濃いように思える。南雲、清坂とも顔を見合わせてとりあえずは身体にぴたりとあわせてみた。

「これじゃあわからないって。じゃあ直接あんたたち着替えてらっしゃいよ。トイレの個室でさっさと着替えてきて」

「はい、行ってきます！」

清坂がうれしそうに制服を抱えて飛び出していく。その姿を目で追いつつ南雲が、

「そいじゃ、関崎も行くか？ 男子トイレで悪いけど」

「そうだな」

一礼して男子ふたり教室を出て行った。拍手で見送られた。

「それにしても想像以上にど派手ですな」

ビニールごしに何度も眺めて南雲がつぶやいた。

「写真で見た時も相当のけばさだったけど、まじでここまでとはなあ」

男子トイレには幸い誰もおらず個室も二部屋空いていたが、

「さっさとここで着替えても誰も来ないだろ」

「もっともだ」

見られて困るものなどないということで、広い場所を使ってさっさと脱ぎ着した。ビニールを広げて床に脱いだものを置き風呂敷のようにくるめばいい。南雲も同じようにしていた。

——しかし、この色はなんなんだ。

南雲の言う通り写真で確認した色とは全く違う。パステルカラーで少し淡さのある色ならまだしも、この露骨に夜の闇に光りそうな蛍光色、これはひどすぎる。しかもこれで学生服だ。百歩譲ってブレザーならまだしも、学ランだと面積が広すぎて全身蛍光ライト化させているとしか思えない。横目で南雲を見ると、すでに自分の運命を受け入れているのか髪の毛を丁寧に撫で付けたり前髪あげたりといろいろ工夫しているようすではある。

「まあ、学校公認での校則違反させてもらう機会ってのもそうそうないし、楽しめますか」

「もっともだ。前向きに捕らえよう」

乙彦も同意した。最初から自分の趣味とは言えないことは承知している。学校祭にきっちり参加できるだけでも自分は恵まれているのだとも思っている。まあアイドルユニットというネタは別としても、それなりに仕事をもらえるのは青大附高の生徒としてうれしい。

「ああ、そいで関崎、ちょっとここだけの質問していいかな」

南雲がさらりと声をかけてきた。

「バイトのことか」

「違う、りっちゃんのことなんだけど」

「立村か？」

昨日に引き続きずいぶん立村のことを聞かれるものだ。ほとんどがネガティブな内容ばかりのはずだが南雲は立村と比較的仲がよい。あまり気を張らなくてもいいだろう。

「りっちゃん、最近どう？ 落ち込んでたりしない？」

「別にそれはない様子だが。何かあったのか」

「いや、いろいろとさ。噂を耳にするんでね」

言葉を濁す南雲。こういうあいまいな言い方をされると乙彦もついいらいらする。

「噂とは具体的になんだ」

「噂だからあまり具体的に言えないんだけどね」

南雲はまた歯ごたえのない返事をした。乙彦もそれに見合った答えを返すことにした。

「落ち込んでいるというよりも、ずいぶんやる気を出しているなという気はする」

「へえ、やる気？」

「そうだ。知っているだろうが合唱コンクールでの見事な仕切りがクラスの連中には高く評価されている。今までは女子たちの受けもあまりよくなかったんだが少しずつ見直されているような感じもする。それもあるんじゃないのか」

「たとえば具体的に」

「英語の看板やプログラム作成に自分から立候補していたぞ」

立村の周囲を見る限り、プラスの要因しかないような気がする。自分に自信がなさ過ぎだった

立村が少しずつ周囲から見直されていく姿は、友人としてもうれしいことに決まっている。クラスが別だとやはり気づきづらいのかもしれないが。

「そうか、それならいいけどさ。俺も最近りっちゃんと直接話す暇なくてさ。噂ばっか流れてくるからなんかなあとか思ってただけなんだけど」

「南雲、差し支えないんだったら俺にもその噂を聞かせてほしいが無理か」

思い切って乙彦は尋ねた。あいまい過ぎるのが耐えられない。首筋に久々当たった白い襟が痛い。南雲が渋い顔をした。

「噂だけど、いいのかねえ」

「南雲は俺よりも立村と親しいはずだ。ならそれなりに根拠があって言っていることだろう。俺も英語科クラスメートのひとりとしてあいつのことが気になるのも事実だ」

「そっか、じゃあ同じ規律委員のなじみもあるし言いますか」

一呼吸置いて南雲は乙彦に向かい、

「りっちゃんの好きな子のこと知ってる？」

軽やかに問いかけた。言葉に詰まる。確かに知っているといえば知っているが認めたわけではないのも事実だし。迷う乙彦を静かに様子見しながら南雲はさらに続けた。

「清坂さんじゃないってことも知ってるよな」

「ああ」

ここは即答できた。

「彼女が青大附中卒業してから他の高校に進学するという話、聞いたことある？」

——どう答えたらいいんだ、めちゃくちゃ難しいぞ。

なにせ自分がその問題の最大なる関係者なのだから。南雲は気づいていないのかそのまますぐに答えを告げた。

「彼女、青潟以外の学校に推薦で進むことになったんだって。そういう噂が中学から流れてきてて、りっちゃんがそれ知ってたらどう思うのかとか俺なりに気になったってわけ」

そこまで言って南雲は外に出た。誰にも言うなとか口止めは一切せずに。

乙彦たちが規律委員たちの待つ教室に戻ると、ふたたび一斉に拍手が巻き起こった。

「南雲くん似合いすぎ！」

「派手なのにくどくなーい！」

「やっぱし南雲くんモデル目指しなよ」

女子たちの三学年みなささやき合う声に打ち消されているが何気なく、

「しかし関崎も最初はどうかと思ったが、結構いけるな」

「全くだ。南雲がホストなのに対してちゃんと優等生しているのがいいぞ」

褒め言葉か疑問を感じたくなるような発言も聞こえてくる。確かに身体にはぴたりとあって着心地もよい。どこかの暴走族に加入したような気分もしなくはないがまあ、悪くない。

「しかし恥ずかしいもんっすね、この格好で歩くとなると」

南雲は前髪をさらりとかきあげてちっとも恥ずかしさ感じていない顔で述べた。

「まあまあ、これから三年間同じ制服着なさいって指示するわけじゃあないんだからがまんしなよ。けど、やっぱり私たちの見立ては間違ってたわよね」

「このメンバーというのはやっぱりベストだな」

図書館で口説いてきたふたりの三年先輩が満足げに語り合っている。

「あとは美里ちゃんなんだけどまだかなあ」

野郎は揃ったが、やはり清坂は女子だけあって、

「おめかしに時間かかるんだよ。やっぱね。それに清坂さんこういったらなんだけど一番おしゃれにうるさい人だから」

「そうなのか」

わからないなりに乙彦がつぶやくとタイミングよく扉が開いた。清坂がひょいと首を出し、

「お待たせしました！」

ちろちろと乙彦と南雲を眺めやりながら、

「やっぱり規律委員だし髪の毛整えないとまずいかなと思って、こんな感じなですけどどうですか？」

蛍光黄緑のセーラー服に白いスカーフを長くあしらい現れた。

「うわあ、美里ちゃん髪、お下げにしたんだあ」

「清坂さんすごく似合ってる。可愛い！」

「お下げにしたのってあんまり清坂さん見たことないよね」

「ものすごくおとなしい女子に見えるな。馬子にも衣装」

いろいろなことをささやきつつもやはり最後は拍手喝さい。清坂も満足したようにぐるりと回って乙彦の隣りに立った。

「さてこれで全員揃いました」

規律委員長がにやつきながら三人をまじまじと眺め、

「なんというかこの制服にもし決まっていたとしたら、俺たち受験してたか自分を問い詰めたく

なるような色だよなあ」

正直な感想を述べた。

「全くです」

思わず乙彦も本音をつぶやくと、

「だろう？ 関崎、お前もそう思うだろ？」

背中をばしばし叩かれた。他の女子から、

「委員長だめです、制服借り物ですから、痛みます！」

一歩ずれたところで注意されている。

「まあどっちにしろ、この幻の制服をまとっている三人組が学校祭中うろついているというシュールな展開がなんとも言えずいいよな。規律委員を校則大好き堅物軍団と思っている一般生徒たちにアピールできるまたとないチャンスだぞ」

「委員長、ひとつ提案なんです」

南雲がにっこり微笑みながら自分の席にいったん戻り、スケッチブックを持ち出してきた。他の連中にも見えるように広げ、

「俺たちが一番ど派手な格好をするのはしかたないとしても、後の規律委員が何もしないってのはちょっと肩身狭いですよ。ってことで提案なんですがいっすか」

「おう何でも言え」

委員長の許可をもらった。

「この色がどれだけ目立つかってことは実際着てみてよくわかりました。んで、提案ってのは今回学校祭中教室をうろつく委員全員に、この色を身につけてもらいたいってことなんです」

「身につけるってあれか、週番の腕章みたいなものか」

委員長が尋ねると、南雲はゆっくり首を振った。

「それならつまらないですし、色面積が少なすぎます。だったらってことで考えたのがこれなんです。マントってのはどうっすか」

「マント？」

素っ頓狂な声が教室内から拳がった。主に二年男子たちだった。

「そうです。本当は学ラン全部そろえた方がカッコいいとは思いますがこの仕立てのよさみるとちょい無理。だったらでかい布を探してそれを羽織って歩くと全身黄緑になるし十分怪しくなりますよ」

南雲の言葉に大爆笑した委員一同だが、すぐに委員長が水を差す。

「面白いが現実も見てくれ南雲。こんなけばい色のマントを作るだけの布がどれだけ手に入るっていうんだ。それに予算、どうするんだよ。ただじゃねえぞ。委員全員でマント代カンパでもするのかよ。着る以上は縫い物もせねばならないしどうするんだおい」

「確かにそうっすね。金がかかるのは痛いでしょうな。だったら俺の提案なんですけど、女子はショールって手もありますよ。ただ切つてぐるっと身体に巻きつけるだけ。それも悪くないと思います」

「悪いけどそれ可愛くない！」

みな、言いたいことを好き勝手に叫びつつも話し合いはだんだん、
「全員がなんらかの形で大判の黄緑色を見につけることにより、規律委員の存在を印象付けられる」

というところには行き着いたようだった。腕章よりも大き目のものということで、リボンとかスカーフ、中には白いタオルを黄緑色に染めて持ち歩くという案も出た。

「俺はやっぱし、男子は無条件でマントが一番いいと思うんですが、もう少し考えときますよ。テーマカラーをこの黄緑で行くってのが俺としてはお勧めしたいんですけど、先輩方いかがでしょう。どうか相談乗ってもらえませんかねえ」

南雲の発言でみな納得した様子だった。最初は下級生の下克上と思われたところもなきにしもあらずだが、そのあたり南雲は心得ているようだ。先輩のおだて上げでなんとか目的を達成できそうな気配がする

——しかし、そもそも出来るのかそんなこと。

発想がまずついていけなかった。

——要は警備をやるだけなのになんでそこまで派手に盛り上がる必要があるんだ。それに妙に気合が入っているぞ南雲。そこまで何が駆り立てるんだ。

ずっと熱く語り続ける南雲の隣りで乙彦がぼかんと立ちすくんでいる中、清坂がさっと手を挙げた。

「清坂、どうした」

委員長に指されて清坂は南雲と乙彦を見比べた後さっと手を広げた。

「どうせだったらみんなで、マスコット人形作りませんか？」

「マスコット人形っすか清坂さん」

南雲がいぶかしげに尋ねる。

「そう、この制服をモチーフにしてちょっと大きめの、胸ポケットに一体入るくらいのマスコット人形作面白いんじゃないかなって。私中学の時にクラスで男子を応援するためにフェルトのマスコットをクラスのみみんなで作って配ったことがあるんですけど、大きいマスコット人形の方が作りやすいんですよ。それを胸に着けたりぶら下げたりしたら目立つし可愛いし、いい記念になるんじゃないかなあ」

「清坂さん、ナイスアイデアなんだけど、誰が縫うの」

「もちろん規律委員に決まってるじゃない！」

清坂は高らかに言い放った。

「中学では規律委員会って隠れ手芸部だとかファッションクラブとか言われてましたし。もしそれだったら私たちが仕切ってもいいですよ」

なにがなんだかもうわけがわからなくなってきた。あっさり受け入れている先輩方にも、水を得た魚のように生き生きしている南雲や清坂も。どうでもいいが乙彦は料理こそできるが縫い物

は苦手だ。今までになくはんぱでない盛り上がりの規律委員会メンバーを眺めつつ乙彦はこっそり後期委員のカウントダウンに入ることにした。

結城先輩の言葉を改めてかみ締める。

——ここは悪いところではない。いい奴ばかりだ。だが自分の居場所とはどうしても思えなかった。

中間試験を挟んで後、規律委員会では大まかな学校祭での活動予定が組まれた。

ほとんどは上級生たちが決めたことであるが、取り入るのがいろいろとうまい南雲が一年たちのすべき仕事をしっかり押さえファッション関係をすべて仕切ることとなった。

「マントがよかったんだけどなあ」

試験結果が一通り発表となり、放課後一年規律委員たちは家庭科室を借りてちんまりとたむろっていた。さすがに試験中は何も準備する余裕などなかったけれども終わればあとは学校祭一直線。全力投球しないと間に合わない。昨日も南雲の指示により一年規律委員が全員、ひとり二体のフェルト人形を作成することになってしまった。

「なぐっちまだ未練なのかい」

男子三人しかいない家庭科室。これから女子たちも来るはずだ。黄緑色を中心とした大量のフェルトをテーブルに並べ、手芸用ボンドと裁縫箱もセッティングしてある。どうみても男子が好き好んで使う品物とは思えない。東堂がおとぼけ口調で問いかけた。

「時間がないもんな。しゃあないかって気もするんだけどね。ただなんかつまらないよな。俺たち三人が超目立つ格好でふらつくだけだとインパクトないしさ」

「いやあるぞ、ありすぎるほどある。なあ関崎もそう思うだろ」

同意を求められても困る。インパクトにはあまり拘りたくない。

「マフラーでも十分過ぎるほど目立つと思うが」

「まあなあ、ブレザーにあの色じゃなあ」

結局南雲が選択したのは、黄緑色のカーテンを大量に購入して人数分はさみで切り取り、何も考えずに首に巻いて歩くといったスタイルだった。たまたま近所のホームセンター内で夏物のカーテンが投売りされていたのだそうだ。見つけた南雲も相当すごいものだ。盟友の東堂と組んで学校まで持ってきた。当然領収書も切ってもらった。あまったカーテンについては、警備準備室……おそらく学校祭時には一室あてがわれると聞いている……の飾りつけや場合によってはテーブルクロス代わりにしようかと思案している。

「あのくらいのマントだと結構インパクトあったんだがなあ」

「しょうがないだろなぐっち。人数分そろえるのはやはり無茶だつづの」

——こいつら本気でマント作るつもりだったのかよ。

乙彦はふたりの会話を聞き流しつつ、黄緑のフェルトをつまんでみた。かなり大きい。

「清坂さんの指示通りにそろえましたがいかに」

「ここから先は女子に任せていいんじゃないの」

東堂も口調はのんびりさせつつ、とげをこめてつぶやいた。

「マフラーだけにしとけばいいと思うんだが、あの人相当なにかやりたくてなんないようだしねえ。全くうちのクラスも不協和音ばりばりで大変なこった」

「そんなに清坂はB組で問題起こしてるのか」

ずっと気になっていることを聞いてみた。静内とは火花を静かに散らしていると聞いているも

ののあくまでも女子の視点でしかない。しかし東堂も腹に据えかねているということであれば男子の視点として新しい見方が出来るかもしれない。

東堂は南雲と顔を合わせてため息を吐いた。

「まあなんていうんか、余計なことに口を出さずにのんびり任せてもらえばいいのになあということか。こういっちゃあなんだけど規律委員会のファッションショーはそれこそ三人組の幻制服お披露目と、規律委員全員の緑のマフラーで決めて仕事をこなせばそれで十分だろ？ それを何が楽しくてこんな針で縫い縫いしなくちゃあなんないんだか」

「だから清坂さんも男子たちにレクチャーしたいんだろ？」

なだめるように南雲が語りかけるも、東堂は肩をすくめて首を振る。

「マスコット人形なんか作って腰にぶら下げて楽しいか？ 俺は楽しくねえよ」

「楽しいと思う男子はいないんじゃないかな。けどさ、中学の時球技大会で女子たちが親指立てたマスコット作ってくれたことあったじゃん。あれは今でも保存してるよ」

「あああれな。俺はすでに成仏させました。そういやあれもあの人の発想だったんだよなあ」

乙彦は蚊帳の外だが別にそれはそれでいい。考えることはそれなりにあるのだから。

——それにしても立村、まじで大丈夫か。

幻の制服お披露目時に南雲から聞かされた立村の事情が気にかかってはいた。

——最近元気がないとか言ってたがそれでもなさそうだったんだが。

合唱コンクールが終わってからクラスの行事には積極的に関わるようにしている様子だったし、露骨に落ち込んでいる顔も見えていない。見た目には問題ないのだ。

ただ、今回の中間試験では想像以上に成績順位を落としたりしく、今朝も天羽たち元評議三羽鳥相手に、

「理系はともかく文系の成績落としすぎたからかなあ。親呼び出しになってしまってさ。昨夜は徹夜で説教食らったよ」

深いため息をついているのを聞いた。さすがに盗み聞きの段階で尋ねるのも気が引けて、後でこっそり藤沖に「学校での親呼び出し基準」について確認した。意外にも青大附属の場合成績だけで呼び出すことは「よっぽどのがなければ」考えづらいとのこと。むしろ日常生活のこまごましたことであればまた話は別だとか。

「どうした、成績が心配なのか。いつでも相談に乗るぞ」

「いや俺は大丈夫だ」

適当に交わした。とりあえず乙彦も前回の実力試験と同じ順位をなんとか保つことが出来ているので何よりだ。

「ああそうそう、東堂大先生、可愛い彼女とのデートはしっかりお勤めしてますか」

完全に乙彦は眼中にないふたり。今度は恋の物語をひとくさり。知ったことじゃない。聞き流す。

「しばらくご無沙汰なんだけどなあ。ほらご存知の通り妹ちゃんたちがまたこそこそとやらかし

ているみたいでお兄さんは胃が痛い今日この頃」

「あっそっか。そうだよなあ。お兄さんといえぱりっちゃんとは打ち合わせとかしてるの」
——りっちゃん？

南雲は立村のことを「りっちゃん」と呼ぶ。ぴんときた。東堂も頷きつつ、
「立村にも相談したいんだけどなあ。なかなかあいつ捕まらないし、やっと話できそうだと思うたら中学の後輩君と暗い顔して語らってるし。本当は今後のことを考えると立村とも膝突き合わせて相談したいとこなんだよ」

「そうだよなあ。けどりっちゃん、今はかなりどん底で落ち込んでるかもね」

意味ありげに南雲が答える。承知しているのか東堂も同意する。

「そりゃあなあ。俺の妹ちゃんも泣いてたよ。立村の妹ちゃん、学校の方針でど田舎の修道院みたいな学校に幽閉されるって。しかも話、聞いたらあの学校っていわゆる高校という扱いじゃあないらしいんだよ」

「へえ、じゃあ、一種の塾みたいな感じなのかなあ。予備校？」

「よくわからんけど、学年トップの成績獲ってる子が行くところじゃあねえよなあ。自業自得ってところもあるらしいけどよ、でも、あれだけめんこがっている立村からしたらダメージでかいだろ。中間試験の成績が半端でなく落っこちたらしくって親呼び出しくらったらしいけど俺からしたら、英語だけでもトップを保ったってところに立村の意地を感じたよ」

「俺からしたらあのわけわからん英語の問題で満点をあっさり獲れるりっちゃんの頭の中が最大の謎」

南雲はにこにこしながら東堂に提案を持ちかけた。

「じゃあ今度、一緒に俺んこの下宿で三者会議しますか。久々にあのめっちゃうまいハンバーガー食いに行こうよ。りっちゃんもいろいろしんどそうだし、東堂大先生も妹ちゃんについていろいろ相談あるだろうし。学校祭前にでも集まろうよ」

「ナイスアイデア！」

がははと笑いあうふたりを横目で見ながら、乙彦は頭の中を整理する必要に駆られた。

知っている話題なのに、よく把握できない。理解できたのはひとつだけ、

——立村の成績がた落ちの原因は、たぶんそこにあるのか。

「なんで家庭科室での集合なんだ？」

きりのよいところで乙彦が尋ねると南雲が説明してくれた。

「清坂さん曰く、家庭科室だと針と糸、はさみなど使い放題だからという理由らしいんだ。確かに中学の規律委員会でも家庭科室にはお世話になったしなあ」

「『青大附中ファッションブック』の撮影会場でもあったな、なぐっち覚えてるか？」

「もちろん。来年あたりから復活させたいよな」

すでに南雲と東堂の気持ちは来年に飛んでいる。後期の人選はともかくとしても二年以降クラス替えにもかかわらず規律委員長なんて狙えるのだろうか。南雲の実績を考えるとそれも自然の流れになるのだろうか。よくわからない。

「けど遅いなあ。女子たちもそろそろ集まってくれてもよさそうなのになあ」

「ほんとだな。場所間違えたなんてことはないか？」

「んなことねえよ」

三人三様それなりに憶測を練り広げているところへ待ち人が現れた。

清坂美里が、立村を伴って現れた。

「来てくれたんだね。よかった、ありがとう」

あまりありがたくもない顔をそれぞれしていたのだろう。清坂は少しばつの悪そうな表情を浮かべつつ、背後で大きな袋をぶら下げている立村に向かい、

「ほら、入って」

促した。いかにも荷物持ち扱いしているその様が哀れである。南雲がけらけら笑い手招きしつつからかった。

「りっちゃん、あれ、今日は清坂さんの秘書っすか」

「そういうわけじゃないけど」

乙彦と顔を合わせて頭を下げ、すぐに隣に回ってきた。腰を押し付けるつもりらしい。東堂も最初はむっとしていたようだが立村の登場に満足したのか、

「ちょうどいいとこだった立村、さっきなぐっちとお前の噂してたんだよ」

すぐに紙袋を受け取り覗き込んだ。

「思ったよりも軽いなこりゃ」

「人形に詰めるパンヤ綿だって。たくさん作ることになるからこのくらい必要らしいんだ」

「それで荷物運びかよ」

ちらりと東堂が清坂を見やる。もともとこの二人の関係が悪化しつつあるのは見るからに事実だが、さすがに紳士として振舞っている。たださりげなく嫌味を言う。清坂も気づいていない振りで立村に話しかける。

「立村くん、手伝ってくれてありがと。でね、もうひとつお願いしていい？」

「いいよ。今日は暇だから」

「助かる！ あのね、ちょっとこっち来て」

かばんを乙彦の席脇に置き、立村は立ち上がり清坂に駆け寄った。最奥の席に座り清坂からなにやら説明を受けている。清坂もかばんから大きめの封筒を取り出し、中から型紙らしきものを取り出した。遠目から見ても型紙と分かるのは、フェルトマスコットのような緑色の物体を取り出してきたからだった。人形ではなさそうだ。

「ありゃなんだあ？」

「結構大きめだよな、シングルレコードくらいはあるよあの大きさ」

「だが顔がない。人形じゃないな」

三人遠くから覗き込みつつ好き勝手な感想をつぶやく。その間も立村は清坂の手元にある型紙らしきものをフェルトに当てて何かかしら尋ねている。

「まさかとは思うが、立村も俺たち縫い縫い規律チームの助っ人投入か？」

「その気配ありありだよ」

「だがなんで連れてきたんだろうな」

このふたりが英語科A組の裏事情を知っているとは思えない。後期の規律委員がほぼ八割方の確率で立村に決定しかけていることに気づいているだろうか。南雲あたりは鋭くかぎつけていそうだが東堂はどうだろう。言葉を選ばないとなるまい。もっともふたりとも中学時代は立村と同じクラスで結構親しかったとも聞いている。それほど気にすることもないのかもしれない。

「だがなあ、なぐっち」

東堂が小声で耳打ちしているのが乙彦にも聞こえる。ちっとも内緒話ではない。

「別れた彼女にいまだに都合よく足として使われる立村が、俺はむしように哀れなんだがな」

「いや、たぶんりっちゃんにその意識はないよ」

南雲はさらりと答え、また最奥のふたりを眺めた。口元をほころばせ、

「りっちゃん、清坂さんとは過去現在未来にいたるまで親友以外の付き合い方しかしてないような気がするんだよ。俺の勘だけど。だってそうじゃん？ 好きだった子に振られて親友付き合いするのって結構地獄だよ。経験者は語る」

「なぐっちに言われると笑えねえなあ」

とかいいながら笑っている。こいつらの軽さに乙彦はちらと苛立った。

——人のことネタにするじゃねえよ。友だちとか言ってるくせにな。

やがて話し合いにけりがついたようで立村は立ち上がった。清坂から型紙入りの封筒を受け取り抱え。

「わかった。それならこちらでもそのように準備しておくよ」

「立村くん、ありがと。じゃあ、またあとでよろしくね！」

「じゃあまた明日」

背を向けて去っていく清坂を見送った。乙彦たちには何も告げず急ぎ早に家庭科室から出て行く清坂を眺めやりながら東堂がつぶやいた。

「妙な緊張感がなくなったのはいいことだなこりゃ」

——心底こいつ清坂を嫌ってるな。

なんだか気持ちがざわつく。ふたたび立村が封筒を抱えて戻ってくるのを待った。

「今日は、どうした。それと清坂はどこ行った？」

乙彦が尋ねると、立村は手元の封筒からさっきまで広げていた型紙と黄緑のフェルトマスコットを二体取り出した。頭も手も足もない。

「いや、今日たまたま規律委員の女子たちが忙しかったらしくて清坂さんがひとりで準備してたんだ。それもあってよかったら手伝おうかって話になっただけなんだ」

南雲と東堂が顔を見合わせた。

「一年規律委員全員来るとか言ってたのにか」

「いろいろ事情があるらしい。ただ人間関係の問題ではないと言ってたな」

「あとでうちのクラスの相棒さんたちにも確認してみるか」

実際今日はD組の男子規律委員も来てないのだ。実際集まったのが清坂を入れて四人。それに立村が加わって五人。さらにそこから清坂がひかれて結局四人。

「んで、マスコット人形ってのはこれか」

東堂が紐で吊るしぶらぶらさせた。南雲が言う通りシングルレコード盤の大きさほどある巨大なフェルト製マスコットは、手にとって初めてわかった。「幻の制服」を形どったものだった。男子は学生服っぽいタイプなので見るからに四角い手鏡のようなフォルムだし、女子もそれなりに手が混んでいるように見えるけれども実はすべてフェルトをボンドかなにかで貼り付けてこしらえたようなもの。白いネクタイやセーラー襟のラインも同様に、針でかがっているのは外側のみ。

立村がフェルトに型紙を当てて説明する。

「さっき清坂さんから聞いたことを伝えるけど、俺たちが今からやることは、とにかくひたすらフェルトにこの型紙を当てて枚数分切り抜くことだけだって。明日以降に縁かがりを女子の規律委員のみなさんが学年問わずやってくれるらしいんだ」

「ああ？　じゃあ何か、俺たちの手作りマスコット一人二体っていう無謀な要求はなくなったのか？」

東堂の質問にも立村は冷静に答えた。

「そうらしいよ。俺も向こうの言い分聞いただけだけど、やはり男女問わず針と糸が苦手な人多いから、二体も作るのは苦勞だってことは分かっていたようなんだ。それでせっかくだったら分業制にして全員で得意分野だけ担当したらどうだろうってことになったようだよ」

「りっちゃん、それ清坂さんが決めたの？」

南雲がほんのわずか含みを持たせるような言い方で尋ねた。

「そうらしいけど」

「りっちゃん、嘘言っちゃだめだよ。顔にみんな書いてるよ」

「嘘じゃないって」

東堂とふたりで「なあ？」と頷き合ったのち、南雲は立村の顔を覗き込み語りかけた。

「俺たちの知らない間に清坂さん説得してくれたんだろ？　いやあ助かったよ。俺も縫い縫いするの超苦手だから誰かに頭下げて頼まないとまずいかなとか思っててさ。切り抜きクラブだった

らまだ俺もなんとかいける。なあ、東堂大先生？ 関崎もそうだろ？」

すっかり困りきった顔で恐縮している立村の様子を見ればわかる。嬉々としてフェルトと型紙をセッティングして待ち針で留め、裁ちばさみを器用に操っている東堂をちらと見て立村は小さくため息をついていた。

男子四人で黄緑と白のフェルトをひたすら切り抜いていく作業は、それでも意外と楽しく過ごせた。一枚しかない型紙をそれぞれ取り合ってはチャコペンで輪郭を取って裁ちばさみで切り続ける。東堂と南雲のふたりが、傍から見ても唖然とするほど盛り上がっているのがなんとも言えなかった。

「いやあこれまじすごい。遠めからみてもちゃんと制服に見えるぞこれ」

「顔とか足がない作りってのもなかなかだよなあ」

「そうそう、女子の制服だとセーラーの部分は白いフェルトをボンドで貼り付けるだけだろ？ ナイスアイデアだよ。これ、一枚一枚はっつけるのかと思って思い切り気分がダークだったんだけどな」

「手芸じゃなくて手作業ならなぐっちは得意だもんなあ。年季入ってるし。おばあちゃんの仕込みもあるし」

「仕込まれてないけどなあ。結構手作りの品は俺、マイフェバリットかもな」

一方乙彦も立村とふたりちまちまと型紙をいじっていた。どうも乙彦には向かない趣味だった。形ができればそれなりに感動もあるかもしれないが、そこまで清坂が燃える理由が掴みかねた。立村も南雲たちとのんびりしゃべりつつも懸命にチャコペンを握り締めて縁取りに苦心している。今気づいた。こいつは不器用だ。はさみの導線がすべて曲がっている。見るに見かねて乙彦が代わりにフェルト裁断を担当してやることにした。

「関崎、悪いな」

「こういったらなんだがお前、指先が器用とは言えないだろう」

「否定はしない」

四人分の手があれば片付くのも早い。あっという間に五十体分のフェルトが机に積み重なった。次に立村が持ってきた大きめの安全ピンで縁を留めていく。本当は待ち針を使う予定だったがこれも立村の提案で安全ピンの登場となったらしい。

「りっちゃんナイスアシスト」

「そうでもないけど」

南雲と東堂に褒められつつ立村はその理由を述べた。

「待ち針だとかならず手に刺して痛い思いするのがわかってたから。手の器用な人ならそんなことないだろうけど俺の場合は確実に血だらけになるのが目に見えてるよ。緑のフェルトだと血がついたらちょっとしゃれにならないし」

「ホラーマスコットになっちゃうわな」

東堂の台詞に思わず笑いがこぼれた。立村の不器用ぶりを見ればその恐れもさもありなんと思える。たぶん手伝う以上は自分が楽しかったのではないだろうかと思いたくもなる。

「さてと、これをまた清坂さんに渡すというわけか」

「今日は俺が預かっておいてロッカーに隠しておくよ。明日どうせ顔合わせるから渡す」

立村は丁寧に、組にしたフェルトを袋に詰めなおした。まだパンヤ綿も手をつけていない。かなりの大荷物だ。

「明日以降に規律委員の人たちと一緒にかがるらしいけど、これだけたくさんだと時間かかりそうだよな」

「全くだ。一体かがるにしてもかなり大変そうだよ」

小学校時代女子たちがきゃあきゃあ騒ぎながらこしらえていたフェルト手芸をちらと覗いたことがある。乙彦には縁がなかったが雅弘によく誰かがプレゼントしていたことを思い出す。貢物を見せてもらったが、実に細かくかがられていた。手間がかかりそうではある。乙彦はごめん蒙りたい。もう仕事は終わったはずだ。

「女子だからって言って縫い物好きな人とは限らないし、男子だからといって抵抗があるとも言えないし、難しいよな」

「あのさあ、なぐっち、個人的俺の意見なんだがなあ」

東堂が、立村のしまいこんだフェルト包みを覗きこみつつ、
「規律の連中もみなそういうの好きとは言えないしな。ただでさえ学校祭準備で面倒だろ？ 追試がある奴もいるし」

立村がため息とともに頷いている。四教科追試だったらそりゃあ困る。

「だったらさ、得意な奴見つけて一気に片付けてもらうのが一番効率的だと思うんだがどう思う？」

「東堂大先生、間違っちはいないけど問題その一、誰に頼むんだ？」

南雲がフェルトを指でつまみ上げつつ尋ねる。

「得意な人だれか」

「いるか誰か」

「ええと、うーんと」

しばらく東堂は考えこんだ。考えること自体が乙彦には謎である。

立村が知らぬ存ぜぬで荷物を片付けている。その気配を気づいたのか突然東堂が立村に、
「あっそだ、立村、ちょいとな」

呼びかけた。顔を挙げた立村に東堂は前の席に回りこみ、

「ひとつ提案なんだけどな、これ、俺たちの妹ちゃんに預けるってのはどうだろ」

パンヤ綿の入った紙袋を持ち上げ、軽く振って問いかけた。

「妹？」

「そ。お前さんもお存知の通り」

立村が言葉に詰まったのを予定通りと見てか東堂はにやつきながら続ける。

「俺たちがやるなら時間せっぱつまってるけどな、あの子たちがやるんだったらあつという間にこしらえてくれると思うんだわ」

「でも、それは」

力なく立村が言い返そうとする。

「あのふたりにか」

「そうなんよ。なぐっち、いいアイデアだと思うだろ。俺んちの妹ちゃんが妙な遊び覚える代わりに針でちくちく仲良しちゃんと縫い物してくれてたほうがずっと健全だろ」

「でもそれはまずいって」

立村がはっきりと首を振った。

「いきなりだと困るだろうし、中学は中間試験のあとすぐ実力試験があると聞いたよ。きっと忙しいよ。いくら先輩だからといって仕事押し付けるわけにはいかない」

「全部とは言わないって。とりあえず二組分あずかっというてよし？」

東堂は袋の中から男子用と女子用のフェルト組を二枚ずつつまみあげた。

「俺もこの半年、規律委員としていろいろ考えてたんだけどな、やっぱ押し付けはよくないよなあ。なぐっちの緑マフラーくらいならはさみでちょきちょきですむけど、マスコットは大変だわやっぱし」

「マフラーもただきりっぱなしだとほつれるよ」

妙に立村は詳しい。そちらのほうが気になる。東堂はあまり興味がなさそうだ。

「んでだ。俺が思うに、あのふたりならもともと手芸も好きだろうし、お前さんのかわいい妹ちゃんもほら、刺し子細工だったかそれとも」

「クロスステッチだとか言ってたけど」

また詳しい。ひそかにこいつも手芸のマニアなんてことないだろうか。

「ああそれぞれ。とにかく針と糸が好きそうだろう？ あのふたりならあつという間に五十人の幻制服組を完成させてくれそうなんだよな。それ持ってけば規律のみなさんも満足だろうし余計なことしなくてもよさそうだろうしな」

困りきった顔で対処に迷う立村を、南雲がさりげなくフォローする。

「まあまありっちゃん、これは東堂の愛があふれまくっているだけだから。一体くらいフェルト渡して作ってもらう程度で話のネタになればいいんじゃないかなあ」

しばらく立村は言葉を発せずに組になったフェルトを摘み上げていた。東堂がしつこく言い募るのを聞き流しているのが見え見えだった。

——立村、断れよ。

東堂の言い分は第三者である乙彦から見てもかなり横暴な内容だ。東堂の恋人らしき女子が中学三年にいたとは聞いたことがある。手も器用な子なのだろう。しかしいきなり縫い物を押し付けられて喜ぶとは到底思えない。自分の身になって考えろと言いたい。

また立村も、たぶんあの葉牡丹の君のことをいじくられているのだろう。進学関係でいろいろ面倒なことが起こっている彼女に、東堂のほうからまたちょっかいかけられるのは耐えられないのかもしれない。乙彦も少し割って入ってやりたいがいかんせん、葉牡丹の鉢植えを手渡しされた身の上ゆえ藪をつついて蛇が出てくるのは避けたい。

立村がほっとした表情を突然浮かべた。乙彦と一緒に南雲が気づきぎょっとした風に覗き込んできた。

「東堂、そうだね、それは面白いかもしれない」

いきなり切り出した。立村は型紙の入った封筒に手をいれ、型紙を取り出した。

「全部縫わせるのは無謀だと思うけど、せっかくなら桜田さんたちにこの型紙とフェルトを見てもらって意見をもらうのもいいかもしれない」

「え、立村？」

思ってもみない反応だったのか戸惑っているのは東堂のほうだった。

「そう、俺も今思ったんだけどさ。型紙と一緒に渡して、どうすればきれいに見えるかとかそういうことを意見もらったほうがいいんじゃないかって気がする。清坂さんも後輩たちに面倒なこと押し付けることについては大反対すると思うけど、ファッションセンスのいい後輩たちの意見をもらってよりよいもの作るというのだったら大賛成するよきっと」

立村は型紙を広げじっくり眺めた後、

「俺からも清坂さんには誤解されないように伝えておくから、東堂からできればあのふたりに、フェルト手芸に関するアドバイスをもらいたいと伝えてもらえないかな。きっとそう言えばあのふたりは喜ぶよ。東堂もたぶん感謝されるんじゃないかな」

殺し文句らしきものを放った。

2 1 初めての学校祭（1）

いったん動き出すと流れは速い。意味なしと思っていた規律委員会の制服マスコット作りから始まり、ど派手な蛍光カラー制服を身にまといクラスに学校祭注意事項チラシを撒いたり、はたまた周囲をあちらこちら歩いては先生たち……なぜか生徒たちではない……から面白そうに写真撮影されたり、気がつけばあっという間に学校祭当日と相成った。

「おとひっちゃん、青大附高の学校祭、私たちも行っているよだねえ」

母も乙彦の「幻の制服」姿をぜひこの目で見たいとのことで近所の人たちとツアー組んで乗り込むとのことだ。しかもその中には内川の母までいる。本当は母になどあの蛍光黄緑学ランなど見せたくはなかったのだがベルト部分の調節とか丈出しとかいろいろあって頼らざるを得ない。ゆえにあの怪しげな制服姿を十分家の中で見慣れているにもかかわらず、なぜ来ようとするのだろうか。

母に尋ねるとあっさり返事が返ってきた。

「内川くんのお母さんがねえ、あのお坊ちゃんにどうしてもお礼を言いたいというのよ。一番の目的はそれなんだけど」

——片岡へのお礼か。

それならしかたない。片岡は委員から外れていることもあり、乙彦を交えないところで内川と連絡を取り合っているようだ。まだ確認していないがしょっちゅう家に呼んでは徹底的に英語を教えているらしいと聞いた。もちろんそのあとのディナーとして焼肉かもつ鍋かどんこつラーメンか、そのあたりを平らげビデオで時代劇を仲良く鑑賞しているところまでは想像がつく。

「母さん、内川、どうしてるか聞いてるか」

しばらく忙しくて連絡を取っていなかった。一応学校祭のパンフレットは送っておいた。

「あんたからもらった学校祭のプログラムを枕元において寝てるらしいわよ」

もう本気だ。あとは片岡に任せる。お坊ちゃまオーラを撒き散らしている片岡であればたやすくすむだろう。

朝一番のバイトをすませ学校に向かう。ど派手制服はすでにアイロンをかけてもらい学校のロッカーにセッティングしてある。校門前もすでに学校祭用の立て看板が用意されているし縁取りも金銀の派手なテープと紙の花で溢れている。確か美化委員が学校祭の美術関連はすべて担当していると聞いている。

グラウンドからは放送委員たちがメガホンを持ちながらテントを組み立てている。プログラムによると三年のあるクラスが野外劇を企画しているらしい。噂によると観客をも劇に引きずりこむという冒険的な内容だという。某時代劇マニアの彼と似たような発想だと思う。教えてやればよかった。

教室に向かう途中で難波とすれ違った。もっとも向こうは乙彦に気づいていない様子だった。これもプログラム情報によると、音楽委員は学内演奏会の準備にこき使われていると聴く。本番は明日の夕方なのだが、いろいろあるのだろう。疋田が出演するのでクラスの有志たちと応援に

行こうと決めている。花束も古川が用意してくれるはずだ。

——それで、評議委員会は。

たぶん藤沖、古川、および静内も忙しいのではないかと思う。めずらしく今日は顔を合わせていない。評議委員会と言えば実際は学校祭の元締めみたいな立場のはずだ。仕事がないわけがない……と思った矢先、聴きなれた声が聞こえた。腹から出した男気のある声。

中庭から聞こえてくる。

「みな、腹から声を出せ、いいな！」

「おっす！」

「声が小さいぞ！」

「おっす！」

——藤沖か。

全く気づいていないわけではなかった。評議の仕事がどんなものかまでは確認とっていないが、藤沖はやはり委員の立場を捨ててできたてほやほやの応援団を仕込んでいるようだった。めんどくさいので邪魔せず乙彦はすり抜けた。

「おはよう！ 関崎くん！」

後ろから声をかけられた。もうわかっている。今日のアイドルユニットのひとりだ。乙彦は振り返り挨拶を返した。

「おはよう。早いな」

「関崎くんだって同じくらいじゃない。そうだ、関崎くんもう着替えちゃう？」

清坂は手提げかばんだけをぶら下げていた。学校祭はさすがに授業がないので皮のかばんなど必要ないのだ。よって学校祭期間中はみな思い思いのバックを持ってくる。

「時間あるうちにそうしたほうが面倒くさくないだろう」

「そうだね。私もそうする。楽しみね」

うきうきわくわく気分が溢れているのがわかる。お下げ髪にきっちりむすび、ひまわりパワーを抑え目にした清坂の姿は意外と似合っている。

「規律委員会も最後の最後で楽しいイベントに参加できてよかった！ ほんっとそう思うよね」

「確かにな」

清坂の言う通り、このままだと規律委員会イコール違反カード切りくらいしか仕事がないのではとうんざりしていたのだが、学校祭にがっぷり四つで組む形で参加できるのはやはりうれしいことだ。ただの傍観者ではなく、やはりしっかりとっぷり学校祭に浸かりたい。たとえど派手な学ラン姿でうろちょろするとしても。

とりあえず男子更衣室で着替えることにした。道すがら乙彦は清坂に最近気になっていたことを尋ねてみた。

「清坂にひとつ聞きたかったんだが」

「なあに」

「最近、東堂とうまく話ができているようだが」

きょとんとした顔で清坂が立ち止まり、首をかしげた。

「私、普通に話してたけど」

「清坂はともかく東堂がこだわっていたようだが、わだかまりがなくなった感じがする」

「あっそっか。そう見えてたかあ。そうだよな」

ひとりで清坂は納得したように頷き、お下げ髪をなでた。

「東堂くんからなんも聞いてない？」

「ない」

「南雲くんからも？ 立村くんからも？」

「ない。俺が不思議に思っただけだ。もし水どけムードならそれはそれに越したことはない」

「そっか。内緒にしてくれてるんだね」

それ以上は何も言わず、清坂はB組の教室に入る寸前に手を振った。

「じゃあ、朝のホームルームが終わったらすぐ職員玄関前に集合ね！」

すでに一年の教室はすべて椅子も机も展示用に並べ替えられていた。ゆえに朝のロングホームルームが始まるまで立ちっぱなしでいざるをえない。A組の教室は生徒玄関から一番近いこともあって、第一休憩室として椅子が点在しているが、人数分はない。机もそれぞれ島に固められていてテーブルクロスがかかっている。みな、班行動するときのようにそれぞれ椅子に腰掛けた。立村が吹奏楽部の連中としゃべっているのが見えたので挨拶だけしておいた。

——何かあったんだろな。

マスコット作りを終える頃から、あれだけ険悪だった清坂と東堂との間にふつうの空気が漂うようになった。清坂も笑顔で「東堂くん、ありがとう、すごいね」と声をかけるし東堂も「ああどうもどうも、こっちこそ」とこれまたへらへらと受け入れる。一時期の慇懃無礼なやり取りに規律委員たちもびくびくしていたためなおのことその変化には驚かされる。

本来なら南雲あたりに聞くのが筋だろうが乙彦もそこまでずうずうしくはない。

何か、お互いを認め合えるような出来事があったのだろうか。

——立村あたりなら知っているかもしれないが。

すぐに考えるのをやめた。人間、かならずどこかで理解しあえるところがある、それを知っているのは乙彦自身のはずだ。

そういえば雅弘は学校祭、来るつもりあるのだろうか。せっかく学校祭パンフレット送ったのに、返事ひとつよこさない。

2 1 初めての学校祭（2）

朝のホームルームもそこそこに、三階の生徒相談室をアジトとし規律委員は全員集合した。玄関から遠く万が一何かあっても駆けつけにく場所だとは思っているのだが、借りることができたのがそこしかないのだから仕方ない。蛍光黄緑学ランとセーラー風姿の三人にそれぞれ三人ずつ委員がくっついていき、来客にビラを配って回る。内容はたわいもないものだが、先輩方の提案もあり幻の制服に関する歴史などをちらと載せてある。その上で、廊下を走らない人とはぶつからない紳士淑女な振る舞いに徹底してほしいなどと綴ってある。

「チラシを配り笑顔を振りまくことで余計なトラブルを未然に防止できるだけでなく、幻の制服をきっかけにお客さんも盛り上がるかもしれないし一石二鳥！」

——そうなのか？

疑問はあるが南雲も清坂も笑顔なので合わせておく。やることが少ないに越したことはない。もしあまりにも目に余る来客や生徒がいれば注意する義務はあるし違反カードも用意してある。場合によってはすぐ先生を呼んで対処してもらう必要もある。

「まあこの数年間はそんな危険なことはなかったよ。そんなに気にしないで」

「え、でも出店で火を噴いたり他校の生徒と決闘したりといろいろあったじゃん」

先輩方の思い出話に口を挟む南雲。

「なんすかその決闘って」

「それがねえ、大変だったのよ。ほら、私らの同期に評議委員長の本条くんいたじゃん。あいつが中学でぶいぶい言わせてから狙ってきた連中が結構いたんだよねえ」

「野郎がですか？ 本条さんそもそもこの学校いないでしょうが」

「いや、それ知らないで本条くんを勝負もちかけてきたアホがいてね。同期の奴がお手合わせしようとしたんだけど結局止められてちゃんちゃん。うちの学校の気の抜けた運営はそれがきっかけかもよ」

——さりげなく重要なこと話してないか？

つまり今までは学校祭実行委員会が寝る間を惜しんでイベント作りをしてきたのが、他校とのバトルがきっかけで毒にも薬にもならない祭に成り下がったのだから。

「そっかあ、本条さんも罪な男ですねえ。ま、とにかく俺たち規律委員の目標はなにごともなく祭を終了させる、これっすね」

髪の毛をかきあげて南雲は微笑んだ。

「まかせてください。ほら、みなさんマスコットの装備は整ってますか」

「はい！」

清坂の声と一緒に女子たちも手を挙げてマスコット二体をふりふりさせた。

「それと、できれば俺の提案なんすか」

南雲は続けた。

「使い捨てカメラみんな一台ずつ持ってるってことで、必要とあればお客さんと記念撮影しましょうや。俺たち制服部隊も協力しますから。そいで住所もらえる人からはもらっちゃって後で写

真送りましょう！」

最初から予定していた内容だが南雲が切り出すとどこことなく特別な匂いがする。

「よっし、じゃあいくぞ。南雲はまず一階から二階に、清坂は三階から一気に降りて玄関回り、関崎は外に出てグラウンドを一周だ。走るなよ」

それぞれのテリトリーを決めた後、それぞれ解散と相成った。

女子たちはみな南雲と清坂にくっついていったこともあり、結局乙彦にはりついているのはむさい男子の先輩ばかりだった。一年がひとりもいないというのはどういう振り分けなのか。不公平と思わずにはいられない。

「さて関崎、お前さんもこれで完璧に青大附高の生徒に染まったなあ、えらいぞえらい。結城が目をかけていただけあるぞ」

肩を叩かれつつ外に出てグラウンドを回る。すでに子どもたちが入ってきていてボール遊びに興じているし親たちもそれなりに出店で焼きそばに食らいついていたりする。チョコバナナ売りもいるしなぜか「かつおーかつおー」とか言いながら江戸時代の魚売りっぽく歩いている奴もいる。ポーズだけで中には風船のみ。子どもたちが欲しがってくっついてきているが配る気はないらしい。

何がテーマなのかはよくわからないがそれなりに賑わって入るようだ。

「先輩、青大附高の学校祭のテーマは確か」

「路を切り開け！」

「それってテーマなんですか」

学校側で勝手に与えられたテーマ。大抵は生徒か生徒会か学校祭実行委員会が決めるものではないかと疑問なのだが、誰も不思議に思っていないらしい。

「去年とは違ってるがまあいいじゃあねえのか。俺たちも道切り開かないとまずいお年頃だし」
——いいのかこれで。

なんだか教師たちに骨抜きにされているようだ。今回の学校祭準備を通じて思ったことだが、どうも青大附高の二年先輩たちはあまり上からの管理に抵抗を感じずあっさりを受け入れる奴が多そうだ。どう考えても反発食いそうだったマスコット作りや緑のマフラーファッションも、結局楽しげに受け入れられてしまった。普通だったら下級生の分際でとかなんとか鬨聲かいそうな気がしたのだが。

「先輩、このマフラーはどうですか」

一周のんびり歩き、時折ビラ配りと写真撮影に応じつつ、乙彦は尋ねた」

「俺たち一年が勝手に決めたものですが、先輩たちも何かしたいことがあったんじゃないですか」

「うんにゃ、ねえよ」

機嫌よさげに返事が返ってきた。

「南雲、なっかなかいい案だよなあ。別に俺たちも無理に仕事したくなかったけど、マフラー程度で、しかもほとんど南雲たち一年が準備してくれたらあとはらくちんだよ」

「そういうものですか」

乙彦の言葉は全く耳に入っていないようすだった。先輩たちは客を見つけては愛想良くビールをくばり、幻の制服に関する説明を熱心に行い、最後は乙彦を並べて写真撮影し住所を聞く、この流れを忠実になぞっていた。

——噂に聞いたとおり今の二年の人たちは、あまり行事に対して情熱的ではないな。一年の意見を柔軟に取り入れる気持ちはあるようなんだがなんでだろうな。

しばらくふらふら歩いていると、不意にひとり、二年の先輩がグループから一気に駆け出した。

「おいおい、どうしたよ」

「ちょい、見ろ見ろ、あいつは！」

突然他の先輩たち……三年の先輩含む……も立ち止まり、じっとその相手を観察するように腰をかがめた。

「本条だよ」

「本条がか？」

「まじですか本条くん」

先輩たちがみな声をそろえてその名を呼ぶ。乙彦もその視線に合わせて様子を伺うと、そこには目つきのやたらと鋭い、背の高い男子高校生がじろじろとこちらを見ていた。

「先輩、あの人は」

「ああ、さっき話題で出てきただろ。去年の学校祭で決闘のネタになっちゃった奴」

三年の先輩が顔をにやつかせながらささやいた。

「つまりな、あいつがな、伝説の本条里希だよ」

「本条……？」

口元で繰り返す。いまひとつぴんと来ないがあの顔には覚えがある。

「本来であれば二年のトップリーダーとして大活躍してたはずの本条だよ。成績優秀だがスケベも超一流、本条の目で女子はみな妊娠するんでねえかってくらいの色男」

「色男……？」

乙彦が鸚鵡返しする中、さらに詳しく二年先輩がほざく。

「本当になあ、本条さえいればこんな俺たちの代、骨抜きにならずにすんだのになあ。ったく、なんであいつ青瀉東に行っちゃったんだよ、ちくしょう！」

こちらに近づいてくる気配もなく、駆け寄って言った先輩も戻ってきた。どうやら乙彦たちに挨拶するつもりはないらしい。

「本条、何しに来たんだ？ まさか女の調達か」

「違う。結城にまず会いたいんだと。それからほら、あいつの弟分も探したいらしいぞ」

「なるほどねえ。出来の悪い弟ほど可愛いつていうからなあ」

三年の先輩がふと乙彦に尋ねた。

「そういえば関崎、お前A組だったよな。英語科」

「はい」

「立村、どこ行った？」

いきなり立村のことを問われ硬直するものの、すぐに答えた。

「確か大学の留学生がらみのイベントで通訳の手伝いするようなこと話してました」

「どうもな、じゃあつたえておっか」

二年の先輩がそれを聞きつけ、許可を求めるように片手を挙げた後すぐ駆け出していった。すぐにその本条という生徒に追いついて詳細説明している様子だったが声は聞こえない。

「先輩、立村とあの人は何か」

「お前知らねえの？ それはまずいぞ、もぐりだぞもぐり！」

背中を思い切りぱしっとやられた。ひとりやふたりではない、全員に。

「本条と立村はまじで義兄弟の契り交わしてるからな。うっかり会い損ねでもしてみろ、立村のことだからどういうしっぺ返し食らわせるかわからねえぞ。関崎覚えといたほういいぞ。困った時は本条がそう言ったとか言えば立村、一発で言うこと聞くからな。まじ秘法だぞ」

——そうか！ 不覚だ、忘れるわけじゃないか。俺の記憶力をなめるなよ。

やっと思い出した。あの本条先輩なる人とは何度か会ったことがある。めがねかけてなかったからぴんとこなかっただけ、一度青大附中の生徒会室で顔をあわせたじゃないか。立村の前の、銀縁めがねの評議委員長。やたらと懐いていた立村が印象強すぎて相手を忘れていたがめがねをイメージでかけさせてみればすぐに気づく。立村が心底崇拜し切っているかの人だ。

2 1 初めての学校祭（3）

それぞれ学年によって学校祭中の仕事は割り振られている。それぞれ「幻の制服」姿でのし歩いた後休憩をはさみ、再度ぐるぐる回る。大抵高校内の出店は三時半頃にいったん終了し、夜の部の準備へと進む。夜は野外演劇やフォークダンスなどが中心だが、外に出れば次は体育委員がすべて賄ってくれるので昼ほど動き回らずにすむ。そんなこんなで一日目はあっさり終わった。

——これだけでいいのか本当に。

公立の水鳥中学ですらもっと仕事があつて盛りだったはずだ。先輩たちに聞くと、「一年の仕事は学校祭が終わってからだよ。記念撮影しまくった写真を生協で現像し、いただいた住所にお礼状を書いて送る。記憶に残っている限りの会話内容をイメージして、例えばうちの学校を受験する予定の生徒には応援メッセージを、OB・OGの皆さまには労いを、いろいろと文面を考えるとこのわけだ」

「先輩、これは伝統ですか」

「いや違う。清坂ちゃんの発想」

知らなかった。あとで清坂美里に確認すると当然のように、

「そうよ。これ、評議委員会でも学校祭だけじゃなくいろいろなイベントの時やってたことそのまま取り入れただけ。だってうれしいと思うよ。目指している学校の先輩から応援メッセージもらえるって感動しちゃうと思うよ」

返事が返ってきた。どうも南雲と清坂が一年規律委員の中では積極的に提案をし、どんどん取り入れられている様子が伺える。それも乙彦の知らないところでどんどん進んでいるらしい。蚊帳の外はあまり気持ちがいいものではない。

「それを規律委員全員に伝えたのか」

「伝えてないかもね。みんな常識的に認識してると思ってたし」

「俺は聞いてなかったんだが」

「あ、そっか、ごめん！」

あっさりと流された。つまり外部入学者には初めてのことで、内部持ち上がりの生徒たちにとってはごく日常のことらしかった。

「清坂のやる気は買うが、できればそれは全員に告知してもらいたい。俺も手紙を書かねばならない以上、筆ペンを用意したり練習したりする手間がある」

「まさか、関崎くんそんな気張ったことするわけないって！ 私たち、それこそ蛍光ペンでメッセージカード書いたりする程度なんだから！」

ちっとも気にしていない様子で清坂は笑った。まだまだ二日目、三日目と続くのだから深い突っ込みすぎるのも無駄だろう。どちらにしても文字をきれいに書く練習は急いでしておかないとまずい、それだけは確認した。

二日目は土曜ということもあって、人出もざっと見た限り倍に増えている。すれ違う人が一列ではなく二列に広がっているところからも明らかだった。それでもすることはほとんど同じで、

撮影タイムの回数も増えている。ただ「幻の制服」と「制服マスコット」をぶら下げて歩いているだけというのに、年配のOB・OGらしき人たちが涙ぐみつつ写真に納まる姿が乙彦には不思議だった。

「タイムスリップ感覚なんだよ、みんな」

また三年の先輩がしみじみつぶやく。

「もう俺たちの青春は終わったよ、という再確認なのかねえ」

「だがこの制服は、大先輩たちもご存知ないのではないのでしょうか」

「ないけど、やっぱりそれなりの想いがあるんだろうなあ」

時々、煙草を吸う場所を探している来場者に控えめな注意をしたり……一応禁煙なので……、ナンパしている男女にはさりげなく立ち止まり鋭い視線を浴びせたりと、乙彦なりに規律委員としてどう対処すればいいかは大体つかめてきた。

また、二年、三年の先輩たちもいろいろ思うところあるようでしょっちゅう乙彦に、

「ほら、生徒会室にちょっくら顔だしてくっか」

「ほら、来賓用喫茶室行くか」

「ほら、茶室もあるぞ」

声をかけて強引に引きずり回す。行ったところで何をすることもなく頭を下げたり二言三言話をしたりとその程度なのだが、先輩たちの気迫がその時だけ違う。

「こいつ、規律で外部入学の関崎です。よろしくお願いします」

何を頼んでいるのかわからないが乙彦を紹介してやたらと頭を下げさせる。先輩に逆らう気はないが、少し強引なような気もする。尋ねてみた。

「先輩、いったいなんで俺を紹介するんですか」

「結城からの命令だよん」

たいしたことなさそうに三年先輩は語る。

「結城は評議委員長だし、お前も結構目、かけられてるだろ。けどお前外部入学だからまだOB・OGのみなさまや生徒会のみなさんとかには顔知られてないから、この機会を利用してってことだよ」

「それで本当にいいんですか」

何か先輩たちの立場が心配になるのだが、みな口をそろえて言う。

「いっていいって、お前さんががんばってくれば青大附高の先輩たちが楽になるって」

——そうなのか？

二日目のメインイベントは、大学・高校・中学合同で行われる「学内演奏会」である。

昼の部は三時半に打ち切れ、同時に学内演奏会に出演する委員、もしくはクラスメートを応援したい委員は特別に仕事を免除される。一応乙彦も、A組の足田がピアノ演奏に参加するので申し出てみたところ、その時だけはよしということで許可をもらった。一時抜け、ということだ。

「いいなあ関崎くん、私も本当は聴きたいんだけど無理そうね」

清坂がため息をついている。その一方で南雲も、
「俺も本当はうちのクラスの瀬尾さんの応援行きたいんだけどそれはだめだとお許しでませんでした」

たいして残念そうでもない口調でつぶやいた。

「うちのクラスは人数少ないのと、合唱コンクールでいろいろトラブルが多かったこともあって、今回できるだけ応援しようという話になっているんだ」

「そっか。そうだよな。関崎くんえらいね」

他の委員たちも控え室で頷いた。決して乙彦だけが例外なのではなく、上級生たちにも同じ立場の人がいる。

「そういえば、りっちゃんも行くって言ってたよな」

南雲が学ランの前ボタンをひらきながら清坂に尋ねた。

「言ってた。ものすごく楽しみにしてるみたい」

「ピアノが好きだから？」

「それもあるけどね」

清坂は言葉を濁しつつ、乙彦の顔を覗きこんだ。膝に制服マスコット二体を載せてなでている。同席している先輩たちに聞こえないようにささやいた。

「関崎くん、お願いあるんだけど」

「聞いただけ聞かなくて受け入れられないこともある」

「たいしたことじゃないんだけど」

南雲にも聞かれたくないらしく、席を乙彦に近づけ耳元に口を近づけた。

「演奏会でもし、立村くんが離れたところに座ってたとしても、絶対声かけないであげてね」

「なんでだ？」

そういえば立村も、足田応援ツアーには参加できないようなことを口にしていた。ピアノに集中したいとかなんとか言っていたが。

「たぶん、杉本さんと一緒だと思うの。自分では言わないけど、たぶんね」

また膝のマスコットを握り、

「あの人のことだからできるだけ目立たない席に座っていると思うし、杉本さんと関崎くんの顔をできるだけ合わせたくないと思ってるはずだから、できるだけ知らん振りしてあげてね」

理由は飲み込めた。

「わかった。前もって言ってもらえて助かった」

素直に感謝の言葉を告げると、清坂はすぐ元の席に戻っていった。

2 1 初めての学校祭（4）

四時半までは後片付けに専念し、その後急いで乙彦は青潟大学講堂へと急いだ。

今まで一度も足を踏み入れたことのない環境ということもあり緊張するところもあるのだが、やはり学校祭の雑然たる雰囲気にも勇気付けられた。高校内も結構外部三人組で探検したのだが、まだ未知の空間大学が残っている。学校祭が終わったらぜひやろうと思う。

——あいつらも委員会で忙しいんだろうな。

静内とはほとんど顔を合わせていない。名倉も学校祭中はほとんど参加せず塾に行くとか言っていた。外部三人組で空いている時間うろうろする楽しみも実はない。まあいい、学校祭が終わったらいろいろ感想など聞いてみよう。

乙彦は講堂の前に彩られた薔薇の花輪を眺めた。あちらこちらに飾られている花の鉢植えや胡蝶蘭など、かなりのにぎやかさ。雰囲気がやはり高校とは違う。名前も入っている。だれだれさんへといった風に贈られてきたものが並べられているようだ。

「関崎、早いな」

声をかけてきたのは一年A組の男子たち五名ほどだった。片岡も混じっている。

「あれ、制服着替えたの」

片岡が目を丸くして言う。こいつらも一応は規律委員の任務中だった乙彦の格好を確認しているはずだった。

「当たり前だ、あんな派手な格好して歩くなんて常識的にはしんどい」

「でも明日も着るんだろ？」

「規律委員だからな」

みなけらけら笑った。時計をみな覗き込みつつ、

「あとは藤沖が来るかどうかだな」

それぞれ頭を着き合わせて話している。来ないとは思えないので聞いてみた。

「藤沖は来ないわけないだろう」

「いやわからんぞ。さっき女の子といちゃいちゃしてたぞ。学ラン姿でさ」

よくよく聞いてみると、藤沖は中学三年の曰くの彼女とふたりでなにやら語らっていたらしい。どういう内容なのかはわからない。ただ青大附高では着ることのほとんどない学生服を応援団ファッションとしてしっかり着こなしている藤沖が実に目立っていたというのは事実のようだ。

「ほら、生徒会の子で、ヘアバンドかけてたあの子」

「ああ、最近付き合いたしたんだよな」

「いろいろ噂もあるけどまあ、藤沖にも春が来てよかったよな」

片岡はその色話に加わらず、乙彦にささやきかけた。

「明日、内川くんが学校に来てくれるって話してたよ。家族で来てくれるんだって」

「ああ、うちの親もセットかもしれない」

うれしそうに片岡も口元をほころばせ、

「うちの学校の下見は絶対したほうがいいと思ってたんだ。俺が全部案内してもいいかなあ」

「お前時間あるのか」

「あるよもちろん。きつとうちの学校広いから迷っちゃうかもしれないね。いろいろ連れていきたいけどどこがいいかなあ」

入り口でたむろっているのも何なので顔をあわせた連中みなで講堂に入った。講堂というよりもどこかの高級な劇場みたいな雰囲気ですべてが扇形に席構成されている。学生よりも近所に住んでいる人たちとか、出演者の家族とか、明らかに年齢層の高い人々が中心だった。一言、場違い。

「どの辺に座ろうか」

「前にしようよ、前」

なぜかまん前の席は人がほとんどいなかった。遠慮なく一年A組連中で陣取ることにする。みると同じことを考えているのは他クラスも同じようで一年C組の群れも見かけた。天羽、更科、難波の三羽鳥も揃っているが羽飛はいない。南雲は当然のことながら規律委員を優先しているのでもない。女子もかなりの数揃っている。

「うちのクラスの女子たちはどうなんだ」

「あ、さっき会った。疋田ちゃんに花束持ってったぞ。A組代表ってことで。けどあれだなあ、花束よりああいう風に鉢植えみたいな方がよかったんか？」

よくわからないが、みな疋田のピアノ演奏を楽しみにしていることだけは間違いようだ。乙彦も歌う方は好きだがピアノ楽曲については不案内だ。正直寝ないで聴いていられる自信はない。それでも、合唱コンクールのトリを飾った「モルダウの流れ」の感情豊かな演奏を忘れることはできないだろう。その想いを載せて聴けば、たぶん、眠気には打ち勝てるはずだ、たぶん。

「関崎、関崎」

「どうした」

「あれ」

通路脇に座った片岡が、隣りから乙彦をつついた。黙って小さく後ろの席を指差した。向かって右後ろの斜め端目立たない席だった。まだやわらかい照明で照らされているので誰が誰だかは遠めでも見分けられる。片岡が唇を少し尖らせるようにして俯いた。言葉はなかった。

二人組の男子と女子が、静かに会話をしている様子が伺えた。

——ほんとに目立たない場所にいるなあいつ。

清坂がもし前もって教えてくれなかったら乙彦もたぶん、そこに座っている奴を無理やりA組チームに引きずりこんでいただろう。さらに泥沼と化していたような気がする。このやたらと豪華な会場だとたとえ隅っこに隠れていたとしてもピアノの音色は響き渡るだろうしあいつが願っていた通りに思い切り音楽に没頭できるだろう。

邪魔をしてはならないということだけ、胸に刻んだ。いつのまにか藤沖もひとりでA組グループの席に混じっていた。連れはいなかった。

「ぎりぎり間に合ったぞ。女子たちはまだか」

「そろそろ来るんじゃないか」

話をしているその脇から、A組の女子たちも現れた。やはり演奏前の疋田を応援するために楽屋へ駆けつけていたとのことだった。古川がないのが意外だった。

「古川はいないのか」

「ああ、評議の仕事が長引いてるようだ」

「お前も評議だったはずだが」

「男子評議は早めに仕事が片付いた。いろいろ面倒なようだ」

あまり細かい説明をせず、藤沖は乙彦と片岡に語りかけた。

「とりあえず疋田の演奏が終わったら会場抜けてどこか食いにいこう」

食事のお誘いだが乙彦はきっぱり断った。あたり前だ。規律委員の仕事はまだ夜まで続くのだ。評議委員会がどれだけ暇なのか知らないが。

「悪い、片岡と一緒に行ってくれ。俺は規律の仕事がまだある」

「俺も今日は、早めにうち帰らないとまずいんだ」

片岡にもあっさり振られ、しかたなさげに藤沖はため息を吐いた。

会場が暗くなり、やがて最初の曲を演奏すべく、結婚式のお色直しを思わせる派手な衣装の女子が現れ丁寧に礼をしている。乙彦は疋田の順番を確かめ、しばらくは耐えることにした。六番目だった。

いい曲なのだろうが退屈なことには変わらない。それでも疋田が緊張気味に弾き終えた「トルコ行進曲」はテレビのコマーシャルで耳慣れていたせいか繰り返しの部分を楽しく聞くことができた。知っているかどうかは大きな違いだと思う。上手かどうかはわからないが乙彦の頭には、「トルコ行進曲」のメロディを使ったテレビアニメやドラマ、CMのイメージだけが繰り返されていた。上手なことには変わらない。

「じゃあ私、もっかい楽屋行ってくるね！」

女子たちの他、男子たちも勢いよく追いかけていく。藤沖も乙彦たちに後ろ髪引かれるような顔で振り返りつつ姿を消した。じっくり聴いているのではなく出番が終わった段階でみな、楽屋に駆けつける。そんなグループがほとんどだった。その中で全く身動きしないふたりの姿が気にかかった。

「関崎、どうする、出て行く？」

「そうだな。俺も規律委員会に戻らないとまずい。制服も着替ええないとな」

次の演奏者……C組の瀬尾と聞いたが……が始まるまでに少しだけ間があるのを幸い、乙彦は片岡について急ぎ足で後ろ出口へと急いだ。何を考えたのか片岡が舞台のまん前を腰かがめてすり抜けていくのを追った。思い切り大迷惑じゃないかと思うがすばしっこくて追いかけるのに精一杯だった。たったか歩いていく片岡は、向かって右端にいる二人組の脇をすり抜けた。

——片岡、それはまずいだろ。

止める間もなく片岡はすり抜け、あっという間に後ろ側の扉を開けて外に出て行った。そのタイミングでだんだん灯りが落ちていく。そっと足音が響かないように乙彦もその脇をすり抜けようとした。通路端の立村と目が合った。

——やばい、気づいていたか。

立村は何も言わず、乙彦に片手を立てて拝むようなしぐさをした。

その隣の席にいる女子の姿にすべてを悟った。

葉牡丹を抱きしめて現れたかの女子は、立村の隣りで目を閉じたまま静かに眠り続けていた。乙彦に出来るのはそのまま足音忍ばせて講堂を出ることだけだった。

「

2 1 初めての学校祭（5）

とうとう学校祭最終日を迎えた。規律委員の集合場として三日間たむろった生徒指導室でのひとは、乙彦が想像している以上に濃密なものだった。三学年が入れ違い顔を出しては去っていき、時々先生たちが差し入れの飲み物とお菓子を持ってきてくれたり、今まではゆっくりおしゃべりしたことのない奴らと膝を突き合わせて語り合ったり。

南雲と東堂のふたりとも、この三日間でだいぶ腹を割った話ができたとような気がする。なにせ「規律委員会アイドルユニット」なる怪しいトリオを組んだ立場だということと、それにプラスして同じ「みつや書店」のバイト同士。共通点はそれなりにある。南雲たちがどう思っているかはわからないが、乙彦からすると結構骨のあるいい奴のように思えた。

「今日は最後のご奉公だけど、よろしく。あ、それと今日もバイトは」

「日曜だから休みだが」

「そうだよなあ。あ、そうだ、みつや書店のおばあちゃんが来てくれるかもって話をしてたからもし見かけたら俺のところにぜひ遊びに来てくれってこと伝えといて」

南雲が「幻の制服」をしっかりといながら乙彦および周囲の連中に声をかけた。

「お前は意外と年増受けするからなあ」

先輩たちが笑いながらからかう。南雲も軽く受け答えする。

「そうなんですよ、俺、人生経験豊かな女性が好きなんで。もうこれ、ガキの頃からそうなんで」

この辺も学校祭前の乙彦であればけっとそっぽむいていただろうが、この三日間でだいたい把握した。南雲のおばあちゃんっ子ぶりは相当なものだったらしく、その延長上でみつや書店の店長さんたちに愛想を振りまいているということ。心底、お年寄りはいたわるべき、いやいたわりたくてならないというオーラが溢れている奴だということ。

——人は見かけによらないと聞くが、まさにそうだな。

「わかった。伝えておく」

「助かるなあ、関崎サンクス。やっぱりちゃんが言ってた通りだなあ、な？」

最後の「な？」は東堂に語りかけたものだった。どういう反応があったかどうかはわからないが、立村が以前より乙彦のことをよく話してくれていたらしいということだけは伝わった。ありがたいことだった。

——立村は、今日はどうするんだろう。

昨夜の学内演奏会で見かけた立村との視線の交わし合い。今朝も一応教室で挨拶はしたが詳しいことは問わなかった。一緒にいた片岡も口を閉ざしたままだったので立村がかの女子とふたりきりで過ごしていたことを知る奴は少ないらしい。

——まあいい、今日は内川たちも来るしな。楽しみだ。

今日は南雲と清坂が一時抜けをしたいとのことで、昼休みの休憩プラス一時間は乙彦が規律委員会アイドルユニットの残り部隊としてさまようことになる。中を見て歩きたい気もなくはない

のだが、野郎の先輩方に説明してもらいながらそれなりの目的を持って見ていくほうが面白くてあえて残った。

「関崎、今日は誰か来る予定あったりするの？」

「はい、中学の友だちと後輩が来るはずですよ。うち、後輩は来年うちの学校受ける予定なので下見させるつもりです」

もちろん内川のことである。

「二年連続水鳥中学合格者が出るかってとこか」

「正直厳しいとは思いますが応援するつもりです。このマスコットもそいつにやろうかと思っています」

たらたらしゃべりながら蛍光黄緑の学ランをきっちり羽織り廊下をうろつく。先輩たちにつつかれ振り返ると、結城先輩が楽しげに乙彦を手招きした。先輩たちも手を振っている。

「どうだね、関崎くん、青大附高の学校祭は」

「はい、充実してます」

「君の噂はさすがによく流れてきているよ。もちろんいいほうにね」

見ると結城先輩の手には巨大な紙袋がぶら下がっている。ちらっと見えたものは古本の山らしい。アイドル雑誌だということだけは表紙カラーの雰囲気からだいたい伺いしれた。

「図書館がバザーやっててね。大収穫だったよ。貴重な雑誌がたくさんだ」

結城先輩の同級生たちが「どらどら見せろ」と覗き込み手に取ろうとするのを「これこれ、失敬な」と振り払う。相当「日本少女宮」のグラビアがたくさん見つかったのだろう。

「ああそれと、皆の衆、頼んでおいた件についてはどうかなあ」

「オッケーっす！」

なぜか先輩たちが親指立てて結城先輩に合図している。三年だけではなく二年もそうだ。なぜなのか。

「よしよし。ではまた学校祭の後にお会いしよう。さらばじゃ」

「さらば！」

頭を深く下げて見送ったのは乙彦だけだった。さすがに先輩に対して「さらば！」の一言を口にはできない。

職員室前を通りがかると、やはり周回中の南雲と女子の軍団が立ち止まっている。愛想良く振舞う南雲になぜか声をかけているのが名倉だ。乙彦も本当は一步近づきたかったのだがかなり深刻な顔をしていたので聴きそびれた。あとで確認しよう。

美術部の教室も巡回の名目でぐるりと足を運んでみた。規律委員の先輩でひとり、やたらと芸術にうるさい人がいて一点ずつ評価を下していく。その声でかえってお客さんが引いているような気がするのだが、とりあえず規律委員としての仕事として歩くことに専念した。羽飛の絵も見かけたが乙彦には理解しがたい斬新な色使いに啞然とするのみ。乙彦には音楽にしる美術にしる観賞するという才能はないようだった。

「よし、次は結城印のお墨付きたる図書館バザーの巡回だぞ。当然、違反がないかどうかじっくり本を手に取り確認しような！」

いかにも下心ありありの台詞を吐く先輩に爆笑しつつ、図書館に向かった。図書館員といえば古川こずえがいるはずだがたぶん評議委員の仕事を優先していることだろう。またいきなり「青いわねえその制服、青いのはあそこの先っぽだけでいいのよん」とか下ネタ女王様の洗礼を受けないで住むだけまだましか。

足を踏み入れたとたん、声をかけられた。

「関崎先輩！」

すぐに誰だか気がついた。乙彦は先輩たちに頭を下げてすぐそいつに近づいた。もうとっくに師弟愛あふれるコンビは一緒に行動している。

「内川、ずいぶん早かったな。それに片岡も」

「そうだよ、朝一番に来てほしかったからそう伝えておいたんだ」

片岡は今朝のぼんやりした面とは打って変わってすっかりお兄さん風を吹かせている。「兄貴風」というには少しおとなしめ。日曜なのになぜか水鳥中学の学生服姿で登場した内川をエスコートしてやっている。見事な仮面である。

「図書館のバザーで買い物するのか」

「うん。ここで、内川くんが欲しがってたものいっぱい手に入ったみたいなんだ」

どこかで見た光景。内川も大きな袋に雑誌を大量に詰込んでいる。結城先輩と違うのはその雑誌がテレビ関連のものということだった。

「時代劇特集か」

「それもあるみたいだけど、ちゃんと問題集も入ってるよ」

「片岡先輩が買ってくれました。悪いです」

「古本なんだから気にしなくていいよ」

すっかりやさしいお兄さんの仮面をかぶった片岡に乙彦は小声で、

「内川のお母さんがお前に挨拶したがるぞ」

とだけ伝えた。ついうっかり調子にのっていつもの甘ったれ片岡に戻ったところを大人には見られたくないだろう。片岡も神妙に頷いた。

——それにしても、雅弘はまだか。

2 1 初めての学校祭（6）

一通り見て回りくたびれたところで生徒指導室に戻った。先輩たちもそれぞれ差し入れのドーナツやおにぎりを適にかぶりつきつつ、のんびりとおしゃべりに興じている。乙彦以外の一年生はいないがたいして寂しくもない。三日間の連れ立ち生活は結構身になるものがある。

「さてと、関崎。唐突なんだが」

三年の先輩が乙彦の制服をまじまじと眺めながら、

「これから先の人生設計考えてるか？」

いきなり堅い話と思いきや、二年の先輩がまぜっかえす。

「なに言ってるっすか先輩。一年坊主にそりゃないでしょが。もっと分かりやすく言ってやればいいじゃないですかねえ」

「わからねえ？」

もちろん分からない。乙彦はいそいでかじりかけのドーナツを飲み込んだ。

「あ、あの。全く」

「この三日間、なんでお前をあそこまでうろちょろ連れ歩いたか、わからないと」

「はい。説明していただくと助かります」

確かに乙彦も不思議には思っていた。いくら結城先輩の指示があったからとはいえ、なぜ先輩たちが乙彦を生徒会やらOB OGやらいろいろなところに売りこんでくれるのかが全く見当つかない。水鳥中学時代において先輩とは絶対権力の持ち主であり逆らうことはゆるされず、それゆえに乙彦は陸上部で総すかん買うはめとなったわけだ。青大附高ののどかな上下関係にいまだ戸惑うところもある。

二年、三年、ともに顔を見合わせる様子からして、なんらかのたくらみがあるのだろう。そのくらはわからなくもない。

「どうするよ」

「説明しといたほうがあとあといいんでないか」

「そうだな。もう日にちもねえし、他の奴もいねえし」

「そうだなそうだな」

全員意見が一致したらしく、次に三年の先輩が代表して語り出した。

「学校祭が終わったら、次の行事は何かわかるか」

「はい、実力テストと、生徒会役員選挙と、クラス合宿と、クラスの改選です」

「ご名答。実力テストはまだ先だろ。生徒会役員選挙あとじゃないか」

「はい、たぶん」

「ならば、お前、次期の委員会なんだがどうする気だ」

——どう答えれと。

まだ学校祭も終わっていないというのに何を考えているんだろうこの先輩たちは。

「まだわかりません」

「また規律やるのか？」

「それは」

言葉に詰まった。この三日間で規律委員会の面子が決してつまらない奴らではなく、イベント遂行能力にも長けた軍団であることはよく理解した。しかし、それと同時に結城先輩の言葉も耳に響く。はたしてフェルトにはさみをいれたり、ど派手な制服をまとって歩くようなことをこれからも続けたいと思うかどうか。重要なのはそこだ。

「んじゃ、早いうちに結城の見解だけ伝えとっか。規律委員会としても重要だからな」

先輩はじっくりと膝を付き合わせるようにして、その場にいる規律委員連中……全員先輩でかつ男子……を呼び集めた。小声で、

「お前、次の改選で生徒会役員立候補する気ないか？」

じわりと乙彦を見据えてきた。

——まじかよ、おい。

目の前の先輩方のかぶりつきそうな表情に、乙彦は息を呑んだ。

「あの、俺が生徒会、ですか」

「そうだ。なあ、おい」

そこにいる先輩たちがみな頷く。ということは本当のことか。

「俺、そんなに規律委員会に迷惑かけてますか」

「んなわけねえだろ、誤解すんなや」

やわらかく茶々を入れる先輩もいる。説明役の先輩がさらに続けた。

「はっきり言っとくと、お前が規律に来てから結城の命で関崎のことはいろいろ観察するようにしてた。気づいてなかったかもしれないがな」

「それほんとですか」

気づかなかった。なんてつまらない委員会だろうとか思っていなかった。週番と違反カード切りという地味な仕事ばかりで、学校祭がなければ失望で終わっていたはずだった。

「ああそうだ。結城がお前のこと目をつけてたからな。また俺たちもいろいろと学校内で面倒なことが続いていたということで、次期のスターを育成したいと思う今日この頃だったんだ」

「次期の、スターですか」

ますますわからない。顔をしかめてしまっているようだ。目の前で誰かが乙彦の顔まねをしているからよくわかる。

「そう。詳しいことは近いうちに結城から話があるだろうが、学校祭が終わった段階で生徒会役員選挙のこともちょこっとだけ頭に入れておいてもらえると助かるぞ」

「あの先輩、ひとついいですか」

乙彦はかろうじて口を挟んだ。

「俺はご存知の通り外部生で青大附高の内部事情は全くわかりません」

「わからねえでいいんだよ」

また茶々を入れる声あり。みな首を振る。

「俺がずっと関崎を観察してきた上での結論なんだが、お前、規律委員のカラーじゃねえよ。こ

うやって色物扱いさせてもらった今回の学校祭なんだが、ファッションとかそういうもんにはお前あまり興味ないだろ？ 正直に答えてみろ」

「はい、トレーナーとジーンズが一番です」

一部吹き出す先輩あり。

「南雲がこれから先、規律委員会を古きよきファッション倶楽部に仕立てようとしているがいかせん一年だし、クラス替えで下手に当たればまた二年以降委員に上げられるとも限らない。道のりは厳しいんだよ。だが、生徒会ならば少なくとも一年の任期は勤められる。外部生だからといって別に難しいことをやるわけじゃねえし、いきなり生徒会長に立候補しろというわけじゃない。とりあえず書記か会計、思い切って副会長というのもありだ」

「確かに俺は、中学時代副会長してましたが青大附高の雰囲気とは違うと思います」

あの修羅場な日々を思い返すとおぞけが立つ。

「じゃあだいたい生徒会の雰囲気はわかるな。んじゃ簡単だ。一応これ先輩命令として意識してほしいんだが、とりあえず次期の改選ではどっか役職選んで立候補してみろ。俺の知る限り他の連中が立候補しようとする気配はまだない。関崎がもぐりこむスペースはある」

「ですが、先輩俺は」

「いいな、とりあえず命令ってとこで。詳しくは結城に聞けよ。あのアイドルチラシ溢れる部屋の中で丁寧に教えてくれるだろきっと」

みな、結城先輩の部屋の中を思い浮かべているということだけはよくわかった。大爆笑したからだ。

「先輩、ただいま帰りました！ 関崎くん入れ替わりで見てきたら？」

清坂が戻ってきたこともあり、先輩たちはそれ以上の話をすっぱりやめた。

——いったいなんなんだこの急な話。

藤沖とはすでに次期評議委員を受けるということで話がついていた。あいつも乙彦が生徒会に色気あると勘違いしているようだしやはり推したような気配も感じていた。だがまさか、規律委員の先輩たちから熱く説得させる羽目になるとは全く想像すらしていなかった。本当だったら規律委員に次期も残れとか、何かかしら引きとめたがるのではないだろうか。やはり何か乙彦は無意識のうちに、先輩たちに対して想像を絶する失礼を働いた可能性がある。近いうちに結城先輩とその辺も確認しておく必要があるそうだ。

2 1 初めての学校祭（7）

さすがに最終日の午後は乙彦も三十分だけ時間をもらい外に出た。

「すみません、すぐ戻ります」

「おお待ちどうぞ！」

展示を見直すつもりはない。校舎からいったん出て記念撮影をしたかった。この目立つ制服でひとりうろつくだけでも十分な威圧感だろう。視線をばしばしと感じる。

——忙しいんだろうな。

いつもなら雅弘が飛んでくるであろう学校祭のイベント。今回はなぜ返事がこなかったのか、そのところだけが気になる。授業や実習がいろいろと大変なんだろうか。工業高校の授業は普通科英語科と全くカリキュラムが違おうだろうし、乙彦は手伝ってやれそうにない。今度声をかけてみなくてはとも思う。

「関崎、いたか」

やっとめぐり合えた外部三人組のひとり、名倉がチョコバナナを加えながら近づいてきた。学校祭中は全く話す間もなかった。それなりに楽しんでいるようにも見える。制服をまじまじと見

ては、

「やはりお前ひとりよく目立つな」

感嘆したように言う。

「あと一時間で蛭みたいな格好も終わりだ」

「惜しいな。静内連れて記念撮影したかった」

「そういえば静内はどうしてる？」

評議委員会は裏方の仕事全般を請け負っているはずだが、規律委員会とはあまり接点がない。ないわけではないのだろうが、上級生のところですべて片が着いているのだろう。一年生の出番は全くないというわけだ。

名倉はちらと周囲を見渡し、乙彦を壁際におしやった。

「あまりでかい声では言えないが、いろいろトラブっているようだ」

「また今度は何やらかした」

合唱コンクールでいろいろ清坂と揉めたらしいとは聞いているがそれ以外にも何かあったのだろうか。頭の中をいろいろめぐらせてみるが思い当たる節がない。

「評議の女子たちとまた面倒なことになったらしい」

「あいつは基本として逆らわない性格のはずだが」

清坂と違い上に楯突いたりはしないタイプだと思っていた。堪忍袋の緒が切れた時のみとことんやり返すが基本的には沈着冷静がモットーのはずだ。

「詳しいことは学校祭が終わってからカラオケボックスでしゃべろう。俺も用があるからまたあとでな」

見ると名倉をにこやかに待ち構えている女子と男子の二人組が少し離れた場所にいる。なんとなく女子の体型で誰だかは見当がついた。乙彦には気がついていないようで挨拶しそびれた。

——名倉も、今日はいとしい姫とのデートか。

グラウンドまで歩いてみる。初日、二日目と野外劇や吹奏楽コンサート、ダンス発表会などいろいろ行われていて乙彦も警備の合間にちょこちょこ覗き込んだ。みな、思うがままに楽しんでいるのはわかるのだが、いかんせん芸術感覚にとぼしいためすべてが同じに聞こえてしまう。もったいない感性である。

——だが、こういうものを自分ひとりで作り出したり、みんなでこしらえたりしていける環境ってのがすごいな。

お仕着せの学校祭と先輩たちは嘆くけれども、乙彦からしたら生徒たちの意思でやりたいことをやろうと努力している姿はやはりカッコいい。たとえど下手であったとしても、その気迫は買いたい。

——ん、あいつら。

ちらと見かけた姿に息を呑む。

グラウンドの隅でよく見知っている男子がひとり。さらにもうひとり、銀の派手目なスタジャン姿の男子がひとり。合計ふたり。

——まさか、あいつらは。

じっと観察してみた。一度見た顔は絶対に忘れない、それが乙彦の自慢なり。見間違えるわけがない。

——雅弘か？

雅弘を見間違えるわけがない。一瞬足が動きそうになり、ぱたと止まった。

——まさか、あいつ。あいつか？

黄色いトレーナーに白いマフラーを巻きつけ、ずいぶんと蛍光色な格好で語らっているのはやはり佐川雅弘に違いなかった。だがなぜ、一緒にいるのが総田なのだろうか。そもそも総田となぜ一緒に顔を出したりするのだろうか。

——来たんだったらふたりでなんで俺のところにないんだ？

水臭いったらない。まあ総田の場合はしょうがない。水鳥中学生徒会時代の確執を思えばあまり積極的に顔をあわせたいとは互いに思わないだろう。しかし雅弘、あいつの学校には乙彦も外部三人組で連れ立って訪れたのだ。一言、

「俺、総田と行きたいんだけどいいかなあ」

くらい電話よこしてもらってもよかったのに、何ひとつ返事がない。

乙彦が迷っているほんのわずかの時間で、総田らしき銀スタジャン野郎は片手を挙げて校門から去っていった。追いかけて行って挨拶一発かますべきか優柔不断に迷っていたらこうなってしまった、というわけだ。

雅弘がひょいとこちらを見た。すぐに乙彦を見つけた。手を挙げて駆け寄ってきた。やっぱり雅弘だった。

思い切り頭をどついてやった。

「おい、なんで俺に連絡よこさなかった」

「ごめん、学校祭のあといろいろと忙しかったんだ。おとひっちゃんごめん。けど、今日なんとか時間出来たからさ。おとひっちゃんどこにいるかなと思って探したんだけど見つからなくてしょうがないから帰ろうと思ってたんだ。そしたらちょうど総田と」

ここで雅弘は言葉を切った。迷っているようだ。目をそらした。

「どうした」

「ここだけの話なんだけど、総田と、ほら内川くんと」

「内川も来てくれたが、あいつがどうした」

水鳥中学生徒会の先輩後輩としていろいろ思うところがあったのだろうか。

「あ、おとひっちゃん知ってたの？」

「さっき図書館のバザーで買い物してたのを見たんだ。俺の友だちと一緒に時代劇がらみのなんか雑誌を買い込んでたな」

「そうか、あいつおとひっちゃんの友だちなんだ」

雅弘がぼつりとつぶやき、ためらうように、

「実はさ、内川くんとたまたま総田が顔を合わせたらしくってひさびさにちょこっとからかったらしいんだ。ほら、噂なんだけど内川くん青大附高を受験したいって言い出したらしくって」

「ああ、知ってる。俺の友だちがあいつの家庭教師をやってくれてるんだ」

「え？」

雅弘が目を真ん丸くして驚いている。

「俺が引き合わせたんだが、内川が青大附高を受けると聞いて紹介したんだ。悔しいが俺よりも頭がいいし内川のぼーとした性格には結構相性よさそうに見えたからな。俺のうちに顔合わせて意気投合して、今ではしょっちゅう一緒に勉強してるんだ。片岡っていうんだが、いい奴だぞ」

「そうなんだ、知らなかったよ」

「いったいどうした？ 総田とも挨拶したかったんだが」

嘘ではない。わだかまりが今なら少しは平気な顔で話ができるような気がしていた。雅弘は大きく首を振って説明をした。

「たいしたことじゃあないんだ。たまたま内川くんを総田がからかってたら一緒にいた男子に偉そうな態度で文句言われて揉めてたんだ。総田も悪気はなかったと思うんだ。おとひっちゃんもわかるだろ？」

「ああ、あいつはな」

以前はむかついていたが今はそこまで思わない。

「だよな？ その軽いのりだったのをおとひっちゃんの友だちらしい男子がいちゃもんつけて、で、結局俺が声かけたらさっと逃げられちゃって。内川くんとも全然話せなかったよ。総田、かちんと来たらしくってずっとあの調子で文句言いまくってたんだ」

「だがなんで総田、青大附高の学校祭になんて来たんだ？」

「聞いたよ。なんでも、総田の部活先輩がこの学校出身らしくって、展示も興味あるのがあったからひとりでふらっと来たんだって」

——片岡、いったい何やらかしたんだろう。

かなり気になるがぐっと飲み込んだ。とりあえずは学校祭が終わってからのしよう。もし万が一片岡が総田……他校生……とそれなりの正当な理由がありつつもバトルをやらかしたら、規律委員の立場としては文句を言わねばならなくなる。幸い総田が大人の対応をしてくれたから事なきを得たようなものなのだが。

「雅弘、もし総田と会うことがあったら言っておいてくれないか」

「何？」

「内川と一緒にいた奴は、ほんとにあいつをめんこがっているんだ。いい意味で兄貴分になろうとしてるんだ。なんとかして青大附高に合格させようとしてるんだ」

たぶん片岡のことだ。あのいいお兄さんオーラのまま総田に偉そうなことを言い返してのしたつもりなのだろう。内川がからかわれているのを見てがまんならなかったのも乙彦なりに想像はつく。だが、本当は甘ったれのお坊ちゃまでいつもお付きの人に守られていて寄り道すら許されない。こういったらなんだが総田にはかなわない。

「だからもし、総田が頭に来てなにか言いたいようだったらまず俺に言ってくれ。俺が代わりにあやまる」

「おとひっちゃんそんなこと心配しなくたっていいのに」

雅弘が心配そうな顔をしていたけれども、かまうものか。乙彦はふかぶかと頭を下げた。

2 1 初めての学校祭（8）

雅弘と本当はもう少ししゃべりたいところだったが、別の友だちと待ち合わせしているらしいので再会を約束して別れた。なに、またバッチングセンターか自分の家か奴の部屋か、どちらかでしゃべればいいだけのことだ。

気がつくと制限時間も過ぎていて、再び校内をうろちょろしまくった後怒涛のごとく校内の後片付け、その後夜の部最後のグラウンドでの大イベントが待っている。夜といっても五時頃開始、だいたい一時間程度のちょっとしたダンスやコントと聞いている。

「いったい何やるか聞ってるか？」

南雲たちに聞いて見る。みなあいまいに頷く。むしろ不思議そうに、

「関崎、お前藤沖や古川ね一さんから聞いてねえの？」

尋ねてくるときた。

「全くだ。口が堅い」

「確かに。古川さんはどうでもいいことはいくらでもぺらぺらしゃべるが肝心のところで堅いんだよ」

南雲が納得しつつ、それでも乙彦を哀れんだのか簡潔に教えてくれた。

「今回は結城先輩が舞台監督として演出することになってて、衣装から何から全部自前で調達していると聞いたよ。結城先輩ああ見えて結構演劇関連のコネあるから」

「なんだそれは」

「え、知らなかったっけ？」

清坂が首を突っ込んできた。

「結城先輩のお父さん芸能関連で有名な会社の偉い人らしくって、中学の時からビデオカメラとか衣装とか本格的なものいっぱい用意してくれたのよ。そうでなくっちゃ評議委員会で三年間も『ビデオ演劇』なんてできないわよ。ましてや『忠臣蔵』なんて！」

「けど俺たちのところに衣装協力頼んできてなかったっけ？」

南雲が問いかける。清坂も即答する。

「そう、私も噂で聞いたことだけど個人の持ち物を持ち込みすぎるのはよくないって学校側から指導が入ったらしいの。それで規律委員会に衣装をまとめて頼むってことになったみたい。立村くんが話してたけど」

「いろいろ面倒なんだなあ」

話をつなぎ合わせてみたところ、どうも中学時代の思い出話らしい。

「まさかとは思うが、妙な劇とかまたやるんじゃないだろうな」

「さあね。俺もそれ以上は聞いてないけど、結城先輩が燃えに燃えてるってことは聞ってるし、今回は評議委員会以外にも有志たちを募ってやるみたいだからかなり面白いものになるって噂だよ」

よくわからないが、いつものことと割り切れればいいのだろう。今更驚いてもしょうがない。

校内からは来客者もみな去り、残りの生徒たちはそれぞれの教室片付けに没頭している。明日は代休になるがあさってからすぐに授業を始められるよう机を入れておかねばならない。食べ物を用意していた模擬店もさまざまな調理道具を片付けたりしなくてはならない。ただ手馴れたもので、すぐに業者が現れて生徒たちよりも手早く運び出していく。

「とりあえず少し控え室で休んでろ。最後の仕事が残ってるぞ」

先輩たちは乙彦たちを生徒指導室に招き、一本コーラを手渡した。

「たぶん、結城のやることだから盛り上がりすぎて誰かがかならず羽目ははずすだろう。予想はしている」

おもむろに語り出した。

「どういう劇を上演するかはわからんが何かするだろう。その時頭のヒューズが飛んじまった連中に水ぶっかけて正気に戻すのが俺たちの最後の仕事だ。評議の連中もそうだが体育委員会や美化委員会も全力で支援しているこのイベント、成功させたいのはやまやまだがストリーキングやらかす馬鹿を出すわけにはいかん」

「先輩、いたんですか？」

乙彦が尋ねると、先輩方は顔を見合わせつつ気まずそうに笑った。

「その寸前。最後の一枚は守っていた」

「停学には？」

「無礼講」

その一言にすべての意味がこめられていた。

しばらくのんびりとしゃべっているうちに校内放送が流れた。放送局員もがんばっている。校内全員外に出るように、とのお達しだ。先輩たちの指示に従い一年規律委員たちは一番最後に生徒指導室を出た。「幻の制服」とマフラー、マスコットは忘れない。

「あーあ、でもこれで終わっちゃうんだね」

清坂が南雲に話しかけている。聞こえてくる。

「ほんと、最初どうなるかおいて思ったけど、規律委員大成功じゃんって」

——全くだ。

乙彦も同感だった。あと二週間かそこらで改選だが最後の最後で「規律委員」としてそれなりに形を作ることができたのはうれしい。

「けどさあ、清坂さんも来期はどうするつもりなん？」

さらっと南雲が尋ねた。

「まだ終わってないのに早いね」

「そりゃああっという間じゃん」

「わかんない」

これまたあっさりとはげた清坂。あとでこの辺りも静内に探りを入れてみるつもりだが、清坂はこのまま規律委員を続けるつもりなのだろうか。それはそれで勝手だが、次期に立村が加入する可能性を考えるとそのほうがいいのかもと思う。まだ乙彦としては今後のA組事情を話すこ

とができない立場ゆえに歯がゆいのだが。

「南雲くんはもちろん続けるでしょ」

「そりゃあもちろん。問題は来年のクラス替えでさあ」

「普通科は持ち上がりができないから辛いよね」

ふっと乙彦の方を振り返った。

「英語科はその点いいなあ。関崎くんもこのまま規律委員でいくつもり？」

言葉に詰まった。

「いや、わからない。選ばれないことには話にならない」

「そうだよ」

またあっさりとは答えられ乙彦もそれ以上続けられなかった。もしかしたら清坂も立村の本心を聞かされているかもしれない。余計な心配する必要はないのかもしれない。

規律委員の最後のお仕事。

グラウンドの真ん中に設置された小上がりの舞台からはるかに離れたところから、懐中電灯を抱えつつ全校生徒達がぐるりと囲んだ輪からはずれないようにガードする役目だった。当然舞台も眺めることが難しい。もちろん声は聞こえる。ちらと見るとグラウンド脇で吹奏楽部がパイプ椅子を用意している。舞台脇で演奏するようだ。さらに体育委員の連中……天羽も混じっている……がインディアンの羽根帽子のようなわっかをかかえて走り回っているのがちらと見える。反対側には学ラン姿の群れも見える。十人くらいいる。たぶんあの中には藤沖もいる。

「それではみなさま、お待たせいたしました青潟大学附属高校学校祭フィナーレ！本日担当は私こと、放送局の……」

いきなりDJののりで空に放送が響き渡った。

一瞬のうちに乙彦の記憶はあの時に引きずられていくのを感じた。だんだん日の落ちつつある淡い闇の中で見た、あの紅炎を。

——あれからもう二年経ったんだ。

「さあてと、みなさんこれからのりのりで盛り上がらせていただきますが、本日のメインイベントはご存知、ミスター結城プロデュースの一大エンターテイメント。難しいことは抜きでとことん楽しんでいただきます。青大附高の諸君、観客でいられるのはほんのわずかですよ。それと、残念ながら蚊帳の外で盛り上がれない哀れな規律委員の諸君、ご愁傷様です。明日以降彼らと顔をあわせた時にはそっと肩を叩いてやってくれるかな？」

——余計なお世話だったの。

つつこみつ、放送局長らしき……インタビューの際に聞き覚えていた声と一緒に……のりのりのトークを聞いていた。名調子ではあるけれども、こののりは二年前、同じ校舎で同じ生徒会室でメンチ切り合っていたあいつがマイク片手に叫んでいたものとほとんど一緒だった。いや、もしかしたらもっとエキサイトしていたかもしれない。オクラハマミキサーをがんがん音

割れした音響機器で流しつつ、青大附高の設備とは比べ物にならないほど貧弱な場所で、しかも生徒たちのやる気もほとんどない状態で。

2 1 初めての学校祭（9）

後ろから白いシャツとインディアンの帽子をかぶった男子連中が勢いよく飛び出していく。白いTシャツに絵の具をぬったくって、短パンで駆け抜けていく。「へいへいほー」とか「ひゃひゃひゃ」とか謎の言葉を歌いつつ。舞台になるであろう場所をぐるぐる走り回り両手を挙げて踊りまくっている。テープでいかにもインディアンを思わせる民俗音楽の調べが流れしばらくその状態が続く。と同時に反対側には学ラン姿の男子たちが腰に手を当て、これまたいかにも応援団ののりで、「さん、さん、ななびょーし！」とか叫んでいる。その声の主は乙彦もよく知っているあいつである。

インディアンが踊り疲れてその場で安座したのをタイミングに応援団の演義が始まり、みな手拍子で盛り立てている。遠すぎて様子が伺えないのだがたぶん藤沖念願の瞬間なのだろうとは想像がついた。しっかり手をたたきたかったが仕事が仕事だ。あきらめる。

その後、休んでいたインディアンたちがいかにも疲れた風に伸びをしつつ立ち上がり、またわざとらしく舞台前でしりもちをついた。同時に奥からこれまた勢いよく女子たちが十人から十五人くらいどどどと現れた。「女子」としか判別できない。乙彦も息を呑んだ。

——おい、あいつらまさか。

よく知っている女子がふたり、しっかり混じっている。

スカートを大量に重ねてはいている。やたらと腰が太いのでよくわかる。

ふりふりのブラウス姿という、明らかに制服以外の格好でおそろいだ。

——古川、それと、静内？

かろうじてふたりの顔は見分けられた。ただし表情は不明のまま。

流れた曲はコマーシャルやコント番組でよく流れるあの、「フレンチカンカン」だった。すぐに何が始まるかを把握するのに時間はかからなかった。

取り囲んでいる生徒達、特に男子連中の卑猥な歓声が空に劈く。女子たちも反発すると思いきや、大喜びで手を叩いている。多少のお色気は許容範囲のようだが踊っている女子たちはどうなのだろう。どう考えても静内がのりのりになるとは思えない。伸び上がってみようとするが果たせない。誰かが声を挙げた。

「うわー、古川さん、サービス満点じゃーん！」

「さっすが下ネタ女王様のパワーはすごい！」

まさかちらり見せるなんてアホなことをしているとは思えないが先生たちが止めに入らないところを見ると、これまた許容範囲なのだろう。乙彦が見られなかったからといって勝手に解釈しているわけではない。決して。

半端ならざる盛り上がりで「フレンチカンカン」の舞台も終わりそれなりに演目も進んでいるようだった。本当はもっと覗き込みたいところだがやはり規律委員の仕事たる警備から離れるわけにはいかない。乙彦は群衆から離れたところで誰かが服を脱ぎ出さないか、誰かが「ファ

「イヤー！」とか言いながら走り出さないか、目を配っていた。

クラシックバレエの素養がある生徒がいるらしくソロで踊る人いたり、有志の合唱が組み込まれたりとは手は込んでいる。すべてを確認できないがそれなりに楽しめる。しかし内容としては特にテーマらしきものも感じられずただ眺めるだけ。放送局のDJだけがひとり盛り上がっているだけ。

——結城先輩の趣味なのはわかるが、これでいいのか。

ふと、斜め横を見やるといつの間にか抜け出てきたらしい立村が別の男子と話をしながら眺めているのを発見した。暗闇でよく見えないが目を凝らした限り、霧島ではないかと思われる。ひとりで佇んでいるのであれば声もかけたかったがそうもいかない。

——立村はこの形式をどう思ってるんだろうな。

学校祭のイベントとして、傍観者としてであればこれほどよくできたフィナーレはない。見られなかったが……しつこいようだが……評議委員会主催の「フレンチカンカン」は最高の盛り上がりだったろうし、技量を持つ生徒たちがさりげなく披露する場としては素晴らしい。これは学内演奏会でも感じたことだった。

——でも、しょせんこのままで傍観者に過ぎないんじゃないか。

水鳥中学の、生徒達やるきなしなしの状態でもフォークダンスと座談会を行うことだけで熱く意見をぶつけ合い、紅炎の燃え上がる様を間近に見たあの時よりも波は凧ぎ、ただ立ち尽くすのみ。炎そのものが見えないまま。

「さーてこれから、マイムマイムっすよ！ みんな仲良く手をつないでいきましょう！ それと規律委員の哀れなみなさま、円が下手に途切れないように見張っててくださいよ。逃げ出そうなんてことしたら即、逮捕で願いますだ、ってことでいきまっす！」

——無理しているように見えてならないな。

一通り演目が終わり終盤あたりからやっと、観客をも含む「マイムマイム」のダンスが始まった。前もって予告されてなかったというのもあるのだろう。みなばらばらで、すでに輪から離れている生徒もいる。こういうことなら最初から手をつなぐことができるように整列させておき、自然に両手をつなぎ合うのが自然だと思うのだがそこまで考えていなかったようだ。現に手をつなぐこと自体で揉めている声も聞こえてくる。かといって規律委員が輪を整える以外に口を出す必要があるのか迷いもある。

「さーさ、みんななかよしなかよし、ほらほらまあるくなって！」

さすが南雲は慣れている。あぶなっかしい雰囲気のところには駆けつけてゆきにこやかに仲裁する。東堂もほぼ同様で、清坂だけがあちらこちら走り回って黄色い声を挙げている。乙彦は特に何かを発したわけではないが近づいただけでみな察してきちんとしてくれる。なぜなのだろう。楽ではある。

マイムマイムでみな両手を掲げて踊り出したのを眺めながら、乙彦は幻の紅炎を隣の裏で感じようとした。あの時フォークダンスに最後まで反発した乙彦はあの紅炎をひとりの女子の側で眺めていた。お下げ髪の、今は可南女子高の制服をきたあの女子の眼差しが今でもずっと残ってい

るのはなぜだろう。もう二年も経っているというのに。

「さーて最後は、とっはじめに可愛くセクシーなフレンチカンカン娘の評議女子のみなさんにもっかい踊ってもらいましょう！」

——またやるのか！

てっきり「マイムマイム」だけで締めるのかと思いきや、最後はまた評議連中の「フレンチカンカン」と来るらしい。踊りつかれた連中がテンション高く拍手と嬌声を上げる。評議の連中は何も言わなかったが陰でいろいろ練習していたのだろう。静内は楽しんでいるのか、それともこの状況を耐えているのかを知りたかった。乙彦は前に出て舞台をみようとして伸び上がった。

「では行きまーす！ みなさん手拍子でどうぞ。一緒に踊りましょう！ ただスカートめくるのはやめましょう！ 相手のも、自分のも。つかまっちゃいます」

——んなことするわけないだろうが。

ようやく見えた舞台の上。「フレンチカンカン」部隊が輪になりそれぞれ足を膝上まで上げて踊り出している。背が高いのが静内だろう。それなりに無難にこなしている。古川を探したところなんと、円の中心部でわざわざ膝丈までスカートをたくし上げたりマリリン・モンローのものまねやったりとひとり芸人魂を打ち出している。いったいあれは自主的にやったものなのかそれとも結城先輩が演出の一環で打ち出したのか。判断に悩む。

——麻生先生も止めに入らないのか……。

下着を見せたりなんなりするわけではなく、ある意味「健康なお色気」なんだろうが男子たちのざわめきだけがヒートアップしているような気がする。

「ではではみなさん、楽しい学校祭もこれにてお開き。カップルになれた方なれなかった方、盛り上がった人盛り上がれなかった人、初めての人最後の人、いっぱいいますが何はともあれ無事に燃え尽きましたかあ？」

「はい！」

DJとのやりとりのみ観客たちとの交流が成り立っている。最後に打ち上げ花火が連続して十本ほど上がり、真っ黒い空のもと大歓声が上がった。心地よい疲れとともに乙彦は懐中電灯を掲げた。警備役とはいえ、乙彦は確かにここにいた。空に印をつけておきたかった。懐中電灯の白い光がずっと天を指して飛んでいくように見えた。

22 生徒会役員選挙告示（1）

学校祭も無事幕を閉じ、潮が引くようにその熱も冷えていく。青大附高に入学してからひとつのイベントがあつという間に落ち着いていく様を追いかけていくとなんとなく寂しい気がする。乙彦が藤沖にそのことを話すと、

「確かにお前の言いたいことはわかる」

同感された。

「盛り上がる瞬間はまさに沸点に達するんだがその後の退きがというのはな。うちの学校の場合それを切り替えが早いという表現で言う」

「切り替え、か」

当然といった風に藤沖が頷く。

「それぞれ学校のイベント以上にやりたいことがてんこ盛りの奴ばかりだ。疋田や宇津木野のようにピアノへ情熱を燃やしている奴もいるし、吹奏楽部はこれからコンクールの嵐だ。ずっと引きずっていたら身が持たない」

「それはそうなんだが」

切り替えが早い方がいろいろと都合がいいのはわかる。乙彦もそれは意識している。ただあれだけ盛り上がった学校祭がほとんど事務処理のみの後片付けで寂しくないのかどうか、それだけが気にかかった。

「ところでだ関崎」

放課後帰ろうとしたところでまた藤沖に声をかけられた。

「今日は暇か」

「ああ、それなりに」

最後の規律委員会も無事終了した。あとは生徒会役員改選を待つて後期クラス委員の選出を行う流れとなる。一週間程度で終わる。

「お前と久々に相談したいことがあるんだが、いいか」

「わかった」

外部三人組もたまたまこの日はそれぞれの用があるらしく、図書館には行かない予定だった。乙彦も藤沖にはそれなりに話したいこともある。一緒に校門から出た。やはり学校内で話すべきではないことというのも、予想はしていた。

「お前の好きなカラオケボックスに行くか」

「高いぞ、いいのか」

「大丈夫だ。安いところをそれなりに押さえてある」

乙彦の弱みも握られている。カラオケで喉を鳴らしたいのは山々なのだが恐らくそれは無理だろう。一度でも歌えればいほうだ。藤沖と話す場合は大抵長時間になるからマイクをいじる間もなく人生相談になりそうだ。

自転車案内された先はビル丸ごとカラオケボックスの設置された店だった。それなりに客入

りもよいようだが、青大附高からは離れているので同じ制服の生徒は見当たらない。

「よし、ここに入るか」

一時間一部屋五百円。割り勘で二百五十円。飲み物頼んでほしい五百円。乙彦の許容範疇ではある。

レモンスカッシュを注文し最奥の部屋に案内された。すでに騒ぎ声も聞こえるが防音が比較的しっかりしているせいかさほどのささも感じない。

「歌う前に、話だけ先にしておこうか」

マイクをちらっと見てから藤沖が切り出した。天井のミラーボールがくるくる回っている。ほのかに暗い室内に白い灯りがみじん切り状態で揺らいでいる。

「頼む、話してくれ」

早めに終わらせるつもりで乙彦は促した。満足げに藤沖もグラスを口にした後、

「気づいているだろうが、明日が生徒会役員告示日だ」

即効突っ込んだ。とうとう来た。覚悟はしていたことだった。

——やはりもう逃げられないな。

学校祭が終わってから真剣に考えていたことのひとつだった。

「ああ分かっている」

「前にも話したと思うが、今年の生徒会改選はいろいろと毛色が変わっていてちとやっかいだというのを知っているよな」

「だいたいは」

ちらっと聞いた限りだと、今年の二年生徒会役員はあまり活動に積極的ではなく、次の改選では出ないかもしれないという話だった。藤沖もそれに付け加えて、

「本来、二年世代にはカリスマ的スターがいてその人が生徒会長として引っ張ってくれるのではという期待があったんだ。しかしその先輩は諸事情からこの学校を去り、現在は特にスターもなしといった状態だ。これからどうすればいいのかということで揉めている。これが現在の状況だ」

「そうか」

「それで聞きたい。関崎、お前はどうするつもりだ」

藤沖はがっしり両足を床につける格好で前かがみとなり問いかけた。

「お前はこれから、青大附高生徒会役員として立候補する気持ちはあるのか」

「それは」

言葉に詰まった。迷ったからではない。決めていたからなおのことだった。

——生徒会役員に立候補するということ。

学校祭が終わってから間があり、乙彦はその後も規律委員の先輩たちから現生徒会の実情についていろいろと教えてもらっていた。規律委員の先輩たちがなぜ乙彦をそこまで生徒会に押し込もうとするのかその真意を知りたかったからだった。

答えはさまざまだったけれども、一通りまとめた結果としては、

——停滞したこの学校のムードを打破したいんだ。

それに尽きた。どういう事情かはわからないが、青大附高が生徒たちの力による運営ではなく学校・教師側の圧力が強すぎる拳句誰もが事なかれ主義にとどまっている状況。このままではいけないと、生徒たちの間で動きが出ているということなのだろう。

その打破するひとつのきっかけが規律委員会主催の「幻の制服」復活と、評議委員長の結城先輩が主催した学校祭フィナーレイベントだったという。それなりに好評を得たとはいえ、しょせん学校祭に限定されたものであり、これから先につながるものではない。それも確かだった。

——だから、全く新しい風を誰かが吹かせる必要がある。

結城評議委員長のおめがねにかなった乙彦が選ばれたのも無理はないことだった。青大附属中学の過去も知らなければ高校の現状も半年しか知らない。しかし知らないことこそ武器。それゆえに、あえて。

——やはりこれは俺が答えるべきなんだろう。

目を閉じ、かつての紅炎を思い浮かべ、もう一度目を開き直してあの夜のフィナーレを思い浮かべる。規律委員として蚊帳の外だった自分の居心地の悪さを実感する。

「藤沖、俺の気持ちは決まっている」

乙彦は言い切った。グラスを握り締めた。

「明日、生徒会室に立候補届けを提出してくる」

「役職は」

「副会長でいく」

藤沖が笑顔で乙彦に握手を求めた。

「よく決心してくれたな。ありがとう」

「いや、問題はこれからだと思うんだが」

乙彦は急いでレモンスカッシュを半分飲み干した。一時間で終わる内容ではない。今日は残念ながら歌うのはあきらめよう。残念だが、優先順位というものはある。

——問題はA組のクラス委員選出なんだが。

22 生徒会役員改選告示（2）

マイクを握るのをあきらめ、乙彦はゆっくりと座り直した。周囲のがなりたてる声が返ってカーテンとなり安心する。ここなら誰にも聞かれないですむというわけだ。

「とりあえず俺もお前の意思を確認できて安心しているんだが、まだ誰にも伝えてないな」

「ああ、誰にもだ」

外部三人組の片割れどもにも伝えていない。人に相談して決めるべき内容ではないと思っていたし、あのふたりだって乙彦からぐだぐだ愚痴られても困るだけだろう。

「ただ規律の先輩たちには立候補をことあるごとに勧められていたので具体的な情報集めだけはしていた」

「結城先輩がいろいろ考えていたらしいからな」

ふむふむと頷きつつ、藤沖は少しずつ伸びてきた丸刈りの頭をなでた。

「最初の予定とは大幅に異なってきたが、俺はやはり関崎に向いているのは生徒会だと思っていた。委員会はどういったらなんだがぬるま湯だ。評議委員会ですらそう感じるんだから、お前にとっての規律委員会も似たようなものじゃないのか」

「そうだな。学校祭の時はそうでもなかったが」

「『幻の制服』だもんな、あれは笑わせてもらった。記念写真はいつもらえるんだ」

「そろそろ現像した奴が出来上がる頃だ」

写真と一緒に撮った来客者たちに一通ずつお礼の手紙を書かねばならない。悪いが藤沖分は後回しにさせていただくことにする。

「俺の方から話したいことがもうひとつあるんだ」

時間を節約するために乙彦から切り出した。

「なんだ、言ってみろ」

いつものように兄貴風吹かせようとする藤沖。

「俺が明日、生徒会に立候補用紙を提出した段階で、A組の評議委員を受けることはできなくなる。当然のことなんだが」

「ああ分かっている。俺もそのことは承知している」

藤沖も目をつぶり、腕組みしながら頷いた。

「本来なら俺は評議から降りて、やっと形になりつつある応援団の指導に没頭したいところなんだが事情が事情だ。仕方あるまい。来期も俺が引き受ける」

「そうか、それなら安心だ」

口ではそう言ってみたものの正直不安がよぎる。藤沖は気がついていないかもしれないが、あの合唱コンクールをきっかけにだんだんと風向きが変わってきているという現実には。女子たちはあまり反応していない様子だが、男子連中の一部が藤沖に対して面白くない感情を抱いているのでは、そんな気がしてならない。

「関崎が副会長に立候補するとなると、問題は規律委員の座だな」

藤沖は全く意に関せず次に進んだ。

「お前は立村を推したいようだが、俺としてはひとつ異論がある」

「なんだそれは」

まだこだわりがあるようだが、代わりになりそうな人材がないのも事実。これも合唱コンクール以降の動きだが、立村の株が上がってきているところからしてなんらかの形の委員復活はありうるだろう。立村本人も、推されたからには断らないようなスタンスを取っているし、藤沖がいちやもんつけなければなんとかなるだろう。

「いや、勘違いするな。俺は決して立村を低く評価しているわけではない。公私混合はしていないつもりだ」

妙にとってつけたような言い訳をしつつ藤沖は、

「俺もこの前話したと思うがお前が生徒会に行くのであれば、仮に元評議三羽烏が鳴き喚こうがなんとかなりそうな気がしている。評議委員会だったらどうなっていたかはわからないがな。どちらにせよお前がさっさと生徒会で権力を握ってしまえば、たとえ委員会組織でざわざわしたとしてもどこ吹く風と聞き流せばよいだけのことだ」

ここまで藤沖はゆっくりした口調で語った。すっと立って電話で、

「すみません、コーラお願いします」

自分の分だけさっさと注文した。

——藤沖は俺と立村が委員会関連の対立をすることを恐れていたようだしな。

乙彦は全然気に留めていなかったことだが、仮に乙彦が評議委員に納まり、規律に立村が押し込まれた場合、本人たちの意思とは別に外部生VS内部生同士の軋轢が周囲から演出されてしまい、面倒なことになりそうだという話はあった。藤沖が話したことだ。

このまま乙彦が生徒会に入ることができれば……もちろん落選のリスクはあるが……とりあえず藤沖はこのまま無難に評議を勤め、今まで下がったクラス内評価をを引き戻すことができるだろう。立村が規律に入ってくればそれはそれでまたよし。家庭科室でお針子さんさせられていた時も立村は規律の連中と仲良くしゃべっていた。それに昔馴染みの清坂もいる。結構居心地よいのではないかとも思う。

「ひとつ相談なんだが、関崎」

コーラが届いたところで藤沖はストローで混ぜながら、

「片岡はどうだろう？」

いきなり切り出した。

「片岡が何かしたのか」

問かけると藤沖はがははと笑った。気づかない乙彦がまるでぼんくらとでも言いたげに。

「さっきの話の続きだ。規律委員会に片岡はどうか、と言ってるんだ」

——片岡？ おい、藤沖、それ正気か。

前から藤沖は片岡のことを気に入っていていろいろちょっかいにかけていた。もっとも片岡本人

はありがた迷惑の様子だったが。本当は乙彦だけを誘いたかったであろう焼肉パーティーもいつのまにか割り込まれてしまうといった有様。こればかりは藤沖の「片思い」なのではと思わずにはいられない。

が、なぜ、規律委員に片岡を推したいのか。

「そうびっくりするな。お前も片岡の性格はよく知っているだろう。やることなすことはガキっぽいがああ見えて成績は悪くない。与えられた仕事もきっちりする。何よりきちんと校則を守っている。遅刻もしない」

——桂さんにたたき起こされて車で連れてきてもらっているようならな。さらに校則守るって全部桂さんの監視下なんだがな。

片岡の諸事情を知る乙彦としてはあいまいな返事しかできそうにない。

「もちろんあいつも中学時代、とんでもないことをやらかしてきたことは確かで清い水ばかり飲んでいたわけじゃあない。だが、だからこそあいつは弱い立場の奴の気持ちがわかるんだな。お前もいろいろと聞いているかもしれないが」

「あくまでも噂だがな」

実を言うと乙彦も片岡の詳しい事情については確認をしたことがなかった。確かに女子たちの過剰なまでの片岡避けにはあきれ返るところもある。もっと片岡の価値を評価してやってもいいのではと思う。しかし、本人がその現実を受け止めてその中で全力を尽くしているのであればそれはそれでいいのかもしれない。できれば三年間の間に女子たちの中に隠されているしこりのようなものを取り除く機会があればと願ってはいる。

「藤沖に聞きたいんだが、片岡は中学時代いったいどういう悪さをしたんだろうか」

タンバリンの音がけたたましい。乙彦は尋ねた。

「男子たちは大目に見ているようだが女子たちからは反感買いすぎているような気もする」

「本当に知らないのか」

驚いた風に藤沖はつぶやき、改めて、

「まあな、女子更衣室で下着を盗むなんて魔が差したとしか言えん。ちゃんとあいつなりに土下座して謝っているしそろそろ女子もみそぎが終わったと割り切ってもいいと思うんだが」

「いつのことだ」

「中学一年。本当にガキンチョの時の話だ。誰でもむらむらしたくなることはある」

藤沖は乙彦の顔を覗き込みつつコーラをストローで一気に飲み干した。

——噂はやはり本当か！

周囲のいい加減な噂を信じる気はなかった。しかし、あれだけ片岡を可愛がっている藤沖の口からはっきりその「事実」が飛び出せば信じないわけにはいかない。

「もうとっくの昔に禊は終わっている。だからこそ、ここであいつをなんとしても復活させてやりたい。その気持ちを分かってもらえるとありがたいがどうだろうか、関崎」

——いや、それはまずい、まずいぞ藤沖。

乙彦は腕時計を覗き込んだ。

「悪い、せっかくカラオケボックスに来たんだ、歌わせてもらえないか」
まだ時間には余裕がある。五曲は歌えるだろう。

いったんマイクを握ると人格が変わる乙彦ともろに影響を食らって奪い合いとなった藤沖とのひとは、結局一時間延長することで一段落した。

「明日告示となるわけだが、もちろん一番のりで申し込むつもりだろう」

「そのつもりだ」

生徒会室では明日の昼休みより立候補者の受付を始めるという。できれば決心の変わらぬうちに足を運びたかった。

「詳しいことはまた明日聞くぞ」

「またな」

自転車で家路に着いた後、乙彦はすぐ内川に電話をかけた。一応気になることはあったのだ。

——関崎先輩、この前の学校祭ではいろいろありがとうございました！

はずんだ声の内川、いつものごとくのんびりし過ぎている。喝を入れたいがぐっところえる。

「あまり話せなかったが楽しかったみたいだな。片岡もお前に会えて喜んでたぞ」

——はい！ 片岡先輩には本当にいろいろなところに連れて行っていただき、それにあの後、また、いろいろおごってもらったりして、ほんとにすっごっく。

「何食ったんだ」

——カレーライスです。すっごいおいしいんです。ルーがとろとろしていてにんじんやかぼちゃ、あとたまねぎの形が全然ないくらいなんです。

どう考えても桂さんの手作りだろう。つばを飲み込む。

「そうか、うちの学校がそれなりに楽しかったならそれは俺もうれしい。それでひとつ気になったんだが、お前あの時、雅弘と会ったんだろ？」

雅弘のことは内川が一年の頃から顔見知りのはずだ。すぐ返事がもどってきた。

——え、どうして知ってるんですか？ はい、佐川先輩もいらしてびっくりしました。確か青工ですよ。

一応雅弘の進学先も把握しているようだ。

「そうなんだが、あと、総田もいたと聞いたんだが」

——はい、あのう。

少し口ごもった様子、ということは雅弘の話していたちょっとした内川へのからかいもそれなりにあったということだろう。告げ口されたわけではないにせよ、気になるものはさっさと確認するのが乙彦の流儀でもある。

「お前たちと会った後雅弘とも話をしたんだが、片岡とあいつとがまた何かやらかしそうになったらしいな」

——いえ、そんな、ああ、違います！

慌てている。別に総田も内川をいじめようとしたわけではないのだろう。乙彦からしたらかなりやりすぎに思えることだけれど内川はその点あっさり受け入れているようにも見える。内川が

どう思っているかはあまり気にならない。むしろ焦点は片岡だ。片岡が明らかに性格の正反対な総田とどういうやり取りをしたのかが非常に気にかかる。雅弘にももし、総田が激怒していたら代わりに謝る覚悟を伝えておいたがはたして。

——けんかじゃないんです！ 絶対に！ 関崎先輩それだけは信じてください！

電話の向こうで半泣きになりながら内川が訴えるのが聞こえる。息が荒い。

——あの、たまたま総田先輩と顔を合わせて頭下げてて、その、いろんな話をしていたら片岡先輩がああ、俺のこと、なんか、すごく、褒めてくれちゃってて、ええと。

「お前のご褒めってどこをだ。歌舞伎十八番一通り暗唱できることか」

——違います違います！ あの、俺のこと、賢いとか、すごいとか、ものすごく褒めてくれてて、信じられないって総田先輩が言ったら全部それ否定してくれて。あの、総田先輩は決して悪気あって言ったことじゃないってわかってますし、あのいわゆるかわいがりみたいなもんだって思ってます。けど、片岡先輩は真に受けて、あのそれで。

「わかった、だいたい想像がついた」

話を遮り、乙彦は改めて片岡との予定を確認した。

「今度はいつ勉強するんだ？ 片岡のうちか」

——今度の土曜です！ けど今度はこちらにいらしていただけるそうなので、うちの母さんすごい勢いで部屋掃除してます。

内川の話だけでは状況がつかめなかったこともあり、受話器を置いた次の指で片岡へ電話をかけなおした。大抵最初に出るのは桂さんだ。

——よおよお、関崎くんか。学校祭は男っぷりよかったなあ。しかしど派手な制服でご苦労さんでした。

実は桂さんとも記念撮影したという経緯がある。あとで直接お礼状を贈ろう。

「あの、司くんはいますか」

——いるいる。ちょっと呼び出してくっか。

すぐに片岡が電話口に出た。弾んだ声が響く。

——あ、関崎、うちにかけてくるなんてめずらしいよね。

「いや、ここ最近お前と話す機会なかったからな、なんとなくだ」

それなりに片岡とはしゃべっているつもりだがタイミング的に藤沖が割り込んでくることが多く、内川との合同学習についてはおおっぴらに出来ずにいる。下手にばれたら藤沖が嘴を挟まないわけがないという乙彦の判断は間違っていないと思う。

「まずは礼を言いたい。この前の学校祭では内川をいろいろ面倒見てくれたようで、俺もあいつの先輩として感謝しているんだ。なかなか面と向かって言えなかったんだが」

——たいしたことしてないよ。でも、喜んでくれてよかった。

「カレーライスもご馳走になったと言ってたが」

——桂さんがうちに連れてきてくれて、一緒に食べたんだ。それからすぐ学校に戻ったよ。

ずいぶんなとんぼ返りだ。ということはあまり学校祭中友だちと一緒に行動しなかったのだ

ろう。委員会に所属しない生徒の場合、やろうと思えば午前中クラスに顔を出した後は学校にいても問題がないというのも確か。

「内川のことはいいんだが、なんかお前、俺の中学時代の知り合いと顔を合わせて何か話をしていたと聞いたんだが、どうした、何かあったのか？」

単刀直入に尋ねてみた。

「片岡、お前も理由なく無駄に揉め事起こす奴とは思っていないんだが、一緒にいた俺の友だちによると相当お前、いきり立っていたと聞いて気になっていたんだ。お前にかみついた奴とは俺もいろいろと因縁があるし、場合によっては話し合いに付き合ってもいい。ただできるだけ早い段階で詳しい事情を聞きたいんだが教えてもらえないか」

片岡は黙った。しばらくかすかな息遣いだけが聞こえた。

——別に、なんもしてないよ。

「だが相当、すごかったと聞いたぞ。普段のお前とは思えないくらい怒っていたと聞いたが」

——すごくないよちっとも。

つぶやき声のみ。また少し沈黙の後に、

——けど、俺思うんだ。

涙ぐんだような声が響く。

——周りがたとえ高望みだとか、こんな学校に受かるわけないとか、無能だとか、いろいろ言たって誰かが支えてくれれば、きっと奇跡って起こるんだってこと。

「奇跡って、内川のことか」

——それもあるけど、味方がたったひとりでもいれば、きつとがんばれるんだよ。俺、ほんとにそう思ってるから、勝手に内川くんが何にもできない奴扱いする話聞いてて、ちょっと違うんじゃないかって思った、それだけだよ。けんかじゃない。ちゃんと普通に話をしただけだから、関崎が心配するようなことじゃないよ。

ふたりとも明確な答えは返してこなかった。

受話器を置いた後、乙彦は改めて片岡の過去に想いを馳せた。

——たったひとりの味方。

果たしてこの言葉の重さを、脳天気な内川が理解できる日は来るのだろうか。人事ながら心配になってきた。

22 生徒会役員改選告示（4）

立候補については藤沖にカラオケルームで打ち明けたのみ、規律委員の先輩たちにも決心は伝えていないし他の友だちにも一切話していない。

次の日乙彦が生徒玄関ロビー前にでかでかと張り出された「生徒会役員改選告示」の立て看板を見据えた時も、特に何か言う奴はいなかった。

「生徒会改選かあ。もう冬も近いねえ、寒いねえ、期末も近いねえ」

「クリスマスも近いねえっていうんだこういう時は」

しょうもないやり取りが聞こえてきた。横目でのぞくと天羽を筆頭とする元評議三羽烏がのんびりと語らっている。難波と更科が顔を見合わせて、

「ホームズ、あとうちのクラスの改選も近いってさ」

「確かにな」

話を合わせている。その通り、年末も近い。早すぎる一年が過ぎ去ろうとしつつある。

A組の教室でさっそく藤沖に迎え入れられた。

「関崎、見たか」

「ああ」

今の段階ではあまり大げさにしたくない。どちらにせよ立候補すれば公になるのは分かりきっているけれども、できればギャラリーに囲まれることなく静かに生徒会室にて書類を提出できるとありがたい。いくら学校祭でど派手な学ランまとっていた乙彦とはいえ、日常生活で不必要に目立つのはできれば避けたかった。それを知ってか知らずか藤沖は乙彦の隣りに陣取り小声で新情報をささやきかける。

「今のところ立候補者情報は上がってきていない。それぞれの委員会で水面下の青田刈りが行われているとは聞いているが具体的にやる気を出している奴の名前がまだ浮かび上がらないんだ」

「これから考えるんだろう」

現二年生だっているのだから。情報がすべて藤沖のもとに集まってくるとは限らない。

「クラス委員改選については結構早い段階でいろいろ話が固まっているんだが。まずお前も知っていると思うが南雲が規律委員続投、これは当然だ」

「知っている」

さらに規律委員長も狙っているとはさすがに言えない。

「評議もとりあえずは連投組みがほとんどだ。面子もそう変わらないだろう」

「確かにな」

「だが美化、体育、音楽あたりで動きがあるかもしれん」

「それはなんぞだ」

「C組の面子考えてみろ」

すぐに思い当たった。元評議三羽烏、今朝も元気に鳴いていた。

「あいつらがこのまま何もしないでいるとは思えん」

——知ったことか。

藤沖には悪いが、乙彦にとって元評議三羽鳥はライバルとしてさほど重要な位置を占めていない。難波のつかかりっぷりがめんどくさいといえばそれまでだが、立村にお守を頼んでおけばなんとかなるような気もする。

「関崎、おはよう！」

元気に声をかけてくる片岡に手を上げてこたえ、乙彦は次の授業の準備を始めた。これ以上外部に余計な情報が洩れないようにするための対策だ。

——とりあえず、昼休み、一番乗りで行こう。

待ち続けた昼休み、給食を平らげた後乙彦はできるだけさりげなく教室を出た。藤沖が着いてきたような顔をしていたが、

「悪い、俺ひとりで行かせてくれ。けじめだ」

よく自分でもわからない言い訳をして振り払った。藤沖が兄貴気分で世話焼きたがるのもわかるがさすがに高校一年の男子がべたべたくっついて歩くというのも気持ち悪い。

廊下で静内と顔をあわせた。やはり藤沖なしで行動して正解だった。

「あれ、関崎これから図書室？」

「いや、用がある。ただ帰りは行くつもりだが」

「そう、私も。名倉は？」

「わからんが来るだろう」

「じゃあずっと伸ばし伸ばしにしてきた、学校祭総括やらない？」

静内はぐっと握りこぶしをこしらえて自分の胸元に置いた。

「もう、言いたいこと溢れてて爆発しそうなんだけど」

「内容的に図書室では無理だろ。外に出るか、学食か」

「やっぱり、あれでしょ」

握りこぶしをマイクに替えた。なんたることか。乙彦の弱みがカラオケにあることをみなしっかり把握してしまっている。いいのかこんな体たらくで。

軽くショックを受けつつも放課後の約束を済ませて乙彦は二階の生徒会室へと向かった。斜め向かいに職員室といういかにも大人の目が届きやすい場所に位置している。生徒会室の扉はしっかり閉まっている。威圧感ありあり。呼吸を整える必要がある。告示立て看板をもう一度しっかり目に焼きつけ、ドアノブを引いた。

「はい、おお、君は確か」

すでに生徒会役員全員がクッキーをつまみながらテーブルを囲んで話し合っている。学校祭の「幻の制服」行脚で顔見知り程度いはなったけれどもそれ以上のつながりはまだない。男女それぞれ半々の面子の中、生徒会長がずっと立ち上がった。

「先日はいろいろお世話になりました」

一応規律委員の顔で頭を下げる。なぜかみな、拍手をする。

「おかげで規律委員会の『幻の制服』イベントも成功しました。あのそれで」

さっき静内と無駄話し過ぎたせいで時間が少し迫っている。要件を伝えねば。あせる。声が上ずりかけるのは気のせいかな。

「おお、もしや」

「もしかして、さっそくですか」

「すごい、すごいよ！」

「さあ、もう一声！」

——何か勘違いしているのりだが、まあいいか。

乙彦はしっかり足を踏ん張り、生徒会長含む役員全員に伝えることにした。

「生徒会役員に立候補したいのですが、申込書をいただいてもいいですか」

二度目の拍手喝さい。副会長の女子先輩が立ち上がり、にこやかに紙と鉛筆を差し出した。

「お待ちしてましてよ。さあどうぞ」

やはりこの学校の生徒会は何か違う。受け取りつつ「会長・副会長・会計・書記・渉外」人員を確認する。もちろん会長はひとり、副会長ふたり、会計ひとり、書記ふたり、渉外ふたり。定員合計八名。ためらわずに副会長の項目に丸をつけた。

「副会長か、会長にはしなかったのはなんでかな」

生徒会長氏が受け取りながら乙彦に手マイクでインタビューの真似をする。

「さすがに外部生として何も知らないまま会長立候補するのはまずいと思います。やるならある程度学校内を把握してからにしたいと思います」

「なるほどなあ。とにもかくにもまずはめでたい！ 青大附高の生徒会は来期も安泰だ！ 二年一同も安心して海外遊学できるじゃあねえか！」

「まじ、感謝感謝！」

三人ほどが乙彦めがけて両手をすり合わせて拝むしぐさをする。問題の「海外留学組」らしい。

「もちろん日本にいる時は分かること全部教えるからね！」

「いや、向こう行ってからでもエアメール送ってもらえればできるだけのはずす！」

——最初からそれは期待してないが。

とりあえず大歓迎されたことだけはよくわかった。帰り際、生徒会長が副会長相手にしみじみと語り合っているのが聞こえた。

「いや、告示出すまではもう胃がべらぼうに痛くてなあ。生徒会なりたたねえんじゃねえかとか思ったけど蓋開けてみたらもう、三人も一年生立候補してくれたんだもんなあ」

「会長でしょ、副会長ふたりでしょ。もう最高じゃん」

笑いあう生徒会役員の声に送られつつ乙彦は指を折って計算してみた。

——副会長ふたり？ それにもう、会長も立候補してるってことか？ いったい誰だ？

一番乗りではないことだけがささやかに悔しかった。

二日連続カラオケボックスというのもずいぶん羽目を外し過ぎと思われそうだがそもそも秘密を保つことの出来る場所がそこしかないのだからしかたがない。静内が男子であれば乙彦の家に名倉と一緒に連れ込むことも可能だが、さすがに女子を親しげに親へ紹介するのは気がひけるし向こうだって嫌だろう。

「あーあ、もう、今日は私が部屋代出すからとことんつきあって！」

昨日行ったところとは別の、比較的防音の利いたカラオケボックスに静内自らの案内で連れて行かれた時、名倉とふたりで思わず、

「静内相当、壊れてるな」

つぶやいてしまった。振り返った静内の目は明らかに血走っていた。結膜炎かと思うくらいだった。

「何よ、壊れて悪い？ あれだけいろいろあって悪い？」

「事情は聞く。それと部屋代は割り勘だ」

とりあえず静内をカラオケボックスに押し込んでから、学校祭の反省会をとことん行うことにしようと決めた。学校内ではとりあえずよい子の評議委員を通して静内ゆえに、さぞや爆発しそうなマグマで溢れかえっているだろう。覚悟はしている。

意外と名倉が手慣れた手つきでウーロン茶三人分を部屋電話で注文している。乙彦が夏休みいっぱいしょっちゅう連れ回した結果ともいえる。

「さてと、静内、お前先に歌え」

「いいの。関崎、あんたの方がもう歌いたくってなんないって感じ」

「名倉はどうなんだ」

「俺は聞き役専任だ」

互いに好き勝手言いながらそれでも曲集をめくる。静内のために得意そうな一曲を最初に入れてやる。流れ出した曲に一瞬のけぞるような振りをして、すぐに立ち上がり、

「私が今何を求めているかがよくわかるわね」

マイクを手に取った。流れ出したのは強烈な洋楽パンクロックの名曲だった。乙彦には単なる絶叫にしか聞こえないがそれでも静内の精神状態をよく表しているとは思っていた。隣りでウーロン茶を飲む名倉に尋ねてみた。

「祭中ずっとああだったのか」

「そうとう、きてたということは事実だ。歌わせるよりしゃべらせたほうが精神衛生上よいと思う」

医師志望の名倉らしくじっと観察しながらつぶやいた。

——それにしても静内はしっかり音程取れてるな。さすが指揮者として細かいところに拘るだけある。

ようやく歌い終わったところで乙彦は無理やり静内と名倉にグラスを持たせて、
「とりあえず乾杯といくか」

声をかけた。今日のテーマはなんといっても「学校祭の総括」なのだから。

「何もめでたくないけどまあいいわ」

「乾杯！」

互いにグラスを打ち鳴らしウーロン茶を飲みなおした。とっくに三人とも口をつけているし順番が逆な気もしなくもないがそんなこと気にしてられない。乙彦が何気なしにつぶやくと、
「そう、くだらないことで伝統をひっぱるのはやめてほしい！」

切実な声で静内が叫んだ。パンクロックの力は相当なようで、静内の口調は学校とは違いたいぶひステリックになりつつある。

「何よ評議委員会ってまともだとか言ってたけど大嘘じゃない！」

「あのフィナーレか？」

だいたい予想はついてた。水を向けると静内は激しく首を縦に振った。あきらかにいつもの静内ではない。ウーロン茶ではなくまさか未成年厳禁の酒なぞ頼んでいないだろうかきにかかり思わずメニューをめくる。大丈夫だった。

「関崎まさかあれ見てたの？」

「俺も規律の仕事をしてたからある程度は観ていた」

「俺は遠くから」

男子ふたり頷くといまいましげに静内はグラスのテーブルを叩いた。

「女性蔑視もいいところじゃないのあれ！ 多少演劇っぽい要素が入る演出も私は否定しないし、音楽たっぷりはもらせた展開も悪くないと思う。ほんと、ミュージカルとして見るならいいのよ。けど、なんであんな最初と最後で意味もなくカンカン踊りを踊らせるのってなにが目的ってわけ？」

やはりそうだ。学校祭最終日のグランドフィナーレで評議委員女子全員で華やかなフレンチカンカンをスカートふりふり踊った様がいまだに話題となる。お堅い評議……とは誰も思っていなかったらしく予想外という反応は全くなかった。ひとえに結城委員長の偉大さともいえる。しかし、その嵐に巻き込まれた女子たちの反応はというと真っ二つに分かれているようだった。

「古川は別に文句言ってなかったが。いきなり決まったのか」

とりあえずクラスの下ネタ女王様はソロデビューを果たしたとあってご満悦だった。

「そう、結城先輩がフィナーレで吹奏楽や合唱、それからバレエが得意な人たちにも声をかけて面白いものにしよう、と準備していたのは聞いてたけど一年には関係ないことだと思ってたのよ。それ以外にも仕事いっぱいあったし。結構一日目二日目は、他の高校や中学から見学に来た人たちもいっぱいいたし新聞社からの取材とかも」

「そんなのあったのか」

「あったんだ。私たちは一年だから出番ないけど、結城先輩がどういう風な話をしているかをこっそり聞いたり観察したりはしてたし。関崎みたいに派手な学ラン着てうろつくところまではしなかったけど」

あまり見かけなかったがそれなりに静内も仕事があったのだろう。

「でも、少なくともあれはなかったよ。いきなり結城先輩が学校祭前日に派手なスカート持ってきて、これでひたすらくるくる回ったりスカートめくって足見せたりしろなんて、なんか間違いよね」

静内は空気のスカートを持ち上げるような真似をした。

「ずいぶんみな揃っていると思ったが、本当に学校祭前日なのか」

「そう。私もその辺りはびっくりしたけど、評議のみなさんたちは附属上がりばかりだからそういう突然の予定変更には慣れきってるみたいよ。古川さんも轟さんもすぐにスカート身に着けて一生懸命先輩たちと練習してたし。そう、先輩たちも結城先輩の言うことならいつものことだし逆らっても無駄と判断したみたい」

恐るべし結城先輩。アイドルステージのイメージでもしていたのだろうか。ただ面子がどう考えてもアイドル然とした奴ではないのが不運だった。

「噂で聞いたんだが、静内、お前は抗議したんだろ」

「当たり前！ 突然の予定変更はしかたないと受け入れるよ。それが評議の仕事だと思う。けど、女子だけなぜあんなふしだらな格好しなくちゃいけないのか、それが私には全く理解できなかったわけ」

「ふしだらとはずいぶん古い言葉だな」

名倉がからかうときっと睨み返された。

「どうせ私は古い人間ですから！ 媚を売るようなことは嫌いなの！」

「たぶん結城先輩の頭には『日本少女宮』の人たちが舞い踊っていたんだろう」

乙彦なりに分析しておいた。

「だが、いかんせんそれは青大附高の評議委員で再現できるものではなかった」

「当たり前！ だから最初から女子を男子の慰み者にするような演技を断るべきだったはず。それを何？ 大喜びで乗りまくってきゃあきゃあ騒ぐのってあれはなに？ 中にはもちろんスカートひらひらさせて踊りまくってた人もいたけど、親に見られてもあれ平気なの？ 私が親にあんなところ見られたら勘当されてるよ確実に」

「古川は好きそうだからな。お前とは大違いだ」

しみじみつぶやくとさらに静内はヒートアップして絡んでくる。

「うちの担任とも徐々に意見一致したよ。まっとうな家庭で育ったならあんなこと平気で出来るわけがないってね」

「それは言いすぎだろ」

乙彦がたしなめようとする前に、名倉がまた一曲準備を進めていた。

「静内、もう少し頭を冷やせ。お前の十八番のバラードだ」

23 立候補者一覧（1）

立候補期間は一週間。締め切り日次の日迅速に立会演説会が行われる。ずいぶん気ぜわしいことだが、次に控えるクラス内の委員選出や期末試験の準備も考えるとあまり時間を取って進められないところもあるわけだ。

「さらに、無理やり押し込む形で秋のクラス合宿もある」

藤沖にもぐちられた。

「こんなに行事の多い十一月になぜ無理やり合宿する意味があるんだか俺には理解できん。合宿と言いながら仕切り役すらいないのはなぜなんだ」

結局は評議委員に負担がかかるというわけだ。乙彦も最初は合宿イコール春の新歓合宿と同じものかと思っていたのだがさにあらず。十一月中の平日どの日でも、青潟大学構内のセミナーホールを利用して一泊二日泊り込むのみ。しかも次の日が平日であれば当然そこから授業に出るといった、小学校時代の「学校内おとまり会」に近い。さらに暴挙としかいいようがないのは、日取りはすべて担任に決定権がある。一年A組はよりによって、

「なんで立会演説会後の水曜日に泊まるんだ。理由が分からない」

「ああ、関崎がめでたく生徒会副会長に就任するでクラス全員で祝いたいんだろう。そのくらいの宴は古川と一緒に用意してやる」

「俺が当選すればの話だが」

「いや、さすがに今回は信任投票だろう」

学校内のお泊りでかつ交通費も要らず、一泊食事つきで千円ですむ。乙彦も経済的には救われたと思っているが、タイミングが悪すぎる。いったい麻生先生は何をたくらんでいいるのだろう。嫌な予感がひしひしとする。

乙彦が立候補したという情報は全学年の間を駆け巡ったらしく、次の朝からクラスメートをはじめ他クラスの生徒たち、および規律委員会を中心とする先輩たちからも声をかけられた。概ね好意的なものであり、

「関崎よくやったぞ！　そういうお前を待ってたんだ！」

「ありがとう、やっと規律委員会も救われる。これで予算もぶんどれる！」

「いやあ、面白くなりそうぞこりゃ生徒会。本条にいばれるぞ」

別に乙彦でなくてもよかったんじゃないかと思えるようなネタもなくはないけれども、水鳥中学時代のように男子更衣室ではったおされるようなことはなく一安心した。

一年A組の教室にいたってはまさに大騒ぎ、唯一秘密を知っていた男・藤沖が自慢げに、

「俺だけは関崎の決意を早いうちに聞いていたがな」

鼻の穴を膨らませていたり、

「関崎、勇気あるよね。今日も内川くんに会うから教えてもいいよね」

片岡に尋ねられたり、

「関崎くん、当選したら合宿でお祝いするね」

女子たちから笑顔で話しかけられたりと、まんざら悪い気分ではない。

唯一気にかかるのはいつもながら立村の静かな目線だった。一切口を出そうとしないどころか、生徒会役員改選ということ自体に全く関心がない様子だった。休み時間はいつものようにC組に足を向け、元評議三羽烏プラス羽飛を相手にいろいろと語り合っている様子だったがそれだけだ。ふつうに話はするがそれだけ。かえって無視されているような気もする。

——立村は俺が生徒会を選ぶことをあまりいいことと思っていないだろう。

評議委員を引き受けるつもりでいると公言していたのにいきなりの進路変更なのだから。まあいい、立村とはあとでゆっくり話をするつもりでいる。クラス合宿が立会演説会というのも、そう考えるといいきっかけかもしれない。よい方向に考えて置けば結果、決して悪いことにはならない。乙彦はそう信じている。

「関崎、あんたならたぶん出ると思ってたんだけどやっぱそうきたか！」

古川にもにやにやしなながら背中をどつかれた。

「あんたがねえ。とうとうねえ。生徒会ねえ」

「痛い。やめてくれ」

それでもばしばしたたき続けた古川が、ふと手を止めた。

「生徒会、ねえ」

つぶやき、ぐいと耳元にささやきかけてくる。

「あんた、他に誰かをひきずりこむ気、あるの？」

「ない。誰もまきこむ気はない。俺の判断だ」

乙彦が答えると、古川はちらとよそ目で廊下を眺め、

「あんたが巻き込む気がなくなつてよそ様がねえ。まあいっか、スリルあるからね。許されない愛の世界のほうのエロティックだもんねえ」

全く理解できない言葉をつぶやき自席についた。

「関崎！ あんたってなんで！」

覚悟はしていたが廊下でいきなり怒鳴ってきたのは静内だった。確かに言わなかったのはまづかった。立候補当日の放課後にわざわざカラオケボックスにつるんでいったにも関わらず結局乙彦はそのことを口にしなかった。

「言いなさいよ！ マイク奪い合いしてる暇あったら！」

「せっかくマイクがあるのに無粋な話をするのは時間の無駄と思っていたからだが、話さなかったのは悪かった」

「謝ったなら許す。けどもう、今朝心臓ひっくり返るほど驚いたんだからね」

わざとらしく大きな吐息をつく。ずいぶん静内も最近はお嬢さん風の態度を一変するようになってぱち態度をとることが多い。それも廊下で見せ付けるというのは正直驚いた。同じB組の女子も少し驚いた様子で静内を見ている。

「だが立候補しただけだ。落選の可能性も大だ。なにせ俺は外部生だからな」

「どうせ信任でしょ。でもなんでいきなりそんな大ばくちに出たのよ」

ばくち、と来た。実は静内、あまり乙彦のことを高く評価してなかったんだらうか。せっかくの仲間に対してずいぶんな言い様だ。

「これでも元中学副会長だからな。生徒会人の血が騒いだともいう」

「立会演説会はどうするの。この学校やっぱり変。立候補した後にすぐ立会演説会なんてね、急ぎすぎてるよ。公約とか考えてるの。生徒会で何をやりたいかとか」

「一応は」

言いたいことはなんとなく頭の中にある。学校祭の、それこそ静内がぶち切れたカンカン踊りフィナーレを眺めながら感じた紅炎が、その原点だ。だがそのまま意味不明な言葉を並べても伝わるわけがない。もう少し形にしないとならない。

「静内もどうだ、立候補する気は」

さりげなく水を向けてみると、静内はふと黙った。指を喉にあてるようにして俯いた。

「私には無理そう。けど、考えとく」

いつものひとつまとめにしたさっぱりした髪を、さらりと振った。

——いや、お世辞抜きであいつに生徒会、悪くないと思うんだが。

不思議なのは、現段階で他の立候補者に関する情報が全く流れてこないことだった。藤沖が早いうちから情報を仕入れてくれているが具体的に誰が立候補しているのかという話は誰からも出てこない。乙彦が立候補した昼休みに、確かふたりほどすでに名乗りを上げた生徒が一年生内にいるはずなのだが、それが誰なのかすら噂にも昇らない。

——一年で会長か。ずいぶん心臓に毛が生えている奴がいるもんだ。

たぶん附属上がりの生徒だらう。乙彦の知っている奴だらうか。できればあまりいやな関係の相手でないことを祈りたい。それともうひとつ、できればもうひとりくらい外部生がいてもいいんじゃないかとも思う。ということで、静内あたり立候補しても悪くはない。いや、ほんとうに悪くない。

23 立候補者一覧(2)

クラス合宿準備はほとんどが古川の手で執り行われているらしく、男子には情報が流れてこない。とはいえそれなりにすべきことも進んでいるようで、

「関崎の副会長就任パーティーについてはもう料理の準備もすんでるからね」

頼んでもいないことを伝えられる。さらに麻生先生にいたっては、

「そうか関崎も、とうとう青大附高を動かすリーダーとして本気出したか！めでたいこった。落ちたら落ちたで落選残念パーティーでもいいじゃないか。お前がこうやってA組のシンボルとしてがんばってくれるのを目の当たりに出来るだけでもうれしいぞ」

全くもって見当違いの応援までされてしまった。

「落ちたら残念……？」

「それであれば評議委員を選ぶという選択肢だって出てくる。いいじゃないか。今年のクラス合宿は盛り上がるなあ、藤沖？」

「全くです」

なんだか現評議ふたりと担任にいたっては乙彦の計り知れないところで生きているような気がしてならない。立候補してしまってから言うのもなんだが、本当に信任投票で決まるのだろうか。一切他の立候補者情報が流れてこないのが不気味ではある。

そんな中、立村の様子が気にかかる。

最初は単純に生徒会役員改選への興味が薄いだけかと思っていたのだが、締め切りが近づくとつれてやたらとC組およびB組をうろつくそぶりを見せている。もともとC組には三羽鳥プラス羽飛と南雲が、B組には清坂がいるわけだから不思議なわけではない。が、戻ってくるたびに深刻な表情を浮かべているのはなぜだろう。

——立村も何か一枚噛んでいるのか？

藤沖に口を滑らせたなら危険という意識はあるので、あえて様子伺いのみにはしている。他にもこれはいつものことだが霧島がしょっちゅう立村に会いに来る。生徒玄関前で待ちぶせて無理やり引っ張っていくのを見かけることもある。そこまで慕っているのかと啞然とする。なんだかどこかで見た光景だと思わず片岡を探してしまう。

——クラス委員に誰が来るかを情報集めしているのか？

今のところ可能性として高いのはそのあたりだろう。またクラスで決定した段階で情報をまとめて仲間内に流すべく動いているのだろうか。立村にはもっと表立って活躍してもらいたいの为本音を言えばノーサンキューというところもある。

締切前日を迎えた放課後、いつものように乙彦ふくむ外部三人組は図書館でだべっていた。だいぶ日にちも経ち乙彦立候補を受け入れる一方で、

「これからなかなか集まりにくくなるね、あーあ寂しいよ」

寂しげにつぶやく静内をなだめたりもしていた。別に乙彦としては生徒会に入ったからといっ

てこいつらとのつながりをなあなあにするつもりもない。むしろ冬休みの自由研究第二弾についてももう少し考えねばならないのではとも思っている。前回はあまりにも高い評価を受け過ぎたこともあるのでテーマには気を遣う。

「石碑も悪くないが今度は青潟市内の庭園めぐりはどうかなって思うんだ」

「庭園なんてあるのか？」

聞いたことがない。名倉が追加で説明してくれた。

「ある。無料だが結構個人の家で管理していた土地を寄付して庭園にしたりするケースはある」

「なんでお前そんなこと知ってるんだ？」

「静内が言っていた」

ねたをあっさりばらす名倉。もうすでにこのふたりに話し合いは進んでいるらしい。

「だが冬だろう。見るところなんてあるのか」

「関崎、あんたは甘いね。冬だからこそ雪囲いとか、雪釣りとか、七福神とか、いろいろ見所あるんだから。しっかり写真撮りながらそのあたりの歴史を調べてまたマップにしようよ。ただ年末年始が入るからあまり大掛かりなことできそうにないけどね」

「確かになあ」

それぞれ好き勝手なことを話すのもいつものことだった。そこへ、

「おやおやお三方、どうもっす」

声をかけてきたのは規律委員長だった。乙彦が立ち上がり礼をすると、

「悪いんだがこれから生徒会で用があるんだけど来てもらえないか」

一方的に話を持ち出した。座ったままの静内と名倉が顔を見合わせている様子に、

「もちろん、関崎だけじゃない、静内さんと名倉くんにも来てもらいたいんだが」

まくし立てる。かなり急いでいるようにも見える。

「あの、私たちも、ですか？」

戸惑い気味の静内がお嬢様風情で尋ねる。見事な化けっぶりである。

「そうなんだ。君たち、関崎が生徒会についてこと、聞いてるだろ？」

ふたりとも頷く。委員長は安心したように胸を撫で下ろすふりをした。

「それはよかった。なら今日これから、生徒会長直々に相談があるんでぜひ三人来てもらいたいんだ」

「俺が立候補したんですが、このふたりも連れて行く必要あるんですか」

全く訳が分からない。乙彦は念を押した。

「そうなんだ。連れて来てほしいんだ。別にとって食うわけじゃないんだがな」

有無を言わさぬ口調に逆らうことはできなかった。一応先輩は敬う教育を受けている以上それしかなかった。

二階の生徒会室に向かう途中、規律委員長が途中でパイプ椅子を三脚借りた。三人でそれぞれ一脚ずつ持つことにした。

「悪いな。無理に引っ張り出したようだが理由は行けばすぐわかる」

「いったい、何か」

乙彦が尋ねかけたのを遮り、手ぶらの委員長が扉のドアノブをひねった。

「遅くなりました。関崎を見つけましたのでつれみなさんも含めて連れて来ました」

入るとすでに先客が連なっていた。見覚えある奴が数人混じっている。まず生徒会役員全員と結城先輩が最奥に、さらに一年C組連中の元評議三羽烏と南雲および東堂もいる。その他乙彦が顔をあわせたことのない奴らも数人いる。

「ご苦労ご苦労。さてそうするとあとは例のふたりだなあ」

乙彦に向かい笑顔で手を振る結城先輩に一礼し、乙彦はあいている場所にパイプ椅子を開いた。他のふたりも同じく真似をし隅に座り込もうとしたが、

「まだこれから何名か来るからもっとつめてもらわないと困るよ」

生徒会長の呼びかけにしかたなくテーブルの奥へと進んだ。真向かいにC組連中が連なっているのを居心地悪く見合う。静内が東堂と愛想良く挨拶している様子が笑えた。このふたりはわりとうまくいっているのだろう。

「関崎、やっぱり生徒会に出るんだな。予定通りか」

天羽がこれまた愛想良く声をかけてきたので無難に挨拶する。

「予定かどうかはわからないが、昔とった杵柄だ」

「中学とは違うだろう」

ぼそっとつぶやく難波にもやもやしたものを感じるが合えて何も言わずこらえる。隣の静内が無表情で様子を伺っている。何か言いたそうだがやはりアウェイだしがまんせざるを得ないのだろう。

——まさか、こいつら全員立候補するのか？ いくらなんでもそりゃ多すぎるだろ？

尋ねたいのだが雰囲気として一年としての言動に迷う。結城先輩が生徒会長や副会長と和やかに、

「そろそろかねえ。誰を連れてくるかねえ」

「なんせ一番のりでしたからね」

などと語らっている。おそらく乙彦が立候補する前に現れたふたりだろう。会長・副会長に立候補した奴らともいう。

——確かに気になるが、いったいなんでこんなにいきなり引っ張り出されたんだ？

少なくとも乙彦の知る限り生徒会役員の定員は七名のはずだ。この場にはどう考えても七名以上いる。さらにあと二人が並ぶのか？

ノックの音がした。

「はいはい！」

生徒会書記の女子がすぐに出迎えた。

「これで全員ですね！」

皆がどよめいた。承知していたらしい生徒会役員以外の生徒たちは絶句するのみ。結城先輩にいたっては思わず声を挙げて驚いていた。それが意外すぎた。

「おまたっせー！」

面子は四名だった。聞きなれた女子の声はいつもの下ネタ女王様、さらにそれに連なってきたのは清坂と羽飛の幼馴染コンビ、そして最後丁寧に扉を閉めた立村だった。

——なんで立村まで来てるんだ？

立村は少し困った顔で乙彦に頭を下げ、その後元評議三羽鳥をはじめとするC組グループに手を挙げて挨拶した。もちろん結城先輩をはじめとする先輩たちにはふかぶかと一礼をしている。

「清坂ちゃん、学校祭以来だねえ。制服の色が普通だとなんだかあ」

「結城先輩学校祭まだ引きずってるんですか？」

明るく清坂も答える。ちらっと見たのは乙彦および静内らしく、特に何か言葉を交わしたいということもなさそうだ。古川がにやっと笑いながら乙彦に合図してきたのでこちらでは軽く手を挙げるだけに留めた。

「会長殿、これで全員かな」

「はい、全員」

お互いに合図しあうと生徒会長は立ち上がり、しっかりと全員の顔を眺めながら、「本日突然集まってもらったのはご存知の通り明日が生徒会役員改選の立候補最終日。実際は今日でほとんど決着がついているような状態なんだが」

言葉を切った。口元を右側だけくいと上げて、

「ざっくばらんに言うとうちの学校の場合、生徒会役員改選の流れが異様に早いんだ。中学もほとんど同じなんで附属上がりのみなさんにご存知かと思うんだが」

乙彦たち外部三人組にも視線を投げて、

「改めて言うと、要はめんどくさいことはしたくない、信任投票って奴っすな。つまり早い段階でメンバーの目星をつけておいてそこでどンドンスムーズに次の準備を進めたいと。期末試験も近いし三年も本当は手伝いたいところだが人によっては大学への内部推薦がごたごたしていることもあってできれば早く終わらせたい。利己主義まるまりなんだがそういうことなんですわ」

くだけた口調で話を続けた。

「そんなこともあって、ある程度立候補者が揃ったところで今回集まってもらったわけなんです。実は今のところ人数が若干名足りないんですよ。会長・副会長まずこの三ポストは埋まると。次に書記、こちらはまだ一ポスト空いてる。あとは会計一ポストと渉外二ポスト」

——思ったより埋まってないんだな。

意外だった。もっと集まっていると思っていたのだが。しかしそういうことになるとその中に立候補者が混じっているということか。

「せっかくなんで締め切り前にある程度まとめてしまいたいというのが本音。また面倒な補充選挙なんてやりたかないですんでね。どうでしょ、どうでしょ。せっかくなんで友だち付き合いしているもの同士、立候補してみませんかというのが今回集まってもらった趣旨でやんす」

みな、呆然とした様子で黙り込んでいる。乙彦も口が開いたままふさがらない状態のまま会長の顔を見上げていた。どう考えてもフェアではない。第一、まだ明日の四時まで申し込み受付は行われているはずなのだが。

「質問です」

「おおどうした関崎？」

指名したのは会長ではなく結城先輩だった。

「明日まだ一日ありますが、他の生徒が立候補してきたらどうするんですか。せっかく信任投票になるはずがいつのまにか決戦になったりします」

「それは大丈夫。またその段階で打ち合わせするから」

会長が自信持って答えた。本当にいいのか、これで。

「決戦ともなったらまたみんなに顔を合わせてもらって裏で帳尻あわせすることもできる。まあたぶん、今回は二年がひとりも立候補するつもりがないとのことなんで、一年のみの内閣と相成るがいか、いかに」

——ほんとかよ。

やはり噂は本当だったらしい。恐ろしい話だ。青大附高に正当な民主主義は存在するのか。隣りで静内が乙彦と名倉を交互に見つつ、物言いたげに頷いている。さすがに誰も言葉を発しない以上「ありえないよね」とは言えないらしい。

「んでは、そんなこんなで今のところ、立候補したい人はいるのかな」

会長の呼びかけにいち早く反応したのは難波だった。

「会長、ひとつ聞きたいんですが誰が立候補してるんですか」

「それは今の段階では内緒」

全員「はあ？」と顔を見合わせている。

「どうせ分かるのは明日以降だが、途中で立候補取り消しが出るやもしれんしな」

「空いてるポストだけは教えてもらえるけどってことっすか」

「そういうことなんだよ」

腑に落ちない顔でしばらく難波は首をひねっていたが、突然、

「わかりました、それでは俺が立候補します！ 用紙ください！」

勢いよく立ち上がり、会長に向かい手を差し出した。生徒会役員たちが笑顔で拍手を始め、書記担当の女子がうやうやしく申し込み用紙を手渡した。結城先輩もふむふむ頷きながら、

「いいねいいね、元評議が生徒会に入ってくれるのはうれしいねえ。ところで難波、お前さん最近コンサートには行ってるのかね」

いきなり内輪受けの話題を振るのはやめてほしい。難波の代わりに更科がにっこりしながら、

「今度の冬休みのカウントダウンコンサート行くみたいですよ」

笑顔で答えた。多分アイドルかなんかのイベントだろう。結城先輩の関係なら「日本少女宮」だろうか。しかし難波は首を振った。

「いえ、今年は控えます」

「どうしたんだい珍しいねえ」

難波は申込書を書き終えて提出した。三羽烏が親指を立てて意思統一しているところみると、今回生徒会に入るのはこの中の誰かということで話が着いていたのだろう。少し気持ちが重たい。どのポストだろう。副会長ではないらしいのでほっとしているところもある。第二の総田みた

いな奴だったらやりきれない。

その他数名、乙彦の知らない生徒が挙手して立候補を続けていき、最後一ポストのみと順調に埋まっていった。この段階でまだ誰が会長に立候補したのか不明なままだった。そもそも後ろの四人組のうち誰が立候補したのかすらわからない。まさか立村ということはないだろうが全くないとは思えない。古川も万が一立候補なんぞしてしまったらA組の次期評議委員が誰になるのか心配でならない。順調にいくとあの中だと羽飛だろうか。羽飛なら人気も中学時代絶大だったようなので会長職も問題なさそうに思える。あとは三羽烏から天羽だろうか。天羽も元評議委員長だ。難波がどのポストに入ったかはまだ不明だが協力しあって何かしそうな気配がする。

静内にちらりと目線を送ってみる。

「なによ」

「お前、出る気ないのか」

「会計に？」

「お前理系得意だろ」

小声でささやく。確実に内部生との確執が芽生えそうな体制を考えると、できれば外部仲間がひとりくらいいてもいいのではと思う。特に会計というポストは予算を握る場だから万が一何か対立したとしても最悪の場合に「予算」という武器で戦える可能性がある。

「俺を助けると思って、という気はないのか」

「助けてもらいたいってわけ」

静内はくっと息を止め、じっと机を見つめていた。考えている。検討しているはずだ。せつかならば出てほしい。B組の評議委員の座であれば清坂に譲ってもいいのではないか。

「もう一日待ってもらっていい？」

乙彦と名倉にしか聞こえない声で静内はささやいた。

「どうしても確認したいことがあるんだ」

23 立候補者一覧（4）

会計のポストだけが埋まらないままとうとう生徒会改選立候補締め切り日を迎えることとなった。といっても乙彦が特段何かをしなくてはならないこともない。しいて言えば取り急ぎ立会演説会の原稿を用意することくらいか。ちなみに青大附高では応援演説というものが存在しないらしく、藤沖がまたもぶつくさ言っている。

「不思議でなんないんだがなぜこの学校は応援演説というものがいないんだ。小学校ですらあったというのにだ。間違ってるだろ」

「確かにな」

水鳥中学時代はもちろん雅弘に応援演説を頼んだ。はるかかなたの記憶。

「それはそうと、昨日は生徒会でお呼び出しをくらったらしいな」

どうしてそんな情報が流れているのかわからないが、藤沖も本来であればあの場においてもおかしくはない人物だ。元青大附中生徒会長なのだから。

「本当におかしい」

思わずつぶやくと藤沖が聞き返してきた。

「何がだ？」

「本来なら今日が最終締め切り日なのだから打ち合わせなどはその後行うべきだろう。なのになぜ、今の段階で穴埋めしようとするんだろう」

「合理的なやり方だ」

驚くこともなく藤沖は腕組みしながら頷いた。

「生徒会はできれば気の合う仲間と集まってやった方があとあと楽だ。なかなかそういううまくいくこともないがな。下手にいろいろな分子が交じり合っただけでぶつかり合うのがいいという意見もなくはないが、俺は反対だ」

「そうなのか？」

同質化なんて無理だろう。総田との果てしない二年間の生徒会バトルを思い出す。

「おそらく、立候補者のお仲間を集めてそれぞれ味方をひとりかふたり入れて自分の陣地を確保せよということだったのだろう。天羽らもいたんだろう？」

「難波が立候補していたな」

「ああ、あいつらしい。音楽委員では満足できないだろう。あいつも相当の音痴だからな」

妙に納得しつつ藤沖は続けて乙彦へ尋ねた。

「それでお前は誰か仲間を引き込んだのか」

「いや」

「それはまずい」

理解できず思わず首をひねると藤沖から肩を叩かれた。

「お前はただでさえ外部生だ。内部の人間からはいろいろとにらまれる立場になる。本当は俺が入ってやりたいところだがな」

「それは別に困ってないんだが」

なんとなく理由がつかめて納得した。ぴんと来ないが、それなりにあの集まりの意味はつかめた。それにしても古川も立村もあの日から何も言わない。あれだけうるさく騒いでいる古川が、今はひたすら合宿の準備に没頭しているというのがなんとも言えない。立村はいつものように一切触れようとしない。

——まあいい、今日の四時に判明するよな。

四時に立候補者は全員、生徒会室に集合することとなっている。それから一年いやというほど顔をあわせるわけになるのだから早くことはない。

ただ、願わくば。

——外部の仲間がひとりくらいいてもいいとは思うんだが、静内。

伝わるわけもないB組の教室に向かって念を送ってみた。

古川が乙彦に、

「あのさあ、あんた、好きな食べ物なあに？ 女体盛り以外だったらリクエスト受け付けるよ」

いつもの調子で合宿の夕食についてリクエストを取り、またあわただしく女子たちのもとへ駆け寄っていった。あつという間に放課後で、あと一時間もしないうちに生徒会役員立候補締め切りだというのに全くのんきなものだ。この段階で古川の立候補はまずないと判断していいだろう。一方立村はと様子を見ると、いつのまにか教室を出て行っている。万馬券が出るとすればこいつだが、やはりぴんとくるものがない。

——となるとやはりあのふたりか。

古川を誘いにいつもなら顔を出す清坂も今日はいない。同時に立村を茶化しにくる評議三羽鳥も飛んでこない。となるとやはり会長は羽飛か天羽の一騎打ちかそれともどちらかが副会長か。そしてあまり考えたくないことだが、

——まさか。

清坂がどのポストに顔を出すかが問題だ。それによっておそらく、静内の動きにも影響が出るだろう。昨日静内が迷ったのもそこにあるのかもしれない。そりゃそうだ。口もろくすっぽ利かない女子同士が一年以上も少人数の生徒会室で顔なんて合わせていたくないだろう。周囲もそれだと胃が痛い。乙彦も静内の味方につくつもりではいるがそれでもできれば避けたいパターンのひとつではある。そう考えると無責任に静内を誘うことも難しい。

望みは全く乙彦とつながりのない立候補者の存在だが、果たして誰か会計に立候補する奴は出てくるのだろうか。静内が考えを改めて立候補してくれるなんてことはあるのだろうか。やはり気になる。乙彦は黙って教室を出ていった。四時にはまだ間があるが、どうせ乙彦が立候補するという話は全校に知れ渡っているのだから早めに待機させてもらってもばちは当たるまい。

「早いなあ、関崎は」

生徒会長をはじめとする現生徒会チームがゆったり腰掛けて語らっている中、乙彦は脇に立ったまま挨拶を交わした。

「その後、会計に立候補者は来たんですか」

「それがねえまだなの」

現会計担当女子が首を振った。

「会計って面白いのにねえ。ある意味うちの学校の全権握ってるようなものなんだけど。私この仕事させてもらって、大学の推薦を経済学部にしたんだもん」

「まあ、誰かかしら補充選挙やれば集まるんじゃないかと思うんだが、それほど気にしなくてもいいだろうな。俺なりに思うには」

「会長は楽天的ですねえ」

要はひとりくらい足りなくてもなんとかなるといったお気楽さなのだろう。パイプ椅子を勧められたので腰掛けた。

「四時になったら集合してもらって改めて挨拶することになるけどね。まあ関崎くんは決まりだな」

缶珈琲をもらい思いっきり飲んだ。本棚には歴年の生徒会誌をはじめ他校との交流アルバムやその他溢れんばかりのプリントが押し込まれている。

「どう、この空気は、合いそう？」

生徒会書記の女子先輩がささやく。乙彦も改めてぐるりと見渡した。入ってくる窓辺の光が少しまぶしい。

「はい、たぶんやっていけると思います」

今並んでいる人たちはすべて消え、これからまた新しいメンバーに入れ替わる。雰囲気がかかりと変わることは確かだろう。それでも、生徒会室という場の持つ磁気のようなものが乙彦には心地よかった。少なくとも規律委員会にも、一年A組にも感じなかった引力のようなものが尻あたりに引っ付いているような感覚があった。

不意に生徒会室の扉がノックされた。

「あらあら、誰かな。もしかして会計立候補者かもよ」

「はいはい！」

笑いながら扉を女子の渉外担当先輩が開いた。ちょっと戸惑った風に、

「ええと、もしかして立候補？」

全員で扉の外を覗き込んだ。目に入ったものが信じられなくて乙彦は飛び上がり立ち上がった。たったひとりででくのぼうのように立ちすくんでいる奴がいる。

「はい。会計に立候補します」

乙彦と目が合い、かすかに口がほころんだように見えたがすぐにいつもの無表情へ戻った。一步生徒会室に入ってきた時初めて乙彦は呼びかけた。

「名倉、お前、まさか」

誰もが驚きを隠せないなか、入り口で立ち止まったままの名倉に駆け寄り、乙彦は手を差し出した。向こうも同時にその手を握り締めてくれた。いわゆる握手だった。

それから誰も立候補者が現れることもなく四時に無事、生徒会役員立候補者の受付は終了した

。

23 立候補者一覧（5）

律儀に四時を回ってから集まってくる奴の多いこと多いこと。名倉のことを乙彦なりに生徒会メンバーへ紹介したりしているうちに新たなる立候補者二名が現れた。

「もう来てたのか」

乙彦の顔を見るや第一声はそれか。難波と更科が仲良く顔を出した。

「さあさどうぞどうぞ」

生徒会長が手招きしたので仕方なさに名倉の隣りに座った。難波が立候補したのは目の前で確認したからいいとしても、まさか更科までとは思わなかった。天羽がないのが意外だった。

「天羽は来ないのか」

声をかけて見ると、更科が首を笑顔で振った。

「だって今日さ、立候補者だけだから付き添いでは行けないって」

「なら更科はどのポストに出るんだ？」

「書記」

きっぱり答え、難波にも話しかけた。

「ホームズは渉外だよな」

「勝手に言うな」

不機嫌そうに難波がつぶやく。意外な展開に少し驚く。てっきり難波は副会長あたりを狙っていたのではと思っていたからだった。第二の総田となるかと正直気が重かったのだがその辺りは回避できたようだなによりだ。もっとも渉外とてかなり面倒そうではある。

「そろそろどのポストに立候補するかということくらい教えてもらいたいよなあ」

難波が更科に話しかけると、聞こえていたのか生徒会長がすぐに答えた。

「そんないきなりつまらんことやってどうすんのシャーロック難波。推理ってのが一番だろ」

「まあそうですが」

——シャーロック・ホームズ・難波な。

自分の趣味を自由研究にぶち込んで仲間を引き込んだというのはそれはそれで面白いものが出たんじゃないかと思う。ちょっと興味はある。もう少し人間関係がこなれたら見せてもらいたい代物だが、いかんせんその見込みが薄いのも確かだだった。

「こんにちわー！」

次に現れたのはやたらと背の高い、欧米人風の顔立ちを持った女子だった。見たことがありそうな気がするのだがどこだか思い出せない。昨日の集まりには混じっていて、確か書記に立候補していたはずだ。

「泉州さんどうもどうも」

またこちらも笑顔で手招きする生徒会メンバーたち。男子よりも女子たちの愛想が妙によい。押しの強い美人といえはいいのだろうが、男子としては少々怖いタイプとも言える。

「なんかいいのかなあ。あれ、名倉、あんたもいたの」

いきなり親しげに声をかけてくるのも驚きだ。名倉はろくに返事もせずそっぽを向いている。

「名倉と知り合いか？」

「同級生だってば。D組仲間なのにねえ」

大柄な女子は名倉を楽しげに眺め、

「ねえ、今日はなんでいるの？」

いきなり直球を投げている。名倉も仕方なさそうに口を尖らせ、

「見ればわかる」

一言告げた。確かに見れば、目的はひとつだ。

「へえ、立候補したの？ で、何に」

「会計だよな」

あまりにも無視をこかれるのは申し訳ないので代わりに答えてやった。生徒会書記女子もフォローに入る。

「そういえば昨日、会計だけ埋まらなかったもんね。でもどういう風の吹き回しなのさ」

問い詰めたように名倉の顔を覗き込む。ずいぶん親しげな口を利く女子だが、乙彦には全く興味がないらしい。代わりに答えてやってもいいのだが。

その次は渉外に入った女子がひとり。乙彦は知らなかったが彼女もどうやらD組らしく、顔見知りらしい難波と更科が、

「阿木も今回は生徒会に来たのか」

「評議を狙わないで生徒会って、元評議にははやりなのかなあ、でもまたC組時代のお付き合いでよろしくね！」

「うん、こちらこそ！」

などと声をかけている。評議委員ではないらしいが、それなりにふたりともつながりはあるらしい。詳しく後で聞いてみよう。一応乙彦たちにも頭を下げ、名倉の顔を見てびっくりしている様子だった。泉州と呼ばれたごっつい女子が、

「阿木さんも混じるとなると、D組の一大勢力が生徒会に終結しちゃうね」

「ほんと、びっくり」

軽やかに話している。名倉は口を一切出さない。誰にも立候補については内緒にしていたことが伺える。

——ちょっと待てよ。あと、誰だ、来るのは？

附属上がりの連中が委員会などの思い出話に華を咲かせ始めたところで乙彦は指で数えた。隣の名倉も頷きじろりと回りを見回す。小声で、

「あとふたりが会長と副会長か」

ささやきかけてきた。その通り、すでに副会長一人、書記二人、渉外二人、会計一人が揃っている。残りは会長と副会長のポストのみだ。もちろん信任投票であることにはかわりはないが、いったいそいつらが誰なのかは次に扉が開いた時に判明する。

「誰だろうな」

「ねえ会長は誰なのよ」

「さあ、それぞれ推理の必要があるんじゃないか？」

「推理するまでもない。答えは出ている」

難波がふと目をあげて立ち上がり、腰に手を当てて何か言葉を発しようとした時だった。

扉が開いた。

——やはりか！

仲良く肩を並べて現れたのは羽飛と清坂の幼馴染コンビだった。

「やっぱりそっかあ、清坂さんなんだな」

「羽飛も水臭いぞ。なんで俺に言わなかった」

元評議コンビふたりが語り掛ける中、泉州と阿木のふたりは黙りこくり様子を伺っている。同時に生徒会役員会計の女子先輩が缶珈琲を取り出しつつ、

「ええっと、美里ちゃんと羽飛くんが来てくれたところで、正式発表していいかな」

会長に呼びかけた。あいまいな笑みを浮かべたまま清坂は羽飛に何かをささやいている。羽飛も、

「ま、そろそろネタ晴らしタイムってとこだわな」

にやりと笑っている。相当緘口令をひいていたのか、それともこっそり動きたかったのか。はっきりしていることは、静内が早い段階で清坂の立候補を勘付きその上で自分は身を引いたということだろうか。もちろん本人に確認しないと詳しいことはわからないが。

「それじゃ、美里ちゃんいい？」

「はい、お任せします」

清坂はちらっと乙彦に目を留め、すぐに会長たちへひまわりの笑顔を向けた。羽飛と仲良く、

「予定通りだね」

「まあな」

などとささやき合っているところがなんとなく通常の幼馴染以上の何かを感じさせる。

——いったいあの夏休みのあれはなんだったんだろう。

気まぐれだったのであればいいが。もうあとくされなさそうなら助かる。

「では、全員揃ったところで生徒会役員立候補者のみなさんに一通り今後の予定をお伝えします。では最初にそれぞれの立候補ポストを告げて、クラスと名前だけ簡潔に自己紹介よろしく。ま、必要ないと思うかもしれないが外部生もいるからなあ」

生徒会長は鼻唄を歌いながら最初に、

「それでは清坂さんからどうぞ」

清坂を指名した。羽飛とささやきあっていた清坂はそのまま微笑みを浮かべたまま立ち上がり、さっぱりした口調で、

「今回、生徒会長に立候補しました一年B組の清坂美里です。現在は規律委員を務めています。よ

ろしくお願いします！」

言い放った。隣りでにやにやしている羽飛を除く立候補者の顔に、「まさか」の文字が浮かんでいるのを乙彦は見たような気がした。当然自分の顔にもその「まさか」は墨をたっぷり含んだ筆で描いてあることだろう。

——予定通り、なのか？

続いて羽飛が、

「あ、っと、今回成り行きで副会長に立候補しました羽飛貴史です。一応一年C組の評議委員やっています」

これまたきっぱりと挨拶し、あっという間に乙彦にまわってきた。頭の中がまだ麻痺した状態のまま、乙彦も立ち上がった。

「生徒会副会長に立候補しました、一年A組規律委員の関崎乙彦です。外部生ですがよろしくお願いします」

ひとり、拍手をしている者あり。すぐに気づいた。微笑みを浮かべたまま清坂が胸元で手を叩いていた。つられてみな、拍手が連鎖していった。

24 信任投票（1）

「ええっ！ 美里、生徒会長に立候補しちゃったの！」

次の日の朝、古川が生徒玄関ロビーにて素っ頓狂な声をあげた現場に出くわした。いつものように「みつや書店」のバイトを済ませて駆け込んできたらよりもよってタイミングよくといった感じだった。

柱回りに貼り付けられた生徒会役員改選立候補者氏名一覧を他の生徒たちもまじまじと見入りつつ、

「まさか女子がなあ」

「それも一年だろ？」

「清坂さんって中学の時評議委員やってたよね」

などいろいろ語り合っている。予想外の展開であったことには違いない。乙彦は古川の隣りに立ち朝の挨拶を交わした。一応古川は清坂の親友だ。知らないなんてことは通常ならありえないはずだ。何か事情があると見た。

「関崎、あんた、知ってた？」

顔を見るやいなや古川は勢いよくかじり寄ってきた。

「何をだ。生徒会役員の立候補者か」

「当たり前じゃん！」

「古川は清坂から聞いてなかったのか」

慎重に問い返す。別に古川を信用していないわけではないのだがここ最近乙彦の予想していない出来事が多すぎる。

「聞いてないとは言わないけど、でもさ、まさか」

とりあえずはこの場でしゃべるべき内容ではなさそうだ。

「少し詳しいこと聞きたいんだが、いいか」

ロビーの隅に連れ出した。古川も特に嫌がらずについてきた。ただ朝の一発な話題を持ち出そうとはしなかった。柱回りでわいわいやっている連中の中には一年A組の生徒もちらほら混じってきている。

「俺もかなり驚いたんだが」

切り出してみた。古川も頷きながら聞いている。

「生徒会役員の立候補者名は俺も昨日、受付締め切り後の生徒会室で初めて知ったんだ」

「そうだよねえ」

腕組みして首をひねっている。女子っぽくないしぐさだった。

「今回どういうわけか、立候補した奴の名前ほとんど噂にもならなかったし」

「それが不思議なんだ」

何度も考えた疑問を伝えた。

「俺ぐらいだろう。副会長に立候補したと噂になったのは」

「ああ、あんたは目立つからね。隠したって無駄無駄よね」

「じゃあなぜ」

言いかけた乙彦を古川は制した。ため息交じりに、

「嘘言いたくないからはっきりしてるところだけ言っとく。一応、美里が生徒会に立候補するつもりってところまでは聞いてたよ。友だちとしてね。私もそれは大賛成。ほんとはB組の評議委員に入ってもらってA組の私と仲良く活動したかったって本音もあったけど」

言葉を切った。

「でも、どうもそれ期待できそうにないじゃん？ 静内さん人気あるし。だったらもっとやりたいことができそうな生徒会に入るのが美里にとってもいいことじゃないかなって気がしたんだ。そこまではほんと」

「だがなんでそれがばれなかったんだろう」

しつこく疑問を問うと、古川は当然といった顔で言い放った。

「ばらすわけないじゃん！ 立候補したいとは言ってたけど、実際立候補するかどうかは美里の判断だもんね。美里が生徒会室に行って立候補手続きするところまではついていけないよ。実際そこまでは私も、ほら、この前集まった時につきあったけどさ」

締め切り前日の集まりに確かに古川はいた。だがあの場でも、何も知らなかったと言い張るのか。

「なんだかなあその疑いぶかそうな目つき。信じてないでしょうが。まあいいよ。あんたと同じく私も今、気持ちの整理がつかない状態なんだから」

「あの時古川も、清坂が立候補したところまでは確認していたがどのポストを希望したかまではわからなかったということか」

「そうだね、その通り」

古川はあっさり認めた。

「どうせばれることだし付け加えとくと、羽飛が立候補するのも知ってたよ」

「やはり」

「美里ひとりだと心細いだろうってことで、立村が勧めたんだよ」

「立村がか？」

ますます不思議だ。そういえば立村は一切そのことを語らなかった。

「私たち中学でしょっちゅうつるんでいた仲間同士だからね。最初に美里が羽飛、立村、そして私に打ち明けてくれたんだよ。もちろん応援はするけど、実際私たち生徒会がどういう世界なのか全然知らないわけ。立村は評議委員長やってたくらいだから接点ゼロとは言わないけどやはり感覚がね違うじゃん。美里もほとんどそんな感じだろうし、羽飛や私なんてもう問題外。たぶん立村のやたらと考えすぎる性格上、美里のことを心配しすぎたんだろうね。羽飛に出る出るって勧めてたよ」

「そういうことか」

ちょうどここで鐘が鳴った。しかたない。古川との事情聴取は途中で打ち切ることにした。

——立村がやはりかんでいたか。

立候補受付前日の集まりで立村が顔を出した、ということ自体何かありそうな気はしていた。できるだけ委員会、ましてや生徒会など距離を起きたがっていたはずの立村がだ。いくら仲のよい友だち同士とはいえなぜ、そこまで助言しようとするのだろうか。

教室に入ってから立村にも軽く挨拶をした。なんだか申し訳なさそうな顔で頭を下げる立村にそれ以上問い詰めることも気がひける。すぐに話しかけてくるのは藤沖だった。

「とうとう立候補者が揃ったわけだな。実際は信任だし決まったようなものだが率直な感想を聞かせてくれないか」

かなりまじめに問い詰めようとしている。答えに迷う。そもそもどう答えればいいのか。

「意外な展開だとは思った」

「会長か」

「ああ」

短く答える。そうとしか言えない。藤沖も声を潜めて、
「事情は俺ができるだけ先輩たちから洗い出すつもりだから安心しろ。だがな、他の連中も全く清坂の動きを読めなかったというのは意外だった」

「俺もだ」

「てっきり羽飛が会長かと思っていたんだが」

「誰もそれを疑う奴はいない」

藤沖は首をひねった。

「難波と更科が立候補というのはある程度予想ついていたが、なぜ天羽が動かなかったのかだ」

「できれば知りたいのは、その他の女子ふたりについてだ」

あまり清坂がらみの話題にはつまみたくないのであえて逸らそうとすると、聞こえていたのか片岡がちょろちょろとひっついてきた。藤沖がにやつきながら片岡を見下ろしたが無視して語りかけてきた。

「泉州さんのこと？」

「お前知ってるのか？ あの、書記に立候補した人だが」

「うん、この前焼肉をうちに食べに来てた人、覚えてない？」

他の女子たちに聞かれたくないのか片岡は、藤沖以上に声を潜めた。机に張り付かんばかりになり、乙彦に密着した。

「俺は一度見た顔を忘れることがないんだが覚えていない。不覚だ」

片岡が何かを話そうとして迷っているところへ、余計な一言を藤沖が投下した。

「そういえば西月の親友だったよなあ、片岡」

本当はそこから先の、泉州という女子の話の聞かせてもらいたかったのだが、片岡はいきなり顔を真っ赤にして無言で席に戻ってしまった。仕方ない。今度内川の事情を聞く流れでついでに話を持ちかけてみよう。情報はあるに越したことはない。

24 信任投票（2）

立村を捕まえるチャンスは意外と早くやってきた。

「おーい、立村いるかあ？」

「よっし、ちょっと面かせ」

「言い訳したっていいよね」

給食食べ終えた昼休み、けたたましく飛んできたC組三羽鳥に立村がC組へ連行されてゆくのを見送っているうちに古川から、

「ちょっと、あんたも一緒に見に行かない？」

誘われた。今朝の話からすると古川も生徒会立候補にまつわる大どんでん返しについて追求したくてならないらしい。だったら親友の清坂を捕まえろと言いたいところだがその辺は考えていない様子だった。

「俺が追いかけていくべきか疑問だが」

「いいのよあんた。立村をA組に奪還するって言い訳があるじゃん」

——何も奪還っていうのはないんじゃないか。

せかされて立ち上がる。どちらにせよ、興味はある。

B組を通り過ぎてC組へ向かうと、やはりというかなんというかな立村は天羽たちにしっかり囲まれて追求されている。真ん中あたりの席にしっかり据えられ、真正面から難波が、両隣から天羽と更科が、遠目で南雲が他の男子連中とにやにやしなながら眺めている。

「立村、お前何たくらんだ！」

追求とはいえどもものどかな雰囲気なのに難波だけ目が釣り上がっている。冗談が通じないらしい。

「たくらんだわけじゃないけどさ」

「いや、お前絶対何か仕掛けてだろ！ 他の奴はともかくも俺を騙せ通せるとは思うなよ！」

「別に難波を試すつもりじゃなかったけど」

とまどった風に俯いたまま立村が言い訳している。

「まあまあホームズ切れるなよ。お前だってこれから、ほぼ九割方生徒会の人間になるわけだし、俺も一緒だし、いいじゃん。羽飛も悪い奴じゃないし、清坂さんも」

「そういう問題じゃねえってんだ！」

難波が指で煙草を吸うようなまねをした。その指で机を叩いた。

「いいか、立村。俺もお前とは長い付き合いだ。お前のやり口を知らんわけじゃない。羽飛を組み入れた、ついでに清坂も引きずり込んだ。それはいい」

「いや違う、引きずり込んだわけじゃないってさ」

慌てて立村が言い訳するが無視される。

「今度の生徒会が一年生ばかりになっちゃうのも前もって委員会経由から情報は得ている。音楽委員会もなめたもんじゃない。これからどういう展開になるかわからないが俺なりに考えてそ

れで立候補したんだ、わかるよな」

「わかる、つもりではいる」

小声でつぶやく立村を慰めるように天羽が肩を叩く。

「ま、お前のことだ、難波が言うようにお前なりに考えあったのは認める。ただなあいつがぶち切れてるのは別のこと、なんだよな？」

エキサイトしすぎているんじゃないかと思うのだがC組の男女生徒ともにみな冷静、慣れっこのようだった。合唱コンクールで指揮者だった難波も、練習中は相当怒鳴ったと聞く。C組の皆様には心より同情する。

「そうだよ、ホームズも少し落ち着けよ。ただ俺もびっくりしたよ」

また和みの言葉を放つ更科。

「羽飛が会長に出るのならああそうだなって思うけど、まさか清坂さんだなんてね。そりゃうちの学校、中学も今まで女子が会長してたけど高校で今まで会長っていたっけ？」

「いねえだろ普通！」

なんだかけんかしているのかじゃれあっているのかよくわからないが、とりあえず立村もさほどおびえている様子もないし安心した。場合によっては間に入らねばならないとも覚悟していたのだが。ふと、一緒にいたはずの古川が見当たらないので目で探すと、今度は別口でつるし上げ中らしい。もちろん、羽飛しかいない。

「あのねえ、羽飛、私だけなんで蚊帳の外なわけ？」

「そう怒るなよ、古川、結果オーライでいいだろが」

「羽飛もそうだけどなんで美里も内緒でいろいろエッチなことしちゃうだろうねえ」

「してねえよったくばか！」

こちらも痴話げんかっぽい雰囲気遊んでいる様子だった。深刻な話にはなりそうにないので胸を撫で下ろす。なんだかんだで次期生徒会の仲間たちを歓迎しているかのように見えた。

「だってさ、私のうちで話、した時、どのポストに出るのって聞いたらまだ決めてないって言ったじゃん！ 美里もそうだったけどさ、あんたいつ決めたわけ？」

「締め切りぎりぎり。人生悩むぜそりゃ」

「悩むったって、書類提出する時に普通書くでしょが、書記です副会長です会長ですって」

「立候補するにはするけどポストはあとでって話をしたんだがな。なあ、そうだろ立村？」

三羽鳥に思い思いの形でつつかれている立村へ羽飛は呼びかけながら近づいた。

「ポストはあとだと？」

また目がつりあがる難波を更科がまあなだめるように腕を引っ張る。立村はおずおずと、

「でもそれでいいって生徒会側でも言ってくれたし別にずるいことしたわけじゃないよ」

難波に必死に訴えた。

「ふたりとも立候補するならそれでいいかなと思ってたし。ただポストが重要だというのは俺も知らないわけじゃない。少しじっくり考えてからのほうがいいんじゃないなってさ。どちらが会長になっても不思議じゃないし」

「ちょい待ち、立村」

初めて天羽が鋭い口調で問うた。

「お前、清坂と羽飛が立候補した時、どちらが会長になったほういいと思った？」

「それは」

また言葉に詰まる立村に、今度羽飛が割って入った。

「天羽、あんましこいつ責めるなや。見ろよ、完全に責任ひとりで背負っちゃった顔してるだろ。違うっての」

「じゃあ羽飛ちゃん真実をとことんどうぞ」

「たいしたことじゃねえよ。立候補は決めたけど最終的にはあみだくじ」

——あみだくじ？

聞くとともにしに聞いていたらしいC組連中がすわと耳をそばだてた。

——おい、お前ら、生徒会長のポストを「あみだくじ」で決めるのかよ！

たぶんこの時の乙彦は、難波と気持ちが思い切り重なっていたと思う。

古川が清坂を腕引っ張ってきたのはこの時だった。

「なんなのいったい、すごい盛り上がりだけど。立村くんまた弾劾受けてるの？」

「弾劾じゃないけど」

「似たようなものよ。まあいいけど」

天羽たちの中に割って入った清坂は、古川に向かい両手で「ごめんね」するポーズを取った。すぐに難波へ向かい合い、

「難波くんごめんね、それと更科くんも」

素直に頭を下げた。おかつ髪が揺れた。

「そりゃびっくりするよね。女子が生徒会長っての、驚くよ。私も中学で佐賀さんが生徒会長になっちゃった時、卒倒しそうになったもん」

あっさり謝られて、言葉を失っている難波に清坂は立村を見やりながら、

「私もね、まあいろいろあるわけ。前から生徒会出たいとは思ってたの。けど、かなり迷ってたんだけどね」

「だったらもっと早く言えよ。なんで隠してたんだ？ それぞれ心の準備つつうのがあるだろ」

難波がぶっきらぼうに尋ねる。怒りは収まったようではある。

「そうね。今回あえてぎりぎりまで迷ったのはどの役職に出るかってこと。それによってやりたいことが変わってくるじゃあない？ 私もやりたいことそれなりにあったからどの役職がいいかなあって悩んで、それで結局貴史とあみだくじで決めようってことになって」

「だからなんでお前らあみだなんてそんな安易なやり方するんだ？」

またエキサイトしそうになる難波に、今度は立村が口をはさんだ。

「俺がその立会人になったけど、結果としては同じだったよ」

「どういうことだ？」

天羽が問いかける。

「つまり、あみだくじ作って勝ったほうが自分の意思を通すだけだから。結局清坂氏が勝って生徒会長立候補選んだけど」

続けたのは羽飛だった。立村の後ろに回り両手を両肩に置いた。

「そ。俺はどっちにせよ美里のやりたいようにやりゃあいいと思ってたから会長でも副会長でもOK。やりたいことある方が上に立てば一番いいんじゃないかねえの？　なあ立村？」

屈託なく笑った。

「ところでこれから立会演説会なんだが、準備しているか？」

和やかなつつき合いの真っ最中によりによって副会長候補者の乙彦が言い出すのも何かと思っただが、とにかく聞いてみるしかない。呼びかけた。

三羽鳥も羽飛も清坂も、もちろん立村もようやく気がついたといった風に見合せている。あまりにも間が抜けていると思わなくもないのだが、一応今日の六時間目を使って形式上の立会演説会があるはずだ。たった一時間で終わるのかも疑問だが。

「そう、そうだよな」

清坂も両手で頬を押さえつつ乙彦に問いかけた。

「私、一応原稿作ってあるけど、どうなんだろう」

「ちょっと美里、あんたまさかぶっつけで読むつもりだったの？」

古川がまた仰天声を挙げた。なだめる羽飛。

「古川そうぎゃあすか言うな。俺もとっくの昔に準備済みだ。なあ立村？」

「確かに、まあ」

言葉を濁す立村をどつく難波。相当、いろいろと隠されていたことを根に持っているらしい。

「少しでも先に出て準備するつもりだったんだろが俺をなめんなよ。更科と一緒に俺も原稿あるぞ」

「仲間っていいなあ。みんなで頭つき合わせてれば原稿あつという間に出来ちゃうもんなあ」

また空気を和やかにしようとするのが見え見えの更科が机に座って足をぶらつかせる。

「けど、なんか変だとは思うんだよね」

清坂は立村に近づき話しかけた。

「立村くん、どう思う？ 昨日ね、立候補者全員呼び出されて顔合わせしたんだけど立会演説会については何にもいわれなかったんだから。私聞いちゃったもん。本当にやるんですか立会演説会をって」

「そしたらなんて」

立村がまじめな表情で清坂を見上げた。身を乗り出している。

「やるけど、準備しなくていいよって。それってどういうこと？ 立会演説会って今までならみんな、原稿作って読むよね。所信表明みたいな。それいらないってどういうこと？」

今までずっと黙って聞いていた南雲がひょいと手を挙げた。乙彦と目が合い愛想良く笑った。

「清坂さん、たぶんうちの学校の十八番だよそれ」

「十八番？」

清坂だけではなく他の生徒たちも南雲に視線を集中させた。

「生徒会のみなさん、たぶん何かたくらんでるよ。俺たちの規律委員会とおんなじ」

「でも仮装するなんて話、出てないけど」

一瞬誰かが吹き出した。この場には「規律委員会アイドルユニット三人組」が揃っている。

「衣装を着けるのは間に合わないにしても、何かのイベントとして考えているんじゃないかな。」

少なくともおとなしく席について眠そうな顔して演説を聴いているなんてのりじゃないと思うんだけど、りっちゃん、どう思う？」

立村が振り向いて何かを答えようとしたところでちゃんちゃん、鐘が鳴った。

五時間目もいつものように終了し、いざ、六時間目の立会演説会へとなだれ込むことになる。八人、ひとり五分程度として四十分弱か。その後はみな教室で静かに投票用紙を書きこんで投票。自然な流れだ。信任投票でも、だが。

「立会演説会五分前です。候補者のみなさんは先に体育館まで集合してください」

校内放送が休み時間流れ、乙彦もとりあえずは用意した演説原稿を片手に飛び出した。なんだか中学時代の張り詰めた空気とは全く違うゆるんだ雰囲気になだれ込んでくる。

——いくら時間が切羽詰っているとってな。

D組から同じくわらわらと現れる立候補三名。C組、そしてB組。いつのまにか連れ立って廊下を歩いていくと、いきなり拍手が沸いた。からかい口調で、

「よっ！ 大統領！」

掛け声かける奴もいる。大名行列のようだ。

「なんか歩いているだけなのにね」

清坂が羽飛に話しかけているのが聞こえた。乙彦もいつのまにか大名行列状態で廊下をつっきりながら、隣りにいた名倉に、

「これが本当に生徒会役員選挙なのか、信じられるか」

問いかけてみた。名倉も仏頂面で、

「よくわからん」

答えるだけだった。

体育館に入り誰もいないがらんとした体育館のど真ん中で待ち受けていたのは、八名の現生徒会役員たちだった。準備に余念がないであろうことは予想していたのだが、まさに純粋に八名のみで準備を進めていたこと自体に驚いた。

「どうも、よろしくお願ひします！」

羽飛の張り上げた声に合わせて全員が一礼した。すぐに手招きされた。

「さあさあ、じゃあみんな、とりあえずここに座って」

「ここ？」

清坂が生徒会役員たちの固まっている中に進んでいきもう一度確認を取った。

「あの、椅子とか持ってこなくていいんですか？」

「いらぬ。みんなここで車座になってしゃべるから」

生徒会長は平然として答えた。それを困む他の生徒会役員たちも、

「これね、ずっと前から計画してたんだけど今の今まで内緒だったんだ！ みんな驚くだろうなあ」

「あのう、先生たちは」

乙彦なりに遠慮しながら尋ねると、またあっさりと答えが返ってきた。

「俺たちなりにずっと任期中はまじめにやってたからな。最後の最後まではやりたいようにやらせてもらうということで、今回は大目に見てもらったというわけさ。でなかったらあんなイレギュラーな、一年生しかいない生徒会とか組めないだろう？」

隣りで呆然と、立会演説会用の原稿を握り締めている難波にも、生徒会長は穏やかに声をかけた。

「ああ、ホームズ難波、安心してくれ。ちゃんとおめえさんのしゃべる番は用意してあるから思う存分語れよ。原稿なんかいらなからな。せっかくだから激論交わすのも悪くないぞ」

「あの、投票は」

名倉が質問を投げたのに誰もが驚いていたが、すぐに書記の先輩が答えた。

「大丈夫。さすがにそれは帰りに教室で書いてもらうから。公平を期するために開票は先生たちに全部任せてるから」

——それってかえって、生徒会の自主性を失ってるんじゃないのか？

疑問が疑問を呼ぶ中、生徒たちがみなばらばらに体育館へ入ってきた。やはり生徒会役員たちおよび候補者たちがど真ん中で語っている姿に戸惑っている様子だった。すぐに先生たちが交通整理を行ってくれている。本当だったらそのあたりを生徒会役員たちが取り仕切るはずなのではとも思ったが、生徒会長は動じずさっさと胡坐をかいた。

「大丈夫、ちゃんと先生たちとも取引はすんでるからね。さ、みんな適当に座ろう。みな同じ平面で話したほうがいいと思うから、椅子はなしだよ。尻が痛いかもしれないけどがまんしろよ」

いつのまにか生徒会役員、立候補者たちは全校生徒たちに囲まれる形となる。マイクの用意を手伝ったのみで乙彦は膝をかかえて座った。女子たちは足を崩す格好で、男子連中はみな胡坐かあんざ。ふと、何かが蘇った。

——座談会、か。

二年前の水鳥中学学校祭で惨めな敗北のうちに終わった、あの時を。

「それではみなさん、これから立会演説会を始めさせていただきます」

生徒会長の一声で前代未聞の展開と相成った青大附高立会演説会は、マイク一本用意した中、みなが思い思いの形で座り、発言者がその時々立ち上がるといった形をとって進んでいった。立候補者および生徒たちがぼかんとしている中で生徒会役員たちの手際は見事だった。てきぱきと話を進め、なぜこのようなイベントを開いたのかをかいつまんで説明を行った後、

「そういうわけで僕たち青大附高生徒会最後の役割として、全くさらな状態から新しい風を吹き込むために、みな同じ立場で意見を戦わせればと思った次第です」

一通りまとめた。驚くべきことはこの形式での展開が生徒たちにはばれていなかった代わり、先生たちにはあっさり通ったという現実である。

「それでは最初に、会長候補の清坂さん、ざっくばらんに今回の立候補理由をさらりと」

「はい」

差し出されたマイクを慣れた手つきで受け取ると清坂は立ち上がり最初にかんたんな自己紹介をし、にこやかに語り出した。他の連中はやはり膝を抱えているのみ。

「ええと、こういう感じで話すのってほんっとに久しぶりなんですけど」

後ろの方から上級生たち一部の「やっば清坂ちゃん可愛いなあ」との声が聞こえてくる。

「私、中学の時評議委員会に三年間参加して、きっと高校も同じのりで委員会活動やってるのかなって思っていたんです。部活動の延長みたいな感じで、みんな仲良くいろんな学校行事に参加したり、委員会ごとにさまざまなイベント企画したり。でも高校に入ってなんとなく雰囲気が変わってきていたような気がして、なんでだろうっていつも考えていたんです」

——本当にいいのかこんなしゃべり口調で。

演説ではない。ごくふつうに友だちもしくは親しい先輩と話しているようなのりだ。清坂も特に肩肘ばった雰囲気がない。時々囲んでいる生徒たちに語りかけるように目線をかえて、

「でも、それは決して悪いことじゃあないなって。思うようになったんです」

「それはどうして？」

副会長の女子先輩が問いかける。

「中学って、入学した時から同じスタートって感じですからその中でいろいろと企画するだけでよかったし、正直それで精一杯ってところがありました。でも、高校に入ってみて外部生の人たちやもっと言うと他の学校の人たちとの交流などもあって、もっと視野を広げる機会が増えたんじゃないかなとか、そんな気がしたんです。あと、私、学校祭で規律委員のひとりとしてたくさんの人たちに接する機会があって、こういう形でいろいろな出会いや変化を感じさせられる学校に変わっていくんだったら、きっとみんな楽しく過ごせるんじゃないかなって。そう思うようになったんです！」

「ではあとでもっと詳しく聞くとして、次に生徒会副会長に立候補したお二方どうぞ。ええと最初は羽飛くん」

いきなり「はーとーばー！」とコールがかかる。いいんだろうか、A組の古川も羽飛コールに

混じっている。羽飛は頭をかきながら立ち上がり、

「あっと、僕は中学で特に委員会活動やってないんですが。ただ三年になって一時的にクラスをまとめることの難しさとかやりがいとか、そういうものを感じる機会があったんです。それでさっきの清坂さんと同じところもあるんですが、もっといろんな生徒たちの意思とかやりたいこととか、そういったもんをもっと取り入れて、中学とは違った形で盛り上げていければいいなとか思ったんで。実はたいしたこと考えてません。それなりに演説用原稿は持ってきたんですがそれ読んだほうがかえっていいですか」

「いらんいらん。でもわかるよそれ。みんなの声を聞いて盛り立てたいってのはわかるよ」

「かえって中学の委員会経験を積んでないからこそ、新しい目線で出来ることもあるんじゃないかねのってことで俺なりに考えた次第です。質問どんどん受け付けます」

かなりあいまいで短い所信表明だが、一年生を中心に拍手が沸き起こった。やはり羽飛の同学年人気は相当なものらしい。どうでもいいが古川もずいぶん薄情なものだ。

「では次、関崎くんどうぞ。それとみんな無理して『わたくし』なんて使わないでいいからね、男子は『俺』女子は『私』もしくは『あたし』でOK」

くだけた口調で盛り立てようと書記の女子先輩が呼びかけながらマイクをよこした。

「あの、一年A組英語科、関崎乙彦です。よろしくお願いします」

どうしようもない違和感の中、乙彦は直立不動したまま一礼した。やはり一応は立会演説会だ。こんなとろとろしたしゃべり方だと自分が保てない。台本は要らないがそれなりにしゃべりたいこともある。

「関崎くーん！」

ありがたいことにコールがかかっているのは一年A組からだった。B組にいる静内を探してみたがじっと黙って見ただけだった。

「俺がやりたいことというのは、この青濤大学附属高校に情熱の炎を燃やしたいってことです」

マイクに口を当ててはっきりと言い切った。全校生徒たちが前から後ろからじっと乙彦を見つめているのが伝わってくる。同じ平面だけあってその熱も身近に感じられる。

「俺は今回の学校祭で規律委員として、外部生というフィルターつきのいろいろな経験をしてきました。正直言って俺は入学した時先輩たちから参考書や辞書、制服や体育着のスペアとかいろんなものをもらって入ってきたような奴なんで、いろんなところがずれているっていうのは感じてます。でも、みな一対一で話せば余計な情報なんて関係なく分かり合えるし、目的があれば精一杯そこに向かって突き進める、それだけじゃなくて誰かが苦しんでいたらいろんな方法で助け合える、そういう学校だったんだと知りました」

みなしんと聞いている。いいんだろうかこんな大雑把な話で。

「その一方でいろんな人たちから、青大附属は金持ちの学校だからとか、外部生は常識がないとか、内部生は伝統に拘りすぎているとか千差万別の意見が耳に入ってきます。実際俺も典型的な外部生なんで、戸惑いが全くないとは言えません。でも、だからこそいろんな価値観がぶつかり合うことによって生まれる新しい校風というのも絶対あると思います。本当はクラスをまとめ

るとかそっちから始めたほうがいいんじゃないかって気もしたんですが、やはり俺はできるだけ早い段階でたくさんの人たちとの、ええと化学反応みたいなものを見てみたいと願ってます。そのための起爆剤として、あえて外部生として、飛び込んでみたい、その上で来年の学校祭においては今年とは違った本当の意味での内部外部の融合の炎、みたいなのを燃やしてみたい。そう思ってます」

「関崎くんお疲れさま。じゃあ次」

ひとりで長くしゃべり過ぎたらしく、あっさり次へ次へ、とマイクが回されていく。乙彦の話したいことはまだたくさんあったしなんだか誤解されそうなところで切られてしまったのが不満ではある。だが仕方あるまい。時間は限られている。

——紅炎をもう一度見たい。

隣りで名倉がささやいた。

「内部と外部の化学反応か」

「ああそうだ」

「爆発して事故を起こすかもしれないぞ」

「だから一年のうちからやりたかったんだ」

さらに説明しようとしたところで今度は名倉にマイクが回ってきた。はたしてこいつは何が立候補の理由なのか。興味津々で見守ると、

「僕は、早いうちから会計知識を身に付けたいと考えて立候補した次第です」

きわめて自己中心的な答えであっさり納めてしまった。名倉がなぜ、会計に立候補したいと考えたのか今だに理解できない。外部生としての味方としてはうれしいが、本当にそれだけでいいのだろうかと思わずにはいられない。

「俺は評議委員会時代に得たたくさんの財産を、青大附高にも還元したい！ だからこそ今回立候補しました。何も新しいものを無理やり褒め称えることがいいとは俺は思いません。むしろかつて得てきた素晴らしい伝統、たとえば評議委員会で中学時代やってきた『ビデオ演劇』などの自主活動、規律委員会で言えば『青大附中ファッションブック』などのオリジナリティーあふれた活動をもっと支援したいし、そういうことを応援してきた中学の風土を俺は移植したい！ それさえあれば青大附高は強い学校に生まれ変わることができるはずです！」

熱くマイクを握り締めて叫んでいる難波に、みながあきれた顔しつつも温かな拍手を送っている。乙彦は眺めつつ自分の言葉「化学反応」のひとつを難波に重ねて見上げた。ついでに立村の姿も探した。立村はいつのまにかC組の南雲と天羽のふたりにはさまれる格好で穏やかな表情を浮かべつつ候補者たちを見つめていた。

24 信任投票（5）

結構話をした感じがするが実際終わって見るとたった一時間で完了している。

「意外と時間短縮になるでしょ。椅子とか持ち運びしないでもすむし」

生徒会役員たちの手際よい撤収ぶりと、それに伴う投票作業も単純だった。教室で渡された投票用紙に○つけて提出してそれで終了。あとは明日の早朝に開票結果が発表となるのだが、そこが信任投票たるところで九割がた決定と考えていいだろう。

「あのやり方はさすがだな」

投票用紙も回収され放課後に入ったが、一年A組の一日はまだ終わらない。藤沖につかまって乙彦はしかたなく生徒玄関に向かった。ある程度着替えは親に持たされてボストンバックの中に入っているがどうせ同じ敷地にあるセミナーハウスでの一泊、たかが知れている。明日の授業に伴う教科書が少し重たいだけだった。

「これからすぐ行くだろ」

「そうだな」

本当はいつもの外部三人組としゃべりたいところだったのだが、今日はさすがにそうもいかない。あわただしくも決まったクラス合宿の予定が配られていて、

- ・ 集合：十八時
- ・ 夕食：十八時半
- ・ 風呂：十九時三十分～二十時
- ・ クラスミーティング：二十時～二十二時
- ・ 就寝：二十二時

きわめて健康的なスケジュールがまとまっている。

「本来の予定はすべて二十二時以降に固まっていると思うんだが」

「だが明日の朝は早いだろう」

乙彦も朝バイトを休む気などなく、麻生先生にもその旨伝えてある。朝四時起床はいつもどおり、朝食はひとりだけ早く用意してもらうことになる。

「朝練やっている奴もいるしな。お前だけじゃない。どちらにせよあまり夜遅くひっばるのは無理ということか」

「それ以前にクラスミーティング自体が二十二時で終わると思うか？」

麻生先生のことだ。かならず何かかしら伸びるネタが用意されているような気がする。

「ところで今日の立会演説会ならぬ、座談会だがお前、実際参加してみてどう思った？」

藤沖は乙彦に、寒空の下尋ねた。

「よくわからないがああいうやり方もありだとは思う。少なくとも中学でああいうやり方を経験したことはない」

「そうか。俺も実は初めてだ」

藤沖は鼻の下をかきながら続けた。

「今まで生徒会といえば先生がたの言いなりで無難にことを片付ければよいという発想のもと動いていたのは否めない。実際俺が生徒会長やっていた頃も、ふざけるのは委員会で、生徒会はまっとうにというのがモットーだったからな。おそらく今までの生徒会もその路線でやってきたんだろう。だがそれだと限界を感じていたということでゲリラ的なやり方をいきなりとったということらしいな」

乙彦もある程度は聞いていたことなので驚きはない。

「まあ、面子を一通り確認してみたがまんざら悪くはない。清坂が最初どうかと思ったが、もともとあいつも頭の回転は速いしそれに羽飛が脇にいる。暴走を止めるくらいのことはするだろう。ただ」

——やはり不安分子があるということだな。

言いたいことはわかっている。乙彦も空を見上げて答えた。真っ白い空だった。雪がそろそろ降りそうだ。

「お前が前から話していたあのふたりだろう。確かに俺も感じている」

「今回の難波の発言も正直俺は気にかかるところがあるんだ」

同じことをやはり藤沖も思っていたのだろう。

「清坂、羽飛、このふたりは内部と外部の融合を目指しているといった雰囲気はなんとなくする。評議時代にいろいろ感じるものがあつたのだろうし、羽飛もそれに同感しているようだ。少なくともお前の敵ではない。まあ清坂は前からお前に惚れているようだからそれ以外の要素もあるかもしれないが」

「うるさい、そういうことは俺には関係ない」

「そう怒るな。お前の本命は明白だ。だが難波は明らかに中学と同じ空気をなんとかして高校にもまとわせたいといった意識が強い。古きよき時代の青大附属を復活させたい、その気持ちは本物だろう。だがそれは外部からの変化をも拒絶することにつながりやすい」

——それはわかっているがどうすればいいんだ。

藤沖の熱く語る気持ちもわからなくはないのだが、まだ生徒会役員に決定したわけでもないのだからこの段階で細かく考えることも難しい。

「俺も評議委員として出来る限りの協力はする。いつでも相談してくれ」

「ああ、わかった」

とりあえずは適当に流しておくことにした。

集合時間にはだいぶ間もあることだし図書室にでも立ち寄ろうかと思ったが、

「せっかくだ。お前もセミナーハウスに入るのは初めてだろう。俺が案内するぞ」

頼みもしないのにどんどん大学敷地内に向かう藤沖。まだ四時を回るかどうかというのに早すぎやしないかと言ってみたものの、

「いや、セミナーハウスは結構ゆったりしていて、運動する場所もある。飲み物も適当に買える。遅刻するより早いに越したことはない」

どうやら今日は藤沖に付き合うしかなさそうだ。

向かう途中立村とすれ違った。乙彦が声をかけたが気づかなかったようで反対方向へ駆け出していくのが見えた。見送っていると藤沖がまたつっこんできた。

「あいつも参加すると聞いていたが」

「参加しない奴いないだろう？」

「確かにそうだが」

藤沖は少し考え込みつつ改めて立村の背を目で追い、すぐに乙彦に尋ねた。

「お前は立村とそれなりに付き合いがあるようなんで聞きたいんだが、最近あいつやたらと中学に顔を出しているような気がしないか？」

「それは俺も感じていた」

その通りだ。やはり乙彦だけではなく藤沖をはじめとする他の連中も同じことを考えていたのだろう。付け加えておいた。

「ここ最近そんな気はしていたんだ。もうひとつ気になっていたのが、霧島といつもつるんでいることなんだが」

「霧島、というと、生徒会のか」

「そいつしか俺は知らない」

——厳密には弟の方か。

藤沖にはまだ、霧島の姉と顔をあわせたことを伝えていない。

「そうか、霧島と連絡を取っているのか」

何か勘付いたようで、唇をかみ締めていた。ただ何がひっかかったのかはわからない。

「夏休み前からしょっちゅう見かけていたんだが、ここ最近は毎日と言っていいな。相当なつかれているようだが」

「そうか、最近か」

考えこんだ後、藤沖は思い切り坊主頭を振った。

「さっさと行くことにしよう。食いは古川が全部手配してある。今夜のクラスミーティングはほぼ当選確定の関崎お祝いパーティーになるに決まっているからな！」

六時集合時刻とは言うものの、気がつけばひとり、またひとりと集まってくるわ、
「ちょっとお、あんたら暇もてあましてるんだったら荷物運びしてよね」

古川の命令に従ってペットボトルやスナック菓子運びにこき使われたり、
「あ、ピアノある。弾いてってもいいよね？」

めざとく見つけた集合室内のアップライトピアノを奪い合いする女子たちとか。それに合わせて箱にしまいこまれていたタンバリンで遊んだりする男子とか。

みな思い思いに合宿開始直前まで楽しんでいたようすだった。男子らも大部屋に全員詰込まれ仲良くテレビを見たりトランプやったり、何考えたか古典的な枕投げを始めたりとか。やりたい放題ではあった。

「関崎、それ何？」

乙彦が部屋の窓辺にラジオを乗せアンテナを伸ばしたところ、片岡が興味を示して近づいてきた。別にごく普通のFM・AMラジオだ。短波は入らない。

「ラジオが好きなんだね」

「その通りだが、俺の目的は違う」

通信報告書を書くためのデータも用意してある。家と違い学校内は比較的夜電波が落ち着いているのではという読みもあり、今夜はしっかりBCL三昧するつもりでいる。簡単にBCLとはなんぞやということ片岡に説明すると、

「そうか、外国のラジオ放送が聴けたりするんだ。英語？」

「どちらかいうとアジア系が多い。あとロシア語とかスラブ系か」

「じゃあ、分からない内容ばかり？」

「そうだな。全然俺にはわからんが、それでいい。とりあえずコールサインだけは聞き取れれば」

専門用語を使ったのがまずかったのか、片岡はそれ以上興味を示さなかった。惜しい。

集合十分前に到着した立村が最後だった。

「立村、おめえ遅せえぞ」

何名かの男子連中に突っ込まれるものの立村は特に言い訳することなく、入り口側で小ぶりのトランクケースを広げ出した。一泊旅行とはいえ少し本格的過ぎるんじゃないかとひそかに思う。興味はあるが誰も尋ねようとはしない。よく見ると次の日のためのシャツとネクタイまで用意している。いったい何のために。

最近クラスで立村がつるんでいるのは吹奏楽部の男子たちが中心だ。合唱コンクールがきっかけなのだろう。普段はどちらかという他クラスの連中と話をしているようだが、クラスの奴しかいない場所になると乙彦たちとは違うチームに頭を突っ込んでい

「さーてとみんな集まれ！ 最初に合宿開会の辞を麻生先生からどうぞ！」

時計の針が六時をまわったところで藤沖が……実際は古川がせかしたせいともいうが……全員を集会室に集め、じゅうたんの敷き詰められた中で全員正座して座った。

麻生先生もすっかりトレーナーとジャージ姿で準備を整えている。リラックスモードだが生徒たちはまだ制服、ネクタイも外していない。

「全員揃ったところで始めるとするか。今日はなんだかちっとも合宿といった雰囲気じゃないし、なんつうかその、仲間とマージャンする乗りだかな。今日を逃したらあとは期末試験でみなひいひい言う羽目になる。下手したら留年ともなりかねない。わかるな」

みな、発言せず。心中はみな「無謀だろそりゃ」の一言だ。

「そんなわけでまずこれからみんな死ぬ気で飯を食ってだ。その後でたっぷりこれから先の一年A組について時間無制限の一本勝負でもやろうと思っているんだがどうだ？ 藤沖どう思う？」

藤沖もたぶん、たまったもんじゃなとため息ついているのだろうがあっさり、

「いいと思います」

渋く答えた。そうするしかない。代わりに古川が茶々を入れた。

「それはそうなんですけど、テーマって何？ 先生、また人生についてとか恋愛についてとかそんな重たい話で議論するんじゃないでしょうねえ。悪いけどそれ、私たち仲間ですら実技つきで勉強してるからパスね」

「おい古川、いい加減その言い方よせ、お前も女の子なんだから」

たしなめつつ、麻生先生は胡坐をかいて両膝をぱしりと叩いた。

「共通の話題で行こう。今回の議題は来期のクラス委員改選だ」

ほぼ全員、顔が引きつった。もちろん乙彦も例外ではなかった。

——おい、まさかここでかよ。

藤沖と顔を見合わせた。首を小さく振るところを見ると評議の藤沖も状況を把握していなかったようだ。

「本当はお前らの恋愛遍歴をたっぷり楽しませてもらいたいところなんだが、やはり俺たちにも事情ってのがあってだな。次回のクラス委員改選にそれほど時間を裂けないつつう問題があるんだ。この半年いろんなことがあったろうし、お前らもいろんな委員経験してみたいってのもあるだろう。だがそれは一時間ちょっとじゃ片付かないだろ。せっかくだからこの機会に腹割って話しつつ、せっかくだからクラス委員もここでちゃっちゃと片付けてしまおうってのはどうだ。関崎どう思う？」

今度は乙彦だ。まわりの連中が視線を集中させてくる。答えるしかない。

「予定では二十二時就寝とありますが」

「場合によっては二十三時まで延長も認める。さすがに午前様はまずいがな」

「ですがそれほど時間がかかる内容とも思えません」

まだ口には出せないが藤沖もすでに評議委員をそのまま続ける意思ありだし、乙彦が抜けた規律委員も恐らく立村が立候補してくれるだろう。しなくても乙彦が無理やり推薦するし反対する奴もそういるとは思えない。その他の委員についてもそれほど荒れそうな気配はない。ものの五

分が十分程度で片付きそうな気もする。

「そうかな、わからんぞ。世の中予想通りにいかんことの方が圧倒的に多いんだぞ」

麻生先生は次に古川を指した。

「古川、女子としてはどうだ。何か言いたいことあるか」

「別に今はないですよ。みんな仲良し、それが一番！」

うさんくさそうに顔をしかめていたが、不意に立村の方を向いた。いつものように最後尾でちんまり座っている。

「立村、お前も言いたいことないのか」

「特にありません」

「そうか、さっきは中学校舎で見かけたがな。ずいぶん忙しいことだ」

露骨に顔を背けるしぐさをする。立村自身自覚しているのかわからないのだが、こいつは思ったことがはっきり顔に出る。

「何はともあれ、まずは飯と風呂、これにつきる。それで全員普段着に着替えろ。ジャージでもいいんだが女子の手前いいかっこ見せたい奴もいるだろ。多少のしゃれっ気は許す」

麻生先生の一方向的な合宿開始宣言の後、みな急いで食堂へと向かった。料理はきわめてありきたりなハンバーランチだったが味は悪くなかった。古川が予定しているという乙彦の「生徒会副会長（仮）就任パーティー」はどうやら麻生先生の意向によりお流れになる見込みらしかった。

「関崎、気にするな」

別に気にしてはいないのだが藤沖が背中をたたきながら語りかける。

「麻生先生のことだ、さっさと委員を決めた後は無礼講だろう。一緒に飲もう」

「飲む、のか？」

「当たり前だろう。古川にさっき何運ばされた」

そうだった。大量のウーロン茶とオレンジジュースのペットボトルだった。

——BCLは今回断念だな。残念だが。

風呂にゆっくりつかる奴あり、さっさとシャワーだけで終わらせる烏の行水野郎ありといろいろだ。ジーンズに着替えて髪の毛をタオルでふき取っていると洗面所で丹念にドライヤーで乾かしている立村を見かけた。麻生先生ではないが「しゃれっ気」だろうか。

なんとなく眺めていると、気づかれて戸惑うような目線を向けられた。

「どうした？」

「いや、ずいぶん男にしては珍しいことをしていると思っただけだ」

「何を」

かなり怪訝な顔で問い返された。しかたない、素直に言う。

「普通そんなにばか丁寧に髪の毛乾かしたりしないだろう」

「今夜は寒いから風邪引くかもしれないと思っただけだけど」

いや、それにしてもずいぶん整え方にこだわりがありそうだ。乙彦の納得しがたい表情をたぶん読んだのだろう。立村はやがて穏やかな笑みを浮かべた。

「俺はあまり外見拘らないほうだけど、うちの学校の生徒はファッションのこだわりが強い奴多いよ。さすがに化粧はしないけど」

——いや、お前は十分外見にこだわり過ぎだと思う。

たかが一晩の合宿にかこつけて、アイロンがしっかりかかったワイシャツおよびネクタイまで用意し、ベージュの細いコールテンシャツとほぼ共色のスラックスさらに濃い目の茶のベストというどう考えても普段着の延長とは思えない格好で準備しているのは、やはり何か違うと思う。

男子はそれでもさっさと風呂から上がり、連れだって集会室へと向かった。たかが十人少ししかいない男子連中で派閥を作る必要もないと思うのだが見事二分化されているA組。乙彦は藤沖、片岡その他何名かと早めに入った。やはりすでに準備済みの麻生先生が待ちかねていた。

「女子が来る気配ねえなあ。やはりおめかしに時間がかかっているんだろうなあ」

「化粧は禁止のはずですが」

乙彦が尋ねると麻生先生は吹き出した。

「いや、女子には女子のいろいろな準備があるんだろう。まあ座れ。それと藤沖もお前なあ」

さっさと傍らに乙彦たちを並べ、麻生先生は語りかけた。

「古川がまたちゃっちゃか働いてたぞ。こういうのもなんだが、嫁さん働かせるダメ亭主みたいな立場はまずいぞそろそろな」

「すみません」

「お前が応援団に燃えているのはよく理解しているし、学校祭での演舞はそれはまた見事だった。だがな、やはりクラスの評議としたらもっと働かないと他の連中から認めてもらえないぞ」

「わかっています」

神妙に藤沖が答えた。そっと片岡と顔を見合わせた。なんとなくだが麻生先生の言葉に感じるものがあるのだろう。

「それと関崎、とりあえず明日の結果待ちだがこの調子だと無事生徒会デビューできそうだな」

「おかげさまで」

そうとしか言いようがない。信任投票とはいえよっぽどのがなければまず落選は考えにくい。麻生先生はにやにやしながら乙彦に水を向けた。

「評議を飛ばしていきなり生徒会というのも驚いたが、お前らしい決断ではあるな。うちの学校の生徒会はその年によってカラーがまるっきり変わるが、お前たちの代はどんな色に染まるかねえ」

「これから決めます」

「女子が会長に立つというのもあまりないことだが、お前も知ってるだろ。B組の清坂。あの子はふつうっぽく見えるが結構腹が座っている。あとC組の羽飛といいコンビだ。初めて生徒会を経験するお前にはいいお手本になるんじゃないか」

ここで藤沖が口を挟んだ。

「先生お言葉ですが、それは関崎に対して失礼です」

「どうした藤沖」

「羽飛も清坂も悪い奴ではありませんが、関崎が見習わねばならないところはそうないのではありませんか」

「冗談冗談、何つつかかっているんだ。まあどっちにせよ、いがみ合うよりは少しでも相手のいいところを見つけて、少しずつ自分の色を出すのがよいということだ」

——別にいがみ合う気はないがな。

乙彦の不安材料が清坂たちよりも下に控えているふたりであることを、どうやら麻生先生はお気づきでないらしい。

しゃべっている間に今度は古川率いる女子たちがスナック菓子とジュースのペットボトルを人数分運び込んできた。ひとり一本もらえるようだ。立村が入っている男子グループも古川に、

「あんたらでかい図体してるんだから力仕事くらい手伝いな！」

はっぱをかけられてしかたなく働いている。乙彦も立ち上がりかけるが、

「船頭が多すぎるとかえって面倒だからお前らはここにいろ」

止められてしかたなく座りなおした。藤沖と片岡は全く動こうとはしない。古川に見咎められ思い切り怒鳴られたのは心外である。

「全く、もうあんたたちおうちでお母さんのお手伝いしたことないんじゃないの。まったくお坊ちゃまにはあきれられるわ！」

スナック菓子をそれぞれ紙皿に盛り付け、飲み物をそれぞれ手元に用意した後麻生先生は全員で円を描くように座らせた。もちろん乙彦たち男子チームが麻生先生の脇を占めるのは変わらない。

「ほんじゃあまあ、始めるとするか。今日の議題はさっきも言った通りクラスの後期委員改選なんだが、ただ立候補して手を上げて拍手して終わりじゃあつまらん。この機会だ。言いたいことがあれば言ってしまおう」

促しながら麻生先生はそのまま本題に進んでいった。いつもなら評議のふたりに舵取りを預けるのが常なのだが珍しい。最初に評議委員立候補者を募った。

「それでは、最初に評議委員の誰か立候補者いるか？ 関崎、生徒会役員と一緒に評議やる気ないか？」

冗談だろうが、もし違っていたらまずい。丁重にお断りした。

「生徒会役員の仕事を最優先で覚えたいのでお断りします」

「まじで取ったか。冗談も気をつけねばなあ。んで次だ。藤沖、お前どうする？ せっかくだ、前期の続き、後期もやるか」

「誰も立候補者いなければ仕方ありません」

しゅしゅとといった口調だが、すでに藤沖の本心を知っている乙彦には笑えてならない。

「それと女子、誰もいないのか？ このままだとお前らしっかり古川の尻に敷かれるがそれでいいか？」

「私は正々堂々立候補しましてよ」

高飛車なお嬢様風な口ぶりで手を上げる古川に、爆笑する一同。何事もなく、あっさりと終わるはずだった。

唐突に、ひとり手を上げる男子がいた。吹奏楽部三人組のひとりだった。

「悪いんですが、推薦もありなんすか」

「あああるぞ。誰かいるか？」

「推薦する前にリコールってのもありますか」

「ぶっそうだな。どうした、お前立候補するか」

麻生先生がじろりとにらんで促すと、

「今回、俺としては藤沖に評議をやってほしくないってのが本音としてあるんですがね」

刺された藤沖がぎょろりとそいつをにらみつけた。相手も打ち返してきた。藤沖の眼差しから逃げなかった。

「どうした江波」

吹奏楽部の江波がいきなり爆弾発言をやらかしたのにも関わらず麻生先生はいたって冷静だった。

「相当溜まっているみたいだなあ」

「まあそれなりに」

江波はぐいと藤沖をにらみつけた後に、

「せっかくの無制限一本勝負と来るのなら俺だってそれなりに覚悟はあるんですよ。とりあえず今までの経緯について説明させてもらえますか」

女子たちの「どうしたの江波くん」「疲れてるんだよきっと」「秋のコンクールこの前終わったばかりじゃない。で燃え尽きてるのかね」などいたって軽い口調でささやいているのが聞こえる。どう考えてもそんな軽い話ではないというのに。見ると古川は何も言わずに江波を観察している様子だ。すぐに口出ししないのがまず怪しい。

「俺に不満があるならいい機会だ。言ってもらったほうがいい。これからのためだ」

「よっしゃ。わかりやしたってことで」

江波は立ち上がり、座っている連中をぐるりと見渡した。その中には麻生先生も混じっている。もともと江波はクラスでもあまり目立つことがなく、しいていえば吹奏楽部でフルートパートを担当しているというくらいの情報しかない。それでも先日の宇津木野を巡る合唱コンクールのどたばたについては関心大だったようで、藤沖の株が下がったような発言を乙彦にかましていた。聞いた乙彦は適当に受け流していたものの、不穏な動きがA組内で起こりつつあるのだけは感じていた。鈍感シーラカンスの乙彦が気づくくらいなのだから藤沖もそれなりに何か考えているのではと甘く見たのがどうやら間違いだったらしい。晴天の霹靂といった感じに見える。

「俺たちもあの合唱コンクールさえなければそれなりにまあいっかと思えなくもなかったんですがね。やはりあれでしょ、ほらあの件がね」

「はっきり言え」

いらただしげに藤沖が促す。麻生先生も他の男子たちも江波のいきなり反旗に少し戸惑っているのが伝わってくる。もちろん乙彦も同様ではあるのだが、「まさか」よりも「なぜ今この場で」と言いたいところがある。

「合唱コンクールとはっきり言わせてもらいましょうか」

即座に言い返した江波。

「ちょうど全員揃ってることだし言わせてもらおうとだが、あの合唱コンクールにおいて藤沖はいったい何か仕事をしたのかとまず問いたい。どう思う？」

「どう思う」はクラスメート全員に向かってのもの。みな答えに詰まっている。藤沖がおもむろに返答した。

「俺が評議として力不足なのであればそれはあやまる。だがその分を後期で取り返したいと」

江波は遮った。

「後期、な。もちろんそれもありだ。だがな藤沖、お前最初言ってなかったか？ 今期終わったら応援団に専念するから評議からは降りるってな」

——あれだけおおぴらに言っていたらばれるだろうな。

乙彦には前から話をしていたことだったが多分他の奴にもそれなりの噂が流れていたのかもしれない。そのあたりは乙彦の範疇ではないのだが。

「確かにそう宣言したこともある」

ここで女子たちがひそかに騒ぎ出した。古川が「まあまあそんな驚かないでよ。藤沖の応援団命っぱりあんたたちも知ってるよねえ」と声をかけてなだめている。

「俺たちもそれならまあしょうがないだろうと大目に見てたんだ。後期からやる仕事があるんだったら当然降りるだろうし、無理に文句つけなくてもいいとは思ってたんだがな」

「江波、何が言いたい」

「前言撤回の理由を知りたいってことだよ」

おそろしや無礼講。時間制限なく腹もくちく、あとは寝るだけのこの空間においてなぜ江波が空気をかき回すようなことを言い出したのかがよくわからない。確かに藤沖は夏休み前の段階で後期の評議委員から降りるつもりでいたのだろうしその辺の事情もわからなくはない。しかしそれは、大前提として、

「お前らには正式に話していなかったのがまずかったのだろうが、確かに俺は後期応援団に専念する心積もりできた。いきなり手のひらひっくり返すようなことはしたくないから一部の奴には話しておいたし麻生先生にも伝えておいた。だが事情が変わった」

「その事情とやらは」

「予定していた後釜がいなくなった」

その一言で視線はあっという間に乙彦へと集中する羽目となった。冗談じゃない。なぜいきなりこんな展開にひきずりまわされなくてはならないのだろう。

「関崎くんが？」

「そうか、でもわかる」

「本当は関崎くんをってところよね」

なぜそうあっさりと認識してしまうのだろう。たまったもんじゃない。

乙彦はそっぽを向こうとしたがタイミング悪く立村と顔が合ってしまった。なぜか奴は語りまくっている江波の隣りにちんまり座っている。他の吹奏楽部ふたりとくっついている。

「そっか。まあ順当だ。俺も噂でそんな話聞いていたから、まあそれで丸く収まるだろうとは思っていたんだ。まさかなあ関崎、お前がさあ、生徒会にさあ」

「江波悪いんだが俺はまだ、当選が決まったわけじゃない」

しつこいようだが釘を刺しておいた。江波は吹き出した。

「そう堅いこと言いなさんな。そうだよな。もう俺たちもてっきり次の評議は関崎で絶対確定だと思ってたよ。大本命がな。飛ぶんだもんな」

「俺もお前たちに前もって言えばよかったのか」

確認してみた。まさか青大附属の常識だと生徒会立候補もクラス全員に宣言してからでないともまずいのか。まさかそんなことはないだろう。

「いやそんなことねえよ。お前が宣言しなくたって次の日にぺろんとばれてたどろ」

「あ、そうだ」

一同笑った。初めて和やかな雰囲気になった。

「関崎のことはどうでもいいとして、藤沖、お前が最初関崎に評議を譲るつもりでいたのであれば俺たちはなんも文句言わずに受け入れるつもりだった。前期が名前だけの、それこそ元生徒会長の誇りも忘れるような態度でただ威張りたい時だけ威張って、ほとんどろくすっぽクラスのこととも省みない奴に、なんでまた推す必要あるんだ？」

藤沖の顔が紅潮している。ここまで面と向かって罵倒されたのはあまりないに違いない。しかも過去の生徒会長時代まで引っ張り出されているわけだ。江波に文句言いたくてならないのはわかる。ただ先生が側に居る以上一発張ったおすなんてこともまずはでいないというわけだ。

「質問なんだが、いいか江波」

「ずいぶん食い下がるなあ関崎」

「お前が藤沖に不満を持つのはそれなりに理由があるんだろうとは思う。だが、代わりに俺がいなくて話の持てきよげない」

一方的な藤沖罵倒大会になるのはできれば避けたい。どうせ江波だってここでの討論が終わればあの大部屋でそれこそ藤沖と一緒に寝転がるわけだ。遺恨を残さないですむとは思えないがせめてなんとかしないとまずい。

「お前が立候補する気あるのか？」

「いや、ねえよ。俺は吹奏楽命なんで」

「代案がないと、たたきようがないんだが。俺を推してもらえるのはありがたいんだが、明日の段階で無事信任されていたとしたら、さすがに評議との二足の草鞋は辛い」

「そんな無謀なこと言ってねえだろ」

あきれ果てたように江波は言い放った。

「うちのクラスは元評議委員長のお膝元。適任だろ」

——おい、まさか！

藤沖が片岡とふたり顔を見合わせて息を呑んだ。

いきなり指名された哀れな立村はよりによって江波の足元で半ば放心状態のまま下から見上げていた。その姿を見つめながら女子たちの「いやそれはありえないよね」なる残酷なささやき声が沸いて出る。古川もなぜか止めようとしなかった。

後ろで藤沖が乙彦の肩に手を置いた。振り向くと、

「いい、言いたいだけ言わせろ」

顔こそ憤りで真っ赤だが、懸命に冷静さを保とうとしている様子が伺えた。一緒に片岡も困り果てた顔で江波と乙彦を交互に見ている。立村は相変わらず状況を把握できていないようで犬みたいに見上げているのみ。

してやったりといった表情を浮かべ、江波は続けた。

「そう驚かんでもいいと思うけどなあ。あの合唱コンクールからまだ一ヶ月くらいしか経ってないのにそんな記憶力がやばくてどうすんのって感じだけど」

「江波、いいよそんな」

か弱い声で江波に呼びかける立村。ようやく自分の置かれている立場に気がついたらしい。

「まあ、合唱コンクールではいろいろドラマがあったが、それと今回江波が立村をあえて推そうとするその根拠はなんなんだ？」

麻生先生は対して驚いてもいない顔で江波を促した。もしや前もってこのクーデターについては予測していたのかもしれない。乙彦程度の「不穏な予感」かもしれないがいつか来ると思っていた可能性はおおいにある。

「先生がたはあの現場居なかったからぴんとこないかもしれませんがね」

ずいぶん何様の口調だが、クラスの連中は男子中心に反発する気配もない。女子の動きについては顔つきこそ不満げな者もいるものの、否定はしていない様子だ。麻生先生だけではない、乙彦もリアルタイムの状況を知らぬままできたので江波の言葉に反論できない。

「合唱コンクールで俺たちが無事、最後に自由曲を歌い上げられたのは立村がああ短期間でクラスの意思をまとめられたからでしょう。いやあんときはすごかったですよ。お前らも覚えてるだろ？ 野々村先生にトリで歌わせてもらえるとこの話が出た時、誰も動こうとしなかっただろ？ 俺もまあ傍観者の一人だったがな」

——やはり盛り上がり欠けていたんだろう。

当の立村からも詳細の事情は聞いていたのでそれなりに見当はついている。クラスの連中も最初は戸惑ったものの立村の真剣な態度に心動かされたというのは間違っていない。またとばかりで藤沖が、陰でそれなりの努力をしていたにもかかわらず誤解されてしまったのも痛々しい。本当はあいつも乙彦たちが戻ってくるのを待ってクラス全員揃ったところで歌いたかったはずなのだ。どちらも間違っていない。

「まあ、俺としたらピアノのミュージックたる宇津木野さまが倒れた以上はあきらめるしかねえなどは思ってたわけなんだ。けど、立村ひとりがすぐに俺たち含むその場にいた連中に声をかけてまとめはじめたんだ」

ピアノミュージックときたか。江波の奴、優れた音楽にはひれ伏す気まんまんらしい。立村がまた、「いいよもうやめようよ」と哀願しているのが丸聞こえだが無視されている。なおのこと哀れだ。

「じゃあ聞くが、立村、なんでお前そんないきなりやる気出したんだ？」

麻生先生が江波を黙らせるためか割って入った。

「合唱コンクールではいきなりピアノ伴奏したいとか言い出して俺もかなり驚いたが、そこまで音楽にこだわりでもあったのか」

「そういうわけではありません、あの、たまたまです」

ぶっきらぼうに、それでも礼儀は保ったまま立村は答えた。

「あれだけの騒ぎでずっとピアノから離れなかったところみると相当なものだと思ったが。だが俺と関崎と古川の三人が宇津木野の運ばれた病院に詰めた時、戻ってくるまで待とうとは思わなかったのか」

立村は口ごもった。抱えていた膝を少し緩めるようにし正座した。

「待ったほうがいいとは、考えていました」

じっときつい目つきで麻生先生を見据えた。けんかを売っているようにも見えた。

「結果としてはクラスの団結につながったかもしれないが、なんというかもう少し穏やかにことを進められなかったのか」

「申し訳ありません」

言い訳などせずに短く謝った。

「こういったらなんだが、藤沖も決して悪意があって歌うのをやめろと言ったわけじゃない。クラスが四人も抜けている中で、残されたものだけで気持ちよく歌って終わりというのはどうだと思った藤沖の想いも汲んでやれないか。江波」

立村相手かと思いきや麻生先生は江波に声をかけたかったようだ。また無視されたかっこうになる立村は改めて膝を抱え直した。

「先生、でも、せっかくもらったチャンスをああだこうだ長引かせるよりはさっさと指揮を執ってまとめる方がいいに決まってるだろ。本来はあの場を仕切るのは藤沖だったはずだしその判断なら俺は素直に従った。たとえ歌わない、としてもだよ」

一同、静まり返った。

「俺が言いたいのは合唱コンクールに限らず本来まとめるべき立場にいる藤沖がろくすっぽ仕事もしねえですぐ中学校舎に駆け込んでしまったり、目立つ場所では偉そうなことを言いながら結局仕事は全部古川さんに押し付けているっていうその姿がふさわしくねえ、というそれだけなんだ。それに今回に限ったことじゃねえ」

——おい、江波これは言いすぎじゃないのか。

乙彦が腰を浮かし、江波が勢いづいたまましゃべり続けようとした時だった。

「江波、ひとつ聞いてもらえるか」

とうとう立村がずっと立ち上がった。口調は穏やかなままに、

「俺を認めてくれたのはありがたいし、うれしいんだけどさ」

乙彦をちらと見やり、

「実は、次の委員なんだけど、規律委員に立候補しようかなと想っていたところだったんだ。誰にも話してなかったけど。だから、評議には上がれないんだ。ごめん」

申し訳なさそうに頭を下げ、すぐに座りなおした。

改めてわあと集会室内にざわめきが広がった。江波の爆弾発言以上に激しいものだったので、麻生先生がしかめっ面をしているのが異様に目立つ。藤沖と片岡は言葉に困っているようで何も言わない。

「ええ？　なんでだよ立村、お前、絶対次評議やるべきだぞ」

江波だけがさっきまでの勢いはどこへやら、すっかりおろおろしている。はしごを外された格好というのはまさにそれで、半ば泣きそうにも見える。立村も首をかすかに振りながらゆっくりと、やさしく続ける。

「いや、前から他のクラスの奴からも規律委員は面白いから来ればいいんじゃないかって夏休み前から誘われてたんだ」

「誰だよそれ。まさかC組の」

「そう、元規律委員長からいろいろと規律委員会の面白い話聞かせてもらっていて、そろそろいいかなとか思ってたんだ。ただ、関崎が次もやるだろうと思っていたからあきらめていたところもあったけど、生徒会に行くことになったんだったら」

「立村悪い、訂正だ」

どうしても口を挟みたい。乙彦はおぞそかに告げた。

「まだ決まっていないことを決定したように言うのはよくない」

すぐに謝られた。

「ごめん。けど、もし誰も関崎の次に規律委員やる人がいなかったら立候補してもいいかなとは思ってたんだ。そのつもりでいた。だから、できればそちらで協力したいんだけど、いいかな」

立村が微笑みを浮かべながらずっと江波をなだめているのを眺めやりつつ、乙彦もあえて声を挙げた。

「何度も言うが俺が生徒会役員になるかどうかはまだ決まってないが、前から俺は立村がなんらかの形で委員に入ることは大賛成だ。もし俺が無事当選して規律委員が空きポストになったらぜひ入ってもらいたいという気持ちはある」

「関崎にも、それ前から言われてたよな。ありがとう」

今までその件を持ち出した時には露骨にいやな顔をされていたのだが、いきなりここで礼を言われて戸惑う。

「だから、せっかく推薦してもらって申し訳ないんだけど、俺はやっぱりきちんとここで規律委員に立候補しておきたかったんだけど。どうでしょうか」

次に立村は視線を藤沖に向け、すぐに逸らした。一言も立村は藤沖に触れず、ただひたすら規律委員になりたいという理由を語っているのみ。このまま評議は藤沖でいいんじゃないか、そういうムードを作りたいのがありありと伝わってくる。乙彦は立ち上がり、改めて江波に告げた。

「江波、お前が立村を高く買っているのはすごくよくわかった。あの合唱コンクールでは立村のやり方が正しかったと個人的に思っている。だが、藤沖だって麻生先生が言ったようになんとか

ベストを尽くそうとしてたんだ。ふたりとも委員で活躍してほしいとなると、俺としてはやはり藤沖が評議で立村が規律のほうがベストのような気がする」

後ろでひとり、ぱちぱち拍手する奴がいる。振り返ると片岡が頷きながら両手を叩いている。それにつられて麻生先生も片岡の頭をなでつつ、

「まあそういうことだ。江波、互いの意思がまとまった以上とりあえず委員選びに戻ろうか。あとで決を採るからその時にもっと言いたいこと言えればいいぞ」

完全に気力を失ったのか江波は腰を抜かすような感じで座り、膝を抱えて頭を挟んだ。立村がまた何か話しかけ、他の奴もいろいろと慰めているようだった。

「さあさ、女子だってまだまだ委員決めしなくちゃね！」

それまでずっと黙っていた古川が、元気な声でさっそく麻生先生から仕切りの権限を奪い立ち上がった。

「先生、とりあえずある程度まとまったらみんなで一回乾杯しようよ。それであとはみんな言いたい放題させようよ。こんなかたくるしい格好でしゃべってたら思わずかあっとなっちゃって思ってもみないこと叫んじゃうかもよ」

——まさに、その通りだ。

一瞬の小火、江波の発言をなんとか無事食い止められたのがよかったのか悪かったのか乙彦には判断できかねた。どちらにせよ今晚はゆっくり藤沖と人生よびBCLについて語ることになるだろう。できれば立村も捕まえて真意を問いただしたいところだが、就寝時間二十二時から二十三時までの間にチャンスが得られるだろうか。

てっきり真夜中まで藤沖の一方的語りを聞かされるか、もしくは対立はなはだしい中寝苦しい夜を迎えるかのどちらかと思っていた。しかし女子の委員選出が「全員前期と違う面子」で決まった辺りからにぎやかに宴が始まった。みな仲良し同士で固まるのが常だが、何をとち狂ったのか古川の、

「そうだ、みんなで合唱しよう！ どうせセミナーハウスって音響洩れないでしょ。大学のグリークラブとかも真夜中まで練習するために借りるでしょ。じゃあ私たちも使ったっていいよね」

一方的な論理でもっていつのまにか合唱コンクールの焼き直しとなったり、当然伴奏に立村の出番はなく足田の一人舞台だったり、大部屋に就寝のため戻ればさっきまで険悪ムードだった江波も含めてボードゲームをほとんど全員で始めたりもしている。藤沖の様子を見る限り特に根に持ったところもなく楽しげに「モノポリ」に興じている。

もっとも全員ではない。気がつけば立村は早い段階で離脱して寝息すらほとんど立てず横たわっていたし、乙彦も日付が変わる前には床についていた。ちょっとだけ居眠りのつもりが目覚めたら太陽が昇っていた、のはいつものパターンだ。

朝四時。少し眠たいがしかたない。無理やり掛け布団を蹴って身を起こす。

窓辺にセットしていたラジオがそのまま放置されている。誰もいじった形跡がない。伸ばしっぱなしのアンテナをしまいこみ、乙彦はかばんに納めた。朝のチューニングもたまたま自宅ではするのだが、あまりいい電波が入ってこない。

——外で持ち出してやってみるか。

どうせ五時十五分前にはここを出ないとなるまい。学校から自転車で数分なのだがそれでも遅刻はしたくない。一応麻生先生には伝えてあり、食事は夕食であまった分で特別に握り飯を作ってもらうことになっていた。平らげればいい。

みなが寝静まっている中、足を忍ばせて食堂に向かい、冷蔵庫からおにぎりを四個取り出しレンジで温める。付け合せにはハンバーグの残りを合えたあんかけと申し訳程度のたくあんのセット。一気にかきこんだ。ありあわせとは思えないほどうまい。

麻生先生にも「別に起こさないでいいからな。また朝のホームルームで会おう」とか言われてしまったので、そのままそっと出ればいだろう。歯磨きも済ませて大部屋に戻った。

ひとり、目を覚ましている奴がいた。

「立村、お前も起きてたのか」

すでに身支度も完全に済んでいる。制服もぴんとしたものに替えている。さっき乙彦が出て行った時はまだ立村もしっかり目を閉じていたから、かなり急いで準備したのだろうと伺えた。

「おはよう、関崎もこれから行くんだらう？」

かすかに微笑みを浮かべながら立村は頷いた。

「俺もいつもこのくらいに起きるから」

「いったい他の奴らどのくらいまで起きてたんだ？」

「たぶん最後のひとりが寝てから一時間も経ってないと思うな」

「お前気づいたか」

「全然。死んだように寝てた」

声を潜めつつもさらさら語る立村。機嫌はすこぶるよさそうだ。

「本当は俺もゲームに参加したかったんだが、さすがにバイトは最優先にしないとまずい」

「そうだよな。ならこれからもう行くんだね」

「ああ」

せっかく立村と忌憚なく話が出来そうなムードだが、いかんせん乙彦にとって毎月の学費代のため稼がねばならない。ついでにラジオもいじるつもりだがそこまでは言わずに出ようとする立村も立ち上がった。

「途中まで送ろうか」

「立村、どうした？」

荷物はそのまま、立村はそのまま乙彦の後ろにつき従い、玄関へと向かった。もちろん麻生先生に断るつもりはさらさらないらしい。新歓合宿時のいざこざを思い出し、

「先生に言わなくてもいいのか」

促すが立村は首を強く振った。

「そんなことする必要ない。どうせ六時前には戻って朝ごはん食べるんだから」

そのまま靴を履き替えて外に出た。

——どうしたんだ、立村から話をしたがるとは。

乙彦にとってはうれしいことだがこれまで立村がかたくなに距離を置いていたことを考えると懐疑的にならざるを得ないところもある。しかも昨日の今日だ。

ふたり肩を並べて歩いていく。まだ時間には余裕もある。乙彦はいったん立ち止まった。先んじようとした立村がげげんそうに振り返った。

「関崎、どうした？」

「せっかく朝が早いんだから、やることだけやろうと思っていたんだ」

ボストンバックの中からもう一度ラジオを取り出す。大学構内には大学生らしき人が数人歩いているのが見受けられるが目立つほどではない。乙彦は通り道脇の花壇に近づき、ブロックの上にラジオを固定しアンテナを伸ばした。

「ラジオ、か」

「見ての通りだ」

「外で聴くのか」

「そうだ、聴くんだ」

なんだか奇妙なやり取りとも思うのだが気にしない。きれいな電波が飛び交う中でもしかしたら珍しい放送局のコールサインをつかめるかもしれない。立村が隣りでいぶかしげに見つめてい

るのを無視し、乙彦はゆっくりチューニングに専念した。日本のAM電波ではラジオ講座が最優先を占めているけれども注意深くダイヤルを回していけばある時ふと、聴きなれぬ国の言葉が耳に入る。そこでひたすらコールサインの読み上げられるのを待つ。時間も確認する。レポートを書いて送付しベリカードをもらう。

残念ながら早朝にも関わらずいつも聴いている東欧の放送局とアジアの番組しか聞き取れなかった。すでにベリカードもらっているので無理して追いかける必要もない。ラジオのアンテナを引っ込めてしまい直すと立村と一緒にしゃがみこみ、

「エアチェックのためとかそういうんじゃないのか」

今ひとつ飲み込めていない顔で尋ねた。

「ああ、お前には話したことなかったかもしれないが、最近BCLというのにはまっているんだ。海外のラジオ局を聞き取って受信レポートを送ってベリカードというものを集める。実に単純なんだが、奥が深い」

「海外のラジオ局か」

「そうだ。青瀧近辺だとアジアや東欧が中心だが場所によってはヨーロッパの電波も入るケースがあるらしい。本当は短波ラジオだともっと幅広いエリアの電波が取り込めるらしいんだが、いかんせん俺は無駄遣いが許されない身の上だ。普通のAMFMラジオで我慢している」

「海外の放送局って、言葉わかるのか？」

「わからないが、俺の最終目的は番組を楽しむのではなくコールサインを聞き取ることだから関係ない。雰囲気だけでも結構楽しめる」

せっかくならもっとBCLの奥深さについて語ってやりたいところだが立村が全く着いていけていないのを見ていてありありと分かるのでやめることにした。次回ゆっくり時間が取れるときにでもじっくり語ろうと思う。

「そうか、そういうのにはまってるんだな」

しばらく考え込んでいた立村だがすぐに気を取り直し、

「まだ時間あるだろ。少し話そうか」

花壇まわりの、腰掛けられる高さにある煉瓦を指差した。目の前には大学図書館だがもちろんまだ締まっている。冷え冷えとしてうす赤い朝焼けのもと、乙彦は了解し立村の隣りにどっかり腰を下ろした。

立村は制服のままで来たせいがかかなり寒そうに見えた。手に息を吹きかけて時折周囲を見渡している。この時間にも関わらず人の出入りはそれなりにある。

「少し早いけど、当選おめでとう」

指をしばらく温めるようなしぐさをし、立村ははにかむような笑顔で乙彦に伝えた。

「いや、最終決定は朝だろう」

「そうだけど、一応昨日情報はもらったから」

——そうか、立村の仲間内があれだけ立候補していたもんな。

羽飛、清坂、難波、更科。確かに何も知らないなんてことはないだろう。

「昨日用があって学校に残っていたんだけど、ちょうど決定が出て早い段階で連絡が来た人もいたみたいなんだ。番狂わせもなくて無事全員信任投票だって言ってたよ」

「そうか。すまない」

頭を下げた。昨夜の江波が巻き起こした嵐のようなものをさりげなく沈静化させた立村に礼を伝えたいのだがここで持ち出すのも何か場違いと思う。

「関崎もいきなり生徒会ということで戸惑うことも多いと思うけど」

立村はそのまま穏やかに続けた。

「藤沖も青大附中の生徒会経験者だしある程度クラス内で情報はもらえると思うし、清坂氏も羽飛も関崎を敵視することないしさ。ただ」

言葉をとぎらせた。

「難波と更科か」

「わかっているんだな」

別に乙彦が言わなくてもほとんどの奴は理解しているような気がする。

「あいつら誤解しているだけなんだよ。タイミングや自由研究のいざこざとかいろいろあって妙な文句つけていることもあるけど、実際関崎が話をしたらきつとうまく行くような気がする」

「俺もできればそうしたいとこなんだが」

立村に伝えると、頷いた。その上でまた手を激しくこすった。

「ただ、触れないほうがいいという部分はあるから、それだけは注意したほうがいい」

「なんだそれは」

「難波の場合、中学時代に霧島のお姉さんにあたる人と関係したトラブルがいろいろあって、附属上がりの連中はあえてそれと関係する話をしないようにしているんだ」

「霧島というと、中学にいるあの霧島か」

確認した。一応霧島の姉という女子には青湊工業高校学校祭で顔を合わせているとは言わないでおく。

「そうだ。中学上がりの人たちにとってはむしろ常識過ぎて意識にも昇らない内容なんだけど、もし誰が好き彼が好きといった話題になるようならできるだけ難波を交えないところでしたほうがいいと思う」

「そんなにややこしい話なのか？」

藤沖が懸想していた女子とは聞いていたが、まさか難波まで関係しているのか。元評議委員に所属していたというから顔見知りではあるのだろうがいやはややおしいったらありゃしない。

「ややこしくはないけれど、出来る限りそういった話題は生徒会室で出さないほうが無難だよな」

「わかった、心得ておく」

恋愛沙汰については乙彦も積極的に触れたい話題では毛頭ないのでありがたく受け取っておく。

「同じことで、これも附属生にとっては常識なんだけど」

人がほとんど居ないのにきょろきょろしながら立村は続けた。

「更科についてもいろいろな噂があって、特に気をつけてほしいのは年上の彼女の話についてなんだけどさ」

「年上の？　なんでそんな話題が出てくるんだ」

正直どうでもいい話題だと思う。乙彦からすれば、それぞれの惚れた晴れたの話なんてプライベートすぎて触れる気にもなれない。気心しれた、それこそ外部三人組で集っている時であればおふざけ半分でからかったりもするがその程度。それこそ生徒会室でそういう類の話題が出てきたら無視すればいいことではないのか。

「本人も開き直っているからいいんだけど更科のそういう話題が出てきたら一切触れないでほしいんだ。詳しいことは言えないけれど、一步間違うとトラブルの元になるんじゃないかって話が多いからさ」

「わかった。一番いいのは生徒会での恋愛話を厳禁にすることじゃないかという気がしてきた」

「そうだね、それが一番いい」

どちらにしても触れてはいけない部分があることを確認できたのはありがたい。乙彦も別に難波や更科と好き好んで対立したいわけではない。もちろん方針や目的で荒れることがないとは思えないがそれでも人間性を罵倒するとかそういうことからはできれば離れたい。

「あと、泉州さんっているだろ」

「ああ、あのやたらと背の高い女子だろう」

接触があるのかないのかよくわからない女子についても立村は触れた。

「彼女はA組だから片岡ともつながりがあるけれど」

いきなり片岡の話を持ち出したことに少し驚く。合唱コンクール後、若干立村とは雪解けムードが流れているけれども親しさはない。

「泉州さんは片岡にとって数少ない味方の一人だと聞いている。俺も直接話をしたことないからよくわからないけれど、中学時代片岡がいろいろあって無視されていた時に陰日なたなくかばった女子のひとりらしいんだ」

「そうなのか。あいつにも女友だちがいたのか」

戸惑うような表情を立村は見せたが、続けて、

「これも附属生にとっては常識だし悪いことじゃないから伝えておくけど、泉州さんは片岡の親しい女子の友だちと、また親しいんだ。西月さんの話、聞いたことあるか？」

あるかもしれないがわからない。思えば片岡とは恋愛沙汰について語り合ったことが全くない。

「そうか。このあたり話がいろいろ混み入ってて俺の説明で正確に伝える自信が正直ない。ただ、関崎は片岡と親しいようだからきっと泉州さんとも仲良くできると思うよ。うちのクラスでは男子たちの中にちゃんと溶け込んでいるようだけど、やはり女子には無視されているみたいだし少し片岡のことについては気になってたんだけど」

「相当のことをやらかしたらしいからな」

立村はあえてそれには触れようとしなかった。

「でも、その問題を解決した上で泉州さんは片岡と友だちでいるわけなんだし、うまくしたら片岡ももっと女子たちから見直されるきっかけをもてるかもしれない。そういうこともあるってことでできれば様子見を頼みたいんだ」

「わかった。覚えておく」

恋愛沙汰云々よりももっともありがたい情報だった。片岡をなんとしてもクラスになじませたいというのは乙彦のある意味念願でもある。泉州よし恵、覚えておこう。生徒会役員同士ともなればいやおうなしに語り合うことになるのだから、当然片岡も混じることになるだろう。

そこまで話したところでタイムリミット。だいぶ普通の青空がさらけ出されてきた。

「貴重な情報、感謝する。助かる」

「いやそういうわけでもないけど」

「あと、それとだ」

立村に、忘れないうちに伝えておきたかった。

「規律委員を引き受けてくれてありがとう」

しっかり頭を下げた。最敬礼だ。立村がびっくりしたように首を振った。

「いや、そんなにされなくたってさ。俺も南雲に誘われてたりしたから。自分の意思だから」

「委員に上がってもらえれば、お前とももう少しきちんと話がしやすくなる。それが俺が一番うれしい。それじゃ、また学校でな」

照れ隠しではなく、単純にバイトの開始時刻が迫っているだけ。乙彦はすぐ背をむけ、片手を上げて自転車置き場へと駆け出した。

生徒会役員改選投票結果は立村の予告した通り全員信任投票で決定していた。朝の生徒玄関前で張り出されていた立て看板にて確認をし、そのまま教室へと向かった。すでに合宿が終わった直後のクラスメートから拍手喝さいで迎えられ、藤沖からしつこく握手を求められた。

「これで正式決定だな。めでたいぞ」

「ありがとう」

「しかしこれからだな、忙しくなる」

藤沖が自信たっぷりに断言した。

「これからお前は休み時間、放課後ほとんど生徒会室にいずっぱりとなる」

「そうなるだろう」

「そうしたらお前の仲間たちとのんびりだべる暇も全くなくなる」

——そうか、確かに。

いつもなら静内たちと図書室で待ち合わせてしゃべっていたのだがそれも無理になる。名倉なら生徒会室に居座っているだろうからそれほど痛手とも思わないが。

——だから静内もあれだけ立候補しろと言ったのに。

乙彦の本音を知る由もなく、次から次へとお祝いメッセージやらどつきやらが雨あられのごとく降り注ぎ、最後は麻生先生の、

「いやー、めでたい！ 関崎、おめでとう。とうとうお前も青大附高の主だな」

よくわからないながらも裏表のない励ましをいただいた。

立村は発言こそしなかったがやさしくこちらを見ていた。

知らなかったが、一時間目は生徒会引継ぎ式ということで全校生徒が体育館に集合し、その上で交代儀式を行うことになっていた。まだ他の生徒会メンバーとは今朝の段階で顔を合わせていなかったこともあり乙彦は急いで体育館へと走った。他の生徒たちが整列して揃う前に到着していないといけない。

向かうとすでに一部の先生たちおよび放送委員、そして生徒会役員たちがずらりと並んで乙彦を迎えた。

「一A、そういえばクラス合宿だったんだよな」

元生徒会長が笑いながら言う。

「関崎のうちに電話したら今日は泊まりだからいませんとか言われちまってさあ」

「すいません」

「信任投票が確定してから俺たち全員で当確の電話を入れてたんだよ。そしたら関崎だけ連絡つかないでな。あとで清坂ちゃんに合宿の話聞いたから、あっそっかと思ったけど」

見ると清坂は他の女子先輩たちと笑顔で語らっている。一方、泉州、阿木のふたりは手持ちぶたさでふらふらしている。全く初めてなのだろう。その二人に話しかけているのが小柄で愛想の

よい更科だ。名倉は乙彦の背後に、ひとりクールなのが難波で壁にもたれている。

「ほらほらあんたたち、きちんと整列しなさいよ。これからあんたたちが学校をひっぱっていくんだからだらだらしてたらまずいよ、ほんと」

「はい」

元気な更科をさておいて、乙彦はちらと難波を見た。いつのまにか現れた羽飛がこれまたにやにやしながら難波の肩を叩いている。当选してもいろいろ複雑な気持ちがあるのだろうと読んだ。

中学の生徒会役員改選とほとんど変わらないやり取りで式は進んだ。取り立てて何かが起こったわけでもない。ただすべて一年の役員ということもあって並んでいる生徒たちの様子に真剣さは全くなかった。時折私語交じりで先生たちに注意されていたりもする。

副会長同士並んで受け取り、一礼した後隣あった羽飛に小声でささやかれた。

「まあ、いろいろあるがよろしくな」

「ああ」

——何がいろいろあるんだろう？

授与された後は新旧生徒会長の挨拶が行われそのまま教室へと戻ることになる。隣でずっとうるさいくらい羽飛がつぶやいていてそちらの方に気が行ってしまった。

「美里、また妙なこと言わないかなあ」

「羽飛……？」

「あいつ、同期の女子受け悪いけど先輩受けいいからなあ」

別にそんなの興味も何もないのだが、延々とつぶやいている。一方で清坂の挨拶は立派だった。にこやかにはつらつと、

「いきなり一年生のくせに生徒会長に立候補してしまい、驚かれた方も多いかもかもしれません。初めまして！ 清坂、美里です！」

ここでいきなりわあっと盛り上がる一角あり。羽飛がそれこそ頼みもしないのに解説する。

「ああ、二年の先輩がただなあ。美里、二年にはめっちゃ人気あるからな」

清坂の挨拶はさっぱりしていて、くどくなかった。あまりだらだらとしゃべるのもなんだと思ったのか適度に切り上げ最後に、

「私が任期満了する時には必ず、学校内のみんなが笑顔で居られる環境を少しでも整えていければなって思っています。ご協力お願いします！」

にっこり笑顔で締めた時、今度は三年男子あたりから、

「きよさかちゃん！」

コールまで起こっている。なんなのだろうあれは。

「まじかよ、三年男子にはファンクラブあるのかよ。俺みたいに」

「は？」

思わず隣の羽飛の顔を見つめると、照れくさそうにに笑った。

「噂には聞いてたが美里の受けがあそこまでいいとは思わねえよなあ」

「それは、わからないが」

「あっそか、お前外部生だもんな」

——それ今になって気づくか。

他の役員抱負についてはここで発言しないということになった。乙彦なりにいろいろと語りたこともなくはないのだが、それはそれでよしとしよう。まだ一年間あるのだから、語る機会はいくつもあるだろう。羽飛と話してみた感じだと特に敵愾心も……まるで難波のごとく……ないだろう。結構これから先、難波とはひと悶着ありそうな気もするので仲介役となってくれそうな羽飛の存在は重要である。

教室に戻る途中で静内に声をかけられた。ちょうど名倉と話をしながら移動している最中だった。

「あんたたち、遅ればせながらおめでと」

「遅いぞ」

軽く手を上げて受け答えすると静内はいつもの優等生面で受けた。

「関崎はともかく名倉がねえ」

「お前が出ないからだぞ」

ぶっきらぼうに答える名倉に静内はきょとんとした。

「なんで私が出ないとなんないのよ」

「いや俺もそう思う。静内が出ればこれから放課後と昼休み、合法的に生徒会を占拠できたはずなんだが」

冗談めかして言うと静内はぞっとしたように首を振った。

「まさか。あのメンバーだってこと知ってそういうわけ？」

「お前、誰が立候補するのか知ってたのか？」

意外だ。ぎりぎりまで、それこそ立候補者にも内緒だったはずなのに。乙彦が問うと静内はあいまいな笑みでごまかした。

「会長だけはね。私は後期も評議でいきますのでそこんところ、よろしく！」

握りこぶしを三人天に突き上げた。評議か、それならそれでよし。

生徒会役員改選が終わると通常はその日のうちにクラス委員改選が行われるのだが、すでに昨日の夜大方決定していたこともあり、ロングホームルームはあっさり終わった。

「昨日の今日だからな。楽だろ」

「先生、手抜きしたかったんでしょー！」

古川がつっこむ。女子委員の中で唯一前期持ち上がりで決定したのがこの人だった。どういたくらみかはわからないが、女子は見事にシャッフルされてしまっている。

「そうだな、確かにそうとも言うがお前らだって夜は盛り上がったんだろ。ずいぶん遅くまでうるさかったぞ。寝不足なんじゃねえか」

「そりゃあ、お年頃の男女のすることですから」

「まったく古川も、もう少しだなあ、お嬢さんらしくするとか」

笑いが起こりつつも決めるべきことは片付いているので雰囲気も軽やかだ。藤沖と江波の件だけがまだ若干わだかまりらしきものもなくもないが表向きは問題なさげに見える。

——それにしても、まさかな。

規律委員に立村が納まったのは理解できるとしても、女子規律に疋田が入ったのが解せない。ピアノ専門だしせめて音楽委員に立候補ならまだわかるのだが、なぜか古川に乗せられたかっこうで押し込まれている。無理やりじゃないのか。強引じゃないのか。

「あんたはどうせ生徒会なんだから口出しするんじゃないの」

終わった後、古川に声をかけられた。

「クラスは無事丸く収まったことだし、合宿も楽しかったし、もう言うことないよ」

「だが、女子は相当入れ替えたな、派手に」

「まあね。昔と違うからさ。委員会イコール部活動じゃないならみないろんな委員を楽しむのも悪くないよ。みんなもだったらやろかってことでね。無理やりじゃないから」

「本当か？」

「当たり前じゃない。あんたさ、私のこと信用していない目つきしているねえ」

意味ありげに見入る古川を追いやるため軽く空気を押しのけた。

「じゃあ悪いけど関崎、美里たちのことよろしくたのむわ」

「何を頼むんだ」

尋ね返すと古川は首を振った。

「たぶん相当、今期の生徒会、荒れ模様が予想されるからねえ」

とんだ天気予報の予告を無視しつつ乙彦はそのまま生徒会室に入った。すでに元生徒会役員たちが揃っている。清坂と羽飛のふたりが先着してなにやら楽しげにみなとだべっている。

「関崎くんが三番手かあ」

耳元で手を振る清坂と、

「おー、待ってたぞ。早くこっち来いよ」

機嫌よく声をかける羽飛。乙彦も手を上げて返事を返し、先輩たちには一度止まって丁寧に礼をした。

「まあまあ堅苦しいことはなしなし。座って全員揃うのを待とうや」

元生徒会長が清坂に、

「じゃ、清坂ちゃん、これからはお誕生席ここだぞ」

愛想良く自分の座っていた最奥の席を勧めた。清坂もにこやかにお礼を言って腰掛けた。

「レディーファーストですねえ先輩」

「そりゃそうだ。おい、そこの騎士たる君はこっちだ」

ちゃんと清坂の最脇に羽飛を置いた。まんざらでもなさそうだ。乙彦はどこに配置されるか様子を伺っていると、元書記の先輩から、

「関崎くんはここ。羽飛くんと向かい合ってここね」

ちょうど清坂の両隣をふたりで占める格好となる。三つ巴とはこのことだ。なんだかあまり気持ちのよい位置ではないがしかたない。

「関崎くん、どうだった、クラス合宿行ったんでしょ？」

「よく知ってるな」

先輩たちが新役員たちをそれぞれ席に案内している間その三つ巴でしばらく語っていた。クラス合宿といっても一泊とも言えないわびしいものだと言いたいところだが、

「だって知ってるに決まってるよ。立村くん言ってたもん」

さらっと清坂は答え、声を潜めた。もちろん羽飛も一緒に耳を傾けている。

「ずいぶん委員のメンバーさんたちが入れ替わったって言ってたけど」

「男子はそうでもない。一応俺が規律だったから穴は開いたが」

「そうだよね、立村くんが規律委員ってのは聞いたよ。ね、貴史？」

羽飛に清坂が促すと大きく頷いている。

「あいつらしいっちゃああいつらしいが、まあいいだろ。納まるころには納まったってことだな。けどな美里、これからうっかり遅刻できねえな。違反カード切られたくねえよあいつになんか」

「そうだよね。朝の週番もするんだよね。私はもう解放されてせいせいしてるけど。関崎くんは？」

「別に、朝はもともと早いから嫌も何もない」

やはり規律委員はあまり面白いものではなかったのだろう。適当に聞き流す。

「うちのクラスは委員もほとんど代わり映えないし、私が生徒会に行ったからといって雰囲気変わるってわけでもないし」

ということは、一年B組の評議も順当に静内で決定したのだろう。めでたい。

「他のクラスはどうなのかなあ、そうだ貴史、あんたのクラスどうなのよ。C組、評議委員と音楽委員が抜けじゃったらどうするの」

「うるせえなあ、評議はノープロブレム、天羽カムバック」

「天羽くんかあ、順当だよね。規律は南雲くん決定でいいとして、音楽委員と美化は？ みな生徒会に流れちゃったじゃない」

「そっちも特に問題なく埋まったぞ」

いつのまにか会話は清坂と羽飛ののどかなおしゃべりに切り替わり、乙彦は蚊帳の外と相成った。ぽんぽん飛び交う会話、それは幼馴染ゆえの年季が入ったからと言うけれどもその辺の温度差が乙彦には全く分からない。すでに席についている名倉に手を上げて挨拶を交わし、斜め前にてにらんでいる難波にも一応頭を下げた。なんとなく返事するようなそぶりは見せたから無視はされていないのだろう。更科は相変わらずけらけら愛らしい。泉州と阿木の-Dふたりは仲良くおしゃべりに興じている。乙彦の顔を見てにやにやする泉州の、なんとも言えない雰囲気の流れにどう対応すればいいか迷った。

——泉州は片岡の、数少ない友だちなんだよなあ。

「みなさんお待たせしました。では改めて、生徒会新役員のみなさん、就任おめでとうございます。いきなり自転車の補助車を外すようなことはしません、俺たちやさしい先輩なものですのでしばらくは面倒見させてもらいますよ。うざったいだろうけどどうぞよろしく」

元生徒会長の発言にみなが拍手を送る。

「とりあえずの予定ですが、もうそろそろ期末試験も近いことですし留年しちまったら話にもならんわけで、冬休みに入るまではおおよそ俺たち元生徒会役員たちが徹底して君たちをしごきます。ですが、ご存知の通りみな冬休みに入ったらもうそれどころじゃなくなっちゃいますので一切生徒会室には近づかない予定でいますんで。冬休み中、予定としては年明けあたりに先生たちが生徒会の合宿をどこかで行うはずなんでそのあたりをめぐりにひとり立ちを目指してくださいな」

「質問です」

乙彦は手を挙げた。

「はい、関崎副会長」

「合宿はどこでやるんですか」

「たぶんセミナーハウスか『青潟青年の家』あたりになるだろうなあ。安心しろ苦学生。余計な負担はさせないぞ」

ひそかに笑い声が聞こえた。清坂がたしなめるように言葉を放つ。

「関崎くん、すごいんですよ。月謝、ちゃんとアルバイトして稼いでるんですから！ それうちの学校普通だったらアルバイト絶対許さないのに特例としてちゃんと話をつけて、古本屋さんで朝働いてるんですもん。それでいて成績もいいんだからすごいなあって」

「噂には聞いていたが、先生と円満に話し合いの末アルバイトか。こりゃすごい」

今度は先輩たちも含む大爆笑が起こった。からかっているのか馬鹿にされているのかはわからないが少なくとも清坂の発言に悪意はない。だからありがたく受け取るに留めておいた。

「

それからしばらく、十二月に入るまではさほど目立った動きもなかった。清坂会長率いるフレッシュ生徒会とはいえ、まだまだ旧生徒会メンバーの力が強い。今年一杯は組閣メンバーと仲良くコミュニケーションをとってゆき、とりあえずは現在の三年生たちを見送るまで無難に過ごしてほしいとのことだった。

乙彦も言われるがままに旧生徒会メンバー先輩たちに引きずられるようにいろいろな事情を教えてもらったり、現在の学校事情についていろいろ耳に入れたりしていた。特に外部生ということもあって知らないことが多すぎ正直着いていけないと感じる時もある。また、現生徒会の連中とも昼休みや放課後、強制的に顔を合わせてはいるけれどもまだ和やかな会話を交わすには至っていない。生徒会イコール仲良しクラブというのはどうかとも思うが、全く会話のない相手もいるのは少しまずいと思う。

——特に、名倉は。

決してないがしろにされているわけではない。それどころか貴重な会計担当ともあって先輩たちが熱心に教えているようだ。ただ、その学び舎は生徒会室ではなく別室らしい。たまにちらと様子尋ねたところ、相当絞られているらしかった。とりあえずは、

「簿記三級を取るのがまず仕事だ」

疲れ果てていることだけはなんとなく伝わってきた。ご苦労さま。

約二週間ほど経った、期末試験一週間前のある日、ある意味習慣化してきた生徒会室でのひと時、先輩たちも含めていろいろだべっていた時だった。

「期末試験が片付いたら休みの日使って一回生徒会の団結会やらない？」

清坂がいきなりその場にいた生徒会役員たちに呼びかけた。全員ではなくむしろ先輩たちの方が圧倒的に多い。名倉もまだ来ていなかった。いや、D組生徒会役員三人が、と言ったほうが正しい。

「ね、先輩、どう思います？」

「俺たちも参加していいのか」

げげんそうに元生徒会長の先輩が尋ねるが清坂は首を振った。

「先輩ごめんなさい。すごく私感謝してます。けど今は、生徒会役員になったメンバーだけで一回とことん話し合う場が必要かなって気がするんです」

「なんだよ清坂ちゃん、シカトかよ」

「そんなこと言ってません。ただ私、実言うと生徒会に入ってから他の同期たちと全然話し、してないんです。それって変じゃあないですか？」

——確かに。

一応清坂も気にしていたのだろう。乙彦をはじめ顔なじみの薄いメンバーに自分から話しかけたりはしていた。しかし泉州や名倉などの今まで委員会に参加したことすら一度もない奴らからはどことなく距離を置かれていた。名倉が清坂に抵抗を感じているのは静内とのことも関係して

いるだろうしわからなくはない。

「ここが単なる仲良しの友だちグループだったらまだいいかもしれませんが、やはりこの学校をよくしたくって集まってきたメンバーなんだからもっと語り合わないとまずいかなって。先輩たちに今は甘えてられるのでまだいいんですけど」

「いいよ清坂ちゃん、もっと甘えてくれたまえ」

——生徒会長、まさかとは思うが。

関係ないことだが、今、清坂の隣りに羽飛はいない。

「先輩そんなこと言わないでちゃあんと聞いてくださいね！　けど今は期末試験も近いし、明日からはしばらく生徒会室にも集まりづらくなるのはわかってるので、今のうちに予定を教えてもらいたいなって思ったんだけど。あ、難波くん期末試験後の土曜の昼から、時間ある？」

本当は死ぬほど忙しいふりをしたそうに言葉を濁した難波だったが、

「あ、俺ひまだよ。そうだよ清坂さん、俺もそれ言おうと思ってたんだ。大賛成。な、ホームズも一緒に行こうよ、コンサートのチケット外れたって言ってただろ」

とんでもない趣味のねたばらしをされて更科ともども参加者に名乗りを挙げた。

「関崎くんは？　バイトとかは？」

「俺のバイトは朝しかやらないから大丈夫だ。試験が終わってれば少しは羽根も伸ばせる」

うれしそうに清坂は乙彦の名前をメモして丸をつけた。

「そっか、OKOK。関崎くんも来てくれるとなると三人かあ。あとは」

「おい清坂、羽飛には言ったのか？」

難波がむっとした表情のまま、そこに居ない面子について尋ねた。

「その他まだいるだろ。阿木や、あの背の高い、あの」

名前が出てこない。泉州のことだろう。

「きたら聞いて見るね。でも、試験後だったらみんな大抵暇よ。塾に行ってる人なんかほとんどいないし」

ずいぶんな決め付けようではあるが、乙彦も一応は暇だ。もし時間があれば静内さそって三人でカラオケに繰り出そうと思っていたがそれは難しそうだ。最近静内ともばか話する暇がないのが残念だが。たぶん名倉も同じことを表居るだろう。

——それにしても遅いなD組連中は。

やはりカラオケがいいか喫茶店でだべるかなどいろいろ意見を出しているうちに、ようやくD組の三人が現れた。

「どうした遅いな」

「珍しく説教が長引いた」

ぶっきらぼうに名倉が答え、その隣りから背高のっぼの泉州が肘でつついた。

「ほんと今日は大変だったねえ。寝ちゃいそうだったねえ、名倉」

反対側でまたにっこり笑う阿木。珍しい。更科が声をかけた。

「阿木さん、D組、クラス委員とかそのあたりで揉めてるの」

「それでもないけど、生徒会役員が多すぎるってことで結構大変」

気心知れているのか更科とは笑顔で返している。

「でもね、今日は別の楽しみがあってね。名倉くん」

阿木はちろっと名倉の手元を指差した。かばんではなく大きな手提げ袋がぶら下がっている。

「どうしたの」

「実はね。ほら、名倉」

今度は泉州がぐいぐいと名倉の背中を押している。それだけではない。いきなり片手から紙袋をひったくり、

「男なんだから度胸出しな、ほら！」

紙の手提げからこれまた大きな四角い缶を取り出した。かなり大きい。クリスマスケーキの箱のイメージだがまさか缶だしケーキもないだろう。第一まだ十一月だ。クリスマスにはまだ早い。

「やめろよ、壊れる」

「いいじゃないの食べる分には一緒なんだから」

缶を生徒会役員たちの集まるテーブルの上に置き、

「昨日、名倉のところにお祝いが届いたらしくて、そのおすそ分けらしいよ、ね、そうだよねえ、名倉？」

そんなの全然乙彦は聞いていなかった。文句を言いたくとも言葉が重くて伝えられない名倉に、これは泉州に抗議したほうがよいのはと思った矢先だった。

名倉が泉州を押しやり、その缶の蓋を自分からゆっくりと開けた。

どこかの外国製クッキーの入物を利用したものらしいが、市販品ではないようだった。

「奈良岡から祝いのクッキーだ。お前らによろしくと言ってた」

投げやりに答え。蓋を入物の下に重ねた。

最初に缶の中を覗き込んだのは清坂だった。

「名倉くん、もしかして奈良岡彰子ちゃんからの？」

名倉が答える前に、同封されていた手紙を清坂がするする開く。

「読んでいい？ 表書きが『青大附高生徒会役員のみなさま、および私宛』ってなってるけど」

仕方なさそうにうなづく名倉に清坂は微笑みながら封を切った。同時に更科がさっそくティッシュを人数分広げてクッキーのとりわけを始めた。

「うわあい、ねえねえ、これ、彰子ちゃんのお祝い！ 先輩知ってます？ 私たちの代に中学まで居て、今お医者さんになるために別の学校に進学した奈良岡彰子ちゃん！ 名倉くん彰子ちゃんと友だちなんだよね！ ありがとう、ほんとにうれしい！」

他の先輩、同輩を促しながら分厚いクッキーに歯型をつけ、

「どうしよう、彰子ちゃんのクッキー、さらに進化してる！ 彰子ちゃん、会いたいよ！」

感極まった表情で大きくため息をついた。

そのクッキーは厚みが一センチほどもあり「クッキー」と呼んでいいものかどうか迷う代物だった。ビスケットかミニケーキといったほうがいいかもしれない。口にしてみるとやはりケーキの親戚とでも言いたくなるようなやわらかさを感じる。ちょうど腹がすいてきたところだしこのくらいのボリュームがあるのはうれしいことだ。

後から乗り込んできた羽飛も含めみんなで缶に手を突っ込みひたすら食いまくる。

ここに先輩後輩の境はなく、みな遠慮なく奪い合う。

「しかし奈良岡さんお菓子作り得意だよな」

「そうなんです。彰子ちゃん、卒業式の打ち上げパーティーの時も用意してくれたんです。お医者さんになるよりもお菓子屋さんになったほうがいいんじゃないかって言ってたよね、貴史？」

清坂がすぐ脇に控えている羽飛に同意を求める。いやがるどころか二枚まとめて口に押し込んでいる羽飛は、

「だってそうだろ？ 奈良岡が手術室でメス握り締めているところと、このめっちゃめっちゃバターのくっつきり利いたクッキーを焼いてにっこりしてるところとどちらがあいつらしいと思うんだ？」

「もったもだ。少なくとも腹は幸せだ」

とりあえず難波も味には満足しているらしく三枚目をつまんでいる。

「あれ？ 阿木さん食べないの？」

「うんちょっとおなかいっぱい」

あえて一切手を出そうとしないのが阿木さんだった。更科が勧めるもとげのない口調で断る。単純にクッキー嫌いなだけなような気がするので無理には勧めない。

「関崎くん、奈良岡さんって知ってたっけ？」

「いや、ただ一度」

言いかけて名倉の顔を見る。伝えてよいものか。外部三人組として。

「関崎を連れて奈良岡の家に行ったことが一回だけある」

またぶっきらぼうに名倉は答えた。いきなり周囲が先輩たちふくめて「ほう」とこちらを見る。視線集中、喉が詰まる。

「そうだったの？ 私知らなかったな。それいつのこと？」

——答えるべきか？

迷う乙彦の代わりに名倉がさらに答える。

「夏休み中。小学校時代の仲間を集めて流しそうめん食ったんだ」

「そっか。彰子ちゃん小学校時代からアイドルだったもんね」

あっさり清坂は納得していった。ここからさらにつっこまれたらどうしたものかと危惧していたのだが、とりあえず清坂としては奈良岡彰子という女子について語りたくてならないらしく乙彦には問わなかった。

「会ったことあるならわかるよね。彰子ちゃんほんと性格もよくってみんなへの思いやりもあ

って、男子から大人気だったのよ！ 名倉くん、わかるよね」

心なしか名倉の頬が赤らんでいるように見えるが単に息が上がっているだけと見える。

「私も同じクラスで三年間仲良くしてきたけど『私の周りの人たちはみんないい人ばかり』が口癖だったの。いろいろあって他のクラスの女子たちから嫌がらせされちゃったりしたこともあったんだけど、それでも嫌いになったりしないで少しでも仲良くしていかなくちゃってがんばったの。だからかな、南雲くんもね」

「おい美里、やめとけ」

会長の騎士、羽飛がさりげなく止める。ただし口にはまだクッキーが残っているもごもごしゃべりのままだった。

「南雲が何かしたのか？」

止められて迷っていた清坂だが、唐突にひとこと、

「南雲くんとすっごく仲良しだったの。でも南雲くん女子にもものすごく人気あったので一時期すっごく彰子ちゃんやかまれたことがあったの。でもね、彰子ちゃんはめげなかったの。南雲くん、彰子ちゃんがいなくなってきつと寂しかったんだね。だから今、新しい彼女と付き合っているのかなあ」

羽飛が一転してむっとした表情でクッキーを食い続けているのが見ものだった。

——そうかやはり、あれは南雲だったか。

なんとなくちらほら噂を耳にはいたが、やはりと納得した。さほどの驚きはない。どうでもいいが規律委員会の予算は、南雲が委員長となった暁にはかなり厳しいものになるだろう。名倉が果たして敏腕の会計となるのかが非常に気にかかる。

——はんぱじゃない因縁があるということか。南雲にしろ名倉にしろ。

乙彦はちらっと名倉に目を向けた。俯いている。

不意に阿木さんが腕時計を覗き込んだ。

「ね、今日って、これから生徒会の仕事で新しい予定ある？」

「今日はとりあえずないけど、期末試験終わってからの打ち上げなんだけど」

清坂が答えると阿木はこっくり頷いて、

「じゃあ私、今日早く帰らないとまずい用事があるの。ごめんね美里」

さっと立ち上がり、穏やかな表情で手を振り生徒会室を出て行った。唐突だったのでどう答えていいのかわからなかったが、とりあえずは手を上げて見送るのみにした。

隣の名倉が少し表情を翳らせているのが気になる。

「どうした名倉」

「そういうことだ」

言葉少なく答えた名倉は、缶をちらと見やり、

「前にお前に話しただろう」

ため息つきつつぶやいた。

——なんだそれ。

乙彦の記憶にはほとんどなかった。まずい。あとで思い出しておかねばなるまい。

とはいえ今日は期末試験も近いということで早めのお開きとなった。

「それじゃね。期末試験終わったらすぐに生徒会室集まってね」

清坂に送り出され乙彦は名倉および難波と更科と一緒に廊下へ出た。この四人で歩くということは今までほとんどない。今でに乙彦は難波とまともに口を利いたことがないし、更科とはその循環油のような形で話をするものはあるものの表面上を撫でるような付き合いにとどまっている。それがいいのか悪いのか、正直分からない。名倉はほとんど元会計の先輩および乙彦としか直接話をしていない。

「清坂さんは知らないんだろうなあ」

階段を下りて生徒玄関に向かいながら更科がふとつぶやいた。相手は難波に向かってだった。

「奈良岡さんとは友だちだったのはわかるけどさあ。ちょっと言い過ぎてるよなあ」

「あいつはもともとそういう女子だろ」

吐き捨てるように難波が答える。あまり心持よい内容ではなかったらしい。乙彦の隣りでその会話に耳をそばだてている様子の名倉がいる。いざとなったら取り押さえたほうがいいだろうかと緊張する。

「名倉も奈良岡さんと友だちだったなら知ってると思うけど、奈良岡さんと南雲との話、知ってるだろ？」

大きく頷くのみの名倉。

「あのふたり公認のラブラブカップルだったしね。ただ南雲があそこまでめろめろになっちゃったら、もともとの南雲親衛隊の女子が傷つくのはしょうがないっちゃしょうがないよね」

「親衛隊ってなんだ？」

乙彦が口出そうとしたところをなぜか名倉が制した。そのまま更科に物言わず頷いた。

生徒玄関のすのこで靴を履き替えながら、

「阿木さん居づらくなっちゃうよね。こういう時にキリコがいてくれたらなってほんと思ったよ」

「うるせえな」

語気荒くもどこか疲れたような難波の声がすぐ側で聞こえた。A組とD組の靴箱は少し離れているため名倉がどういう顔をして聞いているかまでは確認し損ねた。

期末試験の内容は一学期と同様、論文調のものが多く、それゆえに実力試験の時のように暗記するだけでは着いていけない。だいぶ乙彦も慣れてきたとはいえまだまだ附属上がりの連中には歯が立たない。外部生が「実力試験や模擬試験、中間試験」まではなんとか上位に食い込むことができても期末試験でがっつり成績を落とすのはここに要因がある。

「というわけで、今回はもうずたずた」

まだ明日三科目分試験が残っている中、静内と名倉の三人でのんびりと外を歩いた。明日、試験が終わったら名倉と一緒に生徒会室へ集合しなくてはならない。その後清坂会長の率いる元生徒会メンバー全員でお食事会があるはずだ。羽飛が懸命に店を探しているらしいと古川こずえが話していた。要はこの時期を逃したら三人でくだらないこと言い合う時間など得られないということだ。

「お互い様だ。試験勉強というより一日中小論文の練習ばかりさせられていたような気がする」

「だよ。何度考えてもこの学校の基準ってわかんない」

紺色のコートをもとのまま静内はため息を着いた。黄緑のマフラーというのが時期はずれのような気もするがずいぶん目立っている。

「だが慣れるとなんとかなる」

「名倉、あんたはね」

おそらくこの三人の中で一番よい成績を上げるのはこいつだろう。希望はすべて名倉に預ける。乙彦と静内は両方から名倉の肩をがっちり掴み揺らした。

「たのんだぞ、外部生の星！」

この乗りで本当はカラオケボックスに繰り出したかったのだがそんなことが許されるわけもなくただただのんびりと師走の街を歩くのみ。

「そうだ、お前のクラスはどうだ？ また揉めていたりしないのか」

「まあまあよ」

気の抜けた声で静内が答える。

「一番の問題を抱えた人が出てってくれたから、クラスはいたって平和よ」

「うちの会長か」

「そう、生徒会長様はもういないようなものとして割り切ってるからすっごく楽」

「あまり人の悪口を言うもんじゃない」

たしなめた。静内が清坂の悪口を言いたい気持ちもわからなくはないが少なくとも美しいものではない。静内は肩をすくめた。

「ごめん、生徒会役員同士だといろいろ面倒だもんね」

「そうなんだ。俺もあまり角を立てたくない」

「そうだよね。クラス替えしても続く関係なんだよね、生徒会は」

静内と清坂との小競り合いも結局は生徒会役員選挙をきっかけになあなあの決着を迎えたとい

えるだろう。清坂からは今の段階で静内のことをどう思っているのかを聞いたことはない。ただ静内が評議の座を堂々と手にし、中学時代評議委員を続けてきた清坂にとってはプライドがはずたになったことだろう。静内からしたらとばっちりとしか思えないのは当然だし、余計なことを先輩ぶって口出しされるのもこいつの性格からしたら耐え難いに違いない。結局よかったのだ。評議委員会と生徒会、ほぼ別組織に分断されたわけだから。

「そうだ、今思い出したんだけどこの前評議委員会に規律委員会の一年男子たちが来て、なぜか撮影いっぱいしまくって去ってったけど、関崎、あれなに？」

「俺はもう規律から離れているからよくわからないが、立村に聞いてみようか」

「別にいいよ。その人も混じってから」

ふきだしそうな顔で静内がささやく。思い出し笑いしているところを見ると機嫌は悪くないのだろう。なによりだ。

「立村と南雲は親しいからな。それでなんだその写真撮影とは」

「それがね、私たち一年はあまり関係なかったんだけど評議委員の三年先輩たちの卒業記念冊子を作るとあって、仮装写真を取らせたってわけ」

「仮装？ 文集作りか」

「違うみたい。私もよくわかってないんだけど規律委員会では青大附中時代にファッション雑誌っぽいものを季刊誌で出していたことがあったみたい」

「それは俺も聞いたことがある」

たぶん伝説の「青大附中ファッションブック」だろう。乙彦はまだ観たことないが、なぜか規律委員会が編集し希望者に配布している代物だ。

「今回、規律委員会の副会長がそういうの好きらしくて手始めに評議委員会の三年生たちを中心にして撮影会を行ってたらしいんだけど、なぜウェディングドレス用意する必要あるのかなあ。近くで見たけどほんものそっくりでびっくりしたよ」

「おいなにか？ カップルでもいるのか」

いきなり食いついてくる名倉の頭を静内は軽く叩いた。

「そんなハッピーエンドな撮影だったら私もこんなに驚かないって。全員かわるがわるドレス着てその格好でにっこり微笑んでるんだから、先輩たちが」

「静内、ふたつ確認したいことがある」

乙彦は小声で尋ねた。聞かれたらやはりまずい。

「なんでもどうぞそ」

「その場に立村がいたということだが何やってたんだあいつ。それともうひとつは、結城先輩もその、なんだ、あのドレスを着たのか」

両手を激しく叩きながら静内は笑いこぼれた。

「思い出させないでよ、結城先輩の格好はもう」

あまりにも激しい爆笑ぶりに、乙彦は大体の状況を把握した。無理にイメージすることもない。どうせ発行されたら嫌でも見せ付けられるだろう。

立村のことについては聞き損ねそれぞれ家路に着いた。残りの三科目も決して楽観できるものではないのでしっかりテスト勉強しておかないといろいろまずい。留年という言葉がしゃれにならないくらい身に染みる。

——それにしても、立村が規律委員会でしっかりなじんでいるとはな。

南雲や東堂のような昔馴染みがいるというのもあるのだろう。また南雲が副委員長となり影響力も強まったこともあって、立村がうまくぶら下がっているのかもしれない。その辺はあまり興味を持たないようにしている。しかし、静内の言う、

——結城先輩のウェディングドレス姿を撮影するのに立村も付き合ってたのか？

単純に、どんな面して見ていたのかは非常に興味がある。どちらにせよクラス委員にせよ生徒会役員にせよ、納まるどころへ納まったと考えればいいのだろう。

——だがやはり。

乙彦は頭を振って雑念を振り払った。

——あいつが納得しているんだ。それ以上は言うまい。

出来はともかく書くべきことは全部書きこんだ。論理的にがたがたかもしれないがなんとか終わった。三科目分の試験も片付き麻生先生の、

「お前ら完全に燃え尽きてるようだが、あまりはめはずすんじゃねえぞ。冬休み前に追試ってのもあるんだからな。ついでに言うと冬期講習だって待ち構えているんだからな」

脅しすらもうどこ吹く風といったもの。みな、あと二週間で念願の冬休みを迎えることで頭が一杯の状態だ。人間として当然の感情だろう。

「さってと、今回どうだった関崎」

藤沖があいまいな笑みを浮かべながら乙彦の顔を覗き込んだ。

「期末の傾向は全くわからん」

「論文ばかり書かされているのはやはりしんどいか」

「当たり前だろう。三年間鍛え上げられてきたお前らとは違う」

一緒に顔を出したのは片岡だった。こいつも少し顔色が明るい。英語はそれなりにこなしたのだろうが、他科目も順調だったようで、

「今まで勉強した中で一番よかったかもしれないなあ、これでいい成績取れたら今度こそ焼肉食べようよ！」

にこやかに語りかけてきた。藤沖が居ないところで前に聞いたことがあるのだが、片岡の場合内川との交流がきっかけで公立中学の教科書をじっくり読み返す必要が出てきて、その分基本をやりなおさざるを得ず四苦八苦していたそうだ。内川にはそんなこと一切におわせることはなかったらしいが、そのあたりで結構身についたものがあるという。

——基本に戻る必要はあるよな。

今度、中学時代の教科書を読み直してみようと決めた。

あまりクラスでだべっているわけにもいかない。これから生徒会役員同士のお食事会が行われる約束で、学食へと向かうのだから。結局昨日の夜に羽飛から生徒会連絡網で連絡がきて、

「やっぱ生徒会って立場だしなあ。しゃあねえよ。学食をパーティションで一部個室っぽくしてやろうぜってことで決まったぞ」

乙彦の心配していた懐の痛みもさほど感じずにすみそうな場所と相成った。ありがたい。学食ならメニューも好き勝手に選ぶことができるというわけだ。連絡網最後尾の名倉にも電話をかけたが、

「妙な場所に連れていかれないですんでよかった」

ほっとしている。やはり外部生同士の絆である。藤沖と片岡に手を振って挨拶した後乙彦はD組へその名倉を迎えに行った。女子二人につかまるかと思いきや、すでに移動しているようで名倉ひとりが現れた。

「生徒会同士のお食事会、その名のままでな」

「まったくだ」

名倉と話し合いながら生徒玄関へ向かった。正直気乗りしないところもないとは言えず、清坂・羽飛の盛り上がりっぷりもどこか遠い。だがそれもそれでまたよし、ろくすっぽ話をしたこともない泉州や阿木とはこの機会にいろいろ確認したいこともある。難波はともかく更科は愛想もいいしそれなりに会話はつながる。さて、やはりカレーとざるそばのセットでいこうか、それとも奮発してとんかつセットにするか。迷うところだ。

「関崎先輩」

振り返った。生徒玄関を出てから三歩ほど前に出たあたりだった。駆け寄ってきた野郎の顔を思わず覗き込む。やたらととんがった声と今にもこんこん鳴きそうなその面、紛れもない、霧島の姿だ。名倉は一步たじろいでいる。乙彦の後ろに下がった。

「どうした霧島。生徒会長に就任したそうだな」

一応は挨拶しておこう。労いをこめて伝えと、

「恐れ入ります。さっそく本題に入りますが、立村先輩は本日いらっしゃいましたか」

単刀直入に問いかけてきた。もちろんいた。まじめに答案を提出していつのまにか姿を消していた。

「それはいた。期末試験最終日だからな。中学もそうか」

「同日です」

短く答え、霧島はかすかに目を吊り上げた。まさに稲荷神社の狐。

「それでは今、立村先輩がどちらにいらっしゃるかご存知ですか」

一瞬眉がびくりとしたように見えた。緊張しているのかそれとも馬鹿にしているのか。乙彦には全く分からない霧島の心理だ。立村にはわかるのだろうか。

「いや、あいつは早めに教室を出たがどこへ行くかは聞いていない」

「関崎先輩とご一緒ではないのですか」

「なんで俺と一緒にいなければならないんだ」

さらに疑問を感じつつ乙彦が問いかけると、

「いえ、失礼しました。先輩であれば少しはご存知かと思っておりましたので。それでは急ぎますので失礼いたします」

早口にまくし立てて背を向けた。何か妙な予感がする。乙彦は呼び止めた。

「霧島、待て」

「何か御用ですか」

「立村に急ぎの用があるのなら、俺も探してやろうか」

目を吊り上げたまま霧島が振り返った。

「今なんと仰いましたか」

「いやたいしたことじゃない。そんなに血相変えて探している様子だと、かなり切羽詰った状態じゃないかと思っただけだ。お前は青大附高の校舎をあまり知らないだろう。もしかしたら試験後だしあいつも本が好きだから図書室でのんびりしているかもしれない」

のんびり、といった言葉にするどく霧島は反応した。そんなに慌てなくてもいいのにとも思う

。

「先輩が、のんびりとしているんですか」

「わからないが、その他補習を受けているかもしれないし、音楽室でピアノを弾いているかもしれない。さまざまな想像はできる」

思いつくままに連ねて見るが、確実に立村がどこにいるかを判断することは難しそうだ。とっくの昔に自転車で帰っていると考えたほうが自然かもしれない。だが、ひとり青ざめて探している霧島にもものあわれを感じたのも確かだ。

「関崎先輩、感謝いたします」

頭を下げ、霧島はきりりと口元を引き締め、改めて乙彦へと向き直った。

「恐れ入ります。僕も一緒によろしいですか」

「ああ、そうすればいい」

後ろで逐一様子を伺っていた名倉には、

「悪い、そういうわけで少し会には遅れるが必ず行くから、先に始めていてくれと伝えてくれないか」

明らかに恨めしそうな目つきで名倉は見返してきた。気持ちはわかるがこちらにも優先順位というものがあるのだ仕方ない。気乗りのしない食事会よりも、大切な友人の後輩の希望を叶えたい、これが本音だ。

職員玄関に回った霧島を迎えに行った後、そのまままずは図書館へと足を向けた。たいてい立村が腰掛けているのはこのあたりだ。興味津々の眼差しで覗かれたのは霧島の方で、愛想良く微笑み返している。いい根性だがこいつの目的は達せられなかった。図書カウンターの古川に、

「悪いが立村いなかったか」

声をかけると即答で、

「音楽室か中学かどっちかじゃないの。ここには来なかったよ。あ、それよか関崎さあ、これから羽飛や美里とデートなんだって？」

誤解をおおいに招く発言をおまけにつけてきた。悪いがそんなことかまっている暇もない。顔見知りの古川と霧島は軽く挨拶を交わしているが、また一礼をして図書館から飛び出した。あせっていることは古川の目にも明らかで、

「どうしたんだろうねえ。霧島に行き先教ええないなんて立村も罪なことするよねえ」

乙彦に流し目で、「ねえ」と繰り返した。

音楽室に顔を出すとタイミング悪く吹奏楽部の連中が弁当を持ち込んで盛り上がっている。A組の江波もいたので、

「立村来てなかったか？」

確認してみたが、

「今日はいねえよ。どしたの」

あっさり尋ね返された。

「今日は、ということはいつもならいらしゃるということですね」

音楽室の扉を閉めた後、霧島はひとりごちた。校内ではかなり冷静に振舞ってはいるがずいぶんと落ち着きがなく視線をちよろちよろ上に下にとしている。時折すれ違う女子たちから熱い視線を送られているがそれも無視している。

「念のためうちのクラスものぞいてみるか」

一年A組の教室であればもしかしたら忘れ物とかして戻っているかもしれない。霧島を率いて階段を下りながら確認した。

「しかしそんなにあいつを捕まえねばならない事情があるのか」

「いろいろございます」

「俺も遠目で見ていたんだが、お前と立村はいつも連絡取り合っているのか」

「はい、いろいろ確認させていただきたいこともありますので」

澄まして霧島は答えた。

「僕も生徒会長となり、一応は元評議委員長であらせられた立村先輩からその手の事情をお聞かせいただきたいと思って、どこに不思議がありませんか」

——何度考えても不思議なしゃべり方だ。

霧島のずいぶんとお高いしゃべり方にあきれつつも、もう少しつつこんでみた。

「あまり青大附中の生徒会については藤沖通じてでしか聞いていないんだが、今回はどうなんだ」

どうなんだ、という言い回しも自分で妙だとは思いますがどう聞くほうがベストかつかめない。一応、霧島も生徒会長ということでそれなりのステータスがある。元評議委員長の立村よりも元生徒会長の藤沖や、それこそまだ学校に残っている佐賀はるみなどこのあたりと連絡を取り合ったほうがいいのではとも思う。

「去年と同じことをすればよいことです。ほとんどの行事はこれから僕ひとりで運営するようなものですからね」

不敵に笑う霧島。A組教室の扉を開き、しげしげと中を眺め、

「立村先輩はこちらですね」

通路端の席をじっと見る。なんの変哲もなし。ふと霧島が乙彦に向かい、

「先ほど、何かご用事があるとか」

問いかけてきた。

「そうなんだ。一応俺も生徒会の仲間入りをした関係で、役員全員で食事会をしようということになりそれが今からなんだ」

「信任でお決まりとのこととは伺っておりました。お祝いが贈れて失礼いたしました。おめでとうございます」

もう決まってからだいぶ日にちも経っているしおめでとうもなにもないのだが。ありがたく受け取っておく。

「それでは清坂先輩や羽飛先輩もいらっしゃるのでは」

「そのふたりが主催だ」

厳密には違うが、言いだしっぺが清坂である以上羽飛も組み込んでいいだろう。

霧島ははっとした風に見開いた。早口に乙彦へ、
「恐れ入ります。ほんの少しだけ清坂先輩たちに確認させていただきたいことがありますので、お連れいただけますか」

また真剣な眼差しで訴えた。この変わり方が何なのか、乙彦には掴みかねた。

学食に到着しカフェテラスに向かう。試験後ということもあって人の賑わいはかなりのものだが、最奥にパーティションで区切られた空間がある。たぶんそこだろう。乙彦よりも早く霧島が駆け寄る。

「遅くなってすまない」

乙彦もかろうじて追いつき、パーティションの中に入った。一応は霧島を背にした形となる。みな、すでに料理を注文していて大皿に取り分ける形式を取っている。一品料理ではなさそうだった。となると、あとで割り勘となるのだろうか。全員が拍手で乙彦を迎えたがその後ろに控えている霧島に対しては怪訝な眼差しを送っている。

清坂が覗き込むようにして問いかけた。

「あれ、霧島くん、立村くん探しているんじゃないの？」

「いらっしゃらなかったの、清坂先輩か羽飛先輩ならご存知ではと思ひましてお邪魔させていただきました」

また深く一礼。すでにお祝い挨拶は済ませているらしくそれはしなかった。

「あああいつな。さっき美里とも話してたんだがな、中学校舎に行くって話してたぞ」

羽飛がナポリタンに食いつきながら外を指差した。清坂も同調しながら、

「そうそう。試験終わったでしょ。ちょうど廊下のところで急いでたみたいだからどこ行くのかわかって聞いたら、中学校舎で狩野先生と話があるんだって。今頃そっちにいると思うけどそんなに急いでどうしたの？」

「狩野先生ですか！」

霧島の声がとんがった。目も釣り上がっている。霧島の変貌ぶりにパーティション内の連中はみな目を丸くしているのがありありとわかる。

「数学のことじゃねえの。狩野先生、数学の先生だし立村とも気が合うみたいだし、なあ」

「そうよ。今から中学に戻ってみれば？ タイミングよければたぶん会えると思うよ」

ふたりうんうん頷く中、霧島は唇をまたぴっと引き締め、再度頭を下げた。

「貴重な情報ありがとうございます。それではまた、失礼します」

乙彦には振り返りもせず、一目散に学食から飛び出して行った。要は最初からここに連れてくれば用足りたという話のようだった。

「関崎くん、泉州さんの隣りにどうぞ」

泉州がテーブルのほぼ真ん中でハンバーグとパスタを取り分けて食している。その隣りが空いていた。名倉はと見ると同じクラスの阿木とそれなりの会話をしている様子だった。どんな話題かはわからないが、とりあえず無言地蔵で固まっては居ない様子だった。

反対隣には更科なのでとりあえずはそれほど気遣いせずにすみそうだ。

「関崎もずいぶん後輩に慕われて大変だねえ」

いわゆる日本的なミスコンテスト向きではなく、海外向けの彫り深い美女コンテストで荒らしになりそうなタイプ、と言えればいいだろうか。押し出しが妙に強い。またなんとなく香水のようなものも漂ってくる。学校で香水をつけていいのか判断に迷う。

「そういうわけではないんだが、あれだけ血相変えて探しているのを見たら無視もできないしな」

「そうだよねえ。あ、ほらこのサーモン、食べる？」

てきぱきと切り分けていく泉州、手際もよい。しかし食べる時に大口あけてぱっくりというのは豪快すぎてどうかとも思う。

「関崎に前から聞こうと思ってたことあったんだけどね」

パスタに食らいつきつつ耳を傾けた。泉州が今度はグラスにコーラを注いでくる。

「片岡のことすごく可愛がってくれてるんだよね。聞いているよ」

「やはりそのルートか」

思った通りだった。つんと澄ませばお高い美人でしかなさそうな泉州だが、その顔に浮かぶ表情は人懐っこい。やはり食い物をはさんでみないと人となりというのはわからないものだ。

「俺も片岡のことについては、いつか聞いてみたいと思っていたんだ」

「いい機会じゃん」

まずはグラスで乾杯し仕切りなおすことにした。

全員で盛り上がりようとか言っておきながら結局は分裂しているところがよくあることで、乙彦の相手はしばらく泉州のみだった。それはそれで面白い時間だったが。

「片岡もねえ、たったひとりでA組に流されてどうしたもんかと思ってたんだけど結構うまくやってるようで一安心ってとこ」

「ああ、あいつはほんとにいい奴だからな」

「ガキなのよどうしようもなく。ぼーっとしているのか泣き虫なのか全くわかんないけど、ああいうのってほっとけないんだよね」

とかなんとか言いながらも泉州から聞き出せた、「片岡の謎の彼女事情」は貴重なものだった。

「小春ちゃんっていうのよ。西月小春ちゃん。名前だけでも聞いたことある？ 私の親友なんだけど」

「あるかもしれないが」

「あるに決まってるじゃん！」

背中をぶったたかれた。口に押し込んでいたパスタが飛び出しそうになる。この男子を邪険に扱う態度、どこかの誰かにそっくりだ。

「痛い。食っている間に叩くのは頼むからやめろ」

「あれれ悪かったねえ。私は男子の場合あいさつだと思ってるけどねえ」

がははと笑う。また頼みたいのだが、物が口に入っている状態で笑うのはどうかと思う。

——こういったらなんだが、ミスなんとかに選ばれそうな顔しているんだが。

心底そう思う。もったいない奴だ。泉州はかまわずフライドポテトをつまみまくり自分の口に押しこんでいる。

「小春ちゃんはね、二年まで評議だったの。ほら、難波とか更科とか、会長さんとかと一緒」

まだ清坂のことを「会長」と呼べずにいる乙彦だが泉州はあっさり受け入れているらしい。

「入学した頃は元気いっぱいね、とにかく弱いものいじめする奴が許せなくて男子でも女子でも関係なくぶつかってって。辛い思いしている子には自分から寄り添ってって。とにかく古い少女漫画のヒロインみたいな女の子だったんだ。二年の終わりまではね」

「二年の、終わりか」

少し含みを持たせた言い方をする。泉州はここでしっかり口の中のを飲み込み、コーラで喉を潤した。

「ほんと、いい子だったあ。私もほら、こんな顔でえらそうに見えるじゃん？ みんな退くんだよねえ。女子もそうなんだ。別にこっちは父ちゃんゆずりのどじょう掬いくらいやってあげてもいいんだけど。あんなかで怖がらないで近づいてきたのが小春ちゃんだったんだ。いきなりよし恵ちゃんとか言われて最初びびったけどすぐに仲良くなったよ」

——確かに泉州に話しかけるのは男女ともに勇気いるだろうな。

「まあそれで小春ちゃんは元気に評議委員してたんだけど、二年の冬休みにとある事件が起こってね。通称『奇岩城』事件っての？」

不意に更科が乙彦と泉州を交互に見やり、口に人差し指を当てた。

「少し小さな声で話したほういいよ」

「了解」

すぐに納得したのか泉州は声を潜めた。

「まあねえ、あそこのふたりはある意味当事者だからね」

「その『奇岩城』事件とはいったいなんだ」

「あんた、アルセーヌ・ルパンの『奇岩城』読んだことないの」

なぜ青大附高の連中はみな乙彦に過剰な文学常識を押し付けるつもりなのだろう。知らないわけではないが残念ながら本経由ではなく漫画だ。

「まあいっか。うちの学校さ、中学の頃って『委員会の部活化』みたいなのがあって、どう考えても評議委員会が演劇なんてやる必要ないと思うんだけど、なぜかビデオ演劇ってものを用意して撮影しちゃったりするんだよ」

それならよく知っている。乙彦は膝を打った。

「ああ、知ってる。俺も中学時代生徒会で青大附中の評議委員会と交流してたからな。その時にカセットテープで聴かせてもらったことはある」

「へえ何を」

「『忠臣蔵』の松の廊下」

静かにするのを忘れてか泉州はまたがははと首をのけぞらせ笑いこけた。

「あの伝説の『忠臣蔵』でしょ！ 私たち、給食時間いきなりテレビ放映されちゃったもんだからもう笑いすぎてその日のメニュー全部食べられなかったよ。うちの会長さんに聞いてみな。会長さん確か、勘平お軽のお軽さんやったはずだよ。道行だったか」

「なんだそれ」

乙彦の記憶では立村の浅野内匠頭がとち狂ったように「この間の遺恨覚えたるか」などと叫びつつ立ち向かっていく音声のみ残っている。微妙な笑いが水鳥中学生徒会室に響いたこともリアルな記憶として残っている。そうか、評議委員を三年間務めた清坂が何も演じぬわけがない。当然のことだ。ただし「勘平お軽」とはいったいなんぞや。

「とにかくさあ、やったのよ、ルパンの『奇岩城』。評議委員のみんながそれぞれ役割振られて演じてて、その時小春ちゃんはレイモンドといういわゆるルパンの恋人役だったの。それであと、そのルパンがねえとんでもない奴でさあ」

声のボリュームを一切抑えずに泉州が語り始めた時だった。

「泉州、悪いがこの話はここまでにしてくれ」

いつのまにか乙彦の背後には難波が立っていた。思わず振り返ると目が合い気まずい雰囲気漂った。自分らの席で羽飛が、

「おいおい、落ち着いて食えよホームズ先生よ」

からかい調子で声をかけ、

「ホームズほらほら、新しいフライドポテト追加だよ」

腕をひっぱる更科と。なにやら不穏なムードであることは確かだった。

「何か俺たちはまずいこと話していたのか？」

「そうだよ、ほらあんたたち知ってるでしょ、小春ちゃんと片岡のこと。関崎はそのこと知らないってだから、教えてただけなんだけどさ。あいつ誤解されててさあ、ほんっとかわいそうだから同じクラスのよしみってことで関崎にね」

きょとんとした顔で説明する泉州を再度難波は遮った。

「お前たちが悪意ないのはわかる。だがここでは誤解を生じる。俺たちはあの事件を一通り経験しているからすぐにわかるが、関崎は全くの白紙の状態だ。その状態でいきなりあやふやなことを伝えられたら、先入観で天羽を見られるはめになる。それは避けたい」

堅い顔でかっちり述べる難波だが、めがねの奥が引きつっているのが分かる。そんなにあせるような内容とも思えないのだが。乙彦も嘴を挟んだ。

「俺も、評議委員会のビデオ演劇は立村から聴かせてもらっている。その延長としてしか聞いていないが」

「それとこれとは違うんだ！」

口荒に難波は跳ね除けた。

「いいか、泉州の立場からしたらどうしても西月をかばいたくなるだろうしその気持ちを汲み取ることはできる。だが、別視点からしたら西月は学校を退学されるだけのことをした生徒だしその行為をどのような理由があつたとしても俺たちは肯定してはならないんだ。関崎にはあとで俺と更科、あと清坂も含めて説明はするつもりではいる。だがその際にはできるだけ公平な立場で関崎には判断してもらいたい。今のこの場ではまだ言ってくれるな。いいか」

ふくれっつらの泉州はしばらく黙っていたが、やがてフライドチキンの骨ごと指でつまみ上げかぶりついた。そのまま、

「わかった。じゃあ早めに解禁しといて。私は全く別の目的でしゃべってるんだからさ。水入りはいっちゃって面倒だよねえ、関崎」

面倒くさそうにため息をついた。

難波の割り込みで一瞬空気もこわばったが、結局はみな気の合う同士で好きなようにしゃべくりつづけ、泉州も続きの話を今度は声を潜めて聴かせてくれた。

「うるさい人がいるから端的に言っちゃおうと、小春ちゃんがある男子にこっぴどい振られ方をしちゃって、口が利けなくなっちゃったのよね」

「口が利けない？」

おぼろげながら聞いたことはある。泉州は頷いた。幸い更科と難波は清坂・羽飛となにやら頭をつき合わせて語り合っている。こちらには嘴突っ込むつもりなさそうだ。

「そうなんだ。いわゆるオーソドックスな、告白してごめんねってパターンじゃないからね。最初はなんとなくいいムードで付き合ってたのに突然手のひら返したようにきらわれちゃったんだ」

「何か相手の気に障ることでもしたのではないのか」

「どうなんだろう、ただ小春ちゃんは純粋にその相手男子に尽くしてたよ。好かれるためにありとあらゆる努力をしたんだけど、結局はそれが重たかったらしくって。振られてもめげず想い続ける小春ちゃんにそいつとうとう、存在そのものが入学当初から大嫌いだったって叫んじやったのよ。ずっと仲良く評議やってきたし一時期は付き合ったくせによ。なんなのこの手のひら返して思うよねえ」

「確かに。嫌いなら嫌いとはっきり伝えておけばという話だな」

ここまで聞くにあたって、片岡の恋人がそこまで殺伐とした過去を持っているとは思わず、今後この件については触れないで置いたほうがよいと判断した。

「で、そこでよ。いろいろあって言葉が出なくなっちゃった小春ちゃんに全身全霊で尽くしているのが片岡ってこと。やっ和本命登場なんだけど」

泉州はここでほっとした風に笑顔を見せた。やはり微笑むとどこかの外国女優と会話しているような気分になる。

「片岡はねえ、あんたも知ってるだろうけど一年の時にとんでもないことやらかしちゃったからね。女子から総すかん食ってるの。しかもそれをうまく学校側が隠しちゃったのとあいつのお家がお金持ちなもんだから女子たちから誤解されちゃってて、隠蔽工作して居ついている最低の金持ちぼんぼんとか思われてたんだよ。まあ私もなんなのこいつとか思ってたけど、小春ちゃんのこともあるって観察したらまあすることなすことめんこいつたらないの。今時やる？ 薔薇の花一本ずつテーブルにおいていくって」

「とげはないのか。そもそも薔薇は高いだろう」

「高いわよ。高級な薔薇らしいけど、それを毎日テーブルに置き続けたってわけ。なんなのこの、いわゆる小野小町って話じゃん？ 小春ちゃんもそれにほだされたかどうかわかんないけど、片岡はこれで無理やりながら小春ちゃんに想いを伝えたってわけ」

——正気か、片岡、そこまで情熱を燃やしているのか！

噂には聞いていたがさすが片岡、本気の様が怖い。

「それまですったもんだあったけどよくがんばったよ片岡も。それにご相伴して私も片岡んちによくお邪魔するようになってさ」

「あの高層マンションにか」

「そ。最近高校のご学友のみなさまが中心でなかなか私もお邪魔できないでいるんだけど。あんた行ったことある？」

「一学期の終わりに焼肉パーティが行われたがあの時にいた」

確かあの時、泉州らしき女子もいたはずだが見間違いかもしれない。尋ねてみると、

「いたよいたいた。私もさあ、桂さまに思いっきりおいしい肉分けてもらってはぐはぐしてたんだから。あそっか、じゃあ関崎、あんたも食いまくってたんだね」

「桂さんとうちの担任の麻生先生とががんばって仕切ってたな」

「あのふたり、B級グルメマニアなもんだから片岡の教育相談という名目でしょっちゅう食べ歩きしてるみたいよ。私も混ぜてほしいんだけどなあ。もつもラーメンもゲテモノ食いもなんでもありなんだけどなあ」

——なんなんだこの人は。

難波がそんなにがみがみ怒るようなことでもない。なんともまあ片岡には心強い親衛隊がいたものだ。見直した。

「だが、片岡のその相手は今、この学校に居ないと聞いたが」

腹がいっぱいになってきたところでもうひとつの疑問を尋ねてみた。

「ここから先は、ちょっとここでは無理そうだわ」

泉州はちらと難波たちのグループを眺めてつぶやいた。

「あいつらが怖いわけじゃないんだけど、食事の席で盛り上がる内容じゃないよ」

——やはり面倒なことなんだろうな。

泉州のしゃべってくれたことだけで十分、片岡の肩に寄せられた巨大な重荷を感じる事ができた。言葉の出なくなるほどのショックを受けた女子を救いたくて、傍からみたらアホにしか見えない薔薇の花の一件もそうだが、わざわざ自分の家に連れて行ってしまいうくらいなのだから相当本気なのだろう。十六歳になるかならないかで結婚を意識する行動を取るなんて正直信じられない。

「みんな一、ちょっといい？」

話もたけなわの頃、清坂がまわりにいた男子連中を全員席に追いやり、ぱんぱんと手を打った。すでに皿に盛り付けられていたパスタはすべて平らげられ、残っている料理もほぼわずか。

「今日はみんなといろいろおしゃべりができて本当に楽しかったんだけど、この場でどうしても私、言っておきたいことがあるんだけどいいかなあ」

「よっ、会長！」

お茶らけた口調で更科が掛け声をかける。にやにやしているのは脇に控えている羽飛、むっすりしながらもふんぞりかえっているのが難波。阿木と名倉は仲良く顔を並べている。結構盛り上がったようだ。乙彦隣りの泉州はぼそっと、

「今日しゃべったのって関崎しかいないけどねえ」

シビアな一言を放つ。

「実はなんだけど、これから生徒会を運営していくにあたってなかなか先輩たちの前もあって話せなかったことなんだけど、聞いてもらえるかなあ」

「早く話せよ」

待つのが苦手なのか難波がきつく促す。

「ごめんね。つまりなんだけど、みんな気づいてると思うんだけど、うちの学校が最近少しずつ保守的になってるなあって思うこと、なあい？」

「なんだその保守的とは」

名倉が尋ねたのに驚いた。隣の阿木がにこやかに微笑みながら名倉を見つめているのが気にかかる。

清坂は細かく頷きながら、真剣な表情を変えずに続けた。

「たとえば、そう、附属上がりの人なら分かると思うんだけど今までは青大附属といえば委員会の部活動化とかいった風に、生徒たちの自主性に任せたイベントとかいっぱいあったと思うんだ。それこそビデオ演劇とか、ファッションブックとか。ね。覚えてるでしょ」

乙彦と名倉以外は全員が頷いた。

「けど、高校にきたらそういう自分たちで試せる何かってのがほとんどなくなっちゃったと思わない？」

「まあな。確かにそれはあるわな」

ほとんど清坂の騎士としか見られていない羽飛が相槌を打つ。

「でしょでしょ？ 規律委員会も学校祭でそれなりに『幻の制服』とかなんとかやってたけど、思えば前期まともなイベントってあれくらいよ。なんか違うよね」

「清坂、お前の言いたいことはなんとなくわかるんだが結論を言ってくれ」

さほど機嫌悪そうでもなく答えたのは難波だ。

「ああ、もう難波くんせっかちなんだから！ つまりね、私たち生徒会で中学の頃と同じような自分たちでいろいろなイベントを作り上げたりできるような環境を構築したいの。外部の関崎くんや名倉くんにはぴんどこないかもしれないけど、生徒が自分たちでやりたいことを見つけて、それをどんどん実行しやすくする環境作りをしたいの！ 今みたいに先生たちがすべて囲っちゃうのではなくて。できないとは思わないよ。だって、今まで中学ではできてたんだもん。高校に入ってできないってこと、ないよ、絶対！」

拍手を送ったのは名倉だった。同時に他の連中もつられるように手を叩いた。乙彦も続いたが内心、

——みな、清坂を黙らせたいというのが本心なんだろうなあ。

そんな本音も見え隠れしていた。

「ね！ だからみんな、立場も思うところも違うかもしれないけど、やりたいことをやりたいと言えばチャンスが巡ってくるようなそんな学校を作ろうよね！」

清坂も察したのか笑顔満面でまとめた。パーティションだけだと外に声が洩れる。やはりまず

いだろうそれは。

期末試験の総合順位は少し遅れて発表された。科目が多いこともあって先生たちも集計に難儀しているらしいという噂もあったし、その他家庭科、音楽、美術といった科目についてもいろいろと面倒なことが多かったらしい。保健体育についてはみな、一部の男子たちが目を輝かせてがんばった結果高得点を獲得した生徒が「影の帝王」と呼ばれてみなひれ伏しているとか、本当なのかどうなのか分からない話も多々ある。

「関崎、今回の結果はどうだった。それと片岡、お前、今回は焼肉食えそうか」

「うーん」

悩む片岡を横目で見つつ、乙彦は若干下がったとはいえ学年三十番以内に食い込めたことへ救いを感じていた。かなりきつかったとはいえすべての学科を平均点越えたのと、英語もだいたい八十点近く稼ぐことができたのに驚いた。なんとかなるものだ。

「総合点では上がったんだけど」

片岡も今回は十番台だったようで恥ずかしい成績ではなさそうだった。ただし、

「また二番なんだ」

しかたがない。満点取った奴が目の前にいるんだからしょうがない。

その、英語で一番を取った奴を乙彦はそっと後ろから様子伺いした。

あのクラス合宿以降少しずつ立村の態度もくだけてきて乙彦も胸撫で下ろすものがあった。規律委員会でも順調にすることしているようだしその点は安心している。週番も朝遅刻することなくきっちりこなしている。女子規律委員を務めている疋田とも意外と話が合っているようで取り立てて何か、ということはない。

——噂の「青大附高ファッションブック」もどういふもんになるんだろう。

見るのが怖い。立村はいったいどんな顔して現場に立ち合ったのだろう。

放課後生徒会室で一月予定の生徒会合宿について相談したり、目の前に迫っている冬休みの過ごし方などをのんびんたらしと話しているうちに、突然阿木が思い出したかのように、

「ねえ知ってる？ 中学の生徒会長やってる霧島くんと元生徒会長とがね、おととい二人で仲良くデートしてたのって！」

その場に居る全員に話しかけた。隣には名倉が話を無視して元会計役の先輩からレクチャーを受けている。別世界のふたりを除く全員がひょおと声を挙げた。

「生徒会長同士がか！」

声を挙げたのは難波だった。にこりともせず、鼻をかみながら、

「阿木さん、それどこで見たかによってニュースのランクが変わってくるよ」

「んとね、この前の日曜」

期末試験が終わった後の日曜だ。清坂と羽飛が顔を見合わせた。

「ねえねえ、青潟市内？」

「もちろん。駅前なんだけど、ふたりとも私服でおめかししてて」

「でもコートだったら何着てるかわからないじゃない？」

「なんとなく！ でもね、ここだけの話なんだけどね」

声を潜めた。

「どうも私の観た限りだと、手握り合ってたんだ。ほんとにすれ違っただけだし向こうさんたちも私の顔知らなかったから気づかなかったと思うけど！」

「ええっ！」

——いいのか、そんなこと憶測で話して。

この阿木という女子は元評議委員だったと聞く。頭の回転は結構はやそうな印象もあるし事務仕事を得意にしている様子は伺える。しかし、どうも阿木は見目麗しい男子たちに目がないようで、ことあるごとに「ねえねえどここの高校にかっこいい人いるんだけど」とかなんとかで盛り上がっている。さすがに生徒会室では控えているようだが図書館でぎゃあぎゃあしゃべっているのを偶然居合わせたときに見かけたことがある。

「阿木さん、それ話によっては中学生徒会の大スキャンダルになっちゃうよ」

さりげなく牽制するけなげな更科。阿木は無視して続けた。

「そんなの知らないって。ここで話しているだけで中学の生徒にばれるわけじゃない。私もあの日たまたま駅前の本屋で買い物してたらね、偶然ふたりが現れたじゃないの。なにかわからないけど肩寄せ合ってひそひそ話してて。その後で霧島くんが何か本買って元生徒会長に渡して。店を出る時よ、手、握り合ってたのって。自動ドアでするする出てったよ」

「ちょっと待て。その本屋、もしかして『佐川書店』じゃないか？」

「名前分からないけど、駅前のアーケードに並んでいるところよ」

阿木がぎょとんとして答える。乙彦は割って入った。これは語らざるを得ない。

「あの本屋は俺の中学時代の親友の家なんだ。俺のうちもあの辺でしょっちゅう二階の部屋に上がって遊んだりしてるんだが」

「関崎くん、それほんと？」

清坂が首をかしげながら尋ねてくる。別にその日、雅弘の家にはいたわけではない。ただ話の舞台が幼馴染の弟分宅と来れば何か一言口出ししないではいられなかっただけだ。

「ああ、今そいつは青潟工業に行ってるんだがな」

誰もそんなことに興味なさげな顔で聞き流された。少々むっとくるが仕方がない。

「それで、なんだ。阿木、その新旧生徒会長同士がなかよくデートしていることについて誰かに話したのか？」

相変わらず定位置、清坂の隣りで騎士の役割を果たしている羽飛がにやにやしながら問う。

「まさか！ そんなことしたら更科くんじゃないけど大大スキャンダル勃発じゃない！ 私だってそこまで馬鹿じゃないよ。だって有名な話じゃない。元生徒会長の彼氏は元評議委員長の新井林くんだって。新井林くんって青大附中バスケ部をとうとう地区大会で決勝までもっていかせたという敏腕キャプテンとしても有名なんだけど」

またまた勢いよくしゃべり出す。阿木の頭の中にはいわゆる「かっこいい男子」の標本が納まっているらしく、そいつらの話をし出す時の目の輝きたるやすさまじいものがある。男子からす

るとこういう時の女子からは少し離れたい。

「確かにな。新井林そんなこと聞いたら頭から火噴くな」

「それどころじゃないと思うよ。たぶんばれたら最後、霧島くん明日の太陽拝めないんじゃない？ 明日の朝青潟川にどざえもんで浮かんでるよ」

「阿木さん、ちょっと、それ言い過ぎ」

手を打って大笑いしているのはそれまで黙って聞いていた泉州。なぜかこちらは乙彦の隣りにいる。

「だからここでしゃべってるんじゃないの。機密守られる環境だから」

「さあわからないよ。どこでばれるか」

「でも、たまたま本屋さんで顔をあわせただけじゃないの」

「いや、可愛い子にはやっぱりふらっとしちまうのが男子の弱さって奴か？」

先輩たちも含めて好き勝手なことを言い合いつつも、結局意見としては、

「まあ、見間違いじゃあねえの。霧島も女子が言い寄るのには不自由してねえだろうし、佐賀もまああれだけ新井林に命賭けられてたらんなことできねえだろ。阿木も明るい未来をだな、自分のためにもっと探しに旅立つべきだぞ」

羽飛ののんびりした声でまとめられた。正しい。その通り。阿木も男は顔ではないということをもっと認識した方がいいような気がする。たとえば阿木の隣りで話を無視して一心不乱に会計簿とにらめっこしている名倉を見てやってもいいんじゃないか……と思いきや、阿木はいつのまにか戦隊離脱して名倉の隣りでにこにこしながらその会計簿を見つめていた。やはり、それが一番だ。

——雅弘にちょこっと聞いて見るか。

まあ、気づくわけがないだろう。家の手伝いをしているのはわかっているがいつもレジにスタンバイしているわけではないだろう。

むしろ今回の話は、いろいろ誤解を生じていた佐賀はるみ元生徒会長との噂もこれであっさり拭い去られそうな気がする。それに越したことはない。やっぱりあれは立村の勘違いだったのだ。そうだ、そうだ。

ドラマチックな出来事も起きたとはいえ、気がつけばもう二学期も終業式。

「ええとだ、一応お前らに伝えておきたいことがあるんだが、いいか」

通知表は一学期と同様自宅に保護者名義で送付される。自分の結果を確認することは現段階ではできない。そんな中冬休み中の注意事項やら宿題やらを配り終えた後、麻生先生がおもむろに切り出した。いかにも重要そうに見せかけて語り出しても実はさほどたいしたことがないケースが多い。みな適当に聞き流している。

「二点ある。ひとつめは、冬休みの自由研究についてなんだが」

——きたきた、やはりまたグループ組んでとかいうのか。

それにしても切り出しが遅くないか。乙彦は夏休みの外部三人組でまたやるべきことをやるつもりでいるが、グループをこれから組む連中だっているだろうに。

「夏休みとはやり方を変更することにした。あの時は夏休みだったからな。さほどの苦労はなかったんだがさすがに年末年始だとお前らだけではなく親御さんだってたいへんだろ。兄弟がいるご家庭だったらもうてんやわんやだろう。だから貴重な家庭の働き手を自由研究で奪っちゃうのはまずいという判断のもと、やりたい奴だけやればいいのかという結論に達した」

驚きのどよめきが上がる。そりゃそうだ。

「先生、ちょっとその後出しじゃんけんみたいなのなんなの！」

古川がもちろん抗議する。もっとも他の連中は負担が減ってほっとしている様子なので強く文句言いたい奴はそうそういないらしい。

「こっちだってちゃんとしてグループ組んで予定立てようってたのにね」

「おいおい違う違う、古川、するな、って言ってるんじゃないぞ。希望者はがんがん出せ。ただおとつあんおっかさんの手伝いをしないで勉強にかまけるのはよくないぞってことなんだ」

「そりゃあおせちくらい作りますよ、ねえ？」

女子たちに声をかけるが誰も反応しない。おせち料理作らないのか。

「おせちでもピザでもラーメンでもなんでもいいんだが、勉強よりも大事なもんが年末年始にはいっぱいくっついてるんだぞ。それで俺たち教師陣もそりゃたいへんだってことで」

「先生たちが楽しみたいんでしょ。まあいいけど」

つっこみあいつつも自由研究が強制ではないことに一部、安心感が漂ったのも事実だった。さてどうするか。確かに年末年始は親の手伝いで忙しいことは確かだ。もちつき機でもちを作って丸くまとめねばならないし、買出しだって一仕事だ。

「それともうひとつ、これは予告なんだが」

あっさり麻生先生は話を切り替え、今度は重たい声を出した。

「少し先になるが、今休んでいる、宇津木野のことなんだがな」

はっと疋田が顔を挙げた。女子たちが顔を見合わせた。江波たち吹奏楽部連中が、

「ああ、どうしたんだろな」

とやり取りしている。

「実は来年を持ってこの学校から離れることになったんだ。厳密に言うとなんか転校という形なんだから、なにせ学校がなあ」

言葉を選ぶように、

「イタリアの音楽学校へ進学することに決まったそうなんだ」

今度はいきおいよく「えええーっ！」との絶叫が挙がった。

乙彦は疋田の方をそっとのぞき見た。黙って頷いていた。

——知っていたんだろうな。

麻生先生が語るによると、

「あの合唱コンクール以降、宇津木野も精神的にかなりしんどい状態が続いていたらしいんだ。まあお前らに迷惑をかけてしまったということもそうなんだが、やはりあれだけピアノが好きだとまあそのなんだ、もっと本場で勉強したいとかなんとな。世の中悪いことがあればいいこともあるもんで、気がつけばとんとん拍子で話が進んだそうなんだ」

「まじっすかそれ！」

女子たちよりも嘆きが激しいのは吹奏楽部集団である。乙彦も最近ようやく吹奏楽部がA組の隠れ勢力と化していることに気づいたのだが、奴らの音楽陶醉ぶりは半端ではない。うっかり触れたらやけどしそうな燃え方だ。中でも江波の目の輝きは半端ではなく、本来はこいつが指揮者やるべきだったのではと思わざるを得ない。宇津木野を「ピアノの女神様」と称えるのもこいつだった。

「宇津木野もいろいろ準備があるとかで、今は青潟にいない。しばらく専門の学校で準備をしてから来年の春に旅立つ予定と聞いた。この学校に挨拶することも難しいので申し訳ないと話していたが、なんらかの形で挨拶はしたいと言伝されたよ。なあ、疋田？」

疋田は泣いていなかった。こっくり頷いたのみ。ちらと立村の方を見た。

合唱コンクール以降、宇津木野の席が空いたままだったのが気にならないわけではなかった。ただ一ヶ月も経てばいつものまにか気にならなくなってくるもので、その席空白すらもデザインに見えてくる。青天の霹靂ともいえるその情報に、みなただ驚くばかりだった。

「ってことはなんだ？ どっかコンクールに出るのか？」

「青潟の先生じゃあ無理なんだろう。どっか偉い先生のところに内弟子か？」

「そういやあ宇津木野さまはイタリア語とドイツ語も堪能とおうわさ」

「そりゃあ、オペラはイタリアだし、ワーグナーもドイツ語だもんなあ」

あまり説得力のないながらも熱い語り続ける吹奏楽部連中。乙彦はぼんやりと、音楽室で宇津木野が演奏していた「モルダウの流れ」の清流たる音色を思い出した。難しいことはよくわからないが、彼女の伴奏で歌ったひと時は決して忘れられるものではなかった。

しばらく麻生先生が担任らしい注意ごとを伝達した後、

「じゃあお前ら、よいお年をとりたいところだが、明日から三日間、年明けから五日間は冬期講習だ。忘れるなよ、クリスマスケーキも餅も食べすぎるなよ、いいな！」

がっくりきそうな言葉で締めた。もちろん全員参加に決まっている。

生徒会の集まりはとりあえず今日はなく、明日改めて冬期講習後集まろうということで話がついていた。ゆえにカラオケでいつもの三人歌いまくることができそうなのは今日のみ。乙彦はD組へ名倉を迎えに行き、そのままB組から現れた静内と合流した。

「さてと、やっと自由の身！」

人前はばかり静内がコート姿で思い切り両手を伸ばした。ひとつまとめの髪をぱらっとはらった。

「甘いぞ。冬期講習どうするんだ」

「嫌なこと思い出させないでよ。それで関崎、今日はもちろんこれから、行くでしょ」

「もちろんだ。今日逃したらチャンスがない。それに自由研究も」

一応グループで研究という義務はないかもしれないが、やるなとも言われてない。だったらせっかくだ。やるしかないというのが乙彦の結論だ。静内もにっこり笑い、

「じゃあ今日は作戦会議も兼ねて、行きますか！ 名倉もどうする？」

「もちろん参加だ。これからいやというほど関崎と顔をあわせるはめになるがしかたない」

ひどい言い草だが否定はしない。三人横並びになりへらへらしゃべりながら歩いていった。しばらく静内と昼休みおよび放課後の図書館集いは減っていたしなかなか語る機会も減っていた。一時期のむっすりした表情から比べるとだいぶ静内も硬い表情をほぐしているような気がするし、多少はその、プライベートな話も出てくるのではとも思う。いまだに静内は自分の家族、および他の仲良し友だちについてしゃべることがない。そういう性格なのは分かっているが、多少はそろそろほころびが出てきてもおかしくない時期だ。

「関崎」

背中に声をかけられた。振り返った。生徒玄関のすのこに駆け寄ってきたのは立村だった。名倉と静内もげげんそうにこちらを見た。

「どうした立村」

「少しだけ時間、いいか」

「いやこれから、こいつらと出かける予定があるんだ。急ぎでなければまた後で連絡するが」

立村がまじめな顔でこちらを見ている、同時にふたりも立村を厳しい目つきでにらみ付けている。決して悪気があるわけではないのだろうが、立村がすっかり立場なく戸惑っている様子が哀れだった。

「明日ではまずいのか」

「そうなんだ」

——あの、ことか。

葉牡丹の花をちらと思い出す。

「ほんの少しでいいんだけどさ。正味十分程度でいい。音楽室で頼みたいことがあるんだ」

「十分ですむ内容なのか？」

「たぶん大丈夫」

「いったいなんなんだ？」

理由を問いたかった。立村はちらと名倉と静内に視線を走らせ、
「終わるまで音楽室の前で待っててもらえば、ありがたいんだけど。変なことじゃなくてただ、ピアノのことで関崎にどうしても頼みたいことがあるんだ」
じっとふたりを見据えふかぶかと礼をした。

三階の音楽室に向かう途中、清坂と羽飛のふたりとすれ違った。図書館に向かう途中のようだった。乙彦たちを見つけて笑顔で手を振り近づいてきた。

「あれ、ふたりともまだ学校にいたの？」

「うん、音楽室に用事があるんだ」

「ピアノ弾かせてもらうの？」

「そうじゃないけどいろいろと」

立村は言葉を濁した。清坂もそれほど突っ込まず傍らの羽飛に向かって、

「じゃあ、あさってだね」

ささやきかけた。羽飛も立村と清坂を交互に見やりながら、

「ちゃんと腕磨いとけよ。古川にもピアノきちんと準備しとけて言っとくからな」

からかい調子で呼びかけた。指先をてろてろと動かしながら。

「いいよ、どうせ明日講習あるから学校に来るし」

「立村くんがよくても私たち生徒会室に行かなくちゃダメなの！」

目の前にもうひとりの生徒会役員がいることによろやく気がついたらしくふたりは乙彦に向かい、

「関崎くんも明日来るでしょ」

問いかけた。

「もちろんだ」

「来年の合宿のこともあるし打ち合わせしようね。じゃあね」

いつもとは違いあっさりとした。拍子抜けした。てっきりいろいろと根掘り葉掘り聞かれるのではないかと予想していたが羽飛がいるのもあってそれほどくっついてこなかった。いや、もう夏休みの頃とは意識も違っているのだろう。乙彦に取っては好都合なことでもある。余計な気を遣わないですむ。

ふたりの背に手をあげて見送った立村はすぐに、

「さ、行こうか」

促した。静内と名倉は結局、玄関ロビーで待つとのことではこなかった。ほとんど話もしたことの無い立村とはなじみにくかったのだろう。

「いきなりなんなんだ。そろそろ話してくれてもいいだろう」

廊下を歩きながら立村にしつこく尋ねるも全く話そうとしない。十分程度で終わることならさっさと伝えてくれてもいいものを。嫌な予感がちらとして、

「まさか誰かに呼び出しを頼まれたのか」

確認しても、

「否定はしないけど」

で流される。

「古川あたりか」

「違うよ」

はっきり否定した。

「古川さんともしすれ違ったら今のところは知らん振りしてもらいたいけど、もうついたな」
音楽室前に到着した。扉を細く開け、そっと覗き込むようにして立村が乙彦を誘った。

「さあ、早く入って」

静かな音楽室に足を踏み入れた。吹奏楽部の練習も今日はこちらではないらしい。肥後先生をはじめまだ誰も来ていないようだった。

「誰もいないな」

「いや、どこ行っただろう」

きょろきょろする立村を横目に、乙彦は目の前の大きなグランドピアノを見つめた。つややかに輝いているそのピアノは、蓋が開いたままだった。

「お前、やはり弾くのか」

「なんのために。まさか」

かすかに首を振りながら立村は抱えていたコートを机の上に置きかばんを重ねた。

「俺じゃないけど、関崎にしかたのめないことがあったからさ。でもほんと、どこいったのかな。待ってるって話してたんだけどな」

「だから誰とだ」

「あとで説明するよ」

埒の明かない会話を交わしつつ時間をつぶした。

「立村は冬休みどうする予定なんだ？」

「今年はどこも行かない。年明けたらすぐ講習もあるし、規律委員会の準備が想像以上に忙しい。南雲の手伝いもしなくてはならないしさ。関崎は？」

「俺も年末年始はバイトも休みだし、親戚まわりするのがせいぜいだがな」

本当は今年の講習が終わった昼過ぎに、片岡宅で内川を迎えてのおくればセクリスマス会が行われる予定だった。もちろん他言はしない。水鳥中学先輩後輩が雁首そろえてラーメンかもつ鍋かとにかく何かを食わせてもらえるはずだ。ちなみに片岡は今年実家に帰らないらしい。内川の受験勉強が心配だからというもっともらしい理由がある。さらにこれは乙彦の耳にしたトップシークレットだが、その彼女に会うために泉州が冬休み中何日か泊まりにいくらしいとも。いろいろ秘密の多い奴ではある。

「立村、あれからずっとピアノ続けているのか」

ちろちろグランドピアノを眺めている立村を見かねて乙彦は奴の背中を押した。嫌がらずに立村も立ち上がり、近づいて鍵盤に見入った。照れくさそうに笑った。

「続けてる。なんとかね。この前の期末試験で文系順位上がらなかったらやめさせられるところだった。助かったよ」

「じゃあ、誰もいないし弾いてればいいじゃないか」

「それはまずいよ」

あっさり立村はピアノから離れ、かばんに手をかけた。

「今はね」

扉がゆるゆると開いたのに気づいた。立村と同じタイミングで振り向くと足田が腕に週番用の緑腕章をつけたまま現れた。息を切らしている。立村が気がついたように何度も頷いて、

「そうだったよな、足田さん今日帰りの週番だったんだ」

「そう、忘れてたの。遅くなってごめんなさい」

いかにも規律委員らしい会話を交わした。小柄な足田は立村と顔を合わせて微笑みながら、
「関崎くんにはもう話した？」

確認を取っている。

「いいや、足田さんからのほうが正確に伝わると思って」

「そうね、そのほうがいいな」

足田は立村に席につくよう手で合図をし、乙彦の元へ駆け寄った。穏やかな笑顔のまま、腕章を外した後、

「関崎くんにお願いがあるの」

言いながらかばんから大きなバインダーを取り出した。

「頼み？ 俺は立村から正味十分程度と聞いていたんだが」

「間違っていないよ、その分数で」

よっこらしょ、とつぶやきながら、さっと乙彦に手渡した。開いて見るとファイルには楽譜に赤いサインペンにて濃く、歌詞らしきものが綴られていた。思わず顔を挙げて問う。立村は乙彦を座ったまま静かに様子見している。足田はわくわくが止まらなさそうな表情でもって、ゆっくりと告げた。

「『モルダウの流れ』なんだけど、この曲を今、私の伴奏で関崎くんに歌ってほしいの。そしてその歌を録音させてほしいの。あつ子ちゃんに渡したいの」

「宇津木野さんのことだよ」

しばらく硬直していたが、立村が助け舟を出してくれた。

「疋田さんが、イタリアへいく宇津木野さんに、彼女なりのプレゼントを用意したくて、今日関崎に協力してもらおうというわけなんだ」

「俺が、何を協力するんだ？」

今ひとつ事情が把握できず乙彦も何度かふたりの顔を見直した。乙彦の驚きもすでに計算済みといった表情でふたりは穏やかに微笑んでいた。

「簡単なことだよ、関崎にとっては。そうだろう、疋田さん」

疋田も立村からバトンを受け取りまたこくこく頷いた。

「そうなの。関崎くん、いきなり呼び出してごめんね。私も本当はもっと早く相談したほうがいいなって思っていたんだけど、あまり早いと今度はこずえちゃんが張り切っちゃってみんなで合唱とか言い出しちゃうんじゃないかって思って」

「いやそのほうが餞別としては自然なんじゃないか？」

こちらからそれを言おうとして先手を取られたようなもの。ばつが悪そうに疋田が俯いた。また立村がバトンを受け取る格好となる。

「合唱も悪くないけど、でもさ、音楽的にはどう思う？ 客観的に考えてさ」

「客観的ってなんだそれは」

「言い方変えると大げさかもしれないけど、芸術として、どうかなって」

「ますますわけがわからないが」

ふたりの言いたいことがまだ掴みかねた。実際、昨日の今日でなければクラス全員で校歌を合唱でもして宇津木野への餞別というのも悪くないんじゃないかという気がする。A組の連中だって宇津木野のことをそれなりに思い遣っていただろうし、あの合唱コンクールから一度も顔を合わせていない相手がいつのまにか風のように姿を消すことに寂しさを感じている奴だっているだろう。本当は無理してでも時間を作って宇津木野が学校に来てくれれば丸く収まるような気もするが。

「これ、宇津木野さんのことを悪く言うわけじゃないんだけどさ」

立村は乙彦の隣りへ席を移動した。

「完璧なハーモニーを求める人にとって、不調和な音楽を聴かされるのって辛いんじゃないかな。もちろん、みんなの思いやりは感じるだろうし感謝もするかもしれないけれどもひとつの音楽として、どう感じるかとなるとやはり違うものがあると思うんだ。わかるかな、この言い方」

「まどろっこしいがつまりあれか。宇津木野はただがなっただけの合唱だと心が動かないというわけか」

かなりばかにした言い草にも聞こえるが、合唱コンクール後の病院待合室で古川と語った言葉を重ねればなんとなくたどり着く答えだった。今度は疋田が顔を挙げた。

「立村くんが代わりに話してくれたようなものだけど、そうなの。あつ子ちゃんは音にもものすご

く拘りがあるの。私よりも、たぶん誰よりもはるかに。だからみんながもし、合唱のプレゼントをしてくれても申し訳なくなつて、きっと辛くなっちゃうと思うの。私も少しはその気持ち分かるし、かえってうちのクラスみんなを傷つけちゃうよりは私からあつ子ちゃんに、絶対よろこんでもらえるプレゼントをしたいの」

「んで、それがなぜ、俺の出番になる？」

「関崎くんの歌声を、あつ子ちゃんはとっても気に入ってたから」

ふっと疋田が厳しい顔を見せた。

「変な意味じゃないよ、関崎。お前の歌が宇津木野さんの音楽感性にぴたりとはまってたってことらしいんだ、そうだろう、疋田さん」

疋田は立村に感謝の眼差しを投げ、次いで乙彦にも、

「関崎くん、お願い。今回だけでいいの。あつ子ちゃんのために一度だけ、『モルダウの流れ』を歌ってほしいの。私も関崎くんの歌う声の響きが素敵だと思ってる。あつ子ちゃんも一度、関崎くんと音楽室であわせたことあったでしょう。あの時本当に伴奏していて楽しかったって目を輝かせてたんだもの」

「別に俺はカラオケでしか歌っていないんだが」

「そういう問題じゃないだろ。関崎。いいかげん年貢の納め時だ。疋田さん。いつまで話をひっぱってても埒明かないからさっさと弾いて終わらせてしまおうか。勢いで歌わせて、必要であればもう一回くらい繰り返してそれでよしとしようよ」

かなり強引な立村の締めを食らい、疋田も、

「そうね。まずは弾くね。関崎くん。リハーサルやりましょ」

つられるようにいそいそとグランドピアノの前に座った。楽譜はない。

「おい、伴奏の楽譜はないのか」

「大丈夫、暗譜してるから。それに私も関崎くんと『モルダウの流れ』合わせるのものすごく楽しみにしていたの。ね、始めましょう！」

明るく響く声で疋田が誘い、立村はテーブルに録音用ラジカセの準備を始めていた。わざわざ単一電池を二本用意している。電源からコンセントで持ってくればいいのにとも思ったが、

「いやいいんだ。どちらかというと電池だけで録音したほうが音がよくなるんだ」

本当なんだかどうなのかわからないことを立村は答えた。どうやらすべてにおいて最高級を求める宇津木野へのこだわりらしい。

乙彦が返事する前に「モルダウの流れ」を奏で始めた疋田。それを追うように立村が右手を挙げて乙彦を促す。心地よいメロディ、宇津木野と合わせた時とは違う柔らかな音色だった。もちろん立村とは……比較にならないというのはあえて口にしない。武士の情けだ。乙彦は大きく息を吸い込んだ。唇にはまだ三ヶ月前に覚えたメロディが残っていた。

「ありがとう、関崎くん。少し早いテンポで弾いたんだけど次は本番。ゆっくりふくらませるように弾くから、合わせてね」

満足げに手をたたきつつ、疋田がにこやかに指示を出す。お気に召していただけたようだ。立

村も様子を見守りつつ、カセットテープを改めてラジカセに納めていた。その間乙彦は窓に駆け寄り、すべてを開け放った。外からひやりとする風が吹きかかるがそれほど強くはない。呼吸しやすくなった。ピアノのそばからふたりが訝っている。

「悪い、歌う間だけ窓を開けさせてもらいたい」

「いいけど？」

「なんだか喉が詰まるような感じがするんだ」

乙彦は二人を前に片手で窓を指した。

「お前たちが宇津木野に最高の音楽をプレゼントしたいというのなら、俺も出来る限りベストコンディションで捧げたい気持ちはある。あくまでも俺のカラオケレベルの喉で、ということだが」

立村が近づいてきた。そっと横からのぞきこむようにして、

「ありがとう。きっと伝わる」

小声でささやき、再度疋田さんに呼びかけた。

「始めようか。一回で決めよう」

「もちろんそのつもりよ。関崎くん、よろしくね」

「こちらこそ、頼んだ」

三者それぞれ息を整え、先に立村が録音ボタンを押した。同時に指揮者のごとく両手を上げてピアノ側に手を下ろした。同時に流れ始めた音色に合わせ次に乙彦と目と目を合わせた。手を見つめる必要はなかった。タイミング外さず乙彦は冬の風吹き抜ける音楽室の外へ向かい、自分が一番心地よく感じる声をそのまま乗せた。リハーサルで歌った時よりもはるか遠くへ声が届いているようだった。

かちりと立村が停止ボタンを押した時、ふと扉の向こうからかすかな拍手の音が聞こえた。音楽室には乙彦たち三人しかいないはずなのに、なぜか。

「誰かに聞かれてたのかな」

「どうしよう。外に聞こえてたかも」

「別に悪いことしているわけではないが迷惑かけていたら謝る必要あるな」

気のせいかもしれない。一回で疋田のOKも出て、三人それぞれ握手を交わし労い合った。余計な感想や出来不出来の評なども一切なく、ただ全力尽くした後の達成感らしきものが身体に満ち溢れていた。取り急ぎ窓を閉め鍵をかける。疋田がグランドピアノのふたを閉じ立村がラジカセからカセットを取り出し片付ける。感想を交わすよりもお互いの表情だけ見ていればそれが納得行く出来かどうかは伝わってくる。宇津木野とあわせた時よりも軽い音に聞こえたけれども二回繰り返せばそれが疋田の個性とつながってくる。

「今回は練習する暇がなかったが、また別の機会にでもこういう話があればぜひ声をかけてくれないか」

とりあえずは礼を伝えた。十分程度で終わると思っていたら三十分も経ってしまっている。もう静内と名倉もとっくの昔にしびれ切らして帰ってしまっているだろう。あとで何かおごろう。

待っていたらいたで謝らねばならない。乙彦は立村と疋田に改めて感謝の意を伝え、かばんをぶら下げ扉を開いた。と同時にさっき響いたものと同じ拍手が、次はその倍のふくらみを持って廊下いっぱい響き渡った。

静内と名倉がふたり、コートを着たまま仲良く待っていた。

「関崎、おつかれ。さあ行こ！」

静内が親指をぐいと立てて乙彦の目の前に突きつけた。

「続きはいつものあの場所だな」

名倉もにこりともせず、関崎の肩をぐいと掴んだ。

「お前ら、玄関に居たんじゃ」

「関崎が音楽室に呼び出されたってことは、歌わないわけがないと静内が言い張るから着いてきた。それだけだ」

そのまま名倉は乙彦をぐいと前へと押し出した。自然と静内と隣り合う格好となった。思わず横を向くと静内はいたずらっぽく笑みを浮かべ、

「さあさ待った待った、これから思いっきり歌うぞー！ やなこと全部ぶちまけちゃうぞー！ とことん付き合いなさいよ、関崎！」

肘でぐいと突いた。

青立狩 高校一年・二学期編 エピローグ 片岡邸忘年会（1）

冬期講習は年内三日間行われ、その後年明け三が日後に五日間、合計八日間行われるカリキュラムとなっていた。学校が始まるのは一月下旬なのでさほど勉強に時間を食われるわけではない。ただ夏休みと異なるのは講習に参加する連中が少なめなこと。故郷へ里帰りとか、海外の長期旅行、その他いろいろと家庭的な行事のからみが多いためとも言われている。ちなみに乙彦は実に平和な冬休みを送る予定でいる。旅行の予定もない。

「さてと、関崎、これで今年はお疲れさまだがどうするんだ今日は」

藤沖に誘われたが本日は断らねばならない。

「生徒会か？ 少しくらいなら待つぞ」

「いや、いいんだ。今日はこれから別の用事があるんだ。中学の後輩と会っていろいろと語るつもりでいるんだ」

嘘は言っていない。そばで片岡が知らん振りして荷物をまとめている。

「そうか、残念だな。いろいろと俺も相談したいことがあったんだが」

「電話でもよこしてもらえればいつでも行くが」

「いや、俺も今年はそれこそ家の手伝いでままならない。麻生先生のお言葉通りだ。餅つき機を洗ったり、餅を丸めたり、部屋中に並べたりといろいろだ」

どこの家も同じことをするのだろう。乙彦は了解して教室を出た。

「よいお年を！」

生徒会室でもほとんど同じやり取りを交わし、年末の挨拶を行う。

「関崎くん、お正月明けの講習は来るよね？」

「ああもちろんだ」

「だったらその時の相談でもいいかな、ね、貴史？」

この日は清坂と羽飛しかいなかった。講習中は打ち合わせを行うはずでいたのだが気がつけば顔を出しているのは乙彦含む三人のみ。それぞれいろいろ休み中は用事があるようだ。清坂もさほど困った顔はしておらず、副会長の羽飛と相談しつつ進めている。

「合宿といってもきっと話し合いばかりになると思うし、それほど面白いこともないと思うけどなかなか語り合えないから、こういう時を利用しようね」

「俺も賛成だ、それと羽飛」

ちょうど三人だけだから安心して尋ねられることもある。特にこの二人の場合は、

「生徒会とは離れるんだが、立村の様子、大丈夫か」

ふたりが顔を見合わせた。やはり何かがありそうな気配がある。

「関崎くん？」

「講習、別だったのか」

外部生の場合は別教室で受けることも多いので実際立村と顔を合わせることは少ない。ただ、他の連中やたまたま教室で顔をあわせた難波や更科、天羽たちが暗い顔をして、
「立村、またあいつ変なことやらかさねばいいんだが」

などと相談しているのを小耳に挟んだりもした。さすがに生徒会役員以外の場で割り込む気にはなれなかった。

「そうなんだ、俺もちらちらとあいつの様子がおかしいという話を聞いてはいたんだが、実際当人と顔を合わせられないから状況がつかめない」

「そっか、そうだよ。こずえはなんか言ってた？ あっそっか、関崎くんこずえとも顔合わせてない可能性大かあ」

清坂は書類を片付けながらまた羽飛と顔を合わせて何かを促した。

「今の段階ではまだ私たちも何があったのかはわかってないんだけど、たぶん精神的に厳しいことが起きたんじゃないかなって気はしてたんだよね。貴史もそう思ったでしょ」

「ああ、俺たちもこの前、古川んちでクリスマスパーティーっつうものをやったんだがその時、あいつかなり落ち込んでたのは事実なんだわな」

「やはりか」

立村とは昔からの知り合いであるふたりも、やはりそれなりに勘付くものがあったのだろう。こういう時しょっちゅう顔をあわせる古川や立村自身と接触がないのが残念だ。

「たぶん、あれかなってことはちらっと聞いてるんだけど。ただまだ確証が取れてないの。あまり隠し事したくないから言っちゃうけど、たぶんそれが本当だったら立村くんが落ち込むのも分からなくはないかなってことがあるんだよね」

清坂は真剣な眼差しを乙彦に投げた。

「たぶん年が明けたらはっきりすると思うの。それまで待っててもらえる？ きっと最終的には関崎くんにも協力を仰がなくちゃいけないことだと思うから」

「わかった。その時は頼む」

「おうさ、じゃあな、よいお年をだな！」

今年最後の生徒会室から出て、今度こそ生徒玄関へと降りた。

——さてと、今日は思い切り食うか！

片岡の家にて行われる「やきそば食い放題忘年会」は本日の昼過ぎだった。

いったん家に戻り、内川を迎えに行き、そのまま着替えもまとめて持ち片岡宅へ向かう。一泊することはすでに両親にも伝えてあり、土産用の懐中汁粉も用意済み。三人ならせっかくだし泊まって男の子会するのも悪くないのでは、という桂さんの提案だった。

「食べ物だけは任せろよ！ きれいどころは用意できねえがお前ならそれでもいいよな」

——別にきれいどころはあまり興味ないが。

男子にとって大切なことはひとつ、腹が満たされるか否か、この一点に尽きる。

「関崎先輩！」

一目散に家へと戻り、すぐに着替えをまとめたボストンバックと土産ものをぶら下げ、すぐ近くの内川宅へと向かった。どうせ学校へはバスで行けばよい。自転車の方が早いのはわかっているが、桂さん曰くどうせ帰りは車で送るのだから手ぶらで来いという指示があったためだ。

内川が笑顔で階段を駆け下りてきた。やたらとでかいリュックサックを背負っている。遠足か、いやいや修学旅行を思わせる巨大な荷物だった。

「お前、なんて荷物背負ってるんだ」

「はい！ 今日片岡先輩のもとで徹夜で勉強しようって約束してるんです！」

「勉強？」

そんな話は片岡から全く聞かされていなかった。第一乙彦も勉強道具なんて全く持ってきていない。たぶん片岡だってその気はないんじゃないかと思う。

「ではこの荷物はなんだ」

「教科書と、辞書と、参考書と、それから着替えと」

「一泊だけだぞ」

「でも、やっぱり迷惑かなと思うんで、枕とか、あとテープとか」

どう考えても無駄が多すぎる。乙彦は玄関でリュックサックを下ろさせて、無理やり中を確認した。しわくちゃなパジャマやら雑誌やらがぐちゃぐちゃに詰め込まれている。

「内川、お前、一応お前は『伝説の生徒会長』なんだからな」

しゃがみこみ、乙彦はひとつひとつ畳みなおしてかばんの奥から詰め込み直し始めた。旅行バックの詰め方のコツや畳み方をどうも知らないらしい内川に、ひとつひとつ説明を行いながら、「ほら見ろ。こんなに隙間が空いただろ。こんな巨大なリュックサックでなくても十分間に合うだろ」

そう言ってみるも逆効果であることに気づいたのは次の瞬間だった。

「先輩ありがとうございます！ まだ持っていきたかった雑誌があるんです！」

いそいそと階段を駆け上がり戻ってきた内川、かかえていたのはこれまた大量のテレビ情報雑誌だった。参考書より圧倒的な分量であることに代わりはなかった。

「お前、今日本当に勉強なんかする気あるのかよ。まったく」

軽く頭をはたいてやり、乙彦は改めて内川を誘った。

「さあ行くぞ。桂さんがうまいもの用意してくれてるって話だから、ちゃんと心から礼を言うんだぞ！」

のんびりバスで向かい、到着したのは一時半過ぎだった。

「お前ら遅かったなあ。ほら、上がった上がった」

いつものオートロック玄関も桂さんがちゃんと待っていてくれたので手間も要らなかった。ふたり一緒に挨拶してエレベーターに乗り込む。

「司がもうあっちこっちうろろうして落ちつかねえからなあ。今日のはのんびり泊まってけ。それとどうだったウッチー、ちゃんと通信簿持ってきたよなあ」

「はい！ もちろんです！」

いつものまにか桂さんからは「ウッチー」と呼ばれるようになっている内川。

「司もそれ心配してたんだ。今日はそれなりにやるからな。ああ、あと関崎くん、お前さんはふたりが勉強している間俺とのんびりビデオでも見てようぜ。用意しといたぞ好きそうなもんいろいろな。ハリウッドアクション物とか好きだろ」

大好物このうえない。いつもテレビで放映されるのを待つだけだが。

「じゃあ準備万端だ。まずは俺のお手製焼きそばを食らうがいい！」

見るからに目を輝かせて迎えてくれた片岡だが、やはり内川の前ではかっこつきたいのだろう。少なくとも青大附高のA組教室では見せない顔で、

「待ってたよ、楽しみにしてたんだ。内川くん、さあ僕の部屋においでよ。あと関崎、その辺に適当に座ってて」

なんたるこの差別。むっとしなくもないが乙彦なりに片岡の弱みを握っている部分もあるのでさりりと流す。部屋に入りしっかり整えられた室内のテーブルに着き、たっぷり野菜と肉が入った焼きそばを一気にいただくことにする。野菜がブロッコリーやらトマトやら謎のものも入っているが口に押しこんでみると意外にさっぱりしておいしい。ソースが決め手なのだそう。

腹がくちくなくなったところでソファへ場所替えをした。それぞれ改めて梅ジュースを一杯ずつもらい桂さんの

「じゃあお前ら、俺はちょっくら買出しに行ってくるから悪させんで遊んでろよ」

の一言でもって送り出し、一息ついた。

「それでなんだけど、内川くん」

いくら親しくなっても片岡は「ウッチー」とは呼ばないらしい。口元のソースもしっかり拭いているしはみがきも済ませている。悪いが学校で片岡がそんなことするの見たことない。さわやかな笑顔を振りまいている。

「昨日も電話で話したけど、結局成績はどうだった？」

「はい！ おかげさまでこんなに四が増えました！」

「四？」

見せたくてうずうずしているのか片岡はリュックの中から大判の封筒を取り出した。水鳥中学

の成績表はA4版の二つ折りでかなり大きめだ。てらいもなく片岡に差し出した。

「どれ、見せて」

丁寧に受け取り片岡がさっと開く。表情を変えずにじっくり見入る。親のようだ。

「英語が伸びたね。五になってる」

「そうなんです、生まれて初めてです！ 九十点獲れました！」

念のため内川には、

「俺も見ていいか？」

尋ねてOKをもらい覗き込んだ。やはり弟分気にかかるものがある。

——おい、大丈夫か。一学期、内川の成績ってせいぜい三じゃねえのか？ 五は社会だけだぞ

内川が「四が増えた」と喜ぶのも無理はない。なにせ一学期内川の成績は見事に三の嵐、数学にいたっては二とかも混じっている。さすがに一がないのは救いかもしれない。二学期の成績は確かに三だったものが四に上がったり、それこそ英語が二段飛びの五になったりしていてそれなりに努力は何える。そうなのだがしかし、

「内川、本当に厳しいことを言うようだが」

これは水鳥中学の先輩として言うべきことを伝えたほうがいい。

「青大附高の試験を考えるに、これはかなり大変な状態だぞ。俺も受験する時は人のこと言えないが」

言いかけたところを片岡が遮った。

「関崎、少し黙っててくれないか」

またあの、学校では絶対に見せないお兄さんモードに切り替えている。やれやれだ。

「内川くん、すごいよ、よくやったね。僕もこんなに劇的に成績が伸びてるなんて思わなかったんだ。英語が五、ってすごいよほんとに！」

よくよく見ると片岡の奴、涙ぐんでいる。何度も頷いている。そのままの泣き笑いした顔のまま、

「大丈夫だよ、ほんとに大丈夫、きっと青大附高に受かるよ。こんなにがんばってるんだったら。今日も勉強道具持ってきてくれた？」

語りかけた。ここまで喜ばれるとは内川も思っていなかったのか慌てて、

「は、はい！ 今から出します」

リュックサックをひっくり返した。取り出したのは行きがけに詰め込みまくった雑誌の山と、教科書一式。確かに無駄ではなかった。見るに見かねて乙彦も出すのを手伝いテーブルに並べると片岡は、

「それじゃ、少しだけやろうか。悪いけど関崎、少しふたりで部屋に籠っているからここで待っててもらえるかな」

ずいぶん和高飛車な言い方でもって乙彦に告げた。

「ビデオは好きなの見てていいよ。それと飲み物も冷蔵庫から好きなの飲んでていいからさ。それじゃ、内川くん」

「はい、片岡先輩ついていきます！」

——忘年会のはずが勉強会でお前ら本当に楽しいのか……。

妙にテンションが高い内川も片岡にふらふらくっついていき、扉はぱたりと閉められた。残された乙彦はひとり、残りの梅ジュースをやけっぱちで飲み干した。

——この姿を内川の前では保ちたいから、藤沖をはじめとする奴らには内緒にしているんだろうな。

さりげなく泉州にも探りをかけてみたが、内川の家庭教師代わりになっていることについてはばれていない様子だった。まあ泉州にかかっては内川もおびえてしまうのは想像がつくし、片岡だってあんなお兄さん面を保つことは難しいだろう。

——正直青大附高に合格できるかどうかはほぼ九割がた無理だと思うんだが。

もともと狭き門であり乙彦が受かったのは奇跡中の奇跡。そう考えると胸にもやががかかるようなものもあるのだが、今はそんなこと考えている暇などないんだろう。冷静に成績表の中身を考えてみれば三から四に挙げるというのも結構大変なことではある。英語が五というのも、水鳥中学の英語テストレベルを考えればちょこっと努力するだけでなんとかなりそうな気はする。片岡が内川のやる気を引き出したことについてはお見事というしかない。

——せめて公立高校は一ランクくらい高いところ狙わせてもいいってくらいにはなるだろう。内川もそうだが片岡も、これで少しは自信がついたんだろうな。

クラスでのみそっかす振りを知るだけに笑いたいのをこらえるのが辛いのだが、それもまたよし。片岡たちがどういう勉強方法を取っているのか興味もあるけれどここは静かに見守ることに決めた。手元のみかんを皮剥いて袋ごと口に放り込んだ。

戻ってきた桂さんと約束どおりハリウッド・アクション映画のビデオにエキサイトしているうちに片岡たちも勉強の世界から戻ってきてくれた。時期はずれのクリスマスケーキを仕入れてきた桂さんがケーキを切り分けてくれたり、そのあとなし崩しにもつ鍋パーティーに突入したりわいわいがやがやしているうちに、いつのまにか日付は替わっていた。

「お前らも早く寝ろよ。てか、関崎くん明日のバイトはどうなんだい？」

「昨日でもう仕事納めです」

青大附高の講習が終わるまでは休めない「みつや書店」だが、なんと来年は学校が始まるまでしばらく長期休業だ。あまり喜んではいけないことなのだがゆっくり眠れることはそれなりにうれしくもある。

「じゃあ、適当にのんびりと語るなり寝るなりしてろよ。ん？ もう、ぶっ倒れている奴が一名いるな。おーい、ウッチー」

内川はすでに、川の字に敷いた布団の中で安らかな寝息を立てている。勉強とおしゃべりと食い物とですっかり満たされているのだろう。

「ほんじゃま、司もまあ、適当なところで切り上げろよ。じゃあおやすみな。明日はせっかくだしどっか車で行くとすっか」

言い残し桂さんが出て行った後、片岡はゆっくりと扉を閉めた。音を立てないように。

「しかし桂さんよくあれだけ料理するなあ」

しみじみ感心した。ここまで乙彦が手伝ったのは皿洗いのみである。

「いつもああだよ」

「しかし半端なもんじゃないな。あの腕といいなんというか。料理人してたとか」

「どうなんだろう。俺もよくわかんない。気がついたらうちにいたんだ」

目の前ですとんと眠りこけている内川を見つめながら片岡は微笑んだ。すっかり楽なスウェットに着替えて自分のベットへ足を伸ばしている。乙彦も着替え終わりたたむだけたたんだ後片岡を見上げた。こういう機会はそうそうない。せっかくなので聞いておこう。

「片岡、もしよければ聞きたいことがあるんだがいいか」

「何を」

いったん言葉を飲み込むようにして片岡も答えた。

「泉州のことなんだが」

切り出したとたん、片岡は両膝を抱えて頭を埋め込み、その後顔を上げてため息を吐いた。

「もう、全部知ってるよな」

——ある程度は、と答えたほうがいいのだろうか。

もちろん泉州とは生徒会で一緒だし、あのグループ内では比較的話をするひとりではある。だんだん生徒会も微妙な派閥が見え隠れしてきて、なんとなく外部グループと元評議グループが一

緒に行動することが多くなっていた。ただし阿木は一応元評議ではあるけれども三年後期のみということもあって外部チームの仲間ではある。

あの期末試験後に聞いた内容も相当なものだったが、本当にすさまじい展開だったという……傷害事件とかなんとか……ところまでは耳にしていない。

「全部じゃないが、薔薇の花のことは聞いた」

「じゃあもう、わかってるんだよね」

片岡はまだ膝を抱えたまま、搾り出すような声でつぶやいた。

「それでも泊まりに来てくれたんだね、ありがとう」

——礼を言われたくて聞いたんじゃないんだが。

思わぬ片岡の反応に正直戸惑っていた。乙彦が確認したかったのはそういうことでは決してない。単純に泉州と片岡とのつながりに対して興味があっただけだった。これから生徒会活動を行うに当たって、片岡がもし泉州と仲がいいのであればそこらへんを通じてクラス女子ともなじんでもらえないだろうかとか、そのヒントがほしかっただけだ。決して片岡のしでかしたとんでもない過去を暴露したいとか、傷害事件を起こしたらしいあの彼女のことを掘り起こしたいとかそういうわけでは決してなかった。

「関崎、いいかな」

「ああ」

しばらく黙りこくった後、片岡は大きく息を吐いたのち語り始めた。

「今の自分の立場がどういう風に見られているかってことは、よくわかってるつもりなんだ。一度してしまったことを償うことなんて、本当は絶対に出来ない」

——そうは思わないが。

言いたいのを飲み込んだ。下手したら内川を起こすかもしれない。

「いろいろあって、俺は今こうやって青大附高に行かせてもらってる。すごく恵まれた立場なんだってことも自覚してる。してないように見えるかもしれないけど」

——してるんだろうな。

「俺は、まわりの人たちに許してほしいとはもう思ってないんだ」

片岡はかすれる寸前の声でつぶやいた。

「関崎が俺をなんとかしてクラスの中になじませようってすごく気を遣ってくれてることはありがたいと思ってるし、できたらずっと友だちでいてほしいって、そう願ってる。これ、泉州さんもおんなじなんだけど。たぶん泉州さん全部話してるよね」

——いや、肝心のところはまだなんだが。

「でも関崎、ほんとにそれ、無理しないでいい。ほんっとに、無理しないでいいから。俺はクラスで嫌われても、女子から気持ち悪がられてもいいんだ。ただ、俺のことを信じてくれた人たちだけが幸せになってくれたら、それでいいんだ。何にもできないかもしれないけど、そのためだったら、出来ることいっぱいしたい。それだけなんだ」

——だから、その薔薇の女子と。

言いかけそうになりやめた。なんだか間抜けだ。

「俺、自分でも馬鹿みたいなことしてると思う。やることなすこと子どもだとか、人の言うこと鵜呑みにしすぎるとか、いろいろ言われてるしその通りだと思うけど、内川くんみたいに俺のことをここまで信じてくれるんだったら、精一杯のことしたいんだ。冷静に考えて、正直厳しいってのは俺もわからないわけじゃない。けど、一生懸命やれば奇跡が起こるかもしれないって、どうしても信じたいんだ」

「わからなくもないが」

「それ、今までずっと俺がしてもらったことばかりだから、恩返ししたいんだ」

片岡はするりとベットから降り、自分の机の上に近づいた。音を立てぬよう引き出しから一枚のはがきを取り出し、静かにおいた。乙彦も立ち上がり覗き込んだが年賀状のように見えた。写真つきのもので、背景に藤のカーテンが広がり、和服姿の少女とその家族らしき人々の笑顔が写っていた。

「泉州の親友か」

こっくり頷き、片岡はそっとそのはがきに手を置いた。目を閉じた。

片岡邸での楽しいひと時も過ぎ、次の日の夕方乙彦は佐川書店へと立ち寄った。雅弘の顔を見たかったというのもあるが年末年始は稼ぎ時、それほどもてあましていない時間もないだろう。レジで一言二言挨拶交わした上で遊びの約束でも入れるつもりでいた。

「あ、おとひっちゃん！」

思った通りレジでばたばた働いている雅弘を発見した。てっきり店内混みあっているのでは思いきやそれほどでもなさそうだ。ただのんびりおしゃべりできる雰囲気でもない。レジで雅弘のお父さんとお母さんにそれぞれ挨拶をし労われた後、

「じゃあ雅弘、せっかくだからおとひっちゃんと少し遊んでおいで。うちに上がってもらいなさい」

お許しを得てさっそく二階へと上がっていった。

「タイミングよかったよ。さっきまでものすごく混み合ってたさ。大変だったんだ」

雅弘は箱からみかんを籠に詰め込み、オレンジジュースを持ってきた。グラスに入れて意味もなく乾杯し、

「けど、もう一年あつという間だよなあ」

しみじみつぶやいた。

「ほんとだな。去年の今頃は高校受験勉強で死に物狂いだった」

「俺もだよ、けどおとひっちゃんにはかなわなかったな」

みかんをぼりぼり剥いて皮のまま口に放り込んだ。雅弘が、

「あれ、筋はがさないの」

怪訝そうな顔をしたのであっさり答えた。

「そんな無駄なこと誰がするか！」

雅弘とのんびり話をするのも久しぶりだった。学校祭で顔をちょこっとあわせた程度、本当はいくらでも会いにいける距離に住んでいるのだがいかんせん生徒会活動が始まってからはそんな暇などない。話しているうちに、まだ雅弘には報告していなかったことに気がついた。

「そっか！ そうなんだ。おとひっちゃんやっぱり生徒会に入ったんだ！」

拳を握り締め雅弘が満面の笑みで祝福してくれた。やはり親友、わかってくれている。

「いろいろ考えたんだが、やはり俺には委員会活動よりもそっちの方が合っていると思ったんだ」

「そうだよ、絶対そうだよ。おとひっちゃんは生徒会やってるほうが輝いてるよ」

うきうき気分のまま雅弘が乙彦のグラスにジュースを注いで続けた。

「お前はどうかんだ。結構生徒会の奴らと仲がいいって。立候補しなかったのか」

「するわけないよ。そんな俺、頭よくないし」

頭がよい悪いの問題ではないと思うのだが。とりあえず流して雅弘の話に集中した。

「それで思い出したよ。実はさ、さっきたんにこの前会ったんだけど」

雅弘が無理やり話の方向を変えた。ざわりと心が揺らぐ。

「水野さんか」

「そう。さっきたん、今、可南女子高の生徒会に入ったんだって」

「まじかそれは！」

グラスをたたきそうになり慌てて立ち上がった。太い棒が身体の中を縦に突き抜けたような衝撃を感じている。そんな経験ないがたぶん近いと思う。

雅弘はこっくり頷きながら三個目のみかんを剥いた。

「そうだよ。俺もびっくりしちゃってさ。詳しく聞いたんだ。さっきたん永遠の生活委員って感じで、少なくとも生徒会長する感じじゃないよね」

「生徒会長？」

おそろおそろ確認する。書記とか渉外とかそのあたりかと思うのだが。

「役職も聞いたのか」

「うん、生徒会長」

あっさりとして雅弘は答えた。

「これもびっくりだったんだけど、さっきたん、まじめで先生たちからもすっごく高く評価されてて、ぜひにってことでしかたなくそうなっちゃったみたいなんだ。さっきたんも困ってたけど、しょうがないよね」

「だが一年だぞ。うちの学校の生徒会も会長含め全員一年になったのは事実だが」

「そうだよ。けど、あの学校荒れてて、誰もまじめにやろうとする人いないんだって。極端な話、さっきたんくらいしかまじめな人がいないんだって」

——まじめなだけで生徒会に押し込まれる世界なのか……。

最初の衝撃よりも乙彦には、水野さんへの不安と同情がこみ上げてくる。雅弘の言葉を借りるわけではないが水野さんの性格上、生徒会長としてリーダーシップを発揮するタイプでは決していない。むしろそばにおいて静かに見守ってくれるほうが圧倒的に向いている。そんな、明らかに向いていない環境にどうやって水野さんは順応していくのだろう。

「おとひっちゃん、俺思うんだけど」

雅弘はもぐもぐみかんを食べ続けつつ続けた。

「さっきたんすっごく困ってると思うんだ。俺と話をした時もかわいそうなくらい落ち込んでたもん。中学時代は生活委員しか経験してないだろ。だから思い切っておとひっちゃん、さっきたんの相談に乗ってあげたらいいんじゃないかなって」

「俺が、か？」

まだ貫かれた棒の感覚が残っているようで、それでも座りなおした。雅弘を習ってみかんに手を伸ばす。

「俺もせいぜい水鳥中学の副会長どまりだが」

「十分だよ！ やっぱりおとひっちゃんではないとこういうの無理だよ！」

雅弘は力説した。

「もしよかったら年明けにでも俺、さっきたんに連絡するから一緒に会おうよ。それでいろいろさっきたんの心配事聴いてあげようよ。俺もできることなら協力したいけど、やっぱりここはおとひっちゃんでないといけないんだ！ 頼むよおとひっちゃん！」

——水野さんが生徒会長か。

どういう事情があるのかわからない。雅弘の話聞くだけでは水野さんがどういう事情でもって推薦されてしまったのか見当もつかない。右往左往しているだけなのかもしれない。学校が違えば生徒会の雰囲気も異なる。果たして乙彦のアドバイスが役立つのだろうか。

「ね、おとひっちゃん、いいだろ？」

雅弘が顔を覗き込んでくる。考え込む乙彦に畳み掛けるように、

「俺では無理なんだ。おとひっちゃんなら絶対に出来るよ。俺、やっぱりおとひっちゃんではないと頼めないんだ。総田ではだめなんだよ」

乙彦は両手をテーブルに着いた。大きく頷いた。

「わかった、俺に出来る限りのことはする」

しばらく時間をつぶした後、そろそろというところで立ち上がった。そうだ、まだ言い忘れていたことがある。たぶん今年も雅弘と会えるのは最後だろう。水野さんの件でまた来年早々に会える可能性もあるがそれはそれだ。忘れないうちに伝えておこう。

「雅弘、ずっと気になっていたんだが」

「なんだろ」

「やっとお前の濡れ衣がうちの学校でも完璧に晴れたようだな」

ぽかんとした雅弘に乙彦なりの労いを込めて。

「ほら、佐賀さんいただろう。青大附中の生徒会長を務めていて、新井林とその」

「うん、何度も会ってるけど」

ピントの外れた答えをする雅弘に乙彦は続けた。

「俺も新井林には詳しい事情を聞いていないんでわからないんだが、少なくともお前があの彼女と付き合っているといった噂は払拭されているんだ」

「え、そもそもどういうことなのかな。俺全然わかんないけど」

一時期えらく誤解された雅弘の彼女。単純に相談相手であり、新井林とも親しく付き合っているというのに、主に立村から「佐賀はるみと佐川雅弘は付き合っている」的な誤解をされてしまっていた。新井林も笑い飛ばしていたものの、実際雅弘も佐川書店で佐賀と顔をあわせていることもあって百パーセントの誤解とは言い切れないところもあった。潔白を信じたいもののまでもやもやしたものが残っている。もしクロであればとことん張ったおすしかないし、一度は誤解して制裁を加えたこともある。だが、もうそれはあっさり流せるということだ。

「雅弘、あの時は本当に悪かったな」

頭を下げた。雅弘が恐縮しているがその点は無視だ。

「やはり雅弘、お前あの彼女となんでもなかったんだな」

「当たり前だけど、なんで今更そんな昔のことを？」

戸惑う雅弘に乙彦はすべてを伝えた。

「実はな、うちの学校の奴が佐賀さんと一緒に俺の知っている奴と手をつないで歩いているところ見たって言ってたんだ。それもどこで見かけたと思う？」

「どこって？」

少しだけ間を持たせた。

「お前の家だ、いや、店だ」

ぽかんとしたまま言葉も出ない雅弘。わけがわかってなかったのだろう。さらに詳細を伝えた。

「そいつが言うには、たまたま佐川書店で買い物していたらあの彼女と俺の知っているある男子とが仲むつまじく買い物をして、手を取り合って出て行ったようだ。単なる友だちならまだしも、手を握るといのは普通の付き合いではそうないだろう。正直、新井林は辛い思いをしているのではとも同情禁じえないところもあるのだが、とりあえずお前とは無関係だということは証明された。もし新井林が心配するようだったらその時は俺が証人になってやるから安心しろよ」

新井林には同情禁じえない。はたして霧島もどういう気持ちでそういうことをしたのかわからない。ただ少なくとも自分にとって一番の親友の屈辱的な誤解を解けたというそれだけだった。誰かに伝えるでもない、ただ、純粹に雅弘の潔白を信じられる、それ以上の心地よさはない。あやまっても、何度頭を下げてもいい。

「おとひっちゃん、そんな、いいよ俺」

「もうお前を疑うなんてことはしない。安心した。立村にも誤解しないようによくよく伝えておく。それじゃ、水野さんのことについては後で連絡頼む」

戸惑っている様子の雅弘に手を振り、乙彦は外へ出た。

うす曇の空からかすかな雪が降り注いできた。少しずつつもり始めているその路から雅弘は空を眺めた。丸い太陽らしき影がゆっくり動いているのがわかる。

——走るか！

この辺一周してから家に戻ろうと決めた。

駆け出してすぐふと頬にひりつく風を感じた。

ほんの少し痛くてなぜか心地よかった。

——やはりこれが冬だ。年末だ。締めくくりだ。

青立狩 高校一年・二学期

<http://p.booklog.jp/book/78877>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78877>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78877>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ